

戦後八十年北方領土問題啓発資料

北方領土 終戦前後の記録集

北海道根室市



発刊のことば

根室市長 石 垣 雅 敏

昭和二十年（一九四五年）八月の終戦直後、北方領土が旧ソ連邦によって一方的に占領されました。身の危険を感じた島民の約半数は、「先祖の墓」や「一切の財産」を残したまま「ふるさとの島」を離れ、当時の根室町をはじめ本土に避難し、残された島民についても昭和二十四年（一九四八年）までに樺太經由で引揚げを余儀なくされたのです。

安藤石典根室町長は米軍の空襲によって街の八割が焦土となった中、十一月、自らの手でマッカーサー元帥宛に陳情書を書き上げ、北方領土返還要求運動の狼煙を上げました。以来、当市は「北方領土返還要求運動原点の地」の責務を全うするため、その志を受け継ぎ、全国の先頭に立って返還要求運動に邁進して参りました。しかし残念ながら、戦後八十年経過してもなお解決の目途は立っていません。元島民をはじめとする私たちは、北方領土問題の解決なくして戦後はないと考えています。

長期化する返還運動は、次代への継承を余儀なくされております。志半ばで鬼籍に入られた多くの元島民の記憶は、過去の啓発事業の中で、いくつも記録化されてきました。当市が発行した「北方領土 終戦前後の記録」（昭和四十五年（一九七〇年））、その第二集（昭和四十六年（一九七一年））も、その一つです。

このたび、千島齒舞諸島居住者連盟関東支部の児玉泰子支部長（志発島元島民）の発案をきっかけに、収録されている貴重な証言を、再編集して復刊することにいたしました。記録には昭和二十二年（一九四七年）から二十四年（一九四九年）にかけて元島民が強制送還されるまでの様子、引揚げ後の労苦、また戦時中に齒舞群島に守備隊として駐屯していた軍隊関係者などの手記も含まれています。

さらに当市が昭和四十八年（一九七三年）時に収録していた元島民の証言のほか、択捉島の元紗那村長を経て終戦前後に根室町助役として活躍された畑三郎氏所蔵の資料、また現在、語り部として活躍されている元島民の方々の手記や元島民二世による北方領土絵図を加え、八十年分の元島民の思いを一冊にこめた記録集として戦後八十年の節目にあたり、本書を発刊するものです。

元島民の歩んできた「茨のみち」の記録が、今後の北方領土学習などに広く活用され、次代に継承されていくことを期待するとともに、一日も早い北方領土問題の解決につながることを願ってやみません。

令和七年（二〇二五年）十二月

北方領土 終戦前後の記録 昭和四十五年（一九七〇年）三月三十日 初版発行

目次

発刊のことば		根室市長 横田俊夫	3
写真集			4
北方領土略図1			10
北方領土略図2			11
北方領土の早期返還を訴える	 (元九十一師団(北千島派遣) 作戦主任参謀)	水津 満	12
荒された祖先の墓 涙とともに納骨	 (多楽島引揚)	河田 竹次郎	23
色丹島の終戦	 (元色丹村長)	梅 原 衛	27
美しすぎてた“色丹島”と“私”と言えそうだ	 (色丹島引揚)	小 泉 秀 吉	38
屍はただのムシロの上に	 (元留夜別村助役)	伴 為 信	52
島と運命とともに	 (元根室支庁国後出張所長)	荒 井 辰 男	63
ソ連艦船北風泊に投錨	 (国後島引揚)	城 戸 与 作	70
時計の針逆に回す 奥野石次郎氏の話(国後島の元作万別郵便局長)			73
昭和四十四年刊「昭和史の天皇」第七巻 読売新聞社編より転載			76
国後島の開拓者たち	 (元留夜別村乳吞路国民学校長)	村 田 吾 一	76
北千島の終戦前後	 (占守島引揚)	別 所 二 郎 蔵	96
資料 根室支庁保管・千島離島ソ連軍進駐状況綴抜粋			161

北方領土 終戦前後の記録 第二集 昭和四十六年（一九七一年）十二月二十五日 初版発行

目次

発刊のことば		根室市長	横田俊夫	171
写真集				172
志発島西前脱出記		(歯舞群島志発島引揚)	宮脇信雄	178
悪夢の一カ月 引揚中に死者続出		(歯舞群島志発島引揚)	高岩光男	198
平和な島 歯舞群島		(歯舞群島勇留島引揚)	万屋佐之	207
忘れられない私のふるさと国後島		(国後島引揚)	内野輝雄	212
無謀なソ連兵の行動に悩む		(国後島引揚)	部川鶴之助	218
終戦前後の私と択捉島		(択捉島引揚)	吉田武一	222
アメリカ軍の進駐と思っていたのに		(択捉島引揚)	松枝昇吾	253
終戦時の多楽島		(元北方守備隊)	田中武	258
ソ連軍上陸の偵察がソ連兵の道案内に		(元北方守備隊)	磯田嘉兵衛	265
守備隊の野菜補給基地であった志発島と多楽島		(元北方守備隊)	奥井泰一郎	269
終戦当時の歯舞群島の思い出		(元北方守備隊)	駒田誠一	273
当時の日誌より		(元北方守備隊)	出口操	280
充実していた北の守り		(元北方守備隊)	木村茂	283
思い出の国後島紀行		(元電気通信局員)	福井昇	290
失われた北の故郷		(元北方警備警察官)	村上徹	307
北方領土略図1				323
北方領土略図2				324

北方領土引揚者 声の証言集

根室市では昭和四十八年（一九七三年）二月から市内に在住する十人の元島民の証言を録音で収録していました。時期的に、おそらく「終戦前後の記録第三集」の発刊を想定しての作業だったと推察されます。

収録担当は総務部企画課領土対策係の白崎大氏。文字起こしされたものが、昭和四十八年（一九七三年）六月十一日から八月十七日まで三十三回にわたって根室新聞の紙面に連載されました。この度の記録集編さんの際、北方四島交流センター内の収蔵資料から偶然に発見、全文を収録しました。白崎氏は北方四島交流センターの初代名誉館長で、自身で保管していた思い入れのある資料を、在任中に施設の書庫に収めていたと思われます。藤田氏、隅田氏、不破氏、細井氏の計四名分の証言を録音した三本のカセットテープが確認されています。

目次（根室新聞連載順）

歯舞群島（志発島）元島民	前中 貞（収録時七十六歳）	328
色丹島元島民	不破 順 作（収録時六十六歳）	332
歯舞群島（多楽島）元島民	芦崎 章 一（収録時七十一歳）	337
国後島古釜布元島民	細井 勝 芳（収録時六十一歳）	342
歯舞群島（多楽島）元島民	箭 浪 光 雄（収録時四十五歳）	351
国後島元島民	橋本松右衛門（収録時七十三歳）	359
国後島元島民	伴 為 信（収録時七十四歳）	362
歯舞群島（水晶島）元島民	隅 田 時 雄（収録時五十八歳）	369
国後島元島民	藤 田 邦 治（収録時八十三歳）	373
歯舞群島（秋勇留島）元島民	飯 沢 梶 雄（収録時五十二歳）	381
元紗那村長 元根室町助役 畑	三郎氏の終戦前後の記録より	384

北方領土を語り継ぐ元島民

目次

歯舞群島（勇留島）元島民	角鹿泰司	390
歯舞群島（志発島）元島民	水口清一	396
歯舞群島（多楽島）元島民	河田弘登志	398
歯舞群島（多楽島）元島民	工藤繁志	401
色丹島元島民	新浜一郎	403
色丹島元島民	得能宏	405
色丹島元島民	木根繁	409
国後島元島民	矢萩トク	411
国後島元島民	古林貞夫	414
択捉島元島民	鈴木咲子	418
北方領土を絵地図で描く択捉島民二世山下孝子		425
北方領土問題関連主要年表		439

北方領土

終戦前後の記録

北海道 根室市

北方領土

終戦前後の記録



発刊のことば

根室市長 横 田 俊 夫

第二次大戦の終結と同時に、ソ連軍の占有が行われた北の島々での経緯は、元島民をはじめ関係者から語りつたえられてはいるものの、すでに二十数年が過ぎ去り、このまま更に長い間、推移すれば、実状を最も詳しく知っている元島民の記憶がうすれ、やがては当時の貴重な実態をとどめることが困難となることは火をみるより明らかである。

今や北方領土復帰の叫びは、国民世論となって内外にその実現を強く訴えつつあり、やがて国民の総意によって、一大国民運動が展開される日を近いと期待を寄せているのである。

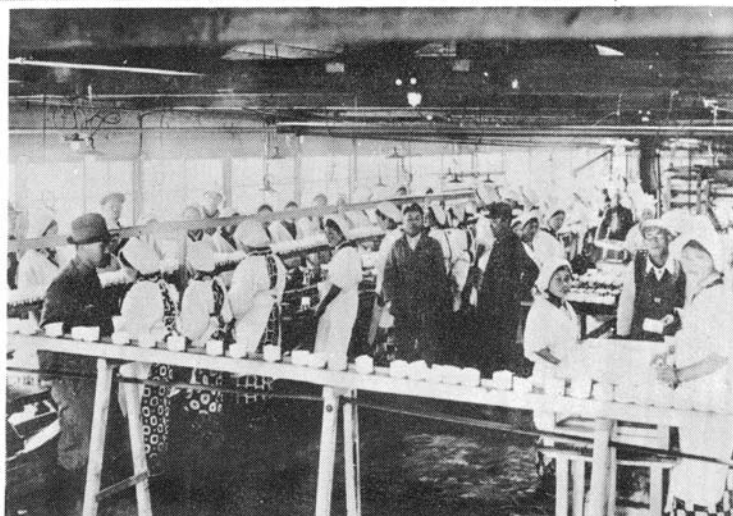
このときにあたり、わが領土である島々を、そして元島民の故郷である島々を離れ去った時の情景を、生きた歴史の証言者である元島民の直筆によって記憶をとどめておくことは、将来、北方領土問題への世論喚起に役立つだろうと考え、ここに本書を刊行することとしたのである。

発刊に際し、執筆をご快諾され、ご寄稿くださった各位のご厚意に対し、深く感謝の意を表わすと共に、本書が今後の北方領土復帰運動推進の一助となることを希って止まない。

昭和四十五年（一九七〇年）三月三十日



ホタテ採取船
— 志 発 島 —



サケの缶詰工場
— 志 発 島 —



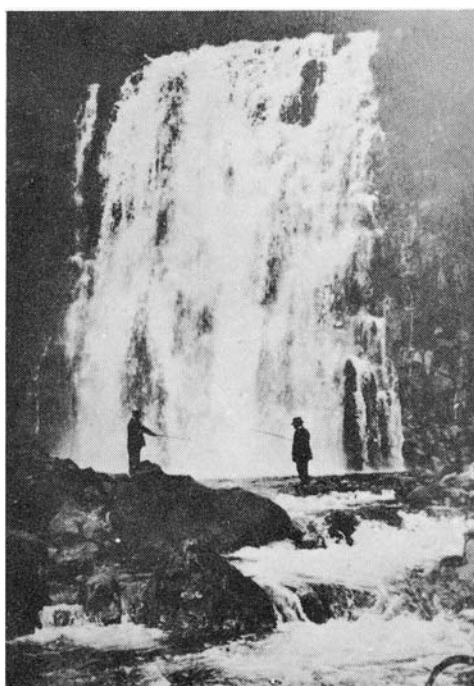
斜古丹市街
— 色 丹 島 —



冬のシャコタン山
―色丹島―



国後島・爺爺岳



ソコボイの滝
―国後島―



噴煙をあげる硫黄山
— 国 後 島 —



山 林 軌 道
— 国 後 島 —



漁 港
— 国 後 島 —

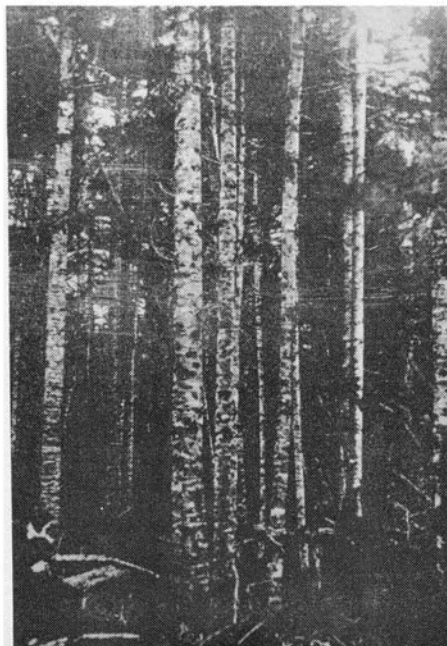


内 岡 港
— 択捉島紗那湾 —

ラッキベツの滝
— 択 捉 島 —



内保国有林
択捉島留別村





藥取市街
— 沢 捉 島 —



留別市街
— 沢 捉 島 —



留別川鱒捕獲場
— 沢 捉 島 —

紗那沿岸の昆布漁
― 択 捉 島 ―



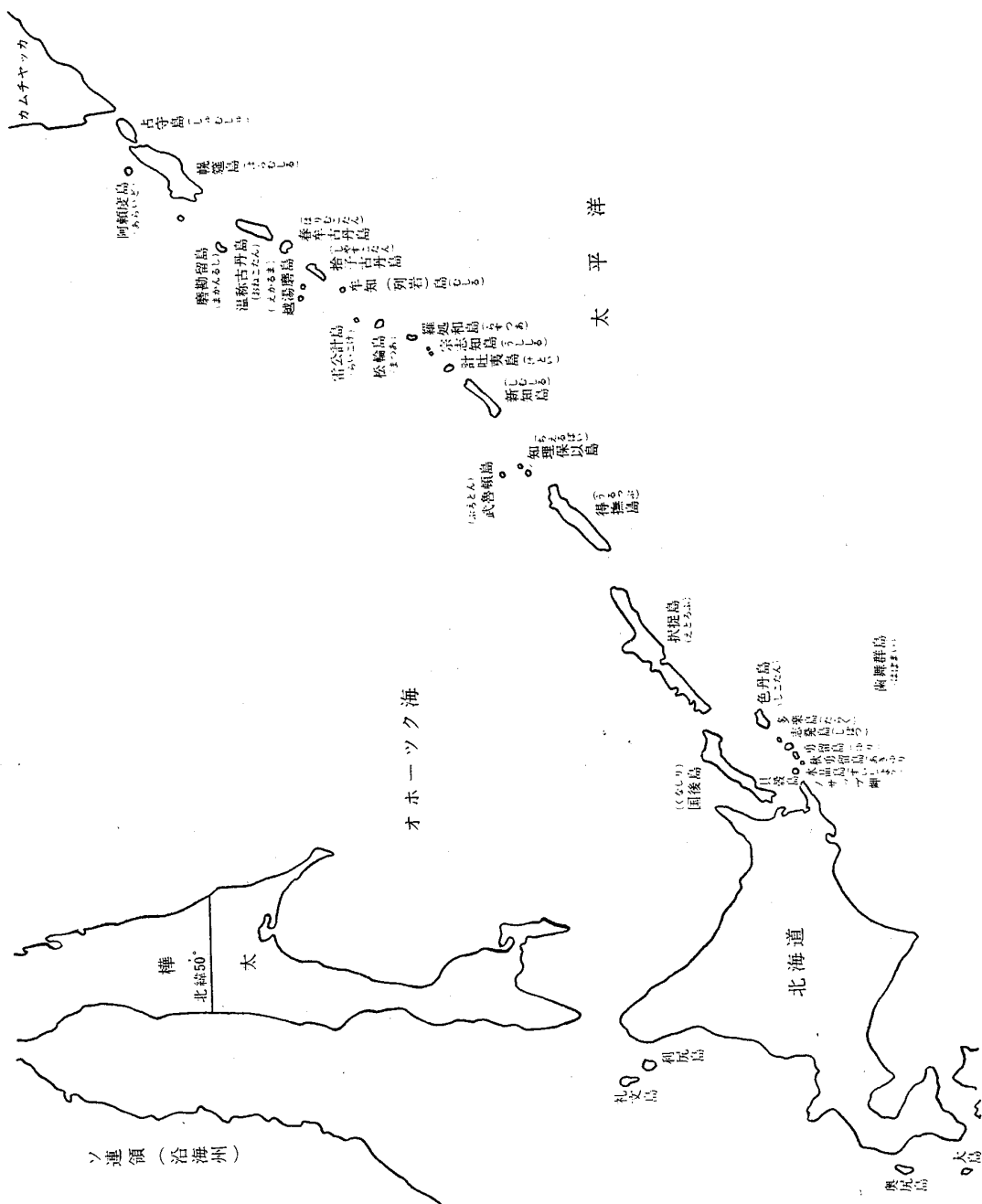
占守島片岡における
開鱈乾燥作業状況



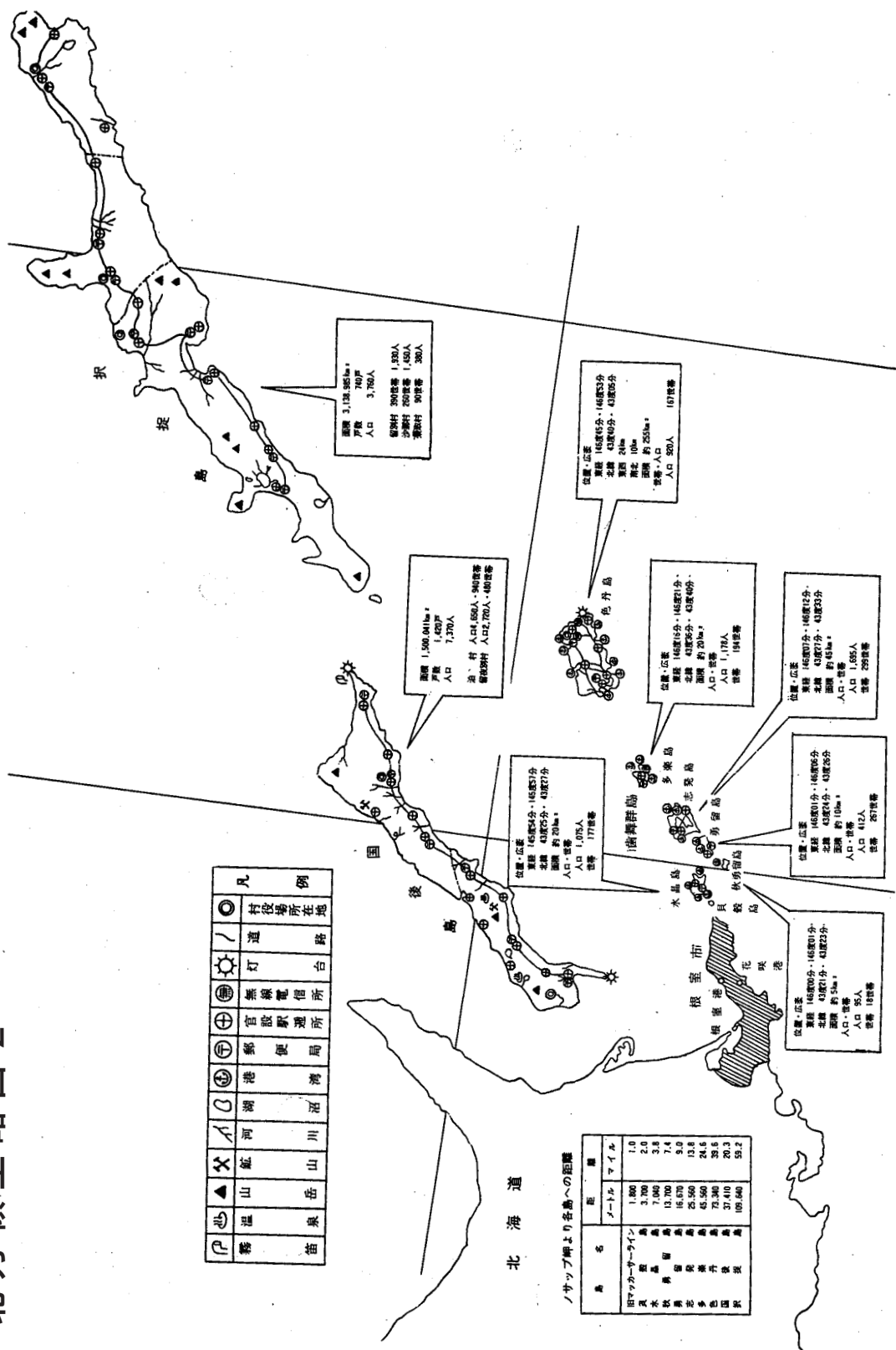
占守島別飛の漁舎と
別所佐吉氏



北方領土問題図説



北方領土略図 2





北方領土の早期返還を訴える

水 津 満

はじめに

大東亜戦争（太平洋戦争）が終わってから四半世紀になる。時の流れは、あらゆるものを鈍化しつつ、やがて忘却の彼方に連れ去ろうとする。だがしかし終戦時、千島方面において採ったソ連の奇怪な行動は、忘れようとして忘れ得ず、むしろ永く、わが民族の記録に留めて彼等の言葉と行動とが、いかなるものであるかの判断の資とする必要があるのではなからうか。

また誰が考えてみても北方領土は大戦終結のドサクサにまぎれたソ連の強奪であり、これを返すことは理の当然であるにもかかわらず、ソ連は既に解決済みの問題であるとして返還の気配すら感じられない。

私は北方領土が彼等の行き過ぎた行動の結果、不法占拠されたことを身をもって経験したので、その体験談を述べることによって、これらの地域が一日も速やかに、わが領土として本来の姿に復帰することを訴えんとするものである。

鉄壁の布陣（終戦時の治安状況）

北方領土の問題を考え、ソ連の真意を理解するためには、まずその発端となった北千島の戦闘から回想してみる必要がある。

戦闘状況に入る前に北千島を概観しておこう。千島列島最北端の占守島からソ連領カムチャツカ半島の南端までは僅かに一三キロ、野付水道ほどのもの、それこそ指呼の間、一衣帯水である。

火山列島特有の切り立った連峰が急峻をなして海に入る。したがって断崖絶壁の下に白波の碎けるところが多い。無数の小河川も溪谷をなして急流岩を噛み、陸上交通はなかなか困難で、陸続きでありながら離れ小島と同様のところが多い。ただ独り占守島だけは標高百四十八メートルの四嶺山を最高とし、全島あたかも満州のような波状地帯であるのは極めて面白い対照である。

晴れた日、紺碧の空に噴煙をたなびかせる硫黄山（幌筈島最高峰）を背にすれば、東カムチャツカ富士、西にアライト富士の雄大な景色を望むことができる。遅くて短い春の訪れる五、六月の

頃には、七十余種の高山植物が一齐に開花して絵のように美しい。岸辺には流水が浮かび、水鳥の声も晩春の訪れを告げる。この季節は、また霧の発生時期でもある。地上を低く這うように流れる濃霧が一瞬にして天日を蔽い、視界五、六メートルになることも珍しいことではない。二カ月の霧期を過ぎて八月の盛夏というのに時折り、まだ冷たい霧があたりに立ちこめることもあつて、夏の装いをする暇もなく年中、冬服で十分である。

八、九月の快晴期を過ぎると天候気象は一足飛びに冬型の様相を帯びてくる。十月から五月にかけての半年間は完全な冬季となる。北海特有の強風と吹雪は容赦なく荒れ狂い、雲一つない好天も半時間にして激変し、風速三、四十メートルの猛吹雪と化することは珍しくない。吹雪となれば、視界ほとんどゼロに近くなることも稀ではない。兵舎外、十数メートルのところに用足しに出たまま方向を見失い行方不明となる例も毎冬一、二にとどまらず、陸海の遭難の危険は大きい。特に十二月から二月にかけては、海上は三角波が立ち、交通は全く杜絶してしまい、完全に絶海の孤島となる。

樹木も天に向かって伸びることができずに大抵は地上にうずくまるか、強風を避けて地上を這う。十数メートルもある這松が大蛇のように地上に横たわる姿は、この地独特の情景といえよう。

米ソの分断を企図したアッツが玉碎し、ついでキスカ撤退の作戦のやむなき情勢となると、これまで前線への補給中継基地としての北千島は、むき出しの第一線に、その性格を一変させられる

に至った。昭和十八年（一九四三年）秋頃のことである。

即ち数個師団を下るまいと予想される米軍が北千島方面へ来攻してくるかも知れないというので、配備兵力は急速に増強されていった。昭和十九年（一九四四年）来の最盛期においては陸軍約四万三千名、海軍約五千名、航空部隊は陸海軍合わせて戦爆五、六戦隊を数える膨大な戦力となった。ゆうに陸海協同の一個軍の兵力で、その主体をなすものは最高指揮官、堤不來貴中将の指揮する第九十一師団の精鋭であつた。

当時我々の採った防衛陣地は敵の上陸しそうな正面に、まず岩壁や小さい起伏を利用して波打ち際を側面背面から射撃できる火点を配置する。そして敵の上陸に当っては不意急襲的に活動して、まずその組織と計画を混乱に陥らしめる。主力は少し下がった位置に縦深に亘って小部隊毎に配置し、敵を広い面に引き入れて捉え逐次混乱を増大する。米軍の極めて優勢な火力を封ずる道は、彼我入り乱れた乱戦状態に早く引き入れるしか手がない。完全な寝技である。相手の長い槍を封じて、こちらの短刀で、いきなり敵の脇腹をえぐる。つまり得意の近接戦闘で敵の死命を制する戦法。しかも最大限、半年寝技で頑張れば冬が来る。支援と糧道を絶つておいて得意の冬季戦で最大限でも半年戦えば、敵は幾万ありとても完勝疑いなしという寸法で、ここに南方戦場と違う北方島嶼作戦の勝因を見出していたのである。

このような防御戦構想に基づいて戦備を急ぐのであるが、これに配する将兵の素質が当時の全般的状況からみて抜群であつたよ

うである。各部隊長級は陸士出身か、少尉候補者出身、特別志願将校が大部分であり、兵隊も半数近くはピチピチした現役兵で全軍の志気は極めて盛んであった。

身は絶海の孤島にハリツケ兵力として防務にあっても気概は、まさに攻撃精神そのものであった。寸暇を惜しんで陣地構築と戦闘訓練に明け暮れた。どこからともなく不意に現われて一撃必殺を狙う姿なき戦法、爆薬を背負って敵の戦車に肉薄する肉攻斬込戦法、夜間戦法等、冬まで頑張り、冬を頼みとする吹雪の中での戦闘、白衣に身をつつみスキーをはき、物陰から、ましろのように躍り出て一撃の下に敵を倒す。これ等は戦闘員各人が得意中の得意となるまで訓練に訓練を重ねたのであった。

このようにして訓練が重なるにつれて必勝の信念がわいてくる。仮に北方から米軍が攻めかかったとすれば数倍の敵といえども恐らく北千島攻略は至難の業となったであろう。

昭和二十年（一九四五年）に入ってから米軍潜水艦の活動は急に激しくなり、日本本土からの軍需品や軍隊の輸送船は、ほとんど途中で撃沈され、北千島は次第に孤立無援の状態となっていた。兵団は早くから、このような事態を予想して糧食を半減し、魚を釣り海藻を集めて食糧の食い延ばしを図っていた。北千島は日照りの関係上、米作は全く望みがなかったが、野菜は十分育つ。馬鈴薯などは十倍以上の収穫となるので、船腹の軍需品をすべて馬鈴薯の種いもに切り替えてもらったこともあったが、途中、潜水艦にやられて海没してしまったのは、かえすがえすも残念で

あった。こんな食糧事情の悪化を切り抜けるため、師団の青木軍医部長は馬鈴薯と魚肉、海藻類で、どれだけ命がつなげ、戦力が出せるのかを自らの体を張って実験を強行するという一幕もあった。その結果、完全に米がなくても生きていけるといふ貴重な実証をして、全軍の志気を鼓舞激励した功績は大きかった。

ともあれ内地からの船が、どんなに待ち遠しかったか次の駄作で代弁しよう。

待ちわびし船の入るらし霧の中 通う小舟の音のきざわし

私は、この機会に当時の日本がいかに軍民一致して戦争遂行に当たったかの一例を紹介したい。北洋における日魯漁業会社の活躍が、それである。当時、国内食糧確保の重大使命と世界三大漁場の一つを実力をもって守る意味からも、北千島とカムチャツカ沿岸における北洋漁業に期待するところは実に大であった。しかし北方での米軍の空海からする攻撃が活発化してきたことと、昭和十九年（一九四四年）十一月、スターリンが日本を侵略国だと規定した爆弾宣言などから考えて、これまでのような操業は非常な危険を伴うものと予想され、その敢行は容易ならざるものがあった。だが日魯漁業は、我々軍の要請と援助もあって、欣然として可烈な戦場での操業にふみ切ったのである。もともと北洋漁業は夏季内地から出漁し、現地で罐詰加工し、初秋のころ漁獲を終えて内地に帰還する。いわゆる出稼であって、漁場保安のため僅

かの人が越冬するに過ぎない。

昭和二十年（一九四五年）五月に二千数百人の従業員が続々と来島し、占守や幌筵島の各漁場に分進展開して作業を開始した。さすが多年、北洋漁業に君臨し、鍛えに鍛えた大日魯だけあって従業員なканずく幹部の陣頭指揮は目覚ましく、各漁場での作業の勇敢さ・積極さには現地の軍隊も舌を巻いた程であった。敵機の攻撃の真っ只中を、わが高射砲の援護射撃の下に舟をあやつり、あるいは敵機動部隊の艦砲射撃を浴びながら決死的意気をもって漁撈に従事した。その戦士的態度と活躍には心からの賛辞と敬意を惜しまぬものであった。

このように将兵、軍民打って一丸となって、見敵必殺の配備と訓練に邁進しつづつたのであるが、南方―沖繩―本土方面の戦闘が逐次緊迫化して来たので、昭和二十年（一九四五年）春頃から、北方より逐次、本土方面に大量の兵力が抽出、転用されることになった。今迄の防御配備も、それにつれて大幅な修正を加えなければならなくなり、遂には幌筵海峡周辺の要域を確保するだけの最後の複廊陣地に立て籠もる事態となった。

それでも終戦当時、なお陸軍合わせて二万五千名、重軽火砲二百門、弾薬、爆薬多数を持ち、当時としては、おそらく全軍一の優秀装備と精強軍を誇っていた。

こういう情勢の下で降って湧いた様に起こったのがソ連の北方領土侵略である。

ソ連はどんな気持ちで対日参戦したのか (北千島の奇怪な戦争)

ソ連の対日参戦の口実は実に巧妙であった。ソ連が日ソ中立条約の廃棄を通告して来たのは終戦の年の四月であるが、中立関係は条約文通り、なお向こう一カ年間は有効であった。しかるにソ連は日本がポツダム宣言を受諾しなかったことを口実に、昭和二十年（一九四五年）八月八日、突如として日本に宣戦を布告して来たのである。

そもそもソ連は如何なる気持ちで対日参戦したであろうか。終戦直後の昭和二十年（一九四五年）九月二日、スターリンは「対日戦勝に際し国民に対する布告」の中で次のように述べている。

「日本はすでに一九〇四年日露戦争当時、わが国に対する、その侵略を開始した。周知の通り一九〇四年二月、日露間に交渉なお継続中、日本は帝政政府の弱体につけ込み、突如かつ背信的に宣戦を布告することなく、わが国に攻撃を開始し、若干の露国軍艦をなきものにするにより、自国海軍の有利な態勢を作るため旅順口方面においてロシア艦隊を襲撃した。そして日本は実際に三隻の第一級ロシア艦隊を喪失せしめた。その後三十七年を経て、日本は一九四一年パール・ハーバーにおける米国海軍根拠地を攻撃し、同国の幾多戦艦を喪失せしめるにあたり、如上の背信的口をそのまま米国に対し反復したことは特徴的である」。

日本の抜打ち的攻撃を罵っているソ連が、その僅か一カ月足ら

ず前に、どんな行動をとったか。これは明らかに日本のアメリカに対する奇襲攻撃を非難することによって問題をすり替え、国際法違反を弁護する詭弁にしか過ぎないと思う。

さらに問題は、その後にある。北千島の戦闘がそれで、これはまさに奇怪なる戦闘の一語につきる。満州や樺太朝鮮方面では終戦後も戦闘が続けられたことは、まことに遺憾なことではあったが、一面、終戦前からの戦闘の継続であったことからやむ得ない状況でもあった。しかし北千島の戦闘は、これらと全くその趣を異にする。

北千島に対する侵攻は八月十五日終戦の大詔喚発後の出来事である。既に日本は、この日をもって世界に向って明白に無条件降伏を宣言していたのである。にもかかわらず終戦後三日も経った八月十八日早晩から、ソ連軍は砲爆撃支援の下に戦闘態勢をもって、わが千島最北端の占守島に上陸作戦を強行して来たのである。

一口に言って大戦終焉後の新しい戦争の挑発という点に最大の特徴がある。終戦が宣言され、世界が平和を取り戻した後において新しい戦争を始めるとは、いかなる理由もなりたないであろう。世界歴史にも、恐らく類例を見ない暴挙といわなければならぬ。

本土決戦のため兵力の半数近くを本土に転用した後とはいえ、前述の如く、まだ二万五千名の全軍一の精強軍、北千島兵団は、この暴挙に対し手をこまねいて見ているわけにはいかなかった。自衛戦闘はやむを得ないという方面軍の命令に基づいて一度捨て

た武器を再びとり直し、敢然として自衛戦闘を展開したのである。その結果、彼我に相当大きな犠牲が出たのは痛恨の極みであった。国際通念からすれば、こちらは既に無条件降伏しているのであるから当然、軍使の交換から武器引渡し交渉へと、話し合いで事は極めて簡単かつ順調に進むはずであったのに、どうして彼は莫大な血の犠牲を敢えて求めたのか、結局ソ連は、あくまでも戦闘によって、力づくで千島占領を企図したのである。日本の終戦宣言も千島領有に関する連合国の秘密協定（ヤルタ協定）にも信用がおけず力づくで領有する必要があったのか、単なる接収よりも武力占領の方が将来に対する発言力が、より大きいと考えてのことか知るよしもない。が、ソ連全般に流れていた当時の気持ちは、何よりも前述のスターリン布告の続きの中でハッキリと伺い知ることができる。

「一九〇四年における日露戦争当時の露軍の敗北は国民の意識の中に悲痛な記憶を残した。その敗北は、わが国に汚点を留めた。わが国民は日本が撃破され汚点が拭い去られる日の到来を信じて待ったのである。四十年間、われら古い世代の人々は、この日を待った。そして遂に、その日は到来した。今日、日本は自己の敗者たるを認めて無条件降伏文書に署名したのである」

対日戦争は日露戦争の復讐戦であるといっているのである。手を挙げ、白旗を掲げて降伏を明示した千島に、武力で侵攻して来た気持ちがよく判るではないか。口に平和を唱えながら、その行動は果たしてどうか。我々が常に肝に銘じて置くべきことである。

中、南千島の進駐の真相

話をいよいよ本論に進めて、終戦当時、ソ連軍がどのようにして中千島、南千島に進駐したかを明らかにすることは、その帰属問題を考えるうえで重要な参考となる。

ソ連は八月二十五日までに、北千島の武装解除を終えるやいなや、これ以南の千島部隊の武装解除を急いだ。当時わが方の配備は、北、中、南の三つの作戦地域に分れて、おのおのが北海道にあった方面軍の直接指揮の下にあった。ところがソ連司令官は、そんなことにはお構いなく、千島列島線全部の武装解除を指揮権を持たない北千島兵団長の命令で行わせようと強引に迫って来たのである。わが師団長、堤中將は勿論この申入れを拒絶した。再三押し問答の末、結局、兵団長の代理者をソ連軍と同行させることになって、私が八月二十四日、ソ連駆逐艦に乘せられて幌筈島を出て列島線を南下した。

この軍艦にはソ軍参謀長以下、武装解除執行者が乗っていた。政治部将校も同乗した。まず八月二十六日早朝から松輪島の武装解除が行われた。守備隊三千、武器一切が整然と並んでいる。ソ連軍参謀長等と隊列を一巡し終わると、武器引渡しに当たって守備隊長の上田美憲大佐は、「決して負けて降伏したのではない。天皇陛下の命によって武器を引渡すものである」ことをソ軍参謀長に告げた。我々の気持ちは、まさにこの通りであった。戦いは

終わったが負けたとは思っておらず、将兵の志気は極めて旺盛である。ここでアメリカならいざ知らず、ソ連に武器を引渡すことになろうとは夢にも思っていなかった。ちなみに当時、北海、千島列島の護りに関係した旧戦友の中で、主としてこの松輪島守備隊が中心となって作っている千島、松輪会なるものが東京にある。三十三都道府県にまたがり千数百名の旧戦友の名前を連ねて、古を偲び、相共に励まし合い、北方領土の復帰を念願している姿は美しい。

ついで新知島に前進し、ソ軍参謀長等と、この島に上陸してみたが、ここは既に、わが軍は大分前に撤退していて終戦時には一兵もいなかった。ところが艦に帰ったソ軍参謀長は私をキャンビンに招いて、一通の書類を突きつけて署名を迫った。政治部の将校も同席である。内容を聞いてみると、「新知島の日本軍は停戦後、停戦協定に違反して陣地を破壊し、兵員移動禁止の条項を犯して島から撤退した」ことを私が現認したという一札であった。とんでもない、遠の昔に撤退しているものを協定違反とは何事か、と私は色をなして参謀長につめよった。そして事実の歪曲も甚だしいので断固署名を拒絶した。彼等は、あの手この手と脅しにかかり、言うことをきかぬと為にならぬぞ、と一時は極めて嫌悪な空気に包まれたが、私が頑として応じないので遂に彼等が諦めるといった一幕もあった。要するにソ側は、なんとか言い掛りや難くせをつけて、少しでも彼等の立場を有利にしようとする策謀の現れであったことは間違いない。

ついでに得撫島へ前進したが、濃霧と台風の激浪に翻弄されながら、島へは上陸せず、島を一周して数時間沖合に仮泊した。この間に進駐部隊も巡洋艦を先頭に数隻の輸送船で続々と詰めかけていた。上陸を強行しようとすれば出来ないことはないように思われたが、一向に上陸する気配がない。疑問に思って参謀長に資すと、「アメリカ軍が既に上陸しているかもしれないから様子を見ているのだ」と言っていた。とかくするうちに、けたたましいサイレンが鳴り響き、艦は瞬時にして戦闘配置につき、続いて高射機関砲らしい射撃音が唸り出した。艦内の気配は一時まことに殺気立った状態となったが、二、三十分でその騒ぎも収まった。艦内の一室に軟禁されていた私には、船窓から気配を察知する以外に外部の様子を見届けるすべはなかったが、後に参謀長に聞いてみると、この騒ぎが艦の上空にアメリカの飛行機が現れ、これに対する戦闘であったことがわかった。

今日ならば不思議ではないが、当時は状況が違う。いやしくも米ソは同盟軍で、共同でわが日本を敵として戦って来た仲である。その同盟軍であるアメリカに対するソ軍の態度が、この時既にこんな関係にあったことは、当時極めて意外な感に打たれたことであつた。この騒ぎの直後、私の乗っていた駆逐艦は得撫島を最南端として北千島方面に反転しはじめた。

さきに北千島を出るときは、択捉島、国後島と全列島線まで行く様な話であつたので、最初の計画を半ばにして引き返すことに不審をいただき、また参謀長に、その点を質問すると、彼は「択捉

島以南はアメリカの担任だから手を出さないのだ」とハッキリ答えた。ずっと後になって解ったことであるが、我々が得撫島から引き返した翌々日の二十九日に択捉島はソ軍によって武装解除され、国後島のそれは九月一日であつた。

またごく最近判った信すべき情報によると、ソ軍の列島線進駐が得撫島まで来たとき、「これで千島の占領は終わった」とモスクワ放送が報じたことや、九月一日色丹島に上陸したソ連兵が発した第一声が「この島にアメリカ兵はいないのか」であつたという事実から、南千島は、やはりアメリカの管理下に置かれていることになっていたように思われる。

これらのことから私は、こう考える。即ち最初はロシア人の通念でもって千島、即ち得撫島以北を領有する積りで武装解除も、そこまですてきでしていた。少なくともソ連の出先部隊では「ソ連の領有は中千島まで」という考えで、択捉島以南はアメリカの領有になるかも知れないといった極めて曖昧な態度であつた。そして、このことは次に述べる歴史的事実から明確に証明できるのである。

ソ連も南千島の日本固有領土説は認めている

まず安政元年（一八五五年）の下田条約では「今より後、日本国と魯西亜国の境はエトロフ島とウルップ島との間にあるべし、エトロフ島全島は日本に属し、ウルップ島全島、それより北の方

クリル諸島は魯西亜に属す」と。また明治八年（一八七五年）の千島樺太交換条約には、「全露西亜皇帝閣下は第一款に記せる樺太島の権理を受けし代として、その後胤に至るまで、現所領クリル群島即ち第一シウムシュ島、第二アライド島、第三パラムシル島（中略）第十八ウルップ島共計十八島の権利及び君主に属する一切の権理を日本皇帝陛下に譲り、而今而後クリル全島は日本帝国に属し、カムチャッカ地方ラパッカ岬とシウムシュ島の間なる海峡を以って両国の境界とする」とある。

さらに一八九五年（明治二十八年）に発刊されたロシア帝国地学協会編さんのロシア風土記にも、千島の南部諸島が十五世紀以来、日本の領土であることを明記している。

これら帝政時代のロシア人の千島に対する観念をあらわすものであるが、いずれの場合でも、いわゆる南千島と、それ以北とは明確に一線を画した考え方をもっていたことを表わすものである。そして以下述べる私の研究によれば、この概念はソビエト、ロシアになってから現在にいたるも、考え方に変わりはないと結論づけられるのである。

一九五三年度のソ連初等学校の歴史教程附図（第1図～第6図※P 22参照）や一九四〇年版ソ連鉄道水路図（第7図）をみると、今次大戦前の時期にソ連が千島樺太についてもっていた観念が一段と浮き彫りにされてくるのである。

これらを詳しく調べてみると、多くの疑問や矛盾が出てくるが、その主なものを指摘してみることにしよう。

第1図ではウルップ以北の列島がロシア領で、択捉、国後両島と樺太は北海道と同様に何も色付けしていない。即ち、これが日本固有の領土であることを明らかに認めている。ところが第2図、第3図をみると、第1図と同じ時代でありながら、樺太がいつの間にか全島ロシア領ということになっている。それどころか千島列島全部島が第2図では日本領、第3図ではロシア領となっていて共に第1図と矛盾する。さきに述べたロシア風土記や下田条約、樺太千島交換条約にある「南千島が十五世紀以来、日本領である」という歴史的事実を全く無視している。領土に対する観念が非常に曖昧であることを示すものである。

第二の疑問矛盾点は第4図でみるように、一八七〇年の国境線が宗谷海峡および国後島と北海道との間に引かれていることである。即ち千島も樺太も、ともにロシア領であるとしながら、一八七五年に千島樺太交換条約とは一体どんなわけか。両方とも自分のものであるとすれば交換とは、まことにコツケイ至極ではないか。

さらに面白いことは、第6図では一七一一年～一八七五年の間のロシア領はウルップ以北になっている。また第7図は一九四〇年版であるから、今次大戦のソ連の意識があらわれているとみるべきかであるが、それによってもソ連のいう千島列島とは、ウルップ以北を指すものであることは地図の註記をみれば明瞭である。これらの素図は極めて不完全なものではあるが、その根拠となる詳細な地図が何処にある筈である。ソ連国内には必ずあろうが、

なかなか入手困難とあれば、アメリカかイギリスあたりの国立図書館等では蔵書されているであろう。それを探してあげれば重要な論拠となる。何故なら、言葉や文章でソ連人が千島列島というものの範囲について、どう考えているかを知ることが至難の業であろうが、その点、地図は無言のうちに明答をあたえてくれるからである。これらの詳細を探求することを、国会や外務省、その他要路に進言したい。

ロシアはソヴェト政権になってから随分歴史の書き換えをやったのけた。その例は枚挙にいとまがないが、以上の極東地図は、その例証の一つで、全く感嘆な外はないが何処か辻褄の合わないことが出来てくるのもやむを得まい。

それはそれとして、我々が見逃してならないことは、一つは見えすいたような矛盾撞着をおかしてまでも、この極東の小さな島々を自己に有利なように解釈しようとするところに、ソ連のこの方面に対する異常な関心が伺われること。二つには列島線は往々にしてウルップとエトロフとの間に境界が引かれている点である。このことはウルップ以北と以南とを区別する觀念が、たしかに現在なおソ連の中に潜在することのあらわれである。そして戦前はウルップ以北を千島列島としているのは、前に述べた終戦時のソ連行動と正に符節を合わせるものである。

周知の通り、いまソ連が千島を占領しているのはヤルタ秘密協定に基づくものであるが、それには「千島列島はソ連に引渡す」とだけ記されているに過ぎない。その千島列島なるものは、どの

範囲をいうかについて、米英ソ三巨頭間におそらく細部の話し合いはなかったと推定される。ワシントン・ポスト紙も、かつて千島の帰属が問題になった当時、「千島列島に関し米ソ間に確固たる協定がなかったことは重大な失策であった」と論評している。というのは、ヤルタ協定ができた当時の背景を想起すれば大体想像ができる。

当時、つまり一九四五年二月ごろは、欧州戦場ではドイツの降伏は、もはや時間の問題であったし、太平洋戦場においては島嶼作戦が一応終わって、米軍は日本本土上陸を決行する計画を立てていた。このような情勢下で、ソ連は戦争そのものよりも戦後、極東における既成事実を早く作り上げておく必要を痛感していたに違いない。一方、米英とくにアメリカは、日本を完全に参らせるための作戦行動が主で、このためには莫大な犠牲を覚悟しなければならなかった米国にとっては、ソ連の対日参戦は渴望の的であったことは事実である。こういった情勢上、ソ連に参戦を承諾させるためには可能な最大限の譲歩を与えたであろうことは想像に難くない。千島列島の移譲が、その所産の一つであった。だから列島の範囲などはおよそ問題にならない雰囲気の中で協定が結ばれたものであろう。ワシントン・ポスト紙の指摘した点は確かに真相に相違なからう。ここに外交交渉の盲点があつて、こうなると自己に有利な解釈で処理せんとするのは、あり勝ちなことである。

以上縷に述べた論点から、ソ連の中、南千島への進駐の真相は

次のようであったと思う。

千島に侵攻して来たソ連軍は、ソ連の領域はウルップ島以北という観念の下に、進駐もそれまでの積りであったが、一方アメリカ側では、千島列島といえば国後島以北の全列島線の積りであったのか手を付けなかった。そこでソ連としては一応、手控えては見たものの、終戦後二週間も過ぎてもアメリカが手を付ける気配のないのを見極めて、これ幸いとばかりに内心おっかなびっくりだが、表面は堂々と強引に、一挙に択捉、国後から齒舞、色丹諸島まで進出してきたというのが真相だと思われるのである。

今こそ、北方領土の早期返還を実現しよう

ソ連が千島不法占拠を正当化している論拠はヤルタ協定であるが、日本が全く関係していない協定などに日本が拘束されることはありえない。また一步譲って拘束力があるとしても戦争終結を明確にしたサンフランシスコ条約が結ばれた以上、それ以前の協定や宣言などは一切廃棄されるわけである。

もしソ連が建国以来のスローガンとして高唱している「侵さず、侵されず」の主旨に従うとすれば、一日も早く千島列島就中南千島を日本に返還するのは理の当然である。なぜならば、連合国のうちで、日本の罪惡として最も過去に遡ったソ連としても、日露戦争以前の既成事実までも撤回を要求してはいないからである。

千島は日露戦争（明治三十七年（一九〇四年）、三十八年（一九

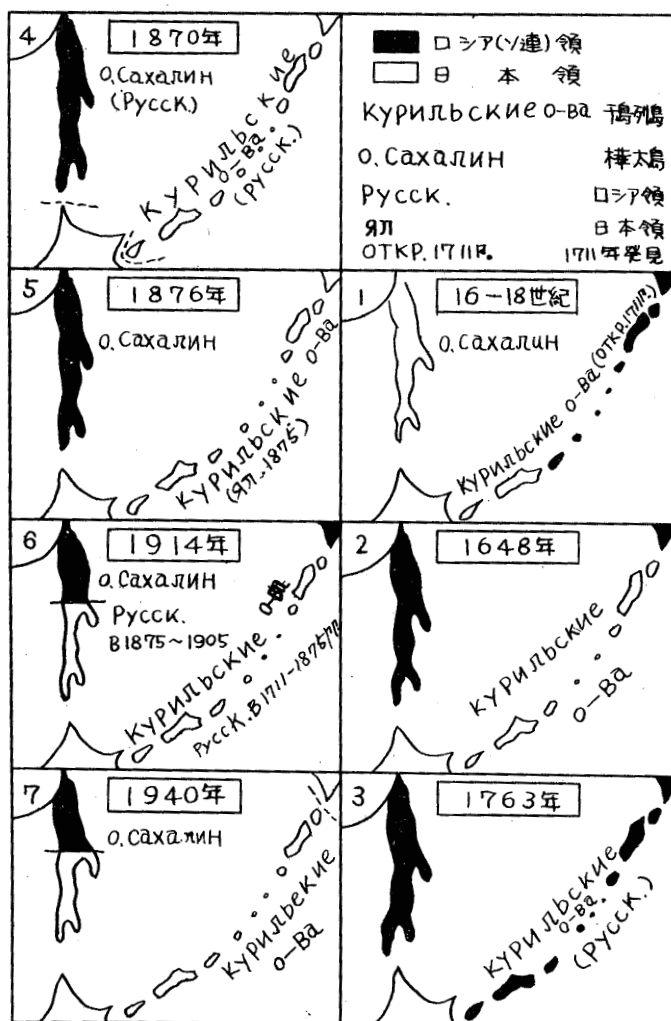
〇五年））を去る三十年も前の明治八年（一八七五年）すでに日本領土であった。

アポロ十一号が月面着陸の偉業を果し、この七十年代には一般人も月に往復が出来るようになりそうで、我々の世界観も根本から修正を迫られる時代となった。ソ連も、このあたりで猛反省をして、地球人類が兄弟牆（ぞう）にせめぐの愚を改めてもらいたいものである。渺（びよう）たる千島の領有などにこだわる時期でもあるまい。

またソ連が千島領有を続ける論拠の一つにアメリカの沖縄領有があった。アメリカが沖縄を離さない限りソ連も千島を領有し続けるのだと主張してきた。ところが昨年暮れの日米首脳会談によって沖縄返還が決定された今日、ソ連の千島領有は、その論拠を完全に失ったことになる。

我々は今や北方領土返還の一点に国内世論を喚起するのはもちろんのこと、世界世論にまで訴えて、その速やかな実現を希求してやまないものである。

現住所 東京都世田谷区給田町五六三



ソ連の不法占拠を訴え続けた

元北千島
守備參謀

水津満さんが逝去

終戦時、北沢守備兵団の
作戦参謀として、連軍に参
戦した北沢の不在を体察
以後はその生き残りとして北
方軍問題の研究に専ら過
した水津潤二は、東京に
住むがその日、川崎市の一
病院で病死した。生前に水津
氏と親交のある、大矢市長は
水津氏の著書や、これまで交
わった手紙を読破して、その
死を惜しむむも、北方領土
裏付けた。著書に「北方領土
の謎への探究」「北方領土の
歴史」があり、「北方領土半生
の追憶」など、北沢も晩生
をかけた研究で熱い結論で、
北方領土の返還を強く、国に促
すアピールしており、よくに国
内世論の喚起と統一、北方領土
専門家の新設、世界的ス
ケールの返還運動を案と
して挙げている。また昭和五
十八年に横濱を訪れた北
大矢市長は、これまで三
根室と大阪で会談が合い、お
互いの北方返還に強い意を
一致を確認させている。北
最後の手紙は至十一月に書
かれた、市長宛て宛れたた
ので、大矢市長は「貴重な方
を失うに非常に残念です。しか
か、返還要求動向は高が
る出来と返事は、わたくし
の分も頭痛ていふこと」
と語っている。



水津氏の著書を読み返す大矢市長

根室新聞 昭和62年（1987年）12月16日



荒された祖先の墓 涙とともに納骨

河 田 竹次郎

昭和二十年（一九四五年）八月十五日、一生忘れる事の出来ない日である。張詰めていた心も空気の抜けたゴム風船のようになつていた。

九月六日早朝、志発島沖にソ連の軍艦が一隻ずつ停泊しているのが見えたが、間もなく多楽島へ上陸をはじめ、中央部落のフルベツへ進駐（守備隊一個小隊）多楽島の武装解除を行い、無線局、学校、寺、病院等公共の建物全部を占拠し（警官は招集されており不在であった）島を警備していた日本軍をシベリヤ方面へ連行したようである。

日本兵が島を去る時、連行される兵隊も見送る島民も泣いて別れ励まし合った。

頼りにしていた日本の兵隊はいなくなり、不安な「デマ」が飛び、仕事も出来ず、来る日も来る日も女子供は脅えて外へも出られず悪い事をした者のように家の中にかくれていた。九月十六日夜、イカ釣り船が八時頃帰港した際、理由はわからないが、ソ連兵の銃撃に合い右往左往の大騒ぎとなったが、幸いにも死傷者は出なかった。

その後、ソ連兵の態度が厳しくなり、時計や万年筆等を手当たり次第に略奪しはじめ、生きた心地もなく島民は皆、脅えており、それから一戸一戸と隙を見て根室へ引揚げ、十一月中にはほとんどの島民が引揚げてしまった。

十月初頃にソ連民間人二名（役職不明）が来て、貴方は日本人だから北海道へ行くのも島に残るのも自由だが、ソ連で少し協力してもらいたい事があるから、もう少し欲しいと頼まれたこともあった。

十二月に入ってから、ソ連兵も全部引揚げたが、その時、島に残った者は、小倉洋吉氏宅二人、網谷鶴松宅七人、私達六人の計十五人で、網谷チヨさんは昭和二十一年（一九四六年）一月病氣にて死亡、また小倉氏と網谷鶴吉氏は間もなく脱出したので最後まで残留したのは二戸の十一人となった。私達はソ連軍は戦後処理の終了次第、千島及び歯舞群島から引揚げて行くものと信じており、淋しさも、あらゆる苦勞も超越して、その日の来るのを待っていた。

はじめに島に來たソ連兵は戦闘部隊で、我々は肩章が赤いので

「赤肩」と呼んでおり三十数人おり、次に来た警備軍は肩章の青のところから「青肩」と彼等と呼んでいた。

本道から残留物資を運びに来る人や、志発島や水晶島からソ連軍の物資を運んで来る日本人もいたので本道の様子も少しずつ知る事が出来た。

昭和二十年（一九四五年）十二月二十六日朝、北風の強い小雪の降る日の事でしたが、見慣れぬソ連船二隻が島に近づき、フルベツ港に停泊、将校（大佐）以下三十人程が上陸、まっすぐ私の家に来たのですが、土足で家の中に上がり込んで来た時は通常驚かない私もびっくりした。

その時の通訳は大尉でウシチメンコと言っていたが、政治、経済、戸数、人員、学校、警察、地名、井戸、産物等詳しく聞かれた。その時、多楽島にスタールスタ（村長）がいないからお前がなれと言われ、全島の馬飼育と管理をせよと、命令された。給料は四百ルーブルと定められたが、一度も貰った事はなかった。

私達の食糧は米だけ志発島から配給され便船で送ってくれたが、一年後は全部、ソ連の黒パンを作る粉に変わった。

ちょうどその日、H丸（四人乗組み）で残留物資を島に取りに来た方が、ソ連兵に見つかり取り調べを受けたが、ソ連兵の隊長は曹長で、大変良さそうな人で、直ぐ釈放する様に交渉したところ、明日、志発島へ連れて行き、隊長に託して直ぐ帰してやるから心配するなと言われ、その夜、私宅に宿泊させる事になり、久しぶりに日本人同志で夜の深けるのも忘れて話し合いをした。

十一時頃に就寝したが、H丸船員四人は私達の寝付くのを待って十一時四十分、私の家を抜け出し八百メートル程先に停泊してあるH丸で逃げようと海岸線を歩いて行ったところをソ連兵に見され、そのうちの一人が自動小銃で射殺された（終戦前は樺太の製紙工場に働いていたと言う二十一歳の青年）。

朝起きてから、この事を聞きソ連兵に交渉して墓地に土葬した（いずれも氏名不詳）。この事件から三日目、ソ連兵は志発島へ他の三人と共に来たが、三人は間もなく釈放されたとの事です。

このような事件のためか、昭和二十一年（一九四六年）三月末頃、色丹島キリトイシから再度、ソ連兵が来た（人員は常時二十二人から三名）。

国後島や志発島、水晶島の人の話を聞くと、だんだん不安がつるばかりで、ソ連兵は日夜、私達を監視して全島の漁船をソ連軍の駐留地フルベツ港の浜辺に集めて鉄条網を張巡らし、漁に出る時は兵隊一人が同乗し、夜は外出禁止と不自由な生活になった。残留漁船は百二十一隻、馬二百三十七頭がいた。

船は昭和二十二年（一九四七年）七月、国後島へ三十隻、志発島へ四十隻持つていき、二十六隻は時化のため浜辺へ打ち上げられ大破して使用出来ず放棄した。

私は命に依り、ソ連兵二名と共に島の家屋や倉庫、工場等の調査したが、軍の話では残留財産の一切を賠償に当たると言っていた。

ある時、夜十一時頃から午前三時半まで、戦争中、兵隊に行っ

ていただろうと、きつい取り調べを受けた事もあったが、上海事変には現役で行って来たが、その後は招集もなく在郷軍人会会長をしていたが、今の戦争には行っていないと、つっぱねた事もあった。

齒舞諸島村長（ソ連スタールス）は在島中に三人変わり、何れも二〜三回程度は多楽島に来た。その都度、村長は私に国後島へ行くように進めたが、多楽島は自分の島であり、自分の家も有るのだから絶対に行かないと頑張り通したので、軍もだんだん良くなり、協力を頼んで来る様になった。ところがソ連スタールスは軍に協力する必要がないと言って軍と対立した事もあった。ソ連兵が体を悪くして困っているのを、家内が見て手当をして治したので、その後は「ドクトルマダム」と言って態度も一変したものであった。

言葉も不自由なく通じるようになり、ソ連の実情も聞いたが共產主義を良いと言う者ばかりでもなく、兵隊の中にもスターリンの事を言えば殺されるから絶対他言するなと前置きして、いろいろ批判していた者もいた。

昭和二十二年（一九四七年）六月、樺太千島齒舞地方の馬の最高責任者と志発島から村長が来て三日間、私宅に滞在した時の事、共產主義と差別等、いろいろな事について議論していた事もあった。彼等は私達には言葉が分からないと思っていたようだったが、当時は八分通り分かっていたので面白く聞いていた。

また、将校や兵隊たちが、たびたび来て色丹島や多楽島は北海

道かと聞くので、私は色丹は北海道色丹郡色丹村で多楽島は花咲郡齒舞村多楽島で役場は齒舞にある事を図面に書いて教え、だからスタールス（私）は、多楽島から何処へも行かないのだと言うと、そうかと云って帰って行ったものだった。

二度目のソ連軍が来てから、引揚げて行く様子もないもので子供達を学校へやらなければと思い、一日も早く本道へ帰りたいと、その事が一番心配であった。

住宅も倉庫も新しい方から破壊して色丹島へ運んで、私たちが引揚げる頃には半分以上なくなってしまった。

多楽島には、主産物の昆布が沢山倉庫に残ったままにしてあったが、志発島の工場から日本人労務者が多数来て全部運んで行ったのであった。

多楽の隊長は、多楽島に居る者は収入が無いのだから代金をくれなければ渡すなと言って、積込中、立ち会わせた。

私達は、もちろん代金は貰えるとは思っていなかったが、後日、志発島へ集結した時に、魚の代金と昆布の代金を渡すから取りに来いと云われ、商店から三千六百ルーブルをもらった。

学校、病院、警察、無線局、お寺等もソ連兵のため荒らされ、遺骨も骨箱から投げ出してバラバラに散乱して身の毛もよだち、正気では見ることの出来ぬ有様だった。私どもは遺骨を元の通りにするため、その取扱いについて、永い間、軍に交渉していたのだが、なかなか許可が出ず、何回も強く交渉した結果、昭和二十二年（一九四七年）九月四日夕刻、「よろしい」と念願の許可が

出た。

明けて九月五日朝七時、風良く晴天にて天も我を助けるが如くであった。

今は亡き父と二人で、お寺の境内に二メートル四方の深さ一メートル三十程の穴を掘り、新しい四斗樽一個と新しいリンゴ箱二個に散乱している遺骨数百柱を納め、納骨箱に入った遺骨百八十六柱と共に納骨し、新しいムシロを幾重にも掛けて土を盛り、二十キロ程の石を一個置いて石碑とし、読経した時は、止めどもなく涙が流れて、なかなか墳墓を立ち去ることが出来なかった。思い出せば今もなお、涙が出てならない。あの時、許可が出なければ今もなお、荒れ放題になっていた事であろうと思えば、許可してくれた隊長へ感謝しているのである。

馬も終戦時、二百三十頭近くいたが、昭和二十二年（一九四七年）八月、志発島へ四十七頭運び、多楽島には六十頭程が残っただけである。

あとは凍死したものと食用にしたためである。

昭和二十二年（一九四七年）九月六日、この日も志発島から馬の運搬に来て積込みの最中、午後四時頃、明日に志発島へ引揚船が来るから、馬を降ろして一時間の内に身支度をして、この船で志発島の相泊へ行けと命令され、もし遅れると一生、北海道へ帰れないと、おどかさされた。志発島相泊に集結したが、配船の手違いから十月十四日まで置かれ、午後二時近くに志発島を後に樺太の真岡へ上陸するまで一週間かかった。

樺太では、学校に收容され十日間待つて日本の引揚船に引き取られ、一路、函館港へ向かい永い間、待ちに待った日本の土を踏んだのだった。

我が家を出てから二カ月余りの長い旅路であった。

食べる物も無く、皆、栄養失調になり、歩くのも、やつの事で樺太で、ずいぶん沢山の老人や子供が日本の土を踏まずに死んでいた。

思えば、大正七年（一九一八年）五月に渡島以来、三十有余年を島で暮らした。あの山、あの川、あの岩、荒狂怒濤も我が家の庭であった。

すみからすみまで目に浮かぶ豊かな島、平和な島、魚も限りなくいた島、ぶんと鼻をつく磯の薫を腹一杯吸いたい。

「オーイ、一日も早く帰ってこい」と絶叫して筆を置く。

元在郷軍人会多楽島分会長

現住所 根室市弥生町一丁目七十四番地



色丹島の終戦

村長としてソ連軍を迎えた私は、スパイ容疑、
反ソ分子の罪名で二十年の科刑、シベリヤに拘引

梅原 衛

終戦とソ連軍の上陸

昭和二十年（一九四五年）八月二十六日「択捉島にソ連軍上陸」の電信が根室支庁に配達された。続いて「婦女子は学校へ収容」の第二信である。

私は当時、島の自活体制を整えるため本道に出張中で、八月十五日の歴史的ご詔勅は北海道庁で拝聴し、張りつめた緊張が一瞬にガックリときて魂の抜けた「生ける屍」の何日かであった。恐らく、あの時の感情は私一人だけが抱いたものではなかったと思う。しかし「これ以上、国民の犠牲は忍びない」として下されたご聖断が日本の今日あることを思い、ただただご恐懼に堪えない次第である。

戦局は日に日に敗色が濃くなり、いよいよ本土決戦に備えて、主要兵器の本土移管、特殊部隊の本土転属で、信頼と親しみをもった将兵は、私が島を出る前にも次々と別れの挨拶を交わして退島していたものの、まだまだ守備隊は健在を誇っていたものであ

った。

色丹島は敵の北海道攻略の足場になると目され、戦線を拡大した日本軍の手薄の中にあつて、択捉以南の各島の守備にあたっていた小川権之丞中将を長とする第八十九師団の一翼として、土井定七少将の統率する独立混成旅団があり、三千七百人の兵力を擁して色丹島に駐在していた。色丹島は長方形の島であり、港灣を除いては全島屹立した数十尺の岩壁で固まり、灣の周囲には、岩盤を一寸刻み五分分钟みで内陸部から銃口を自由自在に開口し得るような陣地が、恰も蛸の足のイボのように構築されており、正に全島、火を噴くともいえる堅固なもので、金城湯池をたのんでいたものである。また民家の防空壕といえども岩盤をコの字に掘削して、艦砲射撃などで一方の出入口が崩されても他方から通じ、相当期間の食糧も貯え、長期に堪え得ることは本土の根室のような、お粗末なものではなかった。

当初、軍の中心は斜古丹（役場所在地）の奥地の山林内にあったものを、寡兵で機動作戦に備えるべく、昭和二十年（一九四五年）六月、小川師団長の巡視によって主力を島の中央、能登呂山

麓の林中に移動し、四里の行程をほとんど兵隊の肩車で、わずか一カ月で完了した。このスピード作業には島民も全く舌をまいたものであった。

今は万事終わった。日本にどんな運命がふりかかるやも、はかりがたい。しかし物資の窮乏は一朝一夕には回復しないし、これからの任務が重大だ、と自分に言い聞かせ、ひとまず帰任して情勢の変遷を観望しながら指示を待とうと根室に船待ちしていたときの択捉島へのソ軍上陸である。婦女子の収容は、穏やかで平和進駐なのか、それとも…状況は混々としてハッキリしたことは何もわからない。彼等が島伝いに色丹まで延ばすに一、二日の間があるかも知れない。急いで帰島して、せめて婦女子、老人だけでも本土に疎開させたいと考えた私は便船を探しても見当たらず、八月三十日「明朝午前五時、色丹島に出航する」という第二長栄丸（二十五トン級）を探し当てて翌朝を待った。その晩は携行していた荷物を振り分けて家に送り返すための荷造りなどもしたので、その夜は、まんじりとしなかった。

その翌朝は夜半から、すさまじい雷雨で海鳴りも物すごいものであった。しかし、どうしても行かねばならない。「とても船は出ませんぞ」という宿の人の引き止めを振り切って、豪雨の中を浜に出ていくとどうだろう、雷鳴はピタリとやみ、雨もあがつて、たちまちカラッと晴れあがったのであった。これぞ天祐と、よこんで船に乗り込んだ。

色丹島には、その日の夕刻に着いたが既に暗がりであった。吏

員たちは棧橋に出迎えて待っていてくれたが、長山助役からの報告によると軍と憲兵隊からの通達によって今日、部落長会議を招集し、明日正午、日ソ両軍の会見場に役場があてられたというところで中が綺麗に片付けられていた。やはり来たのか…せめて老人や婦女子だけでも本土に疎開させたかったが、全島に連絡するに時は、既に遅い。

択捉の師団司令部との交渉が成立したのであれば問題のない情報なのだが、「島内の治安は日本軍が当たる。日没後、日の出前の外出は禁止する。この期に及んで強いて脱島する者は国賊とみなす。」というものであった。この情報は果たして、どこから出たものか、後に問題を残すのである。

ともあれ不安の一夜は明け始めた。私は翌九月一日早朝から役場の前の小川にかけた橋の上に立ち、明けゆく海を眺めていた。はるかに国後、択捉の島影がいつもと変わりなく横たわっており、海は穏やかで敗戦の実感もいまだなく、戦争のあったことさえ夢ではなかったかと思われるぐらいの平和な朝の静けさであった。

とみるうちに国後島の北端アトイ岬の沖合に三条の煙が立ち昇っているのを認めた。とみるみるうちに、それが船影に変わり斜古丹港を目指して、まっしぐらに突っ込んできた。赤旗に錨と鎌はソ連旗、正しくソ連軍に違いない。ここには危ないのか？しかし日本領土を足蹴にするソ連軍の実況を、この目で見届けたいとも考えた。そのうち七百〇八百トンもあるうかと思われる輸送船一隻の両サイドに二隻の駆逐艦がピッタリ寄り沿うて斜古丹

港に侵入し、輸送船が人影一人ない日本軍の棧橋に横着けるや、自動銃を小脇に抱え込んだソ連兵が、まるでクモの子を散らしたように這い上がって四散し、その一群は真つ先に私のところへ駆けつけて銃剣を突きつけ私を取り囲んだ。私のほかには人影もなく外に居るのは私一人のようであつた。住民は家の中でジッと息をひそめ成り行きをうかがつていたことであらう。

言葉の通じない彼等のことなので、彼等の手振り足振りの動作で問答が始まつた。抵抗するかどうかということらしい。同道する筈の師団司令部員も居らず、斜古丹に駐在している筈の日本軍一個中隊も誰も出てこない。なお親指を突き出して村長はどこかと聞いているらしいので、同じように親指で自分を指してうなづくと、今度はどうやら民家の武器弾薬を出させよということらしく、十数名の兵隊が前後、左右逆放射状に銃剣を突きつけて民家の案内役に仕立てられ、一軒一軒を銃剣に押されるようにして引廻された。

私は山より大きな化け物はない——と度胸を決めていたのであつたが、むしろ恐れを感じているのは先に立ったソ連兵ではなかつたのか、後ろ向きに銃剣をかざして後ろふり返り、ふり返り歩行する様は滑稽にも思えた。だが村民たちは村長が、どうされるのかと心配してくれたらしい。ものものしい大搜索は、若干の猟銃や刀剣などを没収して別段のイザコザもなく昼過ぎに終わった。

その頃には逸早く無電塔を接收し、郵便局、学校、漁業会、倉庫、捕鯨場などのほか、湾の裏側の小高い丘にいたるまで赤旗を

たて、軍の電話線などはズタズタに切断され、棧橋の袖にあつた荷役用の役場の倉庫、陸軍病院の前などには目の色の違った歩哨がダイヤルのついたチェコ軽機を小脇にして立ち、部落内湾を取り巻く一帯の台地には重機銃を据えて兵を展開し、裏山の丘には山砲が物凄く部落を見下ろしている。

ソ連の駆逐艦の側には今朝、出合いがしらに拿捕された(昨日、私が乗船してきた)第二長栄丸が、捕鯨場前に捕っているチボイ丸とともにマストに赤旗を掲げさせられてる哀れさであつた。街頭にはソ連の輜重車と兵隊が輻輳している始末であつた。

(上陸したソ連軍の装備は混成一個大隊(隊長少佐)、重機二十一、三十、山砲十門、輜重車十輛、馬(樺太の占領馬?)四十頭、兵四百一六百程度と推定された。)

ちやうどそのとき、白旗を揚げて一隻の漁船(三十トン程度)が港に入ってきた。能登呂山麓の旅団本部から海路をとつて土井旅団長はじめ幕僚たちがやつてきたのである。

予定された役場庁舎で両軍の会見が始まつた訳だが、もの十分も経たぬうちに出てきたソ連軍は日本通訳一名とともに土井旅団長を拉致し、全軍に降伏命令を出させて、三千七百余名の日本軍をまんまと無血捕虜に成功したのである。指揮系統を即座に絶たれた日本軍は混乱したらしい。不意打ちの呼集に着のみ着のまま盤回しに移動され、ほとんどその日のうちに武装解除され、翌日までに憲兵隊、警察官にいたるまでが捕虜にされてしまつて、日本軍が治安にあたるどころかソ連占領下に無警察状態となつて

しまったのである。

ソ連軍の偽装連絡であったか

日本国がポツダム宣言を受諾して停戦協定にはいり、昭和二十年（一九四五年）九月二日、東京湾のミズリー号艦上の調印を終えるまでは、どの部隊が、いずれ連合軍に降伏すべきかは指示されていない。「満州、北緯三十八度以南の朝鮮、樺太及び千島諸島に在る日本国の先任指揮官並びに一切の陸上、海上、航空及び補助部隊は、ソヴィエト極東最高司令官に降伏すべし」と一般命令第一号（陸、海軍）が連合最高司令官マックアーサー元帥から指示されたのは九月二日である。通常、陸戦法規では停戦協定中は両軍とも現状を守って、これを犯すものは撃退すべきが建前であろう。これは、また聞きで確認はしていないが、色丹の場合も斜古丹湾に駐屯していた井林中隊長は、沖合に現れた船舶に対し、何の目的で来たのか、を単身で敵艦に乗り込み、場合によっては上陸を阻止すべきだと旅団本部に進言したと言われるが真否のほどは定かでない。もつともそうなれば一発の白砲で色丹に向かったソ連軍の運命は終わったかも知れないが、無条件降伏という異例の状態のもとで占守島の停戦の事実もあって、そのような状態にならなかったと思われる。また一般命令第一号によれば色丹、齒舞、国後、択捉が千島列島に含むかどうかの問題も検討されることもあったろうと思うし、北千島から南下したソ連軍が得

撫島から引き返し、米軍の進駐ないことを確かめて、樺太から移行した別のソ連軍が択捉以南の占拠に当たった事情も無意味でないと思う。

治安が日本人の手で守られるとはマッカな嘘であった。日本軍が通達した例の情報の根拠は、いったい何であったろうか。私はあとで考えてみたことであるが、この情報はソ連軍が使った偽装連絡ではなかったかと思われる。占領に際して抵抗をなくするため、択捉師団司令部の名を騙ったとすれば、早朝の進駐といい、彼等が真っ先に通信遮断を忘れないことから、恐らく連絡不能になっていた筈である。殊に武装解除から捕虜への手ぎわのよさといい、いちいち領けるではないか。

九月中旬、使役部隊一個大隊を残して三千五百の土井旅団長以下日本軍捕虜は、アナマ港からソ連の貨物船に詰め込まれ、東京に還すとの口実のもとにシベリヤに輸送され、残った使役隊も翌年、国後に移された。南支に敵前上陸、あるいはソロモン群島ガタルカナルで勇名を馳せた色丹守備隊も、無条件降伏には勝ちようがなかった。

ソ連占領下の島の生活

しばらくして島の生活は、ソ連の手に委ねられたが、島民の苦難の生活は、これから続くのである。

会見場に当てられた役場庁舎は、そのまま占領軍の司令部が居

据わったため、役場庁舎に接続した村長公宅に侵入しを喰った。

幸いなことに、守備隊長のハジェフ少佐は、珍しく軍律の厳しい人で、兵の民家への立ち入りを禁じ、婦女子への暴行は銃殺に処すると固くいましめられていたが、現に人が居れば手は付けないものの空き巣は狙われ、役場倉庫の配給用の米、砂糖、ミルクや漁業会、工場等公共的な資材は占領され、防空壕に疎開した寝具、衣類などまで略奪されて、その返還交渉には手を焼いた。ご他聞に漏れず、色丹でも時計、万年筆等は彼等には物珍しいと見え、大方は、ねだり取られ無心されたようであったが、住民への殺傷、婦女子への暴行などのトラブルはなかった。

私の誤算が拭えぬ痛恨事

ともあれ、ソ連の姿勢としては案外なところがあつた。既に恐怖におののいて二、三の脱出者が出る。しかし限られた船腹に、われさきと競うことは明らかである。しかも各自積み荷を惜しむことと、いずれ一、二日中には水晶島までも彼等の手中に収められること必定であり、捕獲防撃は目に見えている。全島民を無事に根室に渡らせる術はない。人命の尊重が最重に考えなければならぬ。ポツダム降伏条項の「我らの決定する諸小島」には、少なくとも齒舞群島、色丹島が入るべきではなからうか。単なる武装解除のためならば、いずれはソ軍は撤退して常駐することにはならないだろう。たとえソ連が頑張ろうとも連合国が健在なる限

り島は戻る。いま無人島にすることは彼等に永久占領の口実を与えることにもなりかねない——というのが私の判断であつたが、これがそもその誤算であつた。ともあれ婦女子の名譽を護ることが先決で、無用のトラブルは避けるべきである。年頃の娘を屋根に隠し、悪化粧をさせたところで長続きはしない。女性はお若を問わず隙と眉態は厳禁、冷厳を保つこととし、無理な脱走は避けて動揺を防ぐこととした。ソ連軍は島内の兵舎の接収にかかつているらしい。

まず不安に駆られている部落を慰撫し、事故の有無を確かめなければならぬ。第二日目の早朝、私は単身、裸馬をつかまえて全島一巡に出かけた。山道ひづめを鳴らして森を抜け、峰を越え、林を縫って部落から部落へと走った。穴澗から能登呂へ抜ける山中には日本兵舎群が置かれてあつたところ。ソ連は威嚇発砲かどうかはわからぬが頻りに銃声を轟かし、一昨日までの平和な島は恰も交戦状態を思わせた。穴澗から能登呂にかけては日本軍の築いた立派な道路があつたので、一鞭あてて馬を飛ばした。すると後方から一台のソ連トラックがついて来た。驚いたのは私の乗っている山馬だ。陸の怪物とでも思つたのか狂奔しだした。道路は一本道、これは厄介なことだと馬の最大能力の限り出させて突走ったが機械にはかなわず、六キロ以上も駆けたと思うころ、後ろを振り返ってみると、トラックには五挺も銃口を揃えて兵隊が立ち打ちの構えをしている。

敵は怪しい者の逃走とみて追跡してきたらしい。これは危険と

枝道をみつけて馬をとめたら、なんのことなし。危ないところを免れた。あと一部落で周り切るところで居合わせた守備隊長ハジュフ少佐につかり、船で役場に戻された。住民に連絡して陰謀でも企んでいるとも思ったらしい。怪訝な表情をしているので何事ならんと棧橋につくと、隊長自ら役場の方を指さして「ダモイドーマ」を連発するが何のことやら解らない。後で解ったことだが、露西亜語の「家へ帰れ」ということであつた。

こんな簡単なことでも言葉が通じるといふことは大切なことであつた。私は暇次第、ソ連兵を捉えて手振り足真似、全身を舌代わりにして露西亜語の勉強をはじめたが、とても私にとっては、いまの入試勉強などよりも痛切なものであつた。幸い顔見知りになつた物資係りのジスコフ大尉が、日本軍兵舎から「日露会話辞典」の小冊子を見付けてきてくれた。それと首引きでソ軍との折衝に当たつたが、当時では島随一の露語通ではなかつたかと自負していた。

ソ連軍政を布く

しばらくはジツと待機して様子をうかがつていたが、その間に役場、巡査駐在所、郵便局（駅通）、西田旅館等の目ぼしい建物は占拠され、早速、申し入れあつたのは彼等が運航に使う没収漁船の乗組員の供出と、日本軍の耕作してあつた馬鈴薯堀取り労務の供出であつた。機関士など特技を持った者は本土に脱走して居

ないことにしていたが、なかなか聞き入れない。これはと目をつけた者は連行して銃口を突きつけて恐喝するのには閉口した。あるときは捕鯨工場のボーイラーマンを連れ出して船の機関士を強制し、島民の見せしめのためにと棧橋に立たせ、目隠しの上、実弾を装備した三名の兵が狙い撃ちの構えをして、ハラハラさせられたこともあつた。本人は全く機関士の心得のないものであつたが、それを理解させるのには手を焼いたものである。

不安なうちにも一カ月は過ぎてソ連軍からの呼び出しがあつた。行つてみると、国後の古釜布（南千島を管轄する赤軍の本部）から副官と称する大佐が来て、通訳のウシチメンコ大尉を通じて、本日からソ連の軍政を布く、一切の日本行政を廃止、警察、憲兵隊の解散を命ずる。十月五日、男女十八歳以上の住民を集めて村長を選出せよとの布達が張り出された。

これは困つたことになつた。ほかに朝鮮人のN氏などの立候補もあつたが、島民が若し私を選出したとすると、ソ連は捕虜の数を多くするために、前村長の立場上、在郷軍人名簿特別警備隊、防護団などの前歴者を詮索するに違いない。何とか私を避けるように島民に訴えたのだが、成功しなかつた。もつとも島には現在、軍も警察も憲兵隊もない。役場だけが頼りであつてみれば無理からぬことであつたが、ソ連に強く辞退した。が通訳の曰く、「ソ連では選挙によつて一旦、指名されたものは辞退することは許されない法律である」としてズルズルと、その通りにされてしまつたが、同じ選挙の方法で選ばれた部落会長などは、どうい

訳か次点、三点のものでソ連側の手心で任命するという、ご都合主義のものであった。

案の定、前述の名簿の詮索が始まり、執拗なまでに迫ってきた。幸い脱島者があったので、それら組織の責任者は調べてみたら、既に脱島して名簿などとは見当たらないという、在島者のうち誰かを知っているだろうと、その氏名を切り返してくる。私は来任、日が浅いので詳知していないと、かわしても割り切れぬものがあったらしい。

占領下にあつて一度本土に帰る

交易、通信は一切、断たれ、ラジオも没収されてしまっている。島の運命を探りたい。軍と共に民間人の先発隊が入島して、直ちに漁業経営にとりかかる気配であった。そこで、島民を代表して、漁業に協力することはよろしいが、島は北海道に依存しなくて漁業資材も船の修理もできず、漁獲物の一切は秋に本道に商って冬眠に備えなければ島の生活は成り立たない。本道に旅行している家族もいる。第一、漁業資材がなくては全くの寝食になる。本道との交易は認められないか――と要請した。その時は回答が得られなかったが、また十一月はじめに前の副官が通訳を伴ってやってきた。その頃は、通貨は軍票に切り替えることもなく、日本円とルーブルは等価でソ連人との取引もできており、配給物資も労働するものに限って若干、有償で与えられるようになっていた。

十一月五日、突然、守備隊長も立ち合いの上で「かねて要請のあった本道との交易は、色丹島ばかりでなく千島全島に対し、その都度、特別許可のもとに許される旨、今日モスクワ政府から電信があった。至急、本道にのつぴきならぬ用務を持つ住民の希望者を募った名簿を提出せよ」とのことであつたので、急遽二十名ばかりの名簿を出したが、先方でチェックして、正式には私と村会議員三名を含む七名および船の運航要員ということになった。

条件は、軍が運搬に使用していた漁船の梶の修理をしてくること、出港した全員が連帯責任で帰ってくること、船員の心得ある渡島希望者を募ってくることの三点で、途中、志発島までは監視船付き（島内の寄港地までは警備隊長同乗）、志発島に寄港してヂクチーロフ隊長（少尉）の指示をうけよとのことであつた。志発島では、根室海峡に差しかったなら赤旗を下ろせと言われたことに不審を抱いたものである。船の修繕には半月もかかる。修繕料は物価高なので米二百俵を要するが、米は統制価格で一俵二十円だからというので、二百俵の伝票は得たものの、穴澗で現物受領の際、守備隊長（更迭してアクション少佐）等が随行先廻りしていて差し止められ、交渉の結果、わずか三十俵の受領に終わった。根室に着いて、一俵は二隻の船員の食糧に、一俵は船の修繕期日を確約させるプレミヤム代に、残り二十八俵を食糧営団に引き渡して五百六十円、闇値では一俵一万円とも言われていたが、修繕料二千五百円支払って結局、二千円近くの立替金はソ連奉公スタロスター（村長）給料五ヵ月分二千五百円と船大工労賃二千

五百円は、サインはさせられたが、今もってソ連に貸していることになる。

黒い魔の手が待っていた。

ソ連のある高級責任者は言った。「ソ連には現実以外に信じるものはない」と。全く、そのとおりで約束も指示も事実も何一つ土壇場になれば役に立たない。読売新聞に私の道内での行動、言動が逐一こと細かに報道された。しかも前置きして断った私談、感想までも、ニュース本位に利用されている面もあった。私の身を案じる者は好意的に帰島を引き留める勧説もあったが島民の安否をよそに思いとどまることはできない。暗い気持ちで鉛色の海を渡った。色丹には制限期限内に帰便した。しかし、常備軍の国境警備の本隊が来るまではよかった。次の船便を出すように軍と折衝していたが、なかなか決定にはならなかった。ソ連の鎖国制度を知らないわけではなかったが、保障占領地域ということで前回の特別航海ができたのではないだろうか——と深い関心があったからである。

あの航海によって私ばかりでなく、確かに島民にも幾分の明るさのあったことも事実である。そのうち、三月を予定されていた常備軍の国境警備隊（青肩章と呼んでいた）の本隊が、翌二十一年（一九四六年）一月三十一日に期日を繰り上げて入島してきた。ささきの戦闘部隊（赤軍）と違って常備軍には家族持ちが多く、大

量の民家の接収には、ほとほと手を揚げた。島民は立場を同情して空けてくれたが、それにしてもスムーズには行かない。戦闘部隊には日本軍の占領物資が豊富にあるが、国境警備隊には行き渡らなかったとみえるので、島民に対する強要なども多く、むしろ常備軍の行動は質が悪い。

赤軍時代中の主な事故としては、唾の労務者が聴覚きかないため、歩哨線で威嚇されたのを知らずに近寄って射殺された事例、脱島者が荷物移送のため、島に再度戻って射殺されたのが二人（岩崎、児玉の両氏で負傷者は不明）、イカ釣りに出た小舟が射撃を受けて左股貫通銃創が一人（菫川忠氏）。これなどは島民食糧自給のために軍と十分協定した沿岸出漁海域内の出来事であった。命令の不徹底か、歩哨の誤認か。悪戯によるものである。幸い本人は至って気丈な男で衛生手当の心得のあったものなので、適切な応急措置をして、一命は取りとめたものである。

お気の毒なのは斉藤権太郎一家の脱走難破事故である。ソ連占領下の冬越しは堪えられないと思ったことであろう。ところをかえての戦後の再建には一刻も早いのが勝ちである。色丹水道は、ただでさえ櫓櫓では無理なところである。十一月ともなれば海は荒れる。ソ連軍占拠の齒舞離島を島伝いに根室に渡ることはできない。とすると川崎船に荷物を満載しての根室渡船は危険の上もないことである。親子三人、能登呂港を出港したことは確かだが、どこにも上陸した事実はない。ついに引揚げの痛ましい犠牲者を出してしまった。そのほか進駐まもなく泥酔した将校が漁場

に押し入り、強姦未遂が一件。これなどは司令部に訴えたら直ちに転属させられたらしかった。物取りの場合の解決は困難であったが、乗馬鞍などでも返却を受けた例もあった。

昭和二十一年（一九四六年）三月五日の真夜中、私はソ連軍に逮捕された。寝ばなを否や応もない。文字通り寝耳に水である。千島の三月は、まだ真冬である。毛皮のシュエバ（外とう）に身を固め、どことも分らない。穴澗、キリトウシまで馬そりにひかれ、キリトウシから船で志免に渡り、一週間ほど番匠氏宅に預けられ、国後島古釜布へ連行された。

当時、ソ連軍の戦闘部隊と国境警備隊は折り合いが悪く、なにかと対立の様子がうかがわれたが、青肩章の本隊が入島して勢力が強まると、これまで主導権を握っていた赤軍の対住民の宣撫工作について、ゲ、ペ、ウらしいものが取り調べを始めたのであるが、例の北海道行きが公式の許可でないものとして、渡道した張本人の私が参考人として、引っ張られたもののようであった。ソ連軍は国後を三村に分け、古釜布村を設けて東峰弥一氏が村長を務めていた。同氏には大変なお世話になったが、そこへ預けられての取調中、十日ばかりはスパイ容疑で例の読売新聞の記事を突きつけて詰問され、同時に連行された西田国平村会議員、後に連行されたと思うが小林嘉也、斎藤敬太郎の両議員も私の証言に立って、随分ととんだ道連れ、ご迷惑をおかけしたことを申し訳なく思っている。取り調べに長い日数が費やされて、春たけなわの五月になってから、やっと釈放された。帰ったときには既にソ連

人の村長ができていた。

モスクワの公式認可が怪しいことは、根室で国後島泊村の漁業組合長Mさんに会ったときに感じていた。Mさんは泊村出先官憲の物資係の特命で、購入物資の依頼等もあって非公式に渡道してきたので、私の場合とは違ったケースであったことに疑問を抱き落胆もした。このときMさんと情報交換したが、二回目の逮捕の原因となった。つまり家宅搜索をうけたMさんが、私の名刺を追求され、「色丹島の梅原という男が私のところへ来て、国後島のソ連軍の兵力はどの位で、隊長の階級は何で、名前は何か」と聞かれたと苦しい証言をしたらしい。

帰島して二十日ほどの後、青肩章の将校と若い通訳が来て、私の荷物一切を封じ、書類を押収し、身柄と共に船に載せられた。着いたところは古釜布。軍事スパイ容疑なのである。民家預けなどのような、なまやさしいものでない。やがてMさんとも対決した。Mさんも前言をひるがえし、赤軍の検事も納得したのか、まもなく釈放されたが、いやな思いの三カ月で帰ったのは八月二十五日であった。

「働かざるもの食うべからず」で雑務に刈り立てられるよりは、家大工に師事し、のちに本職人の川村菊太郎船大工の助手となり、大変なご迷惑をかけたことであろうが、百トン級の梅丸に三十トン級のソ連船の修理を終え、やっと賃金の支払いがあるというその日、三回目の逮捕が待ち構えていた。前日、賃金のサインをさせられた翌早朝の逮捕、グルになって、私のサイン欲しさの計画

的としかいいようがない。忘れもしない昭和二十二年（一九四七年）八月二十九日、これが色丹島の土と別れた最後の日となったのである。

シベリアに流刑

古釜布に着くと今度は様子が違う。監視兵付のジープで真直ぐに運ばれたところはゲ、ペ、ウの後身NKYD（内務保安隊の特高警察）、早速、装具点検に遭い、国民服の襟元までもほどいて調べるという嚴重さ。所持品は一切押収、丸太造りの昼夜も分からぬ真つ暗闇みの独房に放り込まれた。筵一枚置かれていない。微かな寝息が聞こえるところを見ると誰か先客がいるらしい。一体これは何事があるのだろうか？だんだん話しかけてみると、先客は本土復帰陳情をした科で取り調べを受け、私と一緒にシベリアに送られた中野古丹の伊藤哲二氏であった。その晩九時頃から取調に引き出され、既に終わったのかと思っていた北海道行きのこと、また再燃した。くるものがついに来たという感じ。私に懇意ある将校が、「梅原、お前は志発か水晶に仕事を希望して移動した方がよろしい。あれからなら手漕ぎでも根室に渡れるでないか」と私の運命を暗示してくれた。それからでも志発、水晶から幾回かの脱走船が出た。しかし、いま職責上、直接島民のプラスになれなくても、私はかねてから私が引き揚げるのは島民の最後だと公言してきている。島民を残して帰ることはできない。

はじめから覚悟の赴任であった。「山より大きな化物は出ない」と考えてのことであった。

取り調べは決まったように毎晩九時頃より午前二時―三時に及ぶ。しかも同じことが繰り返される。裁判は、たとえそれが死刑囚にせよ、判決が決まった段階で覚悟が定まるが、それまでの取り調べは大変苦痛なものである。廊下の靴音がすれば、また呼び出しではないのか。錠を外す音などは、ひどく神経を刺したものである。しばらくして未決拘留三十七日の後、十月五日連行されたところは、サガレン軍法会議を、ここで代行するということがあった。

スパイ容疑に反ソ分子の罪状が加えられ、一切の抗弁は受け入れず、弁護士、証人の申請も拒否され、「十年の強制労働の刑を科する。財産は没収」というものであった。裁判官の将校が、既に用意されてあった一方的な判決文を読み上げ、わずか五分で閉廷した。

のちにウラジオストツクの軍法会議でわかったことであるが、財産没収は判決文にはなかったもので、私を納得させるトリックであった。根室で色丹島の状況について読売新聞の記者に話したことがあったが、それがスパイ容疑、反ソ分子の理由などは全く愚にもつかぬこと。取り調べ中に聞かれたことは、小学校の紀元節に参列した日誌をとりあげ、ソ連軍政下にあつて、日本の紀元節を村長がやらせただろう。それが反ソ的である。家宅搜索でみつけた日の丸の旗は、アメリカの飛行機との合図用のものだろう

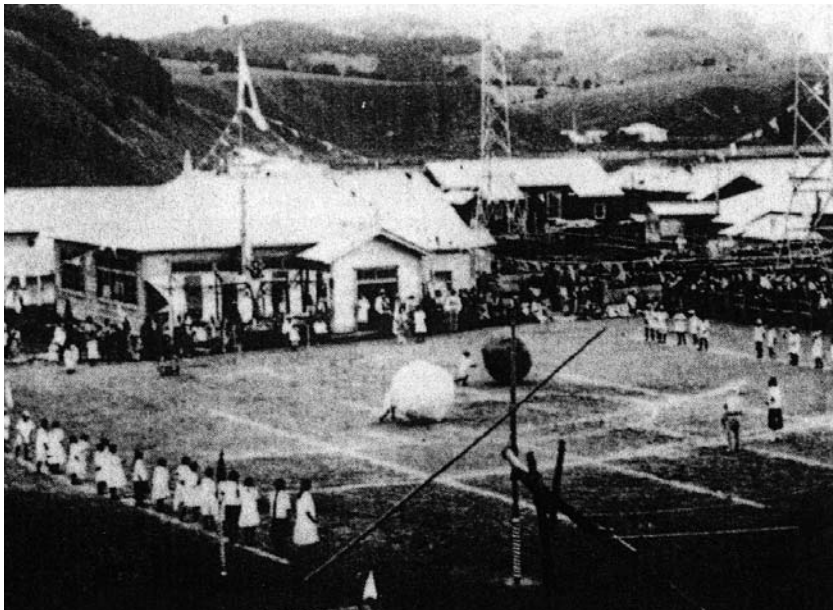
―などであったが、彼等が本当に反ソ的だとして挙げたかったのは、島民の労務賃の支払いに当たり、数字の一桁二桁の端数だけ書いてサインを求め、その額を支払い後において左に三桁、四桁を書き込み、差額をピンハネしていた不当を抗議したことなどであらう。もっとも島民の立場のすべてを犠牲にして、無条件に親ソ的でなかったことは自認しているところである。

一縷の望みと控訴に託して待つうちに、昭和二十三年（一九四八年）の春がやってきた。

四月十四日、私どもは、行き先も知らされずに貨物船に乗せられた。船は集荷のため色丹島の穴澗に寄港した。前年の十月には各島の六割が第一回の統制引揚をしたと伝え聞いたが、色丹では七世帯が残されたという。この人達も無事で早く帰ってもらいたい。私は島民の最後まで頑張ると常に公言していた。事実、命が保てたとするならば最後になることは間違いではなかった。だがしかし、いまの身上では…思えば腑甲斐ない村長であったことを心の中で深く詫びながら、甲板上に立って島影の霞むまで任地「色丹島」との最後の別れを惜しんだ。

元色丹村長

現住所 札幌市真駒内曙町一の一



色丹島 色丹尋常小学校の運動会

公益社団法人 千島齒舞諸島居住者連盟
戦前の北方四島写真収録集より



美しすぎてた “色丹島”と 私 “と言えそうだ

小 泉 秀 吉

美人薄命とも言われるその譬喩こそ、我が色丹島にも当てはまりそうに追憶される。

「いろ丹」と、はめ字した発想者？の惚れっぷりにも一応の想像がつかぬでもない。

私の生まれ故郷であり、六歳まで育った筈の根室には、一向にふる里らしい感懷を醸し得ないのもどうしたことなのか。

明治三十五年（一九〇二年）五月末の頃、養家葭川直太郎キヨミ夫妻と、是非にと行をともした永年に亘るわが家の働き手、五十路男の沢田おとうこと政次郎との四人で、今の中村一氏の先々代が回漕中の二百五十石積み船五明丸で順風一昼夜、航程を経て、たどりついたのは入島を誘ってくれた先住の岡本仙太郎氏と同居養子九蔵君等の拠点、部落名を改称後の相見崎こと南岸ヨコネモシリの、草囲い作りで簾戸を垂れ下げただけの漁屋であった。草鞋ばきのまま踏み込める炉端で、貯め集めておいた漂着木の焚火を手にかざしながら、毎夜の月を眺められるというお粗末な浜辺の建物に一行が上陸し落ちつき得て、せまつくらしかつた船艙内で荷積みの片隅に居すくまっていた船酔を解消し、空腹

を満たし得たのだったろうが、その裏手を小流する水のおいしさは全く印象に残っていない。

しかし色丹の味の第一は、至る所に大中小、潤沢な清流があり、その端麗清浄な流水の持ち味こそ、全くの素晴らしさではあった。

事実、終戦当時まで自家用に井戸水を用いていたのは、指折り数えるほどの僅少世帯だったし、後年、二歳馬をひと船ずつ共同積して厚床市場へ連れ出すまでの数日間、根室半島の三古丹牧野に放牧させて貰うのが常であったが、この幼馬たちが、どうしても、この半島地帯の谷地水を飲もうとせず、飲み馴れるまでには、げっそり痩せ細ってしまい、「水の不味いことが食欲減退の因であらうぞ」と、今は亡き佐々木昇氏などと語り合ったものであった。

さて水の話は水に流し去っても、四季絶ゆることなき、あの山紫風光の明媚さは、入島し旅行する方が賛美をおくるのも当然で、北海道十八番目の道立公園として全島域が予定されていたことも事実である。しかもその半面には、等しく全島域が準要塞地帯として大湊要港部の監理下に置かれ、島面積八十%を占める国有

林地帯用材林、薪材林の間隙や高原帯に、色丹松、真柏、金露梅の群生するさまは全く異観壯観であり、盆栽愛好家垂涎的である天然の老低木散見のかたわらに、片岡草、薄雪草、長之助草、ちんぐるまなどなど、貴重な高山植物の大群落が点々として、春夏、秋、絶え間なく色とりどりの花苑をなし、壮麗偉観飽くことを知らぬ断崖絶壁と、なだらかな山容が織り成す景観は、ソ連の不法占拠が解決して、日本国土として戻ってくるその日からは、世界的な周遊路線に組み入れられ得るものと断腸の憶いに沈む。私をして四十四年間にわたって育み、いたわって呉れた彼女：色丹島！、女神のようなたたずまいの色丹島、今の哀れさ！言うなれば終戦時のさらわれっ児、戦後処理期の里子めく様相を見て、美女薄命に擬した本文題名の所以なのでもある。

さればこそ忘れ得ぬ過ぐる日、昭和二十年（一九四五年）九月一日の早暁、未だ真夏の朝の感じが深い清浄な海辺の喰う空気をふるわすように、裏山山頂の女子青年監視哨から、前方アトイヤ海峡に払暁ほのかに望見された黒煙三条が、おもむろに船体を拡大しながら接近しつつあり、おそらくソ連の進駐艦艇であろう」と報じ続けてくる午前七時過ぎ、前夜に入港して荷揚げを終えていた色丹漁業会所有の漁獲運搬船「第二長栄丸」（四十五トン級六十馬力付機帆船、船長吉野吉勝氏）、乗客十数名を乗せ、エンジン音を漂わせながら役場下の陸軍棧橋を離れ出たのも予定の出航であった。

この船便は、終戦後の人心動揺を取り鎮めるため、道本庁や根

室支庁当局の指示を仰ぎに島外出張していた梅原衛村長が、乗船帰任した、その一夜明けの朝でもあった。

更にその前々日の八月三十日には、北方軍統監札幌本隊命で、即日現地除隊になった郷土軍特別守備隊（得能源治中尉隊長）の幹部構成員であった三軍曹のうちの行動派、家次正吉（雄別炭山栄町在住）氏を筆頭に、村元、堀川両軍曹ともども私の家の長女で女子監視哨長でもあったノブ子、根室営林区署色丹保護区駐在員でチャキチャキの国士型タイプだった石森喜市氏の夫人などと共に、帰郷や本土疎開準備の旅行に乗船していたのであったが、シヤコタン港外に出ぬうちに鉢合わせの高速ソ連駆逐艦に接舷され、乗り移って来た据銃兵たちの峻烈な設問に逢ったそうである。

まず「お前たちの島にアメリカ兵が入って来ていないか？」「船内乗船者に腹切り（刀の意味）を持っている軍人はいないか？」「婦女子は乗船しているか？」などと片言の問答が数分を出ぬうちに、長栄丸のマストには大きく真っ赤なソ連国旗が掲げられ、操舵室に侵入してきた兵たちによって、本艦三千トン級とも覚しき輸送艦のあとに追尾を命じられて逆航し、港内捕鯨場前の錨地に投錨を指示され、捕獲監禁されたのであった。

この長栄丸の捕獲事態こそが北方領域での拿捕第一号である。ちょうどその時、来航した捕鯨場棧橋脇に繋留していた漁船チボイ丸も、あわや拿捕第二号にされようとしたのを、咄嗟に機転をきかし、ソ兵の身振り手真似で求める腕時計や万年筆を身代わり肩代わりに当て、惶惶としてチボイ部落へ逃れ去った要領よさも

後の語り草となった。

この日、色丹に上陸したソ連兵力は、野砲、山砲、重軽機関銃隊、輜重隊で約六百名、おそらく樺太で掠奪した戦利物資なのであろうが、実に美事な優秀な軍輓馬七十余頭と糧秣あまたを揚陸するのも、舳を棧橋ぞいに砂っぱらに突っ込むように乗り上げ、揚陸板を下ろし終えると、あつという間に上陸隊列は部落中央の無線局鉄塔尖端に馬鹿でっかい赤旗を揚げ、更に直進散開して、裏山一帯は山砲と重機関銃を擬したソ連兵の占拠基盤と化し去った。

その睥睨鳥観する陣形のすさまじさは、全くは戦闘形態的な不気味さを「緊張」に一変し果てたのであった。その真下に我が家があり、隣り合う無線電信局、小学校、漁業会事務所などがひしめき合う部落中心部である。湾内には幾箇所にも赤旗がはためき立ち、村民は只ただ目顔と低音で、おののく不安さを語り合うばかりの第一日ではあった。

以上は筆者が当日この眼で見据えた偽りも誇張もない実録なのである。

一方わが村の治安発令本部とも言うべき村役場は、その真下脇の陸軍棧橋添いの渚ぎわに、乗り上げるように接岸した駆逐艇らしい一方の小型艇の、一小部隊に付随して来た政治部員によって逸早く占領され、有無を言わさぬソ連軍からの令達を、部落中へ触れ回らされた。しかもそれは、午前中に隅なく湾内の戸々に行き渡ったほど迅速疾風のなものだった。曰く

1 島内の治安は日本軍隊に委ねる

2 私有財産は認める

3 婦女子の名誉は尊重する

4 日没後、日の出前の外出は禁止するであつた。

比較的、役場所在地に近接していた私の家に、ダイヤル式軽機関銃を小脇にした兵二名に付き添われて、梅原村長がやって来たのは午後間もない頃、「あんたの処に猟銃がある筈なので弾薬と共に全部提出して上げて欲しい。村内の全ての銃と剣は取り上げになるが、村民に軽拳せぬよう慰撫に尽くして下さい。」と言いついて、追い立てられるように連れ去られて行く姿に胸の塞がる思いであつた。

さて、それからが大変だ。本土へ疎開し損ねた長女ノブ子は、奥座敷で病人を装って、薬瓶など仰々しく枕頭に並べ立てて床中にもぐり込んでいたが、その部屋を次つぎと、掠奪廻りする靴履きのソ連兵たちがノシノシと荒し廻る。子も親も只だおびえているばかりだ。言葉が全然通じないのでは、はらはらして見守るだけだ。でも、あの場合の、この病臥擬装は奏功していたと思えるのだった。

各戸とも婦女子への案じようは、ただ事ではなかった。戦い終わったというのに、これから先、どう変転するのか。ソ連兵による不慮の人災的悲惨事が醸し出されるのか、家それぞれの工夫が真剣に考慮される事態、急なるのは当然である。

穴澗の大川信次郎さんは目みえよき姉妹の娘さん二人にかますを冠せて、庭の端っこのカムロ（作りつけ上下寝台）の屋根裏近くに宙づりにした柵に隠していた話を後に聞かされたが、嘘のような本当の苦勞と沈痛が続いた幾夜かではあった。

でも路上で行き逢うソ連兵は、なかなかの愛嬌ぶりを振りまいていたし、手真似や身振りを交えて「この島は、おまえ達のものだから近いうちにいなくなる。おまえたちヤポンスキーとは仲よしになって、この次に、我々はアメリカ兵をやつつけるんだ」と豪語するのでもあった。日本兵と著しく異なっていて不可解だったのは、兵同志は勿論、将校に行き逢っても決して敬礼らしい動作がない。

よくよくの重要用務の報告が受訓らしい折に、何回かの挙手礼を見かけたことはあるにはあったが。

とにかく戦争によって、たつた一つのわが命を、いま失うのか、幾日を生きて支えゆけるのか、地獄絵図の真っ直中でも、日本兵たちが、あの虚礼めく厳格な敬礼を幾十度となくさせられる一日の量だけでも、精神的疲労は絶大だっただろうと今更に嘆息されるほどで、近隣目撃者たちの述懐も聞かれた。

図体だけは普通兵ほどに見える幼年兵が随分と混じり合っただけに見えるが、野外炊事などのあとと照りつける炎天のもと、路傍に二、三尺ほどの板っ切れを尻に敷いただけの簡便さで、寸刻の間の恍惚境を求めて夢路を辿りつつ休養している様子にも打たれるものがあった。

この二つの例示からも伺えるように、ソ連軍が広漠果てしない野戦の場に抜群の戦力ありとの定評もうなづけるなあと、観じつつ、慌ただしくも四、五日ほどが過ぎ去ってゆくのであった。

僅々五日間の日々は平時の幾十倍もの早さで、人心の動揺三千八百余名と言われた駐屯の土井定七少将麾下の混成旅団の武装解除は、あっさり片付いた。

進駐第一日目の午後、我が軍使の大浜大隊長は幕僚数名を伴い、シヤコタン村役場内で彼我顛倒の水師營的会見となったが、勿論こちらは丸腰の軍装である。

主任軍使の大浜氏は私とは顔馴染みだった。その時一行に加わっていた司令部付下士官、本道寿都町出身の越戸景三曹長が、駆け足で接触会見の席用にコーヒー茶碗セットを借りに來宅していたことを、帰郷の数年後、過然の第一信で、あの時の借用品を返す余裕のなかった詫びを書き送って來たことで知ったが、そんなこともあったかなあと急には思い出せず仕舞だった。後日譚は、さておき降伏評定は円満裡、簡単に片付いたそう。まず

1 土井本隊は、そのまま穴澗兵舎で全員待機する。

2 志発、水晶、多楽島に派出されている日本兵収容のため、陸軍高速艇で日本将校が誘導案内して二日朝渡航し、翌三日中に穴澗に集結せしむる。

3 シヤコタン部落に残留したままの陸軍病院の麻生国雄隊長以下、鳩隊、通信隊全員は、二日朝に現地で武装解除して、穴澗本隊に合流のため、ソ連側の押送に従う。

など、まことに迅速な処断と運び方であった。

一方、住民側ではノトロの荒俣正一氏、山田栄作氏両家が近隣の数世帯を包容して脱島する構えというし、相見崎では井田磯吉さんが一家を挙げて脱出を計画中と伝わり、イモモシリでは不破順作さんが近隣世帯の請を入れ乗船余力を当て、岩崎義尾さんと島倉彦一さん一家がおのおの単船脱出の予定と、不破さん直接の耳打ちであった。

ノトロ情報は汗しづくの乗馬で乗りつけてきた佐々木昇さんが、娘二人が心配の種で隣家の山田栄作さんの漁船に便乗を特約した、あんたも娘さんを連れてノトロまで潜行すべきだ”などと懇切な勧告だった。

不破氏が情報をもたらした時には、ご両親とご内儀は志発島まで疎開済みだと語られ、あんたが希望されるなら二、三人は便乗させて上げれる、と確約して呉れる有りがたさであった。

そこで今夜宵の口に脱出という六日午後、早目に長女ノブ子私のダブダブ服を差し上げて着せていた家次氏に同行させ、さて乗馬を、いつもの山に追い出しに、駅通馬を寸借して探せど探せど出合わず、でも幸いなことに、その数日前、土沢すみさんが売ってもよいという繁殖兼用の老乗馬を言い値の八百円即金で勝つておいたのが見つかり、これに駄鞍を置いて出立の夕暮れを待っている処へ、根室の空襲で一物もなく焼き出され、懇意先である駐在巡査の小野寺運治さんの本署出頭の帰村に伴われて来ていた根室の歯科医の福井茂氏から、何とか一緒に乗船させてほしいと

の申入れがあり、それではとにかく余裕の如何は行つてからのことにして体当たりする外ないが馬はない、徒歩で行けるなら先発するようにと街道口へ急ぎたててやったのが、やがて色青ざめて戻つて来て曰く、「その奥の街道登り口にソ連歩哨が居て銃で押し返された。あきらめます。」とのこと。

では、と言っても私の人馬脱出姿も当然押し戻しが定運悪ければ射殺もあり得ると懸念されるので、迂回路チボイ街道口にと馬首六十度転向し、部落東側の山端から用心深くチボイ街道入りをする。イネモシリへは常用直路二里十二町（十キロ）余。それをチボイ、トイロ路経由では四里（十六キロ）余、未開難路の然も暗夜行動だ。

チボイ山頂路から勝手知つたる峰伝いにトイロ部落へ降りる尾根附近で、既にソ連兵の掌握しているチボイ灯台光芒の旋回照射を受ける。真昼間のように照らし出される我が姿を、その都度、樹林の中に隠し入れる馬上の我が焦燥二時間半。辿り到れば船は既にエンジンをかけ、もやいを放つて、あわや棧橋を離れんとする瀬戸際であり、一瞬時の乗りつけではあった。

かくて、昆布白岬を離れる頃は風浪いやが上にも激しさを加えた払暁、多楽水道を横波をかぶりかぶり連繋進航の大小二隻。不破ご兄弟交ごもの操船で乗り切ったあと、志発沖を沿岸に沿って進航するうちに、無線鉄塔上に赤旗へんぼとなびいているのが見えてきた。

不破君の「入港してゆく船に狙撃はしないだろう。兎にかく父

母と妻子を收容しての根室向けだ。」と言われる、その口許は真一文字に引締まり、舵を握る両の腕には全身の力がかかっているように見える。船は既に漁屋の見てる浜辺近くに、エンジンをかけっ放しのまま停止状態だ。渚側から小舟で連絡し、一回目が終わろうとした頃、ソ連兵二名があらわれて、駆け足姿で迫って来た。

決断は、すぐであつた。沖合へ向けて、向かい風と小波の浪しぶきを引つかぶりながら、エンジン満開のフルスピードで危機の脱出をはかった。その後を、砂浜に腰を据えて撃つソ連兵の連射連発が「ダダダ、ダッ」と火を吹き続けた。

私も家次君も甲板に出ていたので、とっさに甲板上に、うつ伏せになったが、瞬間、生死の境い目に落ち込んだと感じたものである。

それから約五時間、やっとの思いで（根室町市街地の）弥生町岸壁に二隻を寄せた安堵の中で、曳航されていたあと船のブリッチと操舵室及びその両舷の重油入りドラム缶が、十数カ所被弾しているのを見て、今更のように背筋が冷えるのであつた。

あとの話では、不破氏は、すぐその夜のうちに、ご両親と妻女を引き取るため、ソ連兵の虚を衝くように折り返し志発島に潜航し、無事救出に成功されたのであつた。

根室上陸後の私は、取り敢えず親戚方の万年家へ長女と家次氏を寛かせ、島の警備団長とシヤコタン部落会長であり、全島の連合部落会長である責任上から警察署と根室支庁に出頭し、ソ連軍

の色丹進駐振りの第一報を伝えたのだが、戦災で全町の八割近くが焼き払われて、まだ五十日目の根室では、警察署でも全くのどこ吹く千島の風か位の応対振りであつた。

よそ事どころではないんだという面接者側の面持ち、こちらも心急がれるまま何と申す方に言上申したのかも全く記憶に止めるようともせぬ馬鹿ばかりさで退出した。幸いにも乗車券は入手来たし、まずは止宿先で一夜の安眠。翌早朝、長女を伴い小樽へと向かう。家次氏とは釧路駅ホームと車内からの窓越しに数十分間打ち沈んで相対したが、別離の寂りよう感は、まことにやるせなく記憶の底にこびりついており、無言勝ちな三人三様の虚脱のさまたつたと言える。

さて小樽では独りで居る姉、笹谷ミヤ宅へ辿りつく。亡き実母でもあるかのように慕いつづけている姉の、その日の迎え入れる挨拶の辞は、いささかならず私の怖れ戸惑うべき意のものだった。

「あんた達も、やっぱり引揚者になって仕舞ったんだねえ!?」
可哀想!!

今にして憶えば、樺太や朝鮮、満州から引っこりなしの引揚者転入に、街ぐるみ大童わだった敗戦の直前直後の目まぐるしい様相が、ずばりの直感となつて口を突いて出たものだったらしい。

しかし私は長女を当分置いて貰うことと、数日滞在させて貰つて道庁への色丹報告を済ませ、帰島のつもりであることなどを手短かに物語るばかりなので、姉のげげんそうな顔は、なかなかほころびないのであつた。

それも道理、一人息子の五郎君はメレオン島飢餓部隊の生き残りとして、その数日前に軍団ぐるみ米船によって帰郷するという情報は伝えられているとはいえ、帰って来る者の健康状態やら離れ小島住まいの食糧事情など、家族も不安は南方も北方も変わりがある筈はない、必ず飢えているであろうと想像する故からであつた。

何は兎もあれ、一島一村の警防団長の職にある身で出島して来ている限り、道庁内の関係部課に色丹島へのソ連軍進駐の実情を報告しておく義務があると、翌午前に参庁、まず警防課へ、そして地方課へ廻つたが、千島のソ連軍進駐状況の初報は貴重である。

対処する諸案の基調を生み出すべきもの故に、根室支庁から大矢第一課長を呼ぶことにする。出先機関の責任者を交えて詳細を承りたいとのこと、滞留方の要請を受けただけで第一日目を終え、その後、小樽から日参して待てど暮らせど根室支庁の責任者が出てこない。業を虞やしたのは当然。十日間を空にした私もだったが道側も止むを得ぬということで、たしか中川某と言われた、その方に申し述べて記録を残していくようにと命じられ、半日を相対して、こまやかに申し上げ、且つは設問にもお答えしたのであつた。

その後顧みて、かような待ちぼうけそのものも、全く空しいものでもなかったようである。刻々と変わりゆく四囲の状態は、既に厚木飛行場に降り立ったマッカーサー日本進駐総司令官の矢つぎ早な占領行政展開の中で、敗戦した日本人が世帯ぐるみ生を全

うするには、まずもって農村地帯入りすることが絶対の必須条件と私にも看取することが出来た。

道庁での報告記録済という責任を果たした翌日、色丹駐屯旅団司令部付の上等兵であつた高田昇氏を頼りに、早速、三笠市（市来知）へ廻つて見た。

旅団の本土移動準備先発隊要員十数名の中の一員として、八月十九日に穴澗出港の最終陸軍輸送船団の機帆船便で出島し、根室町に滞在数日のあと、そのまま復員帰郷という数少ない幸運に恵まれた高田昇氏のご両親のお宅に数日滞在し、身に余るご一家の厚意で、まずは鹿児島前線に駐屯待機していた筈の長男敏夫の帰郷受け入れや、上京遊学中のままである次女恭子の卒業後の預け先としてのご快諾条件は、農作をお手伝いして貰いながらというご了承を得て辞去し、根室に戻つて来たのであつたが、もう月も代わつて十月初旬になっているのに驚いたのは、私自身ならぬ荒俣、不破ご両家の面々だった。

というのは、ソ連軍進駐後の島内事情は、まことに憂うべき様相を呈し、とてもとても永住し得る淨地ではあり得ない状態に陥つたと推察され、諸島在住者の脱出は引きも切らず、就中色丹島ノトロ、イネモシリ周辺は、この不破、荒俣ご両家によって、なおも何回かの、命がけの強行潜入しての救出脱島が真剣に考慮されれば実行もされつつあつたのであつた。

それ故に不破染太郎さん、志てさん老ご夫妻は、むきつけて曰く「小泉さん、どこでボヤボヤしてたんです。一刻も早く母さん

（妻ヨシのこと）だけは脱島疎開させねば!!そして若しあんたが帰島したとしたら、その日のうちにソ連兵によって拉致されてチヨロマ入りは間違いない」と言うのであった。

折も折、九月一日、ソ連軍船に拿捕されて、同軍の使役に作動させられていた色丹漁業会所有の第二長栄丸船長、吉野吉勝氏が同じ状態下の国後航路で拿捕されて同憂同苦の使役中だった梅谷回漕店所属の梅丸船長、本吉藤次郎さん等と、深夜のシヤコタン港内停泊中に、同乗のソ連側監視兵二名をアルコール攻めにし、使役漁船で荒俣氏所有の伊勢丸を隠密裡に奪還して、乗り逃げして来ており、一方、復員されていた中川庄平氏は、養家十文字屋こと太田忍氏と同棲中の実母ご一家救出のため奔走中であり、更には集団脱島を企画中と言う在島チボイ部落会長、米谷長市氏の特使格、友野金治君等の強引な要請もあって、不破家ご両親のご進言に促い、居残っている家内ヨシを脱島せしめることの計画に立ち上がらざるを得ない状況下に引きずり込まれた。しかも、この決行は綿密迅速な決断を必要とする危機感を伴って迫っていた。

無報酬の参謀格の役割を不破順作氏を買って出てくれた。潜航船団長は吉野吉勝君が引き受けてくれるというばかりか、蛇の道の蛇ならぬ氏は、中型機帆船幸祐丸（三十トン）が買収出来そうだと提議してもらった。行動派の中川庄平氏とともに吉野、小泉の三者平等、現金出資で約三万八千円で買収成立。

幾日かにおいて野付漁業会備船明けの興隆丸（二十トン）の乗

員付チャーター契約も成立した。

不破ご一家の献身的な援助で、その所有漁船、共栄丸も乗員付で応諾していただき、三隻編成の船団は出来上がったのである。

潜航上、絶対安全を期しての機関調整等の諸準備に、十数日は慎重に費やされた。

この間、我が家の陸軍歩兵伍長肩書の長男敏夫は十月十日午後根室駅着、丸腰の軍服姿に行囊を背負うて帰郷し、私の止宿先の万年家へ辿って来た。

また帰郷除隊で根室まで戻り、無謀とも見える自力渡航を考え込んでいた飯作幸勇君は、志発島へ潜航する船便に便乗し、同島で伝馬船一隻を購入し取って、檣櫓ただ一挺で若き我が腕力に物を言わせようと、まさに非常時ならではの、急潮流の多楽水道一直横断を含む八十余キロ、色丹島南岸トマリ港の自己の前浜まで、昼夜二十余時間ぶつとうしの押し櫓一念で渡海を達成する偉丈夫振りを発揮し、一家救出、脱島の迅速実現という離れ業を成し遂げて、海のますらお勇者譚りとして島民方の大賛詞を博したのもあった。

この飯作家は隣家の岡田弥之助さんと協合して同家漁船での脱出であったが、おまけ話が附随するので併せて綴っておく。

昭和十八年（一九四三年）春（四月中旬）、漂う流水原を小型漁船団十数隻に分乗して、シヤコタン港口とアナマ港外に危くも奇跡的な氷上渡徒渉上陸に成功した土井定七部隊大浜大隊所属の准尉さんに、松田?という豪傑風のガムシヤラさんがおり、時折、

批判事象を展開されるのを洩れ聞いていたが、その人が終戦の直後、脱走を企図し、転々と民泊して、九月中旬、土井部隊長以下三千五百余の混成兵員が大浜大隊一部三百名を残したまま、日本本土へ送り届けるという擬装宣撫でアナマ港からソ連の大型輸送船でシベリヤへ拉致され去ったあと、幾日かを相も変わらず部落の民家に変装逃避し続けているうちに、飯作氏等一家の脱出行に便乗して根室に上陸、直ちに札幌北辺統監部隊司令部へ出頭し、色丹本隊のソ連側による武装解除の顛末と拉致状況等を報告したというのであった。

本来ならば軍律違反者として重科罪ものであろうが、ソ連軍の千島掌握振りを、よくも齎してくれたと賞詞されたばかりか、更に急遽、根室まで戻って、その後の各島兵事状況をキャッチして来るようにと、恩賞的脱走佑助のかね合いともとれる依命のもと、飯作家や不破家、サキムイ脱出の高瀬家などを訪れて、いろいろの復命資料を集め、これ位で結構と揚言して帰札したという、嘘のような秘話を残した功名人も出来上がった。まさに日本中ドンデン返しのような事象のうち続く根千悲喜史とでも言えそうである。

特に色丹関係での次の悲惨事は是非書き留めておきたいと思うものである。

字イネモシリ在住の岩崎義尾（増毛郡別荘村字オタルマナイ出身）一家は、不破家脱出のあとを追うように、その妻子六人を我が家の小型漁船に乗せて十月下旬脱出、根室弁天島に仮寓造りも

成って、残してきた家財漁具の積み取りに潜航すべく、坂本某、児玉文吾、不破明の応援乗船を得て、十一月下旬、明皓々満月の夜半に、その第二回目の潜入が行われたが、或る種の默契のもと、穴居湾の井田磯吉漁舎内に蓄積されている筈の日本軍糧秣から白米二、三十俵をと内湾に侵入接岸するや、ソ連哨兵の狙い撃つ機関銃掃射で岩崎、児玉は船側に即死し、不破、坂本の両人は足部その他に被弾しながらも強胆適切な必死な操船操舵と、これを追跡するソ連兵乗船の漁船相見崎丸を操船する松谷朝三機関士が、とっさの機転、同胞愛で殊更の機関故障を続出させ、追跡を押さえてくれたため虎口を脱したという泣くに泣けない犠牲も出たのであった。

この実情が、北海道附属島嶼復帰懇請委員会の急速結成と、その第一次陳情文書、昭和二十年（一九四五年）十二月一日付けマツカーサー元帥宛陳情文書中の要請事象の裏付けとして、国後島泊村長を退任したばかりの沢田氏のソ連兵によるピストル射殺事件と併せて記してあることを振り返り想う時、私どもの今日の必死の北方領土復帰運動の推進力となっているものと言えるとするならば、決して空しい犬死ではなかった筈である。

赤い夕陽の中、千筵を引つかぶせてあった血染めのあの甲板…。根室日冷前の岸壁で不破順作氏が傷者の、私が死者収容の陣頭指揮者であったことも昨日のように追憶しつつの、この記述ではあるが後年、引揚げて来た方の中には、あの夜の、この悲惨事は残留同胞島民のソ連軍への密告によって引き起きたものと言ひ触ら

しもあつたが、真偽の詮索など勿論、誰も敢てしたとは聞かれなかった。

さて大分、道草を食つたが、それでは自分達の潜航船団の成果は、どうであつたのかを續いて記述しておかなければならないであらう。

晩秋としては珍しい上風の十一月某日の昼近い頃、三隻の潜航船団は県社根室金刀比羅神社下の船入り澗を出港した。

目標は翌午前零時、色丹島東突端のカモメ湾、カンバライソと、その手前のトイロ港内とに分れて投錨し、先方住人方が乗りつけて来る手舄の糧秣、乾燥苔、家財、漁具類の若干と家人を収容し、遅くとも午前二時には隠密裡に出港し、全連で一路、根室へ帰投することであつた。先方入出航時には相当の間、エンジン音響押さえと火焰を出さぬため、樽や桶、筵で煙突を覆うなどして、潜入に万全を期すよう船団長から指令された。

まさに天祐神助と歎呼し合う岸壁に迎えた第一船幸祐丸には馬野重吉氏（八雲町在住大島重吉）一族の外、藤山仁作氏、貫潤留治氏の両世帯方、第二船興隆丸では高橋桃太郎氏（落石無線用務員に就職、定年退職後、東和田の佐々木家方で死去、そのイチ婆さんは根室養老院在住中）一族、友野幸雄君（室蘭市在住）世帯を。第三船不破家漁船には鈴木喜三郎君一族十余人、浪越助次君等一族を収容するという成果であつた。折り返し潜入に踏み切つた船団長の慧眼は図星だつた。

色丹東端のチボイ灯台間近のチボイ部落十余戸を一挙、二隻に

収容、間ぱつを入れぬ脱兎作戦で退避する。錨地はイタコタン岬寄りのカモメ湾に定められていた。

まばゆく回転する一等級チボイ灯台の光芒の中を忍者行動する作戦は、難事中の難事と想像されたが、チボイ部落会長米谷長市氏の平素からの統率指揮振りも確立していただけに、各戸無事故で整然とした鮮やかな脱出であつた。収容されたのは米谷長市、石井栄吉、小梨義男、高橋勇、高橋高治、池田亀吉各氏の世帯で、食糧はもとより換金対象の名産乾海苔、海苔簀や、ストープ、煙筒類、炊事用具、畳の表ござまで剥がして積み込んだし脱島疎開振りには、如何にも鮮やかなものであつた。勿論、入船を確信して事前に対応計画が練りに練られていた綿密な行動であつたからである。

当時の色丹漁業会第二事務所根室出張所の首班は、戦時下の命令で漁業会長に任命されてた。

西井諦晏氏（前色丹村長、根室市本町、海産商、現根室市選挙管理委員長）統率の下に旧留別村長であられた松葉亮忠主事、中村武雄、浜田嘉市、青柳司郎、前川諸氏等の精鋭が脱島者受け入れに当たってくれて手際よく、そちこちにある軍の壕舎跡などの借り上げ手続きして、収容に尽くしてくれたのは有難い限りであつた。

積み荷のうちの千島海苔は一枚換価二円（現に根室地域で生産されている類似品は往時の色丹産の六十%位の大きさを市価百五十円位である）ほどであつたようだが、各戸とも脱出船賃の支払

いに当てて余りあつたとのことである。

ちなみに附記するならば、我が家の残留者の妻ヨシ（当時四十六歳）は、私の出島十日目頃に、住宅併用店舗、倉庫、牧舎ぐるみ明日中に明け渡せとのソ連将校の徴発命令で、家具や家財、商品品のあらましを、牧夫・平野繁男、美島二郎や近隣のご支援も受けて、部落外れに近い懇意先大橋米吉、タメ夫妻の居宅や海苔乾燥家屋に身柄ともども移していたので、同家次男の復員間もない二三男君（昭和二十九年（一九五四年）五月十日出漁中、道東沖合を襲った所謂五・一〇暴風雨による大量遭難で漁船ぐるみ海難死した）が、十一月三日夜半、生家一族救出のため備船浜戸丸でトイロ港に潜入した旨の急便に寝入り鼻を叩き起こされ、米吉氏の腰バンドに兵児帯をくくりつけて貰つての暗夜強行十キロ、山道を転びまろびトイロ海辺に導かれ出て、長女ノブ子の札幌嫁入り道具十個ほど（先き頃から牧夫・美島二郎君等を督し馬背でトイロ在住の寿山仁作家まで運び込んであつたもの）と共に同船に厚意の収容を得て、わが船団よりも幾日か早く脱出して来たのであつた。

同船で脱出して来たのは大橋タメ、阿部タカ（大橋家長女）、薄井信子（同次女）等一族の婦女子方で、同船の折返し便では米吉氏と甥の政数君、女婿阿部末治君等全一族と相当量の米、塩、糧秣、乾海苔、家具家財、若干の我が家の商品（味噌、醤油、雑貨類）と寝具の疎開してあつたもの一部が積み込まれて来た。残り留まつた我が家の牧夫・平野繁男、美島二郎、義弟葭川忠（昭和

和四十五年（一九七〇年）二月七日肺がんを患い死亡）一家六人などは、昭和二十二年（一九四七年）九月末、生後七日目の次男忍を抱えながらソ連船に乗せられて、樺太經由の函館上陸の大迂回、苦行の果ての同年十二月、根室へ合流した不運組（残留島民）となつたのである。

でも脱出組のみんなが幸せだったかと聞かれるならば即座に“否”と申し上げねばならない。

終戦の直前、即ち昭和二十年（一九四五年）七月十五日、街の中心部のほとんどが米軍艦載機の空爆狙撃を受け、その大火災で傷めつけられていた根室町自体がテンヤワンヤの困窮の極みにあつた状態なので、諸島脱出の引きも切らぬ受け入れと発給物資の工面に大手古擢りであつたのは当然である。

釘一本求められず、焼け跡からそれと覺しきを拾い、だましまし打ち付けるのは、よい方である。箸一箭の余力もない親戚先に一家三人もがすがりつき、弱氣のわが女房ヨシなどは、十八歳まで住みついていた生まれ故郷でありながら、“こんな不自由な気兼ねの日日なら、一層のこと島へ戻った方がよい”などと涙して愚痴る態たらくであつた。

さきに述べた第二次潜入でソ連兵に射殺された岩崎義尾、児玉文吾両家の母子たちの苦難はもとより、一家一族を二隻の自家漁船で脱出し、ノッカマップ沖まで来ての一船転覆で、家財糧秣の大部分を失った高瀬鶴次郎君等一族も不幸な早期脱出組と言えそうである。父君与八吉氏の長患いも災いして再起にご苦勞された

のであった。

以上、愚痴っぽいことに係わり過ぎた嫌いもあるので、この辺で終戦前後の島内の混然たる様相のあらましについて、記憶を呼び起こしつつ、その概要を書き辿ってみよう。

ともあれ我が色丹島が軍政をしきれざる準戦地地帯として地域ぐるみ、いや応なしに大東亜戦に巻き込まれた初段階は昭和十八年（一九四三年）四月二十日である。

それ以前に、広東攻略の武勲に輝く部隊として知られていた土井定七旅団は、当初の守備地扨捉島へ交代して来た師団令下に直属する国後島守備隊として古釜布に転封されており、この土井部隊傘下に、編入された新たな色丹守備担当の大浜大隊が、この日に色丹入りしたのであった。

異常におそい春吹雪明けのその日は、部落のそちこちに二メートルもの吹き溜まりが散見された日本晴れの四月二十日午前、シヤコタン港口附近に八隻ほどの徴発漁船に分乗した歩兵部隊が流氷を縫うて着船し上陸した。

船足の遅い他の漁船団は流水の接岸に進路を阻まれ、ホロベツ沖合から全兵員氷上を徒歩して、アナマ港内の数民家に収容され、シヤコタンへ先着した本体への情報伝令は部落漁民に誘導されての雪中行軍で果され、まずは死海すれすれの着島に大浜大隊長（名は逸したが剛腹な方で福岡県佐賀出身）以下、統率幹部方の愁眉は開かれたのであった。

即日、主だった民家に一わ小ずつの分宿。私宅には早瀬中尉

（富山市蔵本出身）麾下の指揮班十余名、田村シゲ旅館に松田准尉等十数名と、分散宿泊は湾内シヤコタン部落のほとんど全戸にわたり、緊急振り当ても谷内田進助役（前羅臼町長）方と協議善処し、夕食時には兵隊もみな民泊先に寛ぎ得たのであった。

やがて各隊の島内守備区分も幾変遷したが、数日中に早瀬中隊の指揮班は解かれ、穴居湾基地守備とのことで出発して行った。後続の独立野砲隊はコンブウス山から岬寄りの平原一帯が恰好の調練適地であり、かつ迎撃要地と見てとり、コンブウス部落駐屯に踏み切った。

小林隊はシヤコタン湾口東側棒杭の鼻、内懐の要塞陣地にたむろし、シヤコタン港外を狙い射ちするための岩砦造り、胴門くり抜きの隠密作業隊に早替りした。

満州地区から転進して来たという、この大浜部隊査閲のために、土井旅団長が初の色丹入りしたのが、その年の夏の初めであったと記憶する。

島の天嶮要塞振りと随所良港湾に富む気候温和な色丹島に一目惚れしたらしい旅団長は、直ちに在扨捉島の浜村？師団長に要請して旅団本部を色丹島に移し、国後島全島を旅団に隷属する大隊の守備地にするに軍上層部の断が下るや、その年の初秋早く転駐して来た上に、混成諸部隊も増強されてゆき、旅団長も定時上進ではあったろうが少将に栄進されたのであった。

無線通信隊、鳩隊、軍犬、郵便班は勿論、麻生国雄軍医を長とする陸軍野戦病院分隊も扨捉島より分派されて来て、壕舎病棟数

棟を極寒を排して築造するなど、昭和二十年（一九四五年）までに一島軍化の様相は、すざまじい進展を示すのであった。

米潜水艦に本土との連絡航路を遮断されても、四年間は三千八百名の軍兵を支え得るとする糧秣としては、野積みされた米四万俵の大山や、甘味品、医薬品はもとより、原地色丹で崖発的に強制購買された軍馬八十余頭（購買官は択捉師団小田島獣医大尉で根室市弥生町出身。わが家の老乗馬が旅団長の常用馬に買上げになったのを含めて十六頭もの繁殖優牝が召し上げられ、同業同類の方々とともにうんざりしたものだ。……）など、まさに軍天国さまであった。兵の死亡は、履き馴れないスキーのため、の伝令凍死者が戦死に扱われていたことなども含めて、大半が戦病死であった。

一方、海軍では昭和十五年（一九四〇年）頃、軍事志操注入訓練を兼ねたらしい非常呼集で、大湊要港部に参向させられた色丹国民学校長の植木寿久（札幌市発寒在住、発寒幼稚園長）氏が、日露戦争時にシヤコタン岬山頂に敵艦船監視の望楼があったと故事を披歴して、斜古丹山（標高四百十三メートル）頂上に海軍望楼を設置すべきであると進言したことに端を発し、昭和十七年（一九四二年）十月十日、薄井兼松一等兵曹と下士官一名、兵三名が特派されて来て、全島民の荷揚げ奉仕労力で、同年十一月末、鉄筋コンクリート造りの望楼が完成し、潜探訪の兵員勤務が始まった。昭和十九年（一九四四年）五月十一日からは藤田兵曹長指揮下の兵員二十余名の交代屯所として、私が亡高木由次郎氏から

買い取ってあった斜古丹川ほとりの店舗併用家屋が活用された。

シヤコタン西岬台上の海軍気象観測所の鉄筋コンクリート建て自家発電式で、数少ない明暗々たる庁舎振りは、海軍の軍費潤沢さの現われでもあったのだろうか。

無国籍者に転落させられて、昭和三十五年（一九六〇年）釧路家裁に出所手続きをした就籍最終者である伊野武久君の亡父庄太郎さんは、この観測所用務員に徴用されて終戦を迎えた。

このような推移変転を辿りながら、根室駐屯熊部隊の守備管区であった水晶、志発、勇留、秋勇留、多楽の五島嶼までもが、択捉島守備師団令下の島域となっていたことが、終戦時、棚ぼた式にソ連軍の強慾な浸透行為に便宜し、嫌も応もない併呑占拠事態を招き込んだことになるのである。

われ等の千島、祖父三百年の楽土択捉、国後、色丹、齒舞諸島に軍政は行われていなかった。二級町村制は厳然として、薬取、紗那、留別、留夜別、泊、色丹の六カ村と、半島に本村のあった齒舞村とともに根室支庁地方課管下であったのだ。

日本に残された北海道本島とは不離一体の国土であるものをだ！？

無条件降伏そのものは軍国日本の壊滅と、民主国日本の発念と再起を促しはした。しかし理不尽と、勝者横暴の牙に引っかけられたままの祖父開拓のこの島々の平和解決は、正常な早期処理を必要とする重要課題であるべき筈のものである。

我ら等の先覚者、故安藤石典氏の非凡な明智と達観は終戦のそ

の日から、この如き信念に燃えたのであった。

昭和二十年（一九四五年）十二月一日付、日本本土占領軍総司令官マッカーサー元帥宛の陳情書が、私たち島民と根室在住の有識者方に訴え示された悲憤の第一書だったのだ!! 敗れたりとは言え、堂々と再起挽回を希求すべく、一致邁進をと促された熱涙滲みるものだったといえる。

昭和二十一年（一九四六年）八月六日朝、根室駅頭に勢揃いした陳情上京第一陣は安藤町長主導のもと、川端元治根室漁業会長、田村大三齒舞漁業会長、国後代表としては山下亮輔氏の推挙した加藤豊次郎氏、色丹代表としての筆者小泉秀吉。

この陳情団の費用は根室齒舞両漁業会からの一時借入金で賄い、陳情主体は北海道附属島嶼復帰懇請委員会（事務所齒舞漁協会根室支所内）、事務担当者の竹脇昭一郎氏が鞍持ち格のお世話役、道からは根室とは、ご縁の深い小林信三氏が誘導役で同行して下さったが、その詳細は、またの機会に譲り、このご委託物語りの稿を閉じる。

元色丹村 雑貨商経営

千島齒舞諸島居住者連盟根室支部長

現住所 根室市花咲港六六の五



色丹島 チボイ湾内 昭和12年

公益社団法人 千島齒舞諸島居住者連盟
戦前の北方四島写真収録集より



屍はただのムシロの上に

伴 為 信

根室市が北方領土における終戦前後の様子の記録集を発売するに当たり、生きた歴史の証言者として執筆するようにとの事で、大変責任を感じたのですが、北方領土は一日も早く返還されるべきものでありますし、私の記憶がその趣旨に一片なりと世論の喚起に役立つものであるならば身に余る光栄と考え、ここに当時の私と共に体験された留夜別の皆さんのためにも、そして私の記憶が一つ一つ大きな輪となって、体験者へ、そして体験者から国民の皆さんへと、この運動が実りあるものに発刊の目的が達せられん事を念じながら、指定された項目をうめてまいります。

終戦時の治安状況

昭和二十年（一九四五年）八月十五日、思い出の深い、所謂大東亜戦争終結の日であるが、この日は当時、国後島留夜別村白糠泊におかれてあった陸軍大隊本部の命令で、留夜別乳呑路国民学校に、大隊長の松野少佐はじめ、副官ほか将校数人、民間側からは国後警察署の佐藤署長ほか巡查部長、留夜別村警防団の佐々木

団長と藤田副団長、留夜別在郷軍人分会の小杉分会長、乳呑路国民学校長、郵便局の中村局長、漁業組、隣組連合会長、村議会の山下議長、留夜別村役場から私ほか職員数十名が参集していた。

午前九時、松野大隊長から当時の戦況について、説明を受けている最中である。突如一人の兵士が慌ただしく大隊長に面会を乞いに来た。何事か耳打ちしているうちに大隊長は一時退席する旨を告げて去られた。二時間ほどして再び戻り、おもむろに終戦になったことを告げられた。

この時、一瞬騒然となった。

参集者は、それぞれの部署に戻ったが、一時は只、呆然とするのみであった。

終戦を聞きつけた住民は、わんさと役場に押しかけてくる。しかし瞬時は何の措置をとる事も出来なかった。ラジオで聞いたか、流言蜚語か住民の中にはソ連兵が上陸して来るそうだから、ぐづぐづしておれないとせきたてる者も出てきた。

松尾大隊長に面会して、住民の食糧窮迫について話した。

大隊長いわく「軍と住民の三年分の食糧は貯えてあるから心配

はないが、来る九月二日にソ連兵が上陸することになっているので、その時には諸物資、兵隊の人員等を帳簿と対照するので、その時においては食糧は勿論、兵隊も一戸に五人くらい用心棒として置いてもらいなさい、そして産業に従事させてほしい」とのことであつた。意外な事に、ほくほく顔で戻つたものの…。

さて住民は早くもソ連兵の上陸が確実と知って、またまた村中は騒然となつた。しかしソ連兵上陸の点については、役場としても疑心暗鬼であつた。

なぜならば昭和十六年（一九四一年）四月十三日、モスクワにおいて日ソ中立条約が締結されて、しかも五カ年の有効期間内であるという事実であつた。

なのに一方的にこれを破棄し、占領してくるとは全くけしからん国だ、鬼畜に等しい国柄だと、住民はじめ罵倒して憤懣やるかたない情勢であつた。だが村内の治安は保たれていた。

そこで島の所属について当時の道庁長官宛に打電したのであるが、その結果、「国後島は日本の領土なり、貴職はじめ、住民は最後まで敢闘されたい」との返電が村長宛に届いた。

この電文によつて、本土に出ていく住民の足止めにもしたが、とうとう九月二日が来て、まさしくソ連兵は国後島泊村管内の古釜布港から今朝、上陸したと古釜布局から役場に電話連絡が入つた。職員は息をのむ思いで机に向かつていたが、午前の十一時頃であつた。役場管内にある植内村医診療所の村医からの電話で「今、ソ連兵が診療所に来て家内が強姦されようとしている。こ

の責任を村長、どうとるのか」と怒り呼んできた。

この問題について後日調べたところ、日本の婦人が着ている下着の赤いのが、大変、ソ連兵には珍しいので、着物をまくつてみようとしたらしい。言葉は通じない。こんな事から誤解した事と判明して一笑した事もあつた。

ソ連軍の進駐状況

ソ連軍の進駐状況は、上陸地、あるいは進駐した村によつて状況は異なると思うが…。

九月三日午前十時頃、ソ連兵は、ぼろ服に、しんげん袋と銃をかついで、女の兵隊も混じつて白糠泊の方向に歩いて行くのが見えた。そのうちにジープも三台通つて行つたが、これまで自動車の通つた事もない道路なのでジープは谷間に横転していた。

翌四日も五日も、ちりぢり、ばらばらと兵隊の行く姿が続いていた。

九月六日午前十一時頃、突然、ソ連の将校級の連中五名が役場に入つて来た。

庁内を歩きまわり事務所の金庫を開くようにと、通訳を通じて話した。

村長が私達は役場の仕事をしていてもよいかと聞くと、仕事の内容を問われた。兵事の事は言わず、住民の戸籍や産業関係の仕事であると答えた。すると「村の人のためにそのまま仕事を続

けて下さい」といった。

その時ちょうど居合わせた巡査部長も、そのまま仕事を続けてよいか聞いたたら、通訳が警察の方は「そのままでよいです」と答えて去ったが、二十分程して使いの者が来て警察の部長さんに「兵隊がちよつと来て下さい、すぐそこにいるから」との事で、部長は出て行つたが、そのまま古釜布方面に連れ去られた模様であつた。

村では、その家族について種々慰藉に努めた。

ソ連兵が上陸してまもなく、電話線は切断され、村中は井戸の中の蛙同様で、くら闇の生活が続いた。

九月十日頃であつた。私と佐々木警防団長二人が、乗馬で白糠泊の大隊本部を慰問旁々出かけた。

三十五キロメートル程の所にさしかかると、突如彼方の山中より乗馬のソ連兵二人が駆けて来た。なに事を言うが通じない。下馬すると私達の鞍やくつわを自分の馬につけ、そのまま山中へ消えていった。私達は止むなく徒歩で白糠泊のはずれ五キロメートルのところまで、夕刻にたどり着いた。

村はずれで日本軍の様子を聞いたら、その主人は涙を流して語つた。「大型船が入港すると間もなく上陸用舟艇でソ連兵が上陸した。海岸には日本の兵隊が整列して、これを迎えていたが、直ちに武装解除されて海岸近くの丘に全員円陣を作り、その周囲をソ連兵が歩哨に立つて日本軍の酒をラッパ飲みしているあの姿は涙なくしては見られない。昼夜あの状態におかれています」。

その話を聞いたたり、現実に見た私達の心中たるや、張り裂けんばかりの憎しみに燃えた。九月十五日頃であつたと思う、ソ連の将校が十人余りと、兵隊五十人程度が役場所在地に駐留するらしく、民家を借りたいとの事であつた。当時、乳吞路郵便局長中村三郎氏の別宅で三十坪余りの空き家があり、それを借り受ける事にした。勿論、借賃等はいくゆるわけもなく占有されたのである。その後いつとはなく兵隊も将校も増員され、留夜別村管内でおよそ三百人位が駐留したと推定される。

さてこの頃から、ソ連兵が五人くらい一団となり、銃の先に着剣して、くまなく民家を訪れ、人員を調べ、奥の部屋まで土足で入り込むという有様であつた。なお兵隊たちは当時、各所にあつた防空壕を探し、日本の兵隊が隠れていないか連日搜索し廻つた。この兵隊達は、みな服やズボンのポケットに日本紙幣の二十円、五十円札束をぎつしりとつめこんでいて、これは樺太の銀行から持つて来たのだ、これをやるから、その時計をくれとか、万年筆をくれとか、道路で会うごとにねだる有様は、いかにもソ連国内の当時における物量の貧しさをさらけ出していた。

一面進駐した将校連中は、兵隊の宿舎にあたる建物の物色が始まり、少ない家族のうちには、兵隊を分宿させるよう申出があり、これの割り当てにも大変苦勞したが、また人心の動揺も、いよいよ激化するに至つた。

そちこちから住民の脱出が続出したのも、この頃からであつた。昼間はソ連兵の歩哨が厳しいので脱出は不可能であり、夜暗に

乗じて脱出を図るが、それだけに危険も伴うし、のみならず川崎船や天間船に乗って、はるか根室まで渡るのは、いうまでもなく無謀はなほだしく危険千万であった。

しかし祖父祖母の墳墓を残して、この危険を冒し、故郷を後にさせた鬼畜ソ連を恨まずにはおれなかった。

こうして脱出した者の多くは、途中で波にのまれ海底の藻屑となった事も、引揚げ後において知る事が出来たのであった。

また夜間脱出を図り、出港半ばにして兵隊の照明弾打ち上げで発見され、銃撃の的となって、海底の藻屑になったのも数知れなかった。

この頃、留夜別村漁業組合長で、島の草分けの一人であった畜産家の獄氏外十九名が発動機船で脱出したが折悪しく強風の時化にあい、根室の弁天島近くで船は転覆し、二十人の内三人だけは運もよく三番川付近に泳ぎ着いたが、残る十七人は無残にも海底の藻屑となっている。

かくして尊い人命を数知れず亡くしたのも、ソ連の野暮な占領に基因するものである。

なおまた、肉親の救出を図るため、根室からようやくにして渡りついた野呂登氏と森下参氏は、不幸にも兵隊の耳に入り、搜索を逃れて山中を駆けめぐり、幾十日となく食物もとれず潜んでいたのであるが、遂に野呂氏は発見されて処罰を受けるという状態もあり、また森下氏は遂に発見もされないが、十一月中の事として、おそらく凍死したものとみられ、洵に悲痛といわざるを得ないの

である。

一方、脱出者の空き家は将校、兵隊の宿舎にあてゐるため家屋をみんなソ連風の建物に内部改造をするのに、住民は大工に早変わりして動員されたのである。ところが人員だけの大工道具は揃うものでないのに、無理やり持つてこいと言うところに非常なつらさもあった。

相手は兵隊だが言葉は通じない。そこに仕事上の手違いが起ることもしばしばであった。

この頃、白糠泊にソ連の小部隊がおかれて村内にあるラジオ、小銃等を全部ここに持って行く事になった。そして同所に住民を集め「日本は戦争に負けた。本国にはアメリカ兵が来ているが、食糧はくれない。非常に困っている。皆さんも引揚げる事になるが、時期はわからない」以上の事を、ウスチメンコ大尉の通訳が述べて去った。

この頃、泊村管内の古釜布には、大部隊が進駐しているとの話を聞いた。

さて住民は、今後の食糧についての不安と恐怖を強く感ずるのであった。

本土との通信機関はなし、勿論、船舶の航行は不可能である。

そこで軍の労役に服さない学童や婦女子達は、毎日、山野菜の貯蔵に忙しい日を送った。路、よもぎの葉等も、ゆでて乾燥したものを沢山準備した。幸いにも神のおかげか、この年に限り数年間いたこともない牛馬の喰べる笹に実がなかったので、これを思

い切り貯えた。馬糧の燕麦より少し小粒のものであった。

この頃にソ連の民間人も姿をみせるようになり、日を追って兵隊の数も増えてきた。

風の便りには、泊村管内の東沸から西海岸の秩刈別まで約十二キロメートルと思ったが、この山中、谷間を自動車道路に開削しているとの話も耳にした。

ソ連兵や民間人が増えてきたとたんに盗みが頻発して困った。村長宅でも、ちょっと留守にした間に入られて、洋服、衣類のほとんどさらわれてしまった。

あちこちの被害の続出で、絶対に留守には出来なかった。

このような状況の中で先の見通しが全く立たなかったので、相談の結果、村や漁業組合から現金を集めて村長が本土に渡り、大型船をチャーターして、住民と引き揚げる方途を講じた。漁業組合の古源氏を伴って本土に渡る事になった。

たまたま根室から密航船が夜暗に乗り、大時化を選んでやってくるので、それと連絡を取り、ようやくにして渡る事ができた。

ところが、その後に数十回、大時化はあったがチャーター船は来ない。二年を経過して遂に船は来なかった。

村長が本土に渡って間もなく、乳呑路にソ連の役場が出来るようになった

ソ連軍政から民政への移りかわり

昭和二十年（一九四五年）の十月末と思ったが、ソ連の役場らしいものが置かれると共に、村長も置かれた。また古釜布には銀行もでき、裁判所、営林署も置かれた事がわかった。食糧配給所も古釜布に置かれたので、いよいよ民政に移ったと想像していた。日本の役場も、いつかは消滅を余儀なくされるので、重要書類は焼却し、住民の戸籍原本は箱に入れて役場近くの草むらに埋めておいた。

民政に移管されて三カ月くらい経過してから、食糧を配給するので年齢別、男女別の人員を調べて、古釜布まで持ってこいとの事になったので、私等が調査し書類を作り上げた。

しかし古釜布まで四十キロメートル余り、この道中が思いやられた。持っていく人は誰もいない。止む無く私一人、手続してパスポートを貰い出かける事にした。

恐るおそる乗馬で出かけたが、三キロメートル程行くと兵隊が何処からともなく現われ、馬から引きづりおろされる。言葉は通じない。パスポートを見せても一向に通じない。山道にかかると草むらの中から、またも出て来る有様。ほとんど四キロメートル毎に、こんな目にあわされて無念のあまり涙が頬を流れた。

こんな事で時間がかかり、目的地へは夕刻になってしまった。住民の食糧受けの大切な仕事である。ようやくにして銀行で業務を行っていることを探し当てた。

明日また来いとの事で、翌朝行ったら樺太から持ってきたと思われる当時の日本の配給資料として使われた用紙を出し、これに書いて出せとの事で、止むなく帰って再び出かけた。道中は同じ事の繰り返しである。

それから二カ月くらいしたら食糧を取りに来いとの連絡を受け、今度は佐々木警防団長と共に馬四頭を準備して出かけたが、道中前述の如くで時間を費やし、夕刻、古釜布から四キロメートル手前の近布内に着き、当時缶詰工場を経営しておられた橋本松右エ門氏宅に宿を乞い、翌日帰った。これが一カ月毎の配給だから、私はその後、毎月一人で往復していた。

昭和二十一年（一九四六年）の五月頃であったか、乳吞路にも配給所が設けられた。

この頃から、ソ連民間人と日本人労働者とが交わって林業、漁業、大工に分れて従事することを決められた。

事務を執る者も双方から出る事になり、私はこの仕事もしていたが結局、毎日出役する者の氏名とノルマを調べるのが内容である。一度登録された労働者が連日出れば何事もないが、事情あって休むと「ソ連では働かざる者は喰うべからず」と言って、直ちに食糧配給を中止するのである。限られた労働者しかないのに軍の方からは、今日は何人出せと臨時に出役者を出すと、日本人側からは、ソ連人と結託して日本人を酷使するなど噂を立てる者も出て、当時の心境たるや言語に絶する思いであった。

林業に従事するのは、毎日あの鬱蒼たる森林の中から、数百

年、数千年の年輪を持つ大木を伐採し、どんどん船積され、いずこかに搬出していたのであるが、さて、この貴重な資源の膨大な金額は当然、ソ連に賠償させるべきであると思っている。

伐採跡の措置については、日本と違い木の小枝一本もの残さずに一カ所に集めさせて焼却するので、虫の発生を防ぎ、従って樹木が良質に生育する。寿命もまた長いと言っていた。伐採跡は全く箒で掃いた如く実に立派なもので、総てソ連営林署の指揮により行動させられたのである。

漁業に従事する者は、その季節により鱈、スケソウ、鮭、鰈等であるが、四季を通じて毎朝七時に出港、午前（午後の誤記か）三時までには戻る事になっていた。

出漁に従事する者は年中決まっているが、毎朝六時までは必ず出漁者のパスポートを軍の事務所へ貰いに行くのも私の仕事の一つであった。出漁には着剣した兵隊が何人か乗船していくのが常であった。

漁獲物は全部塩蔵にして、何れかに運んでいくのである。

昔から世界三大漁場の一つと数えられた北の海域、漁族はほとんど無尽蔵に生息している。

この宝庫を理由もなくソ連に蹂躪されるとは、実に無念極まりない次第である。

民政移管と共にソ連民間人も日を追って増加し、また子どもたちも多くなった。そこで乳吞路国民学校に、ソ連学校と日本人学校を開設した。スターリンの大きい写真を教室、運動場、校舎内

外の至るところに貼り出した。

ある日、日本人の子供が、廊下に貼ってあるスターリンの写真にツバをかけたため、これを見たソ連の教師が騒ぎ立て一時間問題になったが、その子供は誰か氏名も判らなかつた。

子供同志ですら、このような喧嘩は絶え間なく起きていたので、日本人学童は段々と学校へ行かなくなつた。当時の学校長の吉川元氏も、いつともなく本土に渡つていった。

ソ連民間人が段々と増えるにつれて日本人民家にも、くまなく割り込む事になり、私宅にも夫婦と子供の三人が割り込んだ。

建て物の中は仕切つたが、人種が違ふので、はじめは気持ちが悪かつた。しかし、一年二年と板一枚隣りに寝起きしているうちには、親しみも出てきた。

ある日、私が漁獲物の処理場に行き、ノルマを調べた時、ソ連側の監督はいなかつたが、時間も迫つたし仕事を仕舞うよう話して自宅に帰つた。その後監督が現場に行つたところ、一人もおらず、既に処理場には施錠されていたので、監督は怒つて私をソ連役場から呼びに来た。ところが監督は例のウォッカを大分飲んでいて、私を怒鳴りつけた。そこには村長も私宅にいる民間人もいた。結局は私が仕事を早く仕舞わせた事に原因するが、理由を説明しても怒鳴るばかり。すると私宅のソ連人（これは日本語も少しは出来る）が、「なんだ日本人は威張っているが日露戦争の時にロスケにどんな事をした」などと私をせめるのであつた。板一枚、隣でも親しみも出てきたと思つていたが、心の底には日露戦

争時の遺恨がひそんでいる事と知つた。恐ろしい限りである。

ソ連軍政の実情

この頃のソ連軍は白糠泊に約百人くらい。乳吞路に百人くらい、植内に百人くらいのものがいた。

進駐当時から毎日、山中をかけめぐり日本軍の防空壕探しに専念していたようであつた。半年くらい後に、ソ連軍の防空壕も築設していると聞いていた。前にもふれたが、現に東沸村から秩刈別まで、谷間を専用道路として開削しているとも聞いていた。

なお私が食糧受給に古釜布通いつた時は、駐留軍本部周辺には数十門の大砲が置かれ、数台の戦車も見かけた。

その後、兵隊の数は、いつとはなく増員している情勢であつた。とにかく日本の兵隊であつた者が、おらないかと捜し廻ると共に、民家に二十代くらいの若者がいると、軍に呼び出して兵隊であるといつて責める。中には牢獄に入れて、責められた者も数々あつた。

斯くして駐留軍は、日本固有の領土たる国後島を我が物にして防空壕造りと軍用道路造りに集中し、ソ連にとつては軍事上、よほど大切らしく見えたが、住民の一人一人は、この遺恨を深く胸に秘めたに違いない。

島民引揚状況

昭和二十年（一九四五年）九月二日、ソ連兵が島に上陸以来、正式引揚までには、住民の七割は脱出していた。夜暗の暴風を利用して多く脱出したが、ソ連兵も夜暗は巡回を密にして、時折り照明弾を打ち上げるので、実弾で撃たれ、海中の藻屑となった犠牲者も数知れない程であった。

昭和二十二年（一九四七年）九月初め、突如として軍からの命令で、明日引揚げる事になったから、各自三カ月分の食糧を用意して集合するよう、場所の指定があった。私等の区域は寺に集合すること、各自の荷物は一人五十キロまでの事であった。

さあ大変、二時間以内に集結しなければならぬので実にてんやわんやの騒ぎであった。兵隊はほとんど各戸を見回りながらせきたてる。誰一人、引揚の準備をしてないので途方に暮れ、腹を立てながらも、どうにか集合した。忘れものがあつたので、再び自宅に戻ってみると既に兵隊が入り込み、家捜しの最中であつた。ソ連国民ほど盗みを好む人種はないと思つた。

役場事務を閉鎖した時、土に埋めた戸籍の原本を夜暗の隙をみて掘り出し、これを各自に持たせる手配をした。

十日を経ても、なお引揚船は入港しない。狭い寺に何十世帯も寝起きして満足の食糧とてもないし、老人や幼児は栄養もとれない。一日一日衰弱していくばかりであつた。

労務者はソ連の黒パン一食当たり三枚程当っていたが、この位

では何のたしにもならない。各家庭では、昆布やよもぎ、その中に米の持っている者は一合位を入れるが、多くは笹の実等を入れて、それをお粥にしていたのが常食であつた。

こうして労役にも屈して耐え忍んできた体であるため、若いものですら体力は全く衰え果てていた。

漸く引揚船が入港したのは、その年の十月に入ってからである。一万トンくらいのソ連貨物船であつた。それから五日程して愈々乗船開始となつたが、ソ連のいう一人五十キロの荷物など持てるはずもなし、また一人三カ月分の食糧などというが、どこに引揚げる事になるのか、まったく不明であつた。

ソ連人のいう事なす事に真実なものは何一つなかった。侮辱も甚だしいものであつた。

乗船の際、隊長が来年は北海道に行くから、また会えるといって握手を求められたが、その時はギョツとした。

乳吞路から乗船したのは三十世帯百五十人余りである。船は夜暗に乗じて島を離れ、色丹島、多楽島、志発島、水晶島に寄港して、総員千二百人くらいの引揚げであつた。

泊村役場の職員であつた伊藤春義氏や、色丹村役場の長山助役等とも船中で見かけ話した。

二、三日航行が続き、碇泊したところは樺太の真岡沖であつた。衰弱しきつていた者ばかりなので、老人幼児の中から病人が続出したが、医者はいないし洵に途方にくれた。

翌朝検疫が始まり、上陸が開始されたが、衰弱した老人、婦女

子が病人を背負い、そのほかに荷物を携えて棧橋を渡る姿こそ、涙なくしては見られない容姿であった。

行先の収容所は高台にある元真岡高等女学校であった。正規の道路は平坦であるが、わざわざ道のない草原の急な坂を登らされた。

樺太の十月中と言えば既に雪もみられる。

日照で雪はとけ、ずるずる滑って、五歩登れば十歩滑り落ちる有様で、ここでほとんど全員が泣くにも泣けない状況であった。

収容所の入口で、また検疫の注射をして、それから所持品の検閲である。ここで重要書類も島で渡した戸籍の原本も、貴重な島の写真も、みな没収されてしまった。

収容所の中は人が座って、ようやく頭の上がくるくらいの所に入られ、数段にも高く造つてあるので、梯子も備えてあった。

食事は矢張り黒パンと鯀の塩蔵したものを一匹が一人分である。ソ連人と違い、日本人は生で喰べる事はできないので、これを焼くのに、また一苦労であった。

島にいた時、各家庭の労務者はノルマに従い、いくらかのソ連紙幣は持っていたので、真岡の収容所に食べ物売りが詰めかけるのを待っていて喰う姿が、またみものであった。

三日目になると、ここでもまた若い労務者の出役を強制されて、毎日炭鉱に或いは道路補修に、木材の伐採に夫々出役する事になった。この収容所には、地元の各所からも引揚者が入ってきたが、いずれを見ても衰弱した者の姿が多く見られていた。

収容所には医者も居ないし、頼んでも来てくれないのである。

島を出てから病み続いていた者は、次から次へと死亡していった。多い時は一日に十人も死んだ。

屍は収容所の外に、ただ簗を敷いて集めてあるので、肉親が収容所の窓から両手を合わせている姿も、しばしば見受けられ涙を誘われたものである。

毎朝トラックが来て、この屍を積んで、どこかへ運んでいくのであるが本道に引揚げるまで、およそ百三十人くらいの者が死亡した。

実に例えようのない有様であった。

斯くして月日が流れ十一月二十二日と思うが、いよいよ本道へ引揚げと決まった。

木枯らし頬をさす十一月二十四日、いよいよ乗り込みとなった。引揚げ船は高倉山丸であった。多くの屍を残し悲憤に燃え、この地を後に船は一路、函館に向かった。

船中では厚生省援護課の職員、道庁の職員に迎えられ、引揚者一同に「皆様、長い間ご苦勞様でした」と言われた時に始めて郷土に渡れるという実感を覚えた。そこには種々、心あたたまる慰安の配意までがなされてあった。

しかも今後の落ち着き先、家族の氏名、年齢等、具体的な調査もなされ、行先未定の者も数々あったが、細心に相談相手となり、この開拓にも務めてくれるなど、誠に心のこもった温かい手がさしのべられていた。

入港は十一月二十六日朝と思つた。先着の引揚船もあつたため、二十八日に上陸する事になり、検疫が始められた。

また所持品の検査は二世の兵隊により行われ、終了次第、順次収容所に落ち着いた。

ここでは厚生省発行の引揚証明書も交付され、一世帯当たり二千円まで現金の交付を受けた。

収容所の内外は、引揚者世話所職員による行き先の調査やら、引揚者近親の出迎えや、訪問の人々で、ごつた返しであつた。

十一月三十日、根室本線行きの出発と決まり、駅前広場に集合していると、函館名物のいかめしを売りに来た。みんなは飛びつくように、これを買った。終戦以来、満足な米の飯を口にするのは初めてであり、三年目である。

この時の味は今も忘れられない一つである。

無償の引揚列車は、いよいよ函館駅を後にした。各駅毎に引揚者の皆様ご苦勞様でしたと書かれた幕が印象的に目に映えたのであつた。車中は近親や知人の出迎えと訪問客で通路も通れなかつた。終着駅の根室に着いたのは十二月二日午後五時頃と思う。ホームは事のほか出迎えの人が黒山になり、騒然たる状況であつた。この時の降りた引揚者は、およそ七百人であつたと思う。

同胞は、ここで別れを告げ近親を頼る者、或いは友人を頼つていく者、様々に今宵を明かすことが出来たのであるが、裸のまま引揚げさせられた同胞が、この窮迫している食糧事情の中、はたまた戦後の思潮も抜けきらない社会情勢の渦巻く中、この後をい

かにして暮らしていくか、更に茨の道を歩まなければならない悩みが既に浮かんでいたのである。

翌日、私は根室支庁を訪れ、太田岩太郎支庁長に面会して、留夜別村の残留民引揚者と同行した趣を伝えて、謝意を表して来たのである。

残留島民の状況

留夜別村の残留島民は、引揚命令の出たとき全員が引揚げたのである。留夜別村は、この引揚げが最初であり最後でもあつた。

以上述べた事は、当時を追憶してたどりたどり書いたもので、或いは前後している事柄もあると思うが、事実とは決して相違してはいないと思う。

ただ国民の一人として、ここに述べたい事はソ連が日ソ中立条約を一方的に破棄し、かつサンフランシスコ平和条約で日本が破棄した千島には全く包含されていない事が歴史上明らかなる、北海道の択捉島、国後島、色丹島、歯舞群島までも占領している事実は許されるべきでない。例えば日本が放棄した島でも、ソ連がこれを占有出来る何ものもないのである。

実に非人間的な国だと思う。こんな野蛮な国が存在する限り、世界の平和は望めないと思う。しかし日本の国土を、このような姿にしておくことはありえない。今や一億の国民一丸となり、この国土返還運動に総意を結集して、サンフランシスコ平和条約締

結の参加国に対し、政府は速やかに日本の主張する誠意を訴えて、正義の解決を図られるよう望んで止まないものである。なつかしい故郷を後にして銃弾にたおれた者も、或いは怒濤にのまれて海底の藻屑となった者も、或いは島に眠る祖先の霊も、国民の総意で取り戻すよう念願している事と信じて擲筆いたします。

元国後郡留夜別村助役

千島齒舞諸島居住者連盟根室支部事務局長

現住所 根室市宝林町



国後島 留夜別村 白糠泊市街

公益社団法人 千島齒舞諸島居住者連盟
戦前の北方四島写真収録集より



島と運命をともに

荒井辰男

終戦時の治安状況

安住の地であった国後島における住民の数は一、四二〇世帯、人口七、三七〇人（泊村四、六五〇人・留夜別村二、七二〇人）、このうち漁業関係者一、〇三八世帯五、六八〇人と推定されていた。このほか夏季出漁者、季節労働者は相当あった訳である。

気候は釧根地方と大差なかったが、冬期間は交通の便悪く流水などに襲われる関係もあって、米や味噌などの必需品は数カ月分事前に越年用として配給され、あらゆる豊かな資源に恵まれ正に楽天地であったといえる。

それがソ連の進駐によって祖先が築いた懐かしい故郷を一夜にして失ったのである。

いまだ経験のない不安と動揺のあったことは否めない事実であり、一部では金品略奪あるいは馬鈴薯その他、鶏などの食料品の被害も若干見受けられ、また目ぼしい家屋などもソ連兵に接収されるに至った。

婦女子に対する乱暴の風説が流れ、私共は懸念し、住民は深い危惧の念を抱いていたが、この種の不祥事件は一、二件くらいより聞かず、僅少であったことは幸いであったと思う。

ただ残念にも、前泊村長の沢田喜一郎氏が、昭和二十年（一九四五年）九月十日昼頃、たまたま奥さんがソ連の薯掘り作業に従事の留守に国後ウエンナイの自宅で略奪に入ったと思われるソ連兵に射殺された事件があり、夕刻に奥さんが帰られ、また私が訪れた時、家の中は相当に荒らされ、死体の発見を多少でも遅らせようとする作為関係から、色々の品物で覆って奥の部屋に運ばれてあり、見るに忍びない姿になっていた。その後、火葬場に奥さんで行ったが、当時の事情からやむを得なかったと思われるが、気の毒にも僅か三人くらいの見送りよりない状態で淋しかった。犯人は二人組と思っていたが、逃走後、間もなく逮捕され軍法会議の結果、銃殺刑に処せられたと聞いている。

このように色々と遺憾の点があったが、全体的に一応軍紀が守られていたと考えられる。

なおソ連要路に対しては住民に不安と混乱を与えないよう、食

料必需品の適正配給、物品など略奪せず買い上げること、婦女子に対して乱暴しないことなど機会あるごとに要請していたところである。

ソ連軍の進駐状況

北千島では八月十五日の終戦直後（八月十七日）、ソ連の砲撃を受け自衛戦闘が行われたようだが、南千島は極めて平穏であった。

しかし北千島の戦闘の影響によって、国後もソ連軍と一戦を交える緊迫した情勢下におかれるだろうと、白糠泊に駐屯していた松野隊長の見解によって、村上泊村長、小森留夜別村長、佐藤国後警察署長、営林署長、泊と留夜別の代表学校長、部落会長、婦人会代表、各駐屯隊長、それに私が加わり、いわゆる官民合同のメンバーで留夜別村の乳呑路学校に集まり、決戦体制に臨む態度、それと国民義勇軍を編成し荒井根室支庁国後出張所長を連合隊長に指名するなど諸種協議中、重大ニュースある旨ラジオにより知り、緊張したところ終戦の詔書であり、一時は信じられなかったが、真相であることを確認、一同声もなく切々と涙と共に記念撮影を行い、感無量で自然解散の形となり、今後は食糧増産に励もうなどを話し合っ、それぞれ任地に引き返し待機することになった。

その後、ソ連軍は九月一日、古釜布に軍艦その他六隻くらい入

港、自動車、馬匹、兵器、弾薬、糧秣など満載、推定五千名のうち二千名くらい上陸を開始のうえ、古釜布駐屯の日本軍人に対し武装解除と共に兵器、弾薬、糧秣、被服などを押収し、目ぼしい建物や家屋を接収して赤旗を随所に掲げ、このため裏山へ退避したのもあったが、留守宅はソ連兵によって若干荒らされた模様である。

しかして、古釜布に上陸したソ連兵のうち約三百名が泊村に陸行”の情報に接したが、途中より変更船便となり、船の故障で翌二日、約五十名だけが泊村に進駐して来た。

ソ連兵の進駐に当って、これを迎えるため、いかにすべきかを私共代表者で相談した点は、

●ソ連兵上陸に際しては、既に終戦の御聖断が下ったので無抵抗であること

●多数の村民で出迎えれば、ソ連軍の行動をキャッチしていたなどの嫌疑を受ける

●全く出迎えなく無視した場合、礼儀を知らないという理由で村民に迷惑がかかる

以上の観点から官民代表だけで迎えることに決定、したがって石黒隊長、村上村長、佐藤警察署長、営林署長、部落会長、荒井国後出張所長が出迎えたわけである。

ソ連は完全武装の上、不穏の空気の有無を警戒する如く慎重かつ用心深い態度で上陸し、赤旗を随所に掲げ、泊駐屯の石黒隊に至り武装解除を命じ、まず将校のみ帯刀を許し軍の倉庫より銃、

実包、糧秣、被服、その他を没収したが、一部ソ連兵は民家より金銭、時計、トランク、衣料品などを略奪したようであった。

また配給所より乳幼児用ミルクを押収、その他漁業組合から二万三千円、営林署三百円、郵便局より二万円、役場より百円くらい、それぞれ押収された。

(役場、営林署の被害が少なかったのは、略奪の事情を知り金庫に僅少の金より収納しておかなかったためによる。)

ソ連は全般的に通信機関の停止を行うほか警察署から猟銃などを押収した。なお、この日は中山旅館に泊り翌三日、石黒隊長はじめ下士官兵全員が船で古釜布に連行された。

連行に当たって軍倉庫から甘味品、煙草など若干持ち出し日本軍人に手渡したが、感謝されると共に別れる淋しさの姿が今でも胸に焼きついている。(現在、皆さん元気でおられるようで嬉しい限りである)

越えて五日朝、赤軍将校(中佐)が通訳(大尉)を従えて泊に來たが、まず役場で村内全般の事情を聴取のうえ郵便局、警察署、学校、病院、配給所、石黒隊などを巡視し、部隊倉庫より残品の被服類、配給所より米その他十トンくらいを押収し、役場で休憩後に退村した。

留夜別村に逐次状況を連絡せんとしたが、通信機関が破壊されて連絡が十分に出来なかったことは残念であった。

翌六日には赤軍約四百名が泊市街に駐屯するに至ったのである。

ソ連軍政の実情

住民は一応落ち着いたので私は九月二十日、食糧事情、通信網の緩和、航海関係、官公衛の解散に伴う職員の引揚関係、住民の産業に従事出来る状態、生活の不安一掃などについて交渉を進める意図で古釜布に赴きソ連最高指揮官に面接を求めたが、単なる儀礼的回答のみに終始した感であった。

なおその際、齒舞群島は陸地にある齒舞村役場に所属する点、あるいは色丹島、南千島の問題についても行政面から、いろいろ地図を示し話をしたが、受け入れる誠意は見られなかった。

ソ連と折衝するにあたり、ソ連語を解せる日本人通訳の派遣を申請したが実現できなかったため、行政問題や詳しい点になるとソ連側通訳は十分理解出来ず、誤解の面もあったことを残念に思っている。

たとえば北海道庁と樺太庁と混同していたようであった。したがって荒井は樺太のみならず千島においても軍に協力したと言う誤解を受け、二重の戦犯であり、しかも行政官であり国後のキャプテンでもあるので、いずれソ連本国から指示あるため覚悟して欲しい、と古釜布のお寺で引導？を渡され、三日間、警察署で軟禁される身となった。そして連絡あるまで一時帰村して良いとの通達を受けて泊村へ帰ることにしたが、途中いたる処で部落民と会い、お互いに抱き合い励まし合ったことは一生の思い出であり、忘れることのできないものであった。

歸路途中、ソ連監視兵に銃で脅かされたことも、しばしばあつて感じは良くなかったが、腹を決めていたため別に恐ろしいとは思わなかった。

しかし予定期日に帰村出来なかったため、ソ連本国へ連行されたものと、村民は心配していたようである。

古釜布から泊村に来て以来、毎日ソ連兵数名に監視され軟禁同様の連続であつた。

勿論、電話も除去され、各方面との連絡はとれず、文字通り孤立の状態におかれた。

ソ連軍政から民政への移りかわり

国後出張所、村役場、郵便局などが閉鎖され、ソ連から一方的に解散を命ぜられたので、従来の公務員は一般住民と同様の扱いを受けた。

ただ一時的に自分はソ連と住民との連絡事務などに利用されていた。

学校だけは消極的ながら役場庁舎を充当したりして多少授業が行われた。当時の先生に対する身分保障や特別の優遇措置を講ぜられたい旨、支庁長に要請しておいたが、その後の結果は判明でしなかった。

またソ連側から、十六歳以上の男女を集め選挙を行つて部落会長を決めて貰いたいとの申し入れがあつたので役場前の広場に参

集し、あらかじめ用意した用紙にそれぞれ記入させ、選出された部落会長に対してソ連側から任命することにしていたものである。選挙に当たっては留夜別村では佐々木龍助氏、泊村では梅津前部落会長を記入するよう手配しておいたので予定通り決定した。

この部落会長には特別の権限はなく、ソ連側の指示の下に住民との連絡いわゆる窓口的機関に過ぎず、主として使役の割当供出、食料品の配給などの世話をさせられた。

爾来、住民は多小の不安はあつたが、落ち着き無難の日が続いたと理解している。

部落会長選任に伴い、守備隊長命令が日本文で左記事項のとおり発せられた。

泊守備隊長命令（昭和二十年九月十六日）

部落会、隣組の指導機関を解散すること。

日本はソ連に対して降伏せるため、千島の島々はソ連の領土となりました。

ソ連の赤軍は平和の人民と戦わずして平和となりましたが、もし人民が司令官の命令に服した場合は、赤軍は総ての援助を与えます。

1 在郷軍人、地方機関、警察、役所は解散すべし。部落の財産書類は持参すべし。期間は二十日まで守備隊本部の所とす。

2 各部落人民は会長を選挙し、その会長は守備隊長の指揮の下

に各部隊の人民を指導すべし。

3 泊人民は次のことを許可す。

イ 工場、漁業、農業、木材等を許可す。

ロ 道路街路は各自の通行時間午前六時から午後八時まで許可す。

ハ 学校への通学の者、神社は午前六時から午後八時まで許可す。

4 許可出来ないこと。

イ 海岸より沖へ六哩以上、航海することは許されない。

ロ 但し六哩以上、航海するときは守備隊長の許可書を要す。

若し古釜布、白糠泊地方へ行く場合は許可を得べし。通行は午後八時から午前六時まで許さず。

ハ 守備隊長の許可なく種々の集合許さず。

ニ ラジオ無線機は許可せず。

ホ 守備隊本部は平和人民の日本人をかくすことを禁ず。

ヘ 写真機、ラジオ、小銃、銃剣、手榴弾、サーベル、小刀、

大刀、投射器等の武器を持つことを禁ず。

5 (原本未記入)

イ 前者の品は守備隊本部に二十日まで持参せられたし。熊を射つ鉄砲は所有者の鉄砲番号並みに住所氏名を届出づれば守備隊長にて持つこと許す。

ロ 九月十六日から二十三日まで人民は全部本部へ来て自分の住所氏名を届け出て本部より通行許可証を受くべし。

ハ 二十四日より許可証無きものの通行を禁ずる。

その命令に従わない者は厳罰に処す。

守備隊本部は旧警察署です。

泊 守 備 隊 長

なお南千島の軍政は昭和二十一年(一九四六年)二月頃、民政に切り換えられ、国後島では古釜布が中心であり、民政の機構はすべてソ連人によって構成された様である。

小学校の設置場所は泊、東沸、植内、古釜布、乳吞路、礼文磯、白糠泊など、そして戦争関係の教材は当然、削除されたと思われる。

また古釜布に郵便局が設けられた様であり、旅館、雑貨店などは禁止されなかったが、営業が成り立たないため自然廃業、閉鎖する結果となったようである。

島の引揚状況(脱出、強制引揚の場合)

国後は終戦時、約七、三七〇人であったが、ソ連進駐の報に接して住民は不安を感じ、自己所有の船、知人の船あるいは根室附近の船を備船するなどして地理的に近い根室方面へ脱出(自由引揚)が行われた。

その後、ソ連の進駐以来(九月中旬から)島からの離脱が禁止され、逐次警戒が厳しくなるにつれ用心をしながら夜陰などを利

用し引揚げたものである。

これ等引揚げに際し特に強制はしなかったし、また命令も発しなかったが或る程度、支庁長とも連絡していた関係もあり、当時の事情から次のような方針をたて指導にあたった。

●老幼婦女子や病弱者その他やむを得ない者は引揚げを可とする（残る希望の者は別）

●壮年者は出来る限り踏み留まるよう考えて欲しい。（そのため残る者に対しては不安のないようソ連に要望する）。

なお引揚げに当っては無理して危険を冒さないよう留意すること、また残留者に迷惑をかけないこと、ソ連に刺激を与えないよう適切に行動することなどを住民に呼びかけたが、十分徹底しなかった面もあったと思う。

一応残留した住民は、ソ連の警戒が厳重になり脱出して銃撃を受けることなどを思い合わせ、また生計その他に特に不安があまりないとすれば、残ることも止むを得ないと覚悟し踏み止まったと信じている。

ただ自分は当初から島と運命を共にするつもりでいたが先に引揚げた人達が荒井はソ連とうまくやっていいるなどと嫌な情報を聞かされ、また村の有志から「今日まで、いろいろと面倒を見て貰ったし任務も果たしたので、今後は引揚げた人の世話をしたり島の在り方などを考えて欲しい」と本土に渡るよう強い要望もあったし、住民も残る者は残り大体落ち着きを見せて来た情勢から、島に思いを残しながら、暴風雨の夜半（十月二十八日）、ゼンベコ

タンから思い切って腹を決め尾岱沼に向け脱出したものである。

島の某氏が連絡したらしくソ連兵の幹部などが乗馬で迫って来たが、荒天しかも夜のため引返し、翌日改めて搜索に向かうとの情報に接し自分は捕らえられる決意でいたが、ソ連側では諦めたらしいとの連絡や、この際、予定通り脱出を決行すべきとの有志の方々の言もあり脱出するに至ったが時化激しく、またケラムイ灯台には監視兵も見張りをしていたので全く命がけで、途中流れたりしたが、天の助けによって辛うじて離脱できたものである。

残留島民などの状況

根室地方へは約半数近くが船で脱出（自由引揚げ）したが、残った約半数の住民は薯堀り、草刈り、船の荷役作業、便所掃除、その他雑使役に従事し、その後に泊村の場合は古釜布に集結を命ぜられ、昆布、塩虫、罐詰工場、その他使役などに働いていたが全員、ソ連輸送船で樺太へ送致されたものである。

島での当時の住民の悩みは、精神面が大きかったと思う。

それは、ソ連進駐によってソ連軍の権力も意識して、その命令に服し行動しなければならなかったし、通信は制約を受けていたため本土との関係が不明であり、したがって今後どうなるか知れない不安感や孤立感、さらに寂寞さが加わり、希望と自信喪失の状態におかれたものと思う。

このような状態にあったため、日本人同志のトラブルも若干あ

つたと考えられる。

事例として

●ソ連に甘言で接し、極度に好意を求めようとする者

●住民の離脱を連絡する者

●自己本位で他人を無視する者

以上の点から、島民同志で相反目する者も多少いたようであるが、全般的に残留者は不安を抱きながら、いずれ何とかなるだろうと腹を決め、お互いに手を握り合い逐次、落ち着きつつあったと信ずる。

千島齒舞諸島居住者連盟釧路支部長

元根室支庁国後出張所長

現住所 釧路市幣舞町二五番地



国後島 乳呑路尋常高等小学校より爺々岳を望む

公益社団法人 千島齒舞諸島居住者連盟
戦前の北方四島写真収録集より



ソ連艦船北風泊に投錨

城戸与作

昭和二十年（一九四五年）七月二十日頃だと思うが、現地招集のため、国後島東沸の今井隊で一カ月の教育を受けたり、演習と防空壕造りの作業で、毎日汗を流していた。そのように張り切っていたのに、八月十五日の終戦のラジオニュースを聞いてがっくりときた。その夕方、招集除隊となり、直ちに古釜布の我が家へ強行軍で急いだ。夜中に到着したが、そのあと仕事をする気もなく、虚脱状態が続いた。集まれば寄れば、今後は、どうなる事やらと、そればかりが話の中心となったものの、誰もそんなことを知っている者など、ある筈がなく、ただ、うろろろするばかりである。誰も仕事をしている者はなかった。

八月二十七日になって、ソ連軍が扨捉、色丹に上陸したと言う情報が入って来た。早速、古釜布でも別に手向かう意志はないけれども一応、見張りを立てようではないか……と言うことになって、警防団が、これに当たることになった。その時の分団は、部長に加藤氏と猿田米末氏、班長には加賀勇氏と私とであった。色々と協議の結果、最初の日（二十九日夕方）は猿田部長が団員三名と、中尾の番屋、つまり㊦の鮭の漁場に宿って、高台の上で看視する

ことになった。翌日、無事に任務を終え、夕方に加賀班長が三名と交替し任務についた。翌三十一日も無事だった。私が三名を従えて任務についた。夕方で見通しもきかないまま、鮭の焼き魚で夕食を御馳走になり番屋で泊る。

翌朝、何か気になるので夜の明けやらぬうちに高台に登って、望遠鏡で見張りを始めた。やっと視界が明るみを帯びた午前四時頃だった。東北方に大小十数隻の船影が見える。即時、番屋の部下を呼び若い人の眼で確かめて見ると鯨船ではないかと言う。もっと、うんと眼をすえて代わる代わる望遠鏡をリレーして見た結果、どうやら国後に向かっているようなので、午前五時に第一報を本部に伝令した。街にある本部までは急いでも四十分はかかる。だから伝令は早め早めに走らせた。なお見つめていると、小船は遅れて大船が速い。しばらくして小船を待っている様が、はつきりと見取れるのである。六時になって第二伝令を出してソ連船と確認の旨を報じた。

船は真つ直ぐに古釜布の大崎に向って来る。とうとう約一時間半後の七時半頃、大崎の近くまで来てしまった。大型船は巡洋艦

で中型の遅い船は上陸用船艇、小型は日本漁船で、つかまつて案内をさせられている船であった。

案内船と上陸用船艇は、沖ノ古丹の日魯漁業の棧橋に巡洋艦は、大崎の蔭の北風泊に投錨して、上陸を始めたのは午前八時過ぎだった。

兵隊は北風泊から高台の上を走りまわっている。上陸用船艇の兵隊は沖ノ古丹に上陸して、銃を持って一戸一戸土足のままで家を調べ、良い物、時計、鏡、指輪、ズボン等を持って（盗む）行き、街の者は一定のところに集めて、厳重な取り調べを始めた。

我たちも、しばらくは番屋に隠れていたが、高台の上には兵隊が見えなくなったので、家に帰ることにした。分団長に報告して駐在所に立ち寄ったら、泊の本署と白糠の部隊にも全部連絡した直後に、電信の機械を取り外してしまったソ連軍の暴挙を語っていた。家路についたが途中でソ連の歩哨につかまり、種々のことを聞かれたが、一向に分からないことだらけで、一時頃、家には誰もいなかった。そして家中荒らされ放題だった。裏の防空壕に行ってみたが、家族の皆が真っ暗な中で小さくなって、ふるえあがっていた。哀れであった。

住民たちが、船積の荷物の陸揚げに全員引き出され、それから昼夜を分かたずにこの作業に、こき使われた。それが九月一日、二日と続いたのであった。作業以外には絶対に外に出さず、どんな用事があっても、外から来ることも許されなかった。そして男も女も、みんなが使役された。女どもは恐ろしがって男たちと腕

を組んで行き来する実情であった。

多分荷揚げがすんで、三日か四日のことであった。泊の本署までこの実情を報告に行ってくれとの、私への命令である。それにしても勝手に外出を禁じられている最中であるので、これは命がけの仕事だなと思った。明日、出発である。いやも応もない。この時は、まだまだ至上命令と言う長い間の軍国調子が、身から心から離れてはいなかったので、重大至上命令であると決意も堅かった。その日になって、早朝に泊署長と署員が船で沖ノ古丹に着いた。その知らせを受けた時、やれやれ助かった……と思って安堵した。上陸した署長も署員も、古釜布の駐在所員も、直ちにソ連軍に逮捕された、ニュースされた。

その後は全然仕事がなく、毎日を無為に暮らしているうちに、運航船が次々と入港して来て、それからというもの来る日も来る日も、軍需物資らしいものの荷揚げ作業の連続で、その労資として僅かばかりの食米をもらって乏しい暮らしを続けた。

九月から十月に入ると、日本人は働け働けと言われてホッキ漁、ニキシロへ行って鮭漁をし、獲れた鮭を駄馬で運搬して、吉田工場でホッキと鮭の罐詰を始めさせられた。

他の部落では夜になると根室から船が来て、陸で火をたいて、その沖の船を呼び寄せ、各々の漁船で沖の船に乗り移って根室へ逃げかえった。段々とソ連兵も、それに気が付いて、やかましくなり取り締まりが厳しくなった。今度は西前の方から漁船で羅臼や尾岱沼方面に脱出するものが多くなった。しまいには逃さぬよ

うに、磯船を焼き船の胴の間を鋸で切り離してしまうという、きつい取り締まりとなった。それと同時に西別の鮭などを大分運んだ者もあったと聞く。根室の梅丸も西前でつかまったという話が伝わって来る。多分、古釜布でも三十戸くらいは脱出した様な記憶があるので、古釜布から遠い部落では、ほとんどの家は逃げるチャンスが多かった事と思う。古釜布では百戸くらいが残って、大部分は漁業を手伝わされた。と言うより経営させられた。その働きも、うんと働けば、たくさん賃金や物資がもらえるならまだしも、一律の給与であつてみれば、全く働く力も欲も出ない。とおり一辺の働きしか、そこにはなかった。目標を失った働きという、全く気の抜けたものだった。そんな毎日が年末まで続いていた。そのうちに蟹漁の仕度、蟹缶詰工場の準備に引き出された。それ以外の者は大工仕事である。一日いくらという賃金で働くようになった。その外に賃金の代わりとして、日本軍の残して行つた米もくれるようになったが、それも豊かには、くれはしない。春になって蟹漁が始まると女も子供も働いた。子供のいる母親と病人は働かなくとも最少の食糧だけは配られた。

私は初めは大工仕事をしていたが、今度は認められて建具造りの方に廻り、自分の家の仕事場で建具造りが出来る様になった。お蔭で丸三年を自分の家で仕事することが出来た。ほかの人は海に山に造林に土堀りにと追い廻され、おまけに自分の家からは、みんな追い出されて、みすばらしい小屋住まいや小屋の中に二戸も三戸も雑居していた。

以上が私のきれぎれに思い起こされる節々であるが、書くに従つて当時のことが悲しくあわれに思い出されて仕方のないことである。かつて島に住みついた人々は、私以上に多くの労苦を経ていることであろうが、せめて親たちがこんな思い、また、これ以上の悲しい思いをしていたことだけは、孫子の末まで記憶しておいてもらいたいと思うのです。各々が当時をよく孫子に伝えておいてやつて欲しいと念ずるや切です。

現住所 目梨郡羅臼本町

時計の針逆に回す：

奥野石次郎氏の話

読売新聞社編「昭和史の天皇」より転載

北千島で停戦協定が出来たのは八月二十三日、それから漸次南下して、ソ連軍による千島列島の接収がはじまったわけだが、領土問題の焦点になっている南千島へソ連軍がやって来たのは、エトロフ島が二十九日、クナシリ島とシコタン島が九月一日だった。このテンポののろさは、人手が足りなかったといえればそれまでだが、さきの第九十一師団作戦参謀水津満少佐の奇妙な体験とも合わせて、少なくとも南千島はアメリカ軍が占拠することになっていた。ところが一向に米軍上陸の気配がないので「それではついでに」と、ソ連軍がちゃっかり占領してしまったのではないかといわれる根拠にもなっている。そして、これはヤルタ協定の内容、南千島帰属問題の争点の一つにも発展して来ているのだから、その占領の仕方は、おろそかには出来ない。これらの島々には軍隊だけではなく、一般住民も住んでいたのだから、占領当時の模様を住民たちから聞いておく必要があるだろう。

「私の父平三郎は、明治六（一八七三）、七（一八七四）年ごろ宮城の石巻で材木商をしていたそうですが、山形の土族の松本十郎さんという人が、千島の開拓使になったので、そのあとにつ

いてゆき、クナシリの西端の泊に三年ほど住んだが、クマヤオオカミが出没して危ないというので、いったん北海道へ引揚げ、明治十年（一八七七年）再びクナシリに渡り結局、島の中央部の植内に住みつき漁業をしていました。この島は東西約百六十キロの細長い島ですが、北側は、けものすみか。人間は南岸に住み、主として漁業に従事していました。

マスが六月から八月まで、サケが九月中旬から十一月まで、この間、七月から十一月までが昆布のシーズンでもありましたが、魚が押し寄せると、海の色が変わるほど。少し海が荒れた翌朝は、海岸にサケが打ち上げられ、それをクマが食べているといったウソのような話です。冷凍設備がないから、立ち網でとった魚は塩づけにし、北海道から来る仲買人に、ほとんど言い値で売っていました。「一貫匁三銭でどうだ」「いくらでもいいから持って行けや」といった調子ですから仲買人は、もうけたでしょうね。

わたしは十六歳のとき、札幌の電信練習所で一年電信技術を習って島へ帰り、郵便局へ勤めました。島の郵便局は八つ。あちこちを転々とし、終戦時は戸数六十戸ぐらいの作万別部落の特定

郵便局長でした。局員三人、配達二人、電池式のラジオで八月十五日の御放送は聞きました。外地ならともかく、ここは日本の領土だ。あわてる必要はないと局員にいつていたのです。九月一日朝六時ごろ、うちの部落から二十キロほど東に行った古釜布湾に船四隻でアメリカ軍らしいのが上陸したという話を部落民が知らせに来了ので、古釜布の郵便局へモールス信号で問い合わせたが、全く応答なしなんです。で、村の青年団員二、三人を途中の中古丹へ見張りに出したら海岸沿いに四十人ばかりの兵隊がこっちへ向かっている。しかし日本軍の服を着ているという。変だなあ、と思っていたが午前十時半ごろ、それが局にやってきましたよ。

局へ来たのは、将校一人、兵を三人連れ、日露英語の会話ブックを片手に何か聞くんです。チンプンカンプンでしたが、そのときソ連兵だということを初めて知りました。日本の軍服を着ていたのは、北千島の戦いで泳いだため着替えたんでしょう。身振り、手振りでしたが、島の西端の泊村に行くには、どのくらいかかるか、そこに日本兵はどのくらいいるのか、と聞いているらしいんです。

泊には、ほんの少ししかいなかったが、その東の白糠泊には砲兵、工兵が各一個大隊ぐらいたはずなので、私は、たくさんいるといつてやりましたよ。すると、局内を物色していたのが、各局を結ぶ専用線を切ろうとするので、止めようと思って立ち上がったら、ピストルをつきつけられて、結局は切られてしまいました。

そのあと、ソ連将校が局の柱時計を見て、針を一時間半ほど後戻りさせ、この時計を確認せよというふうな素振りをするんです。そのときは何のことか、さっぱり分かりませんでした。あとで色々聞いてつなぎ合わせてみたら、艦艇四隻で古釜布へ上陸して来たソ連軍は、二、三の目ぼしい建物を占領すると、すぐ海岸沿いに全島を制圧すべく兵力派遣したのですが、時計の針を後戻りさせたのは、この日、横浜沖のミズーリ艦上で行われた日本の降伏調印の時間が、ちょうどそのところで、その時間以前に全島を制圧しておきたかったからだという話でした。しかしそのときは、時計の針を逆転させた意味は皆目わかりませんでした。

万年筆などはとれましたが、住民に危害を加えるようなことはありませんでした。ただ泊村の沢田喜一郎村長が腕時計のことで抵抗して射殺されたという話は聞きました。切られた電話線はターミナルから外したただけでしたから、ソ連兵が出て行ってからつないで、泊村の郵便局へ、間もなくソ連兵が行くと連絡はしておきました。私が、泊村に日本兵がたくさんいるといったせいか、いったん引き返し三日に、もっと兵力を持って今度は船で行ったそうです。私の郵便局を出て行くとき、もう一つ印象に残ったのは、ソ連兵が「スターリン、スターリン」と大声で叫んだことです。ここはもうソ連領になった。この島はスターリンのものだという意味だったんでしょう。とんでもない、ここはあくまで日本領だということで、我々は今日まで復帰運動を続けているわけです。私は九月末、脱出を決意し部落の人たち、十四、五人と自分の

子供四人を連れて発動機船で逃げました。脱出者で見つかり、撃たれて死んだ人もおり、途中、船が故障したりして命の縮む思いをしたが、無事根室に着きました。領土の復帰問題を考える時、沖縄はそこにまだ日本人がたくさん住んでいるが、千島は日本人が残っていない。いまとなれば、そのことが不利ですが、しかし脱出しないで残っていた人も、こき使われたあげく、みな送り帰されたのですから、どうしようもないといえるでしょう。

元国後島作万別郵便局長

千島齒舞諸島居住者連盟理事

札幌市円山西町四九三



千島と漱石村
島のけり。



国後島の開拓者たち

村 田 吾 一

人はそれとなく生まれた地を大切にし、悪く言われたりすると無条件に腹の立つものである。これをもし郷土愛と言ひ、広げて考えると、祖国愛に通ずることになる。私は私のかつて生活したことのある国後を指呼のうちにながめ、懐かしみながら毎日を過ごしているのだが、あの山脈を見、あの山の頂をながめ、あのすぐ目の崖や、砂浜を眺めるにつけても、多くの友や、お年寄りや、また青年団のことや、学童の多くの顔が、次々と幻の様に浮かび上がり、果てしもない停みに夕暮れを立ち尽くすことがある。

そんなことは何回も私に訪れるのである。それは余りに身近なそこにある国後が、人のつながりと生活が展開された過去が、実際には余りに遠く手の届かなさが、こよない郷愁となって心の中心を占領するからであろう。

明治、いやもつともつと昔から、あの不便な地をものともせず、営々と開拓につとめ、産業開発に、資源保護に、文化進展に、教育振興にと、心労をはたして来た地、千島が人手に渡ったので、訪れることも、伺うことも出来ない現在、人の一生の努力と勤勉を注がれたことを、誰が知ってくれるのか、誰がその功を顕彰し

てあげるのか？…。心もとない。世代が移ることによって、やがて忘却の彼方へおしやられてしまうのだ…と思うと居ても立っても居られない心境となるのは私一人であろうか？…。

戦わない国に戦果として占領されたとなると、実にこの開拓の先人達に、何と報告してよいものか…。この時に当たって根室市が千島返還運動の一翼として、当時の記録を残そうとする刊行に踏み切られたことを多とし、出来るだけ戦前の開拓祖たちの名簿と、その中での幾人かの言行や、また思い出などを、薄れようとする記憶をたどりたどりして、書きつけて見たい。記憶と言うものの程、不確実なことはないものであるが、少しでも知っている者は書き残しておかなければならない…とは私の信念であるし、また創作では決してない。それはその子孫が全国に引揚げ後、自家の復興に涙の努力を致しながらも幾分かの聞き伝えのある人々が居るので、実録ではあるが、正確とは言ひ切れない。これを御了承の上御覧いただきたい。

記録と申しても、私は昭和三年（一九二八年）から昭和十六年（一九四一年）まで教員をやって古釜布、植内、乳吞路と任地を

変えて歩き、その中で多くの開拓の人々に会い、昔話を聞き、その苦難の足取りを夜話のうちに聞かじった。それを今、記録しようとしている。人の記憶は実にあやふやなものが多いが、それはそれなりに当時の古老や先人の話は、もう聞かれないのである。従って私の十三年間の口伝えを書き伝えるに直すことは、史実の時間を三十年にも四十年にも持てることを御承知願いたい。

当時（戦前だが）の人脈を広くあさって見たら百五十名くらいとなった。私はほとんどの人に会った。話したり交わったり議論もした。協力を受け、文化活動の中に入ってもらい活動してもらった人々で、古くは大正明治の人々が載っている。昭和四年（一九二九年）の調べを最後のものとしているが私たち同年輩の若い人々は、たくさん功労者としてあげなければならないけれども、それは未だ生存されているので割愛した。概ね故人となられた、過去の人を中心に語り、筆者の親交を深めた人々をあげて、集約的記録とした。その中の開拓意欲の盛んである人々を呼び出して、思い出を書き残すのは紙面の都合もあつてのことである。故人はもう語らない。私は代理人として書残す……と言うのが筆者の心持ちである。

千島への道

先ず第一番に千島への道は、根室からであつた。勿論、郵船は函館を基地として、エトロフの貨物はその六十%は函館からでは

あつたが、その他の貨物と生活物資と人は、どの島へも根室が足場だった。

千島丸、海平丸、北越丸、三国丸

等々が島への足だった。乗船は何丸に乘ろうと勝手だったが、大概、国後へはどの船、何丸と何丸とか、色丹には何丸、離島には何丸、エトロフ通いは何丸、その島々によって御得意船が自然と出来ている。それは経済圏と仕込み制度のために、その様なことになっていたのである。船は変わっても、島への道で変わらないう道が一つあつた。それは根室の通い船会社前に、低く弁天島の方に向いて突き出されていた、石畳のカマボコ型の波止場だった。

島へ出稼ぐ人も、結婚する人も、病気で入院する人も、夫婦げんかの果てに家出する人も、湯治や観光旅行の楽しい人も、内地の生まれ故郷へ墓参の人も、親の危篤の知らせを受けて慌ただしい人も、招集入隊の人、裁判所に出頭を命ぜられた人、あらゆる社会の出来事と哀歓を心の中に秘めながら、必ず踏んだ石畳だった。私は根室の港づくりのために埋没した、あの懐かしい波止場が消されたことに悲しさを持っている一人である。何とかの形で、その一部でも復元して残してもらいたかった。

これから語ろうとする人々は、全部この石畳の上を、アッシを着、金持ちはインバネスを着、また親方衆は犬の皮の袖無しを着込み大きな荷物をさげて、はしけに乗り本船を夜霧の中に捜し出して乗ったものである。ああ懐かしき石畳の波止場、カマボコ型の乗船場、霧の中にぼんやりとかすんだ電灯の淡い光、その下に

黒々と黙って海の中に突き出ている波止場、その上をコツコツと歩き、飲んでホテツタ顔に、海風が心地よい。乗り込みの時、彼女が波止場まで送って来てくれる。知人に顔を見られまいとして、電灯を背にして手をふる夜霧の中の別れは、島の多くの若人たちのみではなく、老若の昔日の思い出の舞台であった。今は、それは消えて全くその跡さえない。

根室は千島のすべての根拠地であった。育つ子供に例えるならば、母親の乳房だった。物も網も、労力も文化も、慰安も知識もお金も、豊かに積み出される基地だった。一夜の歓楽をつくして英気を養い、しばしの別れとしんみりした一時、懐かしい憩いの都でもあった。若きも老いも……。

悲喜哀歓善悪を心の中に、この波止場を渡った多くの人々、そして古老と称する開拓の心燃ゆる人々の足跡を、この石畳にきいて見たい。足裏は、どんな心境を石畳に言い残しているか？……。

* 足裏の郷愁

1. 国後への道は 根室の波止場

石畳の波止場の 足のうら

今も想いは 足の裏

恋もなげきも その上に

2. エトロフへの道は 根室の波止場

石畳の上に 彼女と二人

3. 色丹への道は 根室の波止場

石畳の波止場 思い出が
今も生きている 若い時
手を取り合って 漁場へ渡る

* 石だたみ波止場

A. 船出待つ

石畳の波止場

船底にゴトゴト

エンジンの音

明滅の 街の灯よ

ガス底の灯

女のかげ絵

B. 浜灯ほの暗い

下に二人で

船出待つ

重い船出の

呼ぶ汽笛

ガス底を漕ぐ

鱸の音わびし

C. 調子変わらぬ

エンジンの音

かもめ鳴くガス底に

がす灯のほの暗き

今も想いを夕港

嶋を恋う人 漁夫の道

石畳の上に手ふる

あの子としばしの

別れの波止場

千島想えば

1. 千島思えば朝霧夜霧

濡れて舵とる

可愛あのが気にかかる

2. なぜに国後近そうで遠い

お前想えば

雪の夜風が身にしみる

3. 今朝の出船はエトロフ通い

のせてやりたや

恋の重荷が胸にある

(昭和八年(一九三三年)、九年(一九三四年)頃)

中山旅館主 田中 豊太郎 氏

私は昭和五年(一九三〇年)頃に、泊と古釜布の青年競技大会を開き(初めての試みだった)選手としてこの旅館に泊って、主人から昔話を聞いた一夜があった。その話しは、井戸の話、神社

の御影石の鳥居の話、一番印象に深い話しでは、牛と熊の血闘だった。丸々と肥った好々爺だった。話上手だった。あの分だと大分強気の人、また郷土の文化に尽くした人、牛馬の改良には大いなる意を用いた人だと、若い私の胸にピンと来るものがあつた。軍馬購買に再々来られた遊佐大佐の荒野馬の調教振りも、この人から聞いた。重の井の記は、根室半島郷土史にある。また泊神社の鳥居は、これも同じ本に記録されているので省略する。ただ松本判官と陶山と言う武士の記録を持つておられるやに聞いていたが、誤りか。誤りでなくば、脱出の時にうまくその古記録が持ち出されているか、まだ検討はしていない。跡継ぎ、根室市本町の中山写真材料店、田中巖氏であり、中山姓はその奥さんが名乗つて先祖の祭りをしていらつしやる。

馬産国(島)としてクローズアップしたのは、ここの主人みに当業者外の熱意が大いなる後楯となつていることも事実だし、住民は島民である限り、みんな何頭かをもっていたので、多分聞きはしなかったが、二十頭や三十頭は所有していたのであろう。

明治二十七(一八九四)、二十八(一八九五)年頃から軍馬が尊重されて急に振興し、島全体が馬の世界となった。その中でも泊山裾野に大牧場を経営されて居た松崎栄次郎氏は、その頭数一番だった馬産家である。その牧場の牧歌的なムードは若い私には忘れ難い思い出もある。昭和十年(一九三五年)頃は馬産改良が行き渡り、どの部落にも種馬が配置され、血統が固定化されつつあつた。放牧馬は種馬を中心に女馬を一同とした「一まき」を

造って統卒し、熊の襲撃には断固として守り切る、強力なチームワークが出来上がった。終戦当時、何もない頃に根室に出ると必ず山の上の一角で旅館をしておられた中山旅館で泊めてもらい、島の様に親しく御世話になったお婆さんも、数年前に亡くなられたと言う。裸よりましくらいで国後から一番近い根室に脱出したとのことである。

東沸郵便局長 清水 亀吉氏

水戸出身だ。小柄だったが、なかなかきかん気の人、決して局長然としておさまれない人で、開拓意欲の旺盛な人だった。村の世話、アイヌ人への思いやり、水産のこと、ふか場への執念、牧畜もやり、熊害対策に熱心な人と、やりまくる人、小柄でも心持の大きな人と私は見定めている。

村会議員をやって、正月の村会に六里あまりある泊まで出向するのに、大雪のため馬が通せないで、スキーで行ったと言う話を伝え聞いて驚いた。もつと驚いたことは、羽織袴でスキーと言う出で立ちだったという。まさか多分まわりの人の作り話だろうと思って確かめて見たら、どうやら本当らしい。私は清水さんの若さを讃えたために、この逸話を取り上げたのである。どうしてそこにスキーが出て来たのかと言うと、後で出て来る猪谷六合雄氏が古丹消に住みついて普及したのが、三里離れた裏の東沸の年寄りにまで、ささり込んで来たせいである。

それ程に清水翁は、新しものへの意欲を燃やしていたのである。東沸開発は翁の一手販売だったとも言ってよい。外にも多士才々であったが、外交では少くとも部落の元老的な存在だった。植内局長岩城社礼司の弟さんが入婿して局長の跡継ぎとなっていた。若い娘さんが二、三人居たが、北海道のどこかで、新しい三角形の底辺を営まれていることでしょう。国後への郷愁を抱きながら。

東沸酋長 矢越 有平氏

駅通と人馬継ぎ立てをやりながら、馬産のこと、漁業のことに懸命だった。ねっからのアイヌ族であったが、非常に進歩的な考えを持っていた。アイヌと言う吾が種族に非常な誇りを持っていた。そして同族を愛しながら卑屈になるなと教えた。自らをアイヌと言ってはばからない。アイヌ同士が汽車や船に乗ると離れて座して語ろうとはしない。そのことは実にいけないことだ。もつともつと親しみ合えと説いた。私は若い時に東沸の埋蔵文化発掘に行って見たら、余りにアイヌ人が多いので、遠慮して止めて来た。ところが昭和四年（一九二九年）頃に古釜布に於て、泊村青年弁論大会を開いたことがある。矢越氏の息子も出ていたし、現根室市議員の内野輝雄君も私も参加出演した。何でも論旨は忘れてしまったが、彼は堂々たるもので泊村一位に入選した。美しい好きな青年だったか？…今は多分、六十歳前後で、どこに達者でおられるやら、それも多分、父君有平氏の信念の教育の賜であつただろうと考える。

キナシリ 安田 春吉氏

この海岸一帯の親分格の人で、体は実にでかくて、鬼をもひしぐと言った体かつこうであるのに、大変に気の優しい心根の持ち主だった。だから大変「安田さん」「親方」と言って親しまれた。また、よくこまいもん（貧乏人のこと）の面倒を見た人だった。明治三十九年（一九〇六年）に青森から当地に定着、区長、部長、村会議員、漁組の役員等公職に追いまくられて全村的人物に名を列し、功をあげた。息子さんは一時地元の学校で先生を勤めていたが、やはり漁師の子は漁師でなくては、とても食っていけないと、おやぢの意見に従って間もなく辞めて家業に取り組んだ。終戦後、命からがら逃げて、現在は北見の常呂で盛大に漁業経営している。漁業の役員など公職をいっぱい持って、親に勝る事業成績をおさめてはいるものの、島がかえったら…と心待ちしてるのが彼の心の中ではあるまいか。親父が開拓した浜で親の足跡をじかに感じ、懐かしみたいと願っていると思う。

瀬石の 板倉 専松氏

小学校の真正面で商店をやりながら、仕込親方でもあった。仲々に専横なところがあつて、部落では半々の支持力を有していて、学校のことも、青年団のことも道路のことも、よく骨を折って尽くした人だった。でも一度気に食わぬことがあると、

最高のワンマン振りを発揚する人で、青年団長なども選挙をやつて決めようとしても、「あんたやれ」と言い出したら決してあとに引かない人だった。

正月のある日、古釜布の碁打ち連中が十人程、お湯に入り旁々遠征に行った。瀬石には山の方に大谷と言う、湯量の豊かでひなびた温泉があつた。その息子さんが非常に若いのに碁が大変に強かった。どのくらい負けずきらいなのか、一切その青年とはやらないのが専松さんである。私が向かつていった。一石ずつ力を入れて碁盤にたたきつけるので、石が動いてどうにもならない。私は知らん顔して打ったが、どうにでも、ごまかせるくらい夢中になるのである。どうぞお静かにと言うと、次の石は静かだが二石目になると、もつとひとどく、どこがどうなっているかわからない。

仲々に彼の仕込みは厳しいものがあつた。漁民は、こうした親方に支えられて、開発を押し切つて来たのである。女関係も相当なものらしいという話もあったが、ともあれ、それくらいの精力と強引さと、ワンマン的な根性がなくては、此の当時の、あの原始の姿から立ち上がれもしなければ、また未開の土地、未開不知の産業に挑めもしないし、投資も出来ない筈である。今更ながら、そうした姿勢こそ開発の力であり、推進力であつたことに気付くのである。

古釜布 東峰 常五郎 氏

私は昭和三年（一九二八年）に国後に渡った。勿論、学校の先生としてで古釜布が、その任地である。十二月二十九日、多くの女工さん方（カニ罐詰工場の）と親方連中も多く集まっていた。船は海平丸で船長はトメさんと言っていた。「島はどこだ」と聞いた。「そこだ」と言う。島とは決して思われない大陸的な視界である。国後のバックには知床連山が雪に輝いて、地図で見る様に、その知床と国後の間に海峡など見えないために、私はとまどったのである。猶の絵本で見た鬼が島くらいの一つかみのものを島と言う概念でいたことも間違いの程だった。上陸して見て初めて国後の大きさが諒解出来たのである。

そして慌たらしい年末も過ぎて、島の正月を迎えた。松井彦松校長と二人、東峰さんと言うカニ漁場からの招待である。私は生まれて初めて見る漁場で、山育ちの田舎百姓の侍である。東峰さんの家に入ったとたんに、その正月ムードは大変豪華なものと言うよりも豪華なものだった。使用人が漁夫が、または近所のお手伝いさんか知らないが、丁度お祭りの様な人の出入りである。私は「おっとりしや」と思った。

年最初の挨拶と新任の挨拶を四角ばってしたものである。校長は一生懸命に私の紹介をしてくれていた。現役の弥市氏に、続いて常五郎さんに挨拶した。白髯を貯えた親しみのあるお爺さんで、仲々風格も立派であった。家中のムードや人の出入り、常五郎さ

んの言葉や態度を総合して、昔の足利北条時代の豪族…と言った感じで受け取ったものである。酒宴が始まる。紋付で正座を占める常五郎さんを立派だと思った。

酒宴はたけなわに、大分の時間を経過した。誰からともなく、「街へ呑みに行くべえ」と言つて続々と礼を述べて宴は終わった。その時の御馳走の中で忘れられないのは、タラバ蟹の生きのよいものを進められて、うまくてうまくて大きな足を二本も食べて腹いっぱいになった。私のタラバ蟹の初めてのもので一生忘れられない味だった。「あとうんと食わっしやい」と進められても入らないくらいだった。一月は禁漁期だからタラバ蟹がある筈がない…と思うだろうが、特定の産者に対して、漁場さがしのために試験刺しが許されていたのであって、東峰さんは指定産者であったと記憶している。当時の私は酒には関係なく、食い一方であった。豪勢な厚遇に酔った百姓の子供の私は驚きもし、また島の生活に一種の闘志と希望を燃やしたものである。そして皆といっしょに飲み歩きに参加し、町の様子や多くの父兄を知ったことであった。学校の校長はとにかくも、一教員をこんなに部落中で大切にしてくれたものである。各工場、漁場での正月中の毎日の招待に、私の飲みは、そこで鍊成されたのではあるまいか。常五郎氏の渡島は明治三十八年（一九〇五年）で、国後タラバ蟹漁の開祖であると言える。その漁によって罐詰業が伴って発展したのである。当時、古釜布の磯止別の浜で引網すると、タラバ蟹がチャンチャンと獲れた、と言う話を常五郎さんから聞いた。

アイデアの人 北村 竜 助 氏

世継ぎの弥市氏は現役として沖乗りに自ら出て、父の家業を継承して盛んだった。沖の古丹の加藤亀三郎氏と双璧をなし、漁獲の上では、いい意味でライバルであった。彼弥市氏は勤勉一本槍で、真面目な親方であった。操業何十年もの漁獲記録は貴重なもので、終戦後、日魯の社長がそのデータを借りに来て、良いアドバイスをしてほしいと申し込まれたそう。ともあれトラバ漁開発の名家というべきだろう。

終戦後、弥市氏は道内各沿岸を視察し、種々漁を試みたものの、彼に利あらずして、遂にソ連の漁業相が「島はかえさない…」という声明を聞いて、がっかりしてNHKを通じて残念無念の言葉を涙のうちに残して北海道を去り、茨城県の祖々の地に帰られた。その時の放送を私も聞いたが、まことに悲しいことだった。

長男実氏と共に父の農地で百姓をして居られたが、昭和四十三年（一九六八年）に亡くなられた。二番目の重政氏が翌四十四年（一九六九年）の十二月に突然、私のところを訪ねて下さって、亡くなられたことが分かった。重政氏は戦後、南太平洋の鯨とりで日水の図南丸船団に属し、キャッチャーボードの砲主として二十回に乗った人で、砲手でも世界の指折り名手だったと言う。その人が突然現れたので、何から話すべきかわたてふためいた私だった。漁の血統は、どの時点かに鯨が浮くようにポツカリと出現するであろうことを楽想してやまない。多分その血統のどこかに父の遺志の島がかえったらと、希望に燃えている子孫もあらうものを…と思うのである。

東峰漁場の隣りにカクマのカニ罐詰工場があった。勿論、東峰漁場の蟹をあてにして、契約もあつてのことだろうが、その工場長が北村氏だった。根室実業学校の第二回生かの卒業生で、同校は根高の前進校だ。だから、管内中学校の知的開発、文化開発に無関係であるとは言えまい。それは、管内知的レベルのセンタリーな存在であるからだ。

彼、北村氏は非常なアイデアマンだった。種々の工夫と工作を大儀がらないでやった。そして考えた。加工法、処理方法、殊に厳寒の沖から捕獲されたトラバ蟹を、如何にして凍らせないで工場に持ち込むか（当時、工場も産者も真剣に考え抜いた）…等々多くの問題が山積みされていた。彼はそれを片端しから研究の課題として考えた。やってみた。そして一つ一つ解決策を編み出した。最初のテーマーにのせた如く考える人だった。相棒として北馬の渡辺、と村岡が居た。

だから馬もやった。写真もやった。工場の機械類は一応ほごして見なくては、気のすまない男だった。いいかげんなことは嫌いな男だった。他の工場に機械の不調なところがあつて、北村さん見てください…と言われると、自分の工場はほつといて、真剣に取り組むというのが彼のいいところだった。

こんな人だから欠点も必ず持ち合わせていた。人物批判は実にとことんまでやった人だった。絶対に恐れなかった。私どもは、

ある程度の悪口屋だと思っていたが、どうして仲々真髓をうがった批判を下していた。今一つは気の合った家に遊びに行くと話上手？で、いつまでも話していて帰ることを知らない。おいとましますと言う言葉のない人だった。訪問先の都合など一向におかまいなしである。朝来て夜中まで話し込む人だった。そんなことは毎度のこと、終いには箒を立てられた家もあると聞いた。

後継者の逸男君は根室に在住して立派にやっておられるが、血筋と言うものは争われないもので、親父似そのままである。竜助氏は実に国後にピツタリと合う人柄であったと思う。島の工場業界には、大いに貢献した人であったことを強調する。古釜布の盆栽松にも、後年ウエイトを置いたが、彼には科学的な存在しか意味がないと私は感じて居た。

〔正〕こと 加藤 亀三郎 氏

安政六年（一八五九年）に生まれ、明治十九年（一八八六年）に国後に渡る。恐らく定住者第一号であろう。「先生わざわざこわい思いをして山の上まで登って転ぶよりも、ここで転んだ方が手っ取り早くて、楽でいいぞ」とスキーをかついだ勇ましい出で立ちの私を見かえってひやかしたものである。それが加藤氏の人生観である。また彼の生き方でもあっただろうか？。

ここにも漁場の親方らしさ、経営のポイントを感じなくてはなるまい。そしてワンマン的な存在を認め、如何にタラバ蟹の難し

い経営があつたかがうかがるのである。「私が島に来た頃は、人を殺して流れて来る者、鎮台がいやで逃げて来た者、けんかをして追い回されるので逃げて来た者、そんなのは、まだまだやさしい方で、大ばくち打ち、やくざ者、脱獄囚と言った天下のあばれ者、あまし者が全部と言つてよかつた。少しやさしい言葉使いや、気持ち起すと、どこまでもつけあがつて来たり、逆におどかされたりするんだ。ぐっと腹に力を入れて、横座でにらまえて居なくては、漁場の親方なんぞ出来たもんじゃない。」と、しみじみと三十余年前のことを思い出しながら述懐していたことがある。

体軀は決して大きくはなかつたが、どかつと居すわつた姿は、忠治の貫禄か、次郎長の貫禄が眼にちらつく。やはり開拓は、どことはなくこんな強靱さがなくては決して果たせはしないのであらうと思つた。ライバルは仕事の上では、磯止別の東峰漁場であつた。開拓には必ずライバルが必要であることも諒承出来る。この血統は各地に散在している。

近布内の 飯塚 豊吉 氏

風格のある人、関東人らしい闘志にみちあふれた人だった。近布内を一人で負つていたような心持ちの人だった。道路のこと、学校のことは、特別な力の入れ方だった。部落の総意をまとめるには、余り口数を用いずまとめあげた。上手だった。青年団の教

育には特別熱心で理解も深かった。暖かい心で私たち教育者を迎えてくれた。

関東弁丸出し、俠気あふれる人、旅人を非常に大切にする人：であった。あえて記録に残したい人物、国後の人だった。

生存者ががんばっている 岩城礼司氏

島も島、植内生まれである。非常に着実な人、誠意の人、皆んなといっしょに暮らす人、それを買われてか、植内郵便局長に就任、そして最も植内住民と共に生活すると言う彼のビジョンが実って、植内漁業協同組合の専務となり、数時点を経て組合長にまで押し上がった人である。役目が語るように植内には、よく尽くしたのであるが、彼にはもともと大きな任務が終戦後に待っていた。

彼は終戦で、財も心も空っぽになった多くの島人を如何にさばき、且つ更生の道を選ばせるかが彼の肩の上ののしりと重荷されて来て、彼は敢然とそれに闘志のありったけを出し切った。住むところも、食う手だても失った多くの組合員をかかえて、如何に救い生活の場を求めるかが、彼の必死の活動であった。道内をくまなく見歩いた。どこにも島以上どころか、島に近い生活の場は、一つも見当たらなかった。道庁のアドバイスもあって、奥尻の西前を見に行った。それは島よりも、ずっと僻地だった。見捨てられた地域だったが、まあここに移植民するより仕方あるまい

と、道庁とも緊密な打合せもすんで、一途にそこに向かって進むことにした。それを嫌って脱隊する者もあったが、彼は意にとめることもなく一途に、奥尻島神威脇、湯浜を漁田開発基地と共に、国後の人々の生活の本拠と決めて、人々を多く招いた。そして現時点では何とか生活の目途も付いたかに見えるが、仲々人生の底辺を失った者の立ち上がりは、そうそう易いものではない。今にして彼、岩城氏は苦勞の連続と、油断しない心境がうかがわれて、気の毒に思うこと甚だしい。漁田開発基地として道庁は六基地を指定したが、その中でも一番成功しているのは、羅臼町の知床基地であろうか。その次が神威脇である。

彼は部落づくりに執念を燃やし続けている。港も造った。組合も作って活動もした。組合幹部の不束もあって整理した。融資のこと、補助助成のこと、造船から養殖保護対策と寧日もない。それは島の開発で鍛え上げたよりも、もともと追いつめられた心境であったが、島の開発の精神が充分に役立っていることは事実である。「どうです岩城さん、今一度未開にいんどんでは…？」と呼びかけると、彼は彼なりの詳細な計画さえ立てば、「やりましょう、やつのけましよう」と言下に言い放つファイトを持っていると考える。二十年ほど会ってはいないが、そんな人が彼、岩城氏である。

度肝の影井常司氏

鳥取衆で森下斧藏氏と志を同じくして、この島へ乗り込み常住した人である。父と共に明治二十四年（一八九一年）の移住である。タラバ蟹一途の漁師で、馬の放牧や種馬も持つては居たが、それには弟の倉治氏をあてて、自分は太平洋の蟹と二つに取り組んだ。森下とは対象的で少々、山師気があつて、いいあんばいに、その山のでっぺんばかり伝い歩いた人だった。漁場仲間では大変人気があつて漁場ボス的な存在でもあつた。それは度胸の良さと、金切れのよいことであつたろう。それくらいだから、ろくに飲みもしないのに根室の花柳界では大もてであつた。国後の親方連中は、花札と山の上遊びは、ほとんどの人がやつた。堂々と楽しんでた。そのことは、実に多くの話題を残している。私は畑が違ふので、それを詳かにすることは資料の持ち合わせがないが、多分この話を綴り合わせても千鳥開拓史の一角は出来上がることと思う。それ程にスタミナの貯え場所であり、憩いの都でもあり、企画の場所でもあつたことは回想させられる。研究しておかねばならない史料でもあると思う。

学者の 菅名 喜三郎氏

過去に植内郵便局長をやつたり、村会議長をやつたり駅通、旅館、人馬継立等々あらゆる公職を受け持ち、非常に温厚な人格者

であつた。父君の文雄氏が学者であつたと言うので、多分に親の影響があつたことであらう。植内生まれである。牧場で馬を持ち、漁業も盛大にやつていた。親子二代の国後開拓の人である。大いなる代々の財産や物や土地を国後に置いて根室に逃れたが、足場を失つた彼は、どうしても漁業に芽がふかない。漁運が悪かつた。最後は農業を老後の仕事として西春別に定住された。海から山への生活の転向は、多分心残りであつたと思う。長男正夫君をはじめ、すべての子供を失つて終わつたが幸い長女に終生を見送られ、昭和四十四年（一九六九年）の春、静かに国後の早く返ることを願ひながら逝かれた。ちなみに長男正夫君の旧友の飯田三郎氏（作曲家）は昭和四十四年（一九六九年）の冬、羅臼に來た時に正夫君の事を話して残念がつて居た。

人の一生は、その生活の基盤を失つたことに重大な影響のあることは、菅名氏を見てもよくわかる。

鳥取県人 森下 斧藏氏

明治二十七年（一八九四年）に志して來住、黙々として水産業にいそしみ、鳥取の湖山から多くの郷党を招き、安住の地として植内の開拓に當つた祖である。山師氣のない人、着実な仕事振りが多くの人々に認められて、植内の漁業組合長を永年つとめた。親分肌ではないままに部落中の人々の面倒をよく見た人、うその言えない人、はつたりのない人であつた。

息子さんの参氏は水産検査員をやっていて若手としての人望が厚かった。戦後、命からがら全家族を引き連れて逃げて、やれやれと言う間もなく、不自由な物資を求めに島に出かけロスケに見つけられ、追われ追われて山の中に隠れ忍んで数十日を過ごし、とうとう発見されそうになったので、白糠泊沖に小舟で逃れたが追撃も甚だしく、とうとう銃弾に倒れた様であるとの噂だった。

こうした若い人々の終戦時の悲劇は、各所各島にも多く残っている。その血統は現在、厚岸に居て何とかやっている。厚岸には多くの島の人々が居て、国後開発功労者の初代から終戦頃の世代で二代目、厚岸に三代目が居ると言うことになる。こうした悲しい事実も、やがて忘れ去られることを、私は非常に恐れる一人である。何とか克明に、その事実を記録しておきたいものである。私のこの話しも人づてに聞いた参氏の最後の様子で、実際に見たことでないことを、はつきり申上げておきたい。

女親方 羽田 イシ さん

植内商人として第一任者である。早くから夫を失い、女手一つで家業をすすめ、植内地方の開発につとめた女丈夫と言ってはばかりのない人だった。

非常に人情が厚く、よく貧乏人に親切を惜しみなく振りまいた人である。地元の人々には、よい仕込み親方として尊敬されていた。今時あんな女親分と言った型や気風を持った人は少ないし、

また見られない。

島を引揚げた後は全く恵まれず、厚岸に於いて島をはるかに懐かしみつつ亡くなられた。あとがまの孫の茂氏は厚岸で祖々の霊を守りつつ、島のかえる日の一日も早かれと乏しく暮らしている。

健在な 山下 亮 輔 氏

彼は国後脱出者としては、最も幸運な方である。能登衆で梅谷周造氏の弟だった。島では漁業、商業、造林等を生業とし、公職はあらゆるものに引つ張り出されていた。村政に漁民経済のうしろだてに、産業振興に、その力は大きく評価してよい。引揚げ後は、根室市政に議長として参奨し、島時代から引続き自治に功労ありとして、勲四等を授与されたくらいであるので、島への執念も強く残っていることと想う。梅谷周造氏の経済的な跡継ぎが彼を幸運な生活に導いたことは、他の引揚者と異なるところであつたろうが、彼の底ぬけに明るい気質と、公平な判断と経済感覚は、彼の身上である。

現在は北方領土返還のことに全余生を傾けて、中央道庁との間を行ったり来たり、また外務省、ソ連大使館へも再三交渉に当たっている。そして引揚者一同は、みんな彼に期待して居る所が莫大であり、彼の健闘を誰もが願ってやまないのである。長生きしてほしいものである。

古い人 山田英明氏

此の大人には直接会っては居ないが、医者をバックボーンとして、彼の開拓者のな力は、島の当時の古老たちは、だれもが認めていた。医は仁術なりの実践者であり行政万般に実に明確な理論の持ち主だった。島民のよき判断者であり指導者だった。人格者で大人であつた…と聞いている。

私は英明氏の世継ぎである山田徹氏とは親交があつた。徹氏とは較べものにならない人格者だったことは、他人の批判するところであつたが、徹氏の頭脳から推察しても、英明氏が理論家だったことは充分に想像出来たのである。

徹氏は日露役の勇士であつて、乃木軍に属して第一線部隊として、旅順会戦、奉天総攻撃に参加した。軍曹で金鵄勲章を持っていた。植内校下には山上光三氏と二人居た。毎年、陸軍記念日には、彼の軍談を講演してもらい、生徒と父兄が集まって聞いたものだ。楽しかった。長々二時間余りを、一休みもしないで続く戦談は、今も眼前に彷彿させるものがある。大人も生徒も固唾をのみのみきいた。同じ軍で同じ行動をとった山上光三氏（営林署駐在員）が毎年にこにこしながら此の長講を聞いて、感にたえないといった表情で、受け取っていたことを想い起すのである。真実の話しほど人を引き付ける力の深さがあることを知るのである。

炉端会談の雄 桜庭 熊五郎氏

植内小学校の校長住宅のすぐ下浜にあつた家で、岩手県出身、親や兄弟の意見も聞かずに、郷里を逃げるようにして渡道した。新天地の北海道に、大いなる夢を燃やしていた若い青年だった。彼も島では一方の旗がしらの存在であつた。仲々きかん気の強い村会議員だった。

根室支庁長が島視察に来た。有志は羽織袴で迎えた当時、馬に乗って昆布浜を駆け飛ばして通ろうとするのを、どなりつけてとがめたことがある。まさに水戸黄門である。決して役人だから、裁判所長だからって恐れることのない人だった。

また少々、豪傑肌のところもあつた。村会のもめ事など、正式発言はしないが、炉端にかえって話し合いが始まると実によくもめ事を、いつの間にかまとめている…と言った力を持っていた。丁度ラジオが入った頃のこと、毎日毎晩の様に羽田さんの家に行つて、炉ばたに横になりながら聞いていた。そして、すぐ大いびきである。「お父さん双葉山が勝つたよ」と注意してやると、「ええ押しももうだった。羽黒のやつ今少しで押し込めるのに」と返事する。いびきしながら聞いているのである。うかつに悪口も言えはしない。初めての人は、なにも羽田さんまで来て寒いのに寝なくても、家の炉端で寝たらいいだろうにと、知らずに言う人もあつた。そんな時は、言った人が首尾がわるいので、あくまで寝込んで知らない振りする賢明さも備えていた。彼の跡継は

熊太郎氏で戦後、猿払で郵便局長を長くつとめ目下、札幌の水車町の郵便局長をつとめながら、多くの島の人々の面倒を見てくれている。博識多才、親に似て、なかなか弁舌も理論的で私の親友である。

山縣勇三郎の兄 中村 克次郎 氏

ともかく実に面白い爺さんだった。元老としての貫禄は充分だった。発展のため、文化のための金なら惜しげもなく出した。どこからひねり出すか定かではないが…。一旦、気に入らないと仲々そのしこりが解けない。そのために困った村長、警察、医者などの勤め人は、数多いと聞く。そんながんばり屋だった。侍の子供で平戸藩士だ。爆弾三勇士を出した国柄だと、人に頭を押さえられることがきらい…つまりプライドが高かった。痛快老人だった。終戦前に亡くなったからいいようなものの、生きて終戦を迎えたら、切腹したかも知れない。

その末えいは、跡継として中村三郎氏で、北方領土返還に関する諸役に列してよく尽くして居られたが、数年前に他界された。たくさんの馬や土地を残してある島への執着は、非常に分厚く胸に抱いたままでであつたろうにと追憶している。その五番目の子供が、中村大五郎氏として世継ぎしている。道庁役人で現在は留萌支庁辺りの勤務ときいている。どうか祖々の志のあるところをお忘れなくと叫びたい。

何れにしたって、一生かかって築きあげた生活基盤を一瞬のうちに終戦でなくして、またそれ以上の生活の土台を築くのは、なかなか難しいことである。どの人を見ても、島に居た時と同じ様な生活に立ち戻れた人は十%もあろうか…。生活の足元をさらわれると言うことは一大事である。それは物的に見てだが、心理的な苦しみは、見えぬこそ大変なものであつたであらう。口説いても仕方がないが気の毒なことである。せめてもの見える生活だけでも豊かにしてあげたいものと、願ってやまない。

最涯の地の嶽 八郎 氏

国後北端の白糠泊にデンと腰を据えて、漁業、牧場、造材と開拓の実力者であつて、終戦時には三百余頭の持馬をそのまま置いて来ている。この地を訪れると必ずと言ってよい位に、此処の家に泊めてもらうのである。豪勢な山海の珍味で待遇されたことは、忘れられない。

豪傑はだの人、女も好きだが酒は余り飲まなかつた。大声で話す人で、ないしょ話の出来ない人、明朗な人だった。村会にも出、学務委員等、村の役まわりは全部と言つてよいくらい引き受けていた。話は近代的だったが、ひとたび地元の人がわからないことを言つて来ると、たちまち田舎おやちになつて、ワンマン的な言動に変わる人であつた。チャチャヌプリから北端の方で、彼の息のかからない人は、余りなかつたと思う。

スキーの大家 猪谷 六合雄 氏

その一生で築いた開拓の成果を、山も牧場も、馬も漁場も捨て、昭和二十年（一九四五年）十二月に一家を引き連れて逃れ出た。丁度、根室近くになって急な大時化にあい、根室の街の灯を見ながら、大波に吞まれて沈死した。

白糠泊を出る時から時化の様様ではあったが、そんな日でなければ脱出は決して可能ではないのである。

幸い跡取りは、学徒か何かの関係で一人生き残り、道庁の役人をやっている嶽一夫氏で、天塩の社協事務所長を勤めている。生まれ故郷を恋うる心は、多分激しいものがあるであろう。毎日峰々にかかる雲の流れを見、東ビロク湖を渡って来る北風を真っ向に受けながら、あの大自然は今どうなっているのかと、望郷の念を尻富士にことよせて、天塩の毎日を過ごしていることだろう。

高田屋嘉兵衛が、碇泊したと言う渡海船と言うところも白糠泊から指呼の岸続きに見える。そして高田屋がエトロフ渡りを計画した潮見の岬、アトイヤは白糠泊からすぐ近く、そこには一等灯台があり、従業員の家族が四、五軒あつて管理に当たっていた。冬は大鷲や尾白鷲を撃つて暮らしの手助けにしていた。

ここから羅臼側に廻った海岸に、底吼えの滝と言うのがある。チャチャ岳から直行して海岸に落下している滝であつて、その滝壺には夏は鱒、秋は鮭が煮え立っていた。小池仁郎氏の漁場だった。幾らでもとれる……と言う名漁場だった。

昭和五年（一九三〇年）頃を中心に、国後の西前古丹消に漂然と来て住みつき、五年間も定住された。先生は国後の雪質や国後産のスキー材の研究に來住されたと聞いていた。

自分で家を建て、生活が始まった。彼の家はタルキ以上の太い材は絶対に使わない。寒地向きにドアは一つ開けて閉めなければ、次のドアは開けられないように出来ていた。外からの空気を防ぐためだと言うことである。

勿論、古丹消のことであるから自家用温泉は豪華な自作のものが設けられていて、いつでも入れる。腰掛と寝台、その下、その上は全部物入れである。そこが寝室兼応接間であり、居間兼食堂でもある様に見受けた。一つの無駄もなく出来ていた。私も二度遊びに訪れたことがあるが、今になって考えると、DK住宅の元祖的なものを、あの時代から実践して住まっていたことに驚くのである。

別室を見せてもらった。それは彼のスキー工作室である。広く贅沢に造つてあつて、カンナ等数十丁の工作道具が、整然と壁にかかっている。別に鍛冶道具も揃っていた。先生のスキー登山用具は何百も新案特許を取つて居られる。奥さんと自分のスキーが、六〇七台並んでいたことを記憶している。

先生自身はジャンプ、奥さんは山スキーの大家だと聞いていた。第一回の訪れの時には、奥さんは山に滑りに行って居られた。第

二回目の時には、おながが大きいのに、裏崖の急斜面を滑降して雪煙をたてていらつしやった。その腹の中が猪谷千春さんだった。千島の春に生まれたので、千春と命名されたと聞く。奥さんは小柄な人、オカッパの人と記憶している。当時、御婦人のオカッパは寡聞ながら吉屋と御二人くらいと思っていたことも、記憶の中のものである。千春さんはこの母のお腹の中でトレーニングが始まっていたのである。世界選手もむべなるかなと思う。

昭和三十九年（一九六四年）に突然、はるばる私を訪ねて、この知床までいらつしやった。それが他人任せの飛行機や汽車ならともかく、自分で装備された自動車を、自分で運転して（七十五歳と聞く）来られたのは全く驚いた。若い者、顔負けの態だった。羅臼に四晩泊って、私のかつて住まった処は、どの辺だろう、と私に聞かれた。私が国後の古丹消は、あの崖の下であると詳しく話したら、四日とも、望遠鏡と双眼鏡で懐かしそうに、熱心にくそいて居られたことは、まことに印象的だった。家のふとんの上に長い旅の疲れを休めてほしいとさそったが、私の車の家の方が気楽でよい…と言って四晩とも車に寝られた。その車は、運転台の直後が机、次が寝台で、その寝台の枕のところが腰掛けになっている。運転台の横がキッチンング台になって、左サイドに細工場と写真現像等がとつてある。寝台の足のところに衣料置き場があった。

私にそつと申されたことは、「村田さん、私の少々の財産は志賀高原にあるが、それを全部売ってしまつて、家内と二人で車旅

に出ようと思う。車をもう少し改良して…」と言って居られた。

昭和四十三年（一九六八年）の春、予定通り放浪の旅に出たとの知らせがあり、「連絡先は、千春のところにして下さい…」と案内をうけた。余程、旅好きな人、しかもその旅はさすらいの旅の性質を持っている。今頃は果して阿蘇に？十和田に？阿寒に？、または紀南あたりに居られるや？。まさか国後やエトロフ迄は行かれまい。

往復笑いの 福地 健二氏

国後生まれ（泊）、父君も医者で、福地熊次郎氏の跡取りであつて、島では初めての大学卒業の医学士だった（東北大出）。無医的な島、どうかすると医者に逃げられ勝ちな島で、若い彼を迎えたことは、島人等の大いなる感激事だった。彼は若いに似ず、明るくユーモアたっぷり、気軽尻軽は老若から喜ばれ、名医コースを一路たどった。島の人々は、この親子医者の手にかからない人は無病の人だけであつた。いや、彼の明るく開放的な人生は、無病の人の心の患いさえ、ふきとばす役目を果たしたに違いない。

私は古金布時代に、スポーツ振興に対して無理解なスポーツを初めて見る人々のために、非常に困難した。彼には、これに対して絶大な理解と援助、アドバイスを受けたことを思い出す。青年指導の情熱と往復笑いは、島全体の人の心の窓をあけるのに、充

分な明朗さを持っていた。さすがは大学卒業だと、何べんも思い返したことであった。

戦争直前に島を出て（昭和十五年（一九四〇年）頃だったと思う）、現在までずっと引続き日高の平取に開業して、現時点ではアイヌの医者として有名であるのみか、先年、東京の伴（せがれ）のそこに行くと思いいったところ、アイヌ達から何としても居てほしいとせがまれて、また座り直した。もう出られまいと述懐して居られた。

彼はこの功により、高位の勲章や大臣賞を数次にわたり受けている。奥さんは昭和四十二年（一九六七年）に亡くなられ、目下はアイヌ達の唯一無二の親医として、平取に居て老後を過ごして居られる。若いし、往復笑いも昔と変わらない、いつまでも長生きしてほしい。（昭和四十三年（一九六八年）に会った）。

その他大ぜいの人々

想いをめぐらせば、あの人、この人と次々と顔々がクローズアップして来るが、この辺で一応とめておくことにする。古釜布では、

栗村秀三郎、中村寅吉、佐藤茂一郎、渡辺熊五郎、六本木兵五郎、宮崎巳之次郎、森崎弥之輔、田塚伝作等漁場関係で古老それぞれの開拓に意を注がれたことである。

また古釜布には盆栽採集業者と言うのが大勢いて、各々エゾ松

の名木を採って来ては、天狗話しに花を咲かせたことも、国後の象徴的なことである。その業者を、宮崎秀行氏に聞いたら、大分記憶から遠のいた様に、ぼつりぼつりと話してくれたので記録してみると、

佐々木慶助、露峰亀吉、高橋専吉、安保友吉、
猿田国治、茂田源之助、百々英彦、藤田巳吉、
藤森邦治、小沼秀八、沢崎 勇、宮崎秀行

あたりが、業者中のベテランであったような気がする。その他にもノンプロがいて、仲々にぎやかだった。

私は、たまたま宮崎秀行氏の採木は当時、鉄道大臣だった頼母木桂吉氏にほとんど出荷しており、その取引の代筆を頼まれてやっていたので、割合盆栽のことは記憶が濃いのであるが、昭和四十二年（一九六七年）に九州に旅した時、別府の地藏地獄（ワニを飼っている湧泉）を見物したが、その中に国後のエゾ松の盆栽が三十鉢程度陳列してあった。私は懐かしくてそこを去り難く、しみじみと眺めた。たしかに見覚えのある樹があり、当所の天狗連中の顔まで浮かび上がる程だった。あまり良く手入れがしてあって、変わり葉を出していない管理は見上げたものだと思つて、その横を見たら、果して頼母木氏出品としてあったので、愈々国後の古釜布のあの広い湿地を想起すること切だった。

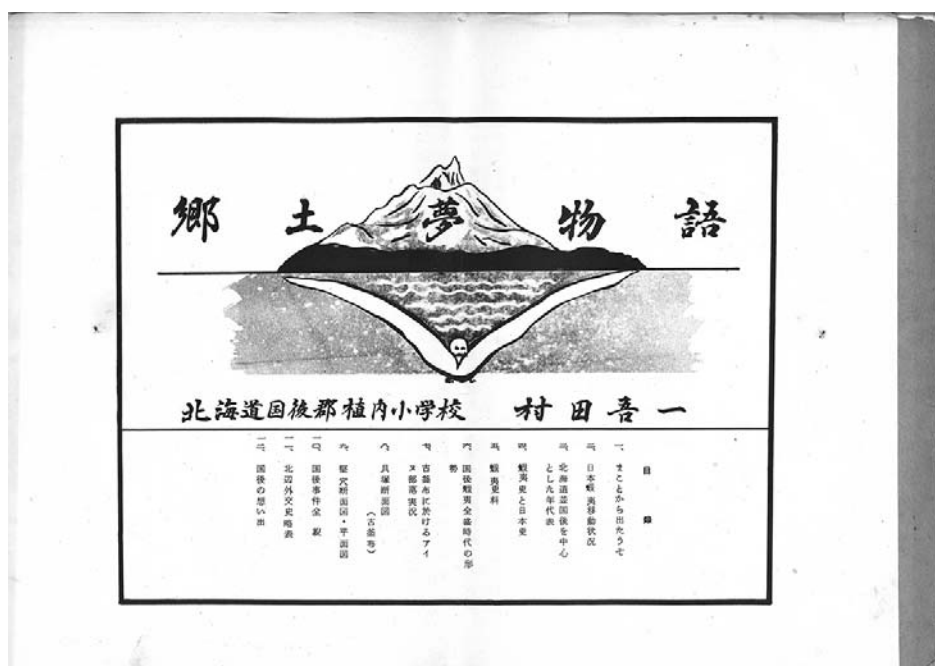
紙面の限度から、学校の校長や村長や、村議等を割愛したが、

決してその功績をないがしろにしたのではない。それぞれの分野で千島開発の貢献者であったことを集記して永くとどめたい。

元国後島留別村乳呑路国民学校長
現住所 北海道目梨郡羅臼町栄町

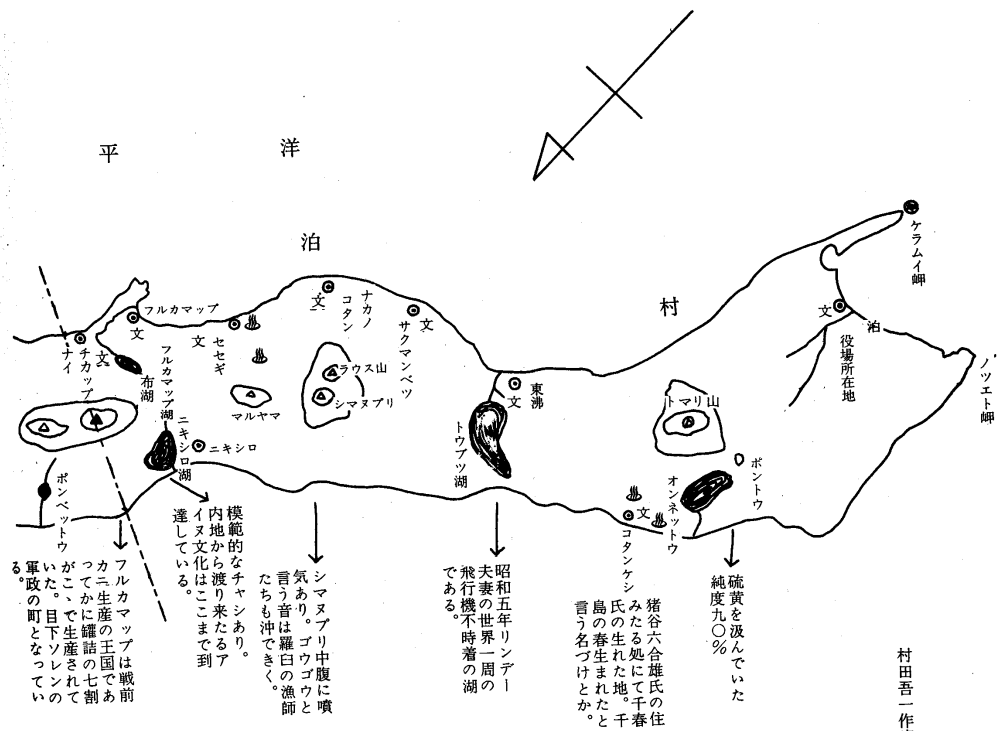
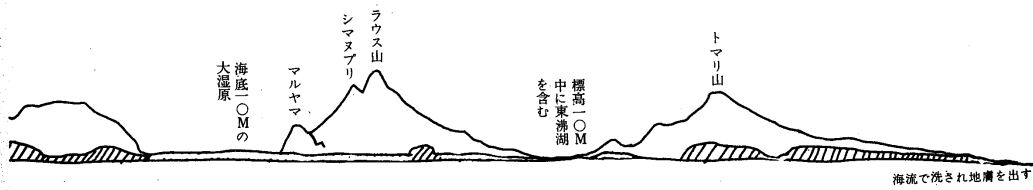


島ノ理科教授（昭和7年10月作成）
（北海道立北方四島交流センター蔵）



郷土夢物語
（原本は昭和10年9月作成、戦後復刻）

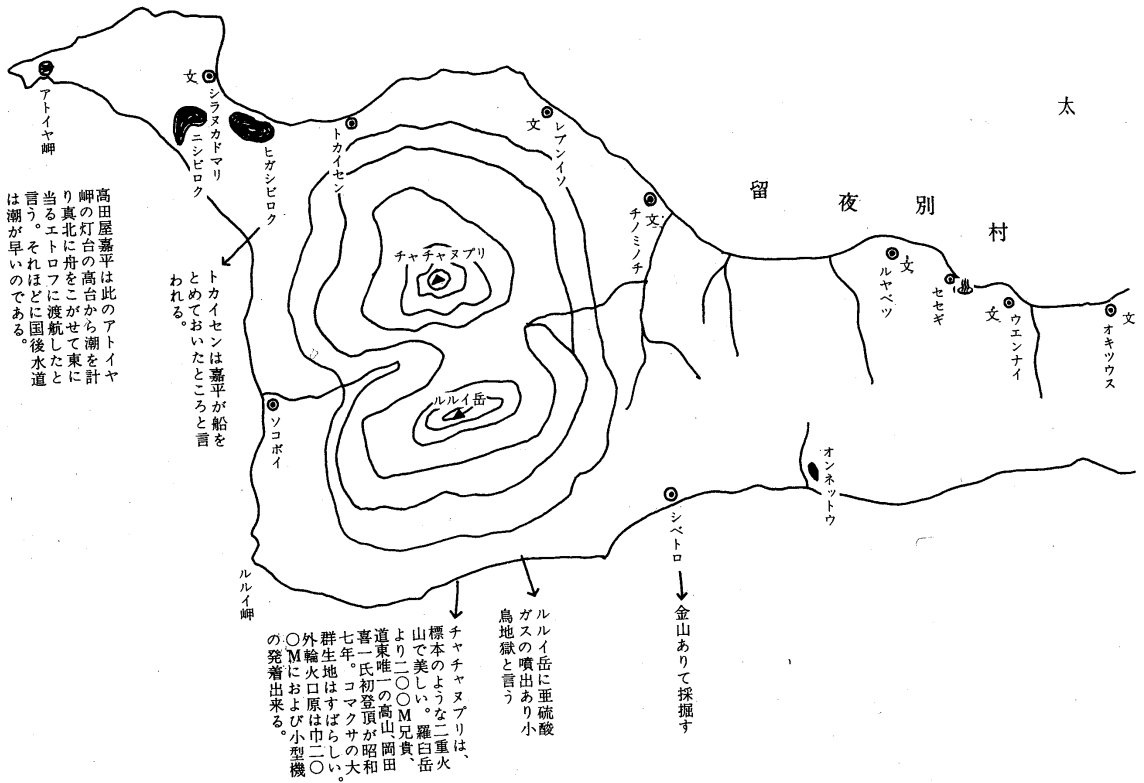
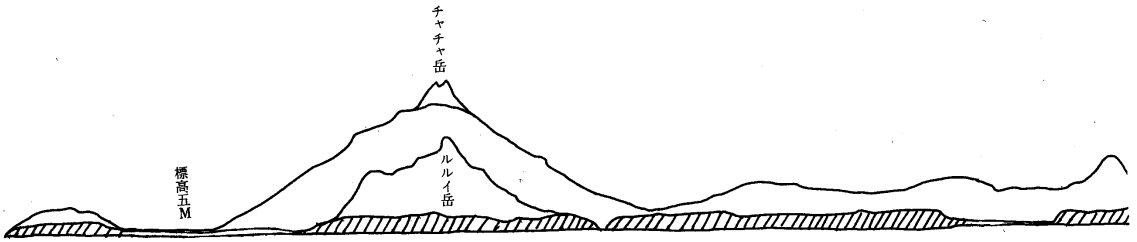
見 取 図



村田吾一作案

根 室 海 峡

島 後 国





北千島の終戦前後

元占守島住人 別 所 二郎 蔵

はしがき

北千島の終戦前後の諸事情は、あまり一般に知られていないし、記録や見聞をとりまとめたものも見受けられない。しかし、やはり太平洋戦争、あるいは旧日本の終局といった大きな事件の一コマ、しかも、かなり特異な一コマであった意味深いものがあるようである。

そこで、根室市の要望もあり、とりあえず、その概要を記してみた。資料などの不足で誤りもあるだろうし、視野が狭いから重点のおきかたが偏っている場合もあるかと思う。だから、こればかりで、もっと精度の高い正鵠を得たものが多数あらわれることを願ってやまない。

一．終戦まで

北千島軍事のあらまし

北千島は戦争中、北の前線、ことにアリューシャン戦線のアッ

ツ島が陥落してからは最前線であったから、戦闘は何回も起きている。なかでも終戦後、ソ連との間に起きた戦闘、いわゆる北千島戦争あるいは国端崎戦闘が一般に知られている。もっとも人命の点からいえば、進駐、撤収などで本土間を航海中、潜水艦攻撃で受けた損害の方が、あまり知られていないが遥かに大きい。

しかし大つかみにいえば、北千島に用意された戦備、戦力を消耗し尽くすほどの大きな、あるいは持続的な戦闘は結局なかった。北千島守備隊はほとんど無傷のまま武装解除を迎えたといえる。

戦力の蓄積

北千島の軍備は終戦の十年ほど前から始まっている。略記すると次のようになる。

昭和八年（一九三三年）、海軍はパラムシロ島ルイ山に航空用気象観測所を設置。昭和十年（一九三五年）、ルイ山を中心とする航空母艦の耐寒飛行演習。昭和十二年（一九三七年）、パラムシロ島武蔵湾に飛行場建設。昭和十四年（一九三九年）、シム

シュ島片岡湾に地下式重油タンク建設。昭和十五年（一九四〇年）～十六年（一九四一年）年？、パラムシロ島カクマベツ及びスリバチ湾に飛行場建設。

昭和十五年（一九四〇年）から陸軍の施設が始まった。昭和十五年（一九四〇年）九月～十一月、陸軍築城部千五百名がパラムシロ島柏原湾、シュムシュ島ベツトブ、蔭の澗等に兵舎、通信施設を建設。新編成の北千島要塞司令部の司令官以下八十七名がその各所（本部は柏原湾）に分散して試験越冬をした。

昭和十六年（一九四一年）から兵員、兵器の本格的送入が始まり、重砲、歩兵各一大隊が各所（柏原湾及びシュムシュ島の長崎・別飛・村上崎・国端崎・蔭の澗等）の警備にあたり、陣地、道路等を建設、要塞は、やや形体をそなえるに至った。また柏原司令部には陸軍病院が開設された。昭和十六年（一九四一年）末には工兵一中隊、山砲二中隊が増強された。

かくて太平洋戦争を迎えた。

昭和十七年（一九四二年）には高射砲、白砲各一中隊が加わり、飛行場の建設も計画された。またシュムシュ島沿岸五カ所ほどに上陸作戦に備えるトーチカが構築された。一方、海軍は片岡湾に施設管理部隊を常駐させた。秋冬から昭和十八年（一九四三年）初頭にかけてアリューシャン方面の戦局がようやく切迫し、これに対する北千島からの進駐、応援部隊の北千島到来、艦艇、船舶の待機、整備（パラムシロ海峡）などの動きが盛んになり、前線の様相が顕著になった。

アッツ失陥後の激動

昭和十八年（一九四三年）五月二十九日、アッツ島が奪われ、アリューシャン戦線が危殆におちいった後は、敵の進攻に備えて兵員、施設は急ピッチで増強された。すなわち海軍は失陥の直後、急遽シュムシュ島ベツトブ河を堰き止めて、ベツトブ湖に水上機の基地を設け、六月に偵察機五機、戦闘機十機ほどが配備された。基地完成後十数日の七月十二日、最初の米機の来襲があった。

ひきつづき陸軍は北の台（柏原に西接）に、海軍は別所が丘（片岡に北接）に飛行場の建設にかかり、各漁場の協力もあって、北の台飛行場は七月ごろ、片岡飛行場は九月完成した。配備は陸軍、隼戦闘機三十数機、軽爆撃機、偵察機各数機、海軍は偵察機数機、攻撃機約二十機、戦闘機約十機であった。ただし海軍機は九月～十月その全部が他戦線に転進した。陸軍は、さらにシュムシュ島南部の三好野飛行場建設にかかり、翌年夏ごろ完成した。

飛行場の完成につれ、高射砲、電探（レーダー）等の防空施設も設けられた。片岡飛行場背後をめぐる四基の海軍高射砲、長崎、柏原の陸軍高射砲、松村山（片岡湾北方湾岬）、武蔵湾の海軍電探、カプト山（柏原湾南方湾岬）、蔭の澗（シュムシュ島、太平洋岸）の陸軍電探などがその主なものである。電探のうち最も効果を発揮したのは蔭の澗電探であった。

要塞重砲も増設された。昭和十八年（一九四三年）以前に設置されたものを併せ、その主な所在はパラムシロ島では柏原背後

(硫黄山山麓)、カプト山(地下)、磐城(パラムシロ海峡北口)、シムシム島では四嶺山、蔭の澗(以上陸軍)、今井崎(片岡飛行場北背パラムシロ海峡北口、海軍)等である。うち柏原背後のものは三十センチカノン砲でほとんど北千島全域を制圧することが出来た。

その他、山砲、臼砲、野砲、速射砲(対戦車砲)なども強化または新たに配備され、機銃以下の小火器を擁する兵員も飛躍的に増加した。監視所、通信施設なども補設増強され、道路、港湾施設(主として海峡、とくに柏原湾)なども急激に押し進められた。なおアリューシャン戦線の苦戦にかんがみ、野菜畑、漁船等の生鮮食品の自給施設が設けられた。海軍はベツトブ湖背後の丘陵、別所が丘、カクマベツなどに各数ヘクタールの圃場(農耕隊、手耕)を造成、陸軍はシムシム南部の本居川流域に約二十ヘクタール(馬耕、手耕、現地自活班)、柏原背後の丘陵に約十ヘクタールを造成した。その他、各地区の大小の部隊は皆、小圃場を設けた。魚類は昭和十八年(一九四三年)までは各漁場、定住組合(後述)などの協力によったが、昭和十八年(一九四三年)以降は直轄の底引船を陸軍は中型約五隻(漁撈班)、海軍は大型一隻(漁船隊)を備えた。また各地区の部隊が早くから河川、沿岸などで小漁撈を行っていた。ちなみに、豆腐、コンニャク、カマボコ、甘味品の一部なども現地で造られた。

兵員は昭和十七年(一九四二年)末、陸海あわせて約五千名であったが、昭和十八年(一九四三年)にアリューシャン増援部隊

と撤収部隊双方を受け入れ、その上増強されたので、この年の末には戦線の約三万八千人になったと推定される。その他、設営の民間土建労務者(主として海軍関係、半島人多数)、いわゆる勤労奉仕隊なる徴用労働者などが推定三千人渡島していた。漁業の島(労務者約二万人)といわれた北千島は、ここに忽然として要塞島に変貌した。

なお陸軍(千島第一守備隊、のちの第九十一師団)は引き続き司令部をパラムシロ島柏原に置き、海軍(千島根拠地隊)は司令部を片岡に置いた。

昭和十八年(一九四三年)以後

昭和十九年(一九四四年)二月、三月、満州から中型戦車一連隊(四十車両)、軽戦車一中隊(五、十輜)、歩兵第二大隊が北千島に増派された。五月、さらに本道から歩兵一連隊と別に道路(主としてトラック道路)建設のため、歩兵一大隊とが派遣された。五月(四月?)には、昭和十八年(一九四三年)秋に他戦線に転進した海軍航空隊(第十二航空艦隊)も去年と、ほぼ同じ陣容で再来し、ここに北千島の戦力は最高となった。兵員総数約四万三千人。当時、米軍の進攻上陸の公算が大であると考えられていた。

九月、本道から派遣された歩兵一連隊と一大隊は帰還し、代わって満州から臼砲二大隊が到着した。同じ月、十二航空艦隊も

再び転進し、残留したのは九七艦上攻撃機四機だけとなった（一小隊をもって終戦に至った。陸軍航空隊も転進が相次ぎ、終戦時には隼戦闘機四機を残すだけとなった）。

昭和十九年（一九四四年）の道路建設以外の設営は、兵舎、砲座等の避爆隠蔽のための奥地移転、兵員、弾薬、糧秣、医薬、医療施設、舟艇、通信施設などの対爆坑道作業、戦車壕の堀削などが主なものであった。海軍はシウムシウ島潮見崎（今井崎に北接）に二十センチ対潜砲と十五センチ平射砲を設置し、片岡に水陸両用車十台ほどを配備した。みな、重なる盲爆や艦砲射撃、敵潜水艦の跳梁などに対処するためであり、一面、敵上陸と上陸後の持久ゲリラ戦を予期したものであった。なお後半期から昭和二十年（一九四五年）にかけて、敵戦車に対するカートリット爆薬による肉迫攻撃の訓練が盛んに行われ、いわゆる斬込隊も多数編成された。

昭和二十年（一九四五年）になると、北千島は次第に主戦場である中央部より南方戦線の後方に置き去られる形態となったが、一方、対ソ前線となる徴候を深めていった。四月、ソ連の日ソ中立条約破棄により情勢は更に切迫した。五月、対ソ戦に備えてパラムシロ島南部の陸軍部隊を司令部のある柏原近傍に集中させると共にシウムシウ島国端崎方面の配備を大小の火器をもってする反復縦深のものに強化した。

これと共に本土決戦に備えて、陸海とも兵員、兵器、航空燃料等の一部本道逆送が行われた（五月より六月、同時に北千島の孤立

に備えて食料等の送入が行われた）。護衛力の充分でない、この移動は敵潜の好餌になり、北千島戦線の最大の犠牲を生んだ。かくて北千島守備隊は最高時の約半分、二万三千人に減少して終戦に至った。終戦時、食料は約三年分温存されており、武器や弾薬も、それに準じていた。ただし六月以降、交通運輸は半ば途絶していた。

諸戦闘諸作戦略記 ベーリング海海戦

時…昭和18年3月27日

所…アッツ島南西方。

アッツ島増援補給の船団を擁護する、パラムシロ海峡を根拠とする重巡洋艦「那知」以下の第5艦隊とアメリカ艦隊との遭遇船は、アメリカ側の巡洋艦2、駆逐艦数隻。交戦約40分。

戦果…巡洋艦大破1、中破1、駆逐艦大破1。

損害…軽微。

北洋唯一の艦隊戦であった。

アッツ戦闘友軍救護作戦

（パラムシロ海峡からの出撃）

時…昭和18年5月12日～5月22日

所…アッツ島周辺。

A 海軍大型飛行艇十数隻（一説に中型攻撃機19機）による米艦隊攻撃、1、2回、天候不良のため不成功

B イ号潜水艦3隻による米艦隊攻撃。戦果、巡洋艦1大破、駆逐艦2座礁。

C 駆逐艦2隻による強行補給（弾薬、食料等）、陸軍決死隊20名ともどもアッツ海浜に乗り上げ？交戦中の友軍を補給救援する作戦、天候不良のため引き返す。

D 海軍機による食料、医療品等のパラシュート投下数回、濃霧等のため成績不良

E 潜水艦による弾薬、食料等の補給（ゴム袋に詰め、風、潮汐等を利用して目的地に漂着させる計画）、天候不良等のため成績不良。

救護作戦は結局、目的不達成。

米機の第一回来襲

時…昭和18年7月12日

飛行艇？3機ほどシウムシュ島長崎以下、数カ所を爆撃、迎撃なく損害も皆無。

キスカ孤立友軍撤収作戦

（パラシロ海峡からの出動）

A 潜水艦による撤収、

昭和18年5月中旬～6月20日、のべ12隻、撤収人員820人、損害…イ号潜水艦座礁1、戦死者102名。

B 艦隊による撤収（濃霧を利用して突入、総員撤収の計画）
実施部隊…軽巡3、駆逐艦5。

援護部隊…重巡2、駆逐艦8。

第1回 キスカ到着予定 7月11日、濃霧うすく引き返す。

第2回 7月29日、キスカ鳴海湾突入、守備隊全員5,227

名撤収成功

損害…事故死1。

米機の第二回来襲

時…昭和18年8月12日、

重爆8機による低空銃爆撃、シウムシュ島片岡飛行場（設営中）およびパラシロ島柏原地区の漁工場。

迎撃…陸軍隼戦闘機約10、海軍零式戦闘機（水上機）約10。

戦果…撃隊破5、

損害…戦死、隼搭乗員1、設営労務者約15、

漁業労務者約3、被弾不時着、隼1。

第三回米機来襲

時…昭和18年9月12日、

重爆6機と軽爆12による低空銃爆撃、パラムシロ海峡一帯の艦船、漁工場、軍事施設機器など。

迎撃…地上砲火および隼戦闘機約30、海軍機は不詳。

戦果…撃墜破11、被弾ソ連領不時着7、搭乗員捕虜1？

損害…戦死、隼搭乗員1、船員約30、

揚陸協力隊（漁場労務者）約11、汽船1大破、

燃料ドラム罐堆積1カ所炎上、

陸軍食料甘味品倉庫1棟類焼。

この空襲以後、敵機来襲は一時途絶えた。

昭和十九年（一九四四年）

二十年（一九四五年）の空襲概況

途絶えていた空襲は昭和十九年（一九四四年）元旦夜中から再開され、以後、悪天候以外は一日一回夜中を原則として飛来（一機後四機ほど編隊）し、高々度からの推測爆撃（時に偵察用の照明弾投下）をした。夜間、高々度であるため迎撃は地上砲火、戦闘機ともにほとんどなく、損害も精神的以外のものは皆無。

夏期を迎えると、やや戦闘は活発になり、敵機は往々昼間低空して主として海峡方面を銃爆撃するようになり、迎撃も時おり戦闘機が出勤し、地上砲火は空を蔽うほどになった。ただし戦果、損害は共に昭和十八年（一九四三年）に及ばなかった。昭和二十年（一九四五年）になると敵機は、一層大胆に銃爆撃をすると共に、新たに焼夷弾を多量散布して海峡方面の軍民施設の焼却をはかるようになった。迎撃は戦闘機が少数になったため主として地上砲火であった。しかし損害も決定的なものではなく終戦に至った。見聞した昭和十九年（一九四四年）から二十年（一九四五年）の空戦結果は次のとおりである。

戦果…迎撃破6〜7機、捕虜搭乗員3。

損害…戦死は陸軍約5、海軍約8、民間約5。

被爆…汽船1（小銃弾を満載）、海軍高射機関銃座1、

海軍冷蔵庫1、民屋1〜2。

焼失…陸軍柏原港湾関係建物数棟。

その他補給及び揚陸作業が少なからず阻害され、漁業も直接間接、被害を受けた。

昭和十九年（一九四四年）

二十年（一九四五年）の艦砲射撃

最初の艦砲射撃は昭和十九年（一九四四年）二月二十八日夜中で、パラムシロ島、武蔵湾、海軍飛行場（予備的飛行場はほとん

ど不使用）に照明弾をさきかけとして約三千発の砲弾が撃ち込まれ、地上施設が壊滅（戦死傷なし？）した。損害は軽微だったが米軍の上陸作戦近しと思われ、陸海も司令部にあたえた衝激は大きかった。五月、また武蔵湾が砲撃され二十数機が破壊された。その後、味方航空兵力の増強（前述）を知ったか来襲は途絶え、九月、海軍機の転進と共に再開、武蔵湾のほか摺鉢湾も襲われた。冬期の結氷中は遠のいたが、昭和二十年（一九四五年）春にいたって、また活発（月一回ほど）になった。地点は依然、武蔵湾が主で、陸海の心臓部であるパラムシロ海峡には遂に接近せず、砲撃規模もあまり変化がなかった。最後の来襲は七月二十二日であったが、結局、艦砲射撃は終始一種のけん制作戦であって、艦攻機または重砲等による迎撃もまた、ほとんど行われなかった。

潜水艦による損害

北千島水域で敵潜に撃沈された船舶は総計七十二隻（二百トン〜九千トン）にのぼったといわれる。その損害状況は不詳であるが、うち将兵が乗船または乗船かと推されるものは船名をあげうるもの四隻（天竜丸、蔵王丸、白洋丸、太平丸）、船名不詳のもの五隻、計九隻である。実際には十〜十五隻の兵員輸送船が沈められたと考える。

なかでも天竜丸の場合は僚船とも四隻船団がオホーツク海中央で雷撃され（昭和二十年（一九四五年）五月二十九日）、うち天

竜丸ほか一隻（各一千名内外乗船）が沈没三百名足らずしか救助されなかった。

諸般の事情から北千島戦線で敵潜による人命の喪失は総計一万〜二万であろうと思われる。兵器資材の損害も他戦闘のすべてを併せたより、はるかに大きかった。

風雪などによる損害

北千島特有の「悪天候などで生命を失った」将兵軍属の数は次のとおりである（見聞したものだけ）。

二十三名（雪疵の崩壊）、約五名（猛吹雪）、約三十名（流水と潮流）。

兵器、資材の損害（同じく見聞）は、大型飛行艇約六（風波）、水上戦闘機約三機（強風）、隼戦闘機約九（猛吹雪）、艦上攻撃機三（濃霧）であった。

守備生活のあらまし

設営と自然との戦いに明け暮れたというのが守備将兵おこたの日常であった。昭和十八年（一九四三年）後半に主食糧を減じて（陸軍一人二合五勺）貯蔵米の温存がはかれるようになってからは、農耕、漁撈などのいわゆる現地自活が主要作業の一つになった。

士気は昭和十八年（一九四三年）前半までは全般の戦局を反映して大いに上がっていた。アツツ失陥なども、むしろ一つの刺激になった。しかし昭和十九年（一九四四年）以降は中央戦局の窮迫が将兵の心理に投影をせざるを得なかった。昭和二十年（一九四五年）、兵員等の大量引揚の後には、島流しの気分も一部に生じた。要するに守備生活の前半は屯田兵的であり、後半以降は籠城部隊に似ていた。

設営作業の主なものは陸揚作業（人力）、運搬（トラック、馬、犬、手車、背荷）、覆土または土塁による飛行機、陣地、兵舎等の避爆隠蔽作業（人力）、坑道作業（前述）、タコツボ、戦車壕の掘削、コンクリート作業であった。なかでも最も労力を消耗したのが坑道作業であって、岩石（集塊岩、凝灰岩、安山岩）を掘り抜くのに爆薬を使用することもあったが、多くの人力によった。これがために鶴嘴をわざと片鶴嘴にしたものが多数使用された。片鶴嘴こそ北千島守備隊の労苦を象徴するものであった。以上のほか兵舎、道路などの除雪作業は冬の日常時であり、時おり意外に人力を費やした。

食糧は昭和十八年（一九四三年）前半までは普通給与のほか自給野菜（送入された野菜は、陸軍は主として乾燥物、海軍は、やや事情をことにした）、山菜、河川、沿岸の漁獲、各漁場の贈与なども加わって充分であり、一部では栄養過剰の気味があった。しかし、昭和十八年（一九四三年）後半からの節米は決定的影響を及ぼし、昭和十九年（一九四四年）になると陸軍部隊の一部に

栄養失調のものが現れるようになった。これがため多少の部隊は、それぞれの現地に即した自活の方法を講じ、至る所に小圃場や小漁船が見られるようになった。また銃獵（海獣、水鳥）班や海草班もつくられ、あらゆる手段で栄養の自給を図った。消化吸収を充分にするため、飯米の三十分咀嚼法も励行された。北千島陸軍守備隊が多く体力的に破綻を来たさず、最後まで耐え得たのは上層の指導設営（司令部直轄の農耕、漁撈等）もあったが、主として中堅以下の将兵の真摯な努力に基づくものであった。一方、海軍部隊は少数であったためもあり、節米等のことは行われなかった。

栽培作物の主なものは体菜、白菜、蕪類、時なし大根などの十字科作物のほか、馬鈴薯、葱類などである。収穫は大体、本道なみで、蕪類と馬鈴薯は部隊によって特別の成績をあげたものがある。山菜は食用野菜の全般にわたったが、その主なものはコジャク、ハマハコベ、チシマアザミ、チシマヨモギ、チシマイラクサ、ギョウジャニンニクなどで、ナナツバ、マルバトウキ、ハナウドなども不味であるが利用された。コケモモ、ガンコウラン、クロマメノキ、クロミノウグイスカグラ、ハマナス、這松の実なども盛んに採取された。うち熱量源として、最も効果をあげたのは脂肪に富む這松の実であって、全島いたる所にあり貯蔵も容易であった。

河川の魚はカラフトマス、オシヨロコマ、アメマスその他、シロサケ、ベニマス、ギンサケも局地的に捕獲された。沿岸漁には各種のカレイ、カジカ、コダラ、アブラコ、ハナサキガニなどがあ

り、海豹、トド、カモ、カモメの類も銃猟された。栄養補充に最も重要な役を果たしたのは、これ等の水産物であつて、塩蔵、クン製などにして貯蔵もはかられた。

また千潮磯のシロガイ、ムラサキガイ、バフンウニなど、断崖などからはカモメ類、エトピリカ、ツノメドリ、ウガラスなどの卵、さらに暴風によって海岸に打ち寄せられたアカボヤ、ミズダコ、ナガウバガイなども皆、利用された。太古以来、北千島の食資源がかくも広範囲に動員されたことは、まずなかったであろう。衣服の支給は終わりまで充分だった上に相当量の貯蔵があつた。

ただ、毛織物を主とした防寒衣は、北千島のように烈風と多湿の土地では、最適なものとはいわれなかった。鞣皮の軍靴も同様であつた。後半期、土地状況に即した長靴が相当行き渡り、船舶、漁撈関係の兵はゴム合羽などで身をかためた。実際、風雪に外被を吹きあおられ、雪で湿った手套、軍靴での行進は相当の苦痛であつた。余談になるが、後に進駐して来たソ連軍も甚だしく風と湿気を嫌つた。

兵舎はもとより木造バラックで、強風の地・北千島の気候が考慮されたものではなかった。ただ、北千島の冬期は北方地域としては比較的温暖であつたため、住居の不備から健康を損ねる者はほとんど見られなかった。隠蔽のため兵舎が半地下式または三角兵舎式になると、寒気は薄らいだが採光が甚だ不充分になった。

燃料は前半期までは主として石炭を用い、補助的に現地の流木、ミヤマハンノキ、這松などを利用した。木炭も輸送に頼つた。後

半期は輸送が窮迫したため、上述の関係は逆になり、それぞれ地区の状況に応じた自給燃料が主になった。概してシユムシユ島は這松が主になり、パラムシロ島はミヤマハンノキであつた。流木は、これが豊富なオホーツク海沿岸の若干の部隊が盛んに利用した。木炭もミヤマハンノキを利用、各地区で自給された。

医薬、医療組織は陸海とも世界最高級であつた。これはソ連進駐後、実証された。また気候、飲料水等の自然条件は、上述したように多少問題はあつたが、概して衛生的であり、土着の病菌、害虫は皆無であつた。したがって大きな医療的破綻は起きなかつた。ただ後半期に末端では栄養剤等が不足するようになった。

主な病害は昭和十八年（一九四三年）夏、海軍関係の土建組中に発疹チフスによる約二十名の死者が生じ、翌昭和十九年（一九四四年）末には前述したように、満州渡来の歩兵部隊から相当数の栄養失調者を出し、十数名帰還した。同じ頃、海軍関係土建組が航空燃料ブタノールを飲用して十数名が死亡した。昭和十八年（一九四三年）～十九（一九四四年）年には、チシマトリカブトの根を食用して、陸海各一～二名中毒になった。

医療に対して、精神的慰安は、これまた当然のことながら甚だ不充分であつた。最もある程度満たされた部面もある。卑近な事からあげると、酒は一週に一度、一人二合の割合で支給された（後に減量されたが）。煙草はホマレが主でバット、その他もあり、終わりまで続いた。甘味品はヨウカン、キビダンゴ、金花糖などがあつたが次第に減量した。レコードは各中隊に、ラジオは

各大隊に一台ずつぐらい備えられた（以上陸軍）。慰問袋は船便ごとに届けられ、慰問団は本道から昭和十七年（一九四二年）、十八年（一九四三年）、十九年（一九四四年）と三回到来した。なお海軍は片岡司令部に映写室を備え、接待婦つきの集会所もあった。陸軍には柏原に漁業会社経営の慰安所（慰安婦約五十名）、映画館、汁粉屋、時計屋、理髪店があった。また陸海とも甘味品、豆腐、コンニャク等は関係の部隊で製造し自活した。

以上のほか各部隊ごとに着島創立などを記念する素人演芸会が年一回ほど開かれ、越冬者などの民間人も参加することがあった。また師団司令部などの勧めで、北千島守備にちなんだ歌謡類が幾つか作られた。しかし生死はともあれ、勝敗を越えるほどに士気を高め得る歌謡演芸は現れなかった。これは周知のように国際的理念の確立がなく、内閉的だった戦争の本質に基づくものであった。

ここに、猛烈暗鬱な自然と尖鋭執拗な危機感とはさまれた幾万将兵の複雑巨大な心の動きは、とうてい尽くすことが出来ない。ただ言えることは、この中であって終始彼等の心を支えたものは、もとより天皇信仰であった。もはや末期的な信仰だったため、一層光芒を放った感がある。もう一つ、この否定的な自然の中で、時おり閃く強烈な美や楽（花や鳥）が、彼等のうちに消えがたい印象を刻んだことである。北千島が、これほど人の心奥にとり収められたことは未曾有であった。なお、当時若かった一、二の戦士の回想を書き添えよう。

「：島についたのは昭和十九年（一九四四年）の九月末、白洋丸は、この帰りにやられました。もう柏原の山は白くなつていて、ああ、こんなところで死んだら、死んでも死にきれないなあと思いました。：それから潮見崎の崖の中腹に穴を掘って、対潜砲を据えました。隊の総勢は二十名ぐらいで崖の下には平射砲隊やポンプ所、上の方には電探や水中聴音機がありました。：冬中は強い風には吹き飛ばされる始末、それが雪を巻いて来て、いや地獄みたいです。：兵糧は充分だったのですが、石炭が不足で、薪を方々から集めました。ベツトブの川口まで行って、立木をかついで来たこともありました。：ようやく春になって潮がひくと、下の磯に下りてタサノリを採りました。またコンブの根にハナサキガニが沢山いました。いかだで海に出て、トドを捕ったこともあります。：皆な大変おいしく、腹をこわすものもありました。そのうち花が咲き出しました。初めは桃色の花、それから赤い花や紫の花が咲き、おしまいは何もかもゴチャゴチャに一面です。：。帰りは六月頃です。二十センチ対潜砲を海岸まで降ろすのに大変な大仕事でした。：前の船団も跡の船団もやられたが、僕たちだけは運よく無事、小樽に入港しました。

：僕は前に南方にも出征しましたが、南の島より印象が深い。もう一度行って見たい。：」

（関沢孝一郎氏　もとシウムシウム島　潮見崎　海軍対潜砲隊）

「：長い間でしたから、ずいぶん色んなことがありましたが、

一番気持ちが悪かったのは、カートリットなどの火薬の乾燥をやった時です。たいへん危険な仕事で、沼泥では乾燥中に爆発して、兵舎が一軒ふっ飛んでしまった事があります。そこで潮見川の丘に横穴を掘らせ、天井穴をあけ、筵を壁に廻して棚を造り、火薬の包みを箱から出して並べました。出入りは天井穴からです。中にストーブを持ち込み、室内の温度を華氏の百度（三十七度）まで高めました。前もって試験してありましたから、このくらいの温度では引火しないことが分かっていました。しかし危険なのは、乾いた火薬を箱に収めハンダ付けする時で、もしハンダの滴りが一つでも中に入れば爆発です。

毎日、今日も生き延びたといった思いで兵舎に帰り、次の日、今日こそ、お陀仏かと出かけました。司令部あたりのお偉方が見に来たことがありましたが、天井穴からオーイやっているかあ…と声をかけただけで、中には入ってきませんでした。…火薬は少しでも湿っていると発火が遅れ、狙いが狂ったり、肉攻の場合には時機を失なったりするので、乾燥したのでした。

でも平生は観測手ばかり勤めてました。だから各地点間の距離は皆んな覚えていました。

その他おもな仕事は、ベットブ沖を通過する外国船の様子を観察し、行く先、トン数、積荷の種類、数量などを報告することです。やはり、カムチャツカ行が一番多かった。これも丸二年もやりました。

鯨がよくベットブ沖を通りました。大抵三頭ぐらい連れ立って、

大きさは十間ぐらい、沫香鯨だったかも知れません。…カムチャツカ半島では人が歩いているのが見えます。洗濯物などが干してあるのも見えた。蜃気楼現象で港や人家が浮き上がって見える事もありました。…アライトは変化の多い山で、ことに日没は、いくら眺めても飽きることはありません。夏は、太陽は一度アライトの裏に隠れ、また地平線ちかくに出てきて沈むのですが、とにかく最高の眺めでした。週に一度、二合ずつ酒があたるのですが、飲まない兵隊もいるから相当あたります。よくこれを飲みながらアライトの落日を眺めたものです。

それから、ガスが沖からベットブ海岸に渦を巻きながら押してくる有様も素晴らしいと思いました。

…冬、なに一つさえないものがないシムシュ島の雪原は、思い切り広く心うたれました。昭和二十年（一九四五年）の二月頃、報告のため大観台（三好野飛行場付近）に行ったことがあります。帰りに天気がよいので、いい気になってスキーを飛ばしたら少し方角を誤り、いくら行っても同じ地形でベットブに出ません。大分かかって。暗くなってから村上崎（ベットブ北方十四キロ）近くの特火点（トーチカ）にやっと着きました…。

…あんなに広く荒々しい所は見ることがありません。根室に帰ってから、しばらくは景色が大変小さく、おとなしく、なんだか箱庭のように思えました。

（佐々木豊保氏 ベットブ地区野砲隊 駐留 昭和十六年（一九四一年）九月～二十年（一九四五年）五月）

漁業と軍事

北千島の漁獲は、昭和十四年（一九三九年）度に総計約二十一万トン（うちサケマス十七万トン）の最高を記録したが、以降十万吨を越えることはなかった（北洋全体は約三十万トン）。これは既に資源的限界に達すると共に、戦時的諸制約をこうむったためであった。すなわち昭和十七年（一九四二年）、北洋漁業は北千島を含む全部、日魯漁業KK（以後、単に漁業会社と略称する）に統一されると共に、資材、労務者等の関係から若干、総体規模も縮小した。ことに蟹罐詰工場は輸出の窮迫から一工場（従来三工場）に縮小した。最も一方では、カレイ底引き漁業のように、十五年ぶりに再開されたものもある。これは一面、現地軍の需用を見越したためであった。なお従来は、冬期中は若干の越冬番人だけが残ったのであるが、この年から軍協力、水力発電、乳牛等のため、約百名の漁工場部員が越冬した。

昭和十八年（一九四三年）には、まだ戦争の決定的影響が現れなかった。即ち、この年のサケマスの漁獲は約八万三千トンにのぼった。しかしカニ漁、ニシン漁は全部休業し、タラ漁もまた若干縮小した。また飛行場の建設、軍用資材の揚陸などに多くの漁場労力が注がれ、少なからぬ障害が生じた。なお漁場の敷地建物等が数カ所（シムシユ島―片岡全部、潮見川全部、村上崎一部、長崎一部、パラムシロ島―村上湾一部、柏原湾一部）軍用に転用されたが、これは漁場そのものが既に整理統合の過程にあったた

め大きな支障は来たさなかった。

昭和十九年（一九四四年）になると船腹資材の窮迫のために、カムチャッカ漁業ともども例年の三分の一程度に規模縮小を余儀なくされた。したがって漁場は柏原、長崎、摺鉢、蔭の澗等々に、魚種はサケマス、カレイ？に限定するなど、最重点主義の経営をとるに至った。ただ空襲は、まだ散発的で余り漁獲に影響せず、艦砲射撃も漁期中は、ほとんどなかった。漁獲、罐詰製造高は不詳であるが、その多くは船腹不足のため輸送不能に陥った。なお北千島方面部長以下、幹部数名が帰途敵潜によって死亡した。この中であってタラ機船延縄二隻が軍需用に応えて、築港になった柏原湾から越冬出漁し好成績をあげたことは、北千島タラ漁者積年の宿願を達成したものであった。

昭和二十年（一九四五年）には、ついに例年の十分の一ほどに規模は縮小された。労務者約二千人、漁場は柏原、長崎、日の出川等の海峡地区以外は、シムシユ島東岸の蔭の澗だけであった。また空襲その他の諸資材も多くは過年度の繰越品であった。しかし大きな支障はなく豊漁裡に事業は進行終了、製品はサケマス罐詰約十四万箱等で例年の約三分の一、種々のことから此の年は昭和十四年（一九三九年）と同程度の大漁年であったようである。かくて引揚直前、終戦を迎え、半世紀にわたった北千島漁業は終局を告げた。

定住組合

北千島の定住者は初め一家族であったが、昭和八年（一九三三年）に青森県から一家族が来島し、以後二家族となった。一方この頃から北千島の漁業は急激に発展し、漁業施設、官公庁施設の拡充新設されるものが多く、これに従って越冬するものも増加し、昭和十三年（一九三八年）には約二百名に達した。昭和十五年（一九四〇年）には陸軍部隊の駐留が始まった。この情勢に刺激され、上記二家族を手がかりとして渡島居住を望む人々が次第に増加し、昭和十九年（一九四四年）には約八十名（うち女子約六名）に達した。その多くは動力付き漁船を持ち、当座の生活手段として、機船底曳などによるカレイ、その他の漁獲を軍納（陸軍）した。一部では野菜を作って同じく納入した。新旧定住者は協議して生産生活協同組合を作り（昭和十七年（一九四二年））、北千島定住組合と称した。

最も全ての組合員が定住開拓を真に希望したのではなく、これを名目とする、いわゆる一旗組的なものも少なからずあった。組合員の主な居住地はシムシム島でベットブ（二家族ほか一名）、城が崎（四家族ほか五名）、パラムシロ島で流崎（一家族ほか約十名）、柏原湾（約三十名、家族なし）等であった。漁船は中型四、小型二、耕地は合計約四ヘクタールであった。

戦局が窮迫して来た昭和十九年（一九四四年）から二十年（一九四五年）上半期にかけ退避離島するものが多く、終戦直前には

四家族ほか二名、計十八名に減じていた。ちなみに、此の頃までに灯台、測候所等の諸官庁の人々はほとんど退島し、残るのは新たに赴任した警察官三名？、郵便局員（軍管理）数名だけとなった。

二. 終 戦

終戦の諸表情

終戦は巨大な衝撃であって、小局地とはいえ到底その様相を言い尽くすことは出来ない。

ただ、以下筆者（当時シムシム島ベットブ在住）の見聞をしるして、その一片を伝える。

八月十五日（快晴日）、夕方近く柏原？通信隊数名がベットブを通過し砂丘の上から奥地の友隊に手振りで何回も同じ情報を伝えた。

「なんだ降伏、降伏といっているようじゃないか」

河畔でマス網を引いていた地区隊漁撈班の一人が叫ぶ。

暗くなって漁撈班の若い兵士が一人悄然として訪れた。

「やはり本当だったんですね。ついに無条件降伏、ほんとうだったんですね」

うわごとのようにいう。

翌十六日、漁船で海峡地区から数名の定住組合員が訪れた。

「：もう柏原の司令部では、どんどん書類などを焼いていますよ。どうも、この島はロスケに引き渡されるらしい」

「一ぺん島を退きましよう、アメリカならいいが、ロスケときたら何をするか、わかりやしない」。

同行してきた海峡地区の一少尉は、「：僕はもう何も考える力がなくなった」。

「：なに？、日本が降伏したって？、それなら私は内地に帰りたいくない、敗戦した所へ行つてどうするのです：」とはベツトブ在住の一定住組合長（最年長）。

おりしも来合わせた地区隊一兵長は、「えっ？日本が降伏したって？信じられん、信じられん」といふことなく駆け去っていった。

「：いやあ、あの晩は残念でならず、寝られずに過ごしました。ここで敗戦になるなんて：」柏原駐在所で赴任したばかりの老警部は涙をたたえていう。

「：あまり軍部がバクチばかり打つから、こんなことになるんだ」とは柏原漁場の若い一幹部。

×

×

×

『八月十五日、雑音の多いラジオから伝わる陛下の声を、私は何が何やら分からぬままに聞いた。陛下の放送とは、かつてないことだが私には事情がのめこめなかった。シユムシユ通信隊に電話で問い合わせると、予備学生同期のM中尉が出て来た。

「こういうことは電話ではいえない」

涙声だった。そこで私は初めて敗戦という異状事に思い至ったのである。全身の力が、すうっと抜けていった。

氣象隊のS中尉が号泣している。警備隊の若い少尉が拳銃で自ら命を絶った。空虚なやるせない空気がシユムシユ島全体を取り包んだ：』「喜多和平氏（片岡艦攻機隊長）記」

守備隊および民間の動向

十五日から米軍は海空ともに全く姿を消した。以後十八日のソ連軍進攻までの三日間は、久かたぶりの平和？が北千島に訪れた。もっとも十六日からソ連機の小爆撃が、すでに始まっていたのであるが、これを懸念する者はいなかった。

守備隊としては戦の終わった現在、残されたことは進駐軍を迎え武装解除を受けることと本土帰還だけである。これがため機密書類の焼却、秘密兵器（毒ガスなど）の海中投棄が行われ、全軍「敵を見ても攻撃せず、敵の攻撃を見たのち始めて反撃する」方針のもとに戦闘態勢は保持されていたが、中央終結の準備が始まり、すでに無用化した弾薬の一部海中投棄も行われた。なお八月十八日午後四時をもって停戦完了の最終時点とする”という中央方針もゆきわたった。また次のような師団布告も発せられた。

「遠からず全員内地に帰還しよう。内地は物資不足が甚だしいから、各員は手拭一本でも大切に、一品でも多く持ち帰るよ

うに」。

しかし帰還船がいつ到着するかは司令部としても明白な見込みが立たず、またこれを早めるなどの努力も行われなかったようである。国全体が、すでに見とうしを喪失していた。一方、兵士として残されたものは除隊帰郷だけであり、永く続いた危機感は去ったが、新たに虜囚強制労役などの不安に包まれた。ただ当座としては食料、甘味品などの給与は急に潤沢になり、ひさ方ぶりに解放感を味わった。

漁業会社としては、とりあえず最も急がれたのは、約五百名の女子従業員と約五十名の軍慰安婦（会社経営）の送還であり、独航船（三十トン級）によって早急に実施する計画が定められた。

次に陸軍所属の独工船（沿岸輸送用に乗組員ともども主として東北方面から徴用したもの）をはじめ一切の小機船を動員して、残る全従業員の帰還が計画されたが師団側の許可がとれず、会社幹部のうちにも、投降後に帰還と製品輸送を図ることを主張するものもあり一致しなかった。なお各漁場労務者の柏原終結が命令（師団）されたが、完全に実行されなかった。島内指揮系統が既にゆらぎ始めていた。

次に、定住組合員は全員、択捉・国後または本道退避と決まり、八月十八日までに流崎（パラムシロ島）に集結し漁船二隻に分乗する手はずを整えた。

なおこの間、海防艦一〇二隻、機帆船一〇二隻（設営隊乗船）が片岡根拠地から出港した。

三 対ソ戦闘

八月十八日以前

昭和二十年（一九四五年）八月八日のソ連の対日宣戦から十五日の終戦までの間は、両国正規の交戦状態にあり、北洋でも若干の小戦闘があった。即ち八日、ソ連はカムチャッカ西海岸オゼルナヤに停泊積み取り中の二隻の日本船舶を攻撃し、一隻は撃沈、一隻は拿捕され、護衛の海防艦は片岡湾に退避した。翌九日、片岡艦攻機四機が出撃し、ロパトカ岬灯台付近の軍事施設を爆撃した。またペトロハバロフスク軍港等の攻撃も、敵航空兵力が微弱であったため可能であったが実施されなかった。一方、ソ連は、この軍港にシウムシロ島侵攻の船団を終結しつつあった。

十六日午前、ロパトカ岬のソ連重砲は対岸シウムシロ島小泊付近の座礁船を試射、同日午後の霧中、ソ連機（一〇二機）はシウムシロ島オホーツク沿岸を盲爆した。十七日午後、ソ連機は、またシウムシロ島上空を通過し、深夜？パラムシロ島南端が艦砲射撃を受けた。しかし、これ等は気まぐれなものとの解釈され、真意は何人にも察知されなかった。連合軍の進駐は、どの国の手で行われるにせよ、平和的、合法的に行われるものと信じられていた。

戦闘略記

八月十八日の天候は北千島の夏期によく見られる天候（微弱風、海霧深く日中だけ晴天）であった。この気象条件は左記の戦闘を大きく左右した。

午前一時～二時、ロパトカ岬のソ連重砲はシウムシウ島国端崎付近の陣地を砲撃し、同二時～二時三十分（二時三十分は、いわゆる島時間の四時過ぎ即ち夜明け前）、ソ連駆逐艦二隻、輸送船四隻が竹田浜（東岸、国端崎南方四キロ）に近接、舟艇による不法上陸および陸揚が開始された。予期せぬ事と濃霧、暁暗等のため、自衛攻撃が開始されたときには、既に数百の敵兵が汀に到着していた。増大を続ける兵員、舟艇に対し、国端崎に装置された一切の火力（推定重砲一、白砲約三、野砲、歩兵砲等約十、その他重軽機関銃多数）が集中し、惨烈な消耗が展開した。しかし、海上からの急速な補給によるソ連側の増勢は、この消耗を越えて続けられ、人海的に横溢して味方火力を次第に制圧、歩兵部隊の白兵の抵抗をも排除して占拠区域を拡げ、四嶺山（西岸、国端崎南方四キロ、地区歩兵大隊本部、重砲陣地）に向かって進撃を始めた。これに対し中型戦車四十輜による自爆的な突入（四時～十二時）が行われ、一時潰乱状態に陥し入れたが対戦車ロケットおよび狙撃兵によって多くが撃破擱座された。また艦攻機によって敵輸送船団及び護衛艦隊に対し延べ五機の爆撃（五時～十時）が行われ、約五隻を撃沈破したが決定的打撃を与えるに至らな

かった。

この間、シウムシウ島中央部、海峡部、パラムシロ島海峡部、摺鉢湾等の部隊（歩兵、砲兵）は急遽、シウムシウ島北部をさして進出、逐次、四嶺山を中心として展開、ここに両軍主力は対峙した。味方兵約二万、ソ連軍約一万、双方の火力は不詳、時は正午頃（島時計二時頃）、戦闘開始以来、約十時間を経過し、陽は既に傾き始め、海霧の断続的襲来が始まり、相互の射砲撃及び飛行機の発着を著しく阻害した。やがて濃霧が、たれこめるにいたって戦闘は自然に、ほぼ休止した（午後四時頃）。

この間に行われた副次的戦闘として、重砲による相互の砲座及び灯台攻撃（六時～十二時）、敵艦砲による国端崎付近の味方陣地砲撃（六時～十二時）、海峡侵入の敵海防艦三隻に対する艦攻機爆撃（九時～十時）、海峡再侵入（背後上陸）の敵輸送船団及び護衛駆逐艦に対する重砲及び隼戦闘機攻撃（一時）、敵機延べ六機の国端崎付近爆撃などがあった。

この戦闘で守備隊側は投降的態勢から予期せぬ自衛戦闘に急激に移行せしめられ、装備的な不利（砲弾の不足、雷撃用水雷の皆無等）と情報的混乱（指揮命令の不徹底と矛盾、戦闘力の非総合性）を免れえなかった。一方、ソ連軍の敵前上陸は、その予備及び援護砲爆撃が甚だ稚拙不十分で、米軍に比して兎戯に類するものと評された、この未熟と準備不足をおして性急な侵入が行われたこと自体、自身の腹中を暴露するものであった。

かくて双方の十八日夕刻までの損害は守備隊側の戦死確認約三

百五十、非確認三百三十、擱座戦車約二十、自爆は艦攻機一、隼戦闘機一、大破は重砲一、野砲及び臼砲各數門、灯台（国端崎）一、ソ連側の戦死確認約二千、非確認（水死）約一千、撃沈は輸送船一、駆逐艦一、海防艦二、上陸用舟艇十一、撃破は輸送船四、駆逐艦一、大破は重砲一、灯台（ロパトカ）一等でソ連側の損害は甚大であった。なお人命は双方併せて一平方キロほどの小地点で一時間五百名内外という急速さで消耗した。

武装解除前後

戦闘はソ連軍の侵入に対する前線兵器系統の反射的対応といった形で始まり、指揮中枢（北方軍司令部 札幌）の追認が加わって、ついに両軍主力の対峙にまで発展した。方面軍司令部の自衛戦闘命令は、南樺太等で既に、その片鱗を伺わせたソ連の大がかりな本道も入れた侵略意図を阻む含みもあった。

しかし、自衛を将兵の生命についての事と限定すれば、国として降伏が既に定まっている現在、戦闘は甚だ無意義であり危険であった。戦闘を直接行う守備隊司令部は停戦の方針を定め（十八日午前九時）、午後四時、両軍対峙の散発銃砲火を冒して停戦交渉が開始された。交渉は停戦だけを主張する守備隊側と、武装解除を併せて要求するソ連側との間で難航をきわめた。その上、停戦武装解除についての方面軍に対する請訓が何故か無回答であったため、決着が遅れ二日間経過した。この間、ソ連軍は次第に整

備増強され、攻撃的態勢がうかがわれるに及び、自衛戦闘再開の時期も迫った。二重の壁に挟まれた守備隊司令部へ交渉将士の心痛は大きく、同時に前線将兵の運命は生と死との間を幾度かゆれ動いた。

この間に本土中央の意向は、ようやく定まり二十日午後、まず海軍部隊に停戦と武装解除の訓電があり、続いて二十一日朝、方面軍司令部からも同様趣旨の回訓があった。時に午前六時、前線は先制攻撃開始の直前であった。同日午前、停戦協定成立、翌二十二日午後二時、片岡湾入港のソ連駆逐艦内で調印が行われた。

この間、四嶺山前線で小競り合いが断続したほか、ソ連軍の背後、海岸付近の坑道、防空壕などに潜む味方の残留小隊が時折、射撃を加えた。その他ソ連機は連日、前線の海峡地区などを爆撃し、二十日朝、ソ連軍三隻は海峡侵入を試みて今井崎を砲撃したが、味方重砲及び艦攻機に威嚇されて退却した。

武装解除は二十二日、二十五日、三好野、片岡、北の台の三飛行場で海陸とも完了した（国端崎、四嶺山の残留小隊の結末は不詳）。将兵はソ連軍に対する敗戦意識は全くなき、ただ「大命」に従って降伏したのみであるという誇りを失わなかった。ただ、投降後の処遇に何等の保証もなく底知れぬ暗影を投じた。一方、ソ連軍は日本守備隊の数、装備、軍紀等に驚き、改めて自身の冒険に気付くと共に不審と敬意を感じた。やがて始まった国旗掲揚、国歌吹奏と共に、旧日本終末の一場面は彼等の裡に不滅のものを残して終了し、米ソ双方を迎撃した唯一の戦場、北千島から戦雲

は去った。なお、この日までに艦攻機隊及び隼戦闘機隊は、いずれも本土に接収した。

武装解除後、日本兵は多少の部隊に再編成され、おおむね前兵舎に戻り数日休息（この間、国端崎付近戦場の清掃、戦死体の仮埋葬）の後、兵舎の改造、道路工事、食料衣服の集積などの作業に従事した。給与は始め日本軍の平時なみで、ただ甘味品と煙草は、ほとんど支給されなかった。ソ連兵は極度に貧しく、しばしば身の廻り品とくに時計、万年筆などの略奪に潜入した。

民間動向

砲火が一応終息した十九日午後四時、かねて計画のとおり漁業会社の女子従業員と軍慰安婦は全員独航船二十六隻に分乗、柏原湾からの脱出におおむね成功した（一隻ほど中部千島で難破、女子従業員等はソ連軍に救助され、のち樺太真岡経由で帰還）、この脱出船出発の際、埠頭に群衆した見送り人の付近にソ連機爆弾が落ちたが幸い死傷者はなかった。

なお漁業会社は二十一日～二十三日にかけてソ連側の警戒不備の隙に乗り、軍徴用船その他一切の機船を動員して残る従業員全部の脱出を実施しようとしたが、反対するものがあつて中止された。しかしこの間、漁夫雑役夫等が小機船で無断脱出するも五十隻に及び、その多くは成功したが一部は中部千島で難船した。海軍関係の民間設営隊は十九日～二十日にかけて全員、機帆船で

片岡を脱出し、残されたものは、のち片岡組と名付けられた漁業会社協力隊だけであつた。

定住組合員は十八日までに流崎に全員集合し、十九日には柏原に兼ねて用意された食料燃料等を積みとり、二十日出発の予定であつたが、上述したようにソ連艦の海峡侵入があつたため延期、二十一日早朝、一隻は軍郵便局員一名を乗せて出発、脱出に成功、一隻は機関故障のため、さらに一日遅れて二十二日夕刻、脱出希望の漁業会社雑役夫九名を加え、別に三家族（十三名、うち筆者）一青年の計二十三名を乗せて出発した。しかし機関の調子が悪く、パラムシロ島西岸白川沖で漂流中、ソ連監視船に発見され曳航、片岡湾で取り調べの後、三十日に柏原漁業抑留者と合流した。

収容と漁場接収

進駐したソ連軍は、旧守備隊と同じく海軍は片岡、陸軍は柏原に司令部を置いた（建物も、そのまま使用）。海軍は二十三日から快速艇等で沿岸警備にあたり、陸軍は島内に軍政をしき漁場、工場等をその管理下におさめ、民間邦人全員（柏原の警官三名はスパイ嫌疑でカムチャッカ送り）を抑留し、漁業従事者宿舎は、そのまま収容所となつた（二十三日～二十五日）。ただし守衛はつかず比較的自由に行動ができ、旧管理機構や作業組織は、そのまま維持された。二十三日～三十一日にかけて大型汽船数隻が海

エピソード(1)

峽に入港、柏原、片岡に兵員、兵器等を陸揚し、旧守備隊の貯蔵米その他の食糧を満載して飢餓の噂さ高いカムチャッカに向かった。これ等の作業の一部に邦人は収容後、最初の労務として協力した。

この間にソ連の支配機構は漸次形を整え、柏原には交通検問所ができ、旧漁業幹部が威嚇のため突然軟禁された。アコ(カムチャッカ国営営業トラスト)の幹部は早くから柏原に来て各漁場、工場を取り調べていたが三十一日頃、漁業施設と製品をすべて正式接収し(漁場約九十、工場冷蔵庫等約二十、総投下資本約一千億円)、柏原第二工場事務所に本部を置いた。個人(会社)の財産は保護されるものとの国際通念を頼っていた旧漁業幹部にとって、これは大きな衝撃であった。ソ連軍の保証するものは生命と身の廻り品だけであった。九月二日頃から旧司令部と民間の交通は禁じられ、三日に旧軍無線は封鎖された。

ソ連支配は厳しさを現してきたが、双方個人同志の接触は次第に友好的になった。元来、漁業従業員はカムチャッカに出漁したものが少なくなく、口語を解するものも若干いた。一方、ソ連の兵や民間にもカムチャッカ出身のカムチャッカ原住民系のものがあり、中にはカムチャッカ邦人漁場に労役した者もいた。その上、粗大・包括的な大陸人と、細微・穿入的な島国人とは返って相和するものがあつた。ソ連軍侵入の際の守備隊の敢闘ぶりや、ソ連一般個人の極貧ぶりも友好にプラスした。戯語や身の廻り品の交換が早くも始まった。

異民族どうし、それも戦争というおまけが付いての初の接触だから悲喜劇が至る所に生じた。まず筆者の体験から、

脱出を図り、失敗に終わった時の事であるが、白川沖でソ連監視船(五十トン級)に発砲されて停船を命じられる。

“なに止れと言われなくても、俺の方の船は、とうから機械がかからないんだ”

便乗した柏原の若い衆の一人がぼやく。

そこでKさんの息子二人とO青年と四人で着火(小内火艇)にとび乗り、白旗をふりふり監視船に横付けする。上からヒゲだらけの人相のよくないのが二、三人、手をのばして引き上げてくれた。甲板で上衣を取り替えてくれるし煙草もすすめる。何しろ二昼夜も腹痛をおこした機関と取り組んだ挙句だから、一同煤け汚れたひどい風体で目ばかり光っている。難破でもしたのかと同情されたわけだ。

感のよいK青年は手真似を混えて、しきりに自分達の船のことを説明する。老人もいる、こんな小さい子供もいる、機械が悪いんだなどなど。

そのうち手旗信号で遠くにいる僚船を呼ぶ。近づいて来たのは少し小型だが飛行機のエンジンを据えたアメリカ製のすごい快速艇だ。

結局この快速艇に曳航されて出発点に逆戻りという訳だ。

“運命だ”

便乗九名の頭かぶの中老はつぶやく。

ところが両船を繋いで、いざ出発というところで舵のとり方が悪いのか快速艇はキリキリ舞いをしている。あまり引き船の経験がないらしい。そのうちテンヤワンヤの甲板から兵隊が一人海にこぼれ落ち、騒ぎは、さらに大きくなった。だが直き収拾がついて走り出す。

“これで万事おわりか”とKさん

“いや、万事はじまりかも知れない”

×

×

×

柏原のポルト（船溜り場）に落ち着いてからK青年と司令部を訪れる（九月の一日ごろ）、

“やあ、そうだったか、それは残念だった、ワシもソ連の軍艦を案内をして、ウルップの方を一廻りして二三日前に戻ったばかりだ”

若いS参謀はいう

“もうじき此処へも来られなくなるよ、ロスケは間抜けのようで段々に締めてくるからね、まあ暫く我慢すれば内地に帰れることになるだろう”

“しかし、あの戦争はおしかったな、もう二時間も押せば、けりが付いたんだが、今度この島が戻るのは二、三十年はかかるかな”

×

×

×

柏原第二工場事務所（八月二十八日ごろ）

“また御目にかれましたな。しかし、あの船は作りが悪かったようだから、機械が故障しなくても無事に行けたかどうかかわりませんよ、かえって運がよかったかも知れない”

若い時、頭山満翁に師事したことがあるというO海峡方面部長はいう。

“それよりも、長崎で聞いた時にはOさんは捕まって牢に入っているという事でしたが、よく出てくれましたね”

“いや、宿舎に歩哨がつくだけで昼間は、ここへ出て来て事務をやらせられるんだ。アコの奴が在庫品や施設の明細を急いでこしらえろというさいんだ。あんたも少し痩せましたね”

そこへ黒皮の上衣をつけた肥ったアコの幹部が兵隊三、四人連れてやってきた。K老通訳は事務所の金庫を押収に来たのだと告げる。

“金庫？ 金庫には何も入っていませんよ、どうして吾々をそんなに疑うんです”

沈着なOさんも腰を浮かして言うが通じようもない。

“持つて行くなら持つていつて見ろ、そればかりの人数では、どうにもなりやしないだろう”

軍隊あがりのF工場長は齒がみせんばかりだ。しかしソ連側は金庫にロープを付けて強引に引きづり出して行く。

“奴等は間が抜けていると思えば底なしに慾が深いし道義なんか守りっこない、今に何もかも取られてしまうさ。だから罐詰なんかなくて、早い所逃げてしまおうと言ったんだ”

茫然としてゐる一同の中で沈痛にいうものがあつた。

四、収容初期

収容概況

一口にいうと北千島の抑留邦人は収容者兼教師であつた。もつとも敗戦国民といった面が強調される場合も少なくなかつたし、その上、国民性、言語、習慣の相違が絡み合うから事は決して簡単ではなかつた。しかし、大観すれば大陸をはじめ北方幾多の収容所中もつともよく処遇され、もつともよく民族的自負を保つて終始した収容者であつた。だから病死、事故死などの件数割合も最小級である。これには守備隊の貯蔵米をはじめ残存生活物資が多量にあつたことや、始め漁工場を接収したアコが間もなく手を引き（工場機械等一部盗奪）、代わつて新設不馴れの北千島漁業コンビナートが来島したこと（十月）などの幸運もあつたが、何よりも強く働いたものは邦人の資質であつた。ただ漁獲、加工の技術に新来者より長じていたばかりでなく、一般教養でも（たとえば文盲率）おおむね一日の長があつた。もつとも一面目前の内紛的なことにとらわれ勝ちで、自らの立場を損ねた例も少なくなかつた。いわば日ソ両国民の地金、この北僻で出合つたのであつた。かくて二冬三夏二十五カ月、特異な示唆と悲喜劇に充ちた収容生活は終り、帰還船を迎えるに至つた。

収容地区 時期的区分

収容地区は柏原を本拠とした長崎、蔭の澗、摺鉢等が主要箇所であつた。また壘山、ハイランケ、白岩及びアライト島等にも漁期に限つて出張した。なお柏原地区中には早瀬川水力発電所（十名〜三十名）があつた。

各地区の収容者数と労作状況は大略、次のとおりであつた。もつとも各地区相互の人員移動は時期により、かなりあつた。今その状況を詳らかにすることは出来ないが、大勢としては漸次柏原地区に集中した。

柏原地区	約七百名、流網漁、底引漁、サケマス罐詰及び塩蔵、カレイ油煮罐詰、フィッシュミール、冷凍、港湾、製材、その他諸公共機関建設作業、水力発電
長崎地区	約二百名、流網漁、一般建設
蔭沼地区（白岩含む）	約二百名、建網数統、一般建設
摺鉢地区（壘山、摺鉢間諸漁場含む）	約四百名、建網（十統〜二十統）、一般建設

時期的には初期、中期、終期と三期に分けられる。

初期 昭和二十年（一九四五年）八月二十三日〜二十一年（一九四六年）八月末まで

占領当時の混乱を経て治安も漸次恢復、作業組織、管理組織再編成、収容所は旧漁業従業員宿舍、ほとんど残存物資で生活、諸事件頻発

中期 昭和二十一年（一九四六年）九月初め～二十二年（一九四七年）五月末まで

完成なった邦人収容所に全員移転（柏原、他地区は初期と同じ）、大隊編成となる。残存物資は底をつき漸次、ソ連風生活になる。治安完全。終期病死者続出。

終期 昭和二十二年（一九四七年）六月初め～同年九月二十日
帰還船乗船まで

邦人の指導的役割完了、乗船準備。

終戦直後の海峡地区

終戦直後の北千島は新旧のあらゆる事物が雑居して混沌とした情勢を呈し、海峡一帯、ことに柏原灣に甚だしかった。

地区別にみると片岡の陸上施設は割に変化がなく、ただ新旧主人を変えただけの観があった。しかし埠頭付近には小汽船が半壊座礁していて戦鬭の痕を止め、その後、久しく取り除かれなかった。背後の岡は昨日まで原始の姿を保ってきたが、今は多数の牛

馬が散点して忽然として広大な放牧場と化した。

長崎漁場は戦鬭の影響がほとんどなく、ソ連軍民の入り込みも少数であったから、当分、戦前の姿を保っていた。

磐城旧大隊本部は、そのままソ連磐城く村上灣地区隊本部となり、新たに大型の厩舎が建設された。厩舎の建設は磐城ばかりではなく各地区部隊で盛んであった。磐城く柏原の海岸一帯は小機船、大発などが至る所に打ち上がっていた。また砲弾？、薬筒、弾函類、防毒衣などが多数破棄されていて、所々足の踏み場もない状態であった。

柏原の情勢は最も複雑流動的であった。もともと北半の海手、漁工場区域には、あまり戦争の影響がなく、ソ連機に破壊された工場付属建物数棟も間もなく取り片付けられた。ただ工場の側に引上げられた大飛行艇と中央埠頭沖に沈んだ汽船の残骸は久しく放置されていた。ソ連漁業コンビナートの最初の建設は、この工場施設に塀を巡らし門衛を立てることであった。そのほかの一番の変化は、チグハグな服装をしたソ連圏の様々な民族が邦人入り混じって往来するようになった事であった。

柏原北半の山の手、旧司令部一帯の改装も緩慢であった。目立つ変化は、やはり往来する将兵の装備と容貌であった。なかでも円形の弾薬をつけた短身の自動小銃（七十二連発）が一番話題になった。彼等は日夜、聞き慣れぬ軍歌（主にカチューシャ、即ち六連装ロケット砲賛歌）を高唱して柏原一帯を練り歩き、また、しばしば柏原岩壁に向かって機銃練習を行った。こうした中で不

動の位置をしめていたのは旧陸軍病院で、二年後の邦人引揚に至るまで同じ施設と部員（数は漸次減少）で、その機能を果たした。

乱雑さが甚だしかったのは南半。カブト岩から工場区域または旧司令部に至る南半であった。この区域には船入澗、陸揚庫、旧軍倉庫約十棟、旧自活班施設約三棟、野天集積所約三十カ所などがあり、いわば旧守備隊の内臓部であって、ただでさえ遺棄破損の諸物が散乱し戦闘の余波をとどめている中に、ソ連軍民の人物が割り込み混雑を深めた。まず船入澗（ポルト）には投棄された諸物が一面に浮き沈み、一隅には十数隻の大発が半ば浸水したまま乗り捨てられていた。陸揚岸壁には軍徴用船（二十八隻）が舫（もや）い、軍装から漁夫風に急ぎ立ち戻った乗組員が、しめやかに機関整備の音を立て、その他大少無人破損の船が繫留または浮遊し、廃港的な雰囲気盛り上げた。これを破って出入するのは異様な爆音を響かせるソ連快速監視船（約六隻）であった。

陸揚庫の北隅には破損した旧守備隊戦車が五、六台放置され、近くにソ連小型ロケット弾の堆積、数台の自走砲などが見え、自動小銃を逆さに肩にした歩哨が行き来した。中央部は重油ドラム罐、被服、毛布、軍靴、乾パン、固型アルコール燃料、飯ごう、ロープ、シート、破損トラックなど火器以外のすべての旧軍器材が散乱し、物をあさる日ソ両国人がうろついた。南隅にはソ連粗製麦粉（ライ麦？）、大型バッテリー、乾黒パン、アメリカ製罐詰などが堆積され、旧軍三八式小銃を持ったソ連民間歩哨がぶらついた。時おりアメリカ製大型トラック、水陸両用車などが戦塵をた

てかえし、螺旋バネの付いた旧式ソ連馬車などが、その間を縫った。

陸揚庫から北に向かえば路傍や空き地のいたる所に各種の被服をはじめとして乾燥野菜、乾燥味噌、乾燥豆腐（いずれも大型ブリキ罐入り）の堆積があった。ソ連側は旧軍倉庫、兵舎等から、これ等の半不用物を取り出し、代わりに兵員と新物資を入れたのであった。この野天の物資とくに被服類は、監視が不十分だった事もあって大いに収容邦人やソ連民間人を潤し、無料配給所の観をていした。

また一部は道路工事などの邪魔になるため土に埋められた。

柏原背後、硫黄山、山麓（百〇二百メートル）と北の台飛行場四周には多数の陣地、坑道、掩体などがあり、多量の弾薬（銃砲弾、手りゅう弾、手投げイペリット容器）、糧秣、甘味品などが残され、一部は地上に散乱していた。弾薬は、もはや不用物であったが、他は収容邦人、のちには北朝鮮労務者も加わった、いわゆる宝探しの対象となり、様々の事件を生んだ。

収容邦人の生活と労務（一）

収容当時、柏原邦人の大部分は、いわゆる第二工場宿舎の海手（六棟、別に炊事場一棟）と山手（五棟）に分かれ宿泊、残り（主としてボイラー関係）は工場内宿舎に宿泊した。各バラック、いわゆるアコバラックは、みんな百坪内外の平屋で中央に一間幅

の土間廊下があり、その左右を長屋式に幾つかに区切つて畳や筵を敷き、ズン胴式のストーブを廊下の各所に置いた。

積雪期が迫るにつれ宿舎を筵囲いし、内部にシートなどを貼つて隙間風と雪とを防いだ。燃料は石炭が主で、初め充分であったが間もなく極度に制限された。その後は各自、各方面から石炭、木材などを盗取して補いをつけ一冬を過ごした。これはソ連民間人も同じであった。照明は早瀬川水力発電（他地区は火力発電）で、停電時はアセチレン灯などで補いつけた。ただ電球の補充はほとんどつかなかつた。用水は炊事場の水道（坂口川水源）から各自持ち運んだ。衣服、寝具は一同もとより夏仕度のままであったが、冬が近づくにつれ、前述した野天集積所等から各自適當の衣料を探し求め、若干作り変えもして防寒用のものを整えた。こうして「ヤン衆風」と軍属姿が混じり合つた奇妙な一部隊ができた。

食料は当初、夏期漁場なみに当てがわれ充分であつた米は第二工場の近くに精米場があり、精白米を炊事場で炊き全員に配分した。味噌汁も炊事場で乾燥野菜、野菜水煮罐詰、雑魚などを実にして作つたが、これを用いるものは少なく、たいいてい、原料を配分されて各自または小グループで副食物を作つた。サケ、マスの罐詰、塩蔵なども時々配給になり、各所から調達した旧軍食料もあり、冬期漁業のカレイ、カンカイが加わる等なかなか多彩であつた。調味料は味噌醤油については間もなく尽きたが、旧軍の乾燥味噌と粉末（アミノ酸？）醤油が多量にあつた。酢も軍の水

醋酸が各所に残つていた。また、黒パン、ラード、大豆油（満州もの）、豚脂肉罐詰、スープ材料、甘藍醋漬などのソ連食品も時々入手出来た。

砂糖は最初から皆無の状態であつたので各自諸方を探し歩き、旧軍甘味品などを少量入手した。乾パンは比較的大量に残つていて、菓子がわりにもなつた。タバコも初めから乏しかつたが、ソ連側から定量の配給があり便利な物交品にもなつた。酒は勿論、皆無であつたが薬用アルコールが少量残つていたほか、酵素剤を使って盛んに濁酒が造られ、収容所天国を謳歌するグループも少なくなかつた。また若干のものはソ連人にならつて、旧軍固形燃料（メチルアルコール）をしぼつて飲用した。茶、石鹼、マッチなども少量ずつ配給された。

娯楽は当然のことではあつたが何よりもまず賭博が盛んであつた。なにかと口実を設けて労役をさぼり、各グループで価値の怪しくなつた旧貨幣を賭けて、花札やマーチャン遊びに憂身をやつした。その他として碁や将棋も少しは行われ、また旧定住組合グループに蓄音機が一台あつて持ち廻りされた（レコード盤は旧軍のものが各所に見い出された）。昭和十九年（一九四四年）に入ると旧定住者グループその他のうちの希望者が相寄つて小樂團（小劇団）が結成され、公開の演芸会が時おり催された。またソ連映画館に赴くものも若干あつた。

治安は占領当初、ソ連兵が手廻り品掠奪に侵入する事件が諸方にあり、なかでも旧定住者グループのいる宿舎は婦人目当てで

あつて侵入の回数が多かつた（邦人一名射殺される）。しかし間もなくソ連憲兵の取り締まりが始まり、すこぶる厳正であつたことと、邦人の自衛が強まつたことなどのため年末ごろにはほとんど秩序が恢復した。

労役はソ連軍の雑役（薪割り、掃除など、初期には揚陸作業）も時おりあつたが、ほとんどが北千島漁業コンビナート関係であつた。初めは揚陸作業、工場の整備、模様替えなどが主であつたが、一月からカレイ底引漁（柏原、ソ連人少数乗り組み）が始まり、カレイ罐詰、塩蔵、冷凍などが開始され、労務者、技術者ばかりでなく管理計画にも邦人が参加した。また漁業全体の企画、管理、事務等は初めから旧漁業幹部の頭腦を必要とし、それぞれ各部の副主任または相談役となつた。ちなみに管理機構は大部分がソ連女性であつた。また一月には旧米工場倉庫？を改造した網工場が作業を開始し、流し網の修理、組み立てのほかタラ延縄の整備も行われ、主任、監督、事務員各一名のほかは全員邦人であつた。このほか屋内外の掃除清掃業務があり、邦人中の作業能力の低い者が従事した。

労働時間は実働八時間（午前七時～八時―午後四時～五時）で工場の汽笛が合図に鳴つた。小休息も度々得られるなど、概して作業は楽であつた。もつとも時おり時間外労役があつた。なかでも昭和二十年（一九四五年）十一月と二十一年（一九四六年）三月の二回、柏原で石炭荷役があり昼夜兼行で各三日ほどかなり監督も嚴重であつた。

いづれにしても作業意欲が高まるはずはなく怠業気分は、どの職場にも漲つていた。もつとも、この点になるとソ連民間人も同様であつた。報酬は食費、宿泊費などを差し引いた若干のルーブル給与があつたがほとんど使い道がなかつた。

医療は柏原地区では第二工場付近の診療所（邦人医二名、薬局員二名）が、そのまま継続されて日ソ双方の治療にあたつた。他地区には長崎、蔭の間にそれぞれ一名の医師がいた。主な疾病は流感、扁桃腺炎、食傷ぐらいであつた。入浴は第二工場ボイラー室近くに浴槽があり一同随時これを利用したが、シラミの発生は盛んであつた。

かくて比較的平穩に最初の冬を過ごした。北千島としては暖冬小雪であつたことも幸であつた。なお邦人と共に越冬したソ連民間人は二百～三百名ほどで大部分は柏原にいた。

昭和二十一年（一九四六年）五月下旬、大量の漁塩（粗粒）が柏原に輸送されてきて春のさがけとなつた。この塩荷役に塩蔵、網工場（当時休業）関係の総員約二百名が十二時間交替で三日がかり、疲労が甚だしかつた。これと前後して流し網漁（他地区では建網）が始まり、サケマスの罐詰、塩蔵およびフィッシュミール工場などの労役が増え、冬期中、相当余裕のあつた邦人労力も底をついた。五、六月、ソ連本国からの労務者一千名（女性、夫婦もの多数）、北鮮労務者約三千名が到来し、その約半数は柏原に留まつた。しかし一面、港湾、倉庫、製材、食堂、パン焼き、配給、銀行、クリーニング、理髪などの諸業種が漁業関係と別個

に稼行するようになり、それぞれ無統制に邦人労力を要求するようになった。その調整と内部からの突き上げに世話役（旧漁業大幹部）は、すこぶる苦慮した。なおクリーニング業には邦人女子三名（旧定住組合）が参加した。

柏原の人口が急増したため総ての宿舎は手狭となり日ソ双方、壁を接して住む状態となった。新来のソ連人のうちには廃漁船などに仮寓する者も生じた。やがて山手の邦人宿舎の改造が完了し、昭和二十一年（一九四六年）九月一日、柏原邦人全員が船巻きゴロの柵柱に囲われバラ線を巡らした異風の収容所に移った。

日本兵消息

武装解除後の将兵は各地に分散して労役に服したが、柏原地区では主としてカプト山々麓の兵舎に宿泊（数不詳 数千名？）して、ソ連兵舎、住宅、その他の建築、道路修理などに従事した。邦人収容者とも度々接触したが、互いに拘留不如意の身であること、各内部に諜報網がめぐらされていることなどから立ち入った話は、あまり出来なかった。

十一、十二月の数回に分けて、大型汽船で大部分の将兵は北千島を去った。残ったのは陸軍病院関係のほか推定約一千名の兵と下士官であった。その多くは柏原に居り、引き続き諸建設に従事していたが、昭和二十一年（一九四六年）後半から、また漸次、樺太方面に移動して行った。昭和二十二年（一九四七年）になる

と残留日本兵は二百〇三百名ほどになった。九月二十日の収容邦人引揚後も百名ほどの兵と陸軍病院関係が残ったが、昭和二十二年（一九四七年）十一月二十三日、すべての日本兵は北千島を去って樺太に向かった。

ソ連の建設とソ連人の生活（一）

渡来当時のソ連人の生活は、軍民とも日本からの押収物資の上に成り立っていたということが出来る。もちろん本国からの物資もあったが、それだけでは生理的最低限も保てなかった。結局、僻遠であるにもかかわらず（収容邦人同様）本国を上廻る生活が出現した。

まず食料であるが本国物は黒パン（日量八百グラム）が主で、他には大型（約三十センチ角）軟質バター、スープ材料、漬物類が若干、少量のアメリカ精白麦粉、精製ラードなどがあるだけであった。このため残存押収の乾パン、サケマス罐詰などは決定的に役立ち、収穫し残された旧守備隊の馬鈴薯、蕪、大根などの根菜類も有効に利用された（大根は、ことに好んで生食された）。

米も最初は敬遠されたが間もなくスープ材料として嗜好されるようになった。ちなみに満州でソ連軍が押収した大豆油が昭和十八年（一九四三年）末期、食用および罐詰用として大量に持ち込まれた。なお冬期漁業が始まるようになってからは、カレイなどの豊富な漁獲が国籍、職業などを越えて北千島人を潤した。

衣料はソ連のものには黒または灰色のラシヤ地（外套、ズボン、ときに上衣）、藍色または黄土色の刺子綿入れ（上衣、ときにズボン）などが主で、このほか婦人は単色薄地のスカートを着用する者が多かった。その他、皮革類（外被、靴）、フェルト類（靴）などで一応、保温の最低限は維持されていた。押収日本物資のうち最も役立ったのは毛布類と白地の下衣類で、防寒外被もソ連式の重い皮外套よりは軽快であるため盛んに用いられた。

ソ連の兵隊（陸軍）は一般に灰色肩章付き外套に藍色刺子綿入れ上衣、赤い星をつけた戦闘帽にフェルト靴といった装束で一応整然としていたが、民間は高価な黒や赤の皮外套を着込むものもあれば、上衣はなく汚れたシャツの上に日本ものの防寒外套を引っかけるものもあるなど様々であった。また単色の衣ばかりの婦人達は模様彩色の布地を欲すること甚だしく、旧駅通、慰安所等にあつた夜具類をほぐし、うわ地を相争つて持ち去り、頭布やスカートなどに用いたため邦人の失笑を招いた。ただ昭和二十年（一九四五年）秋、最初に渡来した民間人は、いち早く日本もの衣料を入手したためか破服や破れ靴をつけるものは見当たらなかった。

しかし昭和二十一年（一九四六年）春、本国から新たに到来した労務者は全く難民同様、満身に身を包んでいる者は一人もなく女性の下着の不足が殊に目立ち、児童はみな裸足で喜々としていた。所持品は、たいてい袋かトランク一つだけであつた。しかし若干の牛、山羊、鶏などの家畜は手放さずに引き連れてくるもの

があつた。邦人一同、彼等の貧しさと強靱さに複雑な気持ちを抱いた。ちなみに彼等の多くは、辺境（ロシア国東部？）の凶作地域から募集に応じたものであつて、男女とも前線戦闘の経験のある者が多く、戦傷あと歴然たるものも往々見受けられた。“やつ等はここに来て、あまり物があるのにビックリしているさ”とは邦人の一致した意見であつた。

住宅は当初、柏原民間の大部分は旧一工事務所（木造二階建て延べ約二百坪）と旧二工事務所（木造平屋約百坪）の二棟を若干内装を改めて住み、漁業コンビナート事務所も後者にあつた。しかし昭和二十年（一九四五年）十二月、猛吹雪中、一工事務所は失火全焼。急遽、浜手邦人宿舎（前述）の二棟に邦人を立ち退かせた。柏原以外の地区ではソ連人は少数であつたため勿論、残存建物で間に合つた。軍隊も前述したように柏原旧司令部をはじめ各地区の残存兵舎を利用し、内部にペチカ式暖房などをしつらえて居住した。なお昭和二十年（一九四五年）中には早くもソ連式住宅（高級将校？鋸屑詰め、または木レンガ式）の建物が二、三棟、柏原浜手邦人宿舎付近にできた。

昭和二十一年（一九四六年）になると軍の新兵舎は柏原各所で建築が進んだが、民間住宅の本建築は前述した邦人収容所以外はほとんどなかった。ただ幕舎及び幕舎布を屋根覆いにした三角兵舎式のもの、浜手宿舎に接して数連建ち、新来の本国及び北鮮の労務者を収容した。また労務者のうちには諸方の遺棄材、便所跡、焼跡のトタン板などを利用して自身の住居を作る者があつた。も

とより小屋であったが当人にとっては大きな喜びであった。

酒、煙草、茶、甘味品などの嗜好品は、民間は大たい日本人と同じで、正規の配給があったものは煙草（月二袋ほど）と茶だけで他は各自、諸方から入手した。なかでも旧軍の固形燃料は盛んに飲用されたが、まもなくほとんど姿を消した。軍隊の嗜好品の配給は民間よりは食料同様やや種類が多く量も多かったようであった。娯楽、教養等については後述する。

住居その他、衛生施設は充分とはいえなかったが健康は大体良好で、漁場診療所で見受けられた疾病は邦人同様の感冒、扁桃腺炎などの軽いものに限られていた。昭和二十一年（一九四六年）春、夏、ソ連児童間にハシカが流行し邦人児童も感染した。ちなみにソ連人は顔に痘瘡のあとをとどめるものが多く邦人に話題を供した。それにもまして目立ったのは種族の多種多様なことで、スラブ系はもとよりトルコ系、コーカサス系、蒙古系、朝鮮系、フィンランド系、ユダヤ系、キルギス系、シベリヤ系原住民系など、顔かたち、髪の色など様々で人種展示会の観を呈し、ソ連人自ら自国内に三十数種族がいるといつて誇り顔であった。宗教も二、三あった。ただし言葉は、ほぼロシア語に統一されていた。

ソ連の建設は終始ほとんど日本兵労力で行われ、漁業関係者以外は主として住宅、公共施設などの建造、政治、教育などの機関の整備であった。住宅の事は若干すでに述べたが、昭和二十一年（一九四六年）前半には柏原中央部の空地に木レンガ式五十坪程の兵舎が二棟ほど建ち、小個人住宅（軍および民間）も、この空

地の縁辺各所にでき始めた。材料は主として旧守備隊兵舎の解体材と北の台飛行場滑走路に敷いた厚板であった。ことにこの厚板は多量にあり、一時は運搬のトラックが台上へ引きも切らずに動いた。その後、ようやく柏原木工場で製材されたソ連材がでまわり出した。

公共施設で最初に出来たのは中央山手の図書館で続いて、その浜手に映画館、ダンスホール、レストランなどが建設され、これ等と道路をへだてて運動場が設置された。学校は皮肉にも旧軍慰安所の一棟を改造したものがあてられ、他の一棟は裁判所になった。治安取締まりの憲兵は旧駐在所に本拠を置き、国境警備隊の探偵局？も、その近くに設けられた。

その他、前にもふれたように旧第二工事事務所付近または内部に製パン所（約五名）、理髪所（約三名）、洗濯所（約五名）、配給所、銀行などができ、工場の北方浜手に木工場（約三十名、新設？）、南方浜手に倉庫業（約五名、旧軍倉庫を転用）、カプト岩船入瀬に港灣業（約四十名、旧施設転用）が開設された。これ等の諸企業は各個独立経営であり、労務者の多くは邦人であった。ちなみに会場の交通運輸は主に独航船と旧軍大発で行われ、陸上はアメリカ製トラックが各種あり、キャタピラ付きトラック水陸両用車も若干みられた。純ソ連製のものは螺旋パネル付きの馬車だけであった。

北千島コンビナート(一)

全旧漁業施設を接収した北千島漁業コンビナートの最初の事業は、柏原を根拠とするカレイ底引きとカレイ罐詰であった。すでに旧漁船の大部分は日本本土に脱出し続いて後述するように旧軍徴用船の一部が脱走、残余も邦人が半ば故意に衝突座礁などをして破損したものが多く、残った漁撈可能な漁船は僅か五隻ほどで、実際に底曳に就漁したのは三隻ほどであった。しかしカレイ罐詰(油煮、味付け)は、豊漁だった上、本国でも好評を博しさえした。これが北千島最初の冬期罐詰事業であった。最も準備された空罐は冬期中に使い果たし、あとしばらくは補充がなかったようである。

一方、冬期中は網工場で古流網を修理整備し、昭和十九年春期に到着した北朝?から押収の漁船約五十隻を加え計十隻?十五隻ほどで流網漁を行った。また上述したように蔭の澗、墨山などを始めとして各地区に建網約二十統をたてた。しかし不漁年であった事、資材のアンバランス、ソ連幹部の不熟練、日ソ労務者ことにソ連労務者の怠業気分などが重なって不良というよりは無漁状態で、したがって罐詰工場等もほとんど休業状態であった。

一方、底曳漁は冬期から引き続き好漁で罐詰、塩蔵、冷凍、フィッシュミール等に処理され、主としてウラジオストック方面に積出された。しかし総括的にみればコンビナート当初の事業収支は、到底相償うものではなかった。だれの目にも明瞭な、この

事についてコンビナートの一幹部は昂然と語った。

「なに、ここで魚が捕れなくても北海で捕れるし、北海で捕れなくても黒海でとれる。ソ連は大きい、一年や二年はどうでもいい、見ていなさい、いまにカシワバーラー(柏原)はモスコイ見たいな大きな街になるから……」。

エピソード(2)

占領当初、元来が奔放な邦人北洋労務者、まして合点のゆかぬ行き方で所有関係が逆になったからには、やつ等には何をしてもかまわないだろうということになる。引き続き悲喜劇続出、なかには日ソ双方の地金を鮮やかに浮彫りにしたものもある。

×

×

×

【徴用船脱出】徴用船のもと軍属たちは軍装に鎗りをつけてポルト内に放り込み、漁師姿になっておとなしくしていた。しかし同じ独航船仲間は皆んな脱出してしまっている。海に柵がしてある訳ではないし、やつ等は大きな船で日本に帰すなどといったるが、いつになるか分かるものかという気持。そこへ脱出に失敗した定住組合の船が入ってきて刺激をあたえた。密議や準備が始まる。重油ドラムが、こそそ積み込まれる。早くても遅くてもいけない。安心しているところを見はらかつてドツとやるべしという訳である。

九月二十二日朝、見るとポルトはガランとしている。あれもい

ない、これもないと数えると七隻も独航船が夜中に消えている。残ったものはアカが漏るとか、機械が悪いとか難のある船ばかり。その何隻かは空船であった。置き去りにされた人の話をきくと、どうも出発が打ち合わせより一日早かったらしい。一隻が功をあげて走り出すと、われもわれもと後に続いたようである。

ロスケが、いつ頃か気がつくかと様子をうかがっていると正午近くになってやっと騒ぎ出した。それから飛行機で探すとか、いや爆弾で二隻沈めたとか物騒な噂の飛び交ううちに、間もなく晩になって時間切れとなり脱走は完全に成功した。

しかしロスケもさるもの、晩方ポルトに船泊しているヤポンスキーたちを全員下船させ、有無を言わず皆んな大発で工場の宿舍へ送り、次の日はウサンくさい船は全部陸上げという用心ぶりであった。おかげで頭をもたげた第二次、第三次の脱出計画は一遍にオジャンになった。

× × ×

【戦果】脱走の手段がない陸のヤポンスキーたちの鬱憤のハケ口は、柏原背後の岡や谷を巡って坑道などにまだ残っている宝物（罐詰、甘味品、衣料、乾パンなど）を持つてくることであった。これを戦果と称した。初めは二三人でこそ出かけるぐらいで大して目立ちもせず、とがめられもしなかった。

そのうち噂は友を呼び、いつのまにか大部隊となった。都合よくコンビニナートの方も大した仕事もなく皆んな暇には事欠かなかった。天気の良い日などは晩方になると袋や箱を背負った人々

が山路から蟻のように連なつて意気揚々としての帰還であった。

いささか穏やかでないと思つていううちに十月、徴用船の脱走騒ぎの少し前であるが、秋晴れによい気になって岡や谷を探し歩いた一小隊は、とうとう司令部の裏の方にまで入り込んでロスケの痛い所にさわつたらしい。歩哨に追い払われてゾロゾロ退散する後からブツ放した七十二連発の弾が誰かのお尻に刺さつたとか刺さらないとか。以後、やや控え目になった。

ところが十二月になり、これは一越年しなければ帰さない気かと皆んな覚悟が決まつたところ、どこか今までは別の場所でブリキの大罐入りの乾パンが大量に見つかり、戦果あげはまた、急に活気づいた。食料自分まかないの意味もあったかコンビニナートの方でも大いにやれという。例の奇妙な行列は引きも切らずに一週間ほど続き、雪を踏み固めた道路が出来上がった。おかげで柏原の乾パンの価格は急落し、マホルカ（刻み煙草）一袋に大罐一つという相場になった。ソ連の民間人も邦人宿舎によく買いに來た。

× × ×

【豚と夜盗】最初の冬が過ぎ、戦果ものも大概つきてきたころ、ヤポンスキーたちが目をつけた一地点があった。浜手宿舎の少し左山手にある一棟の旧軍の土小屋である。中には罐詰その他美味しいものが沢山入っていることは皆んな承知している。しかし都合が悪い事にはソ連の番兵が泊まり込みでついている。この番兵、豚を飼っているが、土小屋で暖かいたためか罐詰の悪くなったのを利用するためか、そこまではわからない。どちらにしても宝

物の前に豚と番兵がいる。まさに禁断の木の実だ。

四月のザラメ雪が固まる深夜、どうして戸をあけたか一人の若い衆が土屋の中に忍び込んだ。ぬき足さし足、奥の宝物に近づき、まだ手にしない大戦果にほくそえんでいるうちに、急に何か柔らかいものを踏んづけて足をとられ、ひっくり返った。起き上がろとする鼻先に番兵の懐中電灯と銃剣。踏んだのは、どうやら寝ていた豚の腹らしい。

二三日入牢のすえ放免されたが、豚にかかって捕まるとは前代未聞だとラーゲル雀が急に活気づいた。

×

×

×

【入牢雑録】前に話した七隻脱走事件は様々の波紋を呼んだが、ついに筆者の身の上にも及んだ。何しろ前に一度脱出しかけているし、今度も脱走船の近くにもやっていたため、こいつ、殊によると大物だぞ、と見込みを付けたのかも知れない。事件の二日後の晩方、二工の事務所で取り調べを受ける。碧眼の司令部の通訳が拳銃をひねくり廻しながら、「まだほかに脱走を計画している者はいないか」などと下手な日本語でしきりに聞く。知らぬ存ぜぬの受け答えをしながら、腹の中では「なあに皆んな脱走したがつているんだよ」とつぶやく。

ちががあかないと見たか乗用車に乗せられて司令部へ：

一室で隊長らしい厳めしい男と向かい合う。壁にスターリンの大きな画がかかっている。わざと「レーニン」というと「スターリン」と怒ったような返事だ。兵隊が一人入ってくる。隊長の命

令はよく判らないが、サケの罐詰と乾パンで飯にしてやれといっているらしい。すると今夜は帰さないつもりか、ひよっとするとブチこんでおいてから泥を吐かす気か。

連れて行かれたのは案の定、司令部の裏の頑丈な一軒屋、ブチ込まれた二坪ばかりの一室には先客のソ連兵が一人頭をかかえて座り込んでいた。手まねをまじえて聞くと、どうやら酒を呑んで同僚に乱暴をしたらしい。見廻すと窓は高く小さく、鉄格子がはまっており、入口の戸の中央に四角い差し入れ口が切つてある。

戸の外には二人の兵隊がストーブを焚いて不寝番だ。後で聞いたことだが、ここは旧軍の営倉だった。室の一番奥に空醬油樽が置いてあるが、その使い道はいうまでもない。

さっそくマスの罐詰と乾パン、大根を小刻みにして水につけ干味を抜いたものなどを茶碗やブリキのお盆で差し入れてくる。入牢最初の飯だ。ひと片付けすると先輩のソ連兵は色々なことを聞きたがる。適当に受け答えしているうちに気のゆるみか眠くなる。外のストーブの暖かみが差し入れ口から室内に入るから、そう寒くはない。

次の日も朝から乾パンと罐詰、昼も同様、食いすぎたせいか便意がしきり、番兵に便意のあることを告げると奥の樽を指さす。すると同室の先輩が騒ぎだす。ヤポンスキーの「大」は臭くて我慢出来ぬという訳らしい。ようやく外に樽を持って出される。雪が降っていて地面は白く、土場や宿舍がよく見渡される。いったいいつまで入れておく気かと、いささか心細くなる。

先輩との手まねを交えての話も種子がつきる。彼は退屈そうに誰が差入れたのか絵が沢山ある童謡らしい本をとりあげる。こっちは中仕切りの壁によりかかってウツラウツラ……。ふと隣室の話し声が耳に入る。先輩か後輩かわからぬが仲間が二人ばかりいる。ヤポンスキーというからには一人は確か日本人だ。いったい誰なんだろうロシヤ語のできるヤポンスキーは、そんなに沢山いないんだが、急に顔が見たくなる。

次の日、また便意を申し立てて外に出る時、チャット隣室の差し入れ口に目を走らして思わずハッとすると。何べんも会ったこととのあるK老通訳だ。やっこさん、どうして引つ張られたんだらう。

だが何となく心強い。とにかくオレ一人だけが特別に扱われている訳でないんだ。

その次の日、四日目の朝、同室の先輩は刑期が満ちて出牢する。出際に「オレはオマエの代わりにオッカアの所に行つてやるぞ」という。番兵が笑う。退屈まぎれに家族がいることなどを話したと見える。

晩方、牢を出される。迎えに来た兵隊が司令部に行く途中、「お前は放免される」という。また例の室で例の隊長と通訳に向い合う。押し問答三十分くらいの末、釈放されたが、あまり「見込のない奴」と前から見切りをつけていたらしい。

宿舎に帰ったとたん、Hさんが強盗兵に射殺されたと知らされて思わずハツとする。もし、しよつぴかれないで宿舎にいたとす

れば、おせっかいの性分のうえロシヤ語などをかじっているから、きつと側杖を食ったに違いない。かえって運が良かったということになるらしい（K通訳は大分あとで釈放された。あまりソ連側の意を迎えたので、かえって疑われたのだという。）

× × ×

【強盗兵半殺し】Hさん事件は帰するところ、柏原ヤポンスキーが協力し合わなかった事と、民族より法律に忠実なソ連憲兵の特色を知らないことから生じたものであって、これを逆に行つて大いに成功したのが海峡向こうの長崎のヤポンスキー達である。ただし、後が一寸悪い。

長崎漁場では冷静なN工場長、豪胆でロシヤ語に通じているS医者、蛮勇のS帳場と役者がそろつていた。重なる強盗事件に業をにやしたNさん達は先ず片岡の憲兵隊に出かけて事情を話し、自衛ならブン殴つてもかまわないという許可を取り付けた。それから労務者一同は棒や石ころを用意して、強盗兵来たれと待つ。

それとは知らずに入ってきた兵隊こそ因果なものである。よつてたかつて袋だたきにされ、肩章はもぎとられピストルは取り上げられ、帽子はつぶされる。おしまいには声をあげて泣き出すという始末。そいつを「おとといこい」と外に放り出す。二、三回こうすると噂が広まったか強盗兵はビタリと来なくなった。

しかしあまり気をよくしたのか長崎の労務者は、あとのことだが一寸したことから半日ストをやってしまった。N工場長は責任を問われて、ただの労務者におとされ、柏原の木工場に廻された。

× × ×

【武器あらため】事件の多かった昭和二十年（一九四六年）も、どうやら過ぎ翌二十一年（一九四六年）一月の半ばごろだった。

朝早くから漁業幹部の人達が宿舎のあちこちと忙しく飛び廻っている。何事か聞くと「青帽」（国境警備隊）の武器あらため、つまり刀や鉄砲を持っている者がいれば取上げるといふ。『ジョウダンじゃない、オレたちにそんなものがあるはずがないじゃないか、ロスケつて奴は、なんて疑い深いんだろう』

そう悪口をつぶやき合っているうちに兵隊が四、五人入ってきた。今日の隊長が少尉が一人、一人の兵は銃を持って入口に立つ、物々しい気配だ。ちよつと遅れて漁業コンビナートの幹部だろう、一、二人やつて来て立ち会う。

まず入口に近い部屋にいた元軍の汁粉屋Kさんたちの部屋が調べられる。何も出てこないが自慢にしていた西洋カミソリが取り上げられて苦い顔をしている。『これは忙しくなったぞ、武器じゃない、武器になるものは皆んな取り上げるのか、すると鉈も包丁もあぶないな』。そのうちKさんは済んで、こつちにやってくる。

案の定、まずストーブ側にあったマサカリが取り上げられ、棚にあったマキリが取り上げられる。それから臭いと思つたか畳まで剥がして探す。家内も子供もあつけにとられて立っている。もう何も出ないので次の大工さん（もと協力隊？）の部屋を御訪問。ここは大変だった。何しろ大工さんだから大工道具があり、武器

になり得るものが沢山あるのが当然。その上この大工さん、終戦後、諸方を歩いて大工道具の『戦果』をあげるのに務めたから、二人前も三人前も道具をもっている。すっかり見込みをつけられて、何もかも取り上げられそうなので困っている。見かねて、おぼつかない通訳ながら隊長に『この人は大工だ、道具がないとアラバタイが出来ない』とやると、案外応揚にうなずいて何でも一つずつ道具を返してよこした。その代わりという訳でもなからうが、同じ室にいた漁師さんの『戦果』であるゴム合羽や長靴が多すぎると取上げてしまい、新ためて少しばかり返してよこす。『サテハ武器あらためばかりでなく、共産主義の模範を示すつもりか』。

以下おなじ方法でマサカリ、薪割、ナタ、マキリ、鋸など武器になり得るものは原則として、みな取上げられた。そのうえ服、布地、靴、軍手などの衣料類も、退蔵していると見られたものは一ペン取り上げてから。一部再配分といった所だろう、戻してくれる。資本主義の長屋（宿舎）だから、何等かの事情で本当に着たつきの者も、たまにはいる。するとよいものを見つけたとばかり、押収してきたものから一、二点取り出して押し付ける。全く共産革命の縮図だった。

食べ物にまでは流石に手をつけなかったが、これはそんなに貯め込んでいるものがなかったからだろう。あとで別の宿舎では濁り酒を押収されたグループがあつたと聞く。

なんだかんだと手間をとり、浜手の宿舎群の武器あらため？が

済んだのは昼過ぎだ。トラックが二台やってくる。一台は兵隊が運転し、もう一台の運ちゃんコンビナートに出ているヤポンスキー。軍のトラックは金へんで、コンビナートのトラックは衣料などで山になる。三百人からのヤポンスキーだ。一人一点ずつ取り上げてこうなる。兵隊とコンビナートの幹部が各受持ちのトラックに二、三人同乗している。

以下はヤポンスキー運ちゃんの物語。「やつ等は出発する時、カップラッタものの中を捜して上等の外被や長靴をはきこみ、カミソリなどをポケットに仕舞いこんだ。それから会社（コンビナート）に着くと四、五人がやって来て、また、よりどりみどりをした上、残りをようやく倉庫におさめた。まるでメチャクチャだ。」

押収されたヤポンスキー衣料は、あとで一般ソ連人に配分されたと聞く。

×

×

×

【北鮮の人々】重量栈橋から浜手宿舎の方に歩いてくる人々の隊長？が、“X O Æ P E H”と書いた腕章をつけていた。出身地の地名らしい。

その北鮮の人々は、一軒おいた隣の宿舎におちついた。五十人足らずの一団である。柏原に上陸した三千名のうちの少隊だろうか。他の人達は何処に泊まり、あるいは何処へ分散されたかは聞きもしなかった。ああした環境では、人間はひどく好奇心が高まると共に、一面、自閉的になるものらしい。

皆んな二十歳前後の人達だった。ソ連との国境に近い所から来たというが、ロシア語には馴染んでいなかった。反対に日本語なら自由に喋れた。聞けば当り前で戦前、小学校で日本語を習わされたという。言葉ばかりでなく、彼等の四周にあった旧日本のものもろにも、まだ郷愁を残していた。

ロシアの字と言葉を少し教えてくれという。朝鮮の仮名と言葉を少し教えてくれと頼む。そしてだんだんと親密になった。

「安」という長身で恰幅のよい人は、どこか大人の風格があり色々のことを話す。もう一人、痩せぎすで不平家で、よく政治や革命の事を話す人がいた。

皆んな北千島に共産主義の見学と実習に來たのだという。それが募集の時の約束だったと、あまり疑う様子も見えない。こっちは何んといつてよいやら全く言葉がない。

彼等は、また南鮮に進駐して來た米軍の事を話し、便所に行くにもクルマだと素直に驚く。また半島全土の戦後の混乱を話し「東条」と名のついた日本人は皆んな殺されたという。また「金日成」派の新聞を示し、人民の味方だという。以上についてもまた、なを語ってよいかわからない。

一月もたたないうちに、彼らは全部何処かへ移動して行った。その後、北鮮の人には度々会ったが、皆んな彼等の仲間ではなかったし、彼等のように若々しく希望に溢れた者もいなかった。しかし彼等が北千島で何を体験したかは、ほぼ想像がつく。そして反射的に風評のカクマベツ事件（カクマベツで家と食料が無く、

多くの北鮮人が死んだという風評)を想起する。

× × ×

【宿舎寸劇】旧定住組合の面々が落ち着いた宿舎は、浜手宿舎群の一番南端の棟だ。旧軍の汁粉屋や時計屋、理髪屋、協力隊的な所にいた人々、発電所労務者など漁業以外の雑多な人々の混成長屋であって、若干ほかの宿舎より活気があった。その薄暗い土間廊下や、殺風景な部屋で演ぜられた小劇の二、三を紹介する。

Kさん(旧定住組合)の部屋で顔見知りの日本将校と酒宴が始まっている。大分みんな聞こし召したらしく「うむ、負けたがなでい、ロスケなんてそのうちバタバタと将棋倒しにならあ」などという声が漏れてくる。そして「おい、今年はいったい昭和何年だ。年号が変わったという噂があるが何ていうんだ、降伏元年か」(昭和二十年(一九四五年)十月ごろ)

× × ×

小学三、四年生ぐらゐの背丈の少年兵(コボウ剣をさしている)が白昼。宿舎に掠奪に来た。初めは子供の悪戯ぐらゐに扱っていたヤポンスキー。どうやら本格的な強盗と分かってビックリし、一つガンとおみまいをする。泣きベソかいて逃げ出す。

「どうしてあんな子供が盗みを覚えたんだろう」

「いや、きつと戦争で親を亡くした浮浪児なんじゃあないか」

(昭和二十年(一九四五年)十月ごろ)

× × ×

強盗兵二人(一人はバカに背が高い)、いくら拳銃を突き付け

て脅しても探しても、万年筆も時計も出てこない。先輩が何回も荒らした後だから、ヤポンスキーの方でも万事心得て、手がかりのないようにしている。女性は、かねて手はず通りトックに窓から逃亡。

何か罵り合いながら退散する時、ヤポンスキーむきの出口でノッポの方が、いやというほど頭を打ちつける。息を殺していた連中、笑うに笑えず。(昭和二十年(一九四五年)十一月ごろの深夜)

× × ×

宿舎に遊びに来た四、五人のソ連兵、ヤポンスキーマダム相手に、しきりに国端崎戦闘の話をしている。もちろん、あらかた手真似。

「シュムシュ、シュムシュ、ポッポ、ポッポ」としきりに銃を撃つ手真似、そして頼なる生新しい傷を示す。

「アワ、アワ、アワ」と、もう一人が懸命に泳ぐ真似。

「スターリン、ミカド」と、一人が握手の手ぶり。そのおかげで皆んな命びろいしたという訳(昭和二十年(一九四五年)十月ごろ)

× × ×

どこから手に入れたのか、あるいは秘蔵していたのか、隣の大工さん達、鯨の脂肉を煮始めた。手製の火鉢に炭かコークスがカンカンとおこり、五徳の上の鍋はしきりにグツグツいつている。

突然、灰かぐらが高く舞い上がり、湯気と異様な臭気が立ちこ

める。「ナンダ、ナンダ」と皆んな寄ってくる。

“いや、鍋の底がガッサリ抜けたんだ”

“当り前だ。ハンダ付けの鍋で煮るんだもの”（昭和二十年

（一九四五年）十二月ごろ）

×

×

×

強盗兵事件の跡を絶たないのに業を煮やしたソ憲兵隊長（上級大尉）、宿舎内に兵隊二人を宿直させて待伏せをかける。

二人の兵隊は忠実そのものの、いくら勧めても部屋の中に入らない。廊下に空箱を並べて作った急ごしらへの寝台に交替に寝て夜を過ごす。強盗兵は、ついに現れなかったが、あとでヤポンスキー感嘆していわく。

“オレはロスケが本気でアラバタイするのを初めて見た”（昭和二十年（一九四五年）十一月ごろ）

×

×

×

“日本人もロスケも同じ人間だ”と手を握る貴族出らしい下士官。

“ワシはアナタの娘さん（十歳）を幼女にもらい受けたいんだが”と、しみじみとKさんに語る憲兵隊長。

“オマエこんなに家族が多くて暮らしに困るだろう、オレ少したすけてやる”と金を握らせる老フィンランド人（元革命の闘士）。（昭和二十年（一九四五年）～二十一年（一九四六年））

×

×

×

【網工場風景】網工場は昭和二十年（一九四五年）十二月末開

かれた。建物は“一工”の倉庫を改造した百坪ほどのもの。編成はソ連主任、ソ連作業監督一人（前記老フィンランド人）、ソ連事務員一人、邦人監督（船頭）一人、全記帳掛一人、あと三十～四十人の網修理作業員、大部分は漁業会社の元陸廻り、あとは片岡組と定住組合から二～三人、素人通訳は船頭以下五人ほど。

一月そうそう初顔合わせをやる。日を決めておいたのが、さてその日になると天地もひっくり返えるような大吹雪。これを冒して参集したヤポンスキーは船頭、帳場以下十人足らず、ロスケのやつ出てくるかとドラム罐の大ストーブを囲んで噂していると、感心に皆んな顔をそろえる。しかし、この日は協議して臨休。

次の日から毎日、流網修理。日がたつにつれて皆んな退屈してくる。無断欠勤する者が、ぼつぼつ出てくる。その言い分は判を押したように、「ストーブの薪がなくなったので、山に採りに行ったのだ」という訳。死活問題だから大概とおる。

退屈しのぎの一つに、何気なしに工場に顔を出したロスケをつかまえてからかう。例えば、

“シラミタカリ（虱たかり）、シラミタカリ、ヅラシテ（よく来た）、ヅラシテ”と呼ぶ。ロスケの方では言葉の分からないままによつて来る。固く手を握って

“四本松、五本松、四本松、五本松”

ロスケは怪訝な顔をする。実はヨブ・ツボユー・マーチ（大馬鹿野郎）をわざともじったもの。いい加減にして煙草を二～三本やって放免。

そんなわけだから、大ストーブの囲りは、いつも人ばかり。あまり密集して動かないものだから後のものが当たれなくなる。寛容でヤポンスキーびいきの老フィンランド人監督も堪り兼ねて、交替だ、交替だ」と叫ぶ。

工場が休みで汽笛が鳴らない時がある。正午頃になると皆んな網針の手を休めて、ストーブの廻りや、あちらこちらで雑談ばかり。老監督、やおら立ち上がってストーブの煙突の側に立つ。ヤポンスキー船頭が手を上げて、汽笛の綱を引っ張る真似をする。

「ポー、ポー」、老監督は両手を上げ、しわがれ声で汽笛の真似。皆んな笑いながら、ぞろぞろと退散する。

仕事の仕事だから大した破綻もなく春になった。五月初めだったと思う、大量の綱や綱がポルトからハシケで送られて、綱工場の下あたりの浜についた。アメリカものらしかった。一見して目の大きさも綿糸？の太さも、北千島のどの漁撈にも向けられない代物ばかり。「こんなもので何するんだ」とヤポンスキー一同、荷役に動こうともしない。老フィンランド人は声を荒げて急ぎ立てる。シブシブ腰をあげて揚陸にかかったが、とうとう工場終業の汽笛がなつてからも、ややしばらくやらされ、薄暗くなった。多分、これが最初で最後のイサカイであった。

× × ×

【ある漁撈風景】昭和二十一年（一九四六年）六月某日、場所はパラムシロ東岸の一海域、日ソ合作のサケ・マス流し網初出漁。編成はソ連人船頭、邦人副船頭、漁夫、ソ連人七名、邦人五名。

第一景 夕方、船は柏原を出発して、ここに着いたばかり、こ

れから網を降ろすのが常識。

・ソ連人船頭 “みんな、これから船で、一寝入りだ、朝になつてから網を降ろそう”

・邦人副船頭 “ジョウダンでない、魚は夜かかるものだ、大馬鹿野郎”

・ソ連人船頭 “心配するな、オレたちは、それでもう八時間働いたことになる、休みだ休みだ”

第二景 翌日の昼ごろ、朝、網を降ろして一休みも二休みもしてこれから、いよいよ網を上げだしたところ。

・邦人副船頭 “早く魚はずせ、そんな調子では夜中になつてしまふぞ、それ、こうしてはずすんだ”

と自ら模範を示すが、ロスケ漁夫は、さっぱり会得しない。そのうち密集してサケマスがかかった箇所が上がってくる。

・ソ連人船頭 “えい、かまうことない、マキリで網をブツ裂いてはずせ”

・邦人副船頭、漁夫 “バカヤロー、そんなことをしたら罰があたるぞ”

・ソ連人船頭、漁夫 “心配無用、網は直し役がチャンといふんだ。ナニ、網が少なくなれば獲れなくなるって？ 心配無用、あまり魚を獲れば工場のやつも、いやな顔するに決まっている。どうしてそんなに魚が獲りたいんだ”。

邦人副先頭、漁夫、啞然として顔を見合わせるばかり。

五. 収容中期

柏原収容所の施設

柏原邦人収容所については、既に第四節で少し触れた。即ち旧漁業会社、山手宿舍群を改造したものであって、位置は東は海岸から約五百メートル、北は「清」坂口川流域から約三百メートル、西は硫黄山麓に接し、丘の上、北北西、第二工場水源地まで約三百メートルであった。なお邦人墓地は収容所の東北東へ北東約二百メートルであったようである。

ここに五棟ほどのバラックがあったが、昭和二十年（一九四五年）六月頃から、主として日本兵（第四節参照）の手で改装、撤去新築などが行われ、本部、炊事各一棟、宿舍三棟、計五棟が完成したのは八月末であった。これに船巻きゴロを方形に立て巡らし、バラ線を約三十センチ間隔に張りつけて外部から隔離し、門衛所を設けラゲル即ち兵営の形体を整えた。営内は南北百メートル、東西七十メートルほどであって、炊事と一号宿舍との間に幅二十メートルの整列場があった。

なお各宿舍の中央の通し廊下は土間で、所々に計五十センチほどのズンドウ式ストーブを置いて暖をとった。暖炉の数は一応足りていたが、燃料が不足がちであった。廊下の左右に二段式固定寝台が並び、その上の天井は元来なかったのであるが、各人がそれぞれ頭上に板などを並べ、手荷物を置いたので、自然に出来上

がったものであった。板壁は一重で冬向きではなかったが、邦人が入居した後、ラゲル命令で背後の土堤から泥炭を採り各宿舍の壁際に積み巡らした。しかし隙間風は破風や屋根から自由に吹き通った。

炊事場には二つの中型鯨釜を受ける煉瓦カマドを築き水道を引いた。西半の予備宿舍と東端の食料置き場は空き間が多いため、時折、邦人素人演芸会の舞台となった。この予備宿舍を入れて、全体（本部を除く）の収容能力は、畳一枚に一人として七百人、八百人であって、ちょうど柏原在住の邦人数に相当する。

本部は古材も使ってあったが新築されたもので、壁、天井等は二重張りのうえ、保温に鋸くずが詰めてあった。各室の採光は充分であったが、通し廊下が暗く、昼間でも電燈を要した。この建物の東端から横柵が門衛の近くまで延び、出入者を監視しやすいようになっていた。

収容所が丘の下にあったことと、冬の主風である北西風の吹き降ろしにさらされた事のため、積雪が甚だしく全棟軒を没する有様となった。ことに本部と炊事場との間が甚だしく、往來のため除雪に労を費やした。

北千島収容邦人の編成

柏原収容所をはじめ北千島各地区の民間邦人は、一括して大隊編成になっていた。即ち第二十一日本人収容者大隊であり、第二

十一収容所であった。大隊長はソ連上級大尉、副大隊長は中尉であった。大隊は第一、第二の二中隊に別れ（各長、少尉）、柏原地区以外の邦人も皆そのいずれかに所属していた。その他、大隊所属の通訳、ソ連人医師、事務員などが在営、柏原警察の警官一名も通動していた。以上がソ連側幹部の全員であって、営内の秩序、保健、保安等を司ると共に、各職場に対する邦人派遣をも管理した。その下は、みな邦人で、まず宿舎長があり、更に食料被服係長、病院長、清掃係長、記帳係長等に別れていた。記帳係長の下には各職場に応じた十二人の記帳係があり、毎日の整理、点呼等に立ち会うと共に出欠勤を記録し、診断書の有無を調べるなど、通勤や出張を管理した。なお上記宿舎長、記帳係長などは、すべて旧下層幹部または、いわゆる外人部隊から採用されたが、これは階層差がもたらす鬱積を利用して異民族を採縦するソ連の常套手段の現われであった。

職場の主なもの、漁業関係として罐詰工場、各種の漁撈、塩蔵場、網工場、冷蔵庫、ミール工場などがあり、その他鉄工場、製材所、建築、港湾（陸揚）、倉庫業、馬車運送、製パン所、食堂、洗濯業、農場、水力発電所などがあった。このうち漁業関係に通動（柏原地区）または出張（柏原以外の地区）するものが総員の八割ほどを占め、その作業現場では旧漁業会社の作業組織が大体そのまま存続していた。なお水力発電所の編成は若干のソ連人が参加しただけで、全く終戦前と変化がなかった。

この第二十一大隊はシベリヤ、ハバロフスクにある連隊に所属

しており、昭和二十一年（一九四六年）九月～十月、その連隊長（中佐）が視察に来島した。

ソ連の建設 ソ連人の生活（2）

憲兵隊と国境警備隊が重量（中央）棧橋付近に庁舎を置いたことは前述したが、昭和二十一年（一九四六年）夏から秋にかけて更に市役所と警察署がこれに接して設けられ、柏原が軍政から民政に移ったことを示した。更に此のころ、柏原南方に北千島開発庁本部とも称せられるべき、百坪ほどの大きな庁舎が完成した。

部員は男女合わせて二百名近く、その多くは本国の工科大学出身者であったといわれる「開発庁」の近くに銀行が出来て、邦人一（二名（旧漁業幹部）が通勤し成績をあげた。昭和二十二年（一九四七年）夏には郵便局かと思われる大型の建物が旧郵便所あとに出来始めたが、邦人引揚時までには、まだ完成しなかった。また公共浴場も昭和二十一年（一九四六年）に建設され、兵舎、将校住宅の新規建築も諸方で行われていた。

産業的な建設としては昭和二十一年（一九四六年）、水力発電所の事務所（部員二十ほど、開発庁と同系統のもの多数）や建築事務所が設けられた。また漁業コンビナートは牛乳や野菜の自給を計画、昭和二十一年（一九四六年）、牛舎、飼料庫などを整備し、乳牛約二十、耕馬五、緬羊十ほどの飼育を始め、翌二十二年（一九四七年）には「濁」坂口川上流の旧軍農場を利用、約二ヘ

クタールの野菜、飼料作物等を栽培した。その他、坂口川の川口（カブト山間に別系統の家鴨飼育所が出来た（昭和二十一年（一九四六年）約五百羽）。このうち乳牛は野草、家鴨は漁場残物を利用して一応の成績をあげたが、農園は管理が粗雑で甚だ不成績であった（後述）。ちなみに各事務所、庁舎の部員は実務や計算に意外なくいうとく、無能、非能率の極みだったという。国営事業にあり勝ちな計画倒れも至る所に発生したと思われる。しかし、ソ連人が当座の不成績などを意に介しない不屈さを有していたことも、また事実であった。

特殊なものとして、前記農場の付近に農耕定住を目指す家族が二〜三戸みられた。また工場、漁場等に勤務するものの各自の自力による住宅建築があった。これには大体二つの型があり、一つは比較的上層部の人で、地位を利用して材料、労力を獲得しやすかったためか、相当大型で完備したものが建てられた。とはいえ、建坪三十坪以上のものは見受けられなかった。その二つ目は下層の人々が手造りしたものであって、板切れ、トタン板など、散在する遺棄材料を拾い集め、道具とてあまりないためほとんど手斧一つの建築であったが、案外格好がついていた。もともと大きさは、せいぜい十坪ほどで、中には三坪ぐらいのものもあった。しかし取るに足らぬ小屋と思われるものでも、その主人は少しも卑下することなく自宅完成を喜び、これを大切にすることは大家の持ち主と同じで、これも民族性のしからしむる所かと思われた。

しかし、かくして建てられた住宅は、極小のものをに入れても、昭和二十二年（一九四七年）の邦人引揚げまでには五十戸に達しなかった。柏原全体の民間ソ連人は二千人ほどであったから、決して大きな保有率ではなかった。

引揚げ時点における「柏原市」の総建物数は、いかに多めに推算しても、二百戸を上廻ることはないようである。

従来あった旧漁業会社関係建物を三十棟、旧軍関係を百棟とし、これに上記ソ連の個人住宅を入れて計算すると、新規の公的な建築は二十棟に過ぎないことになる。軍民折半すれば民間十棟、これが占領二十年の成果であり、見聞したことも大略合致する。もともとソ連の建築は、ほとんど残存資材によったものであるから占領前を、そう大きく上廻ることは不可能であった。最も建築が建設や開発に必ず比例するものではないが、相応する所があるのはいうまでもなからう。

さて昭和二十一年（一九四六年）春に来島したソ連本国人の貧しさは前述したが、まもなく彼等も旧軍衣料等入手し身なりを整えた。同年、満州から押収したものと思われる広幅の布地が多量に移入され、また本国あるいはアメリカ製の靴、帽子などの児童用品も到来した。破服の女性や裸足の児童は、もはや見られなくなった。

食料の民間配給は、黒パンが日量八百グラム、バターその他は大体つぎに述べる収容邦人と同様であったようで、充分とはいえなかったが、豊富な現地の魚類でこれを補ったため、彼等の栄養

は目に見えて良好になった。住宅事情も先に触れたように雑居の状態が大多数であったが、当時のソ連本国の住宅事情よりは、むしろましであるといわれた。

彼等、特に家族を持つものは、各職場へ勤務のかたわら、家鴨や鶏を飼育するものが少なくなく、また空地を見つけて馬鈴薯などを栽培するなど、初めから定着的な姿勢を示し、季節作業一辺倒であった戦前の邦人生活と著しい対照を見せた。婦人達は、また余暇には山野に行きギョウジャニンニクなどの山菜を摘むものが多く、秋にはガンコウランや湿原の茸を採るものが群をなした。若干の家族は、小数ではあるが乳牛や緬羊を柏原背後に放牧し、冬は粗末な小屋に、これを囲っていた。こうした自給物の余りは自由市場、いわゆるバザール（会場、浜手邦人宿舎炊事場あと）に持ち出されて換金された。なかには換金を目あてに山菜などを採るものもいたようである。バザールはソ連人生活の裏門といつてよいほど重要なものであった。

バザールは常時開かれていたようであるが、殊に日曜に多数の人を集めた。これに出品するには僅かの入場料を収めれば何人も可能であった。並ぶ品々のうちでは食品がもつとも多く、牛乳、馬肉、牛肉、山菜のギョウジャニンニク、バター、砂糖、飲用アルコール、諸種の罐詰などで、量も種類も意外に豊富で、何処に此等の品々が退蔵されていたかと一驚するのであった。また衣類、什器、裝飾品なども多少は出回っていた。なお此のバザールには北鮮系の人々が盛んに出入りし、利を追うにはソ連人より数等ま

さっているといわれていた。

こうして、バザールその他で品々を都合し、友人その他を呼び集め、ささやかながらの宴会、舞踏会を開くことは、ソ連民衆のもつとも楽しみとするところであって、明日からは、またパンと塩ばかりの生活に戻らねばならぬことも、意に介するところでなかった。そこには彼等の楽天的で大まかな民族性が隠すところなく発揮された。また彼等は土曜、日曜にはダンスホール、映画館、レストランなどに押しかけた。うち、レストランは旧軍経理部資材倉庫を改造したものであって、約百坪、五百〇六百人の客を迎えることが出来たが、毎度、満員になるのであった。：「やつ等、共產主義に押さえつけられているから飲み食いだけになるのさ」というのが邦人の定評だったが、それだけでは律し切れないものがあつた。

収容邦人の生活と労役（2）

柏原収容所完成時の邦人総数は一、五八五（誤差十）名であつた。うち成年女子三（未婚一、のち邦人漁夫と結婚）がおり、また二十歳以下のものは男子約二十、女子三であつた。成年男子のうち約二十名は、七十歳前後の就労にほとんどのたえない老人（漁業会社）で、昭和二十年（一九四五年）戦争末期の本土労務者情況の逼迫を示していた。その他生理、病的欠陥のあつたものをあげると、盲人一、隻腕一、隻脚二、クル病一、精薄六、狂人一、

ライ病一、重症梅毒二、計十四であつて、前記二十名の老人を加えると総体の二パーセント以上がいうなれば要扶養者であつた。

この人々は、浜手の旧宿舎に居た時には特段の保護は講ぜられなかったのであるが、ラーゲルに移る際、就労に堪えないものは本部の別室をあてがわれて静養することになり、また特にライ病など重症のものは陸軍病院に入院させられた。この事はソ連側が邦人に対して行なつた数少ない善事の一つであつた。ちなみに柏原収容所のソ連将校達は情況と権限の許す限り、隊内の邦人保護には一応、最善を尽くしていたと見られる。最も元来、無理な結合関係であり異民族同志でもあつたから、時折、小悶着や行き過ぎが起ることは避けられなかつた。

深刻な出来事は、むしろ外部から訪れた。その一つは昭和二十一年（一九四六年）十月～十一月（九月～十月説もあり）、旧漁業幹部六名が国境警備隊の手によって拉致され、行方不明になつたことであつた、スパイ嫌疑または漁業のノルマを果さなかつたためといわれ、一同は共産政治の陰険さを改めて認識した。また鱈漁船脱走事件、ライ病患者事件（いずれも後述）などもラーゲル外の出来事であつた。

しかし、初期に比べれば余り大きな波瀾もなく過ぎたと言える。一つは邦人がソ連人の氣質や流儀に慣れたためであつた。多くの人々は毎日の労務をソ連労務者流に半サボタージュ的に過ごしていた。最も漁撈関係者は、その性質から時間決めという訳にはいかず、時には深夜作業もあつたが、この事はソ連労務者自身も甚

だしく嫌うほどであつたから（後述）、頻繁に行われることはなかつた。一口にいうと中期以降の労役は、旧漁業会社時代よりも時間的にもノルマの上からも軽かつたといえる。怠業気分であつても、ソ連人、北鮮人より、おおむね勤勉であり能率的であつた。ただ冬期間の吹雪中の作業は、體質的にソ連人が勝つていた。

こうして、もし食料事情さえ万全であつたならば老人や病人の死は、これ（約十名）ほど多くならなかつたと思われる。しかし、実際は蛋白源は過量なくらいあり、カロリーも大体不足がなかつたが、その質に問題があり、そのうえ野菜類が不足になつた。

収容所の食事は、初期に引き続き営内炊事で飯米と味噌汁を作つたが、この味噌汁を利用する者は少数で、大部分のものは依然、各自または少グループで飯ゴウや小鍋を持ち出し、宿舍内ストーブを利用して副食物を作つた。乾燥野菜や雑魚を煮る鍋が通し廊下に立ち並ぶ様は壮観でもあつた。しかし主食が次第に粗悪になつてきた。前述したように玄米（軍糧）は終戦時多量にあつたが、ソ連側によつて大部分をカムチャッカ方面に積み出されたために、昭和二十一年（一九四六年）六月ごろ既に底をつき、新たに満州方面から移入された高粱、粟、大豆等が補充に用いられた。穀類は日量は六百グラムを標準とし、はじめは玄米四百グラム、雑穀二百グラムの割合であつたが十月のラーゲル入所後、玄米が一時きれ、高粱四に大豆二の割合となり、消化器を損ねるものが少なからず生じた。各自、退蔵していた米を取り出し、粥などを作つて治療した。ただ十月十日頃から乗船、帰還の説が盛んに流

れ、實際ラーゲル命令で乗船名簿の作製や船内用薪切り、他地区収容者の一部、柏原集結などが行なわれ、乗船は十月末とほぼ定まり、一同を勇気づけた。

十一月初旬、帰還が取りやめとなり、一同失望のまま一旦中止していた各職場へ、また通勤することとなった。帰還中止の理由は不明であるが、邦人労務者を除いては漁撈、製造等に自信が持てなかった漁業コンビナート関係の希望によったものではないかと思われた。

その後も食糧事情が悪く、各自も帰還説があったため、乾燥野菜、山菜などの収集を怠ったまま積雪期に入った。ここに目に見えぬ大きな危機が到来した。不慣れた雑穀食のために、まず高齢または虚弱なものが栄養失調となり、一月、二月の厳寒に入ると共に相次いで死亡した。ついに残りの高齢者、虚弱者の大部分は陸軍病院に送って療養させ、わずかに死亡者を食いとめることが出来た。二月、雑穀も切れ一時は黒パンが主食となった。日量八百グラム、邦人にとっては分量不足であったが、魚類で補いをつけた。三月、雑穀が再び入荷し、玄米も他地区（北千島）から若干転送された。四月、乾燥野菜がラーゲル、個人ともにほとんど尽き、きらわれていた筍の水煮罐詰だけが残った。這松の葉が盛んにビタミン補給用として煎じて用いられた。五月以降、再び玄米が主となり、玄米四百グラム、大豆二百グラムと好転した（このまま帰還に至った）。また邦人側も春の到来と共に隊をつくつて山菜、海草を摘み、野菜を栽培するなど栄養恢復に努めたため、

融雪期に多数みられたしびれ、息切れなどの症状の人も漸次姿を消した。かくて、幸いにして危機は去った。以上はラーゲル、柏原地区の状況であるが、他地区でも大体同様であったと思われる。

この最後に到来した玄米は、北千島他地区か、あるいは中部地島あたりに退蔵されていた軍糧だったと思われる。このように旧日本残存食料が豊富だったことは、ソ連本国の食料事情が当時、逼迫していただけに幸運であった。まだ雑穀食自体も、上述したように悪い面もあったが、玄米を自ら精白して食する邦人がラーゲル中、過半であったことを考えれば、ビタミン補給の点では、意図したことではなかったが、確かにプラスであった。また少量ではあったが、バターその他の配給品が途切れずにあったことも、身心両面に少なからず役立ち、医師をはじめラーゲルの日ソ幹部のビタミン補給に対する指導（玄米茶・糖の薬用、松葉茶、シャクナゲ葉茶など）、旧定住組合員の山菜についての知識も効果があった。幸運と努力が相まって、千五百余名（その多くは越冬の経験が浅く野菜不足や白米偏食の恐ろしさを知らなかった。が大きな破綻を招かずに最終の冬を過ごせたのであった。なお昭和二十二年（一九四七年）の冬は、北千島としても例年より厳しく、積雪も多い方であった。

ここに毎月のラーゲル内の配給品をあげると、一人当りのバター三百グラム、砂糖二百グラムあるいは木材飴同量、塩肉（羊または牛）五百グラム、アメリカ製豚脂肉罐詰三百グラム等であった。食料以外のものは、茶が大きさ一つ、煙草が刻み一―二

袋、あるいは巻き煙草一〇二函、マッチが小函一個、石鹼が中型一個などで、石炭はストープ一つにつき石油罐に一つであったが、昭和二十二年（一九四七年）春期からほとんど欠配していた。これを補うものは引続き盗取と背後の丘の薪切りであった。

娯楽は、これも引続き花札またはマージャン、賭博が主で、土曜の晩などは諸方に夜を徹する組が現れた。現実には価値のあるルーブル紙幣が賭けられるから、勢い真剣になるのであった。酒類は前節に述べた旧軍固形燃料が、まだ残っており飲用アルコール、ウオッカなども少量ならバザール等で入手出来た。また一般には米不足の状態ではあったが、自己退蔵米で濁酒を作るグループが少なからずあった。栄養失陥などが近くに迫っても、目に見えないものよりも、先ず一杯の酒なのであった。素人芝居または演芸会は、旧定住組合員の一〇二名が主唱者となり、楽器などを手作りし、各四季に一度ぐらい行なわれ、大いに一同の無聊を慰め、ソ連人も多数参加した。

後に、ラーゲル入りした樺太の邦人（後述）から女ものの衣料を入手し、舞台に使われるようになってから益々本格化した。映画はソ連側の地方巡回隊式のもので一、二回ラーゲルを訪れ、戸外で映写を行なった。

邦人一同が早くから切実に希望していたものの一つは、いうまでもなく日本本土の情報であったが、ソ連側から供給されるものは、樺太またはハバロフスクで発行される邦字新聞、ソ連人の談話等だけであり、その伝える本土の姿（日本共産党の活躍、飢餓、

民衆の蜂起など）は、彼等の決まり文句であることは承知していても不安は免れなかった。またソ連軍の北海道本島占領（解放）の風評も一度ならず伝わってきた。しかし昭和二十一年（一九四六年）春（夏？）、樺太在住の邦人写真師が、ソ連側に徴用されて千島一帯を撮影する途上、柏原に寄り、収容者の二、三と言葉を交えてソ連宣伝の虚構を暴露した。その前後に樺太から渡来した二、三のソ連民間人により、同地では引揚げが既に開始されていることが判明し、一同を勇気づけた。昭和二十二年（一九四七年）四月頃、もと樺太在住の邦人二名（ソ連占拠当時、本土に逃れ終戦後、大泊岸壁に放置されている邦人の荷物を取りに小舟で往復、ついに逮捕）がカムサッカ刑務所から刑期満ちてラーゲル入りをして来た。この人々の談話で「玉音放送」などの本土終戦の情況、樺太におけるソ連軍の暴虐、本土社会が思いのほか安定していること等が初めて判明し、一同に自信を与えた。例の邦字新聞などは「ウソ新聞」と称し、誰も省みるものがなくなった。なお、後述する復興途上の本土を見て帰って来たソ連船長の談話も、影響が大きかった。

ここに平均的な収容所邦人の一日を略記すると、まず朝は六時頃起床。自炊するか、または炊事から飯を受け取り床を上げた寝台の上で食事。七時、笛の音を合図に整列、記帳係から人員改めや赴くべき職場について指示を受ける。八時就業。ノラリクラリと時間を過ごして十二時作業中止。遠方に向いたものは弁当、工場などラーゲルの近くに勤めるものは帰営して食事。帰営する

際、雑魚（カジカ、カスベ、アブラコ、カンカイなど）、石炭、薪など入手できるものは公然、非公然とラーゲルに持ち帰る。むしろ、この方が作業より重大事である。一時、汽笛（工場など）と共に作業再開。五時帰営。帰営の際また何等かの生活物資を持ち出す（これはラーゲルのソ連側からも暗に奨励されていた）。

帰営してからの整列は特別の日でなければ行なわれなかった。その後の自由時間には自炊するものもあり、高射砲の薬莖などで玄米を精白するものもあり、非公然と入手したサケを料理するものもあり花札をもてあそぶものあり、「ロスケ」の悪口を言うものあり、「ロスケ」マダムの下馬評をするものあり、裏門または秘密のバラ線破れ目から出営して、遊びや物交に出かけるものもありであった。日曜には営内でドラム罐風呂を沸かすグループが多く、その他は普通日の自由時間と同じように過ごした。

終わりに一同の保健または疾病について略記すると、栄養失陥による死亡は上述したように最小限で食い止められたが、その中に肺結核のものが一、二名いた。シラミの繁殖は依然甚だしく月一回ほど、工場裏に設けられた蒸気消毒室で着衣等の消毒（同時に入浴）をして撲滅に努めたが、不協力のものもあってほとんど効を奏しなかった。

昭和二十一年（一九四六年）～二十二年（一九四七年）には、北鮮人またはソ連人のうちから発疹チフス様の病気が続発していたのであるから、ここにも一つの危機があった事になる。昭和二十二年（一九四七年）、ラーゲル内でヒゼン疹が蔓延しかけたの

で別室に、これを隔離した。同年二月、流行性感冒がおそったが三日～十日で皆、恢復した。同年七、八月、血便を起こす疑似赤痢が流行して一同を驚かしたが、結局は真正ではなかった。

北千島漁業コンビナート（2）

昭和二十一年（一九四六年）度前半（五月～七月）のコンビナートの事業が不漁年、資材の不足や跛行、ソ連幹部の未熟練、日ソ双方の労務者の怠業気分等の悪条件が重なって、カレイ底曳を除いては甚だ不成績だったことは前述したが、後半（七月～九月）に至ってもサケマスは依然、成績が上がらず、そのまま終わった。漁獲量は予定の二十%だったといわれ、総量は一万トン（終戦前平均の約十%）以下であったと推定される。サケマス罐詰は一万四千函（終戦前平均の約四%）で、双方とも北千島流し網開始以来の不成績であった。

一方、カレイ罐詰は約三千函生産されたが、これは北千島として最初のものではあった。

このサケマスの失敗はソ連側にも衝撃であった。コンビナートのソ連主任は地位を解かれ、豪華な新築の住宅を追われて一労務者に転落し、ウラジオストック方面に赴いた。コンビナートに協力した旧漁業会社幹部も格下げ、譴責等みな処分を受け、労務者に落とされた者も一、二名いた。

しかし、コンビナートは新主任のもとに漁業を継続し昭和二十

一年（一九四六年）秋期、冬期にはカレイ底曳三、五隻、タラ延縄二隻で採業し、塩蔵および冷凍、フィッシュミール等に加工した。漁は好成績であったが、二月にはタラ漁船一隻がソ連船長を乗せたまま本土に脱走した。

五月、再びサケマス漁にかかり、六月には流し網十五隻、建網約三〇統が採集を開始した。漁況は前年と比較にならないほど好成績であったといわれ、工場の魚揚コンベヤーは二カ月ちかく昼夜を問わず動くという情景であつて、やや終戦前の盛況に復した。ただし空罐不足でサケマス罐詰は七千函にとどまり、残りの漁獲は塩蔵と冷凍に処した。昭和二十二年（一九四七年）のサケマス総漁獲量は二、三万トン（終戦前平均の二十、三十％）であつたと推定される。このように成績が急上昇したのは、豊漁年であつたことに加えてソ連側が漁撈に、やや習熟したためであつたと思われる。

共産主義見聞

共産主義というよりはソ連社会の見聞であるが、以下に多少、共産主義の実質をついたと思われるものを記す。北千島收容者は、むしろ好都合の立場、いわばソ連社会に着せられた衣の裾下から、中身をのぞくことが出来る立場にいたといえよう。束縛された民衆、大国のエゴイズム官僚主義など、現在ようやく常識になったことを、二十数年前、既に目の当たりに見ていた。

最も強烈に感じさせられたのはソ連の個人、団体、官庁等すべてに行き渡った盗み癖（窃盗、強盗など）であつた。実例は前述した武器あらための際的一幕、強盗兵などで充分であらうが、罪の意識のほとんどないのが特に邦人を驚かせた。窃盗などで失敗し、とがめられれば平然と返却する。そこで收容者はいう。

“やつ等、政府からしてカッパライ（千島をとった事）の模範を示すもんだから、取り締まりがつくものではない”

“やつ等は、まず第一に国の中の金持ちをぶったくったんだらう。それから、あっちでぶったくり、こっちでぶったくり、ぶったくつてばかりいるから働くことが、あんなに嫌いになったんだ”

警察政治も身に染みて感じられた。スパイが職場などに網を張っているばかりでなく、收容所の中にも、日本兵の中にもいる。邦人の誰かが何等かの方法でスパイに仕立てられるらしい。殊に漁業幹部が突然引き立てられていったことは、ソ連秘密警察の陰険さを痛感させた公然とした取り締まりもなかなか厳密であつた。指紋は取る、人相書きは作る。辻には検問所が立っていて、行く人々を取り調べる。：ソ連人に“此処ばかりで、オレ達だけか”と尋ねると、“いやオレ達も皆んな同じで、本国はもつとうるさい”という返事であつた。そこで收容者はいう、

“なんだ、そんなら皆んなオレたち抑留者と同じじゃないか”

“よくそんなことで何十年も我慢できたもんだ”

目立つものの一つは勲章であつた。軍人、民間を問わず、ソ連人は実に勲章持ちが多い。〇〇功労章、〇〇英雄章等、二つ三つ

も大きなメダルを胸にぶら下げている人も少なくない。胸いっぱい勲章で「クンショウ」というあだなを付けられた将校もいた。その半分ぐらいは他人から買ったものだという噂もある。さて収容者はいう、

「あまり金をやることが出来ないから、勲章で我慢してもらったんだろう」

「いやそれより、あまり働かないから勲章で釣ったんだろう」スパイで取り締まり、勲章で釣ってもソ連人は、なかなか働かない。そこでノルマだ。しかし漁撈や罐詰となると個人のノルマといっても測れるものではなく、結局、総体のノルマを果せなかった主任や部長が罰せられることになる。労務者は、あらゆる方法で怠業した。その方が実働時間当りの給料が上がったことになり、勲章などより即効的である。：同じような立場から、すっかりソ連人の気持ちが出たたと収容者はいう、

「：その上、奴さんお達のおはこは「ロシアは大きい、ここで魚が獲れなくても何でもない」っていうんだから仕末が悪い」

「歩合（漁獲高払い）でも付けてやれば一寸は違うじゃないか、どうもロスケってどこか抜けているんだなあ」、そこで筆者もひそかに思う、「共産主義は人間の感覚が個人的、即物的、近視眼的であることを感情に入れなかった、ひどくお目出たいものではないか？やはりロスケ流かな」

仕事の代わりというわけではないが、飲むこと、歌うことは大好物。セックスに至っては、どうも全く無法状態。あながち戦後

で新開地だからとばかりいえない節があった。そこで収容者はうたがたことをいう、

「男と女のだらしないことは政府で勧めたんだよ、オレがもとカムチャッカの国営（国営漁業）にいたとき、映画がよく廻って来たが、皆んな枕草子みたいなもんだったからな」

「そうかも知れねえな、こないだの新生命（邦字新聞）にも、共産主義の目的てえのが出ていたが、誰でも手一杯飲み食いや遊びが出来る世の中にしたっていうのらしかったからなあ」

「そこで、今は金がねえから女遊びの方が奨励するってえ訳か」。

ソ連人は「ニカサイ」という言葉をよく使う。ことに若い人たちが使いたがる。「関係がない」（仕事や人事などに）という意味で責任のがれ、仕事のがれをする際に使われるものだが、ちょっと事がややこしくなると、すぐ口実を見つけて「ニカサイ」だから邦人は面食ってしまう。

「まるで、どこもこれも昔のお役所みたいだな」

「だから皆んなお役目にしか仕事をしなくなるんじゃないか」。

個人でも事業体でも官庁でも、お互いに「ニカサイ」で身を守ると共に、何か口実があれば遠慮なく自分の方に何でも取り込む。最も個人、とくに中年以上の人々は個人的な事には至極鷹揚で話しも分かるのだが、公的なことになると急に様子がおかしくなる。団体同士ともなれば関係はいつそう妙だ。隙を見ては資材などの盗み合いまでやる。度々その手伝いをさせられた収容者いわく

“これだもの、千島をカッパラッタのも当り前だ”。

そこで筆者ひそかに思う、“どうも、この団体なり国なりのエゴイズムは、個人のエゴを無理に押さえつけた罰じやないか”

ソ連の若い人達と中年以上の人達との性格の相違も目立った。もちろん例外もあるが、一口にいうと若い人達は「ニカサイ」そのもので小さく自分だけに固まり、心は専ら享楽に向いていた。中年、老年は態度はガサツだが案外、人の面倒を見てくれる。隣人愛といったものや輝きさえも一再ならず感ぜられた。つまり善だといわれる共産社会に育った若い世代が利己的、個人的で、悪だったはずの帝政ロシアに育ったか影響を受けた人達の方がかえって利他的、社会的なのであった。これは何とも不思議な矛盾した現象だった。そこで収容者はいう。

“国が何でも困っている者の面倒を見るから、皆んな、人のことなんか、どうでもよいという風になるんだべさ”。

昭和二十一年（一九四六年）の冬、雪が降っていたある日、ポルトの陸揚作業に、十人ほどの邦人と出かけたことがあった。しばらくすると邦人の一人が軍手を濡らしてしまった。代わりはないかとソ連の見張り役に交渉すると、その身なりの貧しい老人は自分のはめていた軍手を脱いで、“これを彼にやれ”といって渡し、自らは素手のまま、ふりしきる雪の中に立って役目を果していた。今にして思うと、この貧しい老人は、邦人一同を押さえつけていたソ連の制度や権力よりも、遥かに偉大だったように思われてならない。

エピソード (3)

ラーゲルに入ってからには割に平穩無事の日が続いた。私用で外出しようとするれば、原則として許可がいるし、ずる休みにも診断書が邪魔になる。鬱憤ばらしの種を搜して歩き廻る人の数がぐつと減ったことは、話の種も減ったことになる。そうはいっても終戦後一年たらず色々の揺り返しは、どうしても起きる。以下、場所は大抵柏原。

【泥棒ごっこ】ラーゲルに入ってから間もなくの九月十日ごろだ。

曇った寒い日の晩“赤シャッポ”（副大隊長のあだ名）が表門から乗り出して

“あれは何だ”

見ると、夕やみせまる水源地の坂道を、十人以上の北鮮人が連なつて下りてくる。テンデに袋を重そうに担いでいる。さては連中、今日は飛行場あたりで大分“戦果”を上げたとみた。間もなく門の前にさしかかる。袋のふくらみ具合から判断すると、どれもこれも皆んな米だ。

何を考えてか“赤シャッポ”「皆んな一寸はいれ」と管内に一同を誘い込む。全部入ったのを見届けてから門をガチャンと閉めて、カンヌキを下ろし、急に怖い顔になって「お前たちは何処から、その米を持って来た。泥棒をして来たんじゃないか？ 調べがつくまで米袋をこっちに預かるから置いてゆけ。そうしないと幾晩でも、ここから出さんぞ」と威し文句。

何だかんだと、北鮮人もややしばらく抗弁し、粘っていたが、勇敢な顔の大男が腕をふり廻して怒鳴るのに恐れをなしたか、しぶしぶ肩から「戦果」を下ろしたところで放免となり、まんまと没収（本当は強奪）された。後から色々と抗議に來たようだが、門を閉め切って一切受け付けない。没収米は間もなく濁酒に化けて、酒に目のない「赤シャツポ」たちを大いに楽しませた。

しかし、因縁つきの品物に虫がつかないはずがない。ラーゲルの倉庫に置いてあった米袋の残りは「赤シャツポ」の出張中の或る日、忽然と姿を消した。

【天然芋】ラーゲル入りをした九月の末、珍しくジャガ芋が少し配給された。柏原から三キロほどの北、村上湾の居合川上流に旧軍の農場があり、去年の掘り残しの芋が種になって思いがけず、また立派な芋になっていた。明日もまた炊事の人たちが掘りに行くという訳だ。

次の日、秋晴れの好天気のせい、炊事の人以外にも大分参加者が出た。普段、足が痛いとか、腹が病むとか申し立て、仕事をさぼり勝ちの連中のうちからも二三人申し出がある。旧定住組合からも子供が二人加わる二十人近くが籠を持ったり、袋を肩にしたり、半ば遠足といった格好で海岸づたいに出かけた。

隊長格は定住組合のK中老。

ところが晩になっても一行が帰ってこない。とうとう真つ暗になった所ですっかり心配になった炊事長以下数名（うち筆者）、が迎えに出かけた。風が吹つけ、波が吠えるといった海岸を二キ

ロほど、いやに心細い思いをしながら流崎まで行く。さっぱり芋掘りの連中に出合わぬ。

「こりゃあ、皆んな熊にでもやられたんじゃないか」と悲観するものも出てくる。実際のところ、これからは丘を越えたり、林をくぐったりしなければ芋畑まで行けない。この暗夜にまごまごすると、こっちが迷子になる。ついに搜索をあきらめてラーゲルに帰る。

次の日も、一行は帰って来ない。熊害説は高まるばかり。＼とんでもない、どんなに熊が大きいたって二十人を一度に食べるわけはないし、きつと何人かは逃げてくる。どっちに逃げたって迷子になる所ではないし、一人も帰って来ないのは皆んな無事の証拠だ」とK青年と一同をなだめて見たものの、それから先が分からない。おぼろげながら察せられることは、柏原地区以外に飛び出したのだからロスケの兵隊につかまったんだろう、ということだ。

午後ついに関係者そろってカントーラに炊事芋掘隊、行方不明の件を届け出る。「赤シャツポ」は「わかった、わかった、電話で方々に問い合わせしてみる。そんなに心配するな」と何か自信ありげだ。どうやら同じケースを知っているらしい。最も、彼もついに此の間、北鮮人、十数人を二時間もラーゲル内に「幽閉」したばかりだ。

次の日も、その次の日も帰って来ない。帰って来ないのは無事の証拠だと自分に言い聞かせつつ、時々、「赤シャツポ」に伺い

を立てると、「お前も子供が帰って来ないのだから心配だろう。もう少し辛抱しろ」と、大体見当がついているらしい。

一週間後の晩方、忽然と一同は全員帰還し、一件落着いた。あの日、磐城のロスケ部隊に捕まって、今日まで強制労働させられていたのだという。天然芋は所在からして磐城部隊の管轄だから、それを掘り取った罪軽からずという訳だ。最も子供達は隊員一同たいへん可愛がつてくれたという。

しかし遑つて考えると少しつじつまが合わない。丁度、炊事の一隊を待ち受けているように、磐城では大きな厩舎が造りかけてあったという。天然芋を掘っている時も待ち構えていたように大勢兵隊が出て来て取り巻かれたという。どうやらラーゲルの何処かと、いささか相通じるものがあつたらしい。

【発電所完成】早瀬川発電所の所長Sさんは、北千島水力発電の元祖だ。昭和十六年（一九四一年）、戦時統合が始まったころ、日魯系漁業会社のいくなれば外人部隊として白い目で見られながら、北千島最初の二百五十キロワット水力発電を完成し、引続き軍の囑託として北千島全域の水力調査をやり、一方、一千キロワットの第二早瀬川発電所の建設にかかっていた。その工事が八分どおり完成の時に終戦、抑留の憂き目を見る。工事はもちろん中止。

しかし、ロスケも目がある。もつとも「北千島には発電技術者がある大切に扱え」といったスターリン命令があつたという噂もあつた。Sさんは柏原ソ連首脳に呼び出されて、第二発電所完成

の命令を受ける。機略のあるSさんは、ロスケ相手の仕事の能率があがらないのを見こし、百人の労務者を用意してくれば、二カ月で完成しようと契約する。実際は五十人で一月もやれば出来上がるようにまで工事は進んでいた。集まった人は、主に日本の兵隊さんで、ロスケの兵隊も加わっていた。こうして奇妙な日ソ合作工事は昭和二十一年（一九四六年）五月に発足した。

計略は効を奏し、二カ月の契約期間の半分、一カ月で竣工、ソ連側は驚嘆した。以来すつかり信用されて大切にされること一方ならず、三千ルーブルの高給（当時、北千島開発庁長官が四千ルーブル）を支給され、発電のことはSさんでなくては夜も日も開けない有様。実際、トランス一つ修理出来ないロスケ技師？が沢山いた。しかしSさんは、発電機械の方は、あまり強くないのに、このように厚遇されて、いささかコソバユイ。

六月、いよいよ竣工兼開所式。万国旗を飾った野外会場に柏原市長以下、各界の首脳、柏原市民の過半、学校児童等一千名以上が参集。Sさんがテープに鉢を入れると、T邦人電工長がハンドルを廻して水流のバルブを開き、新発電機は滑らかに回転し始めた。

万雷の拍手。映画撮影のフラッシュ。一生最高の栄誉を受けながら、Sさんは喜んでいいのか悲しんでいいのか複雑な気持ちになった。

【帰って来た船長】タラ釣り船、東邦丸が漁に出たまま行方不明になったのは、昭和二十一年（一九四六年）の十二月である。乗

組員はロスケ船長兼監督一人にヤポンスキー漁師六人、平素はロスケが二人監督に乗るのだが、この日に限って一人は病気で休んだ。

年を越し、昭和二十二年（一九四七年）の一月になっても二月になっても、東邦丸は帰って来ない。いよいよ遭難と決まって、噂も下火になった三月、ひょっこり船長一人だけ帰って来た。しかもウラジオストック、樺太経由で…。沖でヤポンスキー漁師たちの謀反にあい、船底に監禁。船は、そのまま本土にまつしぐら、無事、函館？に入港。船長は進駐米軍の取り調べを受けたのち東京送り。東京で米軍は何を思ったか、船長に新調の服を着せ、自動車に乗せて都心を見物させ、御馳走をタラ腹振る舞う。それからウラジオストックへという顛末であった。収容者にとっては正に天来の快ニュースである。

しかしショックを受けたのは柏原のソ連側で以後、毎日漁船の油タンクを検査して、一日量しか絶対積み込まないという用心ぶりだ。一方、まだ脱走を企てるものはないかと、全スパイ網を督励して探らす。

憐れをとどめたのは船長だった。彼は竜宮城でも見て来たような調子で、東京の繁華なこと、建物の大きくて沢山あること、御馳走のすばらしい事などを会う人ごとに吹きまくった。米軍の占領下にある所をほめ立てて秘密警察のお気に召すはずがない。ある日、忽然と姿を消した。

ちなみに同じころ、ソ連所属の独航船（主に日本兵が乗組）も

う一隻が沖から脱走してしまったという噂が立ったことがある。

【ハンセン病異聞】邦人浜手宿舎の一隅に寝ていたハンセン病（ライ病）人がソ連側に知られ、陸軍病院に移されたのは昭和二十年（一九四五年）の暮である。まもなく柏原（北千島全域？）の邦人は民間、兵隊を問わず、全部、病院で裸にされてハンセン病検査。ソ連側はどういうものか、ひどくこの病気について神経質であった。

結局、民間の方には心配された患者は見い出されなかった。兵隊の方も一人いたとかいないとかの噂（あるいはソ連の兵隊？）があっただけである。

それから先は全く秘密のベールに包まれている。ただ昭和二十二年（一九四七年）の冬期間中、陸軍病院に入れられた日本兵が、ソ連側の手で安楽死？させられたという噂が立った。そして同年春、先に陸軍病院に入れられた民間患者がソ連側に連れ出されて姿を消した。これは噂ではなく事実である。

では彼は連れ出されてから、どうなったのか？全く不明である。ただ三つの噂が立った。その一つはハシケで沖に運ばれ、生きながら水葬されたというのである。その二は飛行機でモスコーにある療養所に連れて行かれたというのである。その三はモスコーに連れて行ってやると飛行機に乗せて、遠く洋上に運び投棄したというのである。

【女医昇天】邦人浜手宿舎群の北ぎきに、ソ連民間病院が建ったのは昭和二十一年（一九四六年）の夏ごろである。

本国から赴任してきた医師たちのうち女医が一人いた。若くて美貌と健康とを併せ持ち、職務にも中々熱心なので、すぐ新開地、柏原の美神的存在になり、意地悪で点の辛い邦人間にも評判になった。階級は中尉だったという。あるいは此の女医が病院長だったのかも知れない。

女医には良人があった。しかし何だか、ひどく影の薄い存在だったという。丁度その頃、邦人收容所が出来上がり新任の所長（大隊長）として中年の上級大尉が赴任して来た。ロスケとしては背の低い方で瘡身、醜面、それを補うつもりか胸に勲章をいっぱい付けていた。“グンシヨウ”、それが彼に奉られたあだなであった。そそっかしく無類の短気、取り柄というも真つ正直なことだけ。まことに、とっつきにくい存在であった。もちろん柏原独身。

どういうきっかけからか、“美神”と醜男とは近づきになり親密になり、割なき仲になる。その頃、大隊長の部屋つきボーイになったK少年（定住組合）は、度々“グンシヨウ”の手紙を“美神”に届ける役目をおうせつかる。∴“二人のなかは女医の良人もすっかり黙認していたようだった”とは、かささぎ役を務めた少年の後年の思い出である。一方、彼女は依然、職務に忠実、ロスケと、とかく折が合わない北鮮人の所へも進んで診察に出かけた。

しかし、女医の華麗な二重生活は束の間に終わる。昭和二十二年（一九四七年）の初め、彼女は正体不明の熱病におかされる

（発疹チフス？）。K少年が最後に訪れた時には、既に不起の床にいた。「K、私は死ぬ」といい、これまで世話になったことに何度か礼をいった。

葬儀は柏原の軍民こそって参加し、盛大に営まれた。長い行列（その中には彼女の二人？の夫もいた）を従え花輪に飾られた棺は、軍楽隊の打ち鳴らす葬送曲の中を静かに硫黄山麓の墓地に向かった。

【片岡組】終戦前、漁業会社は片岡の海軍根拠地隊に協力隊を送っていた。施設や揚陸作業などの雑役を務めていたが終戦直後、直後の海軍部隊の本土撤収には勿論、参加できず置き去りといった形となり、対ソ戦闘直後に柏原に戻って来て、山手宿舎に入った。この約二十名ほどの人達を片岡組という。

どの事業体でも、得にもならない応援に人を派遣する時などは、とかく内部の手あまし者を出してやることになるのだが、此の場合も、その好例で片岡組の中には賭博常習犯や愚連隊じみた者が多く、初めから厄介者であり、柏原に帰ってから除け者であった。ちなみに、真面目人間の方の最大の組は秋田組であった。工場雑役夫、職人、中幹部など、秋田県出身者ばかりで固めた長い伝統のある組である。まさに北洋漁業労力の中核だった。

初めから労役を嫌い、喧嘩、賭博を常とする彼らに抑留、強制労役という枠がはめられたのだから、今度は真面目人間に向かって鬱憤ばらし“内攻”が始まるのは当然。それでも昭和二十年（一九四五年）から二十一年（一九四六年）後半まではよかった。

この間は収容が、まだはつきりした拘束力を現さず、作業もなんとかして回避することが出来たからである。

この間、彼等の引き起こした事件は、せいぜいストーブの焚き付けにダイナマイトを使って（上手に使えば最高の焚き付けになる）爆発させ、仲間が六人ほど負傷したこと、非協力のかどでソ連側に五人ほど捕まり、一週間ほど監獄入りをしたぐらいのものであった。

しかし、有刺鉄線で囲まれたラーゲルの中に詰め込まれ、毎日人員を調べられ、何処かの職場に送り出されるとなると、内攻はいよいよ本格的になった。

まず、片岡組ならざる方面からも「ぐれ者」が合流してきて、三十名ほどに数が増えた。さらに内地で暴力団？の小頭をしていたAなる人物が彼等を牛耳るようになり、組織化して来た。彼等のすることは因縁をつけて喧嘩をぶっかけ、金品を巻き上げるのと、医師を脅迫して偽りの診断書を出させ怠業すること、かくして得た金と時間を酒宴や花札遊びなどに費やすことである。彼等は漁業会社時代に冷遇されていたので、因縁をつける種は多方面にあった。

こうして、一見平穏であった収容邦人の生活も、内部は絶えず揺れ続け、暴力沙汰も月に数件は必ずあるといった有様となった。ソ連警察の手を借りて彼等を摘発、放逐することは容易であったが、邦人同士として、それは忍び得ないことであり、一面あとのたたりを恐れる気持ちも強かった。

【倉庫勤務雑記】 網工場、塩蔵場、掃除係と幾職場を転々として、いわゆる大倉庫に廻されたのは昭和二十一年（一九四六年）九月末。ラーゲル入りしてから初の外勤である。何しろラーゲル内の宿舍清掃や便所汲みに、いささか参っていた折であるから、一寸ばかり開放された気持ち。

勤める倉庫は、河口よりの海岸に建てられた三棟の旧軍倉庫のうちの一つ。五十坪ほどで民間の食料、衣類等の生活物資が入っている、いわば柏原の元蔵。ほかの二棟はソ連生活物資貯蔵庫？。歩哨が立っていた。

同僚のTさんは、もとは矢張り掃除係で、夏のうちは野菜畑の係だった中老。最初の日、私等を迎えにラーゲルに来たロスケ倉庫番は、中年の背が高く細面で目付きの鋭い、どこかロスケらしくない険しい感じの男だ。この初印象は、まもなく正に適中。

その日の仕事は、倉庫の品物を一時間ほど整理しただけであっけなく終了。「午後また来るから、それまで中にいろ。錠を下ろしてゆくが、誰れか来たら屋からだといって帰せ。倉庫の中にあるものは何をたべてもよいが、もし持ち出しなると牢屋送りだぞ」と言い残して倉庫番は出ていく。すぐガチャリと錠が下りる音。

しばらくTさんと顔を見合わせて。目をパチクリ。これから何時間かは奴の来るまで監禁とは恐れ入る。一つ倉庫の中を探し廻ってやれ、何か良いものが出てくるかも知れない。

入口に近い所にドラム罐が四〇五本、何が入っているんだろう。

まさかガソリンではあるまい。

Tさんと二人、ややしばらく叩いたり、臭いをかいだり。結局、これはどうも奴等の大好物、スピリト（飲用アルコール）らしいということになった。

倉庫の中央には大豆のカマス入りが二百〜三百袋ほど。北側の壁には幾段も棚が吊ってあって、果物の砂糖漬けや青トマトの漬物などの瓶がズバリ。一隅にビスケットの箱がフタを開けたまま、いつでも摘まめるようになってゐる。それからアメ玉（木材アメ？）の箱が五つほど……ムシャムシャやりながら、「ナンダ柏原中の菓子って、これだけか」と不逞の顔をして、またもやロスキの悪口。

上段の一つの棚に格好の良い小瓶がビッシリ並んでいる。「これはアジコロ（オーデコロン）」といってロスキの香水だ。奴さん達、これもアルコール代わりに飲むことがあるんだぜ」と、もと工場の雑貨倉庫に出入りをしたことのあるTさん。

大豆の山の近くに、バターや豚の罐詰などの箱がつんである。その他、お茶、石鹼、マッチなど、ラーゲルで配給になるものは何でもあつたらしい。さすがは「大倉庫」だ。ところで、いくら探しても砂糖が出てこない。さては今月は砂糖が欠配か。

中央から南側にかけては全部衣料品だ。子供の靴、帽子、手袋など、おとな物がどういふ訳か少ない。でもハイヒールが少々。しかし、なんといつても大量にあるのが広幅の布地だ。白、黒、黄、青、褐などが、床におき切れずに梁々に渡された厚板の上に

も載っている。ただ模様ものや赤地は一つもない。

製造元が漢字で書いており、どうも満州から持ってきたものらしい。

「おい、おい」とTさんが一番奥から呼ぶ。砂糖袋が、ついに見つかったというのだ。見ると半装ほど空箱の上に載せてある。旧軍のものらしいが、雨にでもあたつたのか固まりかけている。

倉庫内を一巡りした所で昼食、午後からは倉庫番の奴が来るだろうからと神妙にしている。なかなか来ない。小用を床の破れ目からすまして、また待ったが、まだ来ない。晩方になって、ようやくガラリと戸が開く。

「御苦労だった、誰も来なかったか？、明朝また来てくれ」。

働いたのか、監禁されたのか判らない妙な気持。

次の日の朝、二人して倉庫の前で待っていると、倉庫番が四〜五人の友達らしいのとやってくる。皆んな倉庫の中に入ったところで戸を閉め、ドラム罐のネジ栓をあけてアルコールの配給が始まる。友達ではなくて、お客さんなのだ。お客さんはテンデに持ってきた瓶などにスピリトを充たしてもらつと、札束を傍のドラム罐の上に放り出す。札の小山ができる。配分が済み、お客さんが出ていった後で、倉庫番は札をポケットにねじ込んでからTさんに裏の川から水を汲んでこさせ、バケツの水を、さっきの配給で目減りしたドラム罐に注ぎ入れ、元通り。また一杯になった所で栓をビシッと閉めて知らぬ顔。

さては配給ではなくて、「お上のもの」の盗み売り？、どうりで

目付きが悪いと思つたが…。

この日は近く貨物が入るからと、倉庫内の品物の取り片付けや隅寄せ。昼ごろ、何処の職場の者か二人連れが伝票を持ってやって来て、衣料の受け渡しが始まる。倉庫番は「オレが品物を揃えているうち、オマエ達はやつ等を見張っておれ。ボンヤリしていると何でもポケットに入れられてしまうぞ」と目を光らしている付ける。

さては、これがオレ達の本当の役目だったのか…。

ところで品物の授受の際に、インチキか勘定間違いか判らぬが、多い少ないで凄まじい論争が始まって、殴り合はんばかりだ。結局、倉庫番の方が押し切つて、受領側はブツブツいいながら渡されただけの品物を持って引き下がる。いやどうも昨日に較べて今日の荒れること…以後、退屈で困る日、荒れる日、貨物の入庫があつて忙しい日などの連なりで毎日を過ごした。荒れる日は決まつて他職場から受領に來た場合である。その合間、合間に倉庫番自身の商売も拝見する。スピリト、罐詰、衣料など、まるで雜貨店だ。奥にあつた砂糖も彼、専用のものであつた。ともあれ他の職場より変化があつて面白かつた。

十月の中旬、若いソ連の女事務員が仲間になり、倉庫の一隅に机とロスケ式（十玉）のソロバンが持ち込まれた。彼女は「倉庫番」は勘定が下手で間違ひが多く、評判が悪いので自分が助手になつたこと、倉庫業の主任は、いま自分の家を建てているから、忙しくて減多に、ここへ顔を出さないことなどの内輪話をしてく

れた。

さて鬼のいない間の命の洗濯で、親方の留守の間に「子分」はホマチ稼ぎをやつていたのか。

しかし親方だつて家などを建てるというからには、もっと大きなことをやっているかも知れない。

割にヒマがあり、よい職場だったが、十月の末に内地帰還の準備が始まって、ついに退職。この頃、倉庫主任にも一、二回顔を会わせた。バカに立派な服装をした小柄の男だった。最終の日、女事務員は、これは帳面はずれだからといって、アジコロンの瓶を一つずつくれた。

【柏原小中学校】皆んなが大騒ぎをした内地帰還のことも、取りやめとなつたのが昭和二十一年（一九四六年）十一月の初め。また職場遍歴が始まり、罐詰工場づきの倉庫、建築事務所、食堂を転々とする。十二月中旬には、また「大倉庫」に戻る。人はガラツと変わつて、もとい女事務員だけで倉庫番も主任も不正がばれて処罰されたとか…。それから、ポルト（船入瀬）の揚陸作業、吹雪の中の仕事に、いささかウンザリして來た昭和二十二年（一九四七年）の一月十日ごろ、今度は学校のペチカ焚きをやつてくれという。Kという中老が今までやっていたのだが、吹雪の中を一人で通勤するのは無理である。

学校は收容所の南三百〇四百メートル、丘麓と小川の間の平地に建ち、少し手前に裁判所がある。両方とも旧軍慰安所。

大きさは百坪（五間×二十間）ほど。東端は三十坪ほどの室内

運動場。廊下の両側に各五、六の教室があり、西に行くに従って高学年の室となる。西端の一室は教員室、東端の一室は小使長室、その他に小さな倉庫が一室、校舎前の小川の近くの小さな小屋は掃除係の自宅。各教室にはオンドルまたはペチカ、中央北側の一室には集合煙突、廊下の両側には一段低く焚口が並んでいる。

学校は八年（十年？）制、生徒総数は三百人ほど。二部授業で第一部は午前八時～十二時、第二部は午後一時～五時。各部の一年生は三十～四十人、八年生は十人ほど。教員は校長を除いて皆女性。校長は中尉階級で中年温厚な純スラブ系。その他、軍隊教練の時には下士官が派遣される。

ところで、一番親しくしたのはコーカサス系の老小使長と、キルギス系かと思われる掃除係のおばあさん、それから低学年の生徒たち。

さて、朝五時に起床、ラーゲルを裏門から出て五時半に学校着、小使長（宿直）室のズン胴式のストーブから火をもらって、まず集合煙突の直下にあるペチカを焚き付け、それから巡々に火を移して歩く。十口近くも焚き付けるのだから、なかなか忙しい。ペチカやオンドルが、すっかり暖まるには一時間ぐらいいかかるし、七時過ぎると生徒がチラホラ見えてくる。すっかり教室の方をすましてから、室内運動場の隅にあるドラム罐を改造したストーブに火を入れる。これは鉄板製だから暖まりが早い。

十二時まで焚き続けて作業終わり。小使長や掃除のおばあさんの勧めに従い、石炭を少々袋に頂戴して帰宅。燃料不足の折で

あったから、これは全く有難い手当だった。

生徒たちは、あまり勉強熱心とは見られなかったが、元気は素晴らしい。一年生でも吹雪の日に平気でやってくる。足かけ六カ月、ペチカ焚きをやったが、その間、吹雪で休校になったのはい回だけ。此の日は島の吹雪に馴れたものでも、いささか降参するくらいに猛烈だった。

ところで、一番不評の学科は体操で、ともに練習するものは、いつも半数ぐらい。軍隊教練も、あまり真面目にやるものはいない。意外に熱心なのは数学。八年（十年？）生に二次方程式を少し試してみたが、なかなかよく理解している。ついでにチョップリ政治向きの事を聞いてみる。

“トロッキーを知っているか”

“知っている。反革命で殺された”

“ヒットラーは死んだというが本当か”

“いや、何処か遠い所に逃げて隠れているから油断が出来ない”

“アメリカと戦争したら、君達の国は勝てるか”

“勝てる。アメリカの人民は皆んな政府を恨んでいるから、き

つとソ連に味方する”。

なかなか明快だ。ヒットラーが死んでいないと教え込まれているらしいのは、いささか意外だった。

低学年ともなれば誠に無邪気で国際主義者だ。筆者が猫脊なので“お前、病気か？”と心配そうに顔を覗き込んだ子供がいる。

“これ、お菓子”とアメリカ精白麦粉のパンを差し出した女生徒

がいる。いきなり握手を求めて来た碧眼のチビチャンがいる。眼鏡をかけさせてくれと取り巻かれて降参したことがある。あれを読んでみる、僕たちのことが出ている、と室内運動場の壁に貼られた本国新聞の切り抜きの前に引っ張って行かれたことがある。

この壁には手刷りの学校新聞が時々貼り出され、その度に生徒が群がっていた。反対側の壁には一段高く、レーニンの旗のもと、スターリンの導きに従って はるか彼方 輝く地平に向かって進みゆかん」と大きな字で標語が書かれた紙が貼られ、その他二三の標語、社会主義の成果を示すグラフなどがあったが、ありきたりのものだったのか、それ等に見入っている生徒は見かけなかった。

五月の末あたりだ。本国か此の僻陬の学校に、小形の柑橘類の箱入りが幾つか送られて来た。その鳩の卵ほどの一つを校長からおすそ分けに預かる。まもなく夏休み？に入って、長く続いた学校勤めも終わりが来た。

六月五日（もう生徒は来ていなかった）、校長や小使長、掃除のお婆さん達に別れを告げた時には、いささか感傷があった。夏休みが終わって授業が再開されるのは九月一日からだ聞いた。

【農場】学校を辞めてから、また塩蔵場に戻り、カレイの頭おとしをウンザリするくらいやる。そんなある日、記帳係長（旧定住組合のK青年）がやって来て、コンビナートが今度、農場をやる。少し心得のあるものが欲しいという。一つやってみないかと

相談される。これは面白い、ロスケがどんな真似をするか見てやろうと快諾。六月の半ばであって、ダモイが秋期であることは既に非公式に決まっていた。

ところで、この北千島漁業コンビナート附属の農場と牧場の編成であるが、

場長 ソ連人

助手 2名（農作業、筆者、事務、ソ連人女性）

農作業員 男3 女5（いずれもソ連人）

馬車運送 男2（邦人）

トラック運送 男1（ソ連人？）

牧夫（野外） 邦人1、北鮮人2

搾乳婦 ソ連人2

飼育係 ソ連人男1 北鮮人男1

計21名

大体このようであった。農作業のソ連人男性三名は元来牧夫であって、必要に応じて牧場に赴いた。草刈り時（八月、九月）には、家畜の飼育、管理に要する人員以外は総て乾草の調製にまわり、他に草刈り専門の臨時雇が三名ほど集められた。

農場は「濁」坂口川上流の緩斜面にあり、元来は旧陸軍自活班の野菜畑で、十町歩ほどの広さがあったが、コンビナートが利用したのは二町歩足らずであった。牛馬の放牧馬と草刈り場は「濁」坂口川流域に至る一帯であって、コンビナートの牧場ばかりでなくソ連陸軍、ソ連個人も、ここを利用した。

牛は皆、乳牛で種牡牛一、成搾乳牛十〇十五。エアージュ種に似た体格の頑丈で寒さに強い品種（白く黒く褐）であった。他に耕馬五、緬羊一〇ほど。結局、二十人ほどの労力で一〇二町の畑と二十頭ほどの牧場を経営したことになる。採算とは、およそ縁遠いものであった。

農具は大抵、柏原鉄工場で作った軟鉄製のもので、二頭曳きのプラウ一、鉄棒方形ハロー一、ヘーホーク一〇ほど（三センチ鉄ボルトを三つに裂いて作ったもの）、草刈り大鎌一〇ほど、クマザライ様のレーキ五ほどが主なもので、畜力用レーキは見られなかった。この草刈り鎌は軟鉄製であったから切れが止まりやすく、そのたびに懷中に用意した砥石で数回研いで刃をつけた。本国から持ち込まれたと思われる農具は馬具だけであったようである。なお日本製の剣先シャベル五ほどと手鎌は二〇三丁あり、手鎌は筆者等邦人がミヤマハンノキの下生えを刈るとき効果があつたが、ソ連人は「カミソリ」と称して用いようとしなかった。

栽培した作物は馬鈴薯、家畜カブ、その他カブ類、二十日大根、人参、家畜ビート、玉葱（漬物用）などで、馬鈴薯以外の種はカムチャッカ産であるといわれた。肥料は厩肥が主で、他に魚粉（旧自活班？）が少々あるだけで充分では勿論なかった。

このうち家畜カブを始めとするカブ類は一番成績がよく、ほぼ期待どおりに成長した。馬鈴薯は種芋の貯蔵が悪く変敗していたので、発芽したものは僅かであった。人参は元来、気候からして充分に成長できない上、播種、間引きが粗雑であつたためほとん

ど収穫出来なかった。ビート、玉葱も同様。二十日大根は、良く成長したが大根蛆の害が甚だしく、またある種は芯立ちが早過ぎた。

乳牛は「濁」坂口川流域の野草、主としてイワノガリヤスを利用して、夏季は産乳量をあげたようであるが、秋に入ると急減した。なお農耕飼料には馬鈴薯粉、コンニャク粉、麦類等であつて、魚粉も少量用いられたようである。ちなみに、コンビナート自身が製造した魚粉は国内食用に移出されたりしく、現地の農牧場には廻って来なかった。

乾草はほとんどみな、イワノガリヤスを主とする禾本科の野草で調製され、野外に堆積された。この外チシマヨモギ諸種のスゲなども若干利用された。エンシレージも円形の穴を地面に掘って少量試みられた。なお牛舎は木造一重ばりで、特別の保温施設は見られなかった。

以上が漁業コンビナート農牧場の大体の骨格だが、業業と同様、日ソ双方とも立場も気風も違うので、時々悲喜劇が起きた。

人参まきにかかる。棒を馬で引っ張って作業を作り、魚粉が一寸ばかりふられて、もう種を下ろすばかりである。

(日)「困ったなあ、こう土が乾いては、なるべく湿った所を見て種を下ろしてくれ」

(ソ)「湿ったも乾いたも、みんな同じ土じゃないか。心配無用」。

馬耕組が馬で飛んで来て、家畜蕪を蒔き終わったばかりの圃場

を走り廻る。

(日)「バカヤロー、畑の中を馬で飛ぶ奴があるか」

(ソ)「どうして、そんなに怒るんだ。畑の中を馬で歩いて文句を言われるのは今が初めてだ」。

緬羊が犬に追われて逃走、邦人牧夫が馬で探したが見つからない。次の日、

(ソ連人場長)「お前、眼を二つ持っていないがら、半日かかっても探し出せないとは、どういう訳だ。今日はどうしても見つけてこい。でないと、ぶち殺すぞ」

(邦人牧夫、腹の中で)「チエツ、緬羊と命の引き替えをさせられてたまるものか。面白くねえから、今日は見つかったも追 ってこないことにするか」。

エンシレージ用の生草積みに行くトラックにソ連人牧夫達と同時乗する。途中、山道にかかってから道路一面に散乱している日本軍砲弾(信管はついていない)に気付くが、アツと思うまに通過してしまう。草を積んで帰る時、

(日)「こうビッシリ積んで砲弾の上を通るのは危険だ、破裂したら大変だから、あっちの道を廻ろう」

(ソ)「心配無用、あそこは軍用トラックがしょっちゅう通るんだ。破裂するなら、とつくに破裂している」。

色々な事件があり、農場として結局不成績でもあった。しかしソ連の農婦や牧夫は、みな同じ地域(ウラル山脈に近いよう

あった)の農村出身で、純朴の気風がまだ多分に残っていた。彼等の利害や時間にかわりがないような悠々とした仕事ぶりこそ、本当の農業の姿だったような気もする。

六、収容終期

引揚準備

昭和二十二年(一九四七年)五月(三月説もあり)新任の北千島州知事(北千島開発庁長官?)が邦人帰還は秋期であると思われ、その一つに北千島の漁撈も製造も大体邦人の手を借りなくとも可能になった事があげられる。もっとも流網漁は採網に技術を多く要し、ソ連側の習熟は充分とはいえなかった。また建網を組み立てる能力がほとんどない、と邦人側にいわれていた。製造には上記のような点はなかったようである。ただ罐詰工場の機械、ことに巻締機の整備が充分でないとの風評であった。

六月頃から既に引揚準備が始まった。携行できる荷物は一人百キロ以内(二、三個)であると定められたため、手廻り品を整備することが流行した。種々工夫して出来るだけ内容をよくすることに苦心し、同僚やソ連人と物交などして衣類、靴などを整えた。また非常用として米、バター、罐詰、煙草などを荷物の中に入れた。

八月、九月の二回ほど、ソ連政府の意向として一同に居住の勸

エピソード(4)

告があつた。「土地と市民権を与える、千島、樺太のどこでも希望の所に居住できる」といった趣旨であつた。これに対する一同の意見は「言うことが信用できぬ、勝手な商売ができぬ、少し金を儲ければ、すぐぶつたくられるに決まっている。だいいち日本と行き来が出来ないではないか」など極度に否定的で、結局、勧告に応じるものは一人もなかつた。侵略と強奪を身を持って受けとめた者としては当然の成り行きであつた。

九月に入ると思想、政党、宗教等に関する調査が改めて行われ、衣類等の最後の蒸気消毒があつた。十六日、柏原の邦人は全員、一切の作業勤務から解放された。これと前後して摺鉢、蔭の澗、長崎等の邦人が続々と柏原に集結してきた。十七日、十八日、乗船員名簿が作成され、収容所内の残余食糧（大豆三十俵、玄米二十俵、塩マス若干）、薪若干、炊事道具等が船積みのため荷造りされた。また、船中用として黒パン各人三日分ほど特配された。ルーブル給与も些少なうがあつた。かくて北僻、異色の収容生活は終局を迎えた。

この間、ソ連の与えた最大のものはいうまでもなく、ソ連の政治思想に対する多量の嫌悪、友を呼びこそすれ決して縮まることがない嫌悪であつた。またソ連の一般無名大衆に対する深い親愛感も大きな収穫であつた。

出発直前の総員点呼の結果、一、二名の残留が判明した。摺鉢地区一名、柏原地区一名である。残留の理由は居住勧告とは無縁なソ連婦人との情事であつた。

収容生活の枠をはめられて既に二年近く、さすが「やんちゃ」な北洋労務者も、だいい飼ひ慣らされて来た。まして帰還を目の前にしては、下手な真似をしてダモイが取り消されたら、それこそ一大事。だからラーゲル内は毎日平穩無事、たまに小事件が外から飛び込んでくるぐらいであつた。とはいえ、内輪もめも探せばない事はない。以下どれも場所は柏原。

× × ×

【片岡組入牢】片岡組は、その後ますますのさばり出し、夜中、梁づたいに宿舍中を忍び廻り、枕探しをするなど、すっかり泥棒じみてきた。七月になって我慢できなくなつたのか、とうとう邦人の誰かがラーゲルの警察に被害のほどを訴えて出た。まもなく彼等の主だった者が七人ほど捕まって、皆んな重量栈橋の方にある本監獄にぶちこまれた。一週間ほどで出て来たが以後だいいおとなしくなつた。いったい誰が訴へ出たのか？、宿舍長だ、いや薬局の連中だと一しきりラーゲル雀がざわめいた。

× × ×

【酔つたソ連兵のちん入】六月の末か七月の初め、ひどいガスの晩、したたか酔つたソ連兵が二人、どこからラーゲルに入つたか忽然と第一宿舍の廊下に出現し、大声でわめきながら、しきりにあちこちのドアをたたく。どうやら自分達の兵舎と間違えたらしい。中隊長かラーゲル警察かが出て来て取り押さえ、裏の入口近

くの一室に引きずっていつて戸をしめた。あとは夜通しのわめきや訳のわからぬ歌。説論をくつての朝帰りとなったが……。やつ等はどうやってバラ線を越えたんだろう。いや熊みたいなやつだからバラ線のトゲなんか刺さらないなどとグループ評定があちこちに盛んだった。

× × ×

【少々ならよろしい】 八月になってからだったと思う。晩方、帳場さんたちが各宿舍を廻って非常呼集？をかけた。時間外の仕事だが、その代わり少々良いこともある。希望者は出てくれという。三十〜四十人集まったところで中隊長などラーゲル将校が数人先に立って出かけた。着いた所は重量棧橋。砂糖やアメ玉、ビスケットなどの菓子類を積んだ大はしけが横付けされており、今日中に倉入れをしなければならないんだという。荷役にかかる時、将校たちは「少々ヤルならよろしい、沢山はダメだ」と小声で言う。すっかり元気づいたヤポンスキー達は、荷をかつぐ度ごとにアメ玉やビスケットをポケットにねじこんだ。荷役は恐ろしく早くケリがついて、帰途につく。一同のそれぞれの箇所は張り切ればかりにふくらんでいた。どうやら荷主（コンビナート？）の方でも、時間外に人を出してもらったことから何かを了解していたらしい。

× × ×

【時計屋お灸】 時計屋は北千島の天にも地にも、たった一人しかいない。だからソ連人が彼を大切にすること一通りではない。お

まけに若くてハンサムときいているからマダム連中には特にもてる。すっかり意気投合してしまった間柄もあるとか。生意気だとラーゲルの中ではあまり評判がよくない。

八月のある晩、時計屋氏どこかで飲んだか、したたか酔って帰って来た。治療室に転がりこんで居合わせた若い薬局氏と一言、二言、話しているうち、どうした訳か急にいきり立ち、そばにあった軍靴で薬局氏の顔をどやした。鉾がついていたからたまらない。歌の文句どおり流れる血潮を押さえながら隊長室に駆け込んで訴えた。時計屋は、そのまま一晩ラーゲル牢入りとなった。

次の日、時計屋氏は青くなつてやつて来た。「酒を飲んで前後不覚でやったことでなければ裁判にかける。ダメイもダメだ。どこそこの誰と飲んだかヤポンスキー仲間の証明書を持つてこい」といわれたらしい。しかるべく彼のハシゴの足取りを書いているうちにロスケマダムの名が三人も出てきて、いささかこそばゆくなつた。

× × ×

【シラムの佃煮】 度々の蒸気消毒にかかわらずラーゲルのシラムが尽きないのは、病氣と称して消毒をさぼるものがあるのが主な原因である。今日は、どうしてわかったのかラーゲル開設以来、一回も風呂にも消毒にもいかなかったという最高の無精者が、ラーゲル将校立ち合いのもとに戸外で着替えをさせられている。最も、この中老は体も弱く作業も休み勝ちで、あながち咎める訳にもいかない。

下着をとると敷いた蓆の色が変わるほどシラミが、こぼれ落ちた。宿舎長も将校も恐れ入ってしまったて離れて見ている。ようやく着替えが済んで一件落着いたが、すまないのは脱ぎ捨てられた衣類と蓆の仕末。当人は寒い寒いと言って布団をかぶってしまい絶対出てこない。ようやく掃除役のこれも中老が買って出て、恐る恐る棒の先で丸め縄でくくって引つ張ってゆくまでになったが、「こぼすな」とか、「炊事に持っていつて佃煮にしたらどうだ」などと声がかかることしきりであった。

×

×

×

【山火事】引揚げも、あと十日ばかりに迫ったころ、北の台上から煙があがった。山火事かと噂しているうちに、軍の方でも消したのか煙は見えなくなった。ところが次の日の朝、また台上から煙が盛んに上っている。今度は、ずっと広範囲で岸壁の際まで火の手が来ている。煙が丁度ラーゲルの上にかかるように流れるから、空は濁ってなんとなく陰惨な気がする。朝飯も早々に一同消火に赴いた。もう軍の方もソ連民間も来ていて、しきりに這松を引きはがしたり、切ったりして防火線を造っている。ロスケ斧や鳶口、天王寺鋸などが長い列になって、ここを先途と動く。昼ごろ防火線は出来あがり、火も下火になった。

ところが次の日、またまた少し離れたところから煙が上がっている。昼頃までには大分大きくなったのでヤポンスキーの一部は、また出動した。こんなことを二、三回繰り返しているうちに雨が降って、すっかり消化したようだった。

しかし、実際には火が残っていて（這松の下は落葉が厚く積もって泥炭状になっている）晴天になると、また煙があがった。もうあまり燃え広がる所もなく、くすぶるだけだが、淡い煙が折々ラーゲルの方に流れた。その執拗さは何か呪いの火といった無気味な感じがあった。

この間、ラーゲル警察、柏原警察、国境警備隊と何かしら慌ただしい動きがあった。あるいはヤポンスキーのダモイと山火とを結びつけて（行きがけの駄賃に柏原を焼き払うといったような）何事かを勘ぐっていたのかも知れない。

乗 船

昭和二十二年（一九四七年）九月十九日、好晴日、早朝からラーゲル出発が始まった。国境警備隊による携帯品検査が屋外で行われ、一度荷造りしたものを、またほぐして内容を点検するため意外に時間を費やした。検査を終えた人々は次々に三台のトラックに分乗して船入澗に向かった。最終の人々が検査を終了し、全員揚陸場に結集した時は、すでに日没であった。

邦人退出後の収容所はソ連民間人が居住する手はずになっていた。午後、まだ出発の混雑が終わらないうちに早くも部屋の下見に来るものが三々五々と続いた。

また収容所裏の塵捨て場に棄てられた衣類などをあさる婦人もいた。やがて総てが終わり、薄暮のうちに遠ざかり行く無人の収

容所は寂然として心に残るものがあつた。

十九日晚、一同は揚陸場の破屋や貨物の堆積、塩の山などの陰に身をすくめて野宿した。北の台から吹き降ろす北西風は厳しく、仮睡も思うにまかせぬままに一夜は過ぎた。

二十日、午前中は北西風が強く乗船不能、一同は揚陸場をうつろに彷徨して時間を過ごした。場内にはロープ、漁網、原木、鉄筋、鉄材、食料、雑貨等がいたる所に堆積して依然雑駁を極め、静寂な原始境の昔を知る者にとっては悪夢とも感じられた。また、一隅には旧守備隊戦車がまだ取り除かれずに残っており、山手の中央にある旧船舶修理所の荒れ果てた内部には数台の旋盤が虚しく光っていた。見上げればカプト岩頂上には方形電探アンテナが強風に震えていた。

午後から乗船が開始され、機船の引く大はしけ船に一同は先を争って乗った。引揚船名はウラジオストック号、四千トン級のアメリカ建造の汽船であつた。風は次第になぎ、乗船は順調に進んで日没前には大部分が完了した。

最終のはしけが岸壁に着いた頃、陸軍病院に入院していた病人三名？が担架で送られて来た。かくて、総ての邦人（一、五六四名）の乗船を見届け、最後に陸地を離れる命運を担った者は旧工場長の札内清吉、宿舍長の大野熊太郎ほか医師など三名（うち筆者）であつた。日は既に硫黄山の左肩にかかり、ゆるくうねる湾内は朱に染めつくされ、幻美、荘厳な光景が展開した。

（一同は九月二十四日に樺太真岡着、大部分が再抑留されて炭

礦その他に労役。病人、老人、家族持ち等四三二名だけが十月十七日函館着）。

退島感懷

郷里を離れる瞬間、筆者の胸裏に噴きあがつた無量無数の心の動きはもとより書き尽くすことが出来ない。しかし一筋、荒れ狂う風情を貫く次元の異なったものがあつた。今こそ不思議なこの島の力、来るものは必ず去るものとせずにはおかぬ不思議な力を見たのである。あるいは自身を操っていたものの正体を知ったのである。何回も、ここで演じられた決定的瞬間が幻の系列になつて眼前に浮かぶ。

「明治八年（一八七五年）

ロシア人

明治十七年（一八八四年）

千島アイヌ

明治三十年（一八九七年）

アメリカ人

明治三十七年（一九〇四年）

報效義会

皆んな招かれ、住まわされ、最後に追われるのであつた。絶えず新しい血と汗と涙とを欲する魔物であつた。あるいは幼児のような気まぐれであつた。

そして今、次はだれ。招かれたものは去ることが既に約束されている。いったい、この島を永久につなぎとめるものは何だろう」。

翌二十一日朝未明、ウラジオストック号は抜錨し海峡の北口に

向かった。高曇りの空に乱れ雲が漂う。珍しく風は、そよともしない。

シムシム島が右手に見え出した。薄明を通して見るその姿は、低く両端だけが持ち上がって、何か傾いた破船か岩にのった海豹に似ていた。船は、おもむろに転頭して南下し始めた。海豹の姿の島は次第に船尾に小さく薄れていった。

思いなしか、その海豹は暗い海面から幾度か頭を上げて訣れを惜しむがごとくであった。

あとがき

記し終わって、いささか北千島に対する負い目が軽くなったような気になった。いささかである。墓参や戦没将兵の現地慰霊など、実現したいことは山とあるのだが、個人でやれることではないし、時機もいまだしの感である。盛大であった漁業の下敷きにされた多くの労務者、文明に亡ぼされた原住民など、このままでは文字通り影も形もなくなってしまう人達もいる。負い目が出来上がるゆえんである。

激戦のあった国端崎は今どうなっているのだろう。停戦後、遺体の処理は充分だったのだろうか。次の年の一月あたりに、このあたりを画にかく任務を受けたソ連将校が、柏原湾に帰ってから“…惨状見るに堪えなかった…”と語ったことがある。今でもあ

そこには、自然の草花に守られながら同胞の訪れるのを待ちわびている白骨が無数にあるのではなからうか。

でも、いささかでも負い目が軽くなったのはうれしい。将来とも、この種のことに多方面からの努力が望まれる。そうでないと旧日本は生硬な水産統計以外には北千島について何も残さなかったし、その領有も仮そめのものであったなどという事にもなりかねない。

それからあらぬか、この地域の領有問題に対する日本政府の態度も、どこか精彩を欠いている。いったい北千島のように、世界に向かつて開放されなければ、真の価値が発揮できないような地理的性格と歴史的命運を持った地域を、かたくなに封鎖し続けているソ連政府のやり方は国際社会に対する反逆であるし、ソ連民衆のためにさえならないのではあるまいか。

現住所 根室市牧の内一四六

参考文献

- 北洋漁業の今昔 今田 正美
- 奪われた北千島 その漁業史 今田 正美
- 北千島水産統計（昭和九年以降） 北千島水産会
- 戦前における北千島定住組合の概況 道庁総務部
- 北千島農事年表 道庁総務部

○北千島における水産業調査報告書 農林省水産局

○千島概史 高倉新一郎

○郡司草 能戸 英三

○千島戦史 北海タイムス昭和四十三年六月二日～七月二日連載

○太平洋戦争ドキュメンタリー第八巻 今日の話題社

○秘録大東亜戦史 富士書苑

御教示をいただいた方々（敬称略）

佐々木豊保（根室市）

元シウムシユ島 ベップ地区 野砲隊

村上 甫（根室市）

元パラムシロ島 摺鉢地区 歩兵隊

喜多 和平（流山市）

元シウムシユ島 片岡飛行場 艦攻隊

野口 行孝（東京都国分寺市）

元シウムシユ島 片岡飛行場 艦攻隊

関沢孝一郎（北見国斜里郡）

元シウムシユ島 潮見川地区 対潜砲隊

村山 六郎（松本市）

元北千島水産会書記 北方特務機関

小宮山中一（東京都杉並区）

元シウムシユ島 城が崎 定住組合

小宮山富士雄（青森県下北郡）

元シウムシユ島 城が崎 定住組合

平野松之助（釜石市）

元パラムシロ島 柏原 徴用船隊

大野熊太郎（函館市）

元日魯漁業KK 日の出川漁場

品川 大海（函館市）

元日魯漁業KK 早瀬川発電所

石寺 広吉（札幌市）

元シウムシユ島 片岡地区 通信施設隊

御援助をいただいた方々（敬称略）

○根室市役所 企画課

○佐々保雄（札幌市）

北海道大学理学部

○北構保男（根室市）

根室市考古学研究会

資料

(根室支庁保管・千島及離島ソ連軍進駐状況綴より抜粋)

現在 北海道立文書館所蔵 A7-2/1231

千島及離島ソ連軍進駐状況

1. 最初の上陸

1 泊村

古釜布

九月一日午前五時、三〇〇名上陸(軍艦五隻) 武装解除、兵器、被服、食料徴発、即日出発東沸?へ

九月四日朝、四、〇〇〇名上陸。

泊

九月二日午後一時、五〇名上陸(軍艦一隻)、武装解除。

九月三日、出発古釜布?へ。

九月四日、将校十二名上陸。産業教育施策泊村長ト打合聴取。

九月七日、東沸ヨリ九月九日三〇〇名進駐通報アリ。

2 留夜別村

九月一日、七〇名上陸、金品、馬匹掠奪、即日夕引揚。

3 留別村

八月二十八日午前十二時、上陸(軍艦二隻)。
九月十二日、武装解除中。

4 紗那村

九月四日、既ニ武装解除完了、駐兵無シ。

5 藻取村

九月十二日、武装解除未済。

6 色丹村

九月一日午前六時五十五分、六〇〇名上陸(輸送船、駆潜艇各一隻)、武装解除、時計、トランク、万年筆、現金奪取。

7 離島方面

九月三日、全島上陸。

九月七日現在、多楽二〇、志発二〇〇、水晶十九(其ノ後出発)、勇留(駐在無シ)、秋勇留(駐在無シ)。

※原本は秋勇留表記ではなく、「水晶」となっている

2. 最近ノ通信

1 泊村長（九月六日）

九月四日、ソ連將校十二名上陸、役場ニテ本職ト産業指導、教育行政上ニ付打合ス、今後ソ連軍指揮ニ依リ一切為スモノ如ク思料サル。

2 留夜別村長（九月八日）

現在モ国後島ハ北海道ノ一部ナリ、引揚可能婦女子ハ万全ノ策ヲ以テ引揚シメヨ、離島事情ハ中央ニ善処要求シツアリ。（九月九日）航海可能トナリタル際ハ通知アレ。

3 国後出張所長（九月七日午前五時 電話）

島内施設の電信電話押収セラレツツアリ、泊局亦本夕押収サル模様、日本軍全部武装解除監禁ス、明後日ソ連軍泊市街駐屯ノ為進駐ノ旨東沸ヨリ連絡アリ、ソ連軍ハ国後島ヲ完全占領ノ旨表示ス、掠奪、婦女暴行ノ恐アリ、本職ハ最後迄踏止マル見込ミ。

（回答）引揚可能婦女子ハ航行ニ遺憾ナキヲ期シ支庁管下各町村手配済ニ付何処ニデモ上陸セシメヨ。

4 留別村長（八月三十一日）

言語通ゼズ通訳送レ。

5 紗那村長（九月五日）

本島ハ凡ユル船舶航行禁止ス、越年物資配慮アレ、紗那村ハ武装解除完了、ソ連軍駐屯セズ、其ノ他異状ナシ、物資ハ村民ノ外招集解除者四七〇、漁業雇夫五五〇越年見込ミ

6 薬取村長（九月五日）

航行禁止ニ依リ退島来島共ニ停止状態、越年物資憂慮ニ不

堪、航行可能ナル様陳情アリ度。

7 択捉出張所（九月十二日）

留別村武装解除中ニシテ交通拒絶、紗那村九月四日武装解除完了、駐屯セズ、薬取村武装解除未済、本島ハ凡ユル船舶ノ交通運輸禁止セラル、越年物資輸不能ニ付可然尽力迄ウ（日本軍保有米ハソ連軍管理状態）、物資ハ現地招集解除者留別一五〇〇、薬取村八〇、入稼者留別一五〇、紗那三八九、薬取二〇〇越年見込。

8 色丹村長（九月一日）

「1. 最初の上陸」、6ノ通り。

3. 最近の聴取事項

1 斜古丹小泉警防団長（九月七日）

九月一日、曉部隊、憲兵隊、役場、郵便局、漁業組合占領サル、ソ連軍主力ハ斜古丹ニ在リ、上陸ト同時に武装解除、六日頃ヨリ弾薬引渡実施中、無線電信ハソ連軍樺太ト連絡中、一日、二日、多少掠奪アリタルモ三日ヨリ止ム、航海禁止ス、齒舞離島ハソ連軍ノ武力占領ナリト言ウ、其ノ他。

2 多楽漁業者二名（九月八日）

本人ハソ連軍ノ航行許可証持参、物資（昆布）輸送兼ネ連絡ニ来ル、現在島民ノ生命財産保障サレ平穩。

3 古丹消伊東郵便局長（九月十九日）

第二国産丸、十六日午前根室発、十七日午後五時古丹消着、十八日午前一時五十分古丹消発、同午後十一時三十分根室着（避難者女四十、男五）

(陳述) 泊市街ハ役場、営林区署、警察、郵便局占領使用中、古釜布、セセキ間バス、トラック運行中、古釜布村長ハソ連軍指示デ村民選挙、東峰就任、生命財産保障ストイエドモ古丹消ハ将校指揮ノ下金庫破壊物資持出セリ、未婚女子ニハソ連憲兵亦悪戯ス。

4. 避難者概数

1 九月八日正午現在

齒舞離島一五〇〇、泊五十、色丹二十一。

2 九月二十日現在

(イ) 色丹島、引揚者九十四名(男四十、女五十四)、内

即時転出者五十五名(男二十一、女三十四)

(ロ) 齒舞離島、引揚者二〇六五名(多樂六二二、志発一

〇七八、勇留十一、水晶二六八、秋勇留八十七)、内

転出者一二四名。

(ハ) 国後島、泊村引揚者一七二名、内別海村一二〇名、

標津村七名。留夜別村無シ。

(ニ) 択捉島、無シ。

5. 復員者数

1 九月二十日現在

国後 約六十名

択捉 約三十名

色丹 約七名

齒舞離島 約四十名

計一三七名

島民に告ぐ(告諭全文)

一 日夜ノ心労ニ対シ衷心敬意ヲ表ス、情況ハ細大漏サズ其ノ

筋ニ報告、善処方要望中ナリ

一 領土關係ハ未ダ正式決定ヲ見ズ、従ッテ壯者は出来ル限り

現地ニ踏止マリ、一致協力各自ノ財産ヲ管守シ、今暫クノ健

闘ヲ切望ス

一 老幼婦女子及病者ハ万止ムヲ得ザル場合ハ万全ノ策ヲ講ジ、

当支庁管内向レノ地ニテモ可ナル付、避難セシメラレタシ

尚此等ノ町村ニハ夫々受入手配済ニ付、非難ノ上ハ当該部

落会長ニ連絡ヲ採ラレタシ

昭和二十年九月

根室支庁長 徳永俊夫

ソビエト政府赤軍司令官布告(昭和二十年九月十五日付)

「今度日本政府ガソビエトニ無条件降伏シタ為、全千島即チ此ノ国後モソビエトノ領土ト成ツタカラ御承知シテ戴キタイ」

一 今後許可スベキ事項

イ 水産業及林業、牧畜、工場ハ従来通り許可ス

ロ 国民学校ハ従来通り行ウコト

ハ 営林区署及郵便局等島内ニ限りソビエト司令官ノ命令

ニ依リ許可ス

二 今後許可サレヌ事項

- イ 通行ハ午前六時ヨリ午後七時迄
- ロ 六哩以上ハ出漁スルコトヲ得ズ
- ハ 警察機関及日本制度ノ村役場等ハ廃止ス
- ニ ソビエト駐屯地区ハ許可証アラバ通行許ル

三 参考トシテ

- イ 九月十日頃国後警察署閉鎖サル
- ロ ソビエトノ命ニ忠実ニ服シタルモノハ援助ヲ与エ、不服従ノ者ハ嚴罰ス
- ハ 今度日本ハ全部ソ連人ニ転籍シテ、ソビエトノ人民ニスルノダト將校達ハ申居レリ

昭和二十年九月十八日

根室警察署 岩崎警防主任ヨリ聴取

(九月十七日朝、国後署東沸巡查駐在所

本多巡查根室ニ上陸)

古釜布守備隊長命令

部落会、隣組ノ指導機関ヲ解散スルコト

日本ハソ連ニ対シ降伏セル為千島ノ島々ハソ連ノ領土トナリナシタ、ソ連ノ赤軍ハ平和ノ人民ト戦ワズシテ平和トナリマシタガ、若シ人民ハ司令官ノ命令ニ服シタル場合ハ、赤軍ハ総テノ援助ヲ与エマス

一 今日在郷軍人、地方機関、警察、役所ハ解散スベシ、部

落ノ財産書類ハ持参スベシ、期間ハ十五日迄ニ守備隊本部ノ所ヘ持参スベシ

二 各部落人民ハ会長ヲ選挙シテ、其ノ会長ハ守備隊長ノ指揮ノ下ニ各部落ノ人民ヲ指導スベシ

三 古釜布人民ニハ次ノ事ヲ許可ス

イ 此処デ工場、漁業、農業、木材業ハ許可ス

ロ 道路、街路ハ各自ノ通行時間午前六時ヨリ午後六時迄許可ス

ハ 学校ヘ通学ノ者、神社参拝ハ午前六時ヨリ午後六時迄許可ス

四 許可出来ヌコト

イ 海岸カラ沖ヘ三哩以上航海スルコトヲ許サレナイ

ロ 但シ三哩以上航海スル時ハ守備隊長ノ許可等ヲ必要トス、若シ泊或イハ白糠泊地方ヘ行ク場合ハ許可ヲ得ベシ

ハ 守備隊長ノ許可ナク種々ノ集会ハ許可セズ

ニ ラジオ、無線機ハ許可セズ

ホ 守備隊本部ハ平和ノ人民ノ日本軍人ヲ隠スコトヲ禁ズ

ハ 写真機、ラジオ、小銃、銃剣、拳銃、手榴弾、サーベル、小刀、大刀、投射器等ノ武器ヲ持ツコトヲ禁ズ

五 イ 前者ノ品ハ守備隊長ノ本部二十五日迄ニ持参セラルベシ、熊ヲ射ツ鉄砲ハ所有者ノ鉄砲番号並ビニ住所氏名ヲ届ケ出ズレバ守備隊本部ニテモツコトヲ許可ス

ロ 九月十三日カラ二十日マデ人民ハ全部本部ヘ来テ、自分ノ住所氏名ヲ届ケ出テ、本部ヨリ通行ニ関スル許

可書ヲ受クルベシ

ハ 十四日ヨリ許可証ナキ者ハ通行ヲ禁ズ

ソノ命令ニ従ワナイ者ハ嚴罰ニ処ス

守備隊本部ノ住所ハ旧警察デス

昭和二十年九月十三日

古釜布守備隊長 コウメンダント

(昭和二十年九月二十四日)

植冲国民学校長 金子尚武氏ヨリノ情報)

荒井国後出張所長殿

昭和二十年十月十日

根室支庁長 徳永 俊夫

日夜の貴官及島民各位の御心労に対し、深く敬意を表します。千島を日夜眺めて、我等断腸の念禁じ得ざるもの有り中央よりの招電も有り、最近における千島関係情報を持参し、小泉総務課長本日土京致します。

島民各位に宣敷く、一致協力、暫くの御健闘を祈り上げます。一 択捉、国後共にたとえ露領に編入せらるること有りとするも、之は、今後条約に依り決定せらるるものなるを以て、現在日本領土たることに疑義なし、尚、米国は条約締結を本年中に結構したき意向なるも、ソ連の意向不明なる由たり(十月八日北海道新聞)。

二 北海道は本日四日以降、米軍進駐せるも、第一次進駐は函

館、室蘭、小樽、札幌、旭川の五市に限り、米軍亦極めて紳士的にして、現在迄事故、皆無なる由、道一円亦極めて平穩、根室へは、本月中旬軍需資材引取の為、米軍極少数来る筈なるも、差当り当分は駐屯せざる様子なり。

三 支庁は千島離島方面よりの避難者に付、聴取書を常に徴し、細大漏らさず其の都度道庁へ報告し、道庁亦直に中央へ連絡して善処を要請しつつあり。

中央においても連合軍司令部と交渉しつつあるも、ソ連関係は容易に進捗せざるもの有る様子なり。

然し、努力の継続は勿論なり。

風聞にては連合軍司令部とソ連との意合わずと云うも、最近ソ連より連合軍司令部に派遣せられ有しソ連代表某中將は、急に本国へ召喚された(十月八日北海道新聞)点より視るも、一応疑いは深まる。

四 ソ連軍占領下の現況においては、ソ連本国の方針が千島島民は直ちに内地へ移住するも支障なしと決定するか、然らざれば、外交交渉の結果、条約に依り決定し、最悪の場合、千島はソ連の領土となり、住民は全部内地へ引揚、または国籍選択自由の決定ある迄は、日本政府としても千島住民の措置剛作は樹たず、従つて現状に委ねるのみ、但し、日本政府が現に千島に関し、内地との交通通信の自由、掠奪不法行為の即時停止を強く連合軍司令部に対し要請しつつあることは確実と認む。

此際、小生としては、屢次渡島勇士に託したるが如く、出

来得れば、老幼婦女子は現地において認むる安全な方法において引揚を執行し、壮年男女は最後迄踏止ることを希望するも、最近、ソ連軍の千島における人口調査も終了したる筈の由なるを以て、部落民中其の一部の者の避難引揚執行したがる為に、ソ連軍より残留者に対し災を及ぼす虞れあるを予想せらるるにおいては、誠に小生としても遺憾に堪えず。

故に、残留者に災を及ぼすことなき様子なるにおいては、老幼婦女子の引揚げを、現地にて考慮せらるる安全な方法にて執行すべく、また、災を及ぼす虞れあるにおいては、少なくとも一部落全部引揚げの拳に出るを適當とす。

従つて、其の避難引揚げは、其の機会及時節の好機たるべく、場合によつては、今年は忍び難きを忍び、明春霞深き季節を利用執行するを得策と信ず。

勿論、それ迄に条約締結せらるるにおいては、問題は存せず。

五 千島関係官公衛は、ソ連軍に依り事実上解散せしめられたりとも、依然として領土関係決定せざる限り日本官公衛は存在し、職員の身分関係亦依然たり、故に想らく条約締結迄は、たとえソ連領土となること有りとするも、官公衛廃止問題は絶対起る筈なしと確信す。

ポツダム宣言においても、千島は樺太と異なり、小さくても、当然、樺太と同様ソ連に割譲さるると解すには疑義あり。

また、引揚官公吏に対しては、道庁関係は勿論、役場関係も、就職は道庁として優先考慮すべく、小生亦不及乍俛力致

し度し。

尚、郵便局員等に関しても、当然、本局において考慮し居るものと信ず。

避難島民の衣食住関係に就ては、目下、戦災者扶助規定に準じて取扱いつつあり、九月十五日以降、当支庁内に千島離島関係避難者相談所を設置し（坂井沢村出張所長、青木紗那助役、支庁援護係、最近、泊村村長加ワル）、避難の総ての相談援助に努めつつあり、特に、管内各町村にして、根室以外の地点に上陸したる避難者に対しても連絡援護に努め、現地に赴き世話をしつつあり。

六 在泊の官公署関係者、貴官と行動を共にするは、其の現地における一致協力状況も推察せられ、敬意を表す。

七 最後に、老幼婦女子の引揚げにおいては、荷物は極く少量に留め、一人にても多く避難せしめらるる様、住民に対しても特段の注意を希望する。

即、温かく着て金子若干と米二、三升位に止めて避難し、上陸後は直ちに避難代表者を以て支庁へ連絡する様。

其の後の措置は、支庁の責任において遺憾なきを期すべし。

千島及南島之連軍進駐狀
永文

四、修補者概數
 一、九月八日現在
 二、九月二日現在
 三、九月一日現在
 四、八月三十日現在
 五、八月二十九日現在
 六、八月二十八日現在
 七、八月二十七日現在
 八、八月二十六日現在
 九、八月二十五日現在
 十、八月二十四日現在
 十一、八月二十三日現在
 十二、八月二十二日現在
 十三、八月二十一日現在
 十四、八月二十日現在
 十五、八月十九日現在
 十六、八月十八日現在
 十七、八月十七日現在
 十八、八月十六日現在
 十九、八月十五日現在
 二十、八月十四日現在
 二十一、八月十三日現在
 二十二、八月十二日現在
 二十三、八月十一日現在
 二十四、八月十日現在
 二十五、八月九日現在
 二十六、八月八日現在
 二十七、八月七日現在
 二十八、八月六日現在
 二十九、八月五日現在
 三十、八月四日現在
 三十一、八月三日現在
 三十二、八月二日現在
 三十三、八月一日現在

[illegible]



表紙写真

冬のシャコタン山（色丹島）

北方領土

—— 終戦前後の記録 ——

昭和 45 年 3 月 30 日発行

編 集 根室市総務部企画課
領 土 対 策 係

発 行 根 室 市

北海道根室市清隆町 3 の 1

電話 代表 6 1 1 1 番

郵便番号 0 8 7

北方領土

終戦前後の記録（第2集）

北海道 根室市

北方領土

終戦前後の記録（第2集）

北海道 根室市



発刊のことば

根室市長 横 田 俊 夫

『還れ北方領土』、こう叫び続けてからもう二十六年、かつては、私たちの故郷として、また豊かな生産の場として、かたときも忘れることの出来ない安住の地であった歯舞群島、色丹、国後、択捉の島々は、第二次大戦の終結と同時に、ソ連軍の占有することとなったのである。

戦後休むことなく、訴え、叫び続けてきた悲願の北方領土復帰運動も、沖縄の祖国復帰が実現するはこびとなり、漸く世論の盛り上がりが見られつつあることは、私ども現地住民として、まことに力強さを感じているところである。

しかし領土復帰問題は、依然として「解決済」を主張するソ連側のかたくな態度により、いまだ未解決の状態にあり、本問題の解決促進については相当、長期の時日を要するものと覚悟しているものである。

北方領土の経緯については、元島民をはじめ関係各位から繰々語り伝えられてはいるものの、終戦後すでに二十六年が過ぎた今日、当時の実状を最も詳しく知る元島民の多くは、既に老いの身となり、その記憶も、うすれつつあり、やがては当時の貴重なる実態をとどめることが困難となることは論をまたないところである。

斯る状況を危惧し、昨年から、これらの島々の情景をあらゆる角度から正確にとどめておき、子々孫々に伝えつぐと共に、今後における領土問題への世論喚起に役立てようとの考えから記録集を刊行しているものであるが、本年もまた、生きた歴史の証言者である元島民の方々をはじめ、関係各位の直筆により第二集を刊行することとしたのである。

本書の発刊に際し、執筆をご快諾され、ご寄稿くださった各位のご厚意に対し、深く感謝の意を表わすと共に、本書が今後の北方領土復帰運動推進の一助となることを希って止まない。



↑根室半島上空より北方領土（歯舞群島・色丹島）を望む

↓野付半島（北海道別海町）上空より北方領土を望む





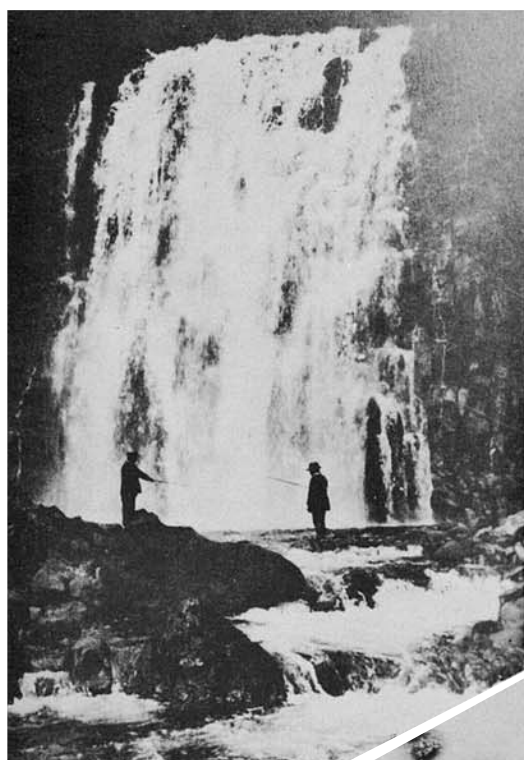
← ホタテ採取船（志発島）



→ 冬のシヤコタン山（色丹島）



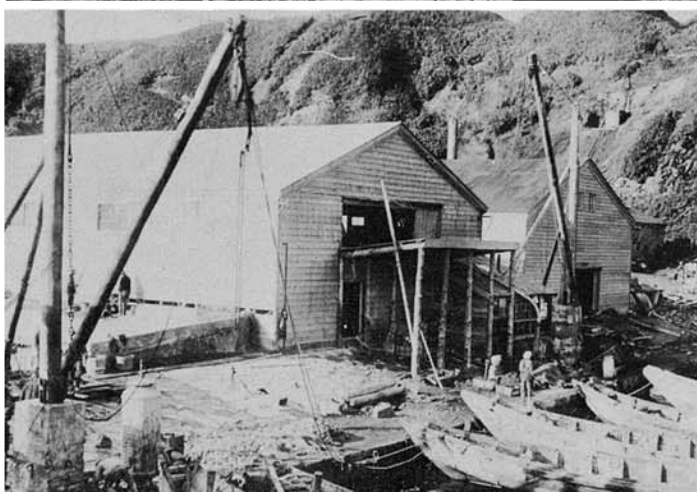
→ 斜古丹市街（色丹島）



← ソコボイの滝 (国後島)



→ 硫黄山 (国後島)



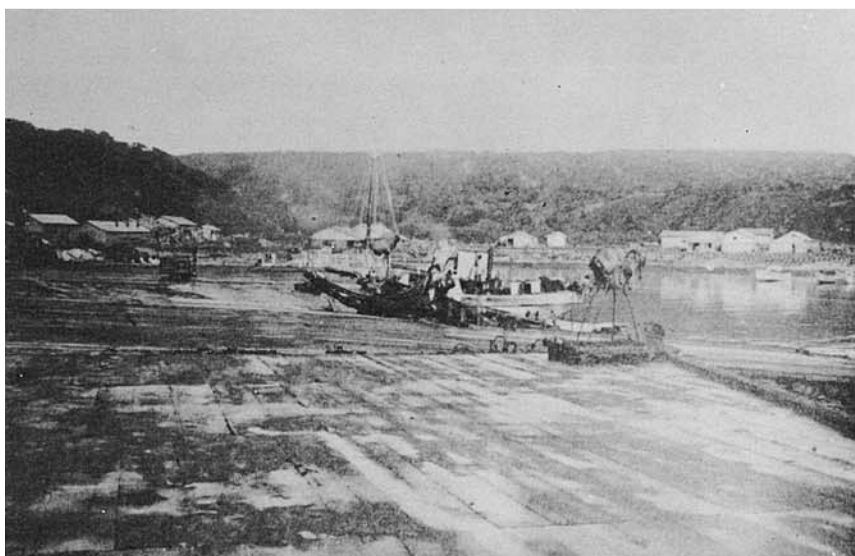
→ 漁
港 (国後島)



← 国後島爺爺嶽



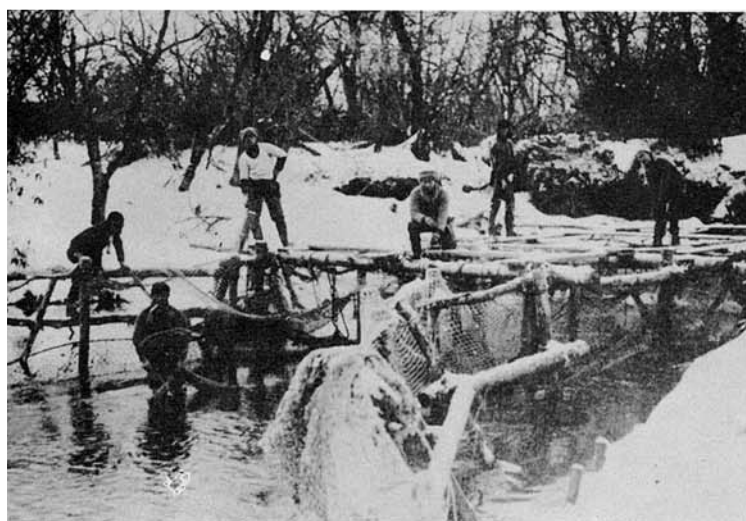
→ 紗那沿岸の昆布漁（択捉島）



← 内 岡 港（択捉島紗那湾）



← 留別村市街（択捉島）

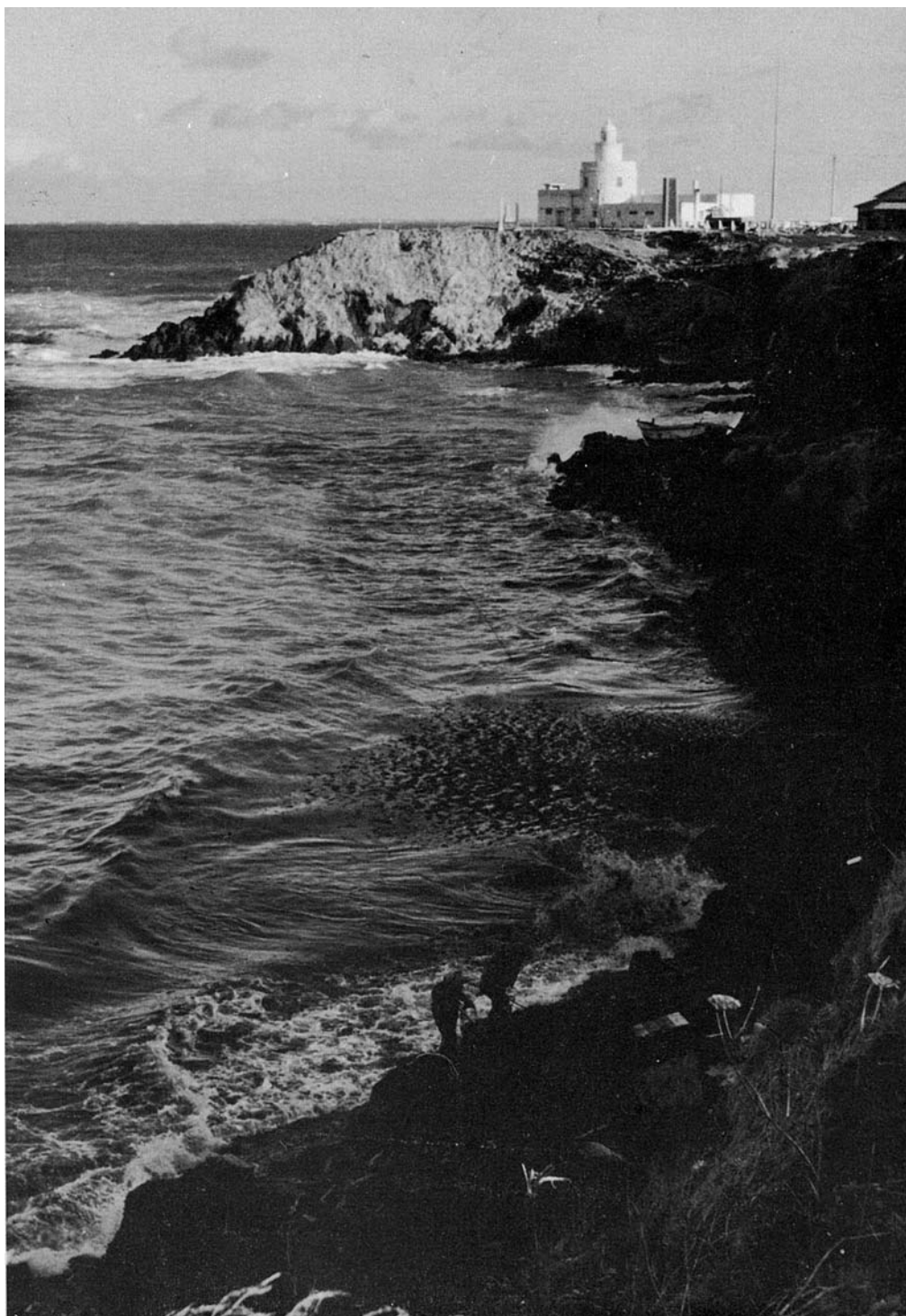


← 留別川鱒捕獲場（択捉島）

→ 薬取市街地より港を望む（択捉島）



→ 根室半島ノサツプ岬





志発島西前脱出記

宮 脇 信 雄

はじめに

いざ、筆をとってみると、二十六年の歳月は余りにも長く、当時、生々しかった記憶もうすれて、日時、場所、人名等確たるものがなく誠に申し訳なく、加えて特に世情にうとい一教師の記憶では、当時の状況をつぶさにのべつくし得ない。それにも拘わらずあえて筆をとったのは、教師という特殊な立場から客観的、批判的に物事を眺められ公正な立場で書くことが何等かの意義をもたらすように思われ筆を進めた。

しかし、ゆっくり文章を練り上げる余裕もない多忙に明け暮れる昨今、甚だ意に満たないが島帰る日を待ち侘び暮らした二十数年の心をもとに書き綴った。事実の誤認や独断もあるかと思う。ご批評いただければ幸いである。島の人々がなつかしく、いだき愛したい気持ちで終始していることが、この文章の根幹である。この八月に入ってから、当時私の部下であった堀田光子さん姉妹にも逢ってきた。このつたない一文が私の心のふるさとの披露でもある。

志発島のあらまし

志発島は北緯四十三度三十分、東経百四十六度十分、国後島の南方に点在する歯舞群島中、ほぼ中央に位置する最大の扁平紡錘形の島で、その面積は歯舞本村の半島部に匹敵し四十五平方キロに及び、旧歯舞村の大宝庫であった。周囲は約六十キロに及ぶ海岸線をめぐらし、好湾に恵まれた純水産島であるが、内陸は平坦で乳牛数千頭を飼育可能な大広野である。相泊岬に従業員千人を擁する日魯漁業の蟹工場があり、それに所属する機帆船十数隻他に相泊湾全面に根室市内の鮭鱒流網業者数戸の所属機帆船十数隻が出入し、全島周辺に約三百戸の昆布採取業者が点在、数百隻の機動船が活躍し活気とみに溢れ、その生産高は歯舞村の半分以上を占め殷賑（いんしん）を極めていた。

教育施設は東前に三学級、西前に四学級の高等科併置の国民学校二校あり、穴澗とトツカリ岬を結ぶ線で通学区域を分割し、相泊に歯舞村役場出張所、診療所、巡査駐在所があり、東と西に一

つずつの郵便局と寺院があり、人口密度も離島中、最も高い率をしめていた。住民のうち越冬者は約六割、他の四割は毎年春から秋にかけて富山県から一家をあげて出稼して来た。島民の経済力も高く、生活も華やかで、その上人情極めて厚く、全く桃源郷のような住みよい環境であった。行政区画は根室国であり、千島国とは別個で、現在の根室市に当然所属すべき純粹の日本国土でもある。大東亜戦争当時、北千島軍司令部所属の僅か一個大隊が本島に駐留していたとはいえ、終戦後にソ連軍が接収し居据わりをきめ込んだことは明らかに不当であって、戦後日本国が黙ってこの不当を容認していることは私にはどうしても理解出来ない。戦後、軍用機材は接収し得ても、ソ連が領有を主張する何等の根拠もない諸島なのである。

私はソ連軍が占拠当時、彼等の話を聞いた所によると、北海道の納沙布以西はアメリカ、全諸島のこちらはソ連という、彼等同志の了解点があつて、その様に考え、その様に行動しているので、現在の日本は実はアメリカの領有する区分説がなり立つものならば、今でも押し通しているソ連の横紙破りが理解されぬ次第ではないが、今頃こんな話をしたところで日本人の誰も理解出来ない馬鹿げた話と思う。こんな理由に推しまくらねばならぬ筋は一つもない明らかなことを、何で忍ばねばならぬものか、私にはどうしても納得が出来ない。ポツダム宣言で日本が千島の領土権を放棄したとしても、千島ならぬ齒舞群島を戦後二十数年黙って領有する不当を、南千島（国後島、択捉島）を一緒に返してもらい

たいから黙っているとしても、何か割り切れないものが残るのである。それとこれは一つにするべきことではない筈なのである。私は個人の立場で、戦後進駐して来たソ連軍の隊長に（彼等に言つて判る話でないとしても彼等を通じてソ連の首脳に伝えられるよう、伝えて判ってもらいたいので）ここは北海道に所属する島であつて千島の一諸島でないことを伝えたく考えたが、通訳をつれてこない彼等に露語を話せぬ私のもどかしさを、如何に苦しみ辛い思いであつたかを理解して戴けるのではないかと思うのである。島に残り露語の会話が出来るよう努めたが、たまたま本土へ連絡に来て、そのまま島に帰らぬことになり、進駐米軍にも度々申し入れたが、米軍にはソ連軍の考えがわからぬというので、一切相手にされなかった。再度島に渡り、私個人でこの交渉を続けて行きたいと念じ、露語の会話を勉強し続けたが、種々の事情で、これも遂に実現不可能になり甚だ遺憾に耐えない。

私はこの島の余りの住みよさに、終生この島で送りたいものと、赴任直後、本籍を札幌から移し一島民となった。戦後も島還る日の一日も早からん事を願ひ続け待ち侘びた。再び赴任する日があったら骨を埋めたいと念願し続けた。

毎年一回、当時の教え子たちが同窓会を開いているが、私共夫妻は万障害繰り、この会合に参加し続けたいと念願している。誠に教え子たちの成長発展を祈念する一方、言葉に表現することの出来ない愛情の一体感の様な情念がするようにしたいと考えるのである。終生変え様のない気持ちでもある。私の島を愛する気持

ちは島に残してきた僅々時価百万円程度の家財道具を恋うる心ではない。島に残してきた足跡を恋うるようなものでもない。どうしても忘却し難い懐かしさが心にしみつき、離れ難い郷愁となり、甘酸っぱく匂うのである。

私にはこれがそうだというものが見当たらないが、島全体がふんわりと柔らかく包まれて、忘れ難いものになっている。島の子等（今は大人だが）を通じ、その教育に捧げつくした情熱への郷愁といった言い尽くしたことになるかも知れない。あの当時のどの子も、どの子も懐かしいのだ。そして私の教育への効果が最大に発揮された、そのような仕事を再び顕現したいと念ずる夢のようなものであるかも知れない。

志発島西前の教育

私は志発島西前国民学校長を拝命し、昭和十七年（一九四二年）十一月三十日に赴任した。前任校長との交換人事であったので、相泊に漁場を営む天神久太郎さんをお願いし第六いろは丸に乗り相泊に上陸、何から何まで天神さんのお世話で学校につき、翌日からすぐ学校の授業を始めた。時、大東亜戦争もいよいよ熾烈さを加え、弱冠三十二歳の私は挺身報国の理念に燃え、満州派遣教員と決定していたのを当時の石川視学の説得を受入れ、その代わりに決めた人事であり島も亦、第一線勤務地であった。処が赴任して見ると予想に反し、島は全く平和で、物資は豊富、島民

の人情は厚く、至れり尽くせりの世話をしてくれる。若輩の私を尊敬し、私の意見をとり入れ、学校教育改善策をどしどし実現してくれた。

物的、精神的に実に恵まれたところで、教育者としての生き甲斐をひしひしと感じ、一身を賭して奉公の誠を捧げる決意で一島民として教育改善に乗り出した。

前任校長夫妻の経営していた初等科二学級国民学校をすぐ高等科併置三学級の認可をとり、教員採用のために中標津から根室へとかけ廻り、苦勞を知った北斗校時代の教え子が根室無尽会社を退めて教員になってくれ、勇留島から教員一名を得て陣容を確立した。この事は今まで高等科入学に根室へ子弟を下宿させたり、進学をあきらめていた父兄の最大の喜びとなり、そのはね返りが教育後援に拍車をかけることになった。特に歯舞村役場出張所長の古源さんが国後校時代の父兄であり、診療所の外尾先生が国後校ケラムイ分校の先生で、旧来の知己のアドバイスで、事はトントン拍子に運んだ。学校附近の部落会長の番匠さんや宮野さんが話してみると父の生家との縁故があり、また縁故のあるなしにかわりなく、皆が親類のようによく世話をしてくれた。

通学区域内で最も遠い北浦からは三里余りの海岸線を迂回して来るので欠席も多く、これが全体の生徒の勉強を阻害しているように見受けられた。

北浦二十名ばかりの生徒の父兄に働きかけ、学校前の晒さんの昆布小屋を無償で借受け、冬季間の寄宿舎を設置した。付添いの

女子青年達は他の地域から来ている女子青年と共に荆妻が和裁の指導をし、教育効果を全からしめることが出来た。特に手のかかる子の一父兄が付添ってくれ、その管理をしてくれたので助かった。

島の青年は向学心甚だ強く、毎夜仕事を終えてから、夜学に遠い道のりを数十名参加した。積極的に質問し、学習意欲が盛んで、教え甲斐があった。軍事訓練の指導員も優秀な人材ぞろいで、いつ敵前上陸等があっても、玉碎するまで頑張れる体制は整った。何をやってもうまく行き、しかも効果が上がる。このような体験は初めてで、先生となった生き甲斐は働けば働く程、感ずることが出来た。

春になって冬期寄宿舎から開放され、また北浦の生徒は歩き難い海岸三里の道を往復することになったが、この窮状を全部落会に訴えた処、北浦から学校迄一里余りしかない三角形の一辺を、直線の道路づくりをして呉れることになり、各戸割当で十間余りの泥炭地の両側溝を掘り上げ盛土をした立派な道路を、僅か二、三日で完成してくれた。私は唯々涙が出る程うれしかった。同一校下の事とはいえ、関係のない北浦地区の通学生のため、生徒の居る居ないに拘らず全戸洩れなく、大土木仕事を欣然としてやってのけて呉れた、この父兄の熱意に私は全く感動した。私は愈々奮起してそれに応えなければならぬと誓った。時まさに戦たけなわで、勝つまでは不足を言わぬ筈であるが、教材も何も無い学校教育を押し進める困難を、克服するため月二円会費の保護者会設

立を提案した処、全戸異議なく賛同してくれ、次いで学用品販売店がないために、学用品を不自由なく提供する目的で月額二円の母姉会を設立し、釧路の卸商社と特約、二割引で購入支給した。

戦時中、他の学校にない豊富な学用品を使用し、実に恵まれた教育王国を形成することが出来た。現在の物価指数は五百倍から千倍になっているので、この一戸年四十八円の会費は三万円から四万円のPTA会費を徴収したことになり、私共の申し出を聞き協力してくれたことに対し、只々頭が下がるばかりである。海の子である筈の島の青年が昆布漁船から落ちて死んだ話があり、生徒全員、皆泳を目指し裸で校庭に集合し準備体操をして海に入れ、水泳指導をしたり、歩哨を立て復哨の教育、手旗、モールス信号の教育を徹底させた。戦時色豊かな教育でもあった。

このように島の学校でも、すばらしく充実した教育を受けられるということで、父兄から離れ根室の学校へ通学していた生徒も転入学するようになり、内地からの入り合い漁家も子女を連れてきて入学させるなど、漸次、生徒が増加して在籍二百名を超える盛況となり、遂に四学級認可され、一名の教員補充は島の診療所長の娘さんが札幌女子師範学校を卒業し、採用して欲しいという。全く何もかにも順調に進み島の学校では夢想だに出来なかった優秀な女子教員の配置をうけ、トントン拍子で成果が上がった。特に音楽につよい同訓導の音感教育は素晴らしく比類のないものであった。そのころ高等科併置の四学級といえは管内でも大きい学校で、屋内体操場を仕切り二教室にして、外観よりは、より充実

した内容を誇り、異色ある運営を進めた。併置の青年学校は約五十名の在籍に加え、日魯蟹工場に勤務する出稼青年八十名の入学を受入れ、軍事指導員を増員して、管内屈指の大青年学校にのし上った。毎年の陸軍簡閲点呼と同時に、青年学校軍教練査閲は、附近の島の学校の生徒と共に私の学校で行い、一大演習のような盛況で成績も拔群、身に余る賞詞もうけた。

軍事基地化

終戦も真近い昭和十九年（一九四四年）の簡閲点呼に私は第二国民兵として執行を受けた。特に一部の人々と共に私も面接があり、その執行官は以前幾度も査閲を受けた親しい将校で、私の希望を特に受け入れるというので、私は学校経営の立場から一度軍隊生活をしたことや、入ることが出来たら航空隊入隊希望だと申し出たが、直後に出た招集で旭川第三部隊入隊になっていた。十二月末、苫小牧総部隊の招集解除まで六カ月、学校を留守にした。その間、代理者が発令され、荊妻も二女出産のため生家の尻へ引揚げていたが、島の状況変化は時々の変りで薄々知っていたものの、帰還して見る島は根底から覆った程の大変化をしていた。人の世の変わりようは私が浦島太郎のように驚き果てるものばかりであった。校長代理者職員が二名もおり、前からの女教員一名が万事切り廻していた位の変化で、それ程でもないが、島中兵隊が溢れるような状況で、又再び軍隊に帰ったような錯覚さえ

感じた。私の留守中、北千島軍司令部に所属する三重県出身の歩兵一個大隊が西前に配置され、野戦砲部隊も所属して、島の中央部に三角兵舎が立ち並び、島の縦横に走る道路は苦勞して私の造った道路など問題にならぬ立派なもので、隣のお寺は憲兵隊の兵舎に変わった。私の帰還祝いの席上、部隊長が私の手を握り「共にしっかりやりましょう」といった時には、私の六カ月間たたき込まれた兵隊根性が、雲の上の人のような階級の隊長に親しく言われただけに、電撃のようにビリビリと強く感じた。

兵隊は階級の世界で単純だが、民間人の地位には職種により、かくも異なった扱いを受けるものかと、自分の使命感のようなものを強烈に意識した。応召前までは名ばかりの玉碎覚悟の第一線勤務で、多額の手当等を受けていたものの、軍が島の大勢を左右する段階となった現在、戦況の不利な情勢発展と共に、愈々来るべきものが来たという情感に身内が引き締まるようであった。部落内の様相も一変し、個々ばらばらの部落が連合部落を形成し、命令一下、対処出来る態勢の中で身動き出来ぬ程、戦時色に押し固められていた。



海岸に並行する昆布倉庫の総てが軍の兵站倉庫に徴用され、婦人の防空防火演習、竹やり訓練なども活発に行われていた。

私はこれらの動きに対処し、学校の裏の崖に生徒全員が収容出来る防

空壕を部落の協力で完成。学校防空体制の中で集団登下校や避難訓練等を行い、教育内容にも島民玉砕に対応する心構えを根底にした精神的な要素を重点的に取り上げた。私の軍隊ボケの精神活動の中で、このような働きが最大の中心課題であった。生徒全員の数日の稼働で山菜採取を行い、駐留部隊へ運搬して塩漬けにし、軍民保存食の蓄積に協力した。

終 戦

利尻から帰って来た家族は六、七月にかけての湿潤な気候で大流行した麻疹に長女、長男、次女と順々にかかり、最後にかかった誕生前の次女が一番重く、熱も激しかった。

七月十四、十五日の米艦戦機による根室空襲の頃は、最も激しい最中で白昼焦土化した根室の黒煙を遥かに望んでいるうちに一機が志発島の上空に一直線に飛んできた。

友軍機かなと思ったが様子がおかしいので家族を防空壕に待避させたが、この幼児は連れて行くことを断念して安静に寝せたままに置いた。折しも勇留島より進んでいた石積みの日魯の機帆船を見つけ、我々の頭上で方向転換して追いかけて、この船に機銃掃射を浴びせた。スポーツか何かを楽しむような鬼畜米兵の惨忍な高笑いを上空に残しながら悠々飛び去る飛行機に、武器のない自分の悲しみに切歯扼腕したものである。相次ぐ二度三度に渉る機銃掃射で、同乗の男子工員数名が死傷した。大ワドに待避する同

船を尻目に悠々引きあげる米機を遥か眺めつつ、島を守備する武器ある兵隊が鳴りをひそめて対抗出来ない事に憤懣やるせない思いであった。敗色濃い日本軍の無益な抵抗をさげ、被害を最小に食い止める方針も解らぬではないが、現に被害を目前にして対抗出来ぬことはやはり口惜しい限りであった。

特に隣の憲兵隊は飛行機も去り、暫くたつても防空壕から出てこないで、寺の奥さんが迎えに行ったら、隊長が一番奥で順々に頭からつつ込むように重なり震えながら身動きもしないでいたと聞いて、軍部頼むに足らずと知った。今迄、安易に軍がいるから安心だ、軍は私達を守るために島に来てくれたという考えは、軍を当てにし過ぎた一人よがりの誠に虫のよい身勝手であり、自分では自分で守るのが鉄則であると悟った。

私は如何なる事態に立っても、人を頼らず自分の最善を果たすべきであると更に覚悟を新たにした。八月六、九日の米軍の原爆投下は示威的效果が狙いと思うが、このため幾十万の無辜の市民が殺戮された。本土焦土になろうとて我一人にても戦わんの気概はあっても、敗色濃い本土決戦の様相になったことは否めない。八月九日のソ軍参戦は日本の背後をつかれた大打撃であった。しかも障壁である盟約のソ連が無防備の背後をついたのではたまらない。

八月十二日、私の次女は医薬の甲斐なく、遂に腹膜炎に移行し病没したが終戦前であつたので無事に葬儀万端、執行出来たのはせめてもの幸いであつた。

八月十五日正午に重大発表があるというニュースから悲痛極まらない玉音をきき、茫然自失、我事止むと目の前が真つ暗になった。私は何故、学校裏の湖畔に出たかわからない。湖面を見つめ逍遙していると、男女二名の若者が相擁している。よく見ると私の部下教員なので、これは怪しからぬと思い近づく、今迄泣いていた顔をふきもせず「私達はこれからどうすればよいのでしよう。」という。私はこの時、天の揭示を受けたようなショックを感じた。今迄、茫然とうけた衝撃を噛みしめていた程度のこと、何となく開放されたような感覚でさえあったのが、教える立場の我が身に帰り「私達は今までにない敗戦国になったが、これは軍の敗戦というよりも、吾々教員は教育の敗戦と考えねばならない。これからは教育も何もかにもアメリカやソ連のいう通りにしなければならぬだろうし、莫大な背負いきれぬ賠償も果たさねばならないだろう。日本が戦前並みに完全に復興するためには恐らく百年以上の歳月を要するだろうが、これを為しとげるために努力しなくては敗戦の吾々の責務が果たされないし、次代に生まれる国民に何とおわびしてよい、わからぬことである。

この教育の復興のため、吾々は生命を賭してこれから戦わねばならないのだ。本当の戦争はこれからだ。

敗戦の現実を力落してぼんやりしては大変だ。しかもアメリカやソ連の容喙のない今が一番やり易い時だ。夏休みなど言っではいられない。「明日からでも、すぐ始めよう。生徒に明日から学校へ集合するよう伝えてほしい」と指示した。

これは若い者にくだらぬ感慨にふけり、自己をすりへらすような愚を敢えてさせまいとする親心でもあったが、何といっても私自身が驚いた。このように、すらすら前から暗記でもしていたかのように、よくも言つてのけられたものだ。これは誠に私自身への天の啓示であった。これまで私は教職を自分の適職とは考えていなかった。口下手で取り柄のない私には口頭禪を称える教師職には不向きであると考えていた。しかし今は違う。私が、これからやらねば誰がやってくれるだろうという程の自信がわいた。私は私のやらねばならぬことをやるので、これは私の天職である。私は、この事をやることにより、生き甲斐を感じる唯一の道であることを知った。これは私自身への鞭撻であった。教育を死守しよう。何事にも恐れず邁進しよう。これからの日本の教育の混乱に対処し巍然たる態度で戦い抜こうと決意が出来たのは、死ぬかも知れない若い男女教員の光明を失い、自己を見失った姿から、これではならぬと我と我身に下された鉄槌なのであった。

流言飛語

翌日から授業を開始したが集った生徒は半数にも満たない。明日への希望と目標を失い、どうなるか想像さえつかぬ不安、焦燥、どうしたら保身の道を進むことが出来るかすら見当がつかぬ。流言飛語にまどわされ、己を失った日本人の敗戦という現実に立つて、これからの道を各自が新しく切開いて行かねばならぬ立場に

立たされたことを自覚出来ぬ、悲しい宿命的な姿でもあった。

今までの協力的な教育王国の体制が、がらがらと音を立てて崩れ始めることになった。終戦直前まで日本が勝つことを信じ疑うこともなかった人々、それがひっくり返ったのだ。敗戦の翌日から授業をはじめるといっても、ついて来る方が、むしろ不思議な位であつたろう。

しかし吾々は、くじけてはならぬと思った。それが若い者に明日への希望をつながせることになるのだと思うのだが、現実はい、そううまく行くものではない。甘味品にあこがれていた二、三の若い青年学校生徒が共謀して軍の倉庫から砂糖何袋かを掻払った事件が起きた。敗戦と雖も軍は軍、厳然たる存在であることを無視したものか、どうせ敗けたのだからいいだろうといった軽い気持ちからかも知れない。部隊長や憲兵から二、三度呼出しを受けた。とにかく将来ある青年の事故、罪は罪でも厳罰とならぬよう懇請した甲斐あつてか、敗戦のことゆえ追つて処分を決定するということでけりがついた。やれやれと安堵する間もなく、またまた重大な問題が起きた。それは部落内でひそかに進められていた謀議であつたが表面化したのである。島民には一獲千金の目標はあつても、この島を郷土として豊かな住みよい郷土造りをしてゆくこととする情愛が稀薄で、その日暮らし的な傾向が強く目前の利益には命がけでも恒久的殖産事業等に着目する人は極めて少く、亨楽的で明るい反面、蓄財等のことは、その生活に比べて少いようであつた。だから冬期の閑散期には全島をあげて「とばく島」

と化する風習があつた。とばくをやらないのは学校の先生と警察と坊さんで、とばくを挙げる警察は特に人氣が悪く一年か二年で更迭される慣しであつた。

後で知つた事ではあるが、引揚後に財産登録の手伝をさせられた際、この人がと思う程の人で蓄財の意外に少い事実に驚いたものである。だから目標を失つた今、目先のきく者にとり将来の不安なこの島にすぐに見切りをつけ脱出を計ろうとすることは、自然のなり行きといつてよかつた。この事について軍の指示があつて、部落総会がもたれ軍部から嚴重な通達が出て脱出者は嚴重に処罰するという事で落着した。

私は私なりに、この島は米露のいずれが支配するようになるか不明だが日本人が残る限り、この島は厳然として日本の島であり、この島を愛するならば、最後まで島と共に生存することが必要だと判断していたので、前記の決定は私の考えと大同小異で受け入れることが出来た。

しかし軍部の指示と称して、歩兵操典や軍に関するもの一切、学校の教科書に至るまで焼却せよ、壁紙などに使用している場合それを剥いで焼却せよというのには参つた。敗戦の今日、軍に関するものは秘密保持の上から焼却せよというのは筋が通るが、学校の教材や教科書のどこに軍の機密があるか、これを焼いたあとの教育をどうせよと言うのか反論したくなつた。根も葉もない風説を流布する無責任な兵隊にも困つたものだが、憲兵自身が自分達が戦勝軍として行動して来た事を規準に、どこの国の誰もが、

戦勝国の軍隊でさえあれば、平然と婦女暴行等の行為をするのが当然であるのか如く流布するのには腹が立った。自分たちの低劣な人格を規準に物事を判断し、しかも、それによって徒らに人心を混乱せしめること、関東大震災当時の流言飛語の罪に似ていて、しかも、それが軍隊であることに、たまらぬ怒りを感じた。

明日への光明を失った島民に対し、一方では嚴罰の通達で恐喝し、他方流言飛語で恐怖を与えるのでは、何をなすべきかの冷静な判断をも失わしめ、徒に混乱することを喜ぶ悪ふざけにも似て、誠にもって不都合千万限りないことである。無責任極まりないことと思う。

島民の動揺がいやが上にも昂じ、落着きを失い、私共が学校の授業を開始しても生徒の集らないのは、むしろ当然のことと言わねばならない。たとえ、これが島民に対する置き土産程度の親切心から警戒心を喚起したとしても、彼等如き人格の低劣な者共に今迄頭をおさえつけられて、統率されて来たことに反撥が先に立ち腹の立つことであつた。

ソ軍上陸

多少の混乱と問題があつた処で、それは止むを得ない事で、あくまでも平和で問題外の事であつたが、遂にきたるべきものがやつてきた。九月三日午後、ソ連軍が東前に上陸したと知らせが飛んで来た。

すわというので部落内が沸き立つのは当然であつた。まず西前の連合部落会長が青い顔をして拙宅に来て「今、部隊長に逢つて来たが、敗戦国の軍隊として露軍に抵抗する意志のないこと、軍の物資は速やかに露軍に引渡し、兵隊は現地で解除して帰宅させて軍は引揚げる。その後、部落民は各自協力して自衛の手段を講ずるように、あくまで平静行動するよう申し渡されて来た」と語り、軍の力を唯一の頼りにし今迄、無為無策に過して来た自分達の迂闊さを嘆いて居られた。そこで、どのような方法をおとりになるかを訊ねると、とにかく婦女子には怪我のないよう二、三日裏の山の草原へひそませ、露軍の隙をうかがい、夜陰ひそかに集団で船にのせ根室半島へ十日か半月位の予定で、待避させる。露軍が引揚げたら、その上で最善の方策を打ち立てたいということ、それでは私共も皆さんと同一行動をとらせて載きたいと、申し入れた。ちょうどそこへ今、東前へソ連が上陸し、一番先に郵便局へ上り色々とむずかしい命令をうけたと知らせがきた。それを聞いた連合部落会長は平静さを失い、ぶるぶると震え出し、腰を抜かさんばかりの変貌に自分達の方が驚いた。

それ程軍を信頼していたのに見放され、さて、これからどうするのかの心配では全くの処、お気の毒でたまらなくなつて来た。どうして今少し自主的な行動がとれなくなつたものか、そのようなことが大切である旨、お伝え出来なかつた事を今更悔やまれた。翌朝、職員は一名も出勤しないが、元気のよい子供達二十名ばかり登校して来た。授業にはならないし、部落の依頼で果せな

ったお祭の材料を片付ける仕事をするため子供達を引卒して作業にとりかかった。

午前十時頃、二隻の見なれぬ舟艇が中ワド入港、数発の艦載砲発射で威嚇を試み上陸し、軍の宿舎に入った。

日本軍は朝のうちに本部に集結し、武装解除してソ連軍に連行され舟艇で東前から国後島へ送られたが、島民と別れにのぞみ、部隊長は涙を流し、私達はソ連軍の動向を甘く見ていたので、こんな結果になった。くれぐれも部落民は一致協力して事に当って欲しいという事であった。

中ワドに上陸したソ連軍は途中、民家に立ち寄り「私共は二、三日滞在するが、二、三名の女を世話して呉れ」と手真似でいったという話が伝えられ、それ大変となった。

約半月に涉って兵隊の宣伝が実によく徹底していたのでソ連軍を見ればすぐ女を連想し、裏山にかくれば見つからぬものとしての解釈は余りにも単純ではあるが、混乱の中での島民の精一杯の知恵であり、止むを得ぬ行動であった。舟艇から上ったソ連兵一騎、相泊方面へ駆けて行った。黒っぽい服だが帽子と服に赤いかざりのついた兵隊であったので私は海軍かなあと考えた。いよいよきたなあとはいくら作業を進めていると、今度は同様の服装の兵二、三名が海岸に立ち並ぶ空屋の倉庫の錠前のついた戸を苦もなく取り外して中に入り物色しているので、私共は何をしているのかと思って物珍しげに眺めていたら、また次の建物の方へ行

私は学校を空け放していたことに気づき、生徒をつれ学校に帰ったら、なぜか泡喰ってソ連兵が何か物をかくして立ち去るところであった。生徒に注意して解散し中へ入ると、たんすから何から引き出して物色した跡が歴然として居り、家を空けていると露助は何んでも手あたり次第持ち去る習慣があることがわかり、物そう連中だと思った。まあ欲しいものがあつたら持ち去られても仕方があるまいと考えたが、馬鹿くさいので、今度は家を空けないことにしようと思った。「ソ軍上陸中といえども昼間は普通に生業を営むこと。夜間の午後六時以降は外出禁止」とソ連軍の通達があつたそうだが、どこからどうして伝えられたかわからないが、午後六時にこだわるソ連側の申し分も仲々面白いと感じた。またソ連軍は日本軍と異なり、部下が上官に喰ってかかっていたと言うが、意見は意見として述べられる風習は好ましいものに見える、すぐに暴力に物をいわせる邦軍のあり方と比べ、面白く感じた。そのうちに先刻の露助より少し偉そうな同じ服の露助が四、五名どやどやと来たので、野郎共来たなあと、玄関まで出迎え、黙って露助のあとからついて廻った。すると天皇陛下のお写真の額を見て何か、ぶつぶつと文句を言い、日の丸の額を見て、ぶつぶつと言うが私は何も分からないし分からないフリをして通した。帰りがけに国旗掲揚柱の綱が切れ使用出来ないことを知らせると、旗竿に赤旗を立てるよう盛んに指示していたが、どうせ通訳なしの露助語で、私は話がわからないで押し通したら露助は腹を立て、ぶつぶつ言い乍ら立ち去った。しかし私は彼等の手話の

意味がよくわかり「スターリン万才」という言葉を聞いて、やはり、この島も遂に露助のものになったかと思うと、涙がひとりで頬に伝わった。これが敗戦の味かと思うといつまで、彼等に逆らい通せるかと急に情けなくなった。

上陸後のソ連軍は日本軍の弾薬を処理しているのか絶えず発砲して居り、それらが耳なれて来て、別に何とも感じない程になった。夜に入ってから、それは休みなく続いた。夜半に家族の者が山より帰って来た。聞くと何もびくびくすることがないと判ったので部落の人が迎えに来たという。

夜露にぬれた哀れな姿を見ると可哀想になり、風呂を焚いて入れてやった。明日は一、二週間の予定で根室半島へ婦女子を待避させるという事になった。

翌日に二、三人の露助が時々学校へ来た。必ず私が玄関へ出て、彼等の後から付いて廻った。校舎を一巡して必ず住宅に立寄るが私がついているので居づらそうにして早々と立ち去った。

私達は今晚決行するノサップ行の準備に身廻品の整理で多忙をきわめた。家の中をとりちらかし布団包など、ごろごろしているところへ、戦とう帽をかぶったような前の露助と全然変った、むしろ日本軍に近い服装の将校と、その部下らしい数名の露助がどかどかとやってきた。私は困ったなと思ったが、いつものように玄関を出てゆくと、前の者たちの傍若無人さと違い土足は土足でもちろんと挨拶をして上って来た。校舎を一巡してお写真と日の丸の額には何か言っていた。

やはり文句があるらしい。それから家の中に入って来て、子供達や家内がいるのを見て非常によこんで、子供の頭をなでマレンケマレンケと言っていた。次の間を開けて荷物が散乱しているのを見て顔色を変え、盛んに露助は決して恐ろしくないから、この地に留まるよう言うのだが、私は何を言っても分からないで通していたら、根室半島と志発島の地図の間に波をかき舟で渡って根室半島に行く様子を示し、根室半島はアメリカ、志発島は露助、そっちに行ってもつまらないから、こっちに居れと盛んに言うので、「ははあー、これは日本人が出て行くのを阻止しようと宣撫工作に来たのだなあ」と直観して、「そうでなく、この荷物は知らないのです、しまつて置くのだ」という手真似をしたら了解したようだ。それらが帰ってホッとしたものの、何かだました後味の悪さでいやな感じがした。

日本人はうそを言い、それで国際信義を失うような結果になりたくない。やはり外国人に対しては正直を絶対守りぬくようにして行きたい。守れぬような約束はしてはいけない等、基本的な誤りを冒さぬようにしたいと思っていたのに、それを裏切った結果となった。このソ連兵が、これからの居残りの部隊らしく、前記のソ連兵は、それから遂に見掛けることがなかった。

その夜のうちに家族の者に、ご真影勅語を奉持させ島民と共に行動させ出帆した。最初トサップ沼に入りすぐ迎えられて温根元へ落ちついたと風の便りがあつた。

翌日から私は学校を守るために空けられもせず、度々訪れる露

助について廻るので来た露助は居づらそうにして立ち去るのが常であった。前日に引きつづいて宣撫工作の隊長が来てマレンケはどうしたと聞くので、舟に乗って根室に出たと言うと、缶詰や何やら贈り物を持参したのに失望していた。早くこちらに呼びもどすよう言うので、彼等は人の居ない島を占有しても国益にさ程の影響がないので、人的資源と共に富国増強をこい願う彼等の態度を伺い知ることが出来た。

夜間外出禁止の真意も知り度いものであった。どんな目的で夜間外出をさしとめるのか、警備上の配意からとは想像するが彼等の行動の障害になるなら何をたくらんでいるか知り度いので、匍伏して部隊本部の方へ出掛けたが、彼等はのんびりとしている状況で、これは問題外と思い家に帰った。その日以後、再び隊長は私の家へ来る事がなかったし、私の家庭の動向等、さ程気にとめてないことも了解した。

他の露助は学校の建物が大きいので何か目ばしいものがあるかと時々やって来て遊んで行った。私は彼等に一日も早く帰ってもらいたいと思った。

彼等に言っても、それは通じることではないかも知れない。しかし事情が解つたら不法な占領行為であることが了解出来るだろう。そうすれば如何に共産独裁の国柄でも上層部に進達する道はあるだろうと考えたが、その意志を通じ合う通訳を連れていけないのでは話のしようがない。

彼等は占領者で権力があるから言語がなくとも意志の伝達が出

来るが、私共は被統治者で文句をつける筋合でないが、彼等の行為に対する反省は求め得ると考えた。

どうしても話が出来るように勉強しようと個々の名称から日常会話まで勉強して行った。意志の疏通を計ることが第一番と、夢中になって露語の勉強をはじめた。そして学校に来る露助をつかまえてアルファベットを書かせ固有名詞を聞いて書きとめ、名曲を聞かせて彼等を悦ばせ、大いに片言まじりでもよいから話をするようにした。

だんだん付き合っているうちに彼等は非常に人がよく大陸的で解放的で、日本人に比べたら本当に馬鹿みたいな気のする人種であること、アルファベットを完全に書ける者が数少ないので、教育程度が低いことも判った。

日本軍はパンパンという歩兵小銃だが、露助は百連発の自動小銃でドロドロだから兵器の相違で勝ったと自慢していた。国情の異なる彼等の性情が茫洋としているからといって、日本人の小細工で彼等を馬鹿にしてかかり、彼等をだましましたまして人を悪くすることは日本人自身の損失であつて、たとえその時はうまくいっても、あとでいたい目にあうことを考えなければならぬ。彼等は誠につき合い易い人種であり、小才智の働く日本人よりは信頼のおける人達であると思つた。そして中には顔、形が日本人と全く同類であると思うようなのも居て、特に親しみを感ずることが出来た。

彼等の性情として人の居ない処や、荷物をまとめてあるような

物は人がいても公然と人の物を持ち去る癖があるようだが、所有者が現在使っているものは、どんなに欲しくても持ち去るというようなことがなかった。

便船を見つけて根室に出したいと思い、荷造りして物置に入れて置いた蓄音機を私の目の前から持ち去った時は腹が立ったが、腹の立つような物は荷造りしないでおけばよいだろうと考えあきらめた。学校にばかりいて一步も出られないことは誠に不自由なことである。

部落に残留している人は二、三人の爺さんだけのようであったが、やはり連絡をとり合い提携して行きたいものであった。

学校前の竹内さんで学校の方を見張り乍ら話をしていた時、相泊方面から日本の馬車に荷物をつけた兵隊一人巧みな操縦をしてやって来て裏の壊れかかった橋を渡った。車輪が穴に落ち込んで盛んに馬をどなりつけ困っていたので助けてやったら、荷物を一つお札に置いて行つた。何だろうと思ひよく見ると、相泊の小野さんが養っていた緬羊三頭を射殺して積んでおり、小さいのを一頭置いて行つた。

敗戦国では動物まで、このように可哀想な目に逢うのだと知つた。投げるわけにも行かず羊頭をかかげて犬の肉を売るという話があるから食べられるだろうと、皆を呼んで食べようと一決し、晩は露助が歩かないから皆集つて食べたら、仔羊であつたので柔らかく大変美味であつた。

流れ玉には閉口した、うかうか日中道を歩いていると肉食の彼

等は肉がないとどうにもならないと見え、飛んでいる鳥でも何んでもやたらに百連発を打ちまくるのでどこから玉が飛んで来るかわからない。一度、ソ連軍の部隊本部を訪れ、手真似でもよいから「ここは日本の領土で齒舞村の諸島だ」という説明をしようと、止むに止まれぬ気持になり出掛けたが、隊長が一人で一生懸命計算をしていたので、仕事の邪魔になつては悪いと考え、学校の方も心配だからすぐ引き返した。

帰途歩いている私の頭上を流れ玉がヒュッとかすめた時には、「この野郎」と天に向つてどなりつけてやりたい衝動にかられた。こんなところで、しかも戦時中ならいざ知らず戦後の今、露助の流れ玉に当つて死んだつて何のたしになるものでもない。全く鉄砲の盲撃には腹が立った。

隊長の計算は、この島にどの位の食糧があり、何人をどの位養うことが出来るかというような計算のように思われた。

将校ともなると兵隊の頭とは格段の相違があり、実に立派なものだと感心した。いずれにしても露語をマスターして、露助共々住みよい村づくりをしながら、早くこの島から露助が去るような方策を立てたいものと、それに専念することにした。

脱 島

生徒が一人も居ない島の爺さん二、三人相手の学校の校長というのは、どうにもならない気持のものだ。しかも再三、再四便船

のある都度、根室支庁視学へ状況を報告し、指示を求めているが音沙汰がない。どうせよと言うことがあれば、それまでの方策は自分でも立てられるのだが、目標も何もない現在、ただぼんやり暮らしているようなもので、居ても立っても居られないようなあせりも出て、是非一度根室へ出掛けなければならぬと思った。その上根室へ逃避行をした家族のことも心配である。

行かなければ何とかするだろうと思うものの段々寒くなってくるのに、半月位の遊山気分で行った事だけに、その後の方法が立つような算段もしてやらねばならない。

ソ連軍隊長に許可を求め連絡のため出かける自信はあるが、もし帰らなかったらソ連側を偽ったことになる。これは如何に敗戦国であっても信義にもとることは国際的にも避けたい。黙ってひそかに、しかも帰って来ても学校が荒らされていることのないようにするためには、どこかへ一寸出かけてすぐ帰ってきそうな偽装をする必要がある。

誰にも黙って出かけることが一番よい様に考えた。家族が当分困らぬ最低の荷物も運び、しかも学校運営に支障が起きぬように最低の重要書類は私の体から離されない。夜陰に乗りやって来た舟を先ず物色すると、学校近くの永田の爺さんが一人でやってきたのを知った。密かに交渉すると荷物三、四個ならよいということになった。昼の間に高台を廻り崖を下り、ひそかに荷物運びに専念した。これは仲々大変な仕事で我慢強さが必要であった。大汗をかいて荷物だけは処理した。夜ひそかに偽装を完全にし、大

事な物資は私だけがわかる処に隠した。夜になってからは体一つで舟に乗り込み湾を出て島から離れるまで舟を漕ぎ、もう大丈夫という所から機械をかけて走った。翌朝、家族のいる温根元に着いたら家族は十勝へ出掛けたというので陸路により根室へ出た。

早速、根室支庁の戸嶋視学に逢い島の状況を報告し、今後如何にすべきかと指示を求めた。視学の返事は「それはご苦労さんでした。私たちはあなたに島に帰れとは言いがたい、また言う必要もない。それは私達自身どうしたらよいか全くの処、解らないのだ。それであなたが島に帰った方がよいと思って、どうしても帰るといふなら、それでもよし、その場合あなたに俸給を送るわけにはゆかないが、もし家族の人が残るなら家族に俸給を支給するし、帰りたいくないなら現職のままで、新任地の決まるまで、何処へ行ってもよいし、どんなことをしていてもよい。俸給は現在給で支給するから必ず住所を連絡してほしい。」というので、そんな支庁の態度であるなら、火の中、水の中でもいとわぬ心づもりでいたが島に残した家財そのものにそれ程の末練があるわけでない、島に帰らなくてよいという方に決定した。

そして島の人達が多数いて家族が今までの温根元に暫くの間留まることに決めた。

あとで聞いたが私の出かけた翌日、直ちに露助が学校に来て荒しまくり、また島の人やもやってきて、目ばしいものは何一つなく、足の踏み場もないように荒され、散乱していたという話に、誰にも語らず、密かに行動した結果がこの有様では、余りにも早い変

ぼうであると共に何か裏切られたような感じで帰って見て腹を立てるより、行かずによかったと、しみじみ思った。誠に淋しい思いであった。

転身という言葉があるが、自分一人の都合だけから言えば、他の条件のよい仕事に転換できる絶好の機会であった。身分は保障され、自由な時間がある。引揚者であるから身が軽く荷物もほとんどない。どこでも走り廻って最も条件のよい職はさがせた。しかも年は若く、ばりばり仕事をやれる年齢でもあった。また、根室管内に校長の空席はないとしても、人的資源は戦争のため枯渇していた時代であったから、都市でも農村でも見つけに歩いたら、どこへでも転がり込め、移動は実に容易なことである。

それにもかかわらず温根元のむしろ仕切の藤子工場の一隅を動けなかったのは、そこに島の人々が固まつて居り、そしてその人々と行動を共にしその人々のために動かねばならぬ仕事をしてまろうという思い上った気持からかも知れないが、切っても切れぬ絆につながれて動けずに居たといったら過言であろうか。学校長という立場をこの人達は必要とするだろうといった気持からである。

島の人々がここにいる以上、島の人達の心の支えとなつてあげたい。何か役に立ちたい。私に出来ることは何かないかと心待ちしたのである。余りにも人がよすぎるといえば或はそうかもしれない。自分のことは島の校長として生活は保障されている。そうである以上、何か自分の出来ることをしてあげたいと何か待っている。

た。島へ引き返せば生活の物資も職場もある連携からドライな転身をはばんでいた。それでいて島の子供達が僅々一里のゴヨウマイ校に通学しないで毎日遊んで暮しているのを見て何もしなかったし、出来なかったのは何かが抜けているような気がする。

たとえ教科書がなくとも私塾的な学校を開いてもよかった。教科書がなければ教育が出来ない等と私自身考えてもいないのだから誠におかしな話だ。

これは島の子供が学校に行かずにいたのと同様な心境であり、父兄は仕事も忘れ、何をするともなく暮していた心境とも似て、引揚ボケともいふべきか。毎日、島の人々と共に苦悩に満ちたみじめな生活を続けていた。

引 揚 者

ソ連の部隊の本拠になった西浦泊一帯の特に温根元に集結した引揚者達には明日の生活がなかった。毎日よい着物を着て、仕事もしないでぶらぶらしているのを見て本土の人々は引揚者というのは何というよい身分であろうと思ったことだろう。

しかしよい着物というのは持ち物を制限され、一時のがれに当分暮せるだけしか持つて来ないものであり、底をついた食べ物には明日の日の予定はない。乏しい配給はあるにあるが、これは越冬分まで配給済の引揚者に対する特配分ではなかった。若干の余裕をみ食糧を持参した人はそれを売り払って生活しているのを

見て、全引揚者に当てはめて物を考え、引揚者に対する世間の批判の眼は誠に冷たい。

当時、引揚者援護法の制定はなく、その措置は確立していなかったとはいえ、どうして温情ある処置がとり得なかったものだろうか。私達が島の人々の代弁者となり、役場に行つて窮状を訴えても厄介者扱いにされ、まるで乞食に物を恵む態度で、しぶしぶ僅かばかりの物資を支給してくれるのも色々問題はあるだろうが、余りにも実情を理解しない冷たい事務的な仕打ちであつた。

私達は交渉体としての性格上、尊大な役場側の態度を非難する前に、やはり詳しく具体的に実情を述べ、納得して貰つて配給を受けるより以外方法はなかつた。そして吾々にはこれ以外に生きる道はなかつた。

だから命がけで舟で島に密航し、案内の知つた海岸の倉庫から物資を略奪して帰る島民の心情が、ここに到つて了解出来る。同じ藤子工場の筵仕切の隣室は隣家のお寺さん一家であつた。だからここでは特別に同じ一軒の家に住む人のように入出し合い仲よくやつて行けたが或時、私は偶然にも食べ物貯えの全くないことを知つて私達のかつさに愕然とした。

じつと我慢し、人々の話を信じ、島に帰る日を待ち侘びた。この一家に食べ盛りの子が五人もあり、一番年少の赤ん坊は栄養失調で明日もわからぬ状況だったが、奥さんは坊さんに「もうこのような生活に我慢の限界がきたので、もう一度島へ行きお寺のご本尊様と先妻の位牌を持ち帰り内地へ引揚げよう」と決断を迫ら

れ、よせばよいのに坊さんは島に出掛けた。このお寺のご本尊と言うのは阿弥陀如来の画幅で、お寺さんにとつて吾々のご真影と同じく一番大切なもので、寺の大事には一番先に持出して守り抜かねば相つとまらぬ代物なのである。

それをみすみす露助を恐れるあまり泡を喰つて置いて来たのは、坊さんとして失格にも値する大事件なのである。なんでおめおめ内地へ帰られようかと言うのである。

しかし、もっと大事な意味は米をながしか持ち運べたら持つて来て欲しいというのが恐らく本音でなかつたらうかと推察する。人間とことなまで成り下がると、食うこと生きることのため何を仕出かすか判つたものでない。

私共も生活が保障されて居ればこそ、この温根元で島の人達のために役に立ちたいと思ひ上がっているものの、いよいよとなつたらそれは判つたものでない。島へ出掛けた坊さん達一行の消息が幾日たつてもない。

ある日、坊さん達は露助につかまつて豚箱に入れられたという情報もたらされた。坊さんはお寺にたどりつき阿弥陀さんと位牌をもつて外に出たところを露助に見つかり狙撃され、捕まつて、学校の奉安殿が露助の豚箱で、それに入れられた。さあ、それを聞いた奥さんの驚き嘆き悲しみは人事でなくなつた。とても同情とか何とかという言葉で表せるものでない。そして奥さんや家族が島に帰るとお寺さんが放免されるというので、奥さんは決然として、明日死ぬかも知れぬ病児をかかえて島に帰ると言いだした。

私は妻に何とかして病児を早く治すように、そしてその上で島に行くとも、どうするとも考えたらよいのかと説得させたが、奥さんの決心は固く、翌日お寺の奥さん達と涙の別れをした。

その後、お寺さん達は物のなくなつたお寺にも入ることもできず、どこかの民家を住居に当てがわれ、苦しいその日暮らしが始まつたと風の便りで聞いた。引揚者と言えば引揚者に違いないが、完全に本土に生活の場を築こうと覚悟して引揚げた引揚者ではなく、露助が恐ろしく露助が黙つていても立ち去るだろうと目論んで、暫定的に一、二週間の予定で取りあえず近いところの納沙布に逃亡した仲間である。

それが予期に反して露助が居据わつたため、どうしようもなくなつた島の連中である。そして風の便りに聞く露助は別に恐ろしくもなく、温情もあり、家族が帰れば生活が保障されるというので、つらい本土の生活に耐え兼ね、一度捨てた島であっても、背に腹は変えられず、物資を運びに行つては捕らわれ、その家族は次々と島に帰り、殊に寒さに向い、本土にいて餓死寸前の生活から抜け、一、二年食糧や薪炭のある島で、あるいは、せめて越年だけでもしようと、唯、生命維持をひたすら望んで島にゆく人を見るにつけ、私自身生活の保障があつて納得の出来兼ねる面はあつたが、敗戦国日本の明日の生活の光明すら見出せぬ人々の、藁にもすがりたい気持が、生活の安易な途に流れゆく姿は、止むに止まれぬ個々人の事情にもとづくもので、とめようにもとめられぬ悲しい宿命的なものであつた。

このように移り変わりがあつて温根元の藤子工場は数家族のみが残り(二十六世帯のうち)実に閑散なものとなつた。

私は昭和十三年(一九三八年)から一カ年、この温根元を校下とする瑠瑠瑠校に在職した経歴があつて、この温根元にも教え子や父兄が居り、何かにつけて生活上の温かい便宜は与えられていた。特に近接していた田口さんには格別のお世話になり、人間失意時代に受ける恩恵の如何に有難いものであるかを身にしみて味わうことが出来た。

そして他の島の人々とは、おのずから異なる立場にあり共同体を継続して行く意義も薄らぎ、特に粉炭半トンしか配給にならぬ師走の風は誠に厳しく我慢し切れず、時の瑠瑠瑠校長の沖田君が同期生であるところから、空家になっていた隣の職員住宅へ入居を請ひ許されて引越した。引越しといっても荷物が少なく、こんな楽な引越しはなかつた。そして翌日から無任所学校長として瑠瑠瑠校へ出勤し、することもないので、歯舞漁業組合から露語辞典を借り受け、その引きうつしを兼ね露語の勉強に専念し、島還るために活用したい念願で取り組んだ。

これは歯舞群島が、ポツダム宣言にある千島と異なるものであることを露助に納得させねばならぬ義務感とか使命感によるもので、全く私の純粹な願いから出発したものであつた。

私が住宅に入居してほつとしていた処、志発島東前校長の築田君が根室支庁へ終戦帰還の挨拶に行つたら瑠瑠瑠校訓導に降格免令され赴任して来た。私が住宅を引き明けるといふと「折角入っ

たのだから、そのまま居れ」といって、単身赴任の気楽さ板垣旅館に下宿した。瑛瑤瑠校下では立派な先生が二人も一度にやって来たというので大喜び、大歓迎会を開いてくれた。お客さんの私は実に心苦しい限りであった。

私がこまめにあれこれと余計な仕事をしたのでは現在いる先生方の迷惑であるばかりか、学校体制を破ることもなり兼ねないので、補欠授業の他一切引受ないことにした。部落の人は私共の燃料まで心配してくれ、友知の雑木林から一戸分の配給を受け、それでどうやら越年することが出来た。

瑛瑤瑠へ移ってから島の人々との接触がぶつ切り切れたが、当時の財産登録、新円切換等の申告のため特別面倒な事務が出て、それら一切、無報酬で引受けてやった。島の引揚者の蓄財が意外に少なく、この人と思う人が皆無であったりびっくりした。これでは今後の生活をどのように築いて行くか目標も出し得ないだろうと深く同情した。

沖田校長は東前に七、八年もいたので島内事情に明るく、島民と根室の親方との仕込関係の内容等、生活様式を委しく話してくれたので、なる程これでは現在どうしようもないわけだと一層理解が深まった。

島民の生産物は根室の仕込親方へ全納する代わりに生活物資はいくらでも供給をうけた。それだけに生活物資に恵まれた生活を送り、生活の心配はすることがなかったので、冬期閑散期は趣味と実益を兼ね、たとえ現金の手持ちがなくとも借用証で賭博が楽

しめ、そのため夏中、只働きという年があっても暮して行けないということとはなかった。

これが極楽島の素因を形づくっていたので、心ある人は蓄財は出来たが安易に享乐的にやって行けぬ問題でなかった。そのために出たよい面が前述の通りなので、その功罪、如何ということになる。しかし、そのはね返りが敗戦という誰も予想出来ない事実直面に、大きく揺れ動き、人間の思考の限界点を越えた言語に絶する現実に直面し、人間の微力さをしみじみとかみしめ得た次第であり、それであるからこそ、一人一人が果たし得る最善をつくし、方途を定め、協力の必要も生まれて来たわけのものである。

根室支庁視学が変わり、戦後対策について管内学校長会議があり、私は島の校長の資格で出席した。今まであった学校の記録、文書、教材、教具中、戦争に関係のあるもの総て掛図地図の類まで焼却した方がよいという視学の意見に対し、私は「私共の問題としなければならぬのは過去の教育がどうのこうのと取上げるより、敗戦の中にあつてより正しく今後の教育の方向を見定めることがより大切なので、過去の資料は資料として活用すべきであり、それが決して今後の教育の方向づけを誤まるものでない筈である。焼却せよとはもつての外」と反対したが「お前の学校は、どこにある」と言われてぎやふんとした。

しかし当時の指導の方向として何でもかんでも戦争は悪い、進駐軍に気兼ねしてそのご機嫌とりに汲々とし、卑屈な態度でびくびくしていた弱腰に虫がおさまらなかつた。

吾々のやって来たこと総てが戦犯であるなど私は少しも考えない。過去の教育一つ一つに最善を尽くしてきたので、いさかもはじとするものがない。むしろ事なかれ主義こそ悪の最大事であろう。「島が還らぬうちは戦後はない」ともいわれる。国内情勢からも国外情勢からも島の還ることは仲々の至難事であろう。

しかしソ連が四分の一世紀、二十六年を経過している今日、齒舞群島をなお領有して日本漁民の拿捕を繰返している現実の正しくないことは、ソ連自身が一番身にしてみていることではないだろうか。日本国民は国土が未だに返還されずに生々しい創跡を見せつけられて、いつまで我慢強く見て居れるだろう。ソ連は匕首をつきつけ創痕を見つめさせている忍従の限度を若し知らぬとしたら、ソ連自身のために賢明な方策でないことを知らせなければ、限らない痛恨事を自ら招く結果となる。

吾々は吾々の生ある限り、世界平和のため正しい要求を貫き通したいものである。

竜神さん

十二月も二十日過ぎになって水晶島の校長をしていた田中秀雄君が私の処にひょっこりやって来て、志発島進駐のソ連軍隊長の意向を伝えてくれた。「だんだんと日本人の帰還者が増え、その子弟教育に適当な人が居ないので是非、島に戻って欲しい」と言うのである。そこで私は「私自身としては島の復帰のため一露人

となつても活動したい意欲があるので、単身でも出掛けたい念願があるのだが、小生が島を出たあとで島民が学校を荒しまくった品物が何かの拍子で出て来たりしたら、私自身がやり切れないだろうし、一旦放棄したことから、こちらが待っていて受け入れるのと違い、思うような経営が可能かどうか不安で、またソ連の思うような教育を強要されることも忍び難い。とにかく決定的な返答は君の帰島迄にするから考えさせてくれ」と言つて、根室に出て多くの知人に逢い色々意見をきくと、一様に騙されて行くことはないというのには閉口した。

そしてそのあげく、「我々の言うことは先生は聞かないだろうからは是非、釧路の竜神さんに騙されたと思つて見てもらうよう。」極力すすめるので、いやだとも言い兼ね、しぶしぶ釧路の竜神さんをたずねたら、すぐ祈禱をして、やがて「騙されて行くことはない。島の先生は若いが見つかる。あなたが行かなくても大丈夫だ。若し、どうしても行くというなら家族と水盃をして行きなさい。あなたには、どうしても水難の相があるから気をつけなさい。とにかく行かぬに越したことがない。その外に見てもらいたいことがあつたら何でも見てあげる」というのに些か私も驚いた。ずばりそのもの、何と明解な常識的な掌を指すような言葉だろう。私は「神様とは一体如何なるものぞ」と恐ろしくなった。実に妙な気持であつた。私は家族を連れゆく気はさらさらなかつたし、それが永の別れとなろうとも致し方あるまいと思つていた。男として、やるだけのことをやるために行くというのが本音で、

どうしても、まづくなったら泳いでも帰れる自信(?)があった。私は早々に立去った。そして戻る汽車の中で不安が不快さに変り、島行きを中止した。しかし後々のため露語の勉強は継続した。

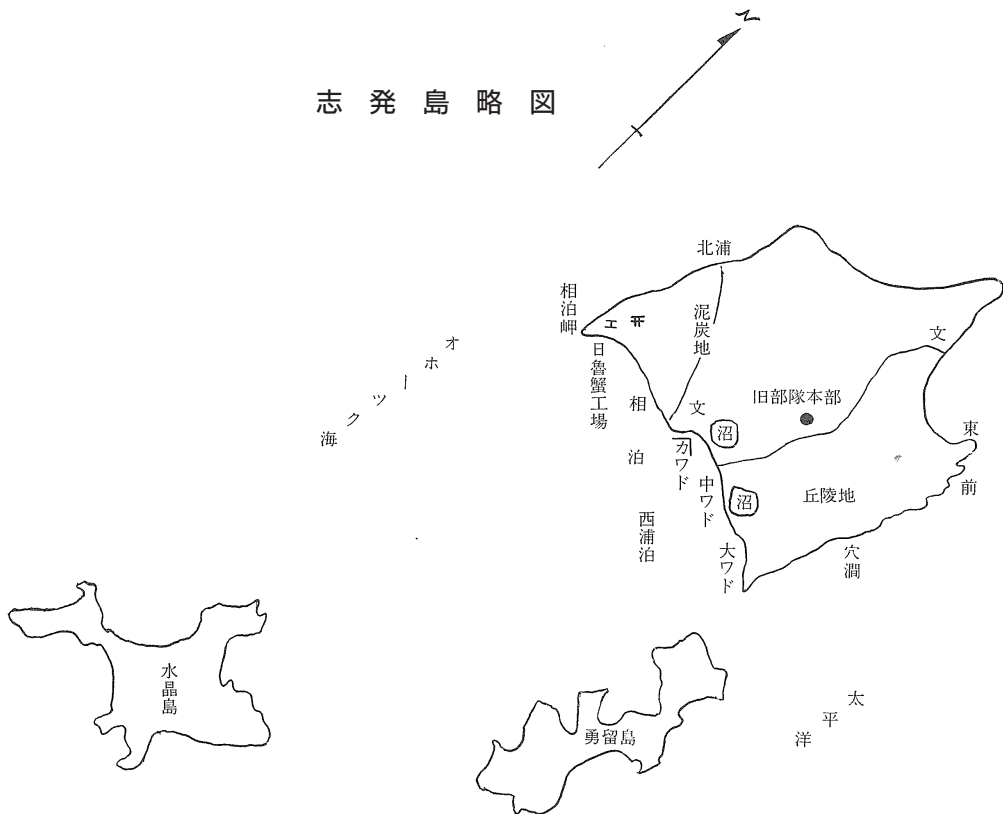
むすび

私は顧みて志発島復帰のために何も努力しないわけではないが、効果は何も上っていない。自分自身の無力さを嘆かわしく思うだけである。この一文をしたためながらしみじみ反省している。私は現在六十一歳。中標津町東八南四に妻と二人で居住、四十年勤めあげた管内にふみとどまり、地方文化の進展に寄与したいものと念じている。

五十の手習で始めた書道が役に立ち中標津高校の書道講師の傍、中標津町書道会長、中標津町文化協会長、根室地方文化協会連絡協議会長と一連の仕事の外、日本退職公務員奥根室支部長を兼ね、毎日仕事を追い廻されている。荆妻は未生流の生花をやり、未生会根室支部長をしている。中標津地方に來遊の折あらば是非お立ち寄り、積る話を承りたいものである。

現住所 中標津町東八南四
元居住地 函舞群島 志発島
在島当時の職業 教師

志 発 島 略 図





悪夢の一カ月、引揚中に死者続出

高 岩 光 男

終戦を松島海軍航空隊にて迎え、復員して根室に着いたのが昭和二十年（一九四五年）八月三十日であった。

島へ帰りたくとも舟が無く、ようやく九月一日西浦泊まで行く小さな運搬船を見つけ、乗船を頼んで我家に落着いた。

翌日の九月二日午後、普段見かけぬ船が二隻、税庫沖に現れた。それはソ連軍の駆逐艦と上陸用舟艇だった。愈々、ソ連軍の進駐である。女達は裏の部屋にかくれた。まもなくソ連兵が二人、三人と組になって、一戸、一戸廻り始めた。

私の家にも、自動小銃を持ち着剣した二人組が入って来た。初めて見る異国人の背は高く、目は青く、髪の毛は白茶色、服はよごれて油がにじみ、見るからに恐ろしい。

何をされるか解らず、いろりの廻りに集って無言である。

日本兵をかくしていないかと言うような動作だ。剣の先で、恐る恐る押入の戸を開く。何を云われても解らぬの、手まねのみ。

そのうちの一人が、時計が無いかと手まねする。丁度神棚の下に父の下げ時計の掛かっているのを見つけ、喜んで持って行った。

次第にソ連兵の往来が多くなって来た。

そのうちに、幹部級の将校の一行が通訳と一緒に来て乗馬を貸してくれと云われ、貸しあたえろと一行は、大隊本部（西浦泊）の方へ向った。

当時、志発島には歩兵一個大隊と山砲隊一個中隊が、島の守備についていた様子であった。

次々に武装解除され、日本兵が小学校に集結されるため、丸腰になった日本兵の列が続く。

私も復員してきた一員ではあるが、その光景をまのあたりに見た時こそ、本当に戦争に負けた実感がこみあげて来た。

しばらくして先程、馬を貸した将校の一行が帰って来て、馬を戻すから上陸した地点まで誰か同行する様にと言うので、私が同行することになり、通訳の前に乗せられ上陸地点までついて行った。

馬上で色々と話をして聞かせてくれ、特にドイツとの戦いで一番苦しかったことは食糧不足で、芋三粉で頑張ったことなど誇らしげに話す。

途中、日本人の姿は一人も見えない。

見えるのはソ連兵ばかりで、沖合には駆逐艦、そして波打際には上陸用舟艇が足も濡らさず上陸出来る様に、岸に着いていた。通訳は私に帰る途中、ソ連兵に馬をとられぬようにと一筆書いて渡してくれた。

私の帰りが遅いので、家族は心配していたと言う。

そのうち馬に乗ったソ連兵が酒に酔って来て、馬上よりテリュウダン（手榴弾）を掲げ、家族一同表に並べろと言う様子。兄と私が地べたに頭をすり付けて頼んだあの時は、本当に生きた心地はしなかった。

半日ではあったが、長い一日であった。

その夜、駆逐艦は一部ソ連兵を島に残し、日本兵を乗せ何処かへ出航して行った。

島に残ったソ連兵は、日本軍の大隊本部のあった地点に本部を置き、日本軍が各地に分散して守備に就いていた地点に数人ずつ警備に着いていた。

その後は何事もなく過ぎ、警備の手薄の方の島民は毎晩の様に本道に脱出した。

日がたち次第、ソ連兵も人なつこく当時の将校達は日本語会話の本を持っていて、片言ながら本を中心にして話が出来た。

ある時など、日本軍当時、私の家の蓄音機を貸して置いたが、それを催促すると翌日乗馬に、当の蓄音機と米一俵を積んで返しに来たこともある。

段々とソ連兵と親しくなり、よくソ連兵のところへも行くよう

になった。

ソ連兵の居住している場所には糧秣が豊富にあり、米や甘味品をたどってくれた。

当時は腕時計一個で米三俵位と、交換が出来たものである。

脱出者も日を追うにつれて多くなって来た。

我家でも、家財道具や食糧の一部だけでも根室に運ぶべく準備を進めていた。

九月下旬、ある脱出者の荷物をソ連兵が取調べた際に、戦前、島の在郷軍人会の写真に兄（準一郎、昭和二十四年（一九四九年）死亡）が撮っているのを見つけ、ソ連兵に逮捕され連行されて行った。

家の中は搜索を受け、折悪く根室へ運ぶため荷造りしてあった物は、全部没収されてしまった。

一カ月近く過ぎて兄は、罪が晴れて帰って来た。

お土産に…として根室に昆布を搬出しても良いことになり、数航海にわたって根室に昆布を運んだ。

根室も食糧不足、上は昆布でも船底には食糧品を積込んで運んだ。

根室からは野菜とか越冬用品の配給を受けて帰った。

根室との往来もある程度自由のような状態なので、この分では春になってから引揚げても遅くないのではないかという安堵の気持ちであった。

しかし、年が明けた一月末の航海を最後に以後、根室へ行って

はいけないという通達が出された。

その事実が上層機関に聞こえたのか、ソ連軍の隊長が転送されて行った。

終戦当時、相泊には日魯漁業が大々的に缶詰工場を増改築し、女工寮などは立派なものが建っていたが、昭和二十一年（一九四六年）より、さらに規模を大きく運営する計画であったようである。

根室大空襲の時、勇留島より刺網の重りに使う掛石を漁船で運搬する途中、グラマンの機銃掃射を受け、船体は近くの海岸に乗り上げて座礁させられ、女子工員と乗組員数人が殉職した。

西浦泊の墓地に、これらの方々を埋葬した。

その缶詰工場を運営するため、年が明けるとソ連民間人が続々島に渡って来た。

家族連れや独身者、皆の姿はみすばらしく、戦災にあった人達のように着の身、着のままの状態である。

何か日本の分捕品が豊富にあるから、それをあたえるところで、騙されて来たらしい。

日本人も男女を問わず、一戸より一名ずつ労役に狩り出された。各島々からも、続々と志発島に集められ、相泊も急に賑やかになった。

その頃、一方では軍籍のあった者の調査が始まり当時、島の村長に仕立てられた高頭六平氏や有志の方々の感により、その頃の適齢者の年を隠して報告して難を逃れた。

しかし、兄はもちろん、島の有力者達も根室へ渡航したという理由で国後島古釜布へ連行され、一カ月位調べられたらしい。

私は仲間数人と共に、ソ連軍のご用船の乗組員になり各離島の連絡や見廻り等にソ連兵を乗せて廻った。

四月に入ると沿岸警備隊（青襟章と呼んでいた）が来て、警備が一段と厳しくなると聞かされながらも脱出することが出来ない。いよいよ、青襟章の兵隊が島にやって来た。

戦闘部隊との交代である。

各離島にも駐在し始めた。

私等は今度、色丹島より各離島駐在のソ連兵の食糧品運搬に従事し、お陰で各離島はもとより、色丹島の各港を良く見て廻る事が出来た。

色丹島のキリトウシに行った時、話には聞いていたが日本軍の食糧品が山の様に積まれ、米俵などは上の方にシートが被っているだけで、道路のぬかるみには米俵をそのまま土俵がわりに埋めて、栈橋の下など真白くなる程の米で、本土の食糧難から見ると、もったいない有様であった。

戦前、北方の守りがいかに堅固であったか、食糧の山を見ても想像出来る。

色丹島は、また自然の良港が多く、沖合より見るとどこが湾か解らぬが中に入って行くと、その奥行の深さにも驚く、また景色の良さも全道、いや、日本一と云っても過言ではあるまい。

このところで、ちょっと横道になるが、齒舞群島の中に余り

知られていない、二つの島を紹介しておきたい。

それは春刈島とトド島の両島である。

両島とも数個の離れ島によつて成り立って、いずれの島も海拔三、四十メートル余、春から夏にかけては海鳥の群、その様態は天売島などおよびでない。

また、春刈島の岩礁には、春から秋にかけて数百以上にものぼるアザラシの群や名前の通り、冬から春にかけてのトド島の岩礁にむらがるトドの群等々、当時でも無人島に近い島で、今では行く人もなく無人化してから半世紀、海鳥海獣の楽園の地であろうことが想像出来る。

青襟章の兵隊が駐留する寸前、勇留島トコマに上架してあつた漁船二隻をソ連兵が見付け、その船を使用することになって海に浮かべていた。

たしか四月初旬頃と思うが、それまで私は自宅より通つていたが、今度は西浦泊に飯場を作り、二隻のソ連兵の乗組員が、そこで寝起きすることになり、各島めぐりも一段と激しくなつて来た。

四月中頃、勇留島を訪れた時、勇留島の人達が本道への引揚の準備をしていた。

ちょうど、その夜に根室から迎える漁船が来る手配も着いているらしい。

ソ連兵は、その気配に気付いたらしく、今晩は勇留島で一泊すると云いだした。

このままでは大変なことになると思い、ソ連兵をなだめて、よ

うやく志発島に帰ることに成功した。

その真夜中である、海は穏やかな日なので、一斉に脱出するエンジンの音がものすごく、志発島まで聞こえた。早速ソ連兵が飯場へやって来て「勇留島の日本人が逃げるから、早く仕度しろ」と、どなり散らす。

今行つては大変とスローモーションで仕度し、船に乗込んでからもエンジンが始動しないと嘘を云つて、ともかく時間を稼いだ。夜が明けてから、もう良い頃だろうと勇留島へ向つた。

島について見ると、引揚る気のない数戸とエンジンが故障したのか漁船一隻が放棄してあるのみ。

昨日まで住んでいた家は、もぬけのからでソ連兵の怒ること、いだけ怒鳴られた。いくら怒鳴られても、無事に脱出できた勇留島の人達のことを思うと、我身の様に心では喜んでいた。

そのようなことがあつて、より島の巡回も多くなつて来た。

水晶島にも、ぼつぼつ脱出者が出て来た。

ある時など、貝殻島附近まで追いかけて来たこともあつた。

残念だったことは秋勇留島を廻った時、丁度家をほごしに来ていた船を見付け早速、捕らえた。

人影は見えない。ソ連兵は上陸して附近を探して連れて来た。

志発島へ連行である。

名前は、たしか久保田さんとかで二人である。

その方々も秋頃、漁船共帰されたはずである。

青襟章も各島々に駐留することになり、沿岸の警備が厳しくな

ってきた。

在島する者の私有財産は認められたが、漁船だけは一カ所に上架することになった。

青襟章が来てから本部は相泊に移り、私達の方面は無線局に歩哨隊が置かれ、そこへ集結する事になった。

回航できない動力船などは油をかけて焼き払い、富山県の方達は舟を納屋に保管して在るので、そういう舟は穴を開けて使用できない様にした。

それでも、その舟を修理して脱出する者も出て来て、今度は舟を真二つに切断し、また櫓、櫓類なども集めて不必要な物は焼いてしまう有様で、島民の脱出を防ぐことが日を追って嚴重になって行った。

「働かざる者、食うべからず」の鉄則があるように、次第に色々な仕事に従事する者が多くなってきた。

また、働かなくてはソ連の金、ルーブルを得られず、食糧の配給を受けるにも金がいる。

その頃には軍政より民政へと移り、各人はパスポートを所持しなれば、何処へも行くことが出来ない。

当時の老人、婦人達は野菜を作り、ドブロクを造ってはソ連の民間人や工場で働いている日本人に売っては、ルーブルを稼いでいた。相泊の天神宅はソ連の小学校になり、その隣にソ連役場も開設、島民の子供達も小学校を開校して勉強するようになって来た。

ソ連の統治下に置かれてから、二冬目がやって来た。

いつになったらソ連が引揚げて行くのか、私等が引揚げなければならぬのか、五里霧中である。

初めのうちは日本軍の食糧を配合してくれていたが、ソ連の小麦粉に変って来た。

小麦粉と云っても、えん麦を引いたような粗悪な粉である。

当時はソ連国内でも食糧事情が悪かったであろう、ソ連兵の小麦粉から缶詰類すべてと云って良い位、米国製品であった。

昭和二十二年（一九四七年）の春になると、昨年の缶詰工場の経営がうまく行かなかったのか、今度は色丹島でタラ釣、択捉島ではマス漁、そして志発島では昆布漁というように、事業内容も変って来た。

私も今まで軍の労務者として働いていたが、自船と共に船の責任者としてタラ釣に引出され、兄は別の船で今度はソ連役場の用船として別々になり、私は仲間二人とソ連人二人の五名の乗組員でタラ釣の基地、色丹島穴澗に向った。

港より当時の漁船で三十分位の漁場で、大きなタラが良く釣れた。

国後からも志発からも大小三十隻位集まり、穴澗は急に賑わい、陸地が狭いので隣港のマタコタンと二つに分けた。

獲ったタラは全部塩蔵され、次々と貨物船で搬出して行った。

七月上旬頃になると、穴澗沖合の漁模様が、かんばしくなく私の漁船は試験的に能登呂港を基地にして、太平洋の漁に廻された。

私は手に怪我をして水仕事が出来なくなり、治るまでという条件で志発島に帰され帰宅した。

八月に入ると、年内に引揚げがある様な気配がして来た。

まさか樺太廻りになるとは露知らず、花咲か根室あたりへ行くか？日本から迎え船が来るものと思っていると、青襟章の隊長が来て、近々引揚げがあるから食糧だけは充分持つようにと教えてくれたが、どこをどう廻つて日本へ帰すのか教えてくれない。

ただ、食糧だけは充分持つようにとのことなので直接、根室や花咲には行けないことが解る。

全島民を一度には帰さない。半分位は、もう一年ソ連に協力して頂くと言う。

誰が残されるか、一抹の不安がある。

老人達の間から「ソ連軍進駐以来、放置されたままになっていた、お寺の納骨堂に納めてあった遺骨を一カ所に集めて埋葬しては」との、話が出てソ連の許可を受けてお寺の前に穴を掘り、散乱している遺骨を集めカメに入れて納め、太い柱を建て墳墓の標にした。

九月に入ると、愈々引揚げ命令が出た。

私の家にソ連兵の隊長以下三名が訪れ「荷物は一人五十キログラムまで、手荷物は制限しない」と言い残していった。

また、家財道具類等調べて行き、三日以内に西浦泊まで集結するようお願いされ、次に引揚げて行く者の残された目星しい品物を、私の家の倉庫まで馬車で集められたした。

各離島からも続々西浦泊に集結して小学校や民家、納屋に入居して引揚げ船の来るのを待ったが、待てど暮せど引揚げ船は見えず、一カ月過ぎても船は来ない。

手違いで配船が遅れているとのことであった。

集結されてからは、我家の方へ（東前）行ってはいけないうと、きつく言い渡されているので野菜物一つ取りに行く訳にも行かず、丁度、秋味（鮭）が川に登る時期なので、秋味を捕ったり、小さな地引網を引いては魚を捕り、副食にして引揚げ船の来るのを待った。

十月二十六日昼頃になって、ようやく引揚げ船が相泊沖に姿を見せた。

全員相泊に集結し、アルファベット順に乗船し始めたが、棧橋と引揚げ船の間を舁で往復しているので、中々はかどらない。

私達は最後の方なので、乗船するのが夜中になった。

一万トン位の貨物船のモッコに荷物を並べ、その上に女子供、老人を真中に、男達はぐるりにつかまってウインチで巻上げられ、船上へ引上げられた。

生まれ故郷の志発島の別れである。

まもなく、船は出航した。

二日位で真岡に着くとのことなので、荷物を利用して甲板で過ごすことになった。

夜が明けると丁度、国後水道左手には爺々山が、そびえ立っていた。

航海は順調で、予定通りに真岡沖に到着したが、大きな貨物船が入港していて、荷揚げが終わらなければ入港出来ないとかで、沖合で待機することになった。

三日、四日と過ぎても入港出来ない。

食糧の配給もなく、携帯して来た、ほしえ、こうせん、鮭の燻製等、島を出る時親切に教えてくれたソ連兵のことが思い出される。

米も持参して来たので薪をもらい、船尾で炊事するのが日課になった。

初めのうちは良かったが、そのうち薪もなくなつて来た。

各所に仮設の便所が作られていたので、今度はその板をはがして炊いた。

一枚、二枚と段々便所の囲いがなくなつて行く。

そうする内、大時化にあった大きな船が左右に大きく揺れ動き、船酔する者にとっては大変な苦痛であり、生きた心地がなかったと思う。

時にはハッチの板がずり動き、あやうく数枚が船倉に落ちる所であつた。

もし、その板が落ちたとしたら船倉は同じ引揚者が入っており、ハッチの上には荷物が山と積まれていたので大惨事となつた事であらう。

乗船してから一週間目位で、ようやく入港することが出来、私達が乗船したのは最後の方なので、下船する時は一番先になった。

乗船する時とは違い岸壁に横付け、タラップが掛けられた。

初めて見る真岡、ソ連軍と交戦し艦砲射撃を受け、市街の大半は破壊され、その中を収容所にあてられている小学校へと長い列が続き、互いに重い荷物を背負い丘の中腹にある小学校へと急いだ。

浜より二キロ位あつたように思える。

兵隊の案内で、急な坂道を我れ先によじ登り、収容所についた。

収容所は部屋ではなく、柵式である。

せまくて足をのびして寝ることも出来ない有様であつた。

でも真岡に揚がり、やれやれ一安心。

食糧の配給も黒パンに塩蔵ニシンと云つた物でも、やっと食物が手に入った喜びはひとしおである。

門には歩哨がいて、柵外には自由に出入れない。

柵越にソ連兵が、食物や色々な物を持つてやつて来る。

どうせ、税関ではルーブルを取上げられるのだからと高くても買ひ出した。

若者は使役として、貨物船の荷揚作業や炊事で使う薪運搬に狩り出された。

収容所は小学校と隣り合わせの女学校で（二階建）当時としては、立派な建物であつた。

ここもやっぱり狭くて夜など用便に起きると、もう入つて寝る所がなくなる有様である。

船中での疲労と、上陸してからも栄養のある食物がなく、老人

や乳呑み子位の子供が、次々と日本の土を踏まずに死んで行った。収容所には死体安置所があり、十体になると真岡の墓地に埋葬することになっていくらしい。

毛布でくるんであるのは手の良い方で、身寄りのない遺体などは筵でくるむ有様であった。

その上に、「とば」に氏名と死亡年月日、番号だけ記入してある。私は隣家の老人が亡くなったので、埋葬の使役に出され、十体の遺体をトラックに積み、数人と墓地に向かった。

墓地では大きな穴を掘り、遺体を番号順に並べ土を掛け、その上に番号順に「とば」を立てた。

真岡墓地も、戦斗での死者と引揚げの途中での死者で「とば」の林であった。

それよりも忘れられないことは、引揚船に乗船する矢先、港で順を待っている短時間の中に、身寄りのない老人と子供が死んだことである。

早速トラックが来て、遺体を運んで行った。

あつという間の出来事である。

引揚船に乗船してからも死人が絶えず、船員も「こんなに死人が出た引揚者は初めてだ」と言う程であった。

それでも船中での遺体は、日本まで運ぶことが出来た。

十一月も下旬近くになると、真岡も冬が駆け足でやって来る。

朝夕はかなり凍り、島を立つてから一カ月近くも暖を取ることが出来ないのです、この上は一日も早く引揚船が来るのを、一同一

日千秋の思いで待った。

そうこうしているうちに引揚船が入港、先の人達が引揚げて行った。

今度は私達の番である。

税関を通り、荷物の調べである。

その調べ方も、函館の税関に比べると簡単であった。終わった人達が手伝いに来て、調べの終わらぬ荷物でも、要領よく運んでくれた。

十一月二十三日、引揚船三隻が真岡沖に碇泊した。

この三隻で本年度の引揚げは終わりと云っていた。

収容所入りした時、あんなに重かった荷物も今では足よりも軽く港に集結し、班の順番に乗船して一路函館に向った。

引揚船では、ご苦労さんでしたとばかり心尽くしのもてなしを受けながら函館に入港した。

また、ここでもナホトカよりの引揚げと重なり、二日程船中過ぎた。

でも港の中なので陸上と変わりがない。

函館に上陸出来るのが、十一月二十八日である。

思えば、四、五時間で根室まで往来出来たのに、目と鼻の先に住みながら、一カ月余掛かって、ようやく日本本土の地を踏んだのである。

その一カ月というものは、まるで悪夢のようであり、それはまた、身を持って体験した人でなければ語っても解らないであろう。

今日に至っても、同じ苦勞して来た引揚者達と語る時ありありと当時の苦しい思い出が頭に浮かんで来る。

一生涯忘れることの出来得ない、いや、二度とあの様な悲惨なことがあつてはならない。

思えば歳月の過ぎるのは早いもの、生まれ故郷の島を追われて四半世紀、島の姿は今でも変りはないだろうか。

いくつもの小山を造っていたホタテ貝の山。

戦前、志発島の周辺が、いかにホタテの好漁場であつたかを物語る、唯一の証拠品である。

そして七月頃になると、野原一面を真黄色に染める、エゾカンゾの群落。

秋には、秋味（鮭）が群をなして、そ上するあの川。

今日でも、その季節季節に当時の島影が臉に浮かぶ。

いつの日この足で、島の土を踏みしめることが出来るであろうか。

その日の一日も早からんことを祈りつつ、筆を置く。

現住所 根室市瑤瑠三丁目四十六番地

現在の職業 漁業

元居住地 函舞群島 志発島

在島当時の職業 漁業従事



北方の動物(その1)



平和な島、 齒舞群島

万 屋 佐 之

私は、富山県下新川郡生地町に明治四十三年（一九一〇年）十月に生まれ、小学校卒業と同時に北海道へ来ました。

大正十二年（一九二三年）春、四月のことです。汽船を利用して根室に來たのですが、汽船と言っても今のような豪華船ではなく、根室へ送られる米、味噌、醤油、むしろ、その他の雜貨等を積んだ貨物船で、乗船客は千人程度おり、みんな、ざこねをして三泊四日から四泊五日の船旅で根室港へ着いたのです。

当時の記憶は確かではありませんが、三月二十九日から三十日頃富山を出港、四月三日に根室港へ入港予定であつたと思います。ところが、その年は根室港が流水のため、入港出来ず花咲港へ入港しました。

通い船で陸に揚がり、根室へ陸路を歩いて行くということになりました。

四月早々のことであり、昼とはいえ、寒さは厳しく、花咲より根室へ行く道がわかりません。その上、道はひどい雪溶けで、どんなときております。

今考えてみれば、花咲より今の太平洋レミコンの脇を通り、北

斗小学校前へ出る道を教えられて來たわけですが、道を間違えて遠回りとなって、落石無線（光洋中の附近）目当てに進み、花咲小学校の前へようやく出ました。

今でも、なつかしい思い出の一つとなっております。

以来、根室の住民となり、両親を根室の土とし、また、自分もやがて土となつてゆく運命になろうとは…………。

想いは小学校卒業時に戻りますが、根室へ出稼ぎに來ていた父は、川端元治氏の先代、川端元次郎氏が経営（当時国後のニキシロ）の漁船の船頭でした。

その当時、私の家へよく若衆（勞務者）が來て、父と煙草を吸いながら、苦勞話や楽しみなこと、そして、未來への希望をかけた話をしているのを聞いて、私も是非根室へ行つてみたいという氣持になり、親の「進学せよ」も聞き入れず、根室に來たのが十四歳の時です。

その年、父は、今の秋勇留島（齒舞群島の一つ）の沖合にも、鰯がとれるであろうと思つて、**元**川端商店より「のれん」をわけてもらい、秋勇留島に渡り、初めて自営としての仕事をしたのです。

当時の漁場利用は、落石はたいへん盛んで、花咲港、そして、色丹島、多楽島でも鰯釣り漁業が盛んでしたがどうしたことか、秋勇留島、勇留島、志免島、水晶島にはなく、太平洋岸である以上、必ず魚が獲れるという考えのもとに、川尻石松氏、高岡浅次郎氏、富山竹治郎氏、浜松欽次郎氏、浅野ツネ氏、石垣力次郎氏等と秋勇留島を根拠として、仕事をしたわけです。

私は、この仕事にたいへん興味を持ちはじめ、それが前に申し上げたとおり、北海道へ行きたい一念となり、元より勉強嫌いもあつて来たということです。

おかげ様で親父達の考えた通り鰯がとれましたが、今にして思えば漁法は幼稚でありましたが、あれが当時としては、最も、よい方法であつたと思います。

その第一は、無動力船であることです。

初めは七人乗りで、風のある時は帆を利用できるが、風の無い時は櫓をこいで入出港はもとより、沖合の仕事を終えてくるのです。

縄が手引きといって、各人が手で引き揚げるなど、どの仕事も出来るだけ自分の力を出し尽くして働くのです。

働く者は、どうしても若者になわなないが、賃金の配分は平等であり、ただ、どこそこの誰は「良い若衆だ」と、もてはやされるだけです。

風をたよりの船ですから、風の十五メートルから二十メートルの時などは流される時も、たまたまありました。

良く「命が惜しければ、一生懸命櫓をこげ」と叱られながら働いたものです。

島には商店等はなく、私たち漁家に持ち合わせのない品物は、島の定住者（当時五戸）が一通りの道具を持っていたので、借りることにしていました。

島で一番困ったことは、言葉が通じないことでした。

というのは、郷里の方言があるからです。

お互いに困ったものですが、そのうち誰いうとなく宮城県の人達のことは、仙台衆といい、青森県は津軽衆、新潟県は越後衆、富山県は越中衆といつて、言葉の勉強にお互い努め合つて暮したものです。

そのうちに、動力船を利用することになり、昭和六年に港の関係で、勇留島に仕事を移しました。

前々より勇留島に昆布採取を砂浜でやっていた関係上、移住が簡単でありました。

中央部に位する、通称床間（トコマ）、地主は惣万氏で、管理人は、たから湯の主人山屋喜一氏、そこで鰯釣りに始まり、六月は鮭鱒取り、七月二十日以降は昆布取りで、一年を暮すという姿でありました。

勇留島には、公的施設は小学校と郵便局、駅通位で、お寺もなく、医者もいなければ警察官もいません。

けれども、島内は平穏で喧嘩もなければ、さして病人騒ぎも余りなかったと記憶しております。

それはそれは平和そのもの、最も空気がよくて、全島一家族のように仲良く和気合々でありました。

尤も、これには理由があります。

第一に、先に申したようにお医者さんがいないので、健康に注意するという意識の働きがあったと思う。

また、仲良く助け合って暮して行こうという、思いやりの気持がお互いにあったし、それだけに、どこで会っても言葉をかけ合ったものです。

尤も、それには今一つの理由があります。

それは、特別に金持ちにはなれないが、生活費は、たやすく稼げたからです。

例えば、浜へ出て昆布を拾うか、ふのり、ギンナン草を潮ひきの時に取っても、お米代にはなりません。

当時、私共は年の半分を働いて、半分は遊んで暮していました。四月の初め（流水が去った後）に仕事が始まり、十月末で沖取りは一応終り、後は春以来の後始末という事の繰り返しで、尤もその後、段々と仕事や漁業形態の変化で十一月へと仕事の方は延びましたが、それでも十一月末には大体終ります。

その時代に私事で申し訳ないが、私が子供の親になり、少しでもお金が欲しいという事で、十二月の初めから拾い昆布やふのり、ギンナン草を取って三月初めまで、一生懸命に働いてみたら、当時のお金で二百四十円稼げました。（昭和九年（一九三四年））

当時の島での暮らしは、十一月より翌年の五月初めまでの食糧品

を一切仕入れておく（これを年越米といった）ならわしで、その仕入代金が二百十三円であったので、半年を寝て暮すといっても決して嘘はなく、やる気になれば暮らしは楽で幸せであったと思っています。

尤も、病気なしとはいいが、相当我慢もし、思えば数は少なくても手遅れとなって、新たな人生を空しく終ったというケースもありました。

当時、最も恐れられていた病気に脚気という病気があり、私の母などは、産後、脚気にかかり三十三歳でなくなり、私の兄は生後何十日かで、勇留島で医者の手にかかることもなく死んでおり、その結果は不便が理由で、届けもなく、いくなれば闇から闇でもあったわけです。

これも、当時の開発途上にあった、島々の姿であり、また、根室との交通不便を物語っています。

こうした反面を思い浮かべながら、私共は常に島の開発に努力しておりました。

その結果、段々に交通の便もよくなり、志発島に医者も来るようになりましたし、また、水晶島の秋味場にも医者が来ましたし、本格的な開発が始まり事業も盛んになりました。ところが昭和十六年（一九四一年）十一月初め、各島の定時船及び漁船、皆それぞれの港より、航海の禁止となりました。

ただし、島から島への避難は出来ました。根室へは行けません。一体、世の中はどうなったのかと、色々話し合ったものです。

それが、十二月八日未明の発表となり、初めて知った日米開戦、いわゆる第二次世界大戦の始まりであったのです。

ご多分にもれず、好むと好まざるとにかかわらず、勤労奉仕や、欲しがりません勝つまではとか、見まい、聞くまい、喋るまい等々、標語または回覧教育によって、戦争の真只中へ落ちこんでいったのです。

終戦の年（昭和二十年（一九四五年））の七月十四日の根室空襲の時などは、島の私共は初め飛行機を見て、日本の飛行機と思い、家から外に出てながめ、心強く思ったものです。

それが、機銃射撃を受けて（音を聞いて）初めて、ことの重大さに気付いたという、笑うに笑えない時を思い合わせてみても、当時の私共は、神国日本の勝利を信じていたということが伺えると思います。

その一カ月後、終戦となり、軍（いくさ）に負けたのですが、幸い私共の島へは敵さんが来たわけでなく、当時駐屯の日本兵だけが空しく連合軍の進駐を待つて、兵器の受け渡しと軍の解散を待つていたのです。

それが約二十日間、米軍もソ連軍も島へ来る気配もなく、その間に根室支庁の方から、日本固有の領土であるから島の皆様は動揺することなく、落ちついて仕事に励むようにという通達があった。

また例年通り、冬期間の糧米が送りこまれて来たので、やや安心していたのです。

一部、根室へ行くという人達もありましたが、九月四日午後二時頃、突然私の家の真下の砂浜へ千トン位の上陸用船艇で銃声を続けながら、ソ連兵が上陸して来ました。

当時の不事を家内は、こう話しております。

『その日は大変天気が良く、風もよかった。少し遅い昼食を済ませ、後片付けをしていたら、海の方で銃声が聞こえるので、外へ出てみたところ、家のすぐ下に弾丸が来て、大勢の兵隊が鉄砲を持っているのが見えたので家の中へ駆けこみ、子供二人（長男は十二歳、次男は四歳）を抱えこむようにして、取りあえず山の中へ逃げこんだ。（十メートルから二十メートル位の砂山）

そして、約千三百メートル程離れたところにある隣家へにげこみ、年寄りを中心に四、五軒のものが集まり、とくに若い女性はや根裏へ隠し、また、顔にすすなどをつけ、一時はどうなるものか不安であった』

ソ連兵が私達の島に駐屯しないことを確かめて、それぞれ自分の家へ帰りました。

ところが家の中は、ラジオは壊され、着物はタンスや行李から引き出され、そここにばらまかれ、紋付きや、わりあい良い品物は無くなっていました。

ソ連兵はその後、一日おき位に島へ見廻りに来る程度でした。

向いの志免島に駐屯していたのです。

各島々と同じように、最初にソ連が進駐して来た時、私共に第一に聞いたことは、米軍または連合国の兵隊がいるか、いないか

ということでした。

第二にラジオや、その他北海道と連絡を取るようなものを嫌ったことです。

もし、日本軍が武装解除をしていなければ、進駐して来なかったであろうと思います。

でなければ、ソ連軍より早く連合国側が武装解除をしていれば、今日の私共の苦しみはなかったはずです。

択捉以南は連合国側（アメリカ）が処理するものと思いこんでいました。

以上が島へ渡ってから終戦時までの、勇留島での生活の実態であります。

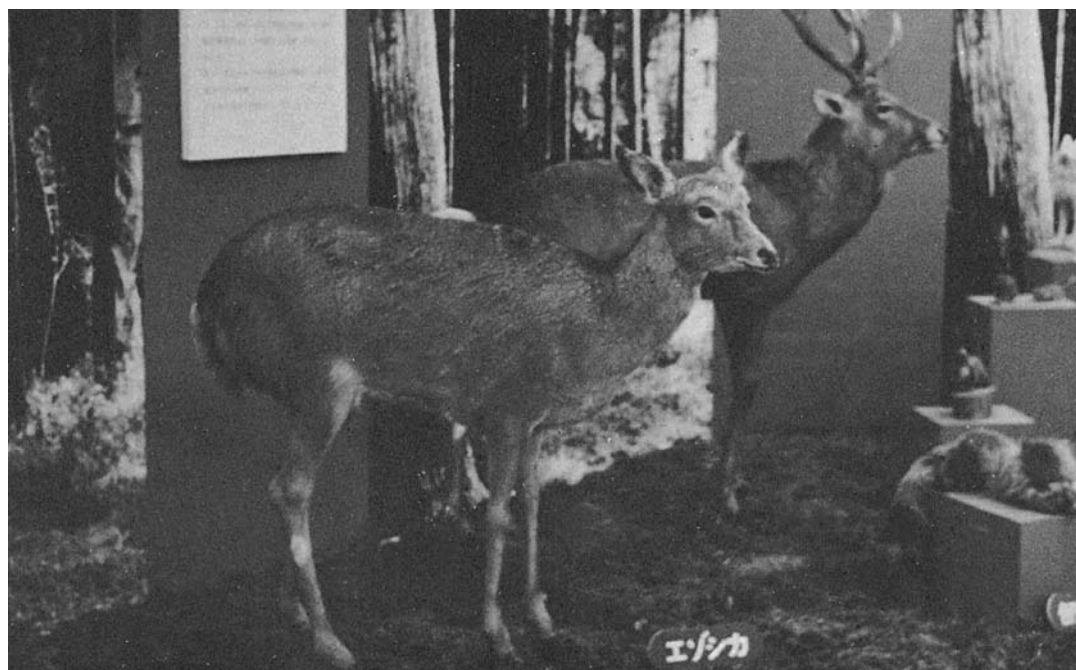
今は、島へ帰る日を待ちながら死んでいった両親の位牌と共に、北方領土復帰運動を続け、その火消えずの意気で皆様のご協力を願いたいと思っております。

現住所 根室市汐見町

現在の職業 漁業（根室市議会副議長）

元居住地 函舞群島 勇留島

在島当時の職業 漁業従事



北方の動物（その2）



忘れられない、私のふるさと…国後島

内 野 輝 雄

私は明治三十九年（一九〇六年）十二月十八日、国後郡泊村大字東沸村字キナシリ一番地において出生いたしました。

住宅が川の淵にあり五月頃になりますと、その川には鱒がのぼり九月には鮭が二千本から三千本ものぼり、それはとても勇壮なものでした。

ヤマベ等は年中、焼干を作りダシに使っても食べきれないほど、釣れたものです。

道内からヤマベ釣を職業にして渡って来る人も多数あったほどですから、どれほど釣れたかがうかがわれます。

春になると山菜が豊富で、特に落（ふき）は人の背丈より高く人や馬が落の中を歩いても見えないほどです。

また、この落の立漬も美味しいものです。

本道からの来客のある時は、川原に案内してヤマベ釣を楽しんでいただき、私達は鱒や鮭を手掴みにして川原の木を拾い集めて火を燃やし、落の葉に鱒や鮭を包んで火の中に入れて蒸し焼きにして正油と味の素をさして食べるのも原始的な御馳走の一つであり、島の名物の一つでもありました。

国後島は火山灰でありますが気温は高く、いたる所に温泉があり、海岸には温泉が噴出しているところも沢山あります。

しかし、表土は一米以上の肥沃土があり、その下が火山灰であるので麦類、蔬菜類はいつでも豊作であります。

特に米戸賀村古丹消は西瓜、サツマ芋等も獲れました。

流化鉄の生産も相当なもので、戦時中は汽船で本土に運搬されていきました。

また、ポン沼は沼に硫黄がブツブツ沸いており、ツルベで汲取り式の製法で、相当量の硫黄が精製されました。

私の家は昭和四（一九二九年）年まで、東沸において商業（日用品、雑貨、呉服、反物、酒、薬等販売）と漁業（ホタテ、昆布、鮫、花色参、布苔、銀杏草、ホッキ貝、ナマコ、黒のり等）、畜産業（ペルシュロン並にアングロノルマン系の馬を飼育）を職業としており、戦時中は満州国種馬神奈川県種馬、および軍馬を生産いたし、表彰を受けたことも数度ありました。

馬を飼育する適地が多く、数百頭の馬も年中放牧しておりました。

馬は数十頭に一頭の割合で種馬をおき、一群として放牧し、種馬は牝馬を集団から離さないように仕込んでおりました。

たまには、熊が出て来ると種馬と熊が格闘して牝馬を守る様なこともあります。

馬や牛の食糧は、島で自給自足をしておりました。

また、島の周囲は海の宝庫であり、千島列島（クリル諸島）を含めても、最大の宝庫であります。

よく、柳の下にドジョウはいないと申しますが、国後の周辺は何処でも鍋をかけて魚を取りに行くという状態で、カニ、タコ、サケ、マス、ヤマベ、ホッキ貝等、沢山とれます。

サケ、マスの盛漁期になりますと、川に溯上する魚で川は真黒で、棒を立てても転ばないほどであります。

リンドバーグ飛行士が不時着した湖で有名な東沸湖は泊山と硫黄山の間にあり、サケ、マス、姫アジ等、沢山の魚がのぼります。

また、硫黄山の麓には二木城湖もあり、この湖は国後島西海岸に川が流れており、東沸湖同様サケ、マスのぼります。

漁業会も東沸漁業会の他に泊漁業会、留夜別漁業会の三組合で島内の漁業の指導開発に力を注いでおりました。

私の所屬していた漁業会は東沸漁業会で、生産額は、塩虫、ホタテ、ホッキ貝、昆布、わかさぎ、チカ、かれい、ふじこ、銀杏草、かすべ、鮫、すけそう、たら、かに、さるめん草、布苔、黒のり等、昭和十六年（一九四一年）度調査で五一、一一八トン、当時の金額にして七七五万円に及んでおります。

とくに泊漁業会では全国で樺太と泊港内と二カ所より取れないという、寒天の原料である「伊谷草」が取れ、漁民は、この伊谷草の収穫だけでも楽に生活が出来ました。

その他、東沸漁業会と同じ様な漁種が収穫されていました。

留夜別漁業会は島の東に位し、国後富士、爺々山の麓にあり、爺々山から端を発する背負、鞍負、温根別の川があり、この川に溯上するサケ、マスは膨大な数量であります。

さらに、西海岸には底吠の滝があり、海から見ても舟が帆を掛けている様な壮観な滝で、国後島名所の一つでありました。

この滝は、曳網一つで一年にサケ、マス数百石の水揚げをされたという所で、昔は相馬哲平氏の所有であったが、その後、小池仁郎元代議士の所有権になったと聞いております。

これから、シベトロに至るまでの海はナマコの他、羅臼昆布と同種類の昆布が取れて、この数も相当な数量でありました。

この地方は、森林も深く大木が林立し、本土では見ることも出来ない処女林が爺々山の中腹までありました。

ここから、西に廻りますと温根沼があり、ここも、サケ、マスの溯上することに於いては、他の湖に劣らない沼であります。

サケ、マスの定置漁業は、国後島東海岸より西海岸に多く漁獲量は、択捉島に次ぐと言われていました。

西海岸は、定置のサケ、マスの他に、たら、そい、たこ、なまこ等の生産も相当ありまして、日中貿易の盛んな時代はホタテと共に、ナマコの干味も多数生産されました。

また、古釜布の湿地帯には、有名なエゾ松盆栽が採取され、埴玉県大宮盆栽市に出荷しました珍木、銘木が沢山出ました。

留夜別漁業会の生産は、一九、八四〇トン、金額三〇〇万円、泊漁業会の生産は、八、四八二トン、金額二五〇万円、泊西浦漁業会の生産は、二六六トン、金額二十万円、留夜別植内漁業会の生産は、七〇、六六八トン、金額三五〇万円、国後の島を称して、黄金花咲くユートピヤと、私達は呼んでいます。

国後島全島の水産物の生産額は、現在では一年に、百五十億にものぼるものと推定されております。

私は昭和四年（一九二九年）春、家事の都合で古釜布に転居いたしました（当時二十四歳）、キナシリにいたように、商業、漁業、畜産業を続けておりました。

古釜布は、産業の中心地ですが、行政の中心地は泊村で、村役場、警察署、営林署などがありました。

島の各地には、駐在所があり、留夜別村乳呑路には留夜別村役場の外、部長派出所と駐在所があり、島の住民の生命や財産の保護にあたっておりました。

しかし国後の島は「ドロボウ」のいない島、生活保護者のいない島でもありました。

学校も小学校と高等科、青年学校（併設）等も各地にあり、村立の学校が十五校、僻地には特別教授場が設置されておりました。私は大正三年（一九一四年）四月一日、東沸小学校に入学いたしました、キナシリから東沸までは約一里半位あり、当時道路

が悪く、途中、崖の下を通りましたが、時化になると高波が、その崖に打寄せるので通れなくなります。

学校に通うには、一年から六年までの生徒が集団で登校、下校しておりました。

大正十一年（一九二二年）七月、高等科三年を卒業後、父の故郷、茨城県鹿島町の県立農学校に入学、大正十四年（一九二五年）三月、農学校を卒業、同年七月、国後島に帰島いたしました。帰島後、部落の子供等約二十人位を自宅に集めて、毎晩十一時頃まで勉強を教えたものです。

その甲斐あって、当時教えた生徒は、現在は五十余歳になっており、それぞれの中堅人物になり、社会に活躍しております。

古釜布に転居してからは、青年教育に努力いたし、自ら青年団長となり、時化の日は小学校に青年を集め、産業研究会を開くほか弁論大会を春秋の二回開催いたしその他、講師を招聘して時局講演会を開催いたし、部落民と共に時局の認識高揚に努めました。

昭和十二年（一九三七年）、支那事変の勃発に依り、七月二十一日、第十四師団第二水上輸送隊に招集され、八月五日、宇原出發支那各地に勤務、昭和十四年（一九三九年）三月二十日、招集解除、四月十日、国後島古釜布に帰還しました。

帰還後、古釜布部落会長、在郷軍人分会長、翼賛壮年団総務、泊村警防団古釜布副分団長等の職に就任、国土防衛に卒先努力しました。

戦時中は食糧増産のため、国有林を借り、部落民に馬鈴薯及び

蔬菜類の栽培を指導いたし、古釜布は馬鈴薯の配給を辞退して、北海道長官より感謝状を受領したこともあり、一方、漁業会関係では総代に選ばれて、組合員の生活向上に努めました。

昭和十八年（一九四三年）には、北部派遣軍指令部船舶部より古釜布に於いて、海洋筏の建造を委嘱せられ、国後島在住の造船工、家大工を徴用いたし建造中、昭和二十年（一九四五年）八月十五日終戦を迎えたのです。

引揚作戦に奔走

終戦後も生産に従事していましたが、択捉島以北の島々がソ連に占領せられ、北方警備隊も捕虜され、次々と武装解除されている情報をキャッチしたので、一時根室に疎開のため、昭和二十年（一九四五年）九月一日夜、日魯漁業株式会社々船、いさみ丸にて末弟一人を残し（当時、白糠泊現地部隊に招集中のため）家族五人は九月二日朝、根室港に上陸、根室町弁天町遠藤安治氏の家屋を一時借りて帰島を待っていたのですが、不思議なことに、その二日朝にソ連軍が古釜布に上陸し、島民の総ての自由を束縛し現地に釘付けしてしまったのであります。

一時的な進駐で、すぐ引き揚げると機を窺っておりましたが、引き上げる様子もなく、島からの情報によると一部に乱暴をするものもありましたが、日時がたつにつれ、あまり乱暴もしなくなつたそうだが、島民は不安な日々を過ごしているとのことであり、

仲沢武雄氏と相謀り、国後島より老人と婦女子だけでも早急に引き揚げさせようと、根室で引揚船の手配をいたし、警察署より燃油の配給を受け一航海成功すると（一隻の船に人員二十人位、米、味噌、正油、夜具、着替等を積んで来れる）代償として米十俵に金一万円也で契約し、最初は運良く成功しましたが、だんだん部落民がいなくなるのでソ連軍も感付き、監視が厳重になり、時には銃撃を受けて負傷する者も出ました。

十二月に入り、時化も激しくなったため、この引揚作戦を中止することにしました。

部落のあらゆる公職を引受けていた関係もあり、もし私が捕虜にでもなれば、当然『チョロマ』に入れられて到底生きて本土に還れなかったと思い、この際、私の全財産を投出して島民救出のために努力する覚悟で、当時のお金で現金五万七千円、米十七俵（米一俵千円也）を投じたのであります。

その金は誰からも返らないが、また、惜しいとも思わない。金が必要な時に使つてこそ、値打ちがあると思います。

国後島、択捉島、色丹島、齒舞群島の方で終戦後に脱出できなかった人々も、昭和二十二年（一九四七年）十一月と昭和二十三年（一九四八年）九月の二回にわたり、全員強制引き揚げで樺太經由の上、函館に引き揚げられましたが、引き揚げの途中で船が遭難して亡くなった人々、引揚船の中で死亡した人々は本当に気の毒であります。

心から、その霊に対し、哀悼の意を表します。

また、引揚船の中で小児マヒに罹った者もいて気の毒でした。

北方領土の復帰運動に努力

昭和二十年（一九四五年）十二月一日、元根室町長の安藤石典氏を先頭とする千島、齒舞諸島返還運動が開始されて以来、この運動に協力して国後島、択捉島、色丹島、齒舞群島の返還同盟に参加し、卒先して北方領土の復帰運動を進めてまいりました。島の返るまで、引揚者は団結を堅くして世論を一致するべきであると、根室に来訪する諸氏に返還を訴えております。

財団法人千島齒舞諸島居住者連盟理事、根室支部副支部長として引揚者の援護措置、北方領土問題対策協会の資金の借入に對しては、身を挺して協力しており、あらゆる会合にも参加させていただいております。

また、国後引揚者をもって国後会を結成いたし、会長に選任され、結成以来、今日まで会長をつとめております。

また、昭和二十二年（一九四七年）以来、根室市議会議員として市政に参加し、議会活動を通じ「島を還せ」の運動に懸命の努力をいたしております。

運動は、島の還る日まで続ける決意でありますが、自分が出来なくなりました際は子々孫々に遺言をし引継ぐよう今から心がけております。

昭和四十一年（一九六六年）度北方墓参の際は、団長として墓

参に参加し、齒舞群島（水晶島）、色丹島、国後島の墓参をし在島の霊を慰めてまいりました。

その時の島の状況は、私共が住んでいた時と少しも変わっていませんでした。

北方領土は日本固有の領土であり、日ソ国交の正常化は我等の希望するところであるが、我が当然の權益を放棄し、不当なるソ連の主張に屈するが如きは断じて許されるべきではありません。

最近の日ソ交渉の経過をかえりみると、未だ、その解決の糸口すらつかめず、ソ連政府は『領土問題は解決済み』の態度に終始し、また、政府においても南方問題ほどには熱意を示して来たとは思えない。政府が、もし国後島、択捉島を捨て、僅かに齒舞、色丹の小島を返還せしめるなど軽卒にもソ連外交の術策に陥り、不用意の裡に平和条約を締結することがあつてはなりません。

このようなことは、正に我國民本然の感情に背き、民族の誇りを傷つけるのみならず、無限の國益を犠牲にし禍根を未来に残すものにして、我等の到底忍び得ざるところであります。

我等は日ソ平和条約の締結の前提条件として、人類が想像する世界平和とは、暴悪が敗北して正義が栄え、全ての人類が正しく生き抜くことの出来る世界を言うのであります。

従つて今日各国の高唱する人類の平和共在ということが、空念仏でなく真実の悲願であるならば、他國の生命線を尊重しあうことは、絶対的条件でなければならぬと強く私は主張いたします。

世界平和の実態は即ち、領土権生命線の相互尊重に外ならない

からであります。

我々は領土は母胎であることを忘れてはなりません。

理屈にかなうなら、祖国を八裂にされても止むを得ませんが、火事場泥棒的占領は許されません。

しかし、我々はこれを力づくで取り返す様なことなく国民総決起の世論喚起によつて、領土の返還を望むものであります。

これこそ、国を愛する日本民族の魂であると信じます。

依つて我々は、どんなことがあつても何百年かかつてても子孫に遺言し、祖先から受継いだ領土を寸土たりとも放すことは出来ません。

国論を統一して、国民総決起の力により返還を望むべきであります。

現住所 根室市汐見町六十番地

元居住地 国後島

在島当時の職業 商業、漁業、畜産業

現在 根室市議会議員



国後島泊村東沸市街

公益社団法人 千島齒舞諸島居住者連盟
戦前の北方四島写真収録集より



無謀なソ連兵の行動に悩む

部 川 鶴之助

戦争直前の植内漁業協同組合

昭和二年（一九二七年）当時の国後島、植内漁業組合（組合長森下斧蔵）は、有名無実に等しかった。島内各地域の漁家（漁業者）はそれぞれ主として根室の資本家より、経営資本は勿論、漁業用資材、その他生活必需品等の全般に亘り、供給されていた関係より、生産物の全漁獲数は、資本家に提供されることになっていた。

これが、当時の仕込み制度である。

資本家は往復の物資に口銭を授け、精算は年に一度してもらえば良い方で、甚だしい資本家に至っては、二年か三年に一度といった具合であり、しかも、販売仕切価格は年中最も安い価格で仕切られ、漁民は来る年も、来る年も、資本家の借金から浮かばれず、常に下積生活に明け暮れて、私どもの先代は数十年間過ごして来たのである。

昭和六年（一九三一年）、漁業協同組合に組織替え、理事の改選と共に、当時の植内郵便局長であった岩城礼司氏が理事長とな

り、組合内容も一新した。

この機会に、地元資本家は勿論、根室方面の資本家に協力を求めて、負債整理組合を設立、漁業協同組合が中心となり、地元有志の発起で昭和八年（一九三三年）より本格的な活動に入り、組合員の負債総額を調査、十年計画で負債返済の年賦償還を設定したのである。

一方、漁業協同組合への全面出荷統制に踏み切り、農林中金の低利資金の借入れ等に努力、組合員の販売、購買は言うまでもなく、生活必需品の供給等も地元商店の協力を得て、積極的に原価で仕入れ供給した。

また、組合各戸の生活安定を計るため、海にのみ依存することの極めて不安定を察し、陸の生産にも努力、畜産には自然に恵まれている土地柄を利用、各戸に馬産の奨励をすすめる、貯蓄組合を設立し、組合員の生産物の販売代金の精算は全部、各生産者の口座を通し、貯蓄の実績を年々上げ、当初計画の半分の五カ年で、負債総額の八割近い額を返済、遂に六年間で全額整理し、無限責任植内漁業協同組合発足十年にして、名実共に内容も道内二百数

十漁業組合の上位に進出したのである。

組合員は百九十余名であり、その生活にもゆとりが出るようになった。

このことは共同の力によるもので、戦前も戦後も生き抜いて来た、島民同志の力によるものである。

無限責任植内漁業協同組合の地域は、東前（太平洋側）全長五里、西前（オホーツク海側）全長十五里の沿線を有し、漁業は、一月の海蘿銀杏草の採取から始まり、晩秋の十二月、鮭の建網漁の終りまで年中漁に明け暮れ、年間を通じ米、味噌、正油の主食以外の副食物は総て、自給自足の出来る島生活であった。

陸の産業としては、まず林業が盛んに行なわれていた。

西前オンコツに、秋田木材会社の年間七万石以上の造材業者があり、さらに、地元業者による林産物の生産、五万石余りという膨大な数字を示していた。

また、シベトロの金鉱山は年々成績を上げ、地元製煉所も設けられていた。

畜産も地元各個人所有馬だけで、三百頭余りを有し、馬産も相당한収入源であった。

各戸の生活様式は、衣食住の衣服は購入するとしても前記した通り、副食物はほとんど自給自足、魚は前海で毎日自足し、特に花咲ガニの類は干潮時前の磯で、手掴みで何程でも獲れ、必要なだけ毎日漁獲した。

タコは磯の穴を一つ持つていれば、一度獲っても三日目には、

また同じ穴に入るほどであった。

部落構成機関

植内地区は、東西に八つの部落を有していたが、各部落は連合体で構成され、その中心部落が植内で、各機関が存在していた。

植内尋常高等小学校、植内診療所、営林区植内駐在所、植内郵便局、植内漁業協同組合、水産物検査所、国後警察植内巡査駐在所、日蓮宗植内説教所、部落会連合会、この機関を中心に、あらゆる活動を家族的に行なつて来た極めて静かな農山漁村であった。

昭和二十年（一九四五年）九月一日の異変

昭和二十年（一九四五年）八月十五日終戦と同時に、村内は一変した。

村民は誰彼の差別なく動揺した。

産業も、一時ストップ状態が続いた。

昭和十六年（一九四一年）に宣戦されて以来、既に四年、全島民挙げて軍に協力、産業の半減も懸命な努力で償い、一線で活躍の将兵に報いなければとの意気で頑張った筈だが、遂に予期しない大変化が来た。

九月一日快晴の午前十時頃、我々の住む植内沖を、数隻の見慣れない軍艦らしい船が、古釜布方面へ向けて航行して行く。既に

通報のあったことでもあり、間違いなくソ連の侵入と察し、部落の一同に動揺しないよう連絡しつつ、その後の様子を窺っていたところ、午後一時少し過ぎた時刻に古釜布方面より数隻の船形が見る見るうちに筆者の前浜の中央まで上陸、何れも着剣したソ連兵が三隻の舟艇から五―六十名、飛び下り、何か甲高い声で叫びながら、各民家へ侵入するので、婦女子と子供は各戸の防空壕へ避難させた。

当時、筆者は部落会長をしていた関係上、終始、彼等の行動を監視していたが、言葉の通じないのには閉口した。

しかし、別に危害を加える様子はないので、一応安心はしたものの、落ち着かない気持で数時間過ぎた。

午後四時頃、ひとまず全員再び舟で古釜布方面へ去ったが、翌日からは、毎日三―四十名のソ連軍に悩まされながら生活した。乗馬は乗り逃げする、土足で家庭内へ入る、物は盗む畠は荒らす、仕末に追えない有様で、とても不安で落付かず、生命には別状ないとは解つていても精神的にまいってしまいそうであった。

筆者はほとんど毎日のように、彼等の呼び出しにあい、ソ連兵の通訳を経て、行政上の色々な質問を受け、彼等は（進駐軍は行政面のことも兼ね）我々日本島民に不安を与えまいとして、相当気を配っているようであったが、それも上層部の将校連中で、兵卒は乱暴で手に追えない仕末であった。

それでも、何とも致し方なく、不安ながら幾日か過ぎた。

十月十日、緊急部落会を開き、一斉に脱出することに協議した。

その間、数回部落会の席で、冬を目前に脱出することは中々困難なことであり、しかも脱出先の根室は戦災にあい、住宅は勿論、食糧も極度の悪条件であるとの意見もあったが、慎重に懇談の結果、決定した脱出であった。

これには色々な原因もあった。

その一つは、たまたま筆者が彼等（ソ連軍本部、古釜布）に呼び出されて話し合っている内、通訳のウシチメンコ（混血児）なる大尉と懇意になり、彼が話すことは、『自分の母は、秋田県生まれの日本人であることから、日本人皆んなの気持は判る。部川、お前は北海道へ渡るか』とのこと。私は日本人だから、ソ連人とは一緒に暮せないと話したら、その気持は判るとのこと。非常に好意を持った意中を明し、明春からは（昭和二十一年（一九四六年））沿岸の警備も嚴重になり、領土は絶対返す見込みのない事を私見として話していたことも、緊急脱出の早期決定に踏み切った原因の一つでもあった。

協議決定後、早速脱出の支度にかかり、漁業組合が中心となり部落連合会を通じ、各部落に通報し、運搬船の仕度手配のため、岩城礼司、前川清松の両氏が急遽、根室へ密航船で脱出した。

このようにして、脱出の第一船が十月十四日、暗夜の九時に植内部落に着き、無灯無声の内に、部落民の一時暮し向きに必要な生活用品を限度に、各船毎に分乗、老幼婦女子を送り出した。

壮青年を残し、脱出の後仕末を行って、最後の船の入港を待ったが、遂に三隻程の運搬船の入港がないまま夜明けとなった。

若者三十五名と筆者等、取り残された。

運悪く翌十五日からは大暴風雨となり、機関故障のため航行不能の二隻の遭難により、尊い人命を六人も失った大惨事を起こしてしまい、本当に申し訳ないと現在でもしみじみ痛感している。

脱出に関しての監督官庁の立場であった、当時の根室支庁（道庁）に対し九月十四日、植内郵便局を通じ各官庁に対して島民の態度について指示を仰いだところ、結果は老、幼、婦女子の疎開はやむを得ないが、壮年者は領土確保のため、現地にとどまれとの指示であった。

我々は、このようにして脱出以来、現在に至る二十六年間、私たちの故郷である北方領土復帰の促進と引揚者各戸の自立向上の意気に、最大の努力と協力をなしつつ毎年を過ごしている者であります。

北方領土の復帰が一日も早く実現され、帰島の日を夢見ている者の一人であり、この運動が今後何十年続くとも、日本人である限り生涯にかけて実現のため努力するとともに、次の世代を担う青年諸氏に継承し、成功させていただくことを期待するものです。

現住所 根室市松本町二の五

現在の職業 会社員（漁業関係）

元居住地 国後島

在島時の職業 植内漁業協同組合職員



北方の動物（その3）



終戦前後の私と択捉島

発展途上にあつたなつかしの故郷

吉 田 武 一

はしがき

望 郷

昭和二十年（一九四五年）八月十五日の終戦宣言により、日本敗戦の犠牲となった我が郷土択捉島は、敵国の侵略するところとなり、我々島民は強制追放の運命を背負い、父祖代々の生れ故郷を喪つたのであるが、それから既に二十六年の歳月を閲し郷土の印象も記憶も徐々に薄らぎ、故郷の夢を懐かしむことも減つた。昨今、当根室市に於いて北方郷土史編纂を企画され長く後世に伝えらるゝと共に、領土返還運動の関連資料とされる意図によりその執筆の委嘱を受けたが、幸に当市には択捉島同郷の同志諸彦も在住多数あつて、今回はこれ等各位の御助力を受け史実を断片的ではあるが出来る限り集録記述したつもりではあるが、企画の趣旨の一助ともなれば本懐とするところである。

私の両親は青森県人で、父は明治三十二年（一八九九年）頃に当時まだ弱冠二十四歳の漁業労務者として択捉島紗那村に渡島し二十八歳位までの四、五年間は毎年春五月に渡島し、秋十一月頃に郷里に帰るといふ所謂、季節労務者として出稼ぎしていた。當時は函館が択捉島の経済圏の中枢を握っていた関係から函館港を基地として、二、三百トン級の機帆船に乗り片道航海は十日より十五日位も要して渡島したものだったと語っていた。

当時の紗那村は主として、青森、秋田、宮城等の東北六県の地方人が移住者の大部分を占めていたらしく変つたところでは鹿児島県の方が三、四家族程移住していったという。

その後、父は内地で結婚し、明治三十七年（一九〇四年）に両親揃つて青森県より択捉島へ渡島し、そのまま紗那村に移住越冬するようになり、その年の明治三十七年（一九〇四年）に私が紗

那村で誕生したのである。

当時の住民生活の根柢は、ほとんど大部分の方が漁業に関連する労務に従事しており、その頃の択捉島には和歌山県紀州の住人で、栖原角兵衛氏の後裔が連綿として択捉島の漁業経営を後継され、時に事業の消長ありと雖も、終戦時には択捉島漁業株式会社と改称した。

択捉島の定置漁業者は戦事の臨戦態勢に則り産業報国の立法趣旨に基き、大同団結して初代社長は栖原家第十三代目の栖原忠雄氏が就任されて、新発足したものであるが、おしくも敗戦の犠牲として漁業の宝庫択捉島と共に海域権を失い国家的損失犠牲からみても全くはかり知れないものがある。

択捉島の主産業

択捉島の主産業の九十%まで水産業であり、鮭鱒漁業を主体に当時は全島に亘ってさけますの定置漁業が主体となつて生産を揚げており、その他太平洋沿岸地域の千島のり、長切昆布等の生産は代表的なものとして著名であった。たればかに、花咲かに等も当時は無尽蔵といわれたものである。

私が当時勤務職場であった、択捉漁業会社の前身合名会社栖原商店は、択捉島の西海岸北はシベトロ村より、南は内保村字丹根崩部落まで、西海岸全域に亘り、サケマス、まぐろの定置漁業を経営していた。

実際は全く独占企業的な傾向を示していたものである。

従つて私も職場の関係上、会社の人事配置の転換が頻繁に行われるため、北はモヨロより南は丹根崩まで二十年間の勤務中に、西海岸全域に亘って歩かないところはない程、隅無く歩いたものである。

さて、まず漁業に次ぐものは、捕鯨事業であろう。択捉島の捕鯨事業は、西海岸、即ちオホーツク海側二カ工場と太平洋側に一カ工場あり、それぞれ経営され西海岸の二カ工場の内、内岡村は、日本水産株式会社の経営で他の一カ工場（有崩村）は現在の④太平洋漁業株式会社の前身⑤林兼商店が事業経営にあたっていた。

太平洋岸は単冠港内年崩港にあり、これも日本水産株式会社が経営しており、いずれも一カ工場の捕鯨頭数は五百頭乃至六百頭位の捕鯨頭数があつたと記憶している。

当時の紗那村財政の唯一の財源は独立税と称し、濡れ手に粟の大型税収源で、内岡、有崩の両捕鯨事業所より徴収する捕鯨税のみで、当時の村長は将来は捕鯨税一本で村の財政が維持出来る時代がやがて来るだろうと期待していたようである。

それからこの捕鯨会社で思い出されることは、さすがは政治性の強い大資本会社は、先の読みが違っているナァーという点で驚いたものである。それは太平洋戦争が日本の敗戦に次ぐ敗戦で本土決戦一億玉碎などと言われていた、昭和二十年（一九四五年）七月頃である。これまで例年通り択捉島で操業していた捕鯨事業所三つの工場とも、七月下旬になると各工場とも急拠操業を中止

して従業員の本土引揚げを開始したのである。

この理由の一つは、北洋海域が米潜水艦の出没が盛んで、操業が極めて危険になったという理由もあるだろうが、敗戦が決定的なものとなり千島列島は、やがて戦場となるか、あるいは日本が、これを放棄せざるを得なくなるのではないかという情報を読み取られたことに原因がある。択捉島は、やがて孤立無援、敵の侵略地域となるのであろうとの情報を得て、事業中途での急拠、従業員の引揚げに踏切ったものであったと思う。やはり大企業は情報収集においても、また情況判断に対しても卓越しているナーと感心したものである。

その反対に我々一般島民は領土が侵略された後においても、尚且つソ連の侵略は一時的な平和進駐と解釈していたもので、やがてその内に彼等は撤退して行くであろうと、一方的な善意な解釈により、呑気な心境で抑留生活二カ年半を経過したことが今更甘い打算と、悔恨に悩まされ苦汁を呑んだ気持ちで甦って来る。

捕鯨事業で特に思い出されることは、鯨肉の肥料より発生する悪臭と鯨体から排泄される、残滓物それに解剖時に排泄される廃油血液臓腑物、それに骨類まで全部海中に投棄するため、附近の海岸は、これ等残滓物の流入で海岸に寄り上り、それが腐敗する腐臭で、当該部落は勿論、附近の人家や両捕鯨場等に挟まれていた。

本村紗那でも、この悪臭に悩まされ通しで、殊に根拠地の内岡、有蘭両部落の民家等は臭気が室内に充満しているため、外来の訪

問客等は短時間の滞在にも堪えられないと悲鳴を上げる状態で、衣服類には、この悪臭が自然にしみ付き、他村民と接触した際にもひん臆をかい、また戸内と戸外には蠅が充満して食事も録々出来ないという状態で、部外者は顔をそむける始末で、この公害とすべき状態が四、五カ月間位は続くのである。(冬期間は事業中止するため蠅も臭気も少なくなる)

当時としては、それが産業優先の国家方針で国民生活に及ぼすこれ等の公害は全然無視され、村民自体も、これが公害として国家行政に対する責任追求等の意識は全然なく、これも我々に与えられた運命なりと諦めていたもの。現代社会生活と対比する時、正に隔世の感ありで昭和初期、所謂、戦前は総てが産業優先で、社会生活も慢々ムードに組織化されていた点、今更ながら時代の変遷に驚くのみである。

漁業史展望

択捉島の漁業史を記録する上に、昭和四年(一九二九年)年のマス大々漁を忘れることはできない。この年は択捉島のみならず国後島も同様、有史以来の大々漁であったと云うことだが、特に択捉島は島全域に亘り沿岸一体にマスの群来で埋められたと言っても過言でない。

私は栖原漁業会社経営の老門村という部落で、サケマス人工孵化場新設のため勤務していたが、この年はマスの洄遊時期が例年

に比較して約一カ月位早く、五月中旬頃より群来し六月には極めて厚群が沿岸全域に亘って洄游したのである。

六月より九月まで四カ月間は、択捉島のオホーツク沿岸は群来するマスで埋まったという状態であった。

当時は沿岸定置漁業による漁獲方式が、漁業権として許可されていた時代であるから、現代の沖合海面の流網漁法による漁獲規模においては比較され難いし、また総生産量においては現代には及ばないと考えるが、兎も角、択捉西海岸一体に亘り四カ月マスの群が切れ間もなく群来し、各定置漁業者は昼夜の別なく押寄せするマスの群来と取組んだものである。

大部分が塩蔵による処理方法で、万事が人力による漁獲方式であるため、補充要員の充足が円滑に行われたことと漁業用塩の確保が充分に供給され、その外に鮮魚で冷蔵船に生販売が行われたし、経営者は実に驚異的な大々漁を示したものであるが、あたらしい群来を見ながら人手は不足、塩は補充出来ないという経営者は切齒扼腕して悔しがったものである。経営設備の完備された当業者は一事業所で二千石（三十二万尾）乃至三千石（四十八万尾）という漁獲水揚げを示した経営者は、相当数に上ったようであった。また小規模設備の経営者であっても従業員五、六名で五百石乃至六百石という昭和四年（一九二九年）は、一カ年で五、六年分位の水揚げがあったものである。

この年の択捉島の総漁獲量は八十万石（百石は四千貫）とも、また百万石とも発表されたように覚えていいる。

漁獲統計も択捉島水産会の発表と択捉三郡の村役場統計が大きく食違っていたが、村役場の三郡全島の集計は百三十万石と発表されていた。いずれが正確な数字であるかは判定もかなり困難であったが、昭和四年（一九二九年）度、択捉島のマス総水揚げ数量は優に百万石以上であった事は妥当な数字と史料される。

反面、販売価額は非常に安く、鮮魚相場は一尾安値五銭位から高値売りでも一尾二十銭位のようなもので、平均して十二銭位の価格が大部分であったように思う。

従って大々漁の割には経営者の利益は意外に冴えなかったものである。

このような沿岸洄游数量の増大に伴い、従って択捉島全島各河川のマス溯上数量も膨大な数に上ったものである。

当時私の職場は栖原漁業会社直営のサケマス人工孵化場の経営を兼務し老門孵化場の事業を担当していた。

同孵化場の収容設備数は、マス五百万粒、サケ一千万粒で、例年、老門川のマスの溯上成績は、あまり良い方ではなかったが、昭和四年（一九二九年）度は河口より上流十キロ地点まで、マス群のため川舟を漕ぐにも權に魚が当って邪魔になり、思う地点に舟を漕ぎ寄せられなかったほどでもあった。嘘のような本当の話があったものだ。

その他、各河川によつてはマスが、あまりにも川いっぱい詰まり、自然斃死する数が非常に多かった。そのため川水が斃死魚の腐敗によるところの臭気がひどく、全く使用不能となり、附近

のある地域は長期に亘って困難した。また増水して河川が氾濫することは択捉島の河川では極普通の事であったが、この年度は氾濫のたび毎にマスの群が附近の低雑草地帯や道路上に流れ込んでおり、減水したあとで、その流域の住民は大騒ぎしたのである。

その流れ込んだマスがほとんど斃死して、三、四日後には腐敗し蛆虫が発生し蛆と臭気で惨状となり、道路上も歩行出来なかった時もあり、択捉島のマス大々漁の一端をご紹介して置く事も無駄でないと思う。

択捉島の畜産業

択捉島の主産業の一つに、畜産事業も重視しなければならぬ重要な産業である。私の知っている範囲では蔭取郡と紗那郡との境界地点にポロスという駅通所があり、その経営者で佐藤政吉という方が択捉島切つての馬産王と言つても過言でない位の大畜産経営者だった。所有頭数はおよそ四百頭から五百頭生産されていたと思うが、経営者自身の佐藤政吉氏も自己の所有馬を的確に把握し得られてはいなかったと思う。

佐藤氏自身、幾頭いるものか見当が付かないと人に語っていたものである。

これが有名な択捉島ルチャル原野の馬産経営者、佐藤政吉氏の略歴で、根室のみならず北海道内でも牧畜業者間の人々ならルチャルの馬産王、佐藤政吉氏を知らぬ人はなかったと思う。

所有頭数も偉大であるが、その経営の方法が、また変っている。それは全頭数の九十%は、年中原野に放牧しっぱなしで春夏秋は勿論冬の最中でも如何なる猛吹雪の場合でも絶対に牧舎に収容して飼付けしないという方針を実行していた。

ルチャル原野は稀に見る牛馬の自然放牧に好条件を具備していたものである。その地点は太平洋側とオホーツク海側に挟まれ両面が海拔四、五メートル位の平坦な原野でオホーツク海側より太平洋岸までの縦断距離は約五キロ位のものだが、横巾の広さは、およそ十二、三キロ余もあり原野の随所に風雪を防ぐ小高い山峰が散在して恰かも天然の屋根を形成して居るようであった。

冬期間、猛吹雪等の場合、放牧馬は敏感に荒天を察知して、三十頭、四、五十頭の集団を組み風下の安全な山峰の裏側を探して、安全な場所に避難するという様な自然の風土に敏感な動物の本能により、自らを守り稀に見る自然条件の恵まれた環境と馬体そのものが、この厳しい災害に抵抗して生存できるような体質に長い年月をかけて馴致されてきた点、ポロス馬は択捉島に於ける畜産史上に稀有な歴史を示したように思う。

その様な天然環境により、ほとんど天然蕃殖ともいうべくして蕃殖されてきた馬匹のため、人間との接触がなく所謂、野生馬本来の性格がありほとんどが暴れ馬育ち。人間を見たら、すぐ逃げ隠れするという性癖をもっているため、偶々内地よりポロス馬を購入に訪れる馬喰うさんも二日も三日もかかって三、四十頭の荒れ馬を迫込に取込んで、その暴れ振りを見て手も付けられない暴

れ馬には購買の意欲を失い断念して引返す業者が多数あったように聞いている。

半面、経営者の佐藤政吉氏は逐年、馬産および馬質の改良に熱意を燃やして内地より種牡、種牝馬を購入して積極的に馬体を改良した。昭和初期頃にはペル種牝馬を配合した重挽馬の改良に成功しポロス馬の名声を道内外の業者間に相当高く知られるに至った事は、有名な話になっている。

佐藤氏は自分の馬の特徴などは勿論、大部分の馬についても判らず、他人の馬が混入していても、それは自分の所有馬と主張し毎年如く他の所有馬主とのトラブルが発生し、時には刑事上の問題までも起こすというような笑われない馬鹿げた話も稀ではなかった。

その年により非常に降雪量の多い冬や、それに二月三月頃の厳寒の時期に千島列島特有の所謂ブリザードが二日も三日も続いた時は疲労している放牧馬が集団で全滅している事も珍しくなかった。

その様な年柄には春五月頃になると附近部落の人々が総動員で放牧馬の総点検集馬を行う事が毎年の例になっているが、天然気象条件の最悪であった年などは、集めた総頭数の半数以下に減っている事は珍しいことではなかった。

その斃死している死馬を春先の融雪期、唯一の好食料として群がるのが山の親爺、即ち熊である。

ポロス原野は熊の棲息数の多いことでも有名だが、殊に気象条

件の悪かった冬に於ける斃死馬の多い春先には、この斃死馬を食料に求めて附近各地の山合より集まって来る熊の数も相当多数になる。時には、生馬まで襲われることもあり、附近を通行する人間までも被害を受けることもあった。

嘗て昭和五年（一九三〇年）の夏頃、ポロス電気通信線路のポロス駐在公務員、赤岩忠義君が、受持担当区域の有線路巡回作戦中にポロス原野の真只中で熊に襲われて命を失ったこともある。

熊の多い択捉島であっても公務員が勤務中に熊の襲撃に遭い生命を奪われたという例は少ないが、ポロス原野は、このような熊の棲息上でも有名な話題が沢山あったものだ。

択捉島には、この外畜産業、ことに馬産業者は数多かったが、内保管内丹根萌の山田吉太郎氏も、ポロスの佐藤政吉氏に次ぐ多頭馬所有者で知られている。

この人も天然の地形がポロス原野に似た天然放牧馬の自然条件が好適していた土地環境であり、この地点は外部からはほとんど通行困難といわれるほど内保村より二十五キロ以上も遠隔の土地であり附近に村落がほとんどないというところだけに、丹根萌原野は山田吉太郎氏の独占地域であった。これも所有頭数にして、およそ二五〇頭から三〇〇頭位はいたように聞いていた。

やはりポロス同様粗放的な原始牧畜であり、自分の所有馬の的確な数は山田氏自身も全く知っていなかったということはポロスの佐藤氏同様であったと思う。

これらの馬を毎年一、二回位、内地から馬喰が買いに来るのだ

が、この時の馬を船積することは大変な難作業で人と馬の戦いだった。永年の馬喰稼業の玄人連中が十人位もかかって必死の集馬と、これを一頭一頭捕捉する作業は全く軽工師のような離れわざを演ずる様は全く見ものである。

荒れ狂う奔馬を捕捉して船積みする光景は全く西部劇を見ているような感じを受けたものだ。何しろ人間の姿を生れて二回か三回位より見たことのないという奔馬を広い原野の各地点より追いつ出して一定の追込場所まで引連れて行くのだから、その難作業は想像以上に困難である。

暴れ馬の一団三、四十頭の集団を三方面から騎馬で囲みながら、目的の場所まで追込もうとするのだが、なかなか馬は人間の思い通りには行かない。隙をみては別な方向に逃げだそうと必死に逃げ廻るが、そうさせじと人間の方は山坂断崖、それに湿地帯等あらゆる難地点を逃げ廻るため追う馬も人も疲労するが追われる荒れ馬も最後はヘトヘトになり、遂に人間の施しわざに屈して目的地点まで連れて行かれるということになるのだが、そこで集馬して暴れ馬の一団を木柵の中に追込んでからが、また難作業である。

この中から買人が欲しい馬を選別して一頭毎に現物を捕捉しなければならぬ。狭い木柵の中に入れた暴れ馬は、暴れほうだいに暴れ逃げ廻る。頃合を見て熟練した専門の馬扱人は、細い丈夫なロープを使って功みに投げ縄をかけ一頭ずつ捕捉するのだが、人間を見たことのない馬は必死に暴れ逃げようとする。その

馬を投げ縄にかけ離しはせずと、これも必死に追込の中の暴れ馬を引連れながら捕捉する光景は全く命がけの難作業だ。捕えた後はしめたもので、今度は首に綱を付けて別の場所に連れて行き、二日間位は水だけを与え、食べ物は一切やらずに絶食攻めにする。これには如何なる暴れ馬も降参する。船積みされる頃にはフラフラになり勿論あばれる気力もなく、扱人のなすままに船積みされる。

これが名物、ポロスの暴れ馬である。戦前、根室に上陸させた時、市内に逃げ出し遂に捕えることが出来なかったため、銃殺したという話も聞いている。しかし後年、馬質も急速に改良され関係業者の好に合った馬質となり、値段も暫時高騰してポロス馬の名声を拍したように覚えている。

酪 農

択捉島には馬のみならず牛の飼育も、かなり盛んに行われており、酪農経営者としては紗那村の宮下豊太郎氏の営農履歴も見のがせない顕著なものと思う。

宮下家も親子二代に亘って酪農家としては大正初期頃より専門酪農家となったように見受けられたが、所有牧草地として約四、五十町歩を有し、地理環境も紗那川流域に面した肥沃豊饒な最も優れている場所で、然も草地改良も積極的に実施されており、酪農基盤の確立に一家を挙げて取組んでいた。

その意欲は択捉島の畜産史上、稀に見る篤農家と称しても過言ではない。専門家と敬意を表したものである。

畜体の改良等も積極的に実施され、択捉島は古来よりほとんど種類は短角種が飼育されていたものであるが、宮下牧場は肉牛の体型改良に取組むと共にホルスタイン種乳牛の導入を実施して蕃殖に努力し、道内外にも乳牛生体移出の実績を挙げた。また半面、小規模ながら製酪業も経営され、択捉島で只一人バターの製造を実施して本道にも輸出し、さらに島内需要にも充分応えていたように思う。

飲用乳は勿論、紗那村全戸の需要に応じて村内保健への推進にも大いに貢献されていたものである。

飼育頭数も肉牛乳牛ともで、二百頭位飼育され、春五月頃より十二月初旬頃までは、搾乳牛以外は自由放牧で内岡原野とヤンケト原野等の国有林内に放牧していたが、家族全員、酪農専門に親子二代に亘って孜々営々として取り組まれてきた熱意には、我々村民も等しく敬意を表したものである。

択捉島の戦時統制経済

昭和十五年（一九四〇年）頃になり択捉島も序々に、戦時統制経済が実施されてきた。食料品就中主食は勿論、酒、砂糖等その他衣料品等も配給制度になり、これを統轄する紗那村役場の日常事務も、別途に平常事務の外に物資配給事務という複雑な業務が

増加されてきた。

私の実家は紗那村であったが、私は栖原商店から昭和八年（一九三三年）に北海道庁サケマス孵化場に転職して、当時サケマス孵化場に勤務していたが、昭和十五年（一九四〇年）頃になると国内の物資も序々に欠乏してきたため、物資の統制経済に移行した。私の家は、雑貨類食料品、酒、煙草の日用物資を販売していたが、商業も統制品が逐次増加するため、官庁への報告申請事務等も複雑になり、老人の両親だけでは経営も、なかなか容易でなくなつた。このようなことから、私に実家に帰り家業を継ぎ経営せよとの両親の申し出もあったため、昭和十五年（一九四〇年）五月に北海道庁サケマス養殖技術員を退職して、紗那村の実家に帰り、家業の物品販売業を経営したものである。

当時の択捉島は北方地域の防壁として、軍事施設を構築しつつあった関係で、天寧村は最も軍事基地の拡充強化を図っていた時期であり、島内各地区より勤労奉仕団の応募等も要請されていた時でもあった。紗那村にも天寧の飛行場基地建設に勤労奉仕隊の要請があったため、役場では私に目を付け紗那村勤労奉仕隊の隊長に物色し派遣しようと計画されたが、これを辞退するのに全く一苦労した。

これの交換条件として紗那村役場統制資材の配給事務を担当する役場職員として就職したのである。当時の村長は武田源五郎氏で、武田村長は私が就職して間もなく七月には、藤村与作村長と交代となった。武田村長は教育者出身の前歴ある人物で、六十歳

ソ連製浮游機雷の爆破処理

以上の年輩であったと思う。後任の藤村与作村長は、まだ四十歳の新進気鋭の生きの良い人物で、酒も好き遊びも、また好きな好男子、それに無類の美声で彼の江差追分などは、素人離れした逸品と聞き惚れたものだった。

当時の村長は漁業組合の組合長を兼職することが行政原則とされていた関係で、藤村村長が紗那村漁業組合の組合長に就任すると共に、私が同組合の主事に転向して終戦まで約三カ年間、紗那村漁業組合の一切を担当してきたのである。

藤村村長は昭和十九年（一九四四年）に西尾寿三村長と交代し、終戦村長として貧乏くじを引いたのは西尾村長であった。

西尾村長は戦時最中の昭和十八年（一九四三年）に就任したため村内の物資も極度に不足し、統制経済も完全に村民の意識に浸透していた時期でもあったから、終戦までの村行政等はあらゆる面で全く苦労されたように思われた。

当時、紗那村には北海道庁の出先機関で千島調査所が開設されていたが、終戦当時の職員は所長に坂井氏と外職員が二名程配置されていた。終戦前の昭和二十年（一九四五年）には嘱託員江田直衛氏一人を置き、所長始め他の職員は皆、終戦前に道内に引揚げており、この人達は終戦抑留生活の悲惨さは味あわずに終わったものだった。

私が紗那村役場職員の当時、一生を通じて忘れ得ない事件の経験がある。それはソ連製の浮游機雷が紗那湾沖合いに漂流していたものを日本水産内岡捕鯨場所属船が拾得し紗那港に曳航してきた。

早速役場、警察、警防団等と協議の結果、爆破処分をすることに決定した。処置には天寧海軍部隊より機雷処分の専門員を派遣されることになり、取敢えず現物を有萌岬のオダモイ浜の湾岸十メートル位の安全地帯に曳航留置した。一週間経過後、天寧の海軍基地駐屯部隊より専門処理員三名が到着して、愈々爆破する段取となったが、村内より立会人と留置現場確認のため人選を求められた。その結果、警察より一人、役場側より一人が立会することになった。

私が警防団幹部であった関係と役場よりの代表ということで同行することになり、警察よりは中村重一巡査が行くことに決定し、一行五名で小動力船に乗船して現地向った。留置場所は、すぐ分かり軍の処理員は一見して、これは支那事变当時、揚子江等の河などでよく使用していたもので、陷穽機雷と称し陸岸より導火線を引き、これに繋留し敵国の艦船が通過する時、陸岸より電流を通じて発火させて敵艦を爆破せしめる性能を有している機雷だった。従って本体に触角もなく只三カ所に電管充填らしい痕跡が認められたのみで、軍の処理班員は陸岸に引上げて解体の上、内

部構造を見るから我々に引上げ作業を手伝ってほしいと要請され、私達二人も渋々承諾せざるを得なくなったものだ。二人とも聊か危険を感じない訳でもなかったが、臆病風を吹かせる訳にもゆかないし、それに銃後一億総決起という諛い文句も横溢していた時でもあり、弱気を見せる場合でもなし、敢然と受諾し機雷爆破作業を応援することになった。先ず処理班は陸地を調査し導火線に点火し三分以内退避時間に安全地帯に逃げられるかどうかを綿密に慎重に調査し、安全を確認した後機雷の引上げ作業に着手した。それには先ず第一に機雷を繁留してあるロープを切断する作業であるが、最初機雷を現場に繁留する時は干潮時であったため、それに見合うロープを比較的短か目に使って繁留していた。

爆破当日は満潮時であり、繁留のロープが機雷の半分余を海中に引込む程水没して、綱まで容易に切断の手が届かない状態で思うように切断されずに困難している内、海上のこともあり大きな波が寄せる度に船が動揺して機雷に船が衝突を始めるので、ひやひやしながら見ていた。二、三分経過した時、突然大波が襲ってきたので、これは危ないんじゃないかと思った瞬間、一大轟音と共に我々五人が乗っていた小舟の三分の一程が破壊されて吹飛び、五人共が一瞬にして海中に投げ出されてしまった。

あとで分かった事であるが、その時の爆発は機雷本体の爆発ではなく機雷の信管が船体の接触による振動で爆発を起したもので、ロープ切断作業中に見ていたところ機雷本体の上部分に直径二十センチ程のナット締の蓋があり、その周囲をゴム管で水の流入を

防止する装置が施されてあったものが、ゴム管の一部が外れ、その箇所より海水が侵入して炸薬が湿り本体の爆発を誘引しなかったものと軍の処理員が語った。が、不思議に一人の死者もなく、ただ軍の処理員のうち、一名が脚部と手かなりの重傷で、あとの二人は手と胸に軽傷程度に終り、中村巡査は脚に二週間程度の負傷だった。

私は全然無傷であったが、一瞬の内に五人とも海中に投げ出されアップアップという内に軍の処理員が、さらにまた本体爆発が起きるから急いで安全地帯に退避せよと叫んだ。五人とも漸く岸边に泳ぎ着き岩山の蔭に退避した。その内二、三分経過した頃、処理員の一人が恐る恐る首を出して沖合を眺めていたが、「みんな見ろ見ろ、機雷が海に沈んで行く」と言うので私達も恐る恐る見たところ、その時には既に海中に沈して只アブクだけで機雷は爆破と同時に海中に沈没したものであった。それから二、三分位は五人とも一言もなく沈黙し全くの虚脱状態であった。そのうち、序々に九死に一生を得た実感が湧いてくるに従って、私と中村巡査の二人は軍の処理員に対する不信感が爆発、憤満を彼等三人の処理員に対し徹底的に惨々悪態を浴びせかけ、八つ当たりしたものである。その夜は中村巡査と二人で一晩中、痛飲して奇跡の生還を祝福したものであった。

師団経理部に塩蔵マス代金の請求

昭和十九年（一九四四年）の三月頃、天寧の現地駐屯師団経理部より紗那村漁業組合に部隊兵員の食料に必要であるから、塩蔵マスを納入するようにとの交渉があり、価格は塩蔵マス一尾当り二十七銭で契約し、第一年度は契約通り納品完了と同時に代金も受領した。

さらに翌昭和二十年（一九四五年）度も前年同様に契約を取交して、期日までに予定通りの数量を納入したが代金の納入が遅れ、再三支払交渉を繰返している内に八月十五日終戦となってしまうた。

組合員からは納品代金の清算を要求されるが敗戦となった今、我々島民の運命も果して今後どうなるやも予測されないところであり、組合員としては一日も早く代金の支払を期待していた。終戦とは関係なく師団経理部に契約通り納入品の代金請求すべきであり、軍としても当然、支払義務があるということから、私に直接師団経理部に出向き請求せよと、組合員より突き上げられたので、八月二十一日頃と記憶しているが天寧の師団経理部に出頭したのである。

ところが天寧の師団駐屯基地に到着して驚いたことには、日本皇軍の厳正な規律も何もあらばこそ兵隊の中に、真昼の中で、酒を呑み真赤な顔をして酔っ払っている者もあり、またそれを上級将校が注意も叱るもしないで見て見ぬ振りをしている始末であっ

た。

全く無法地帯と化し実に唾然としたものである。

私も急拠、経理部に出頭して用件の納入代金の支払を交渉したが、時既に遅しだ。今日皇軍は終戦となり一切の軍機能は停止した事情は諒解するが、金銭の支払は不可能であるから帰ってくれの回答では全く取り付く術もなく、その上更に軍は今日にでも敵国の軍隊が来て武装解除されるか、また時によっては戦火を交えることになるやも知れん。危険でもあるから早く退去せよと嚇かされ、代金請求もあらばこそ這這の体で経理部を退去したものである。

その時、師団経理部のある将校が私に言うには、我が軍隊は現地でこのまま武装解除されるか、或いは捕虜としてアメリカ本国に連行されるか（当時、軍はアメリカ軍が進駐して来るものと予想していた）、また、このまま天寧の山の中に武装解除されて越冬することになるかも分からんから、食料その他衣料品等は適正に保管確保して置かなければならんと思うから、兵隊には、この主意を軍命令として徹底させるようにせよと言っていた上級将校もあつた。

それから私は天寧の部落に下って一泊したところ、ここは、またテンヤワンヤの大騒ぎだ。

軍の暁部隊の海上輸送部隊は軍命令もあらばこそ部隊は現地兵役解除と称して、上級将校始め下士官兵隊は、我れ先にと部隊所属の大発動力船で母国北海道を目指して、自力脱出するという日

本軍の厳正な軍規統制も何のその、この敗戦という現実の前には、全く無力化し脱出組の中には、村民所有の動力船をも盗用して天寧基地より脱出する等その数も相当な数に上ったように聞いている。

兵隊の中には天寧港基地周辺には、盗用する船舶も皆無となったため年蒔、留別、あるいは紗那等に陸路脱出する者等も相当数見受けられた。

携行品等も私物はもとより軍毛布、衣服等初めは持てる限り持つて退去したが、陸路択捉島の悪路徒歩で脱出するのであるから、途中遂に力尽きて携行品を一部ずつ道路側に投棄しながら目的の部落目指してさまよい行く姿は、全く悲惨というほかなかった。同じ日本民族であり同胞、かつての皇軍の精鋭が敗戦という現実の前には、恥も外聞もかなぐり捨て、ひたすらに母国日本内地に帰らんとする姿を見て、敗戦の虚しさ非情さに強烈な印象を受けたことはなかった。

私は生涯を通じて、この現実は今なお目蓋の中に鮮明に焼付き消し去ることはできないと思っている。

兵隊の中には辛うじて目的の部落に辿り付いたが、脱出する船舶がないことや、内地よりの航海杜絶を知り、そこでいわゆる村民の家族として潜り込んだ兵隊もいた。

脱出兵隊も相当多数に上ったが、大部分の兵隊はソ連軍が進駐し島全域を占領した後、民間人と軍人とは厳重な詮議を行った際、身分が判明したものはソ連本国に送還抑留されたものである。中

には運良く民間人として最後まで一般村民として生活して島民の引揚げ者と共に解放された者もかなりの数に上ったように覚えている。

季節出稼労働者の抑留生活

捕虜の抑留軍人もさることながら、不幸な運命を背負いこんだ季節出稼労働者の内、一番みじめさを感じた人は択捉漁業株式会社の漁業従事者約八百余名である。

終戦後択捉島全域に亘って抑留される結果となり、会社事業所幹部五十余名、缶詰工場従業員の内、女子工員およそ六、七十名余り、漁業労働員六百名余り、その他会社従業員七、八十名余り、総計八百名位と推定される。

全従業員は八月十五日終戦と同時に一名の脱出者もなく、全員択捉島に抑留生活を余儀なくされる結果となったものである。

これ等の内、全くみじめな環境に置かれていた女子工員は年令二十歳より三十歳位までの婦女で、ソ連進駐と同時に部落住民に帰化して比較的身辺の安全を計ったりしたが、中には進駐当初にソ連兵に女子工員が山中に拉致され、銃剣を以って威嚇されて無惨暴行された事件等もあり、ソ連軍進駐当初は各地に、この種の事件が発生し戦争敗者に共通な悲劇は択捉島も例外ではなかった。これは紗那村で発生した事件であるが、ソ連軍進駐後約二カ月後の夜中、ソ連下士官一名が紗那村住民、牛丸秋三氏の妻女を主人

の留守を見定めて、襲ったものである。気丈な男勝りの妻女は激しく抵抗し辛うじて屋外に脱出したが、悪魔鬼畜のソ連兵は、なおも執拗に追迫り暴行に及ぼんとしたが、必死の抵抗に逆上したソ連兵は逃げる妻女に拳銃の乱射を浴びせて即死せしめた。

極めて悲惨な戦争敗者に共通な事件が発生したものである。殊に牛丸氏の妻女には二人の幼い子供があり、被害者牛丸氏の心境はもとより鬼畜兵の犠牲となって死亡した妻女の胸中を察するとき、全村民の同情は反射的にソ連兵全般に対する憎しみとなり、以来村民のソ連兵に対する警戒は一層強烈となり殊に適齢期の女子のある家庭は一刻も心の安まる日は無かったように思った。

このような事件を誘発した大きな原因は牛丸秋三氏の居住家屋の場所に大きな原因があった。それは牛丸氏の家屋の位置は紗那村の中心部より、かなり距離的に遠い紗那川向の一軒家に居住していた。隣家とは離れ、しかも家主の留守を狙つての兇行であり、平素我々も場所的に危険を感じていたものであったが、予想が不幸にして適中し婦女暴行の重大事件が勃発したため、我々村民もそれ以来この種事件の再発を繰返さないよう、ソ連軍駐屯部隊の責任者に強硬な抗議を行った。それ以来は引揚げ時まで、この種の事件の再発を見なかったのは僥倖であつたと思つてゐる。

択捉漁業株式会社も終戦時に在島の女子工員が、比較的不足であつたことも結果的には好都合であつたように思つた。

しかし、終戦時真近かに内地より逐次、増員部隊が補充されることが計画されていたということである。

その第二陣の増員部隊を乗船させた輸送船が、根室港外で七月十五日の空襲に遭遇、撃沈された浦河丸には女子工員が四、五十名位乗船しており、この時の空襲により大半死亡されたと聞いている。

なお、この浦河丸の遭難者の内には、択捉漁業会社幹部社員の木村惣助氏やポロスの馬産王、佐藤政吉氏もおり死亡している。その外、薬取役場上席書記の小野田正勝氏と別飛村の赤川氏の奥さんも子供二人を連れて乗船され、その遭難に合われたが子供二人は運良く救助されたと聞いている。この時の米機空襲による浦河丸の犠牲者は、択捉島各地に亘つて広範囲に及んでいる筈である。

ソ連軍進駐と治安状況

終戦宣言の詔勅発表後、十三日目の八月二十八日に敵国（ソ連）の艦艇二隻が留別港に入港するとの情報が伝えられた。

この艦艇の入港に対しては、事前に日本軍側と連絡の上で行われたものらしく、入港と同時に日本軍側より連絡の特使が急遽発せられて平和進駐となつたものである。

我々は隣村である留別村の敵国ソ連軍の進駐を、あるいは日本軍側と武力行使に発展するのではないかと、事の成行に異常な神経を費やして見守つたものであるが、意外にも、それが我々村民の憂慮に反して平穏な平和進駐に終り、先ずは安堵の思いに胸を

なでおろしたものである。

しかし、軍が上陸後の村民に対する軍兵の行動は必ずしも軍規律等も厳守徹底されていた訳でもなかった。

序々に民家に押入り時計、万年筆、衣料類等かなりの略奪事件も起きたようであるが、隣村留別村の出来事で時過ぎてから人伝えに聞いた事程度である。なお婦女暴行は女子二名あり、当時としては相当多くの被害を予想していたが（村内の婦女子はほとんど遠方の山中に避難させたりしたものである）二、三の被害程度に終わった事は僥倖であつたと、ひそかに胸をなでおろした思いであつた。

紗那村には、ソ連兵の留別上陸進駐後、三日目に軍兵十名程小舟艇で廻航し、初めての紗那村進駐を見たのであるが、人員が少数のことでもあるし、当日は主として郵便局、役場、警察等村内官公庁行政機関等の状況を調査して、平穩裡に引上げたが、それまでは毎日婦女子を男装させ、頭髮は男刈にして一見女子とは判別出来難いまでの変装させ随分苦労したものである。

その後、ソ連兵は日を追つて多くなり、頻繁に島内各地区とを往来した。トシリリ地区の日本軍部隊の武装解除には二、三百名程度のソ連兵の村内宿泊等もあり、婦女子に対する乱暴事件は無かったが民家に押入り、物品の略奪に悩まされた。

私の家は食料品、酒、雑貨類の商業を開店していたため、ソ連軍兵通過の都度と言つても過言でない位に押入られ、大被害を受けたものであつた。

ソ連軍兵の押込の狙いは、酒と日本煙草が第一で、次は衣料品中の靴下、軍手、タオル等。終戦当時、統制品類の配給と煙草は村内只一軒の販売特約店であつた関係で、その事を村内の誰彼より情報を得ての襲撃であつたように思っている。

煙草は当時まだかなりの数量が在庫してあり天井裏、床下、馬料草の中、燃料薪の中等あらゆる場所に分散して隠匿していたが、遂に馬料草と薪材の中に分散して隠匿した分を発見されて、全部略奪された。その上当時は配給統制品品であつた育児用の練乳二十四缶詰入の函六函と家族の衣料品の目ぼしい品、大部分を略奪された時は泣くに泣けない苦しみを味わつたものである。

殊に四女が生後二カ月余より日数が経っていないのと、母乳が全然分泌されないうえ、完全人工哺乳児であり、その哺乳の練乳が根こそぎ略奪されたのと、村内にはかなりの練乳必要者があり、それが全部略奪されたのだから私も困惑し事情を言うにも言葉が通じない。恐る恐る手真似で、これを持って行かれたら子供が死ぬから返してくれと練乳函に手をかけて取ろうとしたところ二人で私の横腹にピストルを突付け形相物凄く、わめき威嚇するのである。

これ以上執拗に食付いても無駄と考えたが、それでも七缶だけ取り戻し、他は全部略奪されてしまった。

その様なことがあつた後も度々押入り、家中を捜し荒らされるので、子供達が皆神経質になり、ソ連兵を見ると怯えて泣き親の私共も自然と卑屈になり、当時は毎日苦悩の日を過さねばならな

かった記憶が鮮明に甦ってくる。

そのうち、戦後ソ連軍進駐まで約四、五カ月位経過し、紗那村にもソ連常備駐屯部隊が配置されるようになった。

治安秩序も維持される様になった。またその頃には、略奪される物もなくなったので、非常に気が楽になり今度は逆に家族が如何にして生き延びて行く事が出来るかと、そのみが心配されソ連兵に家財を大方奪られたあとは至極呑気になったものだ。

私の家のみではなく、各商店とも統制品を販売している商店は大同小異、皆同様に略奪の憂き目は見ているが、私はソ連の略奪押込には神経を磨り減らした記憶がまざまざと沸いてくる。

ソ連軍政と民政

ソ連軍が紗那村に常時、進駐部隊を置いた最初は、赤線の入った軍帽をかぶっていた。(村民はこれを赤帽兵と呼んでいた)

この赤帽兵は、第一線で次はグリーン色の線が入った兵隊が入ってきた。

これは警備隊で主として後方部隊の軍であった。

初め紗那村には赤帽兵が五、六十余名が進駐し、一カ月位経ってさらに、青帽兵が七、八十名から百名位が紗那と内岡に配備され、それと相前後して二、三十名の民間人も移住してきた。

民間人は大部分中年以上の年輩者ばかりで、五十歳前後の男女

で夫婦者は極少ないようであった。

ほとんどが独身の男女で民間人が移住してきたことにより民政部が開設された。民政部員は十名位より、序々に増員され我々が引揚げの頃には二、三十名位になっていた。このころから段々我々抑留日本人家屋の徴発が始まってきた。

先ず手始めは、官公庁の住宅から明け渡しを要求され警察署は青帽の部隊司令部となり、次は役場が赤帽部隊の本部となった。漁業組合事務所は民政部の事務所になり、郵便局は通信部隊と衛生部隊等それぞれ日本人を追出して占領し彼等なりに使用し始めた。

我々が漁撈班組織の命令を受けたのが青帽部隊の少尉で毎月毎月の給料は青帽の部隊本部がある警察署の庁舎に行き、ソ連邦の紙幣で二十名分の現金を署名して二年間(夏期間のみ)支給を受けたのである。この頃にはソ連軍将校で五十歳位の年輩と思われる人が隊長で日本流に言えば、大尉の階級であった。

私もソ連兵が進駐して来るようになってから翌年二月頃、民政部命令で親戚の一族四人一組と同居させられた。

これに抵抗したり、また反対の意志表示しても、全然認めてくれない。

否応なしで従うより処置なしで、より以上の報復もあるのでその要求を入れて親戚の家族と同居、約五カ月余で、今度は家全部の明け渡しの命令があり、その頃には精神的にも敗戦国民になり切っていたので愚痴も未練もなく早速親の代から住み慣れた我が

家を即刻明け渡して、紗那川添の兵掘治作氏の網倉庫に移転したのである。

その頃の我々の一縷の望みは、家族全員無事に故国日本に帰りたいその一念のみで、その執念で貫き通してこれたと思っている。他の村民も市街地中心地帯の目ぼしい家屋は次から次と明け渡し要求が頻繁となり、私同様、空の倉庫や古家屋にそれぞれ転居させられた。所持財産も目ぼしい品物は略奪されるか、あるいは、ソ連民間人が欲しがっている物品は金銭で売却したり、物々交換したりで家屋明け渡しの時点では、家具調度品類のほとんどが無く、親子六人一間あればどうにか暮せる程度には、我ながら驚いたり悲しんだりしたものである。

ソ連民間人も終戦翌年の五月頃より逐次来島し我々が気付かない内に移住者数も増加した。移住民間人はほとんど言っていない程、着のみのまま人達が多く、家具類の如きは全然なく、大人も子供のダブダブの胸当て付きの作業衣を着ている者が大部分のようだった。

終戦二年目の夏頃より、軍人家族が移住してきた。軍人将校も佐官級が二名常駐するようになった。軍人家族は民間移住者と違い普通以上の服装をしていた。民政部の役職員や軍人家族等は週三回位は、夜間舞踏会を開き、軍人地方民間人も一堂に会してダンスを踊って楽しんでいたのが印象的であった。

学校教育

軍人の家族が移住するようになると、ソ連の学校教育が開始された。

教師は始め一人であったが、我々が引揚げ間近になる頃には女子ばかり三人で、最初は日本時代の郵便局庁舎の一部を改修して学校に当てていた。

生徒の数が日を追って増加するようになり、抑留二年目の五月頃には、日本人抑留生徒が使用している二教室をソ連側が強制収容した。日本人抑留生徒は屋内運動場と一教室だけの使用が認められ、辛うじて引揚間際まで学校教育は継続された。

ソ連側の学校教育も序々に軌道に乗り、引揚間際にはソ連の生徒数も二十名以上になっていた。

年令は日本の教育年令と同じ位で、生徒の体格が勝れているように見受けたが、十二、三歳位までの子供が通学していたように覚えている。

私達日本人は、その頃まだ学校給食などは全然聞かれない時であったが、当時のソ連は学校給食を実施していた。さらに給食の外に所謂おやつが一日何回か支給されると言っていた。

生徒も皆一様に質素な服装で制服等もない。女子にあつては、ほとんど色柄物の服を着ていた子供は見られなかった。

ソ連は第二次戦争を勝抜くために如何に大きな耐乏生活を行い、徹底的に戦争重点主義に国策を遂行し、国民生活を犠牲にして国

防第一主義に徹し切った点、軍民いずれを見ても頷かれる点が理解された。

日本人に対する宣撫工作与漁撈班組織

抑留生活二年目当りからソ連側の民政業務が、我々日本人にも序々に浸透してきた。

日本人に対する労働報酬の支払、食料品等の配給、酒、煙草、砂糖等といった生活必需品の配給等、日本人抑留者に対する宣撫工作も積極的に実施してきた。反面、抑留日本人に対する作業労働も必然的に強制されてきた。

私は紗那村漁業組合の主事であつた関係で、ソ連軍駐屯部隊より村民二十名を以って、漁撈班の組織を命ぜられ、ソ連軍と民政部役職員に対して食料の魚類を供給するよう命ぜられた。漁船漁網等は日本人所有の在庫品を供与されて、定置建網を紗那湾沿岸に設置し漁獲に従事した。

然し命令は魚を獲る目的であつたが、それは単なる便法で主目的はソ連軍の物資輸送船が毎月一、二回程度、紗那港に入港する際、その積載貨物の陸揚作業の就役担当が本来の使命であつた。

この輸送船が紗那港に廻航すると昼夜兼行で陸揚作業に従事させられるのであるが、輸送船側では陸揚日時を示して限定し、必ず指定時間内に作業を完了せしめようとするため、海上が荒れている場合等は全く命がけの難作業となり、これを監視する兵隊は

銃剣付きで荷役船に乗り組んでいるし、陸揚貨物は重量ある物ばかりで、取扱いは容易なことではない。

作業日時が限定されているし、しかも銃剣付きの監視兵が同乗して酷使されるため班員は陸揚作業完了すると全くフラフラの疲労で、敗戦国民の痛憤をしみじみ感じさせられたものであつた。

しかし反面、輸送船入港のない平日は至極呑気であり、それに我々班員の給与が一般抑留者の給与額より若干優遇されている点が、せめてもの慰めであつたと諦めたものであつた。

陸揚荷物の中には当時の抑留者には最も貴重な砂糖とかミルク、バター、乾燥卵等、我々班員には欲しい物ばかりで監視員の油断を見ては少々失敬した。

中には監視員も共犯で公然と実行する等の余録もあり、要領のよい連中はソ連船が一回入港すれば、当分家族の生活に不自由がなかったという魅力があつた。

労働条件は苛酷であつたが反面その機会を大いに期待していたものであつた。

この輸送船も十二月以降は運航中止となり我々の漁撈班も一時的に解散となり、その後は一般村民と同様の作業に従事することになった。

働かざる者は食うべからずと言うソ連国共産主義の鉄則が、我々抑留者には厳正に苛酷に浸透させられた。私は冬期間、ソ連側の暖房用薪材の伐採作業を漁撈班員一行二十名と共に紗那山の山林に、朝は八時より夕方四時まで労働させられた。初めは実働

三、四時間位で一日を終えたが、我々があまり懶けるので、作業能率が全然挙がらず、遂にソ連兵の監視付きとなり、さらにはノルマ制となり各職場共通して抑留者の作業能率の増強に積極的な配慮計画によって、我々を使役するようになり、逐次作業も能率的となった。

引揚げる昭和二十二年（一九四七年）頃には各職場とも段々と使役条件に苛酷さが加えられてきた。

しかしソ連側が命令する作業に従事する限り賃金が支給されるので只働きということがない。なお昭和二十一年（一九四六年）末頃より、ソ連側の物資配給所も開設され、パン、バター、酒、煙草、スピルト等の配給も実施され、無償配給の時もあったし、有償配給の時もあったが抑留者に対する治安維持統制計画等も序々に軌道にのり、働く者は食うことには心配がないようになってきた。

ソ連女性の職場人としての活躍

私が抑留期間中、意外に感じた内の一つは、軍といわず民政といわず、あらゆる職場で女子の活躍が目立っていたことであり、この点には驚き、且つ敬意を表せざるを得なかった。

軍人としての女子は、紗那村に進駐した中で見たところでは、尉官程度であったが、病院関係の職場では大部分が女性で占めていたように見受けられたし、その他一般軍人を問わず重要部面を

担当している女性が特に目に付いた点、脅威を感じたものだ。

一般民政事業の職場では、あらゆる職場に女性の進出があり、海上船舶関係の作業員の中にも女性が乗り込んでおり、陸上は申すに及ばず、畑作業は勿論、女性が男子労務者を使役命令する立場にあるのが普通のことであった。

配給所等の事務作業員は全部女子従業員が担当していた。

紗那村には戦前古くから道営サケマス人工孵化場が経営されていたが、ソ連軍進駐後も孵化事業は戦前と変りなく事業を営み続けられていたが、そこにも女子従業員を派遣し事業継続の意欲を見せ、とくに女子従業員には積極的に業務習得をするようなシステムになっていたように思われた。

とくに驚き、また感嘆したことは択捉島内で隣部落までの距離は二十キロから三十キロ位あるが、ソ連の女性は部落間の移動の場合でも只一人で、熊の出没する山間をトランク片手に平気で、しかも徒歩でテクテク歩いているのには全く驚異を感じたものである。

これはシベリア等の広大な土地で生活していた、習慣性と文化生に恵まれない者のみが出来る、全く国民性による彼等民族は普通の事として行動しているようだが我々が見たところ全く大胆な至極無暴な行動として只々驚嘆したものである。

そしてあらゆる職場でも女子は、むしろ男性より重要な位置を占めている点も驚いた。

既にソ連では第二次戦争以前から男女平等の思想が、極めて強

力に普遍化されていたことは私も多少の知識もあったが、それが現実に彼等の行動を見、またこれ等の人間と常時接触するに当たって、その国民性の鈍重の内に秘められた強靱な神経思想には全く敬意を表するに吝かなく改めて認識を深めたものである。

引揚命令発表により樺太連行

私達抑留者の内地本国への送還については、ソ連人側の流言かあるいは我々日本人の想像するデマ、憶測の放言か、その出所については知るところではないが、抑留生活の当初から抑留者を喜ばせるようなデマ、あるいは失望させるようなデマで、悲喜全く混沌とした流言が常に発生して一喜一憂させられたものであった。紗那村の第一回の送還は抑留日時より九カ月目に発表されたが、この送還は年萌村と天寧村の二カ村が、全村送還であったが、その外の留別村や紗那村は一村で二、三家族だけの抽出送還であり、紗那村の場合は西尾村長の一家族外二家族位と記憶していた。この時の帰還者は年萌港より乗船する予定のため、陸路年萌村までの四十キロの遠距離を熊の出没頻繁な山道を乗馬あるいは徒歩での行程のため、所持品は極限される事になる。

従って帰還者は身廻り品のみの軽装で出発せざるを得なかった実情であった。

我々は今後、引揚命令を受けても、果して無事に引揚乗船できるや否や前途非常に不安を感じたものであった。

引揚命令者は、このような無理な引揚げを強要されたが比較的小家族構成であったことが、唯一の救いであったように考えられた。

かくして第一次引揚者はほとんど軽装で、周辺の所持品と少量の食糧品のみを携行して、徒歩で四十キロの道程を集結地の年萌部落へ出発したのであるが、果してこれ等、第一次の帰還者達は無事に母国日本に送還されているであろうかと内心、非常に不安を抱いていたものであった。

私達は第二次引揚者として、本国帰還後、真先に第一次送還の状況を尋ねたところ私達の憂慮した問題もなく無事に帰還していることが判り安堵の思いをしたものであった。

第一次引揚が実施された後は、ソ連側の抑留者に対する治安工作等も逐次秩序を保持され、食料等の配給も最小限の保証もされたが、衣料品、医薬品等の不足は日を追って急迫して来る状況であり、殊に抑留者の罹病と婦女子の妊娠出産等の問題には、当該関係者勿論、村内抑留者全員が薄氷を踏む思いで、互いの健康を守り無事を祈って過ごしたきたものである。抑留村民の中には不幸にして抑留期間中に発病し、遂に不帰の客となった者も数多くあったように記憶している。

択捉漁業会社その他、一般季節的雇傭労務者で内地より出稼に来ていた漁業関係労務者は全員抑留され、一般村民と共に生活を余儀なくされた関係で長期に亘る環境不慣れの寒地生活に健康を害し不幸にして母国帰還間近かにして病名も判らないまま死亡し

た者等、敗戦の悲哀をまざまざと見せられた事件は各所に散見されたものである。

私達が抑留生活を無難に生き抜くためには、第一に食糧の確保が何よりも憂慮されたが、我々抑留村民が終戦後敵国の占領下に支配され生殺与奪の権を握られ、しかも主食米穀類の非生産地である北限寒冷地の島嶼では到底、自給自足は不可能のことであるし、終戦時は自家蓄積貯蔵の備蓄食料を計算しても、精々二、三カ月の余裕よりなしとすれば、それまでに母国送還の命令ない限り、恐らく島民の大部分は餓死するであろうと、そのことが当面した第一難関であり、ソ連側の占領政策の圧迫や規制等より、この事実には不安憂慮に脅かされたものである。

しかしソ連側の占領政策も意外に早く、かなり計画的な民政安定対策等の計画が実現する可能性も認められ、抑留者の生活の面にも序々に配慮が実施されるようになり、食糧等もソ連側の命令によって就労する者には、ソ連製パン、バター、その他食料品の配給もあり、天寧地区の日本軍より接收された米を天寧地区より海上輸送して抑留日本人に配給する等、抑留者に対する生命保全にも積極的な施策が行われ、我々もホッと一息安堵の思いに胸撫でおろしたものである。

我々抑留村民はソ連側より毎日毎日と労役を課せられるが、その労働成績が悪いため、ノルマを達成出来ない者には食料を与えないと、よく嚇かされたものだった。

我々日本人側よりは食料を充分与えてくれないからノルマが達

成出来ないのだと、労役と食糧の点では彼我両者が毎日のように応酬を繰返したものだ。

幸いにもソ連側の「働く者には食わせる」の鉄則通り食料配給は実行されたので、一人の餓死者も出さずに抑留生活期間中も無難に過ごすことができた。

けれども、ソ連製の主食である黒パンには全く閉口した。パンの原料はコーリヤンの粉末であるが、製パン過程に於ける原料粉を醗酵させる酵母菌の作用中に生ずる酸味が強烈で、加えてコーリヤンの製粉が主原料であるため、原料より生ずるザラザラした口あたりのため空腹時であっても喉を通すのが、やつとの思いで、この黒パンだけは到底我々の常食に出来なかったものだった。

その反面、ソ連将校クラスは純白製粉の白パンを常用していた。共産主義国家でも階級制の強烈な一面を見て認識を新たにしたいものである。

ソ連民族と二年有余の抑留生活で、同居し彼等の生活様式、慣習、それに思想上の相違点等いちじるしく相反する民族と、殊に彼は戦争勝者であり、生殺与奪の権を握られている敗者は意識の上では反抗心を燃やしながらも忍び難きを忍び、祖国日本に帰れる日を待ち望んだものである。

抑留生活も二年経過し昭和二十二年（一九四七年）初期頃より我々の日常生活も序々にソ連式流に順化される傾向が出てきたが、反面またこの耐乏生活より開放される日が雲を掴むように全く五里霧中で寄ると触ると、この話題でお互いに沈滞した気分をまぎ

らわしていたものである。

ソ連側では、この頃になって我々抑留者に共産圏思想宣伝工作にソ連邦のニュース映画や思想宣伝のための劇映画等を上映し、毎月二、三回位上映して共産思想の普及工作を押し進めてきたものである。

日本人同士の集会はほとんど禁止されていたが、ソ連側は機会を求めて抑留村民を集めては思想普及の宣伝を行っていた。なおソ連側ではその頃、北海道本国はアメリカが半分、ソ連が半分に折半して占領しているので、お前達が北海道に帰ってもソ連を好きな者は、またソ連人と生活出来る等と盛んに宣伝していたものである。しかし我々は、小型携帯ラジオで本国のニュースを盗聴していたので、そんなソ連の欺瞞工作宣伝は信じなかった。

昭和二十二年（一九四七年）の春頃になると、ソ連側のデマ宣伝が頻繁に行われ抑留本国送還が近く発表されるとの噂が、どこからともなく流れてきた。

この報道が流れてくると共に、ソ連民政部の関係者や駐留軍要人は『お前達は近く日本に送還されるが、お前達引揚者の所持品の数量は一人十キロ位のものであるからソ連人が欲しがっている品物は今の内に食料と交換するか、酒、煙草等と交換か、またはソ連通貨で売却する等有効に処分した方が得策であろう』と宣伝がしきりに流されたものである。

我々もまた、引揚時の所持品は持てるだけ持って帰れるとは全然考えていなかった。それと引揚地点の問題もあり引揚地点が遠

隔の場所を指定された時は、一人十キロであっても老人子供等が大勢いる家庭では、それすらも容易でないのだから、ソ連側の引揚間近しとの宣伝が流れた時には、あるいはこれが単なる宣伝ではないかと懸念しながらも、いろいろ抑留中のソ連側謀略等に踊らされた体験を感じつつも、当面の抑留生活の不自由さ、あるいは引揚時の状況判断等により、我々は所持品の内からソ連人の強硬な要求申入等に負けてソ連物資と交換、またはソ連通貨による売却等によって目ぼしい品の処分は二、三カ月位で大部分は、ソ連側に買収された。しかし引揚命令は六月も過ぎ七月になっても発表されなかった。我々の不安は日毎に募ってくる。その時点で村民の作業ノルマも自然低下して来たし、寄ると触ると引揚の話題で実際に作業も二の次で稼働率も共に低下するため毎日のように各職場毎にソ連側とのトラブルが絶えなかったようであった。我々が組織させられた漁撈作業班も、抑留二年目にはソ連人の民間労務者と北朝鮮から移動の労務者が、次ぎ次ぎと入り込んで来て、序々に抑留日本人の各職場に代わって就労するようになり、我々漁撈班も昭和二十二年（一九四七年）五月にはソ連労務者と事実上の交代となり自然解散し一般村民と同様な労働に就役することになった。

その我々と交代したソ連労務者が、ある日、紗那川の下真中に定置網を建込み、紗那川に溯上するマスの群来を一網打尽に漁獲開始したのは驚きだった。

我々日本人は保護河川に溯上するサケマスは国家法律で厳重に

禁止されており、慣習に幼少の頃からそれを遵法してきた觀念が強く、ソ連側の傍若無人というべき措置には啞然としたものである。この方法はソ連の常套的手段であつたもので、ソ連国は海面の沿岸定置網建網は経営せずに、専ら河川での建網によつて経営効率を挙げている。ソ連邦共產主義国家ならではの国営事業であり、個人企業を認めないソ連邦にして、始めて実行し得る措置と肯定せざるを得なかつた。

八月ともなると紗那川にはマスの群が続々母国回帰の溯上が始まつている。マスには永遠に故郷があるが今我々はこの故郷を永遠に喪なおうとしている。ふと心の奥に一抹の感傷が去来する。この川とも、やがて訣別の日は遠くはないだろう。ソ連の漁撈班労務者は私の感傷も無情に無関心に只々マスの漁獲に専念している。置いてある物を持つてくる様に……。

扨掟の初秋は早く、我々の送還の話題もかなり濃厚となつてきていた様だ。私はその日に備えて、日常の衣料品の整理に不安ながらも子供達三人にも、それぞれ相応な別誂の手製リックを作製して準備に専念した。

九月一日午前八時頃、ソ連民政部より日本人部落長を通じて待ちに待った引揚命令が突如発表された。しかし全村民の引揚ではないと云う。若干の残留者もあると言われたので正式名簿の発表が行われるまでの不安は人事ではなかつた。幸いにも私の家族全員が引揚者名簿に登録されていることが判明して、一応は安堵したものの親戚の二家族が残留組に入り、この時ばかりは悲喜交々

全く複雑な心境に暗い思いをしたことは、二十数年経過した今でも脳裡深く甦り當時を追想し、胸の傷む思いを消し去ることができない。

私は、この引揚決定がされるまでは九十九%、母国送還が決定的であると覺悟していたが、半面あるいはソ連側で占領政策解決すれば、むしろソ連兵の引揚げが実現するのではないかと、一%の夢に等しい虫のよい執着がどうしても心の底から除くことができなかった。でも遂にそれも夢と消え去り、現実の我々は先祖の尊い血と汗で開拓した、この生れ故郷から永遠に去つて行くのかと思うと、あらたな愚痴が浮び出て、こんな馬鹿馬鹿しい戦争を日本の軍閥や政治家達は、なぜこんな負けるような戦争を始めたもんだろうなあと、率直に痛憤やる方ない思いに、しばし茫然と暫時、虚脱の状態におかれたことが思い出されたり、戦争に敗けたとはいえ、我々が祖先代々日本の領土としてきた生れ故郷を失わせるような羽目に陥る前に、外交交渉により解決することが出来なかつたものかと、今更當時を回顧して胸せまるものを禁ずる事が出来ない。

引揚命令発表と同時に引揚げ計画も発表され、第二次引揚者名簿も公表された。集合地点は紗那川向地点の扨掟漁業会社の旧缶詰工場の廃屋建物に収容すると発表された。

私は発表されるまでの不安、心配が集合場所にもあつたが、幸いにも市街の近距離に決定されたことは、せめてもの幸運と同志と共に互に喜び合つたものだ。引揚命令受領者は九月二日まで

指定集場所に集結するようにと命令された。

所持品および数量の制限も受けなかったことも幸いであった。

私は前もって引揚計画の既定方針通り、所持品数量の制限されないことを幸いに、夜具類と衣料品の梱包大小取混ぜ、十三個余荷造りし、子供達には各自リックに必要な品の外に若干の食糧類を背負わせて、九月二日午後二時頃、指定地に集合出来た。

引揚間近しと準備もさることながら、集場所に住居が近く、殊に紗那川の流域にあった関係から引揚荷物の運搬等には、船便で簡単に出来た事と私達の後に残留組が二十家族もあった関係で引揚作業に対しては乗船に至るまで、直接間接に援助を受けたことも忘れられない記憶の一つである。

引揚船の入港がソ連側発表予定より七日程遅れ、その間の引揚収容者は、旧缶詰工場の廃屋に入居して船を待つこととなった。

仮収容所となった缶詰工場の空家は、屋根が所々吹飛び、床板もなくコンクリートの床に藁を敷き、引揚げ者総数約六百名余と記憶している。私は、この収容場で三泊程度で乗船出来るものと予定していたところ肝心の引揚船の入港が意外に遅れたことにより、差当りの食事に困難したものである。三日目頃より残留抑留者より炊き出し、弁当の接待を受ける者、仮収容場で炊飯する者等、食糧類の調達にも苦慮する状況ともなった。

択捉島の九月は既に秋風が吹き荒れて破れ家の廃屋は容赦なく風は吹込むし、夜はかなり冷込んで来る。子供達の中には風邪に罹るものも発生し、我々も引揚直前に風邪に罹るようなことがあ

ったら大変と、三日目位より荷造りした夜具類の荷解きを始めた。大部分の収容者も荷解きを始め衣料品も次々と取り出し、また元の生活に逆戻りの生活が行なわれるようになり、敗戦国民の悲哀をあらためて身に沁みて感じたものである。

私も総勢六名で、子供は十歳を上に一歳の幼児があり親も子も一様に栄養失調的傾向にあって、どうにかここまで辿り着いたものの果してこれから先、親子六人、無事に母国に帰還出来るや否や、また幸いに帰還出来たとしても、その先の生活不安等、深刻な苦悩に収容場での夜は長かったが、無心な子供の顔を見ては、斯くてはならずと崩れる気持ちを振り起して、あらゆる難関を突破してきた、当時の心境は今不思議に思えてならない。

収容所に集結して一週間目、九月七日待ちに待った引揚船が紗那港に入港した。当時は天候も良く海上は上風で、時間的にも午前十時頃だったと記憶している。即時、引揚行動開始となり残留抑留者の応援とソ連民間人の協力を受けて、無事に引揚作業の完了は九月七日午後六時頃と記憶している。

我々が予想していた通り、薬取村と別飛村の抑留者が先客として乗船しており、我々を待っていてくれた。ここでも二カ村共、若干の残留者を出したことが判明し、互いに心を暗くしたものである。

無事乗船が終り、本船は午後六時頃、留別港に向け廻航したが、紗那港を離れんとする時、抑留者の大部分が甲板上に立って、母郷紗那の山川に訣別を惜み、遠ざかり行く暮色に霞む永遠の故郷

をしつかりと瞼の中に焼付かせ山紫水明に心行くまで、名残りを惜み最後の涙を流したものである。

墓標に訣別

引揚命令が発表された時、私は一生に再度この生れ故郷の祖先の霊に額衝くことはあり得ないものと考え、最後の思出にと紗那村の共同墓地の一隅に葬むられている、先祖の霊に訣別をと考えて、子供達と共に供養と礼拝のため出かけたが、行く途中随所にソ連警備兵の誰何検問に会い、漸く墓地に辿り付いた。僅か三、四カ月位の間に墓地という墓地は何処の墓地も同様に、墓標は抜かれ石塔は倒され見るも無惨に荒され、中には掘り返した跡も見られる墓もあり、大部分の墓標はその場に見当たらないという惨状には只々茫然としたものである。

二、三の知人も最後の礼拝に見えていたが、互いに、この乱暴狼籍には言葉もなく、ひたすらに敗戦の運命を呪、且つ祖先の霊にお詫びしつつ永遠に靈魂よ安らかにお眠り下さいと、祈りつつ子供達と共に訣別を告げてきたものである。

留別村と内保村の抑留村民の乗船

引揚船に乗船後は幸いに、海上風日和が続き紗那湾に碇泊中の

ソ連輸送船は次の引揚げ地である隣村、留別港に向けて午後六時頃出航した。秋の日は早や既に夕暮れて薄暗く、ソ連船は紗那湾の錨地を離れ午後八時頃に留別湾沖合に廻航した。引揚船はソ連船で七、八千トン級の貨物船で人間を積載する設備は全然施されていないため、我々乗船者は荷物同様に船内の船倉の中に混載されたのである。

ソ連貨物船に乗船の時などは、これもまた貨物同様、荷物をモッコの上に並べて積み、その上に人間が乗りウインチで巻上げられ甲板に降ろすという積載方法であったため老人、女、子供、驚怖のため泣き出す者もある始末、そばで見ると我々もまた危険にハラハラの連続で手に汗を握るばかりであったが、最後まで一人の怪我人もなく、引揚者、全員無事に乗船出来たことは天祐であったと考えている。

ところが船内は人間を乗せる客船と異なり紗那村引揚者は全員一番船倉の船底に、荷物の上に乗せられた。全く牛馬同様であった。最も困難したことは子供達が頻繁に用便を訴える度に、上部甲板まで十五、六メートル位の縄梯子を昇降することになるのだが、船体がローリングするものの、梯子は動揺するし下で見ている親達は都度手に汗を握る思いをするという危険が、二日間余続けられたには、どこの親達も全く声もないという状態であった。

それかといって中甲板部には、先客の別飛、薬取の引揚者が満員入り込む余地はなく止むを得ず船底から昇降して用事を足すという有様で忘れられない思い出となっている。

幸いに食事はソ連側で黒パンや、スープ類または米飯を支給し

てくれたので、この点では喜んだ。しかし、便所が仮の急造りのため女、子供は危険で使用困難であったことも記憶に甦ってくる。乗船後、翌朝船底から甲板に昇って見たところ附近の至るところに人間の糞便で歩く場所もない位で、これにも驚き且敗惨の悲哀を感じたものである。

留別部落抑留者の乗船は、八日の真夜中と翌九日の早朝から実施され、九日の午前七、八時頃までには予定引揚者の乗船収容を終り、次の寄港地、内保港に向けて出航した。内保は九月九日午前七時頃より乗船作業が始まり茲には内保部落民の外東海岸の具谷、入里節その他の附近部落全員を内保部落に集結していたため、かなりの引揚総員数になっており、相当長時間を要したようであった。幸い好風に恵まれたため各地での乗船作業も順調に進み一人の怪我人もなく全員乗船収容を終り、九月九日午後五時頃と記憶しているが最後の択捉島を懐しみながら敵国の貨物船に収容され思い出の尽きない生れ故郷の択捉の山よ川よ、永遠に見る事の出来ないであろう村よ、市街よ、万感胸せまる想にむせびながら齢四十三年の択捉島の生涯に訣別を告げたものであった。

引揚中継地 樺太真岡

引揚命令発表の時、抑留者は北海道本国に送還すると、ソ連側の発表があり、まさか樺太を中継地として母国に帰還されるとは

予想もしなかった。乗船後ソ連の船員が異口同音に本船は樺太に向けて航行中であると言っていたが、我々はこれを半信半疑で聞いていたところまさしく、ソ連船員の言う通り九月十一日午後一時頃、引揚船は樺太島真岡港の埠頭にびたり横付け繫留されたのである。

そこでソ連側より申し渡された命令は、本日の上陸引揚者は全員真岡中学校の仮収容所に集結すること。引揚者の荷物は真岡埠頭の倉庫に引揚者の部落別に区別して全部入庫すること。手回品の荷物若干は収容所に持参する事を認める。大体以上の如き命令が我々に通達されたその頃、真岡埠頭には樺太の日本人がまだ相当多数残留して、我々が上陸するのを待ち構えて引揚者収容所の状況等をかなり詳細に説明してくれた。

樺太では択捉島と同様、日本通貨は何の価値もなく、通貨は勿論ソ連国貨幣で流通されていたが、日用物資はほとんど日本製品であったことが、私の記憶に残っている。我々も択捉島引揚の際、ソ連通貨を若干所持してきたため樺太で食料品の購入等には非常に役立てることができた。抑留者全員の荷物の整理保管も一応終り、我々は家族と共に当座の衣料品や貴重品等を携行して、真岡中学校の抑留者収容所まで約四キロ余の行程を牛馬の如く、荷物を背負い、子供等にまでも着替の入れた荷物と若干の食糧と共に背負わせて、真岡中学校仮収容所まで遅い日暮の道を夢中になって歩いた事は、生涯を通じて忘れる事ができない印象が残っている。

真岡収容所では樺太島民の引揚者も相当数収容されていた。我々が入居した真岡収容所では先客の樺太引揚者より色々な情報ギャッチすることができたが、これが果して真実のものかデマであるか判断に苦しんだ。只一つデマに踊らされて今尚その軽率を悔いていることは印刷物や公文書類、写真類にソ連通貨等は、一切没収されるということであった。殊に印刷物とか公文書等の内容によっては、引揚げを延期させられるという情報には困惑したものであった。

私は漁業組合の書類等は帳簿類の外かなりの数量を持参してきていたが、この情報により万一不審に思われて引揚げを引延ばされたら一大事と、早速持参した書類写真等を一括して風呂敷に包んで真岡中学校のゴミ捨場に放棄した。あとで判った事であるが、それも大体デマに踊らされたもので写真類も今では貴重な資料になるものが沢山あったように思うし、書類等も貴重な記録類が沢山あり取返しの出来ない失策であったと残念に思っている。

真岡収容所には約二週間程度の滞在で母国引揚船宗谷丸に乗船し九月二十九日、家族全員無事に函館の埠頭に上陸し、二年有余の抑留生活より脱して母国帰還第一歩を印した次第である。

宗谷丸に乗船の時、印象に残っている事は真白な白米の握り飯に暖かい味噌汁の味と、次は乗船者全員の身体の消毒と所持品座席等のDDT粉末を頭の天辺から体内、特に頭部毛髪と衣服と人体肌にまで真白くなるまで吹きかけられ、しかも座席は真白になっている中に座らせられ、そこで食事をしたが臭気で胸が詰る思

いであつたことが今も尚、記憶に残っている。DDT薬品公害に社会的問題が議論されている現代社会に於いては若干無謀な行為を受けた感じが強かった。

奇襲基地 単冠湾

択捉島単冠湾は戦後は、北洋漁業の出漁船団の海上避難の拠点として、北洋漁業者にとって枢要な暴風時の退避海域として重視される場所であるが、戦前即ち大東亜戦争の発火点となつたところであり、日本太平洋艦隊のハワイ真珠湾攻撃の拠点基地として一躍有名になった港でもある。

北辺の孤島択捉島の単冠湾は第二次世界戦争が勃発するまでは択捉島東海岸太平洋海域に面した天然の不完全漁港で、茲には捕鯨事業基地があり、昭和初期頃より港湾の存在が業界に知られてきた程度のもので、明治大正末期頃までは無名の海港として何の存在価値もなかったところである。

千島海域は低気圧の墓場といわれる位、秋九月過ぎになると海上静穏の日は稀で月の三分の二は海上関係漁業も休止せざるを得ないという実情であつた。

従つて択捉島と内地（本道）との交流は十一月以降ともなると極めて困難視されていたものであつた。十一月以降になると例年既に降雪期に入り十二月には島内村々にも積雪があり寒気も大体氷点下の日が多く、時には零下十度以下にも下り河川、湖沼は大

部分結氷を始めてくる頃であつた。

昭和十六年（一九四一年）十一月下旬頃、本道より択捉島に向け航海する物資輸送の運搬船は何れも軍命令により十一月二十四、五日以降、択捉島各部落の錨地に寄航した。寄航地点では航海禁止の厳命が布告されたものである。

我々島民は択捉島初まって以来の椿事（ちんじ）でもあり、殊に年末も差し迫り、本道よりの越年物資の遅れに憂慮している時期でもあり、あと二、三航海位で来春四月まで海上輸送の船舶航行は自然停止する時期も差し迫って来ている時だけに、村民は驚きと困惑に憂慮し関係者一同事態の重大さにそれぞれ緊急善後策を講ずる等各村内は大騒ぎとなったものである。

なにしろ島民の半年間分位の物資を輸入するため青果物や野菜類の正月用品が非常に多量積込まれている時でもあり、この輸送船の航行禁止措置は輸送途上、日数の遅延等によつて生ずる品傷み等が相当多量と見込まれるためと、それに輸送船舶の燃料炭欠乏による積戻し事態の発生も心配され、正月用品の仕入時期でもある関係上、商店関係者は大恐慌を来したものである。

一般村民としてもこの時期は正月用品や越冬必需品をまとめて購入する時期でもある事から択捉島始まって以来の船舶航行禁止であり、時期的に最も悪条件下におけるこの措置、しかも軍命令という事であり我々島民が、とにかく臆測しても、てんで原因が分るものではなく、唯、周章狼狽するのみであつた。

十一月二十四、五日頃より単冠湾沖合遙かに日本の大艦隊が数

十隻舳艫相擁して海上遙かに望見されたものである。その内には超大型の一見航空母艦と覺しき艦種もあり、文字通り海上を威圧する如き陣容で単冠湾内外、遙かな沖合にも大型艦艇が停泊しているとの情報が伝わってきたものである。

私は諸用があつて隣村の留別村に出かけた時、紗那村と留別村境の通称小田登りと称する峠道から、行手遙かの単冠湾が一望に出来る地点では、見えるは見えるは正に海上を威圧するが如き、大小の艦艇が初冬の低気圧の荒れ狂う海上遙かにその威容を浮べている情景が手に取るように望見出来た。

私は瞬間、これは異状だなあと考えたが、また常識的に海軍の艦艇演習を始めているものと即断したものであつたが、これが日本の歴史を根底から変貌させる運命を背負つて来ている、太平洋戦争の発火点となつたハワイ真珠湾攻撃艦隊の隠密行動とは露知らず、これがやがて四年後には日本の運命を決定付けた太平洋敗戦艦隊の英姿であつたとは全く知るよしもなかつたものである。

この重大密命を帯びた策戦行動を遂行するため、択捉島と本道との航行杜絶を強制され島民は勿論、越年生活物資の遅れによる島民死活問題の心配やまたこれを輸送する輸送船等の損得計算等は無視されて、日本軍国主義の片道通行を強制せんとする国家指導者達に取つては何らこれ等の事態は痛痒を感じないところであつたろう。これに関して択捉島民の食糧物資を満載して来航した東春丸（二八〇トン級）は同時点での航行禁止の命令を受け取つていなかったため択捉島の西海岸の寄航地を順次荷揚げまたは積

荷して東海岸北廻りし、トシルリを過ぎ目鏡岩附近に差しか、つたところ、海上に待機中の艦艇の内、一隻が全速力で東春丸目指して直進して来た。そして、その艦上にはストップの信号旗が掲げていた。

間もなく軍艦から一瞬の内にカタターが降され、東春丸目指して漕ぎ進んで行った。カタター艇員は、全員半袖シャツ一枚の日の丸手拭いで鉢巻姿で荒れ狂う吹雪と波浪の中をも何のその意気込鋭く東春丸に漕ぎ進んで行った。

東春丸も海上時化模様のため次の寄航地年蒨に向け辛じて航海している時に軍艦よりストップ命令が発せられ余儀なく停船して待つ間にカタターの艇員は東春丸の船長に『艦長命令であるから船緊は本艦に連行する、東春丸はこの位置で命令あるまで停船緊留する命令に反しこの位置より移動したら直ちに船員は全員逮捕し、本艦に連行し東春丸は直ちに砲撃して沈没せしめる。』と一方的厳命で『船長の弁明は全然聞入れない。軍の布告命令を冒してこの海域に進行した船舶は、如何なる理由ありとも他に移動することは許されない。それが不幸にして沈没しても致し方ない。軍はあとで責任をとってやる』と船長は惨々油を絞られたあげく、東春丸はその位置に錨を下されて停船させられた。

約三日間位目、鏡岩の沖合で十二月の大時化と戦ってブリッチの窓は破られ戸は流されて九死に一生を得て漸く航海禁止命令が解かれ、単冠湾年蒨港に寄航したという。私が翌昭和十七年（一九四二年）の一月に再度、東春丸が年留利の昆布、さけ、鰯等の

昨年度積残した貨物の積取りに來た時船長と出会って、以上の様な話を聞き船長の不運に同情すると共に、既に開戦となった太平洋戦争の拠点基地となった太平洋日本艦隊の結集地点は厳秘の裡に隠密行動を起し、十二月八日、遂に世紀の太平洋海戦の輝かしい序幕となった。

捉提島単冠湾のハワイ真珠湾の奇襲攻撃は、日本海軍敗戦のスタートになり、日本の歴史を根底より変貌させた発火点となったことを当時の記憶を辿って綴った記録の一片である。

終戦の大詔渙発を聞く

大東亜戦争も一億国民総決起の臨時体勢も遂に我方に運拙く日増しに戦局は悪化し、遂に我が北辺の拠点防壁としたアリユシヤン列島の金城湯池アツツ島も我が国民の祈りも虚しく、山崎部隊長以下、総員玉碎のニュースが放送された。

我々島民も北辺の地、父祖伝来の地を死守すべく重大決意の下にあらゆる苦難苦闘に戦い抜いて今日まで辿り付いてきたものであるが、アツツ島皇軍の壮烈な総員玉碎の報道には我々島民も等しく寂として声なく愈々島民も、決断を強いられる期が迫って来たのかと恐怖感にさいなまれたのである。銃後、国民が等しく信頼し、期待した太平洋連合艦隊も緒戦の輝かしい威力は消し飛び、序々に前線を後退し、やがては主力艦隊の存在すらも国民の目の前から覆うようなじめな状態におかれるようになった。

そして、敵機は毎日の如く本土上空に飛来して無差別爆撃の傍若無人振りを発揮し始めてきた。

我が択捉島も敵の潜水艦が島周辺に頻繁に出没し始め、事態は極めて悪化してきた。時には白昼堂々と浮上して本土との連絡輸送の貨物船を攻撃し、沿岸の村落を艦砲射撃する等のことがあり、終戦の年七月二十四日には隣村の留別村に択捉島通いの日昌丸三百五十トン余の輸送船を砲撃して乗組員と乗客およそ百二十名余の内、死者三十名余を出した悲惨な事件もあった。

日昌丸は沈没し、敵潜水艦は浮上して悠々と日昌丸の周囲を至近距離にして廻り乍ら、乗客が海中に投げ出されて岸に向って必死に泳ぎ着こうとするところを情け容赦なく、機銃掃射を浴びせるという傍若無人振りを発揮し、これを陸岸より無防備の村民は、只無念の涙を飲みながら、眺めていなければならなかったのである。

しかしこの時、幸運にも留別村部落内には砲撃を受けなかったことである。この理由は留別村は地理的に海岸に砂浜があり人家を、この砂浜の陰に隠れて海上の敵潜水艦よりは部落の人家が見えなかったため砲撃を免れることができたものと信じている。

ともあれ、日増しに千島周辺の守りにも刻一刻と緊迫さを増してきた。遂に七月十四、十五の二日間、敵の太平洋艦隊の航空母艦を含む一連の編隊が、択捉島天寧飛行場周辺の軍事基地を攻撃するべく大挙北上したが、当日の千島方面は非常に深い濃霧に覆われていた関係で、敵は策戦を変更して、その身代わりに現在

我々が居住している根室町の七月十四、十五日の大空襲の敢行となったものである。

択捉島民としては、この時の霧が天祐神助であったともいえるのだが、爆撃を受けた根室町は市内全域に亘る広範な被爆区域となり、死傷者、家屋その他の損害は甚大となった。

それに加えて爆撃により火災の発生による損害は莫大であったと聞いている。もしこの日、択捉島が濃霧に救われなかったら、どうであつたらう。天寧の軍事基地は当然の攻撃目標とされたであろうが、島嶼に点在する各部落は当然、全島的に攻撃目標より免れることは出来なかったであろうし、我々も今日の生存は考えられなかったと想像される。

私は当根室市に引揚げ後、この当時の敵側策戦行動の裏話を人伝えに聞き慄然たる思いに総身に鳥肌が立つ気持ちで身震いしたものである。

その頃になって我々の目に映ずるものの総てが、敵側の物量に対し我が方のあらゆる劣勢は覆うべきもなく、我々は、その頃よく軍事訓練を受けたものであるが、それには竹槍訓練と、戦車に体当りの爆破訓練を受けたが、訓練の内に含まれる精神は理解はされるが、果してこれで、この戦争を勝ち抜くことが出来るのかなァーと赤裸々な心境に段々落込んで行き、毎日が極めて憂鬱にならざるを得なかったものである。

その頃の事であるが紗那川に溯上する、マスを我々村民に捕獲させ、これを煮沸し航空機用の燃油を製造させ軍部の需用に必ず

る様にと命令があつた。

従つて、この時点では軍需物資の欠乏は航空機燃油のみでなく総ての物資が既に底を突き生活物資また然り、主食類の配給は比較的島民は恵まれていたようにも思われたが、それでも村民は国有林野を開耕して、馬鈴薯作りに全校挙げて努力し、大いに主食の補に役立てたりしたものである。

前戦将校は、生死を賭して戦場に立っていることを考え銃後の我々国民も当然あらゆる困苦欠乏生活に打勝つて行くべきであるが、最早その限界が迫りつつあるように考えられ、時には焦燥感をどうすることも出来なかつたものである。

その頃さらには沖縄の敗戦も決定的となり、戦局は最早、本土決戦が現実のものとなるか、あるいは今度こそ千島列島より南下、決戦を挑まれるのではないかと、村民等しく憂慮焦燥に心の置きどころがなかつたものである。

八月十五日終戦宣言の前日、紗那駐屯部隊の主任将校が私たちの詰所となつている防空監視所に来て、この次は本土決戦だろうが、それ以前に何か重大な異変があるだろう。もうドタン場に来た最後の気配が感じられると語つて帰られたものである。

呪われの日、八月十五日の紗那は、どんより曇り風のない蒸し暑い日であつた。

朝八時三十分、通常通り漁業組合事務所に出勤して早朝から押かけられた組合員と生産物の本土積出しのことで話合つていた。

組合事務所の真向いが郵便局庁舎になつており、その庁舎内に無

線通信局舎が設置されていて、局員が組合の事務所に立寄り「今日十時過ぎの臨時ニュースで正午の全国ニュースの時間に重大放送が行われる」との予告放送があつた事を伝えて帰られたので、私も非常に気にかかり、向いの無線局舎に行き大勢の局員と共に放送を待ったものである。ところが定時刻となつて只今より天皇陛下が終戦の詔勅をご報送になります？。我々は瞬間、茫然となつた。待つ程に陛下の特徴ある抑揚と発声で終戦詔勅の莊重な玉音がマイクから流れて来た。そのお言葉の中に忍び難きを忍びというお言葉は、今尚私の耳にハッキリ焼付き、鮮明な印象となつて胸の傷む思がしてならない。如何に陛下の宸襟を悩まされたであらうことを拝察して、一同只々恐懼したものである。

放送が終つた後も瞬間、茫然とし同志一同、誰も彼も暫時一言も発言する者もなかつた。これが人間の虚脱した心理状態というのであらうが、皆一様に無言で顔を見合せ故知れぬ涙が止まらなかつたものである。稍々あつて同志の一人が皇統連綿、外敵と戦い當つて破れを知らなかつた日本も遂に敗戦国民の汚名を被ることになつたが、さてこれからが大変だろうナァと言われた。正にその通り、我々はソ連の侵略によつて、我々島民が父祖以来の生れ故郷を追放される結果とならうとは神ならぬ身の知る由もなく、大東亜戦争の勃発以来、択捉島は敵潜水艦の砲撃程度のもので身近に戦場としての危機感もなく、戦争は終つたと考えるが、我々は常に北辺の防壁先鋒隊として最悪の事態のみを想定した。

必死の決意とは裏腹に今日、戦争終結の宣言を天皇陛下の御詔

勅により、その歎びも束の間の夢、ソ連の無暴な侵略によつて我々島民が天佑なりと歎び合つた感激も一瞬にして粉碎されのみならず、親子二代で孜々営々として、築き上げた土台骨も根底より覆り父祖の墓石も私の生涯には見ることの出来ないであろう現実の運命には、神ならぬ身の知る由もなく、時折見せる夢にも生れ故郷の四季の思い出、山川の移り変り、少年時代の学校生活等尽きぬ思い出となつて今も尚、懐かしんでいる。

現住所 根室市平内町二の三八

元居住地 択捉島 紗那村

在島当時の職業 紗那村漁業組合職員



択捉島 紗那村協同牧場の光景

公益社団法人 千島齒舞諸島居住者連盟
戦前の北方四島写真収録集より



択捉島 紗那村 紗那市街高台より

公益社団法人 千島齒舞諸島居住者連盟
戦前の北方四島写真収録集より



アメリカ軍の進駐と思っていたのに、

苦しかった四年間の抑留生活

松 枝 昇 吾

まえがき

択捉島の終戦前後のことを、体験を通じて記して欲しいとの要請を受けたが、何しろ戦後も早や二十六年、記憶の薄れたところもあり、また、資料も不足で自分の住んでいた範囲で書いたことを、あらかじめご了承ください。

私の家は祖父の代より、択捉島ウタスツで漁場をもち、漁業を営んでおりました。

その漁場は鮪の建て網が主で、その他、鮭、鱈の漁をしておりました。

私が六歳の時、住居が函館に移りました。

昭和十六年（一九四一年）、日本は戦争に突入し、段々拡大してきたため、北海道庁長官は択捉島定置漁業の企業合同を命じ、その全製品を北部軍司令部へ軍納契約するよう、要請してきました。

そこで、昭和十七年（一九四二年）の春、資本金七百万円の択捉漁業株式会社という企業合同の会社が設立され、私は昭和二十年（一九四五年）六月社命により、紗那事業本部へ勤務することになり、択捉島紗那に赴任しました。

その時は、もはや戦局は不利で、終局に近づいているようでした。

根室から択捉島に向かうにも、危険を感じるような状況で事実、私達の後から択捉島に向かった漁夫の人達が乗船した船が、根室沖で米軍機により沈没させられ、亡くなったことは、皆様もご存知のことと思います。

終戦時の治安状況

忘れようとしても忘れることの出来ない、あの八月十五日の玉音放送を紗那村で聞き、日本の敗戦を知りましたが、在島してい

ソ連軍の進駐状況

た日本軍人は、まだ負けたのではないと言って豪語し、我々を部下のように叱咤し、放漫な態度を続けていました。

敗戦を知った以上、一刻も早く本土に帰ることを皆も望み、船団を組み、脱出しようと計画していましたところ、本社より、「島にとどまって極力増産につとめよ」との命令が入り、その計画も中止となり、再度網を建て、漁業を続け、増産につとめるよう努力しましたが、その時に脱出していたらということとは、後々まで残念に思われ皆とも話し合われました。

前と同じように仕事を続けているとはいえないものの、皆の心にある不安はどうしようもなく、消すことは出来ませんでした。

敗れた以上、敵国人が上陸してくるに違いない、アメリカ兵がやってくると思い、一時は島にいる女の人達は皆、頭を男刈にし、男装して山中に隠れたりしました。が、皆は不安を持ちつつも、ソ連軍が上陸してくるまでは、平常通り漁業を続けていました。

当時、私達の会社からは、幹部社員から女子作業員まで、全島に散らばっている者、全員合わせて八百人位の者が在島していたと思います。

そのうちに日本軍軍人の一部に現地解除があり、私達の漁場にも就職の依頼があり、若干名の就職者がありました。

人心は、やはり動揺し流言が飛び、一抹の不安は常につきまわっていました。

いよいよ脱出の機会も去り、絶望の色も濃くなってきた八月二十七日頃と思いますが、夕方になって、上陸用舟艇で入ってきた軍人は、思いがけなくソ連人でした。

今の今まで、米軍が進駐してくるものと思っていましたので、意外の思いでした。

上陸したソ連軍人は、将校二名、兵士若干名で、上陸するかしないうちに郵便局を占領し、通信を途絶してしまいましたので、各漁場との連絡は勿論、本土との通信は、この時からパッタリと途絶えてしまい、島は全く孤立してしまいました。

上陸してきたソ連軍人は、早速、漁場事務所、番屋、並びに民家に乱入し、家捜しを始め、私達に手真似で食事を要求してきました。三平汁をつくり、恐る恐る持つていきましたところ、毒見をしろと、これまた手真似で言うので毒見してみせたところ、安心して食べるということもありました。

そうこうしているうちに、漁場にあった全製品、食糧品一切、軍隊で貯えていた食糧まで全部没収してしまいましたので、私達は米一粒自由に出来ない生活をさせられることになってしまいました。

万年筆、時計等も珍しがって欲しがり、私も遂に取り上げられてしまいました。

ソ連軍は、当時まで在島していた日本警察官を使って治安維持

にあたらせていましたので治安状況は、悪い方ではなかったように覚えています。

日本軍は武装解除され全員、天寧の方に移送されてしまいました。

その後、日本の警察官も何処へか、連れ去られて行ってしまいました。

ソ連軍の実情

その後、逐次、ソ連陸上部隊が入って来て、島は全くソ連軍の軍政下になり、私の居住していた紗那にも常時、数十名のソ連兵が常駐し、夜は一步も外へ出ることを禁じられました。昼は従来通り網を建て、漁業に従事することを命ぜられ、漁業に従事していましたが、その頃は食糧事情が益々逼迫して栄養が取れぬ上、漁のある時は昼夜兼行にて、重労働をさせられるので、病人が続出しました。

犯罪を犯せば軍事裁判にかけられ、即日判決が下り、ほとんどシベリヤに送られましたが、中には、たいした罪もないのに言葉の通じないことや意志の疎通のため、シベリヤに連れて行かれた気の毒な犠牲者も出ました。

その人達は、その後どうなったことかは分かりません。

ソ連軍政から民政への移りかわり

その後、五、六千トン級の船で、ソ連民間人が入ってきました。委員長プカトーフ、副委員長ウルフ、工場長アレチカンドル等の首脳陣が、海も魚も見たこともない漁夫連中を従えて、島にやって来ました。

その漁夫連中は、南京袋に鍋釜を入れ、履物もはいているのか、いないのか解らぬようなひどい物で、着のみのままの様子でした。

漁夫たちは民家に、漁場に分散して住むようになり、一緒に漁業をするようになりました。

私はソ連人の監督者が我々日本人をあまりに虐待するので、若かった故もあり、しばしば口論するうち、とうとう、その怒りを買って別飛村に追いやられてしまいました。

別飛村に住むことになってからは、一般重労働を命ぜられ、それから引揚げて来るその日まで、重労働に明けくれる、苦しい日々を送ることになりました。

冬は薪切り、夏は漁場で船が入ってくれば荷役、それも昼夜を問わない重労働、重い物をかついだこともない方には、大変辛いことでした。

漁も大漁になれば、これまた昼夜兼行で魚の処理をさせられ、一日も一刻も早く本土に帰りたいと思わない日がなく、明日の生命の保障もなく、何とか生きて本土の土を踏みたいの一心で、只

黙々として、ノルマを消化するだけの暮しを送ったものです。

ノルマによって支給された給料は、食べるだけが精一杯の生活でした。

黒パンが主食、それに野菜、魚等で空腹を満たしていましたが、ひどいもので島民の人は何とか食糧と取りかえるものもあります。が、出稼者はそれが無い、本当にひどいものでした。

全島民には、パスポートが渡され、それを無くしては、どこにも出歩くことが出来ないようになっていました。

その内に、また冬がやってくる、流水が流れてきて、氷で港が覆われると、本土へ帰れる望みはブツリと切れ、また越年かと思えば、絶望以外の何物でもなく、只々、命を全うし帰国することのみ念じ、歯を喰いしばって、その辛さ淋しさに堪えていましたが、その繰返しを四年間続けることになってしまいました。

そのうち、今度は韓国人が五年〱十年契約で漁夫として多数入ってきて、我々と一緒に労働するようになりました。

韓国人の中には、日本語が堪能な人がいて、それからは通訳もこちらの思い通り相手方に通じてくれたため、大変都合もよく、中には東京の学校を出た人がいて、私も東京に遊学していたこともあったので話が合い、いくら心も和んできました。

四年の歳月は、島をすっかりソ連一色に塗りつぶしてしまい、漁も大漁つづきで、漁の方法もすっかりソ連人達が会得してしまい、日本人は、だんだん必要でなくなってきたため、帰還の日も近づきつつあることを、お互いに意識し合えるようになってきました。

島民の引揚状況

昭和二十二年（一九四七年）に第一次の引揚命令が出、老人、病人が引揚げていきましたが、大部分は残り、相変わらずの生活を続けていました。

明けて昭和二十三年（一九四八年）十月の初旬、突然、学校に集合せよとの命令が出て学校に集合したところ、待ちに待った引揚命令が出たのでした。

私達を引揚げさせるべく入港してきた船は、三千トン足らずの旧型の貨物船で、人間も貨物扱い同様でしたが、順調に紗那、留別、内保と次々に荷役も終り、島を後にしました。

長い間、汗と血で築きあげた漁場、今それを捨てて帰らねばならない、今一度来ることもかなわないであろう、島との別れに、涙が流れるのでした。

船が動き出しましたが、行き先は解らず、果して帰れるものやら、どうなるものか、皆の胸に不安がいつぱいでした。が、船は樺太の真岡へ入港し、上陸させられ、真岡の収容所で生活を送ることになりました。

収容所には南京虫が出て、夜もろくろく眠ることもできない、ひどいものでした。

一週間ばかり経って、待ちに待った、日本からの迎えの船が入港し、夢にまで見た懐かしい日本へ帰ることになりました。

引揚船名は白竜丸、その名前は今も忘れることは出来ません。

引揚船のタラップを上った時の、その喜びの気持、その感激は今後もズーッと忘れることはないと思います。

船中で班長にさせられ、引揚げの方達のお世話をさせていただき、船は一路函館へ向かいましたが、途中「しけ」のため、小樽に避難入港、十月二十三日、懐かしい函館へ帰ることができました。

残留島民の状況

全島民、全出稼者のほとんどが引揚げましたので、残留の人はないと思いますが、数名の女性がソ連人との結婚のため、日本国籍を離脱、残留しました。

あとがき

思いつくまま、書かせていただきました。

終戦後二十六年経ってしまいましたが、北方領土の返還が実施されぬままになっている実状は、口には平和をと伝えていながら、一方では軍事力をもって威嚇しながら、不法占拠しているソ連の理不尽な行動、このようなことがあって良いものでしょうか。私達は全財産を戦争のために犠牲にし、苦しい生活を送らねばならない、この現状、これに対して政府は何らの保障もしない、これで良いのでしょうか。

沖縄は本年還ることになったが、一体、北方領土はどうなるのであろう。日本固有の領土だと主張する政府が一体、私達に何をしてくれたであろう。

私達が戦争中、汗と血でとった鮭鱒、その他漁獲物は全て軍納せよと言って軍納させ、その代金まで払わない政府は一体、何をしているのだろうか。

勿論、ソ連が返還しないことは、言を待たないが、政府の政治に対して一言申し上げたい。

ここで全国民一丸となって、北方領土の一日も早く我国領土として返還されることを、全世界に対して訴えるのであります。

現住所 函館市松陰町七番十三号

現・択捉漁業更生協議会副会長

元・択捉漁業株式会社社員



終戦時の多楽島

三重齒舞会を結成、復帰運動に奔走

田 中 武

はじめに

終戦当時、齒舞群島の守備隊として軍官民一体となって、われらの島を守り、島と運命をともにしようと思っていた吾々であったが、……終戦の詔勅を奉戴して干戈を交えず、涙をのんで、ソ連軍の進駐を許したのであります。

シベリヤ抑留から帰還して二十数年の年月が経っても、島をばなした自席の念と、島の人々はどうなったかと案ずる念が胸をしめつけた。生き残った同志相寄り、相集い、三重齒舞会を結成して、ささやかながら北方領土復帰運動の小さい「ノロシ」をあげました。

根室を拠点として起った、北方領土復帰の切実な叫びを、たえず内外に訴え続けられた、たゆまざる努力が、ようやく国民世論の理解と認識をたかめて、本問題解決のための積極的な政府施策も、逐次講ぜられつつあることは、うれしい。去る六月二十三日、

朝日新聞の報道によると、二十二日午後、山中総理府総務長官と鈴木九平北方領土問題対策協会会長が、首相官邸に佐藤首相を訪ね、『北方領土対策本部』の設置を要望、「沖繩返還後の政治課題として、政府は北方領土問題解決に積極的に取組んでほしい」という要望書を手渡し首相も了承、沖繩の本土復帰の時点に合わせて、北方領土問題を扱う『北方対策本部』を新設することを決めたそうである。

現在、北方領土問題は総理府の『沖繩北方対策庁』の所管となっているが、来年四月あるいは七月に予定されている沖繩返還後、同庁は『沖繩開発庁』に改組され、沖繩に対する行政だけを取扱うことになる。そのため政府は『北方対策本部』をつくることにしたもので、「沖繩北方対策庁北方課」の仕事を『同本部』に引継がせるとともに、さらに活動を拡充させていく方針である。

新設の『北方領土対策本部』は総理府に置かれ、本部長に総理府総務長官、副本部長に総務副長官を、それぞれ任命されること

になっている。

根室市の北方領土復帰運動推進の一環として、終戦前後の記録集を発刊され、後世にその記録を残すとともに、北方領土復帰実現への世論喚起に資せられる企画に対し満腔の敬意と謝意を表するものであります。

当時の記録、陣中日誌、重要書類を箱詰めにして古別神社の地下に埋蔵したが、その後どうなったか、ソ連兵に掘出されて処分されたか、あのまま地下に眠っているか分からない。三年餘のシベリヤ抑留中、持ちものの全ては没収され、メモもノートも記録物は一切持帰ることができなかったため、資料が全然無いのが遺憾であります。ただ脳裡に強く印象づけられた記憶を辿って、指示された事項について以下、項目毎にお答えすることにいたします。

年経るとともに、とかくものごとは、まげて伝えられ誤解されて報道されがちですが、正しい姿を、ありのまま真実を伝えて認識してほしいものと切に思います。

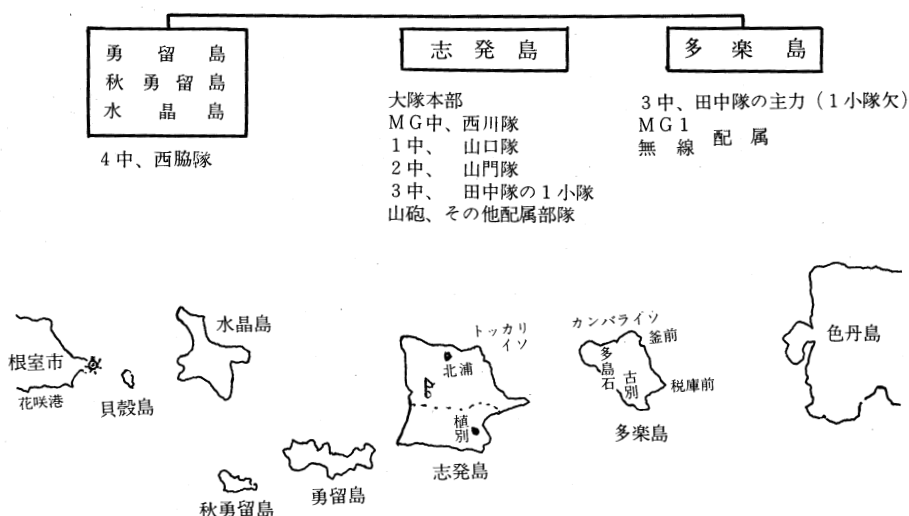
終戦時の治安状況

昭和十九年（一九四四年）、戦局は頓に悪化、いよいよ追いつめられて本土が危うくなってきた。

アツツ島は玉砕。……キスカ島は撤退。……

終戦当時の歯舞群島守備状況（色丹島にあった旅団の指揮下）

守備隊、独立歩兵第四二一大隊 佐藤部隊



北辺の守りもいよいよ急を告げた。本土防衛、本島防衛の第一線が泥縄式に増強された。もちろん玉砕覚悟の決死隊なのである。私ども、三重県で急遽編成された独立歩兵第四二一大隊は、昭和十九年（一九四四年）七月、現在の根室市北斗小学校（当時は国民学校）に集結、濃霧を衝いて、漁船に分乗し齒舞の島々に前進分駐したのである。

志発島には大隊本部、機関銃中隊の西川隊主力、第一中隊の山口隊、第二中隊の山門隊（植別）第三中隊の田中隊の一小隊（北浦、トツカリイソ）それに山砲隊無線などの配属部隊が駐在した。勇留島、秋勇留島、水晶島には第四中隊西脇隊が分駐、多楽島には第三中隊田中隊の主力がMG分隊、無線分隊の配属を受けて駐在、それぞれ島の守備に任じた。

志発島には日魯漁業の缶詰工場があつて、タラバガニやホタテ貝の缶詰が生産され、勤労働員された女子工員さんが大勢働いていた。

どの島も板子一枚浮かべた様な低湿なツンドラ島であるが、海岸の砂場は最良の昆布の干場である。海岸線に建ち並ぶ住宅、倉庫、トマヤは昆布の山である。砂場は昆布の敷ものを敷きつめて、足の踏み場もない。ホタテ貝の殻が高い山になって、真白な峰を連ねる。霧の晴れ間に百花爛まんの原野が広がる。

夏から秋に島は活気に満ち、立ち働く人々の顔も明るい。

豊かな海の幸に恵まれ、無尽蔵の昆布を採り、にしん、さけ、ます、たら、ほっけ、こまい、いか、ほたて等々季節、季節の魚

貝は何でも豊富にとれる。島の生活は、至極平和で豊かであった。艦砲射撃一発喰らえば吹き飛んでしまう島、爆撃一回受けたら逃げ場のない島、一瞬にして壊滅してしまうような板子を浮かべたような吾らの島も手を拱いているわけにもいかない。島の中は低湿なツンドラ地帯で手もつけられない。海岸の岸渚の岩磐に「タガネ」でコツコツ、穴を掘って洞窟陣地作りが根気よく毎日続いた。

射ちとったトツカリの脂を煮つめて脂油となし、石油代わりの灯明にし、油煙で真っ黒になっての作業である。

島の在郷軍人会、国防婦人会、青年団、総動員しての防衛訓練が、軍官民一体となつての無勝手流の体当たり訓練が毎日のように繰り返された。

忙しい生業の中から誰一人として「イヤ」な顔するものもなく、みな真剣な目を光らせて『島の防衛に、われらの島を守り抜くために、身命をなげうっても頑張らなければならぬ』と精神的な団結が強くてできていたことは事実である。今にして思えば全く不思議な位、よく一致団結したものである。

『軍規厳正』『至誠一貫』『滅私奉公』……私心をなくして誠心誠意、積極的に事に当り、規律正しい行動は、何をやっても一致団結して軍官民一体の実があがった。

『兵隊さんよ有難う。ほんとにほんとに御苦労さん』老人も子供も心から信愛の情を以て接し、自分の息子が、兄弟が他国の戦地で奉公する姿を、島の兵隊の姿に見立てて心から打ちとけ、

ソ連軍の進駐状況（多楽島に於ける）

親しみ、信じ合い、真に美しい一体の実があがったものと信じます。一年間の島守りは楽しく過ぎました。根室の爆撃火災を波越しに望見して、地団駄ふんだが……遂に島には一回も敵機は来なかった……。

八月十五日、終戦の詔勅放送を、かすかに聞いて、むせび泣いた。晴天の霹靂!! 動揺した。

『軽拳妄動を慎しめ』『軍規厳正にして軽拳妄動をつつしめ、引揚準備をして軍第五船団の到着を待て』の無線命令が次々に届き、すべてを観念して、心も冷静になった『これで玉碎せずにすんだ』『島も助かった。俺等も故国へ帰れる』ほっとしたような顔付きである。放心したような顔付きも見える。やるせない気持である。

でも軽拳妄動は慎んだ。妄動する意慾もなくなった。

とに角、環境を整理、掘り荒した陣地の復旧整頓に毎日が忙しく暮れた。

島の人々も明るい顔にかえって、生業に励んだ。もう防衛訓練もない。竹槍もいらぬ。昆布採りと、乾燥作業に黙々と働いた。今日は来るか、明日は入るかと期待した第五船団は遂に姿を見せなかった。

九月四日になってしまった。四日は軍人勅諭奉戴式なので田中隊では毎月四日に軍人勅諭奉読式を挙行していた。これが最後の勅諭奉読式となるので、同時に兵器返還式を執行して、陛下からお預かりした兵器一切を返納することにしたのである。

中隊長以下全員、完全武装も凛々しく、最後の軍装をとのえて、海岸の砂場に整列した。

天気晴朗、澄み切った初秋の空、輝かしい朝日が整列した着剣した銃列に映えてギラギラと眩い。目頭が熱い。これが吾が隊最後の姿かと感無量、声もつまる。

厳かな儀式の最中である……。

『敵の船が、カンバラ磯の岸へ着いた!!』

息せききった島民の知らせに、隊長は直ちに磯田兵長に馬を駆って現地偵察を命じ、儀式を続行した。

間もなく磯田兵長が先導してソ連海軍将校と陸軍将校二名が軍使としてやって来た。両手を高くあげたり下したりして『オドオド』したジェスチャーが、こっけいな位。

完全軍装、着剣した日本軍隊が整列しているので『どうなることか?』『射殺されるんじゃないか』と、さぞ不安な気持だったのでしょう。

山内少尉と板倉軍医の手真似、足真似、体全体のジェスチャー通訳で、『ただ今、兵器返納武装解除式の最中だから、全部終わ

るまで、しばらく待て：』と側の腰掛をすすめた。

分かったのか分からなかったのか知らないが、おとなしく待っていたので、最後まで厳然と兵器返納式を終った。

そして自主的に武装解除してソ連側に引渡した。

間もなく陸軍一個中隊が進駐して来た。学校は、まだ夏休み中だったので、小学校の一部を借りてソ連軍の宿舎に当てた。中隊長ウラヂミル中尉は極めて明朗闊達な青年将校であった。ジェスチャーと絵画による筆談により紳士的な話合い、交渉がなされて午前中にソ連軍の進駐が終り、小学校は異様なソ連兵でいっぱいになった。

ソ連軍政の実情（多楽島に於ける）

多楽島に於けるソ連進駐軍の行動は紳士的であり、軍規厳正であった。隊長ウラヂミル中尉の人格の然らしめる所以である。彼の言動は極めて紳士的であった。

玄関口で大きな声で『ブラスト』と挨拶。長靴を脱いで廊下に入る。必ずソックしてから私の部屋に入る。どちらが勝軍の将か敗軍の将なのかわからぬ、極めて紳士的な態度での応待は、言葉はわからないが意志はよく相通じ合い、絵描きジェスチャー入り筆談交渉もはずみ、当方の要望もよく理解されたようである。

島民の生命財産の安全を絶対保証させた。

みだりに民家に出入は厳禁。島民に対する暴力行為は厳禁。細

かいことまで長時間かかって厳禁事項を申入れて、島民の生業と生活の安全を確約させたのである。

理解あるウラヂミル中尉の部下の指導は、よく徹底しソ連兵の軍規は意外に厳正であった。

早速にソ連軍より、その日からの糧秣受領にやって来た。給与係楠田軍曹が大威張りで倉庫から缶詰や干パンや酒やタバコを出して給与してやった。『どちらが敗軍か判らん』と笑っていた。倉庫の鍵は日本軍が持っていたのである。

九月五日のこと

昨夜半、前の海で『イカ釣舟』が銃撃を受けた。銃声がけたたましく夜の海に響きわたった。翌朝早速、ウラヂミル中尉を呼び、厳重に抗議した。夜陰海上で灯火を点滅する舟群を見て、何事かと驚いて監視兵が発砲したとのことである。イカ釣が島民の生業である説明にイカの画を描いて判らせるのに苦心した。

九月六日のこと

ソ連軍から下士官が二、三名揃ってやって来て、手真似、足真似で『牛がほしい』と言う。放牧の乳牛が数頭、のんびり草をはんでいるのを見つけたのである。

『あれは島民の大切な財産だから渡せない』『どうしてもほし

いのなら、持主に頼んで売って貰うから、お金を持って来い』と断った。一旦帰った彼等は、やがてソ連紙幣を何枚も持ってやって来た。みんなから持ち金を出して集めて来た。これで売ってもらいたいとのことである。

仕方がないので飼主に話して一頭売って貰うことにした。

『たったこれだけの金では売れない。高価な財産だから、これからは絶対に売れない。一頭だけ無理に提供する』

恩にきせて一頭つれてやった。暫くしてまた、やって来た。手で首を切る真似をして、しきりに何かを訴える。『屠殺する人を、よこせ』というのである。『日本人には、そんな人はいない』と断ったが…。夕方になって兵隊四名で牛肉半身を担ぎこんで来た。『これを日本兵にあげるから食べなさい』と言うのである。気前よく半分くれたのである。お蔭で久し振りに、ほんとに何年振りだったか……全員すき焼のご馳走にありついたことを覚えている。

九月七日のいっ

朝になって急遽、ウラナミル隊長が駆けこんで来て、「今からすぐ、全員、船に乗れ、北海道に帰るのだ」と命令した。忙しいことである。

テンヤワンヤである。とるものもとりあえず、とにかく身の廻り品を持てるだけ持って、全員が浜辺に整列した。

人員点呼を終え、乗船地に向って肅々と行軍した。

後髪引かれる思いで、不安な目に、いっぱい涙をためて、『兵隊さん、お元気でね、体を大切にネ』と手を振り、振り見送ってくれた島の人々の『これから先』が案ぜられて気掛かりで、心配でたまらなかったあの気持は今も忘れることは出来ない。翌朝あけ方、色丹島沖で巨大な船に乗りかえ、択捉島、国後島、色丹島の部隊と合流、やがて志免、勇留、秋勇留、水晶の戦友も乗り込み船は北上して樺太大泊に入った。北海道を南に見て、『兵器を大泊に下して兵員は北海道に送ってくれるのだ』とアマイ考えで帰国を期待したが……間宮海峡を北上するのに気づいて『モウ駄目ダ』と奈落の底につき落された、悲観の極に達して動揺した。

北緯五十度線の対岸沿海州の『ソウガワニ』港に入港するや直ちに鉄条網張りの貨車に『ダワイ』『ダワイ』と押込まれて、シベリヤ抑留生活に入ったのである。

気掛かりの島や島の人々がその後どうなったのか。どんな処遇を受けたのか一切知らされず、知るよしもなく、二十六年の歳月は流れた。

苦しい捕虜の生活、痛ましい抑留生活の惨めさは言語に絶した。自分の体だけを持ちこたえるのに精いっぱいであった。気に掛る島のこと、島の人々の消息……

※ソ連軍政から民政への移りかわり

※島民の引揚状況

※残留島民の状況

など知りたくても知りようがない……。まことに申訳なく遺憾なが

ら、その真相を未だに知らない。

個人的には極めて善良な、さっぱりした、お人好しのようで、つきあいやすい彼等であるが為政者の指令、命令には絶対服従で融通がきかない。冷酷なほど何の容赦もなく、敢行するソ連兵だから残留島民に対してどんな処遇をしたか、気掛かりでたまらない。

確認できず申し訳ない次第である。

現住所 三重県多気郡明和町齊宮三〇二五の四
在島当時 北方派遣独立歩兵第四二一大隊隊員
現在 三重齒舞会会長



北 方 の 動 物 (その4)



ソ連軍上陸の偵察が、ソ連兵の道案内に

磯 田 嘉兵衛

多楽島加賀前分哨勤務

昭和二十年（一九四五年）八月十三日、私は分哨長として私以下五名、加賀前分哨一週間勤務に従事することになった。

分哨勤務は連合軍の監視は元より、目前に見える色丹島水道を往き来する日本輸送船、その他一切の船を監視、記録して毎夕、中隊本部「古別」（太平洋側にある港で多楽島の中心部で学校、郵便局、巡査駐在所、寺院等があり、廻送船が定期的に入出入りする、賑やかな町）へ報告するのが任務である。

加賀前は多楽島唯一の景勝地と共に、天然の良港で、根室港のように向かいには弁天島があり、カモメの繁殖地でもあった。

面白いことには、アブラッコ（魚の名）の釣針にコマイ（小魚）をつけ、その糸を石に結びつけ、カモメが釣れると高見所の歩哨が合図して捕獲し、料理して食べるのも楽しみの一つであった。

話が横にそれましたが、齒舞群島ではおそらく一番良い島だったと思う。

分哨の控所は当時、島民の蛇川さん宅のすぐ前のコンブ小屋を借り受けて、約三十メートル離れた見張台に、歩哨が交代して見張ることにした。

十三日、十四日はいつもと変わらぬ色丹水道を往来する船、および輸送船団があっただけである。

分哨控所には、よく島民の方達が来て我々に協力をしていただき、北方警備に軍民一体となり島を守った。

八月十五日、歴史的なご詔勅の下った日は、快晴にして海は果てしなく続き、遠く海原もくつきり見えた。私はいつものように近辺の海岸を巡察し、分哨小屋に帰つてくると同時に、島民の一人が青ざめた顔つきで飛んで来て、「兵隊さん、日本が負けた。只今ラジオで放送されました。」と息切れしそうに私達に知らせてくれた。

私達は一時、ただ果然と言もなく隊員と顔を見合わずばかり、直ぐ島民の方に、そんな馬鹿な、日本が負けることはない。それはいかの流言蜚語ですよ、と二、三回繰り返している間に、次から次へと漁民の方が駆け込んで来た。

そこで、容易ならぬことと予感したので、早速、中隊本部に連絡せねばならぬと、蛇川さんの馬を借り哨舎を出ようとした時、見張台の歩哨が大声で本部より馬で連絡に来たらしいと伝えた。

私は見張台に昇って古別方向を見ると、桐生小隊長が馬でこちらに向っていた。歩哨に、特に見張るよう注意して分哨小屋に戻った。まもなく小隊長が着き、全員集合するようと言われ、分哨小屋の前に五名整列して、桐生小隊長の話を聞いた。

島民が知らせてくれた通り、終戦になったことに間違いがなかった。

私達は、只々呆然とするのみであった。

「中隊全員は宮城に向かって棒銃の敬礼をしたから、お前達も只今より、宮城の方向に向かって行え」と申されたので、私の指揮で着剣して棒銃を行った。

小隊長は、しばらく気をつけて勤務に着いていて欲しい旨、言い渡して帰った。

張りつめていた気力がいつぱんに崩れ、ガックリと魂の抜け殻のようになった。

その夜、私は民家を見廻りに行くと、トツカリ（海豹）の油をホタテ貝の皿に入れ、幾つも恍々と照らして、いつもの笑顔でなく、何か寂しそうな気配であった。

私たちは夜間の歩哨も立てず、分哨小屋で五人、夜が更けるまで、アメリカ兵が上陸してくる話、また、家に帰れるだろうか、どうなるだろうか、不安と不審がつのるばかりであった。遠く離

れた故郷の妻子の安否が気づかれて思い浮かび、寝つかれぬ一夜を明かしたのである。

十六日は歩哨一人立哨させ、蛇川さんの馬を借り、中隊本部へ行くことにした。

中隊では、皆それぞれ身の回りを整理している者や、分隊長を囲んで丸くなり、何事か不安気に話をしていた。

私は中隊長殿（現在、三重齒舞会会長 田中武氏）に今後の任務を尋ねましたところ、多楽守備隊は大隊本部（志免島）よりの命令を待つことになっているので、勝手な行動をしないよう、注意を受けた。

八月十九日、私達の分哨勤務は一応打ち切られた。

直ちに、内地に送還されるものとの噂を信じて、戦争が長引くものとして大切に喰い延ばした米、缶詰、甘味品、その他の食糧、飯には三度三度、昆布をたくさん入れて食べた。

あとで聞いた話ですが、三年以上の食糧が各島々にあったそうである。

ソ連軍上陸の日まで、今までの後始末や、身の回りの整理におわれた。

その間、一隻の日本船が古別港に来て、島民の少数の方達が便乗、島から脱出する光景を目のあたりに見て、自分も何とかして、隠れてでも乗船したいと、その時は思ったものである。

既に二十六年経った今日、あの時に脱出して根室に帰っていれば、シベリヤでの永い抑留生活をしなくても良かったのではない

かと思う。

少数ですが、島民と一緒に脱出した兵隊もいたそう。

ソ連軍上陸時の状況

九月四日、天気も良かった。中隊は兵舎より少し上ったところに広場があり、ここで全員集合し、兵器の返納式が行われた。

返納式の最中、島民の一人が慌ただしく駆け込み、隊長にソ連軍の上陸を伝えた。私は後方に並んでいたので、言葉がはっきり聞きとれなかったが、隊長の顔色や、前に並んでいる兵士達の挙動により、何か重大なことが起こったことを察した。

その時、突然、隊長が「磯田兵長前に出よ！」と大きな声で呼んだので、思わず駆け足で隊長の前に出ると「命令！」「多楽石（島の地名）にソ連軍が上陸した。カンバラ磯を経て、多楽石台上よりソ連軍に発見されず、上陸状況を見て直ぐ報告せよ」と命令された。

私は突然、「ギョッ」と驚きましたが、直ぐ隊長に復唱して駆け足で、すぐ前にいた島民の馬を借り受けて現在地の古別をあとにして目標カンバラ磯へと突走した。

カンバラ磯までの道路は海岸沿いの堤防で、その道路を真つしぐらに走り、カンバラ磯の手前に来ると道がなく、斜め左に海岸を降りる所があったので、これを降りるや、いなや、ソ連軍の陸軍将校一名、海軍将校一名、兵士一名、計三名が目前三十メートル

ルのところにおり、対面となり、思わず手綱を引き締め、馬を止め下馬した。マンドリン銃を肩にかけた兵士が、直ぐ手に持ちかえ、銃口を私に向けつつ、三名が近寄って来た。私は、もうこれまでと覚悟をしながらも、それでも言葉が通じないので身振り手真似で、我が軍は、貴方達に無抵抗の意味を示し、海岸の砂地に中隊の位置（古別）を書くと、納得したかのように将校は笑顔を見せ、兵士に何事か呟いた。すると、兵士がマンドリン銃を肩にかけ、私が島民から借りた馬を無造作に取り上げ、素早く乗馬して、上陸地点へ向った。

将校二名は、私に手真似で「案内せよ」の動作をしたので、私は徒歩で二人を返納式を行っている中隊の方向（古別）へ案内した。

道中を無言で歩く将校たちと私、例えばような陰気で殺風景な、足は宙に浮いている思いで、ようやく中隊本部に着いたが、中隊では田中隊長以下、まだ兵器の返納式の最中であり、突然、ソ連将校二人を連れて来たので全員びっくり仰天、前にも述べたように隊長の命令ではソ連軍に発見されないよう、ソ連軍上陸の状況を報告せよとのことであつたので、一瞬にして冷え沈んだようだった。

隊長以下全員は、さぞかし驚いたことと思う。

言葉の通じない、彼我のことなのですが、幸いにして我が中隊の坂倉軍医さんがドイツ語で通訳され、兵器返納式も無事終った。九月七日、ソ連の兵士が私達を訪れ、「ヤポンスキー東京ダモ

イ」「ヤポンスキー根室ダモイ」と偽り、全員ソ連兵士達のマンドリン銃におびやかされながら、シベリヤへ連れて行かれたのです。

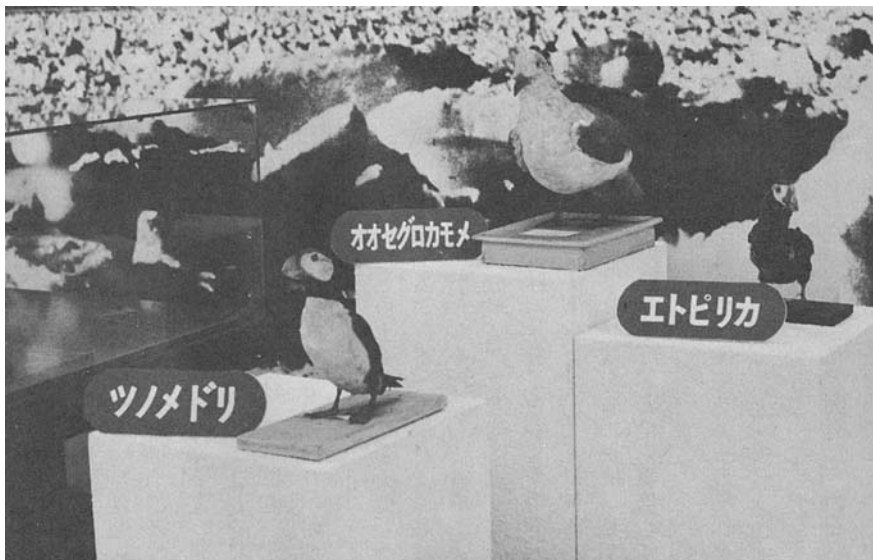
多楽島の名は楽しみの多い島だと、島民の方々が、よく言っており、一日も早く北方領土の復帰が実現され、平和な楽しい多楽島へもう一度渡ってみたいものである。

そのためにも、これから皆様と力を合わせ、復帰運動に取り組んで行く覚悟である。

現住所 伊勢市河崎三丁目七の六

在島当時 北方派遣独立歩兵第四二一大隊隊員（多楽島守備）

現在 三重齒舞会常任幹事



北 方 の 動 物 (その5)



守備隊の野菜補給基地であつた

志発島と多楽島

奥 井 泰 一 郎

昭和十九年（一九四四年）七月、独立歩兵四二一大隊が編成され、西川中尉以下約八百余名、三重県津歩兵三八部隊屯営を行先も聞かず出発した。

当時は軍の機密上、一切行先が明らかにされなかったので、果たして何処へ連れられて行かれるか、戦友も、まったく知らないのである。

夏衣シャツ一枚で阿漕駅より、上り軍用列車で東京を過ぎ、仙台附近を通過する頃、ようやく北方方面へ行くことを知ったのである。

北方領土へ渡り、その守備に当ることがわかったのは青函連絡船の中であつた。

折柄、アッツ島の玉砕が伝えられた直後であり、一同決死の心構えである。

札幌、旭川を経て釧路方面へ列車は向かう。民間の方々の色々の情報を耳にしながら、根室駅に着いた。

北方特有の濃霧の中に下車、一同夏シャツのため、震え上がった。

根室の北斗小学校を一時宿舎に当てられ、長旅の疲れを取った。早速、冬服の支給があり、十日余り滞在、警備地区各島の配置命令が出た。

その他、食糧および必要物資の積み込みの港湾作業の使役は何日か費やし渡島準備も終え、各隊毎に配船された船に分乗、田中隊は志発島の突狩磯に上陸、山ノ内小隊は田中隊より少し下った、北浦地区に配置されて警備することになり、兵舎は飯沢春吉さん宅の近くの家になり、早速、守備陣地の構築にかかった。

その外、海岸線の深浅の測量、民間との連絡にと多忙の毎日を経過した。

島の東西を結ぶ大きな軍用道路の開通も、軍民合同の協力により出来上がった。

現地では防空壕用材がほとんどなく、そのため、旅団命令によ

り各中隊から一名ずつ選ばれた者で伐採隊を編成し、国後島に派遣されることになり、田中隊より私が出向を命ぜられた。

小林少尉を隊長に下士官三名、兵一名、計五名が選出され、全員相泊に集合、番匠さん宅に一泊、各任務の分担割当が決められた。

本部より約一カ月の食糧、その他機材など必要物資を受領し、色丹島へ向った。

旅団司令部で土井少将の指示を受ける。

それによると、民間の協力を得て、木材の切出しから搬出までして、各島へ配材することである。

しかし、戦況の激化とオホーツク海特有の流水群の到来で配船があやぶまれ、止むなく中止の命令が出て、国後行きは実施することなく、志発島へ帰ったのである。

十五日余り色丹島に滞在したが、その間、特警隊の方に色々と色丹島の地形から産物まで、詳しく教えていただいたことが、何よりの収穫であった。

斜古丹湾は、とても良い漁港で、多数の船舶が一度に入港出来るし、波が静かで、軍にとっても重要港となっていた。

また、街には重要建造物が沢山あり、回りが山に囲まれており、景色も大変良い島であった。

島を中心に昔から、この海域は世界三大漁場の一つと言われており、魚の宝庫でもあることも知った。

戦況激化と共に、我田中隊は志発の警備を他の隊にゆずり、多

楽島へ進出し、河合隊と合流の上、守備に当ることになった。

それより先に方面軍により、長期戦に備えて食糧の確保、特に野菜に重点を置き、全千島の野菜補給基地として志発と多楽の両島が、その命を受けたのである。

農園自活班が編成され、私の外、数名の兵隊が担当することになった。

島には放牧馬が約二百余頭おり、野生馬と同じ様になっているので、先ず農園を馬に荒らされるのを防ぐため、土塀を急造した。作付総面積一町五反歩余りを、民家より馬や農機具、プラオハロー等を借り、さらに島民の協力により大農園が出来上がった。

一度に沢山の野菜の種子が届いたが、季節遅れのものもあり一同あわてた。中には南瓜の種など、かますに一俵も来て、これには少々困った。

六月中旬のことでもあり、あまり望みが持てず、先ずキャベツ、馬鈴薯、南瓜、ほうれん草を主として種を蒔いた。

その他の種は、試作として少しずつ蒔いてみたが、収穫は無であった。馬鈴薯、キャベツ、ほうれん草の育ちは良く、秋までには予想以上の収穫がありそうである。

その他の試作の種は寒冷地で、しかも時季遅れで、記録を取っただけに終わった。

八月十五日、終戦の報が伝えられたが、信ずることが出来ず、色々と情報を待った。

中隊長の訓示で陛下の詔勅を聞き、一同放心状態であった。

身の廻りの整理に追われていた九月四日、意外にもソ連軍が進駐して来た。古別小学校に赤旗が立ち、我方は外出禁止となったが、民家との連絡等は下士官が行った。

色々の情報が入った。時計を取られたとか、土足で座敷へ上がったとか、また、ある家では、おばあさんが婦女子の乱暴に備えて見張役となり、小屋の中へ昆布や枯草で囲い、若い女子に食事の差入れまでしていた。

幸い、その時は何事もなく済んだ。

ちようど島では「いか漁」の最盛期で、毎日夕方に漁し、夜遅く帰港する漁船の発動機の音におどろき、若いソ連兵が何かと間違えて発砲したことがある。

これは、幸い事故なく終わったが、勇敢にもそれに怒った漁民がソ連兵から、マンドリン銃をもぎ取り、家に持ち帰った。ソ連軍は我方に返還を申し入れて来たため、その漁民に頼んで銃を返してやったこともある。

名前は忘れたが、その漁師は、彼等を恐れて島で生活が出来るかと言って、また漁に出て行った。

次は兵舎の近くで乳牛を飼っていた竹隈さんから、ソ連兵がむりやり牛を一頭、安価で買い取り、今度は我々に牛を殺してくれると言って来た。

誰も手を貸す者がいないため、彼等が殺して我々にもくれたが、そのかわり「カルトウシカ」（馬鈴薯）をよこせと言う。しかたがなく我々が大切に作付けした農園より、かます四俵程掘り、そ

の半分をやった。

馬鈴薯は鶏卵大程に大きくなっており、キャベツ等も雪が降る頃まで置けば、実入りの良いものが出来たと思うが、懸命に増産した野菜を彼等に、むぎむぎと食べられると思えば無性に腹が立った。

九月七日、全員東京へ帰すとソ連兵より伝えられ早速、身の廻りを整理し、ソ連兵の指示に従い出発した。

我々の前後に監視兵が付き、蒲原磯を通る時、涙を流して我々のそばで「島はどうなるのでしょうか」「身体を大事にね」と見送ってくれた島の方々と別れたが、その姿が今も私の脳裏から消えていない。

多楽石（地名）に碇泊していた上陸用舟艇に乗船、国後へ向った。

沖合で一泊したが、北海道の知床半島より羅臼岳、斜里岳等も良く見えた。

しかし、国後島へは上陸せず、オホーツク海を樺太に向けたので、シベリアに連れられて行くのではないかと覚悟した。

大泊を経て少し行くと、前後に護衛艦が付いていた。

間宮海峡を通過し、ソ連領の沿海州、ソウガワニ港に入港した。上陸が始まるまで丘を見ると、我々より先着のドイツの兵隊が作業に従事していたのか、隊列を組んで元気なくいたのを見た。

以後、苦しいシベリア抑留生活が始まったのです。

抑留中には多くの友が伐採作業や、その他、馴れない仕事と気

候のため、凍傷と食糧不足で栄養失調になり、中には腹一杯食べたいばかりに毒きのこを食べて、一分も経たぬうちに死亡した二人の友もあった。

故国の土を踏むことも出来ず、シベリアの土となった多くの友の冥福を祈りつつ筆を置きます。

現住所 伊勢市船江二丁目

在島当時 北方派遣独立歩兵第四二一大隊隊員

現在 三重齒舞会幹事



北方の動物(その6)



終戦当時の齒舞群島の思い出

駒田 誠 一

この度、根室市より終戦前後の北方領土の記録集発刊に当たり、三重齒舞会に原稿依頼があり事務局長より終戦前後の島の状況について、何か寄稿せよとの命を受けた。

しかし終戦後、既に四分の一世紀を過ぎ記憶も薄れがちである。殊にソ連軍進駐と同時に島民との接触もなく翌日、島より連れ去られ、昭和二十年（一九四五年）九月より二十四（一九四九年）年七月までソ連に抑留されたため、記録も全部失いソ連軍進駐後の軍政、島民の引揚げ状況等は知る由もない。

北方領土終戦前後の記録としては、いささか焦点がはずれていて不適當と思われるが、むしろ我が部隊の記録在島時の出来事、終戦後歩んだ道を私の思い出として淡い記憶をたどりつつ頭に浮ぶままに綴る事にします。

昭和十九年（一九四四年）七月、サイパン島は玉碎し戦局はいよいよ熾烈を極める頃、我が独立歩兵四二二大隊は三重県久居町（現在久居市）に於いて急遽編成され、昭和十九年（一九四四年）八月一日根室着、色丹島の土井部隊（旅団）の指揮下に入り、八月二十日、荒天をおかし齒舞群島目指し出航したが、風雨と濃

霧のため島影見えす三三、五五やっと齒舞群島にたどり着き守備についた。

大隊本部は主力と共に志発島に、一個中隊は勇留島地区（水晶島・秋勇留島を含む）一個小隊は多楽島に配置された。

軍医は三名いたが、多楽島は最北端に位置し、冬期は結氷して連絡が絶えるとの理由で私は多楽島に配属された。

しかし勇留島も氷結するとの事で、人員の多い勇留島に三週間後の九月十三日転属になり、ここに十カ月間勤務した。

各島々共樹木はなく、一面の草原で標高も低く、多楽が一番の高所で十八メートル程度だが勇留島は四十四メートルあり、岩盤にて断崖あり、湾あり、海も深く防衛にはよい島であった。

実は島に渡る前、軍より島は無人島で樹木なく軍は穴居生活をせねばならない。その悪条件下に於ける兵の健康管理につき種々注意を受けて来たのであるが、軍の認識不足も甚だしかった。

島は人家・人口も多く島民は主に漁業に従事していた。

志発島には日魯のカニ工場もあり中々の活況を示しており好条件の下に生活が出来た。

部隊は防衛計画により各地区に分かれて陣地構築にかかった。

戦況益々我に不利となり本土決戦が叫ばれる頃、勇留島に於いても男子は防衛隊、女子青年は救護隊を編成し、夫々教育訓練を部隊より受け、軍民一体となり島の守りを固めていた。

また、時には寸暇をさいて島民と共に句会を催した事もあり島全体が一家一族のように緊密に結集されつつあった。

その頃、国後島の松野部隊の中に予言者がいて「日本は今に火の雨が降り敗れる。しかし後は返ってよくなる」と言っているとの噂あり、当時は馬鹿気た事と一笑に附していたが、この予言は後になり的中した。

島は食糧豊富にて、米等主食は二、三年分くらい貯えられていた。魚介類は無尽蔵に獲れ、草原には草花が咲き乱れ馬がたくさん放牧されていた。

ただ野菜類は少なかったが、白菜、馬鈴薯等は栽培でき、落、芹等その他の野草等も非常に多かった。

海藻類は昆布を主として、これこそ無尽蔵で島民は、ほとんどの人が昆布取を生業にしていた。また海岸に打ち上げられ腐った昆布等はカリ工場により焼かれヨードカリ生産の原料となり、沿岸のそこそこには藻を焼く煙が立ち昇り、のどかな風景もあったものだ。

部隊も持久戦に備え、食糧の自給自足態勢を整えるため、原野を耕し野菜類を栽培した。

衛生環境は非常に良く、隊には、ほとんど患者は無かった。

島には医療施設がないため、民間の診療にも当った。

冬期、或る小学五年生の男児が高熱、肺炎を起こし一旦解熱、軽快したが再発熱、膿胸を傍発し高熱つづき、手術を要するため根室へ移送して入院せしめることになった。

しかし島の北側（オホーツク海側）の湾は未だ結氷しており太平洋岸は良港なく船もない。丁度、島のこの部分は、くびれて北岸と太平洋岸の距離は三、四百メートル、ほとんど平坦な砂浜続きである。ここを北岸の浜に引き揚げられてある船を陸越しにする事になった。

多数の島の人々が丸太を並べて、その上を十数トンの船をこらして太平洋岸に移動させるのである。初めて見る思いもよらぬ作業であった。

翌日出航の予定であったが運悪く、風の都合で流水がつまり船を出す事が出来なくなった。日が経てば患者の病状が悪化し助からない。止むなく自宅で治療せねばならない破目になった。

当時、隊の医療器具は本部に保管されており勇留島にはメス一つなかった。万策尽きて船の不用の計器のぜんまいで鉤を造り、馬に用いる刃針を研ぎ鍋で滅菌して胸郭切開手術を試行した。

幸い次第に快方に向い、患児も胸のゴム管が呼吸するのを見て、敵潜水艦が来たら水にもぐってこれで吹き飛ばしてやる等の冗談を言う様になった。

また或る吹雪の夜、四四高地の監視哨（地下壕）の入口が雪に埋没し掘り出した事もあった。さらに同監視哨で火災を起こし兵

器を焼き兵隊が大火傷を負うという事件もあったが、治療半ばにして責任者の兵長は北海道に転属になり、そのことにより、その兵長は返って幸運にも捕虜をまぬがれる事になった。

南方戦線苛烈の中にあつて、北方千島方面はアッツの玉砕、キスカの引挙げ以来は比較的静かであつた。

昭和二十年（一九四五年）春頃、勇留島の太平洋岸にドラム缶、ブイ船の板切れ等で組まれた筏様のものが漂着した。

板には多数の弾痕あり船名も書かれてあつたが記憶にない。塩釜のものらしかった。多分、潜水艦にやられたのであろう。本部に連絡したが、その後は不明、それ以前は夜間、海上遙かにのろしの様な信号らしい光を見た。

北方にも何か無気味なものが迫ってきている様に思えた。聞けば択捉、色丹、国後間の水域に常に米潜水艦が出没しているとかのことであつた。

昭和二十年（一九四五年）五月一日ベルリンは陥落し、八日ドイツは遂に無条件降伏した。状況は刻々に動いており、軍としては南方の戦訓に鑑がみ、北方軍にも守備の変更がなされた。我が部隊に於いても志発島より一個中隊を多楽島に配備し、勇留島の中隊は一個小隊を残して六月、志発島に転進し守備につくことになった。

本部は三角兵舎にあり医務室も独立していた。

内地の無差別爆撃は中小都市に及び、部隊に於いても万一を慮り、全島民の血液型検査を実施した。衛生部に於いても傷病者収

容のための地下壕構築にかかった。

当時、樺太国境附近でのソ連軍の動きが活発との情報が頻りに報ぜられ、警戒を要すとのことであつた。

昭和二十年（一九四五年）七月下旬、珍しく快晴の日であつた。外に出て寝具類を干していて、ふと太平洋上を見るとトンボの様なものが二つ飛んでいる。

よくよく見てみると飛行機らしい。そのうち、はっきり見えてきたがまだ敵味方の区別がつかない。

と思う間に島の上空に侵入し、二、三回旋回、急降下銃撃を繰返し島の静けさを破った。次いで勇留島方面に飛び去り、勇留島上空を数回旋回、銃撃しているのが見えた。その後、根室方面に飛び去っていった。

約一時間後、島の南西部のウエンベツにある機関銃隊より民間に負傷者があり直ちに救援を、との電話あり、衛生兵と共に急行、途中海岸に一漁船が乗り上げて騒いでいる。近寄って見れば島の人々が数名傷つき一、二名船内ですでに事切れている。話によれば勇留島沖を航行中に銃撃され多数命中したという。

一部の人は叢の中に匍い出て、あちこちに倒れ呻いている。腰が砕け出血多量で瀕死の状態の人も見られた。

とにかく応急処置をすませ機関銃隊に行った。兵は丁度、演習に出て不在であつたため、兵舎の損害のみで人員に負傷なし、勇留島も無電により状況を知らせてきたが損害ない様であつた。

遙か根室方面（約二十六キロ）を見れば何か低く雲の様なもの

が流れている。よくよく見ると、はつきりしないが煙の様なものがゆるく立ち昇り静かに流れている。

かすかに遠雷の様な音もきこえる様に思えた。根室が爆撃を受けたのではないかと想像した。

翌日、根室より負傷者が来島したので話を聞くと、陸軍病院、北斗小学校も至近弾を受け、町は相当焼失したとの事であった。負傷者の中には腕に銃弾が残っている人もあり、取り出して見ると弾丸は薄い金属板で包まれ、命中すれば金属板が割れて傘の様に開き、弾丸の旋回と共に風車の如く廻り骨肉を砕く実に惨酷なものである。

昨日の負傷者の腰の碎かれたのもさこそと思われた。

島内は相当緊張し騒がしかったが、その後は空襲もなく静かさを取り戻した。

内地の空襲が日増に激しく、八月六日に広島に原子爆弾が投下され一瞬にして二十余万の死傷者を出し、街もほとんど潰滅したとの報道を聞いた。

八月九日長崎に第二の原爆投下、同日、ソ連は日ソ不侵条約を破って参戦し、大軍は怒濤の如く満州に進撃、と同時に樺太に於いても国境を越え南下進撃してきた。日本は南方の敗戦、内地の潰滅によりほとんど戦力を失っていた時、ソ連軍の一撃にあい、遂に力尽きた、が、しかし当時、千島軍は尚健在であったのである。

昭和二十年（一九四五年）八月十五日正午より重大放送がある

から一同聞く様にとの通報あり、皆沈痛な面持ちで聞き入った。

天皇陛下の玉音放送であったが雑音が多くはつきり聞きとれなかった。

或る者はソ連参戦のため、しっかりやれと解したといい、或る者は降伏だという。各まちまちの受け取り様であった。

暫くして日本は八月十五日ポツダム宣言を受諾し、無条件降伏したのだと分かった。万事終わる。ただ呆然、全身の力が急にぬけ去った様な気がした。

島の人々も仕事も手につかない様子であった。

戦況不利の最中であり勝つ事は困難な事であろうが、しかし何とかなるだろうと淡い望みを持っていた我々であった。

北方軍司令部よりは「軍は武器を整理し、ソ連軍に引渡すべし、軍は捕虜と認めず」と無電あり、我々は捕虜ではないと云う気持と、島は北海道本土の一部であり現に我々の宛名は北海道花咲郡歯舞村志免島であったという安易な考えにより、ソ連軍はここへは来ないであろうとか、例え来ても我々は戦っていないから武器を渡し帰るのだとか希望的な考えもどこか心の片隅にあり、島の人も比較的平静であった。

八月十八日、ソ連軍占守島に上陸開始との情報あり、一部抵抗した様であったがほとんど無血上陸、島伝いに南下している状況である。

その頃本年、士官学校を出た一青年士官が旅団の命令を持って着任して来た。

当時発表されなかったが、後に知る所によると「部隊は北海道へ転進すべし、輸送は暁部隊によるべし」とあった。これは終戦前に出された命令で色丹より根室に渡り船便を待つて志発島に着任した時は降伏後であった。

隊は器材糧秣等を梱包して、ひたすら暁部隊を待つ事となった。K中尉を長とする設営隊が北海道に先発した。

しかし暁船団は待てど暮らせど島に来なかった。そのうち、徴用されて暁部隊に所属していた人々が帰って来た。聞けば暁船団は既に解散しているとのこと、いくら待っても船の来る筈はなかった。

日魯の蟹工場には大きい船がたくさんあり、頼めば輸送を引受けてくれるとのことであった。

島民を残して引揚げるのも、島民の不安を思えばしのびない気持もあった。正直言つて今後どうなるのか予想もつかず混沌としていたのが実状であった。

北海道に於いては解散した部隊があるらしく、北方軍司令部は頻りと全員部隊に戻れと放送していた。

我部隊に於いては札幌に出張し、終戦後島に帰れず丸山部隊（終戦後、所属隊を離れて北海道に散在する将兵を集めて編成している部隊）に止まれと言われたが報告の義務ありとて断り島へ帰った経理の曹長があった。

また鳩教育のため、東京の学校へ派遣されていて八月十五日に学校は解散になり、いったん滋賀県の実家に立寄り一泊して再び

島に戻り部隊と共に行動した兵長もあり、当時としては敗戦という有史以来の出来事に全国的に混乱なすところを知らなかったのが本当の姿であった様である。

島民の中には婦女子や家財をまとめ北海道に渡った人も一部あったが、大部分は不安におののきながらも平穩に島の生活を続けていた。

九月一日ソ連軍は国後島に上陸してきた。

国後守備隊より頻りに様子を知らせてくる。遂に国後との交信も絶えた。多分、ソ連軍に占領されたのであろう。

我が部隊長も、ここに於いていよいよ北海道に渡る決心がついたらしく梱包を海岸に集積し出した。以前よりとにかく、北海道まで渡る様、度々進言したが武器を渡してから帰るのだと、その都度取り上げられなかった。

九月三日、ソ連の駆逐艦二隻が国後方面より進んてくる。水晶島沖に来て花咲半島（根室半島）との間を塞ぐ様に停泊した。万事休す。

暗夜ひそかに根室に渡る人々もあり、数人の兵も渡った様である。

他の島から頻りに情報を知らせと、指示を仰いでくるが、本部に於いても意見まちまちで的確な指示は出せそうもない。

九月四日であったと思う。ソ連の上陸用舟艇が遂に島にやってきた。我方よりは日大尉が軍使として白旗をにかけてソ連軍に連絡に行ったが中々帰ってこない。そのうち全員整列、武装解除し

武器を引渡した。

自動小銃（マンドリン）を持ったソ連兵は宿舍に入つて来て吾々の私物をしきりと物色している。時計等の目ぼしいものが欲しいらしい。

武器引渡しが終わると全員ソ連兵に付添われて東海岸まで歩いた。砂浜には上陸用舟艇が待つていた。

この間、島民はほとんど見えない。恐らく家の中でじっと息をこらし哀れな日本軍の姿に、自分達の運命を心配していた事であろう。

舟に乗ったが干潮のため動かないので下船し満潮を待った。運悪く雨が降り出した。皆天幕を被い砂浜の上にうづくまるもの、或は人家軒に一夜を明かすもの等そろる虜囚の哀れを感じた。人家には島の人もいたがおびえた様子で、ひっそりと静まり返っていた。

ソ連兵は暗夜の周辺を警戒し頻りと威嚇射撃をしている。

翌日は晴天舟艇に乗り込み、不安気な島民を後にして出航、根室へ根室へと騙されながら国後島へと向つていた。国後上陸。ソ連将校より、ここで一カ月手伝つてもらつて根室に帰すと言う。海岸を約一時間半ほど行軍し一部落に着いた。

瀬石とか、温泉が噴き出していた。各戸に日の丸の代りに赤い旗が出してある。よく見ると両端に紐が付いている御婦人ものものらしい。ソ連兵には何かわからないであろうが、おかしくもあった。

島の人々は何処へ行つたのかほとんど見ない。我々は立派な家に入ったが荷物は一つもない。引揚げられたのであろう。畳の上に疲れた体を横たえた。

二日目の夜、部隊長の大声が聞えた。「全員起床、部隊は直ちに根室に向つて前進せんとす」である。一斉に喚声があがり急ぎ外に整列、暗闇の中を元気に海岸を進んだ。往きとは異なり皆足取りも軽く早い。夜は明けた舟艇に乗り出航。沖には一万トン級の貨客船にソ連兵が乗つて待つており、その横腹に接舷した。今迄、半信半疑行動して来たが、もう駄目である。一万トン級の船が根室港に入れる筈がない。希望の綱も切れ果てた。

行先は何処か、カムチャッカか、シベリアか、船は一路北進する。国後択捉間の海峡を西進、オホーツク海に出て、また南下し始めた。ソ連の駆逐艦が前後を護衛している。

樺太大泊に着いた。ここにて他の船に移る。ここで多楽島部隊等、他の部隊と合流した。長い垂直の鉄梯子を降り船底に入つた。北の海とて相当冷え寒い、日本海を北進し沿海州が見えてきた。また真岡で給油し東京に帰ると騙されるが、もう信じない。やがて沿海州の港に入った。小さい港であるが水深深く自然の良港である。ソーガワニー港とか……

船上より見れば憐れな服装でドイツ兵らしい捕虜が歩哨に付き添われスコップを肩に作業に行く姿が見えた。

我々は戦わなかったから、あんな事はないだろうと言う者もいた。どこまで楽天家であろう。

三日後、下船いよいよシベリアの土を踏んだ。

これから永い苦しいシベリアの捕虜生活が始まった。

現住所 三重県安芸郡芸濃町大字林二〇六一

在島当時 北方派遣独立歩兵第四二一大隊隊員（多楽島守備）

現在 三重齒舞会顧問



北 方 の 動 物 (その7)

昭和二十年（一九四五年）九月志発島上陸

当時の日誌より

四二部隊中村隊指揮班内

出口

操

一、荒波越えてはるばると

孤島の守り来て見れば

われら迎えし撫子が

岸边にぱっと咲いてゐた

二、志発島の平原に

北方守るつはものが

天幕露営やり乍ら

今日も任務の壕を掘る

三、汗を流して十字鋤を振る

つはものどもの両肩に

波のしぶきが花と散り

故郷の海をしのばせる

四、波を枕に床に付きや

遠い故郷の母ちゃんか

幕舎の夢に会いに来て

笑顔姿ではげましぬ

五、肩にかけたる無線機に

名もなき花を飾りつけ

すさぶ心を柔げて

今日も孤島の守備につく

昭和二十一年（一九四六年）七月二十五日

シベリヤにて

一、千島をい出て船に乗り

東京ダモイとだまされて

着きし処はシベリヤの

其の名もかなしいソウガバニー

二、戦い敗れし武夫の

末路は哀れシベリヤの

無人の原野に今日もまた

上衣をぬぎて斧をふる

三、吹けよ秋風海を越へ

便りのかわりにくれぐれと

伝えておくれ父母に

元気でゐたと頼みます

四、白樺林を伐しゆく

馴れぬつとめのピリピリを

いたわるものは唯一つ

肌衣にふれる風ばかり

五、降る零下の四十余度に

くべた「ボイラ」の火もにぶり

固い生木に齒は立たず

製材作業も止りがち

六、凍る線路を乗越えて

汽車のまき積み夜は更ける

足場は暗し荷は重し

思ひは遠い国の空

七、吹雪は積り道は消へ

夕日は落ちて寒さ増

帰営をあせるつはものの

長靴は雪に沁るなり

八、吐息も凍る死の二月

吹雪は無情ひしひしと

防寒どうぎを襲い来て

ノルマを下げる切なさよ

九、自然の山河変らねど

昨日変る今日の日の

姿を月が白ら白らと

今宵も輝らす雪の原

十、励し合つて過ぎて来た

つらいつとめの冬の日も

何時か昔の思い出と

なりて楽しき南風

十一、小川の氷消え去りて

雪どけ水で顔すすぎ

耐えた苦闘の油汗

ホロリと流す氷の上

十二、つらいつとめも今しばし

平和の花の咲く国へ

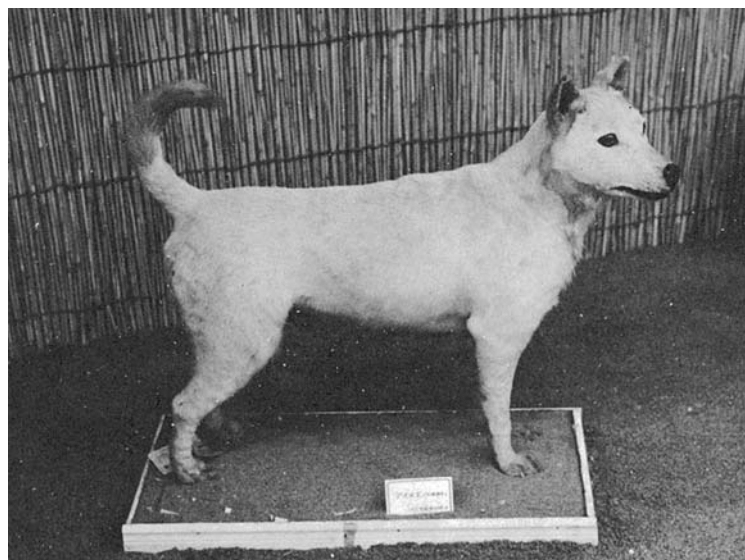
仲良く帰る楽し日が

きつと来るよと手をにぎる

現住所 三重県志摩郡磯部町穴川

在島当時 元北方派遣独立歩兵第四二一大隊隊員

現在 三重齒舞会幹事



北方の動物(その8)



充実していた北の守り

択捉島で終戦を迎える

木村 茂

緒言

沖縄は今春、核抜き本土並み返還が決まり、また小笠原も既に還つて来た。今次大戦で日本領土だった土地で、まだ還つてこないのは北方領土だけである。

この北方領土の返還が終るまでは、戦後は終つたとは言えない。一人でも多くの方々に、北方領土の返還を訴えたい悲願から、七十二歳の老令に鞭打つて、筆を取った次第である。

何の資料も無いし、終戦後二十六年も経過しており、それに終戦直後から三カ年間、ソ連に抑留され、全く記憶喪失症にかかつてしまっているのです、たどたどしい記憶によつて本稿を書くので、記憶誤りや思い違いがあるかも知れないが、ご了承下さい。

私は終戦当時、在択捉島の第八十九師団の経理部長をしていたので、主として軍の方面について、短期間の在職中（昭和二十年（一九四五年）三月末より八月十五日まで）の事について述べることにする。

終戦前の千島の守備

千島列島の守備は、元々海軍の任ずるところであつたが、大本营は昭和十九年（一九四四年）二月、第十二師団を南千島（国後島、択捉島）に派遣した。

しかし、アリューシャン方面の米軍の進攻に備えて、さらに昭和十九年三月、寺倉正三中将指揮の第二十七軍を札幌にて編成し、択捉島に派遣し、第四十二師団を北海道に転進させた。

翌二十年（一九四五年）三月中旬、軍の第二十七師団を仙台に移駐し、そのあとに第八十九師団を置き、北千島に堤不來貴中将指揮の第九十一師団を改編強化し、樺太の独立混成旅団を峰木十郎中将指揮の第八十八師団に改編強化した。

出発前に処置した事項

私が択捉島に出発する前、札幌の第五方面軍において処置した主な事項（私は第五方面軍経理部の次級部員であった）は次の通りである。

- (1)、択捉漁業の社長（函館に本社）より、鮭鱒の缶詰の製造状況を聴き、四万八千箱を購入する契約をした。その缶詰は軍から支給する。
- (2)、千島産業という林業会社に択捉島の製材を実施させることにし、その製品を購入する、製材用の鋸は師団経理部が斡旋する。（四月から、経理部勤務隊をして、伐採させる製品は、主として兵舎の用材が主で、鮭鱒の缶詰を入れる箱の用材も製造させた。）
- (3)、北海道の種馬鈴薯を十四万貫、釧路から出る兵員輸送船に積み込み携行した。
- (4)、給養兵額二万名分の（二年分）米を集積するとともに、第二十七軍時代の糧秣の不足分を携行した。
- (5)、兵の被服修理用として、足踏み『ミシン』を五十台、札幌で交付を受け携行した。
- (6)、第五方面軍との連絡を密にすること、軍用物資調達上の便とを兼ね、札幌に主計中尉を長とする八十九師団経理部出張所を置くことにした。

かくの如くして、私は師団長、参謀長より遅れて、四月中旬に

飛行機で赴任した。

着任して天寧附近の台上を視察し、取敢えず次の件を処理した。

- (1)、天寧台上の糧秣を分散配置させ、野戦倉庫を作り主計中尉を長として管理に当らしめた。

- (2)、離島師団にかかわらず、舟が一隻も無いので、暁部隊の下士官を根室に派遣し、遊休船を十四隻調達させ、天寧までの油は小樽の第五船舶団に行き、松本参謀（私が方面軍時代の親友）に頼んだ。

- (3)、携行して行ったミシンは、志波旅団長の意見に従って各部隊に分配した。

師団長の初度巡視

五月上旬、配下の各部隊を初度巡視された師団長に、参謀長、各部長随行を命ぜられ、守備地域の全部隊を巡視した。

色丹島の土井旅団の配下部隊、特に齒舞群島には三重出身の将兵が沢山いるのを知って、師団長の宿舎に三重県出身の将校を招いて会食しながら、種々現地の状況や部隊の現況についての希望や意見を聞いた。

経理部長の初度巡視

私は八月に入って、部隊の初度巡視をすることになり、まず各部落の住民の方と懇談をし、各役場を訪れて希望や意見を聞いて執務の参考にした。

特に旅館（現地では駄通という）の経営は町村でやっており、物資の取得に困難をしているので、糧秣その他必需品は経理部から支給することにした。

また、紗那では警察署長からの要請で、遊休の料理屋に内地から女を呼んで、慰安所を設けて欲しいとの要請があった。このことは駐留している兵隊と、村の女子との問題の起こるのを避ける上から是非、実現して欲しいというものであった。

女の獲得については村が行なうと言う。

師団長と相談の結果、師団長も同意されたので、早速連絡した。内地に女の子を募集に行っている間に終戦となった。

北方領土は日本国領土

私が初度巡視で紗那に行く途中、オホーツクの海岸を馬で歩いていると、直径一尺角位の角材に、すでに徳川時代からの『日本国領土』と書いた標柱が建っているのを見て、ソ連が如何に奇弁を弄するとも、北方領土は昔から日本国の領土であったことは明瞭である。

現地自活

離島であるので、一度敵に包囲されれば、自活をせねばならないので、次の事項を実行することにした。



(1)、馬鈴薯の播種

北海道から下積糧秣として携行して行った十四万貫の馬鈴薯を各部隊に分配、また、択捉島の各村にも分配して栽培するようにした。

経理部では各隊より勤務隊を採り、衣枳科長の本田少佐に命じて勤務隊を指揮させて、馬鈴薯の種を、松林を開墾して作らせた、全地域を開墾すると、労力と時間がかかるので、一尺位の円形の土地を開墾して、そこに植えさせた。

(2)、主食の減量

戦時の定量は主食米麦合わせて六合四勺になっているのを、一合減量させて五号四勺とした。

道路構築とか、陣地作業などの重労働に従事する者には、減量は行わなかった。

(3)、タラバ蟹の購入

四、五月頃になるとタラバ蟹がとれるので、これをほとんど全部買上げて、将兵の給養に充てた。

(4)、鮭鱒の缶詰製造

前記の如く、紗那に工場を有する択捉漁業に鮭鱒の缶詰を製造させて、冬の蛋白源の補給に充てた。

択捉周辺海域での七月頃の鮭鱒の漁場は素晴らしいもので、タラバ蟹と共に世界三大漁場の一つである。

ソ連は、こんな素晴らしい漁場を、濡れ手に泡の掴み取りで、ヤルタ会談で日本から奪ったのである。

中々、還してくれそうもないが、しかし日本国民としては、一億の総意で取り戻さなければならない。

(5)、鯨二十五頭捕獲

七月に入り、日本水産の工場長（年蒔に在る）がやって来て、鯨（長須鯨肉用）を捕らして欲しいと申し出て来た。単冠湾の直ぐ前面に、鯨が群れをなして、潮を吹いているとのことである。

七月一カ月で、二十五頭捕獲したが、全部将兵の給養に充てるために購入、一部は塩蔵し一部は雪小屋の中に貯蔵し、大部分は毎日各部隊に交付して、その日の副食に給した。

また、油は海岸でニシン釜を三十基ほど並べて、兵隊に煮させて、これをドラム缶に貯蔵して船舶の焼き玉エンジン用とした。

(6)、海馬（トド）を捕った。

七月、神戸の海獣会社の社長が司令部へやってきて、海馬を捕らして欲しいと申し出て来た。

択捉島、国後島の太平洋岸には沢山の海馬がいるので、皮を取るのが目的で捕らして欲しいということである。肉は、兵の給養に買って欲しいと言うので協議の結果、許可し肉を買ってやることにした。

海馬の肉は異臭があるので、そのままでは中々、食用にすることが難しいので、香辛料と一緒に煮て臭いを抜いて食べれば、結構食用になった。

(7)、製塩を各部隊で実施した。

米は二年分を貯蔵したが、塩を貯蔵さえしていれば、何も無くても生命に別状ないと思い、各部隊に毎月兵員の数に応じて製塩をさせた。

幸い、太平洋の濃度の高い海に面しているので、作業は簡単に来た。

(8)、魚労班の編成

日々の給養に充てるため、各部隊に魚労班を編成させ、島民の方の協力を得て魚労に従事した。

その成績、顕著なものがあつた。

作業中の被服は軍のものを貸与した。

(9)、甘味品の自製

天寧部隊のために、毎日経理部勤務部に命じて、甘味品（羊かん、餅等の代用品）を製造させて配給した。

終戦直後の状況

(1)、八月十六日夜、各部隊長を司令部に集め、団隊長会議をやられた。師団長は暗いローソクの光の下で、声涙共に下る終戦に対する訓示をされ、師団長自らも泣いておられた。

吾々も、思わず涙が出るのを禁ずることが出来なかった。私は、その翌日、各部隊の主計将校を司令部に集め訓示をした。

書類の整理や帳簿の処置、保管をしている糧秣、被服需品の整理等、細部に関し各科長から指示を与えさせた。

(2)、召集者の一部解除

第五方面軍の指示により、召集年次の古い下士官以下を即時、帰郷せしめよとのことで、十六日の夜半、召集年次の古い下士官以下を（約千名）天寧栈橋に集め、私の買った十四隻の船と船舶工兵のダイハツとで、夜暗を利用して出航せしめ、無事全員を根室に送還させた。

(3)、芸能人の帰還

丁度、八月初旬内地から慰問のため、鈴木蘭子嬢を座長とする芸能人一行他三十名ばかりが各部隊の慰問中であった。その途中で終戦となったので、すぐ司令部へ呼び戻し、帰還下士官と共に十六日に帰した。無事根室に到着したとのことを知り良かったと胸をなでおろした。

ソ連軍の進駐

八月十五日の天皇陛下の放送を聞いて、将兵一同、泣き伏した。吾々は米軍に降伏するものとはかり思つて、参謀長を委員長として白旗を造り、英語の達者な主計中尉を司令部付に転任を命じて敵の上陸を待っていたところ、十五日夜（原本のママ二十五日夜か？）、大本営から師団長に親展電報で、貴師団はソ連極東軍に降伏すべしとの報に接し、一同、啞然とした。

これは『ただでは帰れないぞ』と深く期するところがあった。

一週間あまりして、オホーツク海の留別海岸に、ソ連駆逐艦二隻が現れ、小学校に船舶工兵第六連隊の将校を軟禁し、連隊長酒井少佐から参謀長に電話で連絡して来たので、単冠灣に回航するように伝えた。

翌日、駆逐艦二隻が単冠灣に入港した。

艦長がやって来て驚いたらしい、一個師団が守備していることを知り、ハバロフスクの極東軍に対し、陸軍一個師団を派遣してくれと要求したらしかった。

二、三日して樺太に進駐してきた師団がやって来て、吾々の武装解除を行った。

東雲飛行場の滑走路に将校全員を集めて、周囲に機関銃を備付けているので、吾々は、これを撤去しなければ武装解除には応じないと抗議したので、直ちに撤去した。

武装解除が済むと、俄然、威張り出して、兵の時計を強奪する、

吾々の宿舎へ雨の中を土足で、昼、夜の区別なく入って来て、目ぼしいものがあると要求する、本当に軍紀も何もあつたものではない。

私も独逸製の写真機と懷中時計を取られた。

先方の憲兵（ゲベウ、後になってエヌ、カ、デ）に、取り締まりを嚴重に申し出たら、少しは良くなったが、何しろ、丸裸の日本軍だから、直ぐマンドリン（ソ連兵の銃）を発射して、威嚇射撃をして荒し廻った。（犬は随分射殺された）

島民に対する配慮

島民に対するソ連兵の略奪暴行、特に婦女子に対する暴行を守るために、ソ連の師団長に対し、強く安全を要求した。

それで婦女子は、旧二十七軍司令部の宿舎に居住させ、日本の歩哨を立て、ソ連軍兵士の単独立入りを禁止した。

ソ連に抑留さる

九月に入ると、毎日千名ずつ貨物船で小樽へ帰すのだと言って運び始めた。

私は砲兵隊と一緒に九月末、シベリヤの北緯五十度線の北にある『ソーガワニ』という秘密港に運ばれ、そこから『コンソモリスク』までの六百三十キロの鉄道の中央地点に下車させられて、

森林伐採と鉄道建設に従事させられた。

砲兵隊と一緒に時は、隊長と同格で労働には一切服さなかったが、一カ月位して、そこから三十キロに位置する、コンソモリスク寄りの地点に連行され（当番と二人で）、関東軍の重砲兵の部隊長をさせられて、一年間苦しんだ。

翌二十一年（一九四六年）七月欧州のモルダビヤ共和国に、反動分子二百六十名あまりの一同と共に、三十六日間、貨車の中でシベリヤ鉄道で送られた。一貨車に四く五十名詰め込まれ、途中入浴は二回させられただけで、真夏の旅ですから『シラミ』は全員に湧き、発疹チブスを恐れたが、無事にモルダビヤ共和国の一小都市に着いた。

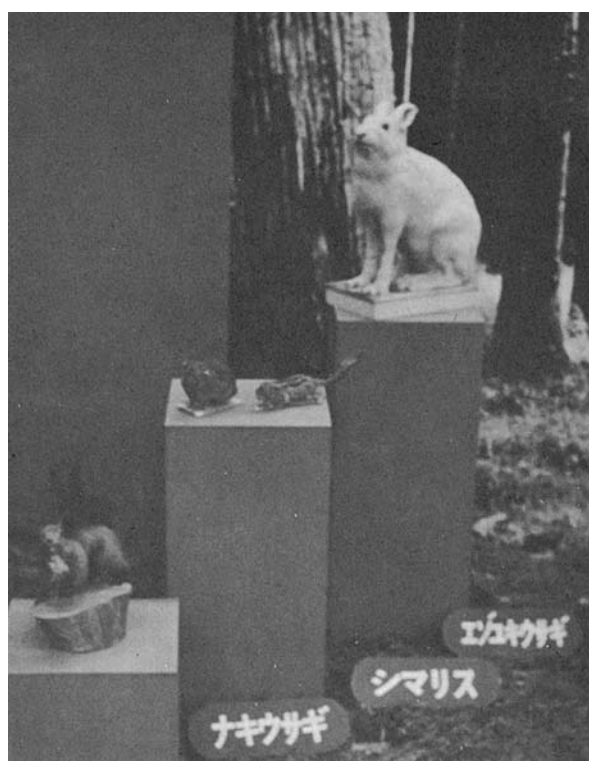
そこで北千島の第九十一師団長の堤中将、歩兵第七十四旅団長の佐藤少将等と一緒に、大いに元氣を取り戻しましたが、その年の十二月下旬、全員ヨーロッパのマルシャレスクというところに移され、関東軍の連中と一緒にになった。

マルシャレスクは大変、大きなラージルで日本人の他に独逸、ルーマニア、独逸の婦人部隊等と、国際ラージルであった。

毎日、日本の共産党に洗脳教育され、重労働を課せられて二年間、昭和二十三年（一九四八年）の七月に無事、舞鶴に帰ったのである。

舞鶴の栈橋に上陸した時には、全員嬉し涙が禁じ得なかった。ああこれで、いつ死んでも日本の土になれると。

現住所 三重県伊勢市浦口四―二五―四
在島当時 択捉島第八十九師団経理部長



北方の動物(その9)



思い出の国後島紀行

福井昇

「望郷の島」くなしり」

ノサップ岬に降る雨は

くなしりおどの涙雨

今日も岬にひとり立つ

くなしりおどは何思う！

この望郷の唄を作詞したのは、三年ばかり前に小田原の仙石原で亡くなった大笹辰之丞さんである。彼は札幌通信講習所の第一回卒業生で、大正十年（一九二一年）十月二十八日から、音別郵便局に勤務していたので、私は時々お目にかかることがあった。その後、青山学院に学んで遠く南方へ行かれたため、再び会う機会もなかった。

それが戦後、小田原に引揚げてこれられ、御幸浜で大島を眺めながら、望郷の島・国後を思い起して、この唄を作ったものらしい。それを遺族の方が見つけて、釧路国茶内小学校にいる娘婿さんの先生が作曲し、学童に歌わしたということだ。

去年の七月十日「島よいつ帰る」と大きな見出しで、この国後

のおどの唄が北海道新聞に紹介されたのを見て、私も彼のことや国後の昔を思い出した。

果たして彼が国後で育ったのか、国後島とどんな関係にあったかは知らないが、三十五年前に私は国後島を縦断したことがあるので、国後については懐かしい思い出があり、彼の唄と相通ずる望郷の想いに似たようなものがよみがえって「島よいつ帰る」の念願が急に燃えあがってきたのである。

当時の千島の国は、北緯五十度五十六分、阿頼度島まで、約千二百キロの間に連なる三十二の火山島から成り立っていた。この千島列島のうち、国後島は南千島に属し択捉島に次いで、周囲約六百キロにおよぶ大きな島である。千島列島は小さい島が多いが、全島の面積を合わせると約一万平方キロで、やや四国の面積に近い。人口は昭和八年（一九三三年）の調査で七、〇四一名であった。

この国後島をはじめ北方の島々は、正当な事由もないのにソ連が占領しているので、多少でも北方に関心のある国民は、日本固有の領土であるから返せと、領土返還運動を展開しているのが現状である。

私も今では記憶も薄らぎ、忘れたことも多いが、国後島を縦断して帰る途中、駅通の一室で雨だれの音をききながら、留守居の妻に旅行の模様を詳しく書いて送った。

その時の古い手紙が最近見つかったので、それをたよりに三十五年前の昔を思い出しながら、国後島紀行を綴ってみることにした。

二、長栄丸の航行十二時間

時は昭和十年（一九三五年）九月十九日午後八時。見送りの妻の背中で、生後満三カ月になる長男耕一は、すやすやと眠っていた。三歳になる長女の邦子も、手をひかれながら眠たそうな目をしていた。国後島は根室からは近く、人口も多くて水産資源の宝庫といわれるが、初めての島への一人旅は、いささか心細い感じがした。

しかし、技工の田中栄君も見送りに来てくれたので元気が出た。根室港は、すでに西日が落ち夕焼雲も消えて、ようやく暗くなってきた。通船の船着場には、小さな舢舨が一艘、乗船客の来るのを待っていた。お客は舢舨賃を二十五銭払って、定期船「長栄丸」まで運んでもらうのである。私は田中君にお礼を言い、邦子にバイバイして舢舨に乗り移った。

本船「長栄丸」は本当の客船ではなく、貨客兼用というより雑貨運搬が目的で造られた船のようであつたが、思ったより大きく、七十トンぐらいの船であつた。積荷が少なかつたのか甲板が高く、舢舨から乗り移るのに骨がおれた。乗船客は船員も含めて男ば

かり七人、本当のお客は四人であつた。客室はコザを敷いた約六畳ほどの、お粗末な暗い部屋で一寸気持が悪い。

やがて八時半も過ぎた頃、焼き玉が真赤になってエンジンが始動し、ポンポンという軽い音がしてきたと思うと、「長栄丸」は船首をくると左に回して出帆した。左側には弁天島灯台の灯が輝き、右側一帯は根室の町で小高い丘の上まで巾広く町の灯が、キラキラと光って見える。

甲板から船着場の方を見ると、三、四人の人が、たたずんでいるのが見えたが、それが田中君か妻子達か、あるいは他の人かももう識別できない。それでも段々遠ざかるそのあたりを、何となく名残り惜しい気持でしばらく眺めていた。

右側の高台のこんもりした林の中には、金刀比羅神社があつて、その奥には広い草原もあり、子供達とよく遊びに行ったものだ。

また、林の下あたりは岩石の多い海岸で、その辺まで来ると海水も、とてもきれいであつた。そこでは根室パプテスト教会の堀内四郎牧師、奥さんのオギエさんをはじめ、他の先生方や根室幼稚園の子供達と、手をつないで遊んだこともある。その年の七月、この海岸で洗礼式が行われた。二千年前にヨルダン川で、聖ヨハネが洗礼を施したのと同じ方法で、堀内牧師の司祭のもとに、若い姉妹が、ここでパプテスマを受けた。そのあたりも、もう暗くなつて船からは見えなくなつた。

ポンポン・ポンポンとエンジンの音も軽く「長栄丸」は、静かな海を北へ北へと進んだ。太平洋の大きなうねりに乗って、船体

は大きく上下する。船体が上るたびに見えていた根室の町の灯や灯台の光も、やがて視界から消えて、あとは、どちらを見ても真っ暗な海の世界となった。この航路から東方三百キロ附近は、南北三万キロ、深さ八千キロの千島海溝といわれる世界でも有名な深海で、東北海道から三陸地方におよぶ海底地震の震源地でもある。客室には横になっている者、小説を読んでいる者など色々だったが、やがて、そこから心よい寢息が聞こえてきた。私はエンジンの震動が腹にこたえて、どうも寝つけなかったが、壁にもたれたり、また横になったりしてうちに、いつとはなしに眠りに落ちていたらしい。

「それは山の中の一軒家である。激しい上下動の地震だ。妻は耕一を抱いてすぐ外へ飛び出した。私も危険を感じて邦子連れ、履物を持って後に続いた。地震は同じ上下動を繰返していつまでも止らない。それどころか空には物凄い稲妻とともに、ゴロゴロという雷鳴である。落雷も恐ろしいが、地割れがしたら危ないと思つて、親子四人が地べたに長くなった。すると上下動の震動で横腹がシクシクする。それが急にさし込むような痛さとなったので、腹を押えながら立ち上がろうとした」そのとたん目が覚めた。やはり腹を押えて眠っていたらしい。船は相変わらず同じ調子で走っており、室内では皆眠っている。

外はまだ暗くて海の色も鳥影さえも見えない。機関部をのぞくと、焼き玉エンジンのピストンは、せわしく動いているが機関士はいない。操舵室をのぞくと、ここにも人影がなく、「長栄丸」は

暗やみの中をただ独りどんどん走っているのだ。一体この船はこれでよいのだろうか、といささか不安になる。

船室に戻つて、また寝たり覚めたりしているうちに、東北方の海上に弓なりの三日月が出て、船のへさが青白く光って見えるようになった。四時も過ぎた頃だろうか、空が明るくなつてきて、左舷が島の岬をかわしたと思うと、北方ははるかに富士山のような山が、薄墨で描いたように見えてきた。だんだん明るくなつてくると、この山は国後島で一番高い爺爺山またはチャチャ岳と呼ばれる、標高一、八二二メートルの山であることが判つた。

それから一時間余りたつたころ、メシだメシだという声がして今度は、はっきり目が覚めた。炊きたての白い飯に、味噌汁とおしんこの簡単な朝食だ。お汁の実には手でちぎつたような長ねぎが入っている。飯台もなく炉を囲むようにして、皆で一緒に食べたが、それがまたおいしい朝食であつた。中には味噌汁を三杯もお代わりした男もいたほどだ。

それから二時間位してやっと目的地の白糠泊が見えてきた。甲板から見ると、チャチャ岳のすぐ下の磯浜に小舟が二そう、これから出漁するのか人影が二、三動いている。

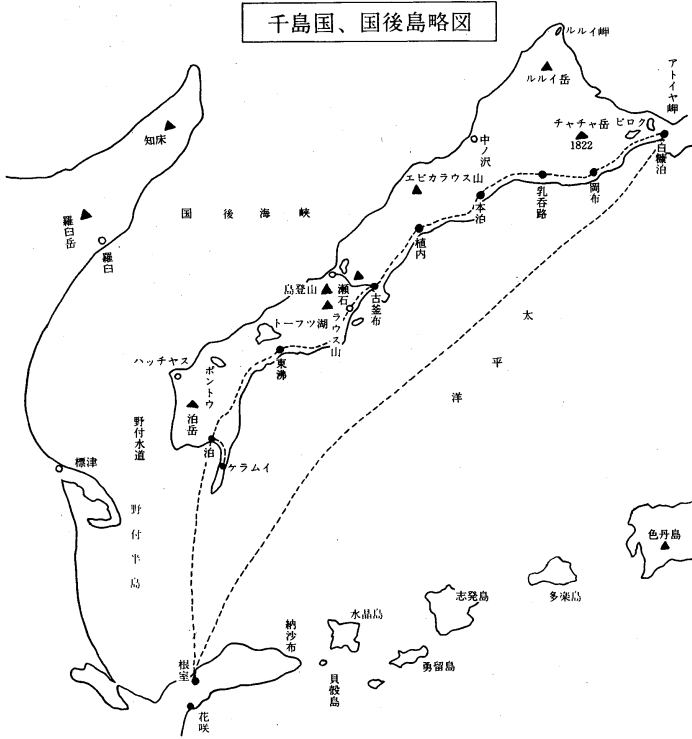
もう八時だ。乗船してから丁度十二時間になる。「長栄丸」のエンジンの音に気がついたのか、部落の人達が六、七人浜辺に出迎えにきている。その中に、白糠泊駐在工手の松田真二君もいたので嬉しかった。

島内を一人で歩く覚悟で、測定器・コーラッシュブリッジ、四

マイクロコンデンサ・受話器・乾電池・補助アース・写真機等たくさんの持物をリュックサックに入れてきたが、松田君がそれを全部持って、早速工手宿泊所へ案内してくれた。

日が高くなってくると、白糠泊の草原が広々と拡がっており、とても島に渡ったような実感が湧いてこない。

振り返って見ると、かなたの砂浜の近くに、今乗ってきた「長栄丸」が、おもちゃのお船のように小さく浮かんでいるのであった。



三、白糠泊ケーブル庫と帝国牧場

アトイ岬の白糠泊ケーブル庫は、工手宿泊所から少し離れたところにあった。私は松田工手の案内で、試験盤や避雷装置、地気線の状況、ケーブルの引上げ点などの調査をした。また、裸線の引込みなども見たが、異状は認められなかった。

本道と島を結ぶ長距離の通信線としては、根室紗那電信線が一本あるだけで、これは白糠泊を通過して、エトロフ島の丹根萌にある陸上室で裸線に接続され、それから内保、留別を通じて端末の紗那局に延びていた。

この電信線は根室から、海底ケーブル、国後島の陸上、海底ケーブル、エトロフ島の陸上と、海底五一哩、陸上二八五キロの長遠な回線である。従って、春先の海霧の発生する頃から九月頃まで、漏電現象による障害が発生し、通信の途絶することが多かった。そして根室国後島間には、もう一本、根室乳吞路電信線があった。この二回線を組合せて電信電話双信法により電話線を一回線重畳してあった。そういう状態であったので、なかなか良好な通信状態を保つことが困難なため、漏電救済の方法として複流式単信法を採用していた。

白糠泊の東方アトイ岬の丘の上にのぼると、はるか先方に大小二つの湖水が見える。また海峡を隔てて東北には択捉島、西南には知床半島の突端が、それぞれ青海原の上にかすかに浮んで見える。オホーツク海の流水でこの海峡が埋まり、一面の氷原となったときに、国後熊が本道の羅臼に渡ったことがあるそうだが、

それもあるほどと肯ける眺めであった。

湖の一つ、東ビロク湖はチャチャ岳の麓にあり、美しい山容を湖面に写している。その周辺一帯は大草原であって、あちこちに放し飼いの馬が群をなしていた。択捉島以南は、本道の気候と大差はなく、ことにこの附近は灌木も少なく、草原が繁茂する数万ヘクタールの草原となっているので、馬の飼育には適しているようだ。

見渡したところ馬小屋もなく、牧柵も設けず、全く自然の放牧場となっている。聞くとこの島では専業の馬産家がごく少なく、名のある名馬、良馬以外はほとんど自然放牧の状態で、いわゆる帝国牧場であるから発情期ともなると、あちらこちらで自由交尾が行なわれ、壮観を呈するということだ。従って、全島で二千五百頭ぐらいといわれているが、確実な頭数は馬主達にも判らないということであった。

そういうことで毎年この島から若駒が選ばれ、本道や本州へ連れて行かれるが、中には軍馬補充部で訓練を受け、戦場へ出陣する馬も多かったとか。この島は馬産島としても有名であるが、このように広い島内のことだから、ほとんど野生の馬と同様な状態にある若駒を捕獲することも、なかなか一苦労だという話だ。

島の風景はやや黄色を帯びた秋の色であるが、日中は暑いくらいの日照りで汗ばみ、いささか閉口した。出がけに妻が国後島は寒いだろうからと、メリヤスシャツにズボン下をはかせてくれた。船の中ではよかったが、上陸してみたら暑くて暑くて、何でこん

なに着せたのかと恨んでもみた。しかし夜になると気温が下つて、今度は有難く思ったりした。

白糠泊で駅逓に泊らず、松田君の工手宿泊所で厄介になることとなった。そこには、前駐在の未亡人や妹さんいたので、ボックス形のカメラを取り出して写真を撮ったり、いろいろな世間話をしたり、私は遠来のお客として歓迎され、賑やかな一夜を楽しく過したのであった。

この工手宿泊所は大分古い建物のものであり、狭くもあつたが、掃除が行き届いてきれいであつた。そして一番よい布団をのべてくれたので、ゆっくり休ませてもらうことにした。そのとき、昼間に見て来たケープル庫の建物が、相当に腐朽していたことを思い出したので、ノートに次のように書き足してから床にはいった。

一、土台の右の石が割れて、穴になったところがある。

二、壁に張ったしたみ板は腐触して、手で容易にはがれる。

三、窓枠、窓覆いや入口の開き戸は、風により外に落ちそうだ。

四、入口の底は風雪により落下の危険がある。

五、屋根の桁は強風のため飛び、差桁で補修してあるが雨の漏る所がある。

以上は、至急補修の必要があるので、工務出張所長に報告のこ

四、岡布駅逓所での休憩

夜が明けると二十一日は、前日にも増して秋晴れのよい天気

あった。この日の行程は三十二キロ余りの乳呑路まで、電信線路を巡回することであつた。

午前八時、松田君が馬に乗ってきた。駅通から、もう一頭の馬を引いてきて、それに私が乗ることになった。そして、松田君はチャチャ岳の麓までの約十キロばかりを、見送ってくれるということである。

松田君の宅では大変ご厄介になった。そのうえお昼の弁当まで作ってもらつたのに、どうしても謝礼を受け取らないので、結局私はご好意にあまえて、そのまま馬上からお別れすることになった。馬に初めて乗つたので要領が判らず、どうも調子が合わなくて、さっぱりうまく走れない。一キロばかりは私が先頭で来たが、今度は松田君が先頭になって走り出した。私の馬もその後について走つた。なだらかな砂浜をチャチャ岳の裾野を遠く回るように走つた。海岸線のところどころに、ハマナスのような赤い花が咲いている。東方の湖水の近くには放牧の馬が群れて、そのあたりにハススカ芦か穂が白くなつて見えていた。

これから本当の山道にさしかかるという所まで来たところで、これからの道順や出沒する熊の注意などを聞かされて、松田君とも別れた。左側の海岸は風化した石ころが多いので、寮の河原と呼ばれているようだ。そこでチャチャ岳の雄姿を、東側からカメラに収めた。これからいよいよ本当の山道だ。

私は馬を頼りに先へ先へと進んだ。だが、山道を登るときはいいのだが、急な坂道を下るときは大変である。

鞍がすべるような感じがするので、あぶみに力を入れて尻を浮かすようにするのだが、うまく調子が合わなくて尻の痛いこと。

尾根の上に出ると笹の背も低い、沢に下ると丈余もあるかと思われる熊笹で、馬の背は完全に隠れてしまう。道があるのか無いのかも判らなくなったので、あとは手綱をゆるめて全く馬にまかせに進んだ。

この島の山は、全山がトドマツ、エゾマツ、ハイマツ等の針葉樹で覆われているので、年中濃い緑色に埋つて見える。戦後、ソ連の新聞記者レビナ氏が、北千島の荒涼たる島々を見てから、国後島を見たとき、あたかも月から地球に帰つて来たような印象を受けて、思わず、「島の上に盛上つて繁茂する黒々とした密林があるから、この島は黒島だ」と叫んだということである。

さて、山を越え谷を渡つて電信線路は延々と続いている。途中には谷川を越えて、スパンは百メートル以上もある箇所もあった。道の近くの電柱の下を通ると、それほどの風もないのに、ヒューヒューという電線特有のうなり声が聞えた。これが本道と国後、択捉を結ぶ唯一の電信線路なのだ。

山あいが一寸聞けて、海岸が目の前に見える所に出たと思つたら、そこに岡布の駅通所があつた。馬は自分の行く所をちゃんと知つていた。丁度十一時半である。

此所で一休みしながら昼食にしようかと思つて腰をかけたなら、駅通の娘さんが出てきてあがれあがれというので、とうとう座敷に案内された。そこでは熱いお茶を出してくれたので、弁当もお

いしく食べられ、ゆつくりと腹ごしらえができた。

この駅通は今年の冬、裏山からの雪崩で、建物が二メートルも移動したので、今年は浜の近くに移したのだということである。ここから乳呑路までは、まだ十三キロほどある。乳呑路までは旅行者もよく来るが、このへんまでは余り来ないということで、たまに人が来ると懐かしいといっていた。

この駅通で九十銭払って、まだらな栗毛の馬に乗り替えた。島の交通機関としては、昔ながらの駅通馬よりない。駅通はそれぞれの駅通に所属した官馬であって、乗用または駄馬として隣接の駅通との間の往復に使用され、他の区間には行かない。往くだけで帰りの客がなければ、馬は自分の所属する駅通へひとりで帰るそう。

お客は同じ馬で最終目的地まで行きたくても、このような仕組みになっているので、駅通ごとに馬の乗り継ぎをしなければならぬ。また、古釜布以北には整備された道路らしいものがなく、精々馬が通れる程度の山道よりなかった。浜も同様であるから、余程気をつけないと道を見失ってしまう。

従って、途中に用件のない人は磯舟を利用して行くらしい。私は線路状況を見たり、試験巡回が目的であったから、どうしても線路に沿って歩く必要があった。

私は乗り替えた栗毛の馬にまたがり、午後一時に岡布を出発した。この馬は乳呑路の帰り馬でないためか、いくら手綱を引いてもたたいても、平気な顔で精々トコトコとしか走らない。急がせ

てみても私は道を知らないのだし、ことに海岸に出ると全く道らしい道もなくなつて、どう行ったらよいのかも判らないので、馬の歩くにまかせるより仕方がなかった。それでも、礼文磯という海岸で学校帰りの子供達四、五人に会ったら、丁寧に脱帽して礼をされた。私は馬上から軍人のように答礼して、得意な顔をして見せた。

馬は終始マイペースで、さっぱり急がないようであったが、別にさぼったわけでもないと見えて、三時近くには乳呑路の駅通、伊藤政夫旅館まで連れて行ってくれた。

駐在工手の川村富士夫君は、工事のため出張不在であったので、岡布からの試験巡回などの日程は、これで終りということにした。

五、乳呑路孵化場と校長先生

駅通には着いたが、まだ日が高いので、旅館の息子の伊藤君と、局長代理の木村さん、それにもう一人の局員と四人で、鮭の孵化場へ見学に出かけた。そこには音根別川という小さいが水のきれいな川が流れていて、そのすぐ近くに孵化場があった。

川は浅くて大きな石がゴロゴロしているので、飛石伝いに渡ることができた。石の上にあがって、石と石の間を見ていると、少し背中が白っぽくなったかと思われる鮭が、次から次と群をなしてのぼって行く。

鮭は普通、放流されてから四、五年で戻ってくるそうだが、この鮭は六、七年生ぐらいで、かなり大きい。私はそれを飽かず

に見つめていた。

すると伊藤君が腕まくりをしたかと思うと水の中に手を突っこんで、鮭を手づかみにつかもうとした。しかし、うまくつかまらないので、今度は両手ですくい上げて、道路の方へ投げ飛ばした。それを代理の木村さんが道路にいて、三回ばかりたたきつけると、ようやく動かなくなった。

こうしてもう一匹とって、五十糎以上の鮭を二本、柳の枝にさして帰って来たところ、橋の上で巡査部長にばったり会った。

「ホーラ、密漁だよ」というと

「オオ、うまくやったなー」と大きな口を開けて笑った。

駅通へ帰ってもまだ時間があるので、礼文磯の海岸で学童に会ったのを思い出し、小学校へ行って見ることにした。そして校長先生を尋ねてみた。

先生は元根室北斗小学校にいたことがある人で、最近まで内保の学校にいたが、村長と意見が合わず、巡査や医者が止めるのも聞かずに、先々月この学校に転動してきたばかりだということだった。

なかなか気骨のある先生で、礼文磯で会った小学生の礼儀正しいのを感じて話すと、島の子供達は学力は落ちるが、純真で礼儀をよく守るのがいい所だと言っていた。

校長先生とは初対面であったが、旧知のように打ちとけて話合った。先生は理科の実験用器械を見せてくれたり、地理歴史の話から北方水産物の話など、時間の経つのを忘れるほど話がはずん

だ。それなのに、今思えば残念なことに、校長先生の名前も聞かないまま帰ったことである。

午後七時頃であったか駅通に帰って、ひと風呂浴びてから部屋に戻ると、先刻の鮭を伊藤君が自分で料理して、妹のあきちゃんと肉鍋をかけてくれていた。局長代理の木村さんもビールを二本持つて来て、早速乾杯したわけだが、ほとんど鮭料理だけで満腹した。

十一時も過ぎた頃もう寝ようと思ったが、尻の皮のむけたところが痛むので、どんなになっているのかと鏡に反射させて見ると、傷あとが黒くなっているようである。手をやってみると、皮がよじれて固まっている。これでは、明日の行程十六キロの乗馬は、どんな目に会うことか思いやられる。いっそのこと歩いてみよう、腹をきめて寝についた。

灯りを消すと、太平洋の海鳴りの音が、かすかに島の土を伝わって聞こえてくるのであった。

六、ポン泊駅通所と小熊のいたずら

乳呑路局は、島内北部の特定郵便局であって、根室乳呑路電信線の端末局となっていたが、また、根室紗那電信線の間局でもあって、機械台には通信座席が二座設けられていた。根乳線が通信中であつたので、紗那線で根室局を呼出し、二、三日中の気象情報を聞いてみた。

回線は複流式単信法であつたから閉電式のように、自分で叩い

た音響を自分も聞くことが出来た。われながら下手だなあと自分の送信符号を恥かしく思ったが、それでも二、三日中に雨になるという根室測候所の予報を聞くことができた。

さて、尻の痛さをこらえながら、いよいよ出発だ。

午後一時になってしまったが、乗馬をあきらめて乳吞路に別れを告げ、テクテクと歩き出した。

道の両側には三十センチもあるような長いおおばこが、石の多い地面にがちりと生えている。何処へ行ってもよもぎが密生しており一メートル以上にも伸びたのが、茎や葉全体が白い毛で覆われている。しかし、その上の方はさすがに秋の気配を感じさせるように、いくらか黄色くなっていた。

道は山から山へと続く。日差しが暑いのでシャツ一枚になって歩いたが、幸い蚊や蛇がいなかったので助かった。また、熊に気をつかったせいも、足もとに蛇を見かけることもなかった。

しかし、どちらを向いても緑一色である。緑色は目の薬だと聞いたが、余りにも強烈な緑の葉の反射には、とても瞳孔を開けておれないくらいだ。しかも広葉樹の大きな葉などには、太陽熱が蓄積されているためか、ムツとする熱気である。山道を歩くのもなかなか容易なことではない。

宮部金吾博士は、ウルフ島以北の島の植物はカムチャッカ系に属し、択捉島以南の植物は日本系だと述べているが、国後島の山々の植物は、本道と何ら変ったところがないので、時には島の山道を歩いているということを、うっかり忘れてのことさえも

あるほどだった。

山道の途中で行き逢ったのは、乳吞路局の遞送手と村人一人だけであった。のぼり下りに七曲り、四時間ほど歩いて、どうやら疲れを強く感じてきた頃、やっと山間にポン泊の駅遞が見えてきた。

冬に焚く薪であろうか、十数敷もあるかと思われる薪が、きれいに積まれていた。それは山の中の一軒家で、野菜を作るのであろうか、家の前の一角は畠になっており、飲料水は沢の水を引いて、長い木の樋が見えていた。

私は靴ずれがして痛いし、それに股が張っていたので独りでよくもんでから、ぐっすりと眠った。

明け方早くに駅遞の爺さんが何か騒いでいるので目を覚ました。どうしたのかと思って外に出て見ると、小熊に樋をこわされて水が来なくなったから、朝の食事が遅れるということだった。

今までにも三回もこわされたというので、それならその小熊を捕ったらいいのにといいと、爺さんは、いや、もう少し大きくなったら捕獲するんだと言っていた。

七、海草の海コンブモリから植内へ

二十二日は、予報の通り雨の降り出しそうな空模様となった。

小熊のいたずらによって、朝の食事が遅くなるかと思ったら、案外早く仕度が出来て、七時にポン泊駅遞を出発することができた。馬をやめて徒歩である。山から沢へと登ったり、下ったりしな

がら、約五キロほど来たら海岸に出た。曇ってはいても海岸線は視界が広く、見透しもよいので気持ちよかった。開けた沢の間から北方を望むと、かすかではあるが右にチャチャ岳、左にルルイ岳のそびえているのが見えた。

この両山の間には、ソコボイと呼ばれる巾四メートル、落差三メートル位の白布の滝があつて、その滝壺から下流は、大公望の喜びそうな溪谷が続いているということである。

海岸では多少、道の固まっているところは歩き易いが、砂道はザクザクして歩き難い。むしろ波打際の方が砂が緊つていて楽だ。しかし、時々大きな波が打ち寄せてくるので、逃げなければならなかった。

天気は悪くなってきたが、この四、五日よい天気が続いたので、よく乾燥された昆布が小屋にうず高く積まれていた。それでもまだ砂浜には、乾燥しきらない昆布が長々と並べられてあつた。

島の海草類の収穫は、三カ月位の期間が山である。従つて、その時期には女も子供もない、全家族総出で一年間の生活を支えるだけの収益をあげるために働いている。このへんの地名をコンブモリというらしい。

私の履いている茶色の軍靴のような編上靴は、岩や石ころにぶつかつて傷だらけ、油も切れて白っぽくなっている。それはいいが、ボン泊に来たときには、足の小指に靴ずれが出来たり、豆が出来たりして痛くなつていたが、その足で今日も歩いたのだから、ますます痛くなつてきてたまらない。

道端には大きな岩があつたので、それに腰を下ろして靴を脱いでみた。昨日は二つしかなかった豆が、今日は五つになり、しかも二つは破れて水が出ている。泊港までの道程はまだ百キロもあるのに、さてどうしたものかと、いささかウンザリである。

海上を眺めると、黒い煙を吐きながら南下する大型汽船が見えた。あれは北洋から函館に帰港する母船でもあろうか、根室にも寄るのだろうかと見ていると、雲が低いので、たちまち見えなくなった。

そうしているうちに足が少し冷えたきたので、痛いのをこらえながらまた靴を履き、次の駅通植内に向つて歩き出した。

コンブモリから植内までは思ったより近かつた。植内局では早めに用件を済ませ、そのあと局長代理の橋場通信手といういろな話をした。

代理さんは、島育ちの人かどうかは知らないが、非常に口の達者な快活な人で、何でもザックバランに聞かせてくれた。

そこへ泊村から、国後局長の坂本恭平さんがやつて来た。電信線路の改築か、ルート変更か何かの工事の測量を兼ねて、植内まで来ていたものらしい。私は用件や来意を告げ、初対面の挨拶を交した。

坂本さんは体軀も堂々たる偉丈夫で、腕木なども軽々とふり回すくらい意気盛んな人であつた。明日は国後島唯一の温泉、瀬石の宿で一緒になろうという約束で、坂本さんは一足先に古釜布に向つて出発した。

植内では駐在工手の沼里徳弥君に大変厄介になった。また、工事で出張中の乳呑路駐在川村富士夫君にもここで逢った。

植内には電信有技者が二名いた。線路引込は裸線四条で、四・五ミリ鉄線が架渉されており、良好と認められた。電信用地中道体は、昭和二年（一九二七年）十一月十六日、土質粘土一メートル、砂二・五メートルの深さに埋設されており、地気抵抗は一四・五オームと測定された。また、電池はダニエル電池七十三個を使用しており、電報の取扱いは月五十通未満とのことであった。

さて、植内の駅通では、富山の薬をもらって尻と足の靴ずれの手当をしたが、傷は大分ひどくなっていた。明日の旅程は馬で行こうか、それとも引続きテクテク歩こうかと思案したが、薬もつけたことだから、今晚一晩休んでみてからにしよう決めて寝についた。

八、古釜布市街の状況

朝起きてみると足も痛けりゃ尻も痛い。どうせ痛いのなら尻の方を我慢しようと、今朝は馬で行くことにした。

駐在の沼里君が、線路の案内を兼ねて、二十キロの道を送ってくれた。途中では、ところどころに改築工事に必要な丸太や電柱を積んであるのが見えた。道は海岸沿いのところが多かった。そして、そこには支那大陸等、外国に輸出されるコンブは値がよいので、天気さえよければ、石原でも砂原でも道路でも、所かまわずコンブが乾されているのである。

野原のあちこちには、濃い紫のリンドウや桔梗の花が見られた。はい松であろうか、風にあおられて山肌にしっかりとしがみついたような松並がところどころにあって、いかにも島の山々らしい感じがした。

そして最後に小高い丘のような山道を越えると、そこに古釜布の街が目の前にある。この島では一番大きな市街地であろう。戸数も二百戸以上あるらしい。ここには帆立貝、ほっき貝、カニ等の水産加工場があり女工さんも、たくさん来ているとのことである。

局の引入口までは分線柱から十五メートルあった。沼里君の案内で局内に入り仕事をした。当局の電報取扱通数は時期により百通を越したりするが、ほとんど取扱いのない日もあるそうだ。

温泉の宿で落合う約束で先に来ている筈の坂本局長は、工事の都合があつてか、急に泊港に帰ったということであつたので、私は温泉旅館をやめて駅通に宿ることにした。

駅通は鈴木旅館といって、島内では一番整った感じの建物であった。沼里君は駅通で、私と一緒にビールを飲み食事をしてから、馬に乗って急いで植内に帰って行った。その馬は自分で飼っているらしく、年間の飼料として十五円は必要だといっていた。特に名馬でもなければ、一頭五十円くらいで買えるらしい。

駅通は内部の部屋もきれいで、女中さんも三人いた。

その中で背の低い方が上品な顔立ちで、美人型に見えた。

この街には、この外にも旅館や寮などがあり、季節労働者が入

って来ているらしいので、活気のある町のように思われた。

現在、ソ連占領下の古釜布はどうなっていることだろう。詳しいことは判らないが、国後島の人口は三万になり、千島列島の中心地はやはり古釜布であって、ここを首都とし、ユージノクリルスクと呼んでいるということである。

また、今年（昭和四十六年（一九七一年）一月二十八日タス通信（道新一月二十九日）によると、国後島メンデレエフ火山帯の地下数百メートルには、豊かな温泉の流れがあり、この水蒸気を利用して六万キロワットの発電所を設け、人口五万人までの町の暖房網を完成し、続いてソ連の漁業の重要な常設基地とする、ということが報道されていた。

それはともかく、私は前の駅通に洗面タオルを置き忘れてきたので、腹に巻いていた晒を外して手拭い代りに使った。今日の二十キロの旅程は乗馬であったが、尻の傷は葉が効いたか、乗馬に慣れてきたせいかな、大分楽になってきたようだ。このうえに温泉にでも入ったら、なおよかろうと思ったが、坂本局長も来ていないことなので、あきらめたのだった。

今日は朝から曇天で今にも降り出しそうであったが、日中はついに降らず、夜になってから降り出した。

その雨の音を聞きながら、私は生まれて百日になる長男耕一が、たらいのお湯に入れられ手を握りしめて頑張っている顔つきや、廊下の片隅で何枚も同じ折紙を折っている長女邦子のことなどを、心に思い浮かべながら、留守宅の妻に手紙を書いたのである。

九、雨中乗馬で東沸へ

雨は夜通し降っていたが、夜が明けるとともに小降りとなった。しかし、雨の中でも今日は東沸まで約三十キロの行程を、馬で行かねばならない。

道路は海岸沿いで、馬車も通るほどの巾があり、山や峠も少なく、むしろ平地で湿地帯が多くて、トクサやイタドリが伸び放題に伸びていた。

東沸までの道程は何となく遠く感じられ、しかも、この雨の中を行くのは心細いことであつたが、途中の中古丹まで来たところで東沸の駐在工事、緑川二郎君が迎えに来てくれたので、大いに元気が出た。

古釜布から四キロ位来たと思われる所に瀬石の温泉があつた。

ここは摂氏九十度位の硫黄泉で、慢性皮膚病に効能があるという。このへんでは道路ばたの岩石の間のくぼみに、温泉が湧き出ている、附近の人や通行の人などが、この天然外風呂を利用しているということだが、今日はあいにくの雨で、そういう人影もなかった。また、中の古丹を過ぎてからは往來する人にも全く会わなかった。

雨は小降りとはいえ、馬にまたがつっていると、前膝まで濡れて気持が悪い。それよりも、携行したコーラッシュブリッチや写真器などが濡れないように、よく注意していなければならなかった。こうしてようやく東沸に着いた。東沸は、いくらか入海になっ

ているようで、ここから北の方には、この島で一番大きな東沸湖がある。ここは古釜布より戸数も人口も少ないが、帆立やカニなどの加工場や集積所などもあり、小形の漁船が出入りしていた。

東沸は小田部敬止君の故郷だと聞いていたが、何処が生家だか判らなかつた。

彼は釧路の通信講習所を出て、白糠局に勤務していたが、その頃、私が札幌から配属されて来たので、二年近くも一緒に勤務しており、いろいろと指導を受けた関係もあつて、よく知つている。彼は、さらに高等科を卒業した秀才であつたが、早く通信界を去つて島に帰り、実業家となつたということである。しかし、その後の消息は全く聞いていない。

さて島でもこの附近は、太平洋と根室海峡の間が僅か数キロよらない、一番巾の狭い所である。

東沸局には乳呑路線の間局装置があり、電信機械台には亀甲形検電器、五百オームのシーメンス継電器、電報を差し込むスタンダード等があつて、いかにも古めかしく田舎くさい感じがした。

また、珍しいことに燈台局製モールス印字器が保管されており、私は講習所を卒業した当時のことが思い出された。その頃、白糠局ではモールス印字器の上下楨桿（こうかん）に空缶をつけて、印字テープを繰り出さずに音響器の代用として通信していた。東沸局でも音響器に改式されるまでは、印字器が代用されていたのであろう。

この局の電信有技者は、池本勝丸君等三名の人達であつたが、

いずれも検定を受けて、オペレーターになつたということで、講習所の卒業生は一人もいなかった。しかし、若い勉強家ばかりで頼もしく思われた。

郵便では濡れたものを乾かすのに大変であつた。一番困つたのは写真書類である。皮鞆の中まで雨水がしみ込んだので、折角写した写真乾板も濡れてしまつたようだ。

いろいろ考へた結果、どうせ濡れたのなら取枠から外した乾板と乾板の間に水をひたしたチリ紙を挟み、また、その上を濡れた紙で包み、二重三重に巻いて家へ持ち帰つた。

この乾板は五日後の二十九日に、根室へ帰つて押入れの暗室で静かに開いてみたら、乾いてチリ紙が附着しているもの、濡れてはいるが感光膜がよれているもの等もあつたが、早速、現像液を調合して現像してみた。

その結果、白糠泊の松田君や妹さんの写真も、チャチャ岳の写真も、所々に斑点があつたりしたが、どうやら姿が判る程度の写真になつたので、約束のこともあり礼状とともに三枚ずつ送つた。

十、泊港の国後局と工務出張所

九月二十六日、東沸を出て島内唯一の普通郵便局と工務出張所のある、国後泊港に向つた。長降りの雨もようやくあがり、秋晴れのよい天気となつた。馬にも馴れてきたし、鞍ですれた尻の痛みもなくなつて、乗馬が楽に出来、コースの外まで見て歩くほど余裕が出てきた。

工務出張所が近いせいか、線路整備もよく整備されているように思われた。東の海上を眺めると、小形漁船が三隻北上するのはつきりと見えた。

明治二十四年（一八九一年）頃、北千島近海は密漁船の跳梁があり、警備も不十分であるということから、千島探検のため侍従片岡利和を派遣することになった。そのとき、明治天皇は片岡侍従に対して「汝能く之に赴くや否や」と憂慮されたというほど、当時としては遠い未知の千島列島であった。

この片岡調査団は、国後島には上陸しないで、択捉島で越年した。そして翌二十五年（一八九二年）に千島列島北端の占守島までの調査を終り、航路の開設、島司の配置、屯海兵の新設移住などの計画書や調査結果を、詳細に報告したということである。

この調査団の一行も四十五年前（現在からでは八十年前）に、この近海をあの漁船より小さな短艇で往復した。

また、その翌年三月二十日、北千島屯海団移住の実行に当って、海軍予備大尉、郡司成忠の卒いる第一陣五十名が、五隻の短艇で隅田川の言問を出発した壮挙など、当時から北方千島に対する執念のような関心が、如何に強かったかが感じられるのであった。

そのような往時を、あれこれ偲びながら峠を登りつめると目的の泊港が見えた。泊港は、まっすぐ南に向いていて、東側の砂丘だけが長く先へ伸びており、その上にあるケラムイ岬灯台までは、二十キロもあるように思われた。

国後郵便局は、泊村西通り十二丁目にあって、工務出張所が同

居しており、割合大きな木造平屋建の局舎であった。

局長は通信書記、所長は通信局技手、補助は通信技手で、坂本恭平さんはこの三職を兼任しており、半任官一等二級百二十五円の俸給であった。

また局の定員は、通信書記一、主事一、通信技手一、通信書記補五、通信手一、外に雇傭人。出張所は通信局技手（通信技手兼務）一、取締一、工手七となっていて、国後には工手取締の石田亀彦君に、工手の大熊泰次君と吉田重雄君の三人がおり、他の四人は地方駐在となっていた。

線路の増改築、保守工事等の一切は全部直営で、やっている中で、工事が始まると島内の各駐在も召集され、協力して施工することとなっており、いわゆる自給自足の体制が整えられていた。

根室・国後間は電信電話双信法を採用しているので、局内装置が複雑となっていたが、二本の電信線の漏電救済と、根室・国後間の低通話音を救済するため、双信装置のチョークやコンデンサー容量を加減したり、単線通話を試みたり、いろいろ実験を兼ねた調査を行った。

その結果、双信法としては多少アンバランスとなるが、紗那線のコイルを二十五オーム減らして、当分の間、実験的通信を行わしめることとした。

国後局の通信用アースは五カ所に埋設しており、測定の結果いづれも四オームから十オーム以内で、大正十五（一九二六年）年十月と埋設標に記入されていた。

ダニエル電池は七十八個あり、四十五個は受信用であるが、一と六の日が電池掃除の日となっていて、保守状況も良好であった。国後局では、局長をはじめ石田取締役、大熊工手の皆さんに大変ご厄介をかけたが、思いどうりの実験調査が出来て嬉しかった。

十一、ケラムイ岬のケーブル庫

今日はいよいよ国後島の最南端ケラムイ岬の灯台の近くにある、ケーブル庫へ行くことになった。石田取締役の世話で馬を用意してもらい、一緒に出かけた。

この馬がまた、今までで一番大きな種馬のような奴であったので、乗り易くてとても嬉しかった。

天候は少し雲がある程度で、暑くも寒くもなく、丁度いい気分だ。砂丘が真直ぐ南に伸びた、ケラムイ岬を指して走り出した。左側の太平洋岸は、さすがに大きな波浪があつて、その飛沫が霧のように白く見えていたが、右側の内海の方は全く静かであった。これが冬ともなると、オホーツク海から流水が押し寄せ、強い北風が吹き出して、両方の海が一ぺんに荒れ狂い、歩くことも出来なくなるといふ。

ケラムイ岬の砂丘も所によって高低があつた。高いところ西方を望むと、あいにく曇っているため、野付半島は近いところで二十キロ余りというのに、僅かに野付水道の上に、それらしい影が薄く見えるだけであつた。天気がよければ、根室半島から武佐岳や標津の山々も見えるそうである。

ケラムイケーブル庫までは、約十二キロほどの道のりであったが、馬の足が速くてたちまちのうちに着いた。ケラムイ岬灯台はすぐ近くに見えていたが、そこまではまだ五・六キロもあるのだろう。

ケーブル庫は、年中強風にさらされているので、室内は砂ほこりで相当ひどく汚れていた。しかし、試験装置や保安器、ケーブルの引込等に異常はなかった。また、途中の線路は傾斜やたるみも見られず、破損碍子も見当らなかったのも、良好な線路状況であると認められた。

島内で使用している電柱は、ほとんど硫酸銅注入柱であつたが、海岸を経過する路線が多く、このルートなどは塩風にさらされているので、永く水中にあつた木材のように、薄黒く銹色がかつた色で、木肌もなめらかになつていた。

線路建設は明治三十年（一八九七年）十月頃で、はじめ根室紗那線一回線であつたものが、その後三十三年（一九〇〇年）に根室乳呑路線が増設されたらしい。

このケーブル庫から根室町の発足ケーブル庫までは、海底約二十一哩である。オホーツク海からの流水も多いことだが、水底は安定していて障害になつたことはない。

午後は早めに石田取締役とともに、ケーブル庫をあとにして国後局へ戻つた。

十二、返還されるか北方領土

泊港と根室間は、北海道庁の命令航路となっていたので、定期船が毎月五回運行していた。

私は国後島の坂本局長に、島内約百五十キロの電信線路を、十日に亘って巡回し、管下の駐在工手や局員の方々にお世話になったことを深く感謝し、再会を約して午後出帆の定期船で、泊港をあとに根室港へと向った。

海上は、おだやかで波一つなく、見透しもよかった。遠くにある歯舞群島が、根室半島につながっているように見え、ふとそんな錯覚をおこすほどであった。

子供達に与えるようなお土産は何もなかった。しかし、私は脳裏に国後島民の人柄や、風物・情緒などを思い浮かべながら、昨日行ったケラムイ岬が見えなくなるまで、甲板に立っていた。それにしても、十日間の旅行中、アイヌの方には一度も会わなかったのが、不思議な気がしてならなかった。

やがて根室の町が真近に見えてきた。弁天島の背後海上はるかに太陽が、まさに沈まんとする夕暮れ時、私は無事、根室港中央通船に帰りついた。

ふり返ってみると、現在の千島列島は至近距離にある色丹島、歯舞群島からはじめ、北千島全域に亘ってソ連の統治下にあり、わが国の施政権の及ばない外国となっている。

そのために零細漁民の生命線ともいふべき近海でさえ、拿捕の危険にさらされながら操業している。ことに水産資源の宝庫とい

われる国後、択捉島周辺における拿捕船舶は、千島全域の四十八%に及ぶということだ。

戦後から昭和四十五年（一九七〇年）六月一日までの拿捕船舶は一、三二八隻、抑留人員一一、一五〇人にもなっている。

今年もまた漁民の死活問題として、国後・択捉を含む四島周辺の安全操業を期待しているが、ソ連は歯舞・色丹の周辺に限定し、日本案と大幅な差があり、交渉は難行していた。

わが国はサンフランシスコ条約第二条により、台湾・朝鮮・千島・樺太の領土権を放棄したが、ソ連は、これに調印していない。

また鳩山一郎は、日ソ共同宣言で国交を回復し、領土問題は交渉事項とした。

しかし、ソ連は、日ソ中立条約を一方的に破棄し、宣戦を布告するとともに、北方領土を占領した。そして、日本国民の切なる返還要求の声にも、領土問題はすでに解決済みであるとの一点張り、その冷やかな態度には交渉に入る余地すらない。

亡くなった大笹さんのように、いつ帰るか判らない島々に、父祖の地に、望郷の念を燃やしている人々のいかに多いことか。

国後島、択捉島は十七世紀前半から父祖の汗により開拓された島々であって、まだ一度も外国の支配を受けたことのない、日本固有の領土である。

昭和四十七年（一九七二年）を迎えて、沖縄の返還に続いて北方領土の復帰を求める声は、各地に広まっている。政府の沖縄北方対策庁や北方領土問題対策協会、本道の領土復帰北方漁業対策

本部などが、盛んな活動を行っている。

しかし私は、さらに全国民の白熱的な復帰促進運動が展開されて、望郷の島々の返還が、一日も早く実現されることを祈念して、思い出の国後島紀行を閉じることとする。

注 この紀行は三十五年も昔のことであるから、人名・地名をはじめ、いろいろ誤記や思い違いがあるかも知れないので、よろしくご容赦を願っておく。

現住所 札幌市白石町本郷通八丁目北三十八

出生地 十勝幕別町

略歴 元札幌通信局工務出張所根室駐在

〃真駒内特別電話局長（キャンペンプロフォード内）

〃北海道電気通信局監査部調査役

〃北海道電気通信工作工場長

〃釧路電話局長

現北日本通信建設株式会社嘱託



北方の動物（その10）



失われた北の故郷

村上徹

なつかしき島々

北海道東北端の漁港、根室町（現在は市）は、千島、歯舞群島近海の豊富な漁業資源を求めて毎年道南や本州の東北各地から集まる三万人の出稼漁夫や女工を迎える玄関口として非常な好景気をみせ、昼夜を問わず賑わいを見せていた。

だが、昭和二十年（一九四五年）七月、アメリカの艦載機が群をなして来襲、二日間にわたって爆撃されたため町の八割を焼失、町民は裸一貫になって終戦を迎えた。しかもソ連の一方的な北方領土の占領によって故郷を追われ、いのちから逃げるのびてきた島民たち。千島近海から水揚げされる漁業資源で成り立っていた根室の町は、それら島民の悲嘆とともに谷底深く突き落とされた状態になった。

こうして敗戦の混乱の真中に放り出された根室に住む人たちは、衣食住の困苦を強いられ、その苦痛に耐えきれず、その地を捨て去るものも多かった。また、ソ連に占領された歯舞群島に、終戦

によって日本軍が退去するさい残してきた食糧を取りにいったソ連軍に射撃され、ついに帰らざる者も幾人かあった。

このような状況下の根室に勤務する警察署長以下二十数名の警察官は、町民の困苦を困苦として、『町民と共に歩め、そして苦痛に耐え忍べ』の署是を胸にたたみ込んで、日夜を治安維持の戦線にたたかっていたのである。

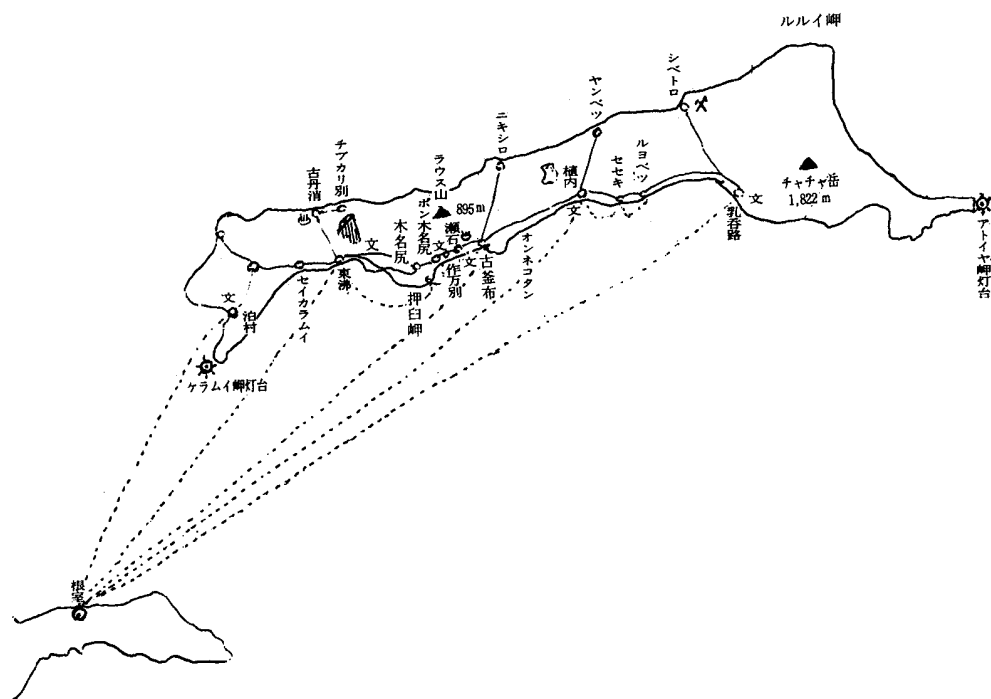
◇

◇

千島および歯舞群島——。いまなおソ連領にあるこれらの島々を日本固有の領土、父母や兄弟姉妹など祖先が眠る故郷として、返還を悲願とする人たちは、根室町やその近郊に居を求め、郷里に帰る日をひたすら待ち望んでいる。

この人たちにとって、なつかしくも悲しい島、悲願の島とは、どのような島なのだろうか。また、どのような生活の島であったのか。当時、警察に職を置き、北千島、南千島を巡った経歴者としては、現職では私が最後ではないかと思う。

そのようなことから以下、飛び歩きの北方領土の一端をご紹介します。



国後島の思い出

毎年春秋に三万余の漁民が渡島する国後島は、千島、齒舞群島の中でも特に漁業資源の宝庫であった。

長さ一四〇キロ、周囲四〇〇キロといわれる細長く毛虫のごとき形をしている島で、千島列島中では択捉島に次ぐ大きい島であり、当時の居住人口は三万五、六千人ほどだったと思う。島の間地キナカイを境界に、南は泊村、北は留夜別村の二村に分割、自治行政が行なわれていた。

〈泊〉

根室から動力船で三時間、ケラムイ岬灯台を右手に眺めながら岬沿いに進むこと三十分で泊村に入港する。

ここは役場の所在地で戸数百戸程度、国後警察署（警部署長、次席は巡査部長、巡査八人、庶務、会計、司法、行政（労政）、外勤、衛生、警防などの職務に分担）があり、泊村に巡査駐在所二カ所、留夜別村に巡査駐在所一カ所、部長派出所一カ所が設置されていた。この泊村は、根室に面した海から各種の魚類や帆立貝などの水揚げが多く、また千島桜、その他の盆栽づくりも盛んで根室方面に出荷されていた。さらに温泉の名所も多い。

〈東 沸〉

泊村から奥地へ進むには駅通を結ぶ馬の背で山道を通らねばな

らない。海岸沿いには岩が切り立って通行ができない。

馬の背に三里半、ちょうど山道の間間に駅通所が一軒あり（当時の駅通主は奥山太郎氏）ここで馬をとりかえ、さらに四里の山道を通る。国後島は人跡未踏の原始林におおわれているため、大木の蔭から太陽の光が現われ出すところに、ようやく東沸に着く。

七里の山道と原始林から解放されるころ、右手に青々とした海が見え出し、目の下の海岸の景色と散在するセイカラムイの漁村を眺め、やれやれ一息つき、さらに馬の尻に一むち入れたものだった。

七里の山道は、原始のままの樹木が繁茂し、北海道独特のトド松、白樺、ナナカマドなどが多く、天高く遙かに繁茂して薄暗く、聞こえるのは鳥の声のみで、ひとしお静寂さを感じる。

木の根に腰を下ろして休憩していて、頭上から木の葉の落ちるのに不審を抱いて見上げると、はるかな葉の繁みから熊が下りはじめているのを発見して逃げ出したことも度々あったが、山道を通った人なら、一度や二度、必ずこのように熊と遭遇する機会があった。

筆者は東沸から西海岸に行ったとき、向かい風の方向から突然、熊が現れたため馬が飛び上がり、駆け出した馬の背から振り落とされて、馬には逃げられ、止むなく歩いて引き返した経験があった。

熊は利口な動物で、必ず風上に潜んで獲物の近づくのを狙っている。だが、風下で人間の匂いや声などを聞くと逃げ去る。ある

とき馬の後方を尾行してきている熊を発見したので馬を止め、馬上から大声で叫ぶと、熊は驚いて立ち上がり、逃げ去った。

東沸村東沸は戸数六十戸、小学校、郵便局（請負）、巡査駐在所、林産物検査員詰所などがある。東沸湖の川口に位置し、川は市街地の中央を流れている。时期的に鮭、鱒、ひめ鱒などが群をなしてのぼるのが見られる。四キロほど上流の東沸湖には鮭鱒の孵化場があった。

昭和のはじめ（一九三〇年）、リンドバーグが太平洋横断初飛行のため飛来し、東沸湖内に不時着したときは、飛行機をはじめて見る島民で大騒ぎであった。また、根室方面から発動機船を借り上げて、新聞記者や政府関係機関がつぎつぎに東沸村に乗り込んできたが、ある新聞社のチャーター船が一里ほど離れた港、木名尻部落に上陸して時間に間に合わず、飛行機の飛び去ったあとに到着し、取材できなかったことを残念がって泣いていた記者がいたのが今も思い出される。

東沸村は、国後島中のもっとも狭隘な地域に位置し、西海岸まで約二里歩くと反対側の海岸に到着することができるが、その西側は岸辺がけわしく岩が切り立っており、東側のような平地が少ない。また、波風も荒く、漁など非常に危険な操業が多い。ここは古丹消部落で二十戸くらいの民家連櫓し、全島唯一の湯の里であり、千島山脈から湧き出るお湯は海中や陸上いたるところに噴泉している。

スキーで有名な猪谷千春氏の父、六合雄氏が、ご夫人とともに

二年間定住し、スキージャンプの練習をしていた。ちょうど千春氏が誕生し、奥さんが千春氏を背にスキーをしている姿を見て、その上手なのに驚いたものである。六合雄氏からは、毎日スキーの滑り方について教わったが、あの太ったからだで鳥のごとく、自由自在に滑り飛ぶ姿を、島の人たちとともに驚嘆して眺めていた。そして、それ以来、島民たちは従来のテシマ（カンジキのこと）から便利なスキーに乗りかえて、冬山の歩行、あるいは郵便配達などに皆スキーを利用するようになった。

この地は魚にも恵まれ、また木材の出荷などあり、豊かな生活であった。しかも正面に羅臼山をひかえ、知床岬を右に遠望して、風光の美しいところでもあった。部落に一軒ある温泉は、いつも真つ白な湯花を浮かべ、一日の仕事を終えて入る湯は、なんともいいようなない気分にかけてくれた。

この古丹消から奥地は海岸沿いに一里、チブカリ部落、飛島木工場、その他民家が一五、六戸、東沸湖を背にして建っている。ここからは海岸沿いには「帳場泣かせ」「金玉よごし」など島民が難儀した、かつての難所が連なり、荒波と険しい岸壁をもつて進むことは困難である。

〈東 海 岸〉

東側は東沸村より村境いの古釜布まで約八里あり、平坦な砂鉄の浜が多く、隣部落のトドホッケより海岸線、押白岬、木名尻、ポン木名尻、作万別、中ノ古丹、瀬石、古釜布に至る。

トドホッケから民家が建ちならび、漁業の地として国後に盛んな場所、藤野缶詰工場、加隈工場ならびに直営漁業を含め、三月に入ると、多数の男女労務者が本州や道南地方から渡ってくる。かれらはタラバ蟹缶詰工場などに働いて、六月ころになると蟹の水揚げ盛期も終わるので内地方面に引揚げるが、残って夏場の漁であるホッキ、帆立、スケソ、鮭鱒の缶詰工場などに働いていた者も九月ころにはほとんど根室へ引揚げ、出身地へ帰って行く。季節的には来島した労務者の引揚げが終了するところから、島は一段と秋深くなり、島独特の静けさに戻る。

東沸村から海岸沿いに奥地へ三里、作万別には小学校などがあり、各缶詰工場や直営漁場の捨てるホッキ、帆立の空貝が、トロツコ数台を連ねて捨てられるので、波打ちぎわ一帯は炭鉋のズリ山のごとく、真つ白い貝殻の山であった。

水揚げされた原料は、それぞれの工場の原料部に回され、女工さんの女工節に交って、タラバ蟹、帆立、ホッキまたは鮭鱒が調理され、缶詰として殺菌されたのち箱詰めとなつて、十万、十五万箱と出荷された。各缶詰工場は、タラバ蟹の最盛期に入ると毎日、大漁旗を立てて入港する船から陸揚げされる原料の加工に手が回らず、空籠に入れて、どんどん捨てたものだった。

〈古 釜 布〉

東沸から海岸沿いに八里、島の中心地古釜布村に到着する。途中ラウス山（海拔八九五メートル）のふもとに瀬石という東側唯

一の温泉部落があり、海中と砂丘の各所に真つ白い煙が噴水とともに立ちこめている。ここに住む人たちは、この湯煙を利用して煮物などをする。

この古釜布には戸数二百戸が密集し、民間飛行場もあったと聞いている。尋常高等小学校、巡查駐在所、郵便局、旅館、飲料店など数多く、また全島唯一の築港があり、各地からの入港船、避難船などで賑わいを見せ、市街地には加隈、藤野の各主管缶詰工場があつて国後島内では、もっとも大きな街であつた。ちょうど全島の中心の位置にあり、根室まで動力船で四時間半で到着できる。

この古釜布は、最近ソ連から墓参を許され、全島各地に祖先の墓を残して引揚げた島民は、この地を肉親の眠る地として思い出深いところとなっている。

〈留 夜 別〉

古釜布から二里の山道を奥地へ入ると留夜別の村界に達する。

この境界からさらに二里ほど山道を抜けて海岸に至り望むと、チャチャ山のふもとを長々と海中に突き出した岩壁が遠くかすんで見られる。

この山道は、島民の救済事業として工事を行なつたので道幅も広く、歩く道路としてはいいほうである。それでも背より高いフキが葉を広げ、その下をくぐり抜けて行かねばならない場所も各地にある。たまたま春秋は、子連れの熊が冬眠から覚めて、餌を

求めて歩き回るのに出合うので、山道を行くときはラッパを吹くか、大声を出しながら行くというように、警戒しながら通過しないと危険だった。とくに熊笹の茂った場所の一人旅は、馬に乗っていても非常にさびしい。

なお、この島民で熊獲りの経験者は鉄砲などは使わない。出沒しそうな場所に熊を待ち伏せて、現れたら急に熊の前に飛び出し、驚いた熊が立ちあがった隙に腹の下にもぐり込み、山刀で腹を刺して殺す。熊の手足は横と前後には非常に強いが、からだの内側には弱い。一歩誤れば熊に殺される恐れがあつて危険であり、勇気のいる行為であつた。

留夜別の境界から海岸沿いに植古丹、チタルベウス、植内、瀬石、留夜別、乳吞路に至り、この間十二里の距離となる。

植古丹は漁民の生活も豊かで、主として昆布の水揚げによって一年の生活費がまかなわれているといつてもよい。六月から十月いっぱいには砂鉄の浜に昆布を干し、乾燥次第、重さ八貫目ごとに束ねられて外国に積み出されていた。部落で漁業以外の生活者は、小学校分教場の先生がひとりいるだけであつた。

植古丹から海沿いに一里半、チタルベウスに至る。ここにも罐詰工場、原料工場、その他直営漁場が五、六カ所あり、三月ころからタラバ蟹、帆立、ホッキの罐詰工場に働く男、女工の多くは函館方面から来ていた。

昭和六年（一九三一年）春、チタルベウス沖に停泊中の木材積とり船（約五、六千トン級）の船長たちが上陸し、罐詰工場に至

り接待を受けて帰船したが、その際お礼として工場の男、女工を船に招待したいとの話合いとなり、翌日ハシケ船二隻に多数の男、女工を乗せて出航しようとしたとき、横波をうけ二隻とも転覆して多数の死亡者を出した遭難事件があり、翌年、この地に殉難碑が建てられた。

チタルベウスの川、俗に千国川には毎年春夏にかけて鮭鱒が群れをなして遡る。村の人たちはヤスを用意して捕獲し、塩蔵しておいて冬期間の食料にするが、最盛期になると魚は川に捨て、筋子だけを石油罐か缶などに塩蔵し、背負って川を下り帰宅する。また、群れをなして上流にのぼる鮭の中から大きい魚だけをねらって捕獲し、小さい鮭は川に捨てて帰る。

また、山女が大漁に釣れるので、川を釣りのぼって二、三日は上流に泊り、日中は釣り、夜は焼き干しにして石油缶に詰め、二缶ほどになったら川を下って帰宅し、内地方面へ送って販売するものもあった。

植内は古釜布から海沿いに五里の地にある。五十戸ほどの人家が密集し、小学校、郵便局、巡査駐在所、営林区担当区員駐在所、旅館や商店などがあるが、主として昆布を採取して生計を立てている漁村である。

当時、採取された昆布（真昆布、立昆布、短昆布）は、乾燥のうえ八貫目ごとに梱包して一から五等までに分けられ出荷された多量の昆布は、根室の海岸倉庫に山積みとなり、外国方面の取引が決定するまで保管されるため漁民には資金が入らず一時は、

その日の生活にも困る漁民もあったので、村では、これらの貧困家庭を救済する事業として道路工事業を起こし道路の拡張などをかけた。

このような漁民に対して昆布を担保に資金を融資する金持が部落ごとにおり、これらの親方に水揚げ量を詐取され、親方から借りた借金のために働くといった具合に、何年たっても貧乏な生計にある家庭が多かった。

漁師の中でも一部の親たちは、このような零細漁民の生活から脱して、子供たちだけでも上級の学校へやり、なんとか漁師以外の職に就職させたいと願うが、結局は親方に対して顔が悪いからと断念、小学校を卒業すると父親と一緒に働かざるを得なかった。もちろん子供たちの中にも心の奥深く、なんとか上級学校に進学したいとの念に燃え、自ら中学国民講義録などを取り寄せて、夜間に小学校の先生宅へ通いながら勉強を続けている者も多かった。

この植内から海外沿いに一里半ほど奥へ進むと瀬石温泉、それから、さらに一里ほどで留夜別部落に至る。このあたりに散在する民家は、昆布とりが主業である。

留夜別から奥地に進むため三度目の山道を通らねばならない。

この山道の間際に留夜別駅通があり、二里の山道は人跡もまれな地として、熊の出没も多く、危険な山道であった。山道の大半を過ぎるころ、前方はるか乳吞路が見える。爺々山が目前に進行をはばむかのごとく聳え立ち、裾野は国後島最東端のアトイヤ

岬となる。

乳呑路は戸数七十戸ほどが密集した部落で留夜別村役場の所在地。巡查部長派出所、病院、旅館、商店などがあり、根室から動力船で七時間のところ。五十トン程度の動力船が定期便として週一、二回往復する。

乳呑路から奥地にも海岸に散在する民家があるが、択捉島との境に接して風波が荒く、チャチャ岳の裾野が海岸にけわしく切り立って平地が少ないため、漁業を営む者も少ない。

チャチャ岳は海拔一、八二二メートルあり、千島富士と呼ばれて、内地方面からの登山者が毎年訪れる。

乳呑路から島を横断すると西海岸に出る。ここは全島中もっとも幅員の広い地域で東から西側まで六里半ある。

ここにはシベトロ金山、海保金山などがあり、昭和五、六年（一九三〇—三一年）ごろは稼働人員約三百人ほどが入山し、精錬工場その他の施設も作られて活況を呈していたが、火薬などが多量に使われるので、それによる事故も非常に多かった。

はるかに望む国後島

国後島は、南に位置する島だけに、さきに述べたごとく、いたるところ漁業といわず山物といわず、豊富な資源があふれていたことは事実であるが、島民の大半は、日常の生活を維持する程度の業に甘んじて、なんらの改善策もなく細々と生計をたてていた。

だが、内地方面から渡島する事業家は、大量の資材と資本を投入して漁業を行ない、水揚げされたものは工場で缶詰として、どんどん搬出し、また金山や硫黄山、鉄山、銅山など、千島山脈の鉱石採取にも相当の資本が投ぜられて、事業は盛大に行なわれていた。また木材にしても伐採したものを冬期間に海岸まで搬出し、四月ころになると五、六千トン級の大形積取船が入港して、それを内地方面へ運び出していた。

だが、このような事業も終戦近くになると、アメリカの潜水艦も島の周辺に出没しはじめて、各事業家も危険と不安から中止のやむなきにいった。金山は日支事変の中期ごろから中止せざるを得ず閉山してしまった。

こうして盛況をきわめた各種事業も終戦近くに自然閉業し、何百人かの労務者なども島を去っていった。

この国後島は気象的にみて、千島山脈が島の中央を走っているためか夏季には雷が多いのが特徴だが、風光は正面はるかに色丹島、裏面は羅臼、知床半島を背に後方には択捉島が見え、雄大壮麗、表現のことばを知らない。

冬期間の流水が二月末ごろに来ると、五月ころまで根室方面への航海が絶える年がある。このような年は内地からの音信も絶えることになり、新聞や手紙も一カ月分一度に配達されることになり、駐在所に勤務していると新聞も読めず苦勞したものである。

あれから幾十年、いまソ連占領下にある北方領土を想い、島を望める道東海岸に住みながら領土の返還を願う漁民たちは、ソ連

に抑留される危険に身をさらして、いまでも苦しい操業で命をつないでいるのである。

北千島の警察官

千島列島の治安を受持つ警察官は、南千島を国後に、中部千島を紗那に、北千島すなわち松輪島、温根古丹島、幌筵島、占守島は根室警察署の管轄とされ、さらに根室近海の歯舞群島には根室警察署が管轄する色丹島巡査駐在所、志発島巡査駐在所、水晶島巡査駐在所、多楽島巡査駐在所が設けられ、勇留、秋勇留島を含め島民の治安維持の任にあたっていた。

北千島は、盛況を極めた北洋漁業の基地として、道内はもちろん内地方面から多数の出稼男女が四月から十月末にかけ、日魯漁業に所属する工場や漁場で鮭・鱒漁業に稼働していたが、毎年三年、四年と出稼を続け、とくに危険な北洋の荒海を渡って働くため男女工ともに気が荒く無秩序の者も多かった。また男女関係の情交から殺人未遂、傷害事件などが発生した。また男女間の人事相談の持込みも数多くあり、これら事案の処理ならびに北洋に働く漁民生活、島全域の治安を守るため幌筵島に警部補派出所、巡査駐在所二カ所、占守島に一カ所が設けられ、それぞれ警察官が配置されて、悪質な事案は月一、二回入港する日魯の社船に乗せ根室警察署に連行し、軽微な事案は北洋漁場の切揚げを待つて処理された。

色丹島

色丹島は、歯舞群島の東に位置した島で、警察関係は根室警察署色丹巡査駐在所があり平穏な漁民の生活が維持されていた。また同島は絶景の地が多く、入り込んだ湾は中部漁業出漁船の避難港でもあった。

また同島の近海は入海深く、ためにタラバ蟹などの生息の地とされていた。

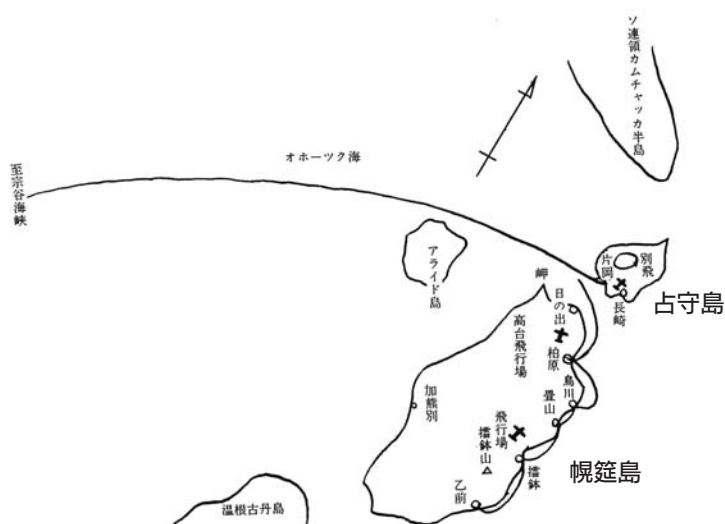
歯舞群島

志発島は歯舞群島の中で一番大きな島であり、水晶島、多楽島とともに巡査駐在所が設置されていた。これら歯舞群島には藤野缶詰工場があつて、住民は工場に働くほかスケソ鱈、昆布、ワカメ、帆立、ホッキ貝などを水揚げして生計をたてていた。

同島周辺の海は、三月から四月にかけて国後島ケラムイ岬、水晶島ならびに根室港まで流水群が押し寄せ、一カ月ぐらい氷結が続き、航海の船もなく孤立の状態になる年がある。筆者は三月初旬に漁船（定期船）に乗り根室に向う途中、ケラムイ岬付近に至るころ、急に猛吹雪に合い氷原に進路をはばまれた。一進一退、吹雪の中、氷結とたたかいながら二昼夜余、東の空がしらむころ、ようやく氷原から脱しようとしたところに人の歩く姿を望見した。近づくにつれて氷原の蔭が陸地であり水晶島であることが分かつ

た。進路が西にあるのに東南に進み、齒舞群島まで迷路をたどっていたことに驚いたのだった。

このように齒舞群島は平坦な島であり、島民は同島周辺に繁殖する昆布を採取して内地方面に出荷した。これらの昆布は北海道の名産とし、今もなお漁民生活に切り離すことのできない産物であり、危険な、そして悲しい拿捕事件が続くことのない産物であればならない零細漁民の、せつない悲願としての安全操業補償の叫びは今後も続けられることであろう。



北千島

松輪島、温根古丹島、幌筵島、占守島など日本領土最北端の地である北千島は根室支庁の管轄下にあつて、気候風土は四季のうち夏が少なく、きびしい北洋の風波が荒いために島には定住する人も少ない。明治の初期千島を探検した郡司大尉の碑が、占守島南端片岡の丘に建立されていて、日本人最初の踏蹟を印して昔年探検の苦勞を偲ばせている。

この占守島には、別所二郎蔵氏のご家族が定住しており、魚を獲つては根室へ運搬し、帰りは越年物資を求めて帰島していた（現在は根室市牧ノ内に居住）。

定住者の話によれば、島には野生動物が生息し、兎、狐、テンなどが多かったが、北洋漁業が盛んになるにつれて自然野生動物も絶えて生息しなくなったといわれている。

北洋漁業

北千島（幌筵島、占守島）は北洋漁業の基地であり、柏原湾、片岡湾、長崎湾には日魯の漁業基地に所属する独航船の船団が集結しており、幌筵島柏原湾は港も改良されて二、三千トン級の船は岩壁に接岸できた。日魯会社の主管工場、その他各産舎（原料部）があり、会社の重役（地方部長）ほか多数の社員が勤務し、工場にもまた工場長ほか多数の男女工などが働いていたが、これ

らの人たちは、毎年四月から十月までの盛漁期を過して内地方面または道内に引揚げてしまう。

女工さんも柏原に百人ほど来ていたが、宿舍が男工用、女工用と各二棟（一棟五十名）あり、夜は夜警番を定めさせて風紀問題の発生防止に努めさせた。

五月から十月までは北洋の紅鮭の季節とされ、数百隻の独航船によって水揚げされる鮭は、壘山第一、播鉢第一、第二工場、長崎第一工場、柏原湾第一、第二工場の各原料部に陸揚げされて缶詰とされ、かつ塩蔵された。

北千島は野菜の生育が悪いため野菜が欠乏する。乾燥野菜は食べるが三度三度、鮭を中心にした料理を食べなければならず、慣れるまで食事がとれず困る人も多かった。

同島付近の海は非常に冷たく、五分間も入っていたら生命が危険とされたほどだが、カレイなどは沿岸の波打ちぎわに群をなして泳いでいて手掴みで獲れた。筆者も鮭に飽きがきたので、このカレイを獲って焼魚として食べようと乾燥したが皮と骨ばかりで食べるところがほとんどなく、捨ててしまったことがあった。

また同島周辺の海岸では、鰯が一本釣りによく釣れ、日ノ出漁場、加熊鰯工場、烏川鰯工場の男女工の手により処理され乾燥された。

このように北千島は、盛漁期は明けても暮れても鮭々の大量一色に全島が沸き立っていた。また、幌筵島の山は六月ごろになると北千島草が綺麗な花びらをつけて無数に咲き誇り、また、ガン

コウランの草木を踏みしめ山の中腹に至れば千島フレップが密集し、その風光は言語に表現することをしらないほどであった。

この北千島―日本人が開拓した南、中部ならびに北千島も太平洋戦争勃発以来、次第に戦争の危険が迫ってきており、昭和十九年（一九四四年）ころに至っては、北洋漁業も米国の潜水艦に脅かされ、道内との連絡航行の日魯社船も途中でアメリカ潜水艦の魚雷攻撃を受けて沈没させられるなど、幾多の犠牲者が北洋の海底深く消え去っていった。

したがって南太平洋上各島警備の日本軍玉碎の情報が同島にも伝わるころ、北洋漁業も一日一日と危険を増してきて、島で働く男女工たちも生命の保障が得られない毎日が続いた。

北千島駐とん部隊

幌筵島柏原湾に北千島警備の任を帯びた陸軍師団があつて、陸軍航空隊二十数機、占守島片岡湾に海軍航空隊、別飛海上航空隊などが常駐し、冬期間は道内に帰り、雪解けころ島周辺の警備の任を帯びていたようであった。

柏原の右方小高い兜山には海軍の電探基地があり、同所から一八〇キロ周辺の探知を明らかにしていた。この基地内立入り制限はきびしく、憲兵のほかは警察官以外立入りを禁止されていた、筆者はアメリカの飛行機が来襲すると電探基地に至って飛行機の来襲方向、時間、機数を確認し、それによって民間人に退避を

命じ、各工場または各漁場の残留者の無いことを確めたのち自らも退避していた。

空襲は昭和十九年（一九四四年）六月ごろからは一日に四回平均あり、朝早くから夜半に至るまで警報が鳴りひびき、はじめのうちは警報ノイローゼになるのではないかと思われるほどで夜は寝る暇もなかった。

占守島、幌筈島は陸海空警備の陣容を着々と強化し、兵舎は土の中に埋め完全遮断されていたため、空からも海上からも兵舎は一つも発見できなかった。

そのようなことから同島には地崎組、伊藤組その他の組が軍の工事に働き、また軍に徴用されて同島に送り込まれた挺身隊員、その他朝鮮の方々も多数、軍の工事人夫として働いていた。朝鮮人の方々は軍の労務者として連れてこられたためか、毎日のごとく朝鮮に帰してもらいたいと、団体を組み軍に要求しては憲兵の軍刀の鞘で打たれ、泣き泣き我われ警察官にそれを頼んできた。彼らは警察官より頼るものがない身分であった。

北千島警備警察官の派遣

根室警察署の管轄にある北千島の警備警察官は、昭和十六、七年（一九四一―四二年）頃までは希望者が志願して派遣され越年して交代したが、アッツ島玉砕、キスカの撤退など、北方の気運も暗く、日夜アメリカの空襲、潜水艦の出没などによって、小樽

港並びに道内各港から千島に向う軍用船、日魯の社船の数隻が魚雷攻撃を受け北の海深く消えさつて、日一日と危険が増大したため、毎年派遣する警備の警察官も、いつか志願から命令派遣の止むなきに至った。

終戦の前年の昭和十九年（一九四四年）春、北千島警備の派遣警察官の銓衡方について、道庁警察部から根室警察署長に指示された。最初の銓衡範囲は隊長警部補一、隊員四名の計五名を選出した。そのとき某警部補は自己の理由と称し拒絶した。第一条件としては独身者であったが止むなく村松警部補（現在帯広在住）が命ぜられた。なお隊員は某巡查（警部退職）は妻の親が拒んだため銓衡から除かれ、他の某巡查（現職警視）が選出されたが、独身ではあったが警察官の勤務経験が浅いことから除外され、最終決定として戸沢巡查、笹木巡查（いずれも独身、翌年殉職）、それに筆者が命ぜられた。ちょうど新婚二十日目のときだった。

他の二名は、小樽水上署勤務の上田平巡查、函館水上署勤務の滝沢福馬巡查と決定され、隊長以下六名編成で根室警察署長から北千島派遣警備警察官の辞令を受け、署員一同と家族の見送りを受けて、札幌に集合して任地に向うべく根室を出発した。昭和十九年（一九四四年）五月九日のことであった。

道庁警察部外事課に到着、時の警察部長、宮脇参三殿に警備派遣の申告を終了、札幌グランドホテルで盛大な送別会を開いていただいた。そして翌朝、外事課長室にてそれぞれ頭髪を切り、留守中の家族に対する遺言を書き残して保管してもらい、直ちに庁

舎前で記念撮影して小樽市に向け出発した。

小樽港からは北千島に向け出発準備中であつた陸軍御用船『高島丸』（六千トン級）に乗船した。船には陸軍砲兵隊が、甲板に砲を据え付けて進路警戒の任についていた。

出航船団は駆逐艦一隻、海防艦一隻の計三隻となり、小樽港を出港と同時に米国の潜水艦の攻撃を警戒してジグザグ航行で進んだ。やがて宗谷海峡を無事通過、船は一段と警戒のきびしさを増した。そして、そこから一路、北千島に進路をとり直行した。

菜種の花が黄色く咲き誇る畑の色彩を頭中にし一昼夜、その夜半に至るころ、オホーツク海はきびしい北の強風にあおられて大時化となり、三角波に船は大揺れに揺れた。その中をさらに北進を続けるうち、こんどは猛吹雪に見舞われた。そして波のうねりも小さく感ずるころ、突然、船べりにドシンと何かが衝突、相当大きなショックを感じた。甲板上の警戒員の足音が急に乱れて、「流水だ、流水だ!!」と叫ぶ声が聞えてきた。

船は砕氷船であつたので、後退しては流水群に突込み、前進しては後退しながら、ようやく氷を脱出することができた。そのころ、どうやら雪も止み、東の空が薄明るくなつて、はるか阿頼渡島が一線上にポツカリと浮かびあがつて見えてきた。そして、さらにその後方遠く幌筵島が、真っ白く雪に被われた姿で望見された。

『高島丸』乗組員の話すところによれば、宗谷海峡の通過時と阿頼渡島付近を通過するところが敵潜水艦の攻撃を最も受ける場所

であるということ、乗組員全員が、救命具を付けるよう指示された。そして護衛の駆逐艦、海防艦も左に右に警戒が激しくなりだした。甲板と船首、船尾の警戒員も増員され、乗員一同、危険が目前に迫りつつある緊張に身うちが引き締まった。

緊迫した第二の難関も無事通過した船団は、いよいよ北千島占守島、幌筵島日の出岬を通過、間もなく駆逐艦、海防艦は片岡湾に、『高島丸』は柏原湾に入港した。

はじめて見る幌筵島。高嶺七、八百メートルもあろうか、その幌筵の山を背に、日の出岬より湾曲に柏原湾としての港、そして港に碇泊している独航船、その数の多さに、まず驚きの目を見張った。三百隻にもものぼるのではなかったろうか、よくも集まったものだと思った。『高島丸』が岸近くまで入港したころ、軍の舟艇が迎えに来た。柏原は海上から見るとかぎり日魯会社の工場などが見えるだけで、軍の兵舎のような建物は見当たらなかった。内心、これは大変な所に来たものだと考えた。

舟艇に乗せられ、いよいよ上陸となつた。

はじめて見る北千島の地―上陸してまず驚いたのは、真っ白い布で頬かぶりをした日魯会社の女工さんが、たくさん海岸沿いの道の雪投げに働いていたことだった。その姿を見て、何かしら意の強くなる感じがした。

さらに各工場や漁場、兵舎ならびに軍に付随する各種営業所、それに中原慰安所が一号館（将校用）二号館（下士官用）三号館（兵隊用）に区分され建っていた。あとでわかったことだが、各

館に娼婦が十二、三名いたが、これら女性の身分は半軍半民といわれ、警察の取締りはできず、もっぱら憲兵に取締り権限があった。警察権は彼女らの身体の保護といった消極的権限だけであった。

北千島の勤務

警部補派出所には立派な部屋、留置場もあった。六名の勤務はそれぞれ分担され、播鉢には笹木巡查、戸沢巡查長崎には滝沢巡查柏原には村松警部補、上田巡查と筆者が勤務することになった。

勤務内容は、まず民間人の把握、各工場内外の視察内偵、警備情報の蒐集、労務管理の状況把握、半軍半民者の軍に対する協力体勢の動向把握などだったが、これらすべてが情報とされ、無線送信所に至り暗号電送として外事課に報告した。

六月ころになつては毎日アメリカの飛行機が柏原上空に來襲し、焼夷弾や爆弾を投下しては引揚げて行き、やがてはそれも、だんだんはげしくなり、朝昼夜と一日に四回にわたつて來襲するようになった。そのたびに山裏の防空壕に逃げ込むため、ほとんど仕事の手が付かないほどであった。

日本の飛行機は高度の差と速度の差のため迎撃できず柏原付近をぐるぐる回つて警戒する程度であった。とくに米国爆撃機は夜間と雲の多いときに來襲し、目標を定めて爆弾を投下し引揚げてしまう。日本軍の飛行機は曇った天候のときや夜間になると飛行

ができないので敵機は悠々柏原の上空に飛來し、高台の飛行場を爆撃し、発電所に爆弾を投下する。夜間などは陸海軍の探照燈が各地から何十本となく敵機をとらえるため照射する。そして高射砲も各基地から打ち出すが、そのころは敵機も焼夷弾を投下し、その明るさを利用して爆弾の雨を降らせる。防空壕に避難しても生きた心地がしない状態であった。

幌筵島と占守島との間はランチ（軍の舟艇）で約十分で往復していた。よく軍の歌として、

へ港柏原 朝霧夜霧、

沖で鷗の鳴く声聞けば

向い占守に雨が降る

と歌われ、霧の多い島でもあった。だが、天候が良い日は幌筵の山に登り周囲を望見すれば、占守島は眼下に手にとる如く見ることができた。そして占守島の海峡を分ちてソ連領カムチャツカ半島が望まれて、ソ連人の漁場なのである、働く人の姿、または煙が立ちのぼるのが目に入り、ときどき五、六、〇〇〇トン級の大貨物船が、占守島とカムチャツカ半島の海峡を通過して北上して行くのが見られた。

オホーツク海方面を望見すれば、幌筵島の山影はるか海上にくつきりと浮かんで阿頼度富士が見えた。だが、その裾深く敵の潜水艦が潜んでいることを考えると、やはりここが危険な島であることが印象づけられた。

潜水艦の出没も昭和十九年（一九四四年）七月ころから島の近

海に寄っては潜水するなど、電探による確認も日増しに多く、ひしひしと全島の警備警戒もきびしくなっていた。われわれが小樽から乗船してきた『高島丸』も二度と柏原には姿を現さなかった。軍に入った情報によれば、千島から帰り再度、千島に向ったままオホーツク海の海底に沈められ、数多くの兵士ならびに軍需物資も船と共に沈んでしまったのであった。

その後八月、九月にと日魯の社船、軍の御用船が、行きと帰りには必ず敵の魚雷攻撃を受けて海底に沈んだ。

そのたびに柏原に勤務するわれわれ警察官に連絡通報があり、直ちに暗号電報により外事課に報告された。

北千島に派遣されたわれわれも北千島には何とか来たが、帰りは果して無事かどうかからず、あるいは島にいるだけの命かもしれないと、つねに語り合い覚悟を決めていた。

北千島に派遣されて何よりも待ちのぞんでいたのは、内地から家族の便りが来ることであった。

七月に入ったある日、夏空に晴れた午前九時ころだった。柏原湾司令部の看護婦や衛生隊員が担架を持って海岸に走って行く情景を見て、われわれも直ちに舟艇に乗り込んだ。

阿頼度島を通過して三十分ほどで柏原湾に入ろうとしていた軍の御用船『笠戸丸』六、〇〇〇トン級が、敵潜水艦から挟撃の二発の魚雷攻撃を受け、挺身隊員など約二、〇〇〇名、そのほか兵器多数にわれわれ家族の便りなどを乗せたまま沈没しようとしていた。

魚雷は船の前部にあたったため、前部のハッチ（船艙）に乗っていた何百人かの兵士は船とともに海底に沈んだ。

後方のハッチ内の兵隊ならびに軍属や挺身隊員は、われ先に海に飛び込んで泳ぎ、船から離れようとした。しかし『笠戸丸』がエンジンを止めてなかったため、後方のスクリューに巻き込まれ、十数メートルの血柱を立てた。

助けに出動した舟艇も『笠戸丸』が前進しながら船首から沈みかけつつあったので傍へは近寄れなかった。そのため救助に手間どっているうち、船は一時間足らずで轟音荒波を立てて海中深く消え去ってしまった。舟艇に乗ったまま目前でその悲惨な光景を眺めていて戦慄を感じた。海中に飛び込んだ者も七月とはいえ北の海は冷たく、ためにほとんど死亡し、助かった者は数える程度であった。

その後、死体は一カ月にわたり占守、幌筈島の周辺の海岸沿いに流れた。筆者と上田巡査の二名は、島の周辺を絶えずランチで巡視して死体を収容した。一カ月余の死体は、形こそあれほとんどが腐爛死体で、頭髮と鬚だけが長くのび、波にゆらゆら揺れて流れていた。

これらの漂流死体は数十体にのぼったが、引揚げ検視の後遺留品とともに埋葬した。このような多数の死体を処理したためか、笹木巡査らは夜半にうなされ、筆者らも、なかなか寝つかれず閉口した。

このように潜水艦の攻撃によって轟沈または撃沈された船は、

われわれが帰るまで十七隻に及んだ。この事実はすべて暗号電報により報告された。

いよいよ北千島の空も九月、十月に入り空襲が激化、潜水艦の攻撃、出沒もはげしくなり、加えて北風も肌身に冷たく感ずるようになった。そのころ日魯会社も切揚げ準備にかかり、各独航船も帰ることになった。そして日魯の重役その他の社員は、会社自慢の碎氷船、絶対不沈の新造船と称された『白洋丸』に乗船、帰途のため柏原湾を出港した。

そのころ、警察部長から村松隊長に対し「警察官の越年警備必要ありや否や」の電報が届いた。筆者は越年の組であったが、独身の笹木、戸沢の両巡査を柏原湾警部補派出所に越年させ、そのほかの者は引揚げるように再度命令が届いた。

しかしながら、帰る船がつぎつぎ撃沈されており、日魯の社船『白洋丸』に乗船を申込んだが満員であると断わられてしまい、当分乗船の機会が無くなった。

その『白洋丸』もまた出港間もなく、松輪島周辺の洋上で敵潜水艦の攻撃により轟沈させられ、日魯会社重役の経塚部長、その他の社員、多数の傷病兵らも船とともに海底に沈んだ。

島の状態は日に日に険悪化し、乙前地区、播鉢飛行場が米艦の艦砲射撃を受け、一夜にして多数の飛行機が破壊されてしまった。

その後警察部からは再三にわたり連絡があり、駆逐艦に乗せてもらいうよう海軍の了解も得たので一日も早く引揚げるようとの指令を受けた。村松隊長以下われわれも現在までの戦況から小さい

船に乗るほうが安全と考えたので、日魯の社船で一、〇〇〇トン級の貨物船が入港した機会にその船に乗り込んだ。乗船後は運命を天にまかせるほかはないと考えた。

時は昭和十九年（一九四四年）十月三十日であった。

船には乗船したものの潜水艦の接近や敵機の来襲があったりして、出港したり戻ったりした。陸地と違って逃げ場は船の底よりなく、まったく心細い日々が続いたが、いよいよ出港のときが来た。

陸からは来々四月まで残留し、その後は交代か全面引揚げになるかわからない戸沢、笹木の両巡査が、ランチに乗り、「君らが無事内地に帰還できるよう島で祈っている」と堅い握手を交わして別れを惜しんでくれた。生死は共にと契りを結んだ同僚を北の孤島に残して帰る村松隊長以下われわれは、両名の手を何度も何度も握り、別れを惜しんで泣いた。あのときの想いは、今もなおランチに乗って離れてゆく両君の寂しそうな容姿とともに、忘れることができない。

われわれの乗船船団は四隻であったが、飛行機の護衛を受けながら進路を北にとり、カムチャツカ半島を北上した。途中、何度となく潜水艦の接近を受けて爆雷を投下させた。そのたびごとにわれわれは別れの盃を船底で交わした。

船団は、敵の潜水艦と悪天候に悩まされながら北上したオホーツク海の進路を南にとって宗谷海峡に南下し、そして無事小樽港に入港した。そのときの気持は、とうてい筆にあらわすことをし

らない。小樽港入港は十一月二十一日であり、実に北千島出港以来二十二日であった。

翌二十年（一九四五年）春、帰国を待ち望んだ戸沢巡査、笹木巡査の両名はついに帰らざる人となってしまったのである。北千島の海底深く、若く尊い生命を捧げ散った戸沢、笹木両警察官の葬儀は署葬として行なわれたが、戦時中でもあり簡素に終了させざるを得なかったようである。

『北海道殉職警察官』の名簿の中に両警察官の氏名も記入されているが、北洋の海深く散り去った、あの二人の警察官（戸沢巡査は筆者と同期生）を思うにつけ、両君の霊の安らかな昇天を祈らずにはられない。

現住所 函館市宇賀浦町十三番六号

出生地 大正六年国後島留夜別村

略 歴 昭和五年東沸郵便局勤務

昭和十六年北海道庁巡査

昭和十七年国後警察署派遣

昭和十九年北千島警備警察官派遣

昭和三十三年北海道警察函館方面本部交通課勤務現在に至る



国後島 泊村東沸郵便局全景

公益社団法人 千島齒舞諸島居住者連盟
戦前の北方四島写真収録集より

北緯30°

太

南緯太

1905年日露戦争
(ポーツマス条約) 後
約により日本領
土となる。

ソ連領 (沿海州)

1905年日露講和
(ポーツマス)条
約により日本領
土となる。

占守島(しゅむしゅ)
幌筈島(はらむしる)

春年古丹 (はるむらたん)

雷公計島 (らいこうけい)
松輪島 (まつあ)
羅処和島 (らすつあ)
宇志知島 (うししる)
計吐夷島 (けとい)

(太平洋)

(四)

(オホーツク海)

(四)

1855年（安政元年）日露通好条約により日本領土として確定

(くなり)

秋葉島
(えとろふ)

道
海
北

■1855（安政元年）日本とロシアの境界を決める。

ここから以南は、北海道本島と同じ気候区分に属しており、生物、地理学上の境界線ともなっている。

■ 山崎群島には、水晶島、秋勇留島、勇留島、志免島、多楽島のほか、貝殻島、オドケ島、棚茂尻島、トド島、奉苅島、海馬島、カブト島などがあるが定住者はいない。

146°



島別面積と人口

島名	名水	土産	距離	面積	島名	名水	土産	距離	面積
①	眞深島ノサッヅ	餅	3.7里	592.5ha	①	多葉島ノサッヅ	餅	45.5里	264ha
②	石山(野郎海)	4里			②	伊豆山ノサッヅ	餅	13.2里	52ha
③	水島ノサッヅ	7.0里			③	伊豆山ノサッヅ	餅	52.2里	93.2ha
④	水島ノサッヅ	7.0里			④	伊豆山ノサッヅ	餅	50.2里	61.2ha
⑤	水島ノサッヅ	11.5里			⑤	伊豆山ノサッヅ	餅	50.2里	61.2ha
⑥	山ノサッヅ	15.2里			⑥	伊豆山ノサッヅ	餅	242.8里	385ha
⑦	山ノサッヅ	15.2里			⑦	伊豆山ノサッヅ	餅	73.3里	265ha
⑧	山ノサッヅ	15.2里			⑧	伊豆山ノサッヅ	餅	68.2里	265ha
⑨	山ノサッヅ	15.2里			⑨	伊豆山ノサッヅ	餅	89.2里	55.1里
⑩	山ノサッヅ	15.2里			⑩	伊豆山ノサッヅ	餅	89.2里	55.1里
⑪	山ノサッヅ	15.2里			⑪	伊豆山ノサッヅ	餅	89.2里	55.1里
⑫	山ノサッヅ	15.2里			⑫	伊豆山ノサッヅ	餅	89.2里	55.1里
⑬	山ノサッヅ	15.2里			⑬	伊豆山ノサッヅ	餅	89.2里	55.1里
⑭	山ノサッヅ	15.2里			⑭	伊豆山ノサッヅ	餅	89.2里	55.1里
⑮	山ノサッヅ	15.2里			⑮	伊豆山ノサッヅ	餅	89.2里	55.1里
⑯	山ノサッヅ	15.2里			⑯	伊豆山ノサッヅ	餅	89.2里	55.1里
⑰	山ノサッヅ	15.2里			⑰	伊豆山ノサッヅ	餅	89.2里	55.1里
⑱	山ノサッヅ	15.2里			⑱	伊豆山ノサッヅ	餅	89.2里	55.1里
⑲	山ノサッヅ	15.2里			⑲	伊豆山ノサッヅ	餅	89.2里	55.1里
⑳	山ノサッヅ	15.2里			㉑	伊豆山ノサッヅ	餅	89.2里	55.1里
㉒	山ノサッヅ	15.2里			㉓	伊豆山ノサッヅ	餅	89.2里	55.1里
㉔	山ノサッヅ	15.2里			㉕	伊豆山ノサッヅ	餅	89.2里	55.1里
㉖	山ノサッヅ	15.2里			㉗	伊豆山ノサッヅ	餅	89.2里	55.1里
㉘	山ノサッヅ	15.2里			㉙	伊豆山ノサッヅ	餅	89.2里	55.1里
㉚	山ノサッヅ	15.2里			㉛	伊豆山ノサッヅ	餅	89.2里	55.1里
㉜	山ノサッヅ	15.2里			㉝	伊豆山ノサッヅ	餅	89.2里	55.1里
㉞	山ノサッヅ	15.2里			㉟	伊豆山ノサッヅ	餅	89.2里	55.1里
㊱	山ノサッヅ	15.2里			㊲	伊豆山ノサッヅ	餅	89.2里	55.1里
㊳	山ノサッヅ	15.2里			㊴	伊豆山ノサッヅ	餅	89.2里	55.1里
㊵	山ノサッヅ	15.2里			㊶	伊豆山ノサッヅ	餅	89.2里	55.1里
㊷	山ノサッヅ	15.2里			㊸	伊豆山ノサッヅ	餅	89.2里	55.1里
㊹	山ノサッヅ	15.2里			㊺	伊豆山ノサッヅ	餅	89.2里	55.1里
㊻	山ノサッヅ	15.2里			㊼	伊豆山ノサッヅ	餅	89.2里	55.1里
㊽	山ノサッヅ	15.2里			㊾	伊豆山ノサッヅ	餅	89.2里	55.1里
㊿	山ノサッヅ	15.2里			㊿	伊豆山ノサッヅ	餅	89.2里	55.1里

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100	101	102	103	104	105	106	107	108	109	110	111	112	113	114	115	116	117	118	119	120	121	122	123	124	125	126	127	128	129	130	131	132	133	134	135	136	137	138	139	140	141	142	143	144	145	146	147	148	149	150	151	152	153	154	155	156	157	158	159	160	161	162	163	164	165	166	167	168	169	170	171	172	173	174	175	176	177	178	179	180	181	182	183	184	185	186	187	188	189	190	191	192	193	194	195	196	197	198	199	200	201	202	203	204	205	206	207	208	209	210	211	212	213	214	215	216	217	218	219	220	221	222	223	224	225	226	227	228	229	230	231	232	233	234	235	236	237	238	239	240	241	242	243	244	245	246	247	248	249	250	251	252	253	254	255	256	257	258	259	260	261	262	263	264	265	266	267	268	269	270	271	272	273	274	275	276	277	278	279	280	281	282	283	284	285	286	287	288	289	290	291	292	293	294	295	296	297	298	299	300	301	302	303	304	305	306	307	308	309	310	311	312	313	314	315	316	317	318	319	320	321	322	323	324	325	326	327	328	329	330	331	332	333	334	335	336	337	338	339	340	341	342	343	344	345	346	347	348	349	350	351	352	353	354	355	356	357	358	359	360	361	362	363	364	365	366	367	368	369	370	371	372	373	374	375	376	377	378	379	380	381	382	383	384	385	386	387	388	389	390	391	392	393	394	395	396	397	398	399	400	401	402	403	404	405	406	407	408	409	410	411	412	413	414	415	416	417	418	419	420	421	422	423	424	425	426	427	428	429	430	431	432	433	434	435	436	437	438	439	440	441	442	443	444	445	446	447	448	449	450	451	452	453	454	455	456	457	458	459	460	461	462	463	464	465	466	467	468	469	470	471	472	473	474	475	476	477	478	479	480	481	482	483	484	485	486	487	488	489	490	491	492	493	494	495	496	497	498	499	500	501	502	503	504	505	506	507	508	509	510	511	512	513	514	515	516	517	518	519	520	521	522	523	524	525	526	527	528	529	530	531	532	533	534	535	536	537	538	539	540	541	542	543	544	545	546	547	548	549	550	551	552	553	554	555	556	557	558	559	560	561	562	563	564	565	566	567	568	569	570	571	572	573	574	575	576	577	578	579	580	581	582	583	584	585	586	587	588	589	590	591	592	593	594	595	596	597	598	599	600	601	602	603	604	605	606	607	608	609	610	611	612	613	614	615	616	617	618	619	620	621	622	623	624	625	626	627	628	629	630	631	632	633	634	635	636	637	638	639	640	641	642	643	644	645	646	647	648	649	650	651	652	653	654	655	656	657	658	659	660	661	662	663	664	665	666	667	668	669	670	671	672	673	674	675	676	677	678	679	680	681	682	683	684	685	686	687	688	689	690	691	692	693	694	695	696	697	698	699	700	701	702	703	704	705	706	707	708	709	710	711	712	713	714	715	716	717	718	719	720	721	722	723	724	725	726	727	728	729	730	731	732	733	734	735	736	737	738	739	740	741	742	743	744	745	746	747	748	749	750	751	752	753	754	755	756	757	758	759	760	761	762	763	764	765	766	767	768	769	770	771	772	773	774	775	776	777	778	779	780	781	782	783	784	785	786	787	788	789	790	791	792	793	794	795	796	797	798	799	800	801	802	803	804	805	806	807	808	809	810	811	812	813	814	815	816	817	818	819	820	821	822	823	824	825	826	827	828	829	830	831	832	833	834	835	836	837	838	839	840	841	842	843	844	845	846	847	848	849	850	851	852	853	854	855	856	857	858	859	860	861	862	863	864	865	866	867	868	869	870	871	872	873	874	875	876	877	878	879	880	881	882	883	884	885	886	887	888	889	890	891	892	893	894	895	896	897	898	899	900	901	902	903	904	905	906	907	908	909	910	911	912	913	914	915	916	917	918	919	920	921	922	923	924	925	926	927	928	929	930	931	932	933	934	935	936	937	938	939	940	941	942	943	944	945	946	947	948	949	950	951	952	953	954	955	956	957	958	959	960	961	962	963	964	965	966	967	968	969	970	971	972	973	974	975	976	977	978	979	980	981	982	983	984	985	986	987	988	989	990	991	992	993	994	995	996	997	998	999	1000
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100	101	102	103	104	105	106	107	108	109	110	111	112	113	114	115	116	117	118	119	120	121	122	123	124	125	126	127	128	129	130	131	132	133	134	135	136	137	138	139	140	141	142	143	144	145	146	147	148	149	150	151	152	153	154	155	156	157	158	159	160	161	162	163	164	165	166	167	168	169	170	171	172	173	174	175	176	177	178	179	180	181	182	183	184	185	186	187	188	189	190	191	192	193	194	195	196	197	198	199	200	201	202	203	204	205	206	207	208	209	210	211	212	213	214	215	216	217	218	219	220	221	222	223	224	225	226	227	228	229	230	231	232	233	234	235	236	237	238	239	240	241	242	243	244	245	246	247	248	249	250	251	252	253	254	255	256	257	258	259	260	261	262	263	264	265	266	267	268	269	270	271	272	273	274	275	276	277	278	279	280	281	282	283	284	285	286	287	288	289	290	291	292	293	294	295	296	297	298	299	300	301	302	303	304	305	306	307	308	309	310	311	312	313	314	315	316	317	318	319	320	321	322	323	324	325	326	327	328	329	330	331	332	333	334	335	336	337	338	339	340	341	342	343	344	345	346	347	348	349	350	351	352	353	354	355	356	357	358	359	360	361	362	363	364	365	366	367	368	369	370	371	372	373	374	375	376	377	378	379	380	381	382	383	384	385	386	387	388	389	390	391	392	393	394	395	396	397	398	399	400	401	402	403	404	405	406	407	408	409	410	411	412	413	414	415	416	417	418	419	420	421	422	423	424	425	426	427	428	429	430	431	432	433	434	435	436	437	438	439	440	441	442	443	444	445	446	447	448	449	450	451	452	453	454	455	456	457	458	459	460	461	462	463	464	465	466	467	468	469	470	471	472	473	474	475	476	477	478	479	480	481	482	483	484	485	486	487	488	489	490	491	492	493	494	495	496	497	498	499	500	501	502	503	504	505	506	507	508	509	510	511	512	513	514	515	516	517	518	519	520	521	522	523	524	525	526	527	528	529	530	531	532	533	534	535	536	537	538	539	540	541	542	543	544	545	546	547	548	549	550	551	552	553	554	555	556	557	558	559	560	561	562	563	564	565	566	567	568	569	570	571	572	573	5																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																											

總 別 面 積

面積	3,138.985km ²
戸数	740戸
人口	3,760人
留別村	390戸 1,930人
砂那村	260戸 1,450人
葉取村	90戸 180人

面積	1,500,041 km ²
戶數	1,420 戶
人口	7,370 人

泊村 人口4,650人・戸数940戸

道海北

ノサブツ輝より各島への距離

島名	産量	
	メートル	カイリ
旧マッカサール	1,800	1.0
タン	3,700	2.0
島	7,000	3.8
島	13,700	7.4
島	16,670	9.0
島	25,560	13.8
島	45,560	24.6
島	73,340	39.6
島	37,410	20.3
島	109,640	59.2

位置、広袤	東緯 146度00分・146度01分 北緯 43度21分・43度23分
面積	約 5km ²
人口、世帯数	人口 95人 世帯 18世帯

位置・広さ	東経 146度01分・146度06分 北緯 43度24分・43度26分
面積	10km ²
人口・世帯数	人口 412人 世帯 67世帯

東經	146度07分・146度12分
北緯	43度27分・43度33分
面積	約 45km ²
人口・世帯数	
人口	1,695人
世帯	299世帯

424 425 426 427 428

第1	択捉島	(3,139km ²)
第2	国後島	(1,500km ²)
第3	沖繩島	(1,254km ²)
第4	佐渡島	(857km ²)
第5	奄美大島	(709km ²)

第 1	貝殼島(3.7km) (西側群島)
第 2	淡路島(4.0km)
第 3	水晶島(7.0km) (西側群島)
	國後島(16.0km)
	佐渡島(31.0km)

凡 例

◎	○	△	▲	山	岳
管	無	燈	道	村	村
設	鐵	台	站	設	設
所	所	所	所	所	所
電	電	電	電	電	電
信	信	信	信	信	信
局	局	局	局	局	局
所	所	所	所	所	所
山	山	山	山	山	山
川	川	川	川	川	川
湖	湖	湖	湖	湖	湖
港	港	港	港	港	港
郵	郵	郵	郵	郵	郵
便	便	便	便	便	便
局	局	局	局	局	局
山	山	山	山	山	山
辨	辨	辨	辨	辨	辨
溫	溫	溫	溫	溫	溫
泉	泉	泉	泉	泉	泉
苗	苗	苗	苗	苗	苗

北方領土復帰スローガン

- 祖父が築いた北方領土 絶やすな消すな 復帰の願い。
- 一億の 悲願が動かす 世界の世論。
- 万国の 世論にただせ 北方領土。
- 手をつなぐ 北方領土 しまよ還れに後押す世論。
- 国ぐるみ 領土復帰へ 総決起。
- 正しい主張 世界に示そう 北方領土。
- 島よ来い 僕等もまけずに 後押しだ。
- 一億が 領土復帰に 総参加。
- 北方領土 高まる世論が 早める復帰。
- 島よ還れ みんなも私も 待っている。
- 親も子も 思いはひとつ 島還れ。
- 呼び返せ 父祖の築いた 北方領土。
- 一億が待ってる 呼んでる 北方領土。
- 国民の総意で もどそう 北方領土。
- ゆるめるな 北土復帰の 力綱。
- 沖縄は帰ってくる こんどは 北方領土だ。
- 北方領土 かえる日 平和の日。
- 北方領土 復帰へ示せ 意気と熱。
- 湧きあがる 世論で復帰 北方領土。
- 北方領土 還るまで永久に絶やすな この叫び。

北方領土 ―終戦前後の記録(第二集)― (初版)

第一集 昭和四十五年 三月 三十日 初版 発行

(七〇〇部)

第一集 昭和四十五年 五月 三十一日 第二版発行

(三〇〇部)

第一集 昭和四十五年 十月 二十日 第三版発行

(二〇〇部)

第二集 昭和四十六年十二月二十五日 初版 発行

(二〇〇部)

編集 根室市 総務部 企画課 領土対策係

発行 根室市

北海道根室市清隆町三の一

電話 代表 六一一一番・郵便番号 〇八七

昭和 42 年（1967 年）から 46 年（1971 年）にかけて
根室市が発行した啓発用「資料冊子」（発行順に紹介）



北方領土引揚者

声の証言集

証言者 前中 貞（七十六歳）

志発島元島民 千島町二丁目

島での生活

志発島の部落は入り江ごとに構成していて七つ八つあったと思う。人口は定住者といわれる人が千七百人くらい、あと春、夏、秋と産業で増えて三千人くらいになったと思います。春はカニ、サケ、マス、タラ、夏はホタテ、昆布、秋はエビといったものが水産業の中心でした。

戦前は仕込み制度でしたから、米から味噌、衣類、酒などいっさいを根室の親方から、春から夏の分、夏から秋の分と区切り区切りに仕入れて生活していました。流水は冬に少し来るくらいで、根室との交通もさほど不便はなく、春のカニ場には二月から若い衆が何百人も来ていました。

役所としては駐在所に巡査が一人いました。療養所もあって、ここは周辺の島からもやってきていましたが、盲腸などの急患の場合などは、昔は昔なりに漢方薬なんかで「抑え」ていたものです。お産は民間の産婆で、昔はノンビリしていたものでした。

小学校は二つあって、上級学校に進学する者は、爺さん婆さんが根室にいる者は、そこから。いない者は頼んで置いてもらって通っていました。

交通・通信

島の中の交通機関は馬で走るくらいで、あとは歩くだけ。自転車なんかも乗れる状態ではなかった。根室や本土との通信連絡は、定期船といった郵便船があつて、これは海次第という面もあったけれど一日に一往復することもあつて、それで郵便、連絡はできたし、雑貨の仕入れなんかに利用していました。

自然

陸上の開発といっても、部落と部落を結ぶ道路くらいのもので、あとは海岸を自分の仕事のために手を加えるくらいでした。動物は家畜としての馬がほとんどで、キツネやウサギもいましたが、それほどたくさんはいませんでした。牛も二、三頭いましたが、これは或る人が増やそうということのようでしたが、終戦を迎えてしまいました。志発島は牧草がよく育つところで、私たちの背丈ほどに伸びて、根室に持ってきてても、褒められたものです。野菜も大根をはじめ、色々出来てカブなんかは人の頭ほどもあるのが獲れたので、家畜を飼うのには、もってこいのところですよ。植物は高山系で、納沙布周辺より少し高山がかつていたと思えばいい。

観光的な価値になると、私たちにはよく分かりませんが、東海岸は絶壁でローソク岩とかあつて、それらの眺めは確かにいい、

我々なんか仕事の手を休めて眺めることも、しばしばありました。観光的な価値は、今では確かにあるかもしれませんが。

終戦前後の様子

戦争が始まってからは増産、増産でしたし、とくに火薬なんかに使うヨード（沃度）、塩化カリは昆布から採るのが一番いいということ、昆布を焼いて製造する工場が各島に五つも六つもできて、殆どこの仕事に没頭していたものでした。昭和十六年（一九四一年）ころには兵隊も入ってきて、防空壕なんかは命令で女男を問わず協力、戦車が通る道路もつくりました。

終戦はラジオで知りましたが、私はヨード（沃度）のカマ焚きをしていたときで、敗戦と知って肝が焼けてカマの底を抜いたものでした。七月の根室空襲は火や煙が見え、手にとるよう不安がつりました。終戦の放送のときは、部落の者が集まって、おいおいと泣く者やら大変でした。

ソ連軍の上陸

もともと自分たちの島だからソ連軍が来るなどとは夢にも思っていないく、のんきに構えていたのですが、九月三日に西浦泊りに三百トンくらいの上陸用舟艇で上陸を始めたのを見て、女子どもを隠して男たちは、どうなるのかと思っていたら、案の定、島

の中をぐるぐる回って指輪、時計などの貴金属、珍しいものがあれば、手当たり次第に持っていった大騒動でした。それが二日くらい続きましたが、三日目ぐらいに隊長が回ってきて、そういうことがあれば知らせろ、軍のほうで処分するから、ということがあって、それからは落ちつきました。それでも悪い兵隊がいました。

どういうわけか、アメリカ兵がいなかった一軒一軒、一人一人聞いて、隠していないかと搜したりしていました。日本兵は終戦と同時に降伏したようで、大した摩擦も無いようでした。

戦後の生活と脱出

昭和二十四年（一九四九年）に私が引揚げるまで三年ほど、ソ連兵の占領のもとに生活していたわけですが、ソ連人というのは、一人一人話をしていればいいんですが、何となくハラの下が分らないような感じでした。仕事は自分では、いっさい出来なくて、すべてソ連の許可をもらわなければならず、いやでもソ連の仕事をもらってやりました。しかし税金をやるだけ取られるといった具合でした。

ソ連軍が上陸したその晩に島を脱出した人が大分いました。私も、その一人で根室まで逃げたわけですが、島は絶対にソ連に占領されるようなことはない、町役場や警察、組合でも皆に言わ

れるものですから一日だけいて帰りました。もしやのことがあれば必ず迎えにくからということでした。それでも不安はありませんし、その後も脱出が続きました。

脱出は夜、皆で集まって手はずを決めたり、ソ連軍の動きをみながら相談したものです。

中にはソ連兵に見つかって銃撃された人たちもいましたが、殆ど帰ってきているようです。

強制送還は昭和二十二年（一九四七年）、二十三年（一九四八年）、二十四年（一九四九年）の三回に分かれ、すべて樺太經由で、樺太には半年ほどいました。送還の人選は男、女、子ども、年寄り色々、とくに選別しているわけではありませんでしたが、あるいは仕事の出来ないものから帰ったのかもしれない。

樺太では食糧不足で死んだ人の話もありますが、昭和二十四年（一九四九年）に引揚げてきた私たちの中には、そういうことはありませんでした。私たちの場合、離島にいた人たちも集まって、みんな一緒でした。

ソ連兵が来てからの根室との連絡は、財産を残して逃げていったものが、どろぼうと言っては何ですが、よくやってきて情報を聞かせてくれました。日本兵は九月三日にソ連兵が上陸して、五日には連れて行かれたきりです。

引揚げ後の生活

私たちの引揚げは最後の四年もあとですから、援護の手も薄く仕事は何もない有様でした。漁師か誰かに頼るしかないのです、私は元の仕事につきました。事業を始めた人もいるようですが、そういう人は一割にもならないようだし、最初の人たちが、ヤミかなんかで始めたといったようなことで大半は日雇い仕事で生活を維持していました。今でも、そういった状態が続いている人がいますし、引揚げ者の中には今もお困っている人が少なくありません。それに、いずれは島に帰れるという気持ちがありました。送還される時もソ連は、お前たちは、また島に帰って来れると言っていて、ウソは言わないと思っていましたのに腹が立ちます。

今後の希望

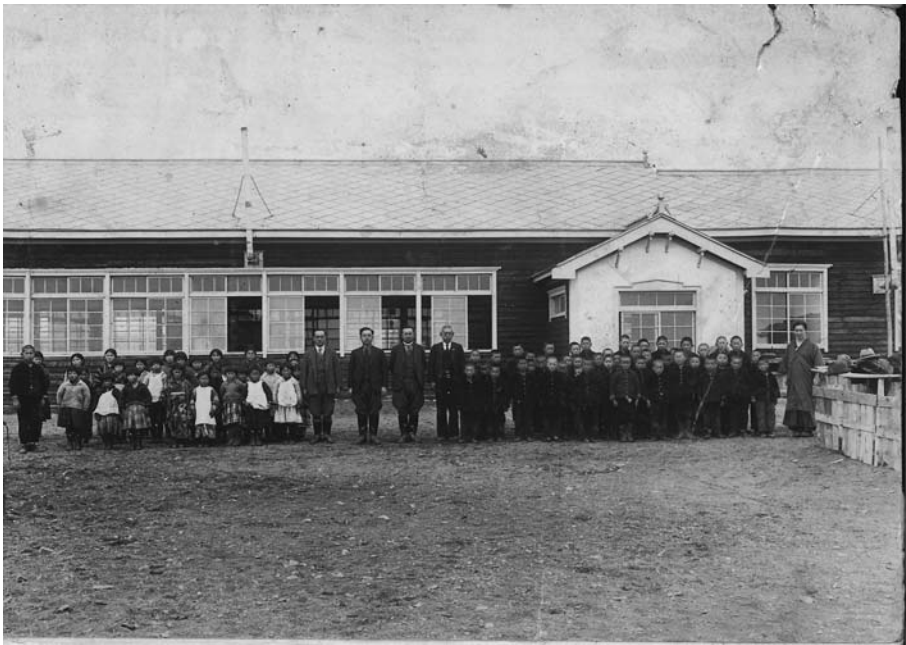
島ではノンキ、おいどうしたといった生活で、あくせくしないし島が返ったら真っ先に帰りたい。子どもたちにも島のことは言っただけで聞かせるし、子どももまた聞いて島には行ってみたいと思っているようです。

根室には大臣や代議士が何人か来ていますが、何か地元まかせのようで、私たちとしては、ほんとに切ない歯がゆい。外交上の問題として真剣にとり組んでもらいたい。

国や道に望むことは安全操業、それに墓参です。昭和三十九年

(一九六四年)には水晶島へ行ってきましたが、荒れ放題でした。それと漁業補償も五、六年前から要望しているのに、いまだに目鼻がついていない状態で、とくに安全操業が実現しても、元島民の処遇を考えてもらわなければ困る。財産補償にしても、今も困っている人がいるんですから考えてもらいたい。私たちは止むを得ず引揚げてきたもので、これに少しばかりの補償では不公平だと思う。

国民のみんなにも認識を強く持つてもらいたい。



志免島西前小学校 根室支庁長来校記念

証言者 不破 順作（六十六歳）

色丹島元島民 弥生町一丁目

島とのつながり

私は大正十年（一九二一年）に富山から島に渡ったんですが、親の方が大正元年（一九一二年）から島でタラをやっている、私は両親と離れて富山の学校に通っていたわけです。親は知り合いかから色丹島はいいところだ、という話を聞いて、イネモシリでタラをやったんですが、そのまま落ち着いたというわけです。私自身は、やはり両親と一緒に暮らすのがよいので、当時十五歳でしたが、遠い北の方に行くというような淋しさなどはありませんでした。親と一緒に沖乗りなどをやっていたものです。

色丹島の部落は名前のついたのが十五、六くらいだったでしょうが、中心は斜古丹でイネモシリから二里のところでした。島へ行った当時のイネモシリは七、八戸くらいで、引揚げ当時は十八戸で百人足らずでした。イネモシリでは五、六戸がタラで、あとは海藻で、色丹島全体でも八割は海藻で生活していました。

気候、漁業

気候は根室と大体同じで、雪は多かった。一メートルくらいはありました。

漁は四月から十月半ばころまででしたが、四月から六月いっぱいまではタラ、それから、それぞれ色々ありますが、私たちの場合、七月いっぱいにはノリをやって、八月からは昆布と魚釣りとお方に分かれてやったものです。サケ・マスの流しも昭和に入ってからやりましたが、当時はタラが主体でした

忙しい時期になると富山から三十人くらいの働き手を、これは一戸ごとに、そのくらいの人数でしたから、五戸あれば百五十人といった具合で、人口は急に膨れたものです。秋には帰って春にまた来るわけです。富山の者を呼ぶというのは、同郷人というだけでなく、タラの仕事は富山県人にはかなわないし、またよく稼ぎます。

畜産に適したところだといわれ日本一という人もいました。というのは冬の間も、一年中放牧できるからで、いい草もありました。

島の生活

冬の間は自家用の薪炭を切ったりしていました。国有林を毎年払い下げをうけて、家の材料も出来るし、この点めぐまれていた島でした。

とにかく島は不景気知らずという生活でした。根室あたりでは、ひどいときにはフキの根を掘って食べたという話も聞いたことがあります、島ではそういう者は一戸も無かったです。

たしかに今の様に電化生活ではないし、灯りもランプでしたが昔はそれなりに楽しいこともありました。米、味噌、日用品は根室から運んできました。船は月に四、五回くらい来しました。野菜は島でまかなえるので、その点は暮らしやすい島でした。

病気なんかは、ちょっとしたものは富山の売薬を飲むし、重い病気だと斜古丹や根室に行きました。斜古丹には医者がいきました。警察や郵便局は、すべて斜古丹にあって、学校も本校は斜古丹に、あとは分校としてツボイ、アイミサキ、キリトウシ、ノトロにあるだけで、イネモシリの子どもたちは斜古丹の本校へ下宿させて通わせていました。

通信、交通そして自然

交通は、もっぱら馬か徒歩。冬はスキーで、自転車は斜古丹くらいなものでした。

海のほうは流水の多いところで斜古丹は十二月までしか定期船が入りません。イネモシリは不凍港でしたので、氷が張ると当時、青年団長だった私は、みんなを集めて荷物を斜古丹まで運び、斜古丹からまた荷物を運んできたもので、イネモシリは冬期間は島の重要な基地でした。

島は水が豊富でいたるところに小川が流れて、それもキレイな水です。

動物は狐だけでしたが、これは首に赤十字のマークがついてい

て世界でも珍しいそうで、当時でも禁猟で、密猟して見つかったらすぐ色丹で獲ったと分かったものです。

植物では色丹松が有名で、これは落葉松系のものなのですが、今、根室で持っている人が二、三います。

娯楽、お祭り

捉捉も回って知っていますが色丹島の観光価値は、かなりのものだと思います。戦前、道立自然公園指定の話もありました。

娯楽といっても、冬は冬の仕事があつて、大きな賭けはしませんが、年寄りには花札などをしていましたが、碁や将棋はやらないわけではなかったのでしょうか、それほどではありませんでした。青年たちはスキー隊とか、弁論大会とか私も出たことがあります。部落対抗というようなことはありませんでした。

お祭りは部落ごとにお宮があつて、しかし神主さんがいるわけでもないし、まあ飲んだり食ったりの骨休めのようなものでした。お寺は斜古丹にあつて、不幸があれば、お坊さんに来てもらつて、私の生まれたばかりの赤ん坊も墓に残してきています。お墓は部落ごとにありました。結婚式なんかは内輪だけで、大勢を招待するようなことは、殆どありませんでした。

戦時中

戦争が始まって、島の私たちの生活は殆ど変化がなく、戦争に勝つと思っていたし、また敵の飛行機が来るわけでもなかった。急な変化はありませんでした。しかし、だんだん押しつまってくると、徴用で働きに来る人がいなくなって仕事になりませんし、沖には潜水艦も出るようになってカニ漁に切り替えるようになりました。

島には旅団本部もあって、結構兵隊がいたようですが、極秘でどのくらいいたのかは知りません。イネモシリには歩兵一個中隊、それに山砲一小隊、機関銃一小隊がいました。たまに山の伐採に協力するくらいで、軍の命令で仕事をやったことは、ほとんどありませんでした。

終戦前後

空襲で根室が丸焼けになったとか、勇留島でも空襲で人が死んだとかいうのは、便りで知りましたが、私としては日本は勝つと思っていましたから、それに色丹の方は何でもなかったもので、とくに不安はありませんでした。

いよいよ終戦と分かって、島がどうなるのか、ハッキリした話は聞いていませんでしたが、逃げる計画を立てました。十八日に、まず家族を志免島に避難させて、私は根室の組合の出張所に行っ

たところ、組合長から島は何でもない、生産に励んでくれと言われて戻りました。

九月一日になって斜古丹にソ連兵が上陸してきました。イネモシリには直接きませんでしたが、婦女子を隠せ、夜間は一步も外に出るなと軍に言われ、山から見ても海から見ても分からないところに隠されました。色丹には、そういうところがたくさんあります。青年団がテントを運んで、それもソ連兵が五、六人来て、すぐ帰ったので三日まででした。

ソ連兵と会いましたが、言葉は分からないし、靴の底を叩いてみせるので、土足で上がってもいいかと思っていると頭を下げましたが入らず、部落を一回りして、すぐ帰って危害を加えるようなことはありませんでした。

しかし、これはダメだということで部落常会を開いて、三日の晩に発つということになりました。長年、同じ島で苦楽を共にして来たのだから、逃げるなら、みんな一緒に、しかし船は一隻しかないから荷物は制限するし財産は残していくことになる、という話し合いでした。

結果は三分の一も希望者がいませんでした。部落の中には逃げるなんてバカなことがあるかという者もいましたが、私は「軍から情報を聞いている。軍は十七、八日ころ島を引揚げるので、みんなも用意してくれ」と言われていたので島は、もうダメだと逃げる決意をしました。

当時、私は村会議員もしていたので、四日、斜古丹へ村長に会

いに行きましたところ、役場の茶の間に皆いたので、どうしたのだと聞いたら、役場はソ連軍に占領されてしまったと言うんです。ほかに建物もあるのに、そんなバカなことがあるか、行政はどうするのかと言いましたが、どうしようもない、と言うんです。それで戸籍謄本を書いてくれと言いましたが、これも出せないと言いう始末でした。

五日に弟たちと島を出た、家内と子どものいる志発に寄ったが、このときは捕まるかもしれない覚悟でした。

引揚げ

家内や子どもを疎開させておいた志発島に上陸するときは、ソ連兵に見つかるかもしれない、死ぬかもしれないと、みんなに言ったわけですが、上陸してみたら軒並みに赤旗があつて、これは大変だと思っていました。その前に、色丹島に軍医が逃げて来たことがありました。斜古丹に陸軍病院があつて、患者がどうなっているか心配で逃げて来たんだということで、いの一番に馬に乗って逃げてきました。そのときは、今なら脱出しても大丈夫だ、潜水艦も出ていない。ただ志発は三日まで連絡がついていたが無線機を取られてるから、ソ連兵がいるかいらないか、分からないということでした。

それで、志発に近づいたら、おじいさんが磯舟で私たちのところに来て、ソ連兵がいるから今はダメだ、夜になってから

来いと言って帰っていったんですが、しかし置いてくるわけには行かないと思い、それにソ連兵の姿も見えなかった。それで家族を呼んだんですが、それと一緒にソ連兵も出てきて、止むなく家族を残して逃げてきました。機関銃でババァンと撃っていましたが、おかげでタマは当たらず逃げることで、いったん根室に着いたあと、十日に今度は夜行って家族を連れてくることができました。

そのあと、島には財産も残してしまひし、三回行って少しずつ持ってきました。それと、色丹の小泉さん、泉プロパンやつている中川さんと引揚げを話し合つて、結局、四回行ったことになります。そのたび、残っていた人たちも相当乗せてきましたから、言ってみれば脱出の手引きのようなもので、幸いソ連兵に見つからずに済みました。

引揚げ後の苦勞

島には相当土地もありますし、馬も十二頭残してました。家は昭和三十九年（一九六四年）の墓参のときに跡形も無くなっていました。

根室に落ち着いたのは、島がすぐに返ってきて、島に戻れるようになるから、ということではありませんで、当時としては、もしかしたら北海道もソ連にとられるんでないか、と言う気持ちがあつて、油も内地まで行く分を用意していたものです。そういう

不安もありました。

根室では最初に本町に落ち着いて、そこで二年三カ月いました。漁業は持ってきた資材で、すぐやれました。今はサケマス、サンマ、マグロをやっていますが、昭和二十六年（一九五一年）に兄弟三人、二十九年（一九五四年）には「五・一〇災害」で甥、三十四年（一九五九年）には妹の亭主を亡くすなど、引揚げてからは根室一、不幸な目にあっていると思います。

島への愛着

島へは富山から行ったわけですが、第二の故郷というより、もう私たちにとっては故郷そのものですから、もちろん愛着心は強く残っています。資源の豊富なところですし、今もって忘れることはできません。

島で生れた子どもは四人、引揚げてきてからの子どもは三人、それに孫など、島のことを知らないものですから、終始、話しています。これからどうなるものやらと思っています。

子どもたちも、話しながら島のよさを知っていますから、理解していると思います。

復帰運動

今でも先頭になって復帰運動はしてきましたが、私たちが開拓

した島ですから、これからも死ぬまで続けます。安全操業とか言っていますが、やはり一日も早く日ソ平和条約を結んで島を返してもらいたいと思います。そうすれば安全操業は解決します。北方領土問題は引揚げ者だけの問題ではなく、国民全体の問題として認識して、運動に参加してほしいと思います。



色丹島イネモシリ海浜鱈干し風景（昭和10年）

公益社団法人 千島齒舞諸島居住者連盟
戦前の北方四島写真収録集より

証言者 芦崎 章 一（七十一歳）

齒舞群島（多樂島）元島民 岬町二丁目

島に定住

私は東京神田の生まれですが四歳のとき、父が羅臼で漁業していた父の兄を頼って、それから根室に、さらに二番目の兄がいた多樂島へ六歳のときに渡りました。初めはフルベツでしたが、いい場所をということで五、六年あとにカンバイソに移って終戦まで、そこにいました。

当時、四月になって島へ渡って漁業をして、十月末ころは根室に引揚げてくるという行ったり来たりでしたが、私が九歳のときから、父が行ったり来たり面倒だからというので定住することになりました。

漁業は主にタラ釣りで、子どもの頃の記憶ですが二十四、五隻はあったと思います。それからここです。

第一次欧州大戦が始まった大正三年（一九一四年）から、火薬に使う塩化カリ、それにヨード（沃度）の需要が増えて高価となり、ものすごい景気でした。だが戦争が終わると、その反動で島ばかりでなく国全体が不況に見舞われて米騒動なんか起きましたし、私たちも米の高値で苦しい思いをしたものです。

多樂島は齒舞群島の三分の一の昆布が採れるといわれるほどで年中昆布の仕事でした。

島の様子

終戦時の戸数は約二百戸くらいあったと思います。私が定住したころ、定住していた者は二十戸くらいしかなかった。部落は税庫前、フルベツ、フレンコなど七つ八つあって、中心はフルベツでした。

島は山もなければ木もないので風が吹いてもさえぎるものがないので強く、根室よりは寒く、雪の方は根室と、さほど変わりなく、流水の季節では島全体が囲まれます。

四月から昆布漁が始まって九月、タラは四月から六月まで、それと千島ノリも相当とれました。冬でもシケると昆布が浜に寄ってくるので、それをとって干したりと年中、昆布の仕事をしているようなものでした。盛漁期になると多樂島でも人手不足で道内や本州から人を雇い入れました。

生活必需物資は全て根室からとっていましたが、冬の燃料は木がないところでもあり、ルンペンストーブが出来てからは石炭も焚いていました。

野菜は島でも若干できましたが、虫がついて十分でないのが、根室からとりました。ちょっとした病気は診療所がありましたが、手術が必要な病気の場合、定期船が来るのを待つわけですが、待ち遠しいことでした。お産のための正式な産婆はいませんが、素人産婆でやっていました。

行政機関 教育

齒舞村の出張所はなく、税金などは吏員が出張して回ってきた。官公庁としては駐在所、郵便局、駅通も一軒ありました。私が定住したところ、特別教授所と言いついて一年から六年まで一人の代用教員がいました。ゴヨウマイ尋常小学校附属多楽特別教授役という名前でした。それから人口が増えるにしたがつて、税庫にあったのを、島の中央に持って行くのがいいというのでフルベツに新築して、多楽尋常小学校となって担任の先生も三人になりました。

交通 通信

陸上は馬と、歩くより方法がなく、海は定期船というのは冬だけで、夏は生産物を運ぶ運搬船が四隻いて交互に運行するので、物資や郵便物を運ぶ連絡船というわけです。

緊急を要する電信施設については、島の人たちが是非必要ということで終戦の三年前と記憶しますが無線電話を設置しました。

島総体は干場くらい作っていて、とくに開発開拓ということはなく、道路もとくになく、ただ山越えと言うような場所には道がありました。

自然と動植物

近所隣、みんなが親戚づき合いで自然の良さというより、和やかで人情が細やかで、いざこざもなく、のんびりして暮らし良かったのが第一です。

多楽石はメノ科に属するといわれますが、どの石をとっても透き通っていて、それが特徴なんです。齒舞群島でも多楽以外にはないということで、それだけ珍重されるわけです。

動物は馬と牛が五、六頭いたしキツネ、山羊も飼っていた人がいました。野生の動物はいなくて島はヒバリ、セキレイ、カモメなんかはいました。

木はありませんが、草花は根室の納沙布と大体似ています。

根室とのつながり

根室とのつながりが一番強かったのは、昆布の干場の所有者が根室の人だったので、生産した昆布は委託販売、生活物資も調達して送ってもらうなど取引きの上のつながりもあったため、齒舞本村よりも、根室のほうが運搬、販売の集散地ですから、便利の点からも必然につながりが強い。

観光価値

これといつて見るべきものではありませんが、むしろ、それが逆に変わったところとして見られるかもしれません。というのは木は無し山も無しの平坦なところで何の変哲もないところがまた一つの魅力、観光にもなるかもしれないと思います。島での娯楽、遊びといつても、子どもはパッチ、百人一首くらい、大人はたまに花札遊びくらいで酒は楽しみの一つでした。お祭り、運動会ともなると年中行事の楽しみで、部落あげて休んで楽しめます。神社は金刀比羅神社の分身で、おミコシはありませんが、相撲、素人演芸で楽しむというふうでした。お寺は東別院の説教所がフルベツにありました。

戦時中の島

日本兵も三十人くらい多楽島に入ってきました。隊長は三重県出身の人のようで、兵隊が入って来たのははっきり記憶していませんが昭和十七年（一九四二年）か十八年（一九四三年）ころだったと思います。駐屯はフルベツで、女子も防空訓練、竹槍訓練を週に一回か二回やらされ、私たち男たちは軍の陣地構築などに協力させられました。フルベツの川の橋が壊れたので、軍では材料を色丹から持ってくるというので五、六隻の船を仕立てて、色丹の泊から材料を積んできたことをよく記憶している。

軍隊は大砲、戦車などは持つてきませんでした。ただ私の家の裏に、大砲に見せかけた擬砲というのを、幾つか作られました。

根室の空襲の時は陣地構築に行っていたんですが、非常に晴天の日で、何気なく志発の方を見たところで黒い煙が上がっているんです。変だ、何かなと思っていたらラジオニュースで空襲のことを知り、これは、いよいよ容易ならんことだと思いました。終戦もラジオで知り、何とも言えない虚脱感に襲われ、次は今後の不安が出てきました。

ソ連兵の上陸

ラジオで聞くと、ソ連は千島列島を南下して来ているけれども、齒舞諸島は北海道の附属島嶼であるから占領しないであろうというのでしたが、色丹の上陸もラジオで聞いていました。

たしか九月の三日だったか四日だったか、志発の方を見ると、はるか長いマストが見え変だなあと思っていたところ、朝八時か九時ころ、白い五百トンくらいの見慣れない船が島の方にやって来たので、あれがソ連の船かと思っていました。そしてカンバライソの多楽石というところに船をつけました。

ソ連兵が来るかも知れないという不安もあったし、用心しておくことに越したことはないという不安もあったし、万一ソ連兵が

来たときは脱出しなければならぬと、それぞれ準備をしていた。

しかし現実に上陸したとなると逃げるところも隠れるところも無い。運を天にまかせると、みんな家に集まっていた。そうこうして三十分ばかり経ったころ、ソ連兵が家に入ってきて家探しを始めた。目的は日本兵や警察はいないかということだったようです。私たちに危害や乱暴するというようなことはありませんでした。ただ日本兵もいないとなって帰るときに、トッケ、トッケと言うんです。これは時計のことかなと思い、柱のボンボン時計を私が指すと、腕に指を丸くしてトッケ、というから、これは腕時計をくれというのかと、仕方ないから私のをくれてやりましたが二人来て、もう一つくれというようでした。一つしかないというと諦めて行きました。

その後、ソ連兵はフルベツの方へ行きました。日本兵の武装解除のようでした。

ソ連兵のお礼

三回目のときにソ連兵が来て本部の方へシャニムに行けと言われ、これは「シマッタ」と思いましたが逃げるわけにも行かず、命令されるまま本部に行ったら隊長が古釜布に行けと言うんです。これは大変だと思いましたが止むを得ず国後の古釜布へ船を向けました。ソ連の下士官が二人乗って、これは連絡のようでしたが、

それで古釜布では約一週間ばかりいました。そのときは不安で外へ一步も出られませんでした。いつ帰れるものかと困ったものだと思っていました。一週間くらいすると、食糧や物資を積み込みましたので、これは帰れるなと思いました。やはり下士官を乗せて多楽へ帰りました。隊長から御苦労だったということで、代償として日本軍から押収した米二俵と砂糖を少し、お茶、防寒外套をもらって帰りました。

引揚げて根室に落ち着いたのは、多楽は何と言っても私たちの住み慣れた島ですし、そのうち帰って来るだろう、そうしたら戻らなければならぬ、という気持ちが消えないためで、これは私ばかりでなく、引揚げ者の大部分が根室に住みついているのは、その希望をつないでいるからです。残してきた財産は大したものはありませんが住宅、倉庫、土地も若干ありました。

引揚げ後の生活

根室では弥生町に落ちつき、男の子が二人いたしボンボン船も持っていたので、昭和二十一年（一九四六年）から二十四年（一九四九年）まで釣りものをしていて、二十五年（一九五〇年）から中部サケマスをはじめ現在に至っています。ただ非常に残念であり、悲しかったことは昭和二十九年（一九五四年）の五月十日の災害で私のせがれ、八名の方たちが全損によって行方不明になったことで、もちろん島にいれば、こういうこともなく安楽に

暮らせたと思っています。私自身、拿捕の経験はありません。

小学校前から島に住んでいたわけですから島は私の生まれ故郷そのもので一日も忘れたことはありません、早く帰って何かひと仕事をやってみたいと思います。

息子たちは島で生まれ島の様子は知っているが、孫たちは知らないで、後継者に伝えていかなければならないと時折、島の様子はあであった、こうだったと話をし、領土返還にはいつまでも関心を持っていなければならないと言いつづけています。

私は命のある限り返還運動を続けるし、帰るまで死ねないと思っています。

政府も国民も、単なる引揚げ者だけの問題ではない、国民全体の問題として真剣に取り組んでももらいたいし、専用漁業権、定置漁業権の補償を是非考えてもらいたい。私たちの生活の場がとられたわけですから、是非実現してもらいたいものです。



多楽島 古別海岸とトド島
公益社団法人 千島歯舞諸島居住者連盟
戦前の北方四島写真収録集より



5・10災害 合同慰霊祭（昭和29年5月30日 花咲小学校）

証言者 細井勝芳（六十一歳）

国後島古釜布元島民 光洋町四丁目

千島への赴任

旭川師範を卒業したとき、赴任の第一志望も第二志望も「千島」にしました。学校で千島のことを習ったとき感激しまして世界の三大漁場の一つである、金鉾、銀鉾があつて未開発であることを知って、日本の中で未開発のところは千島しかない、そういう思いがありました。ところが昭和七年（一九三二年）に卒業しての発令は千島でなく北斗小学校で、それが根室、道東に私がきたのは初めてでした。花咲港小学校の校長に二十九歳のとき、昭和十六年（一九四一年）に、それから十八（一九四三年）年十二月に古釜布の国民学校の校長として発令されました。国後島の中でも古釜布が一番大きいし、とうてい私のような若僧が校長になれるポストではないのですが、戦争中で、なかなか赴任しようという人がいなくて、相当回り回って私のところにお鉢が回ってきたということです。その話が出たときは若いころの希望が再び出てきて、すぐ了承しました。引揚げは強制送還の昭和二十三年（一九四八年）十月、樺太を経由して函館に上陸しました。現在は北方同盟根室地方支部の事務局長をさせてもらって、何か私には千島に関係が深い気持ちです。

戦前の教育事情

当時の教員の身分は地方公務員で、給与は市町村からもらいまして、町村の財政事情によっても教員の待遇も随分と違ったものです。今と違って当時ですと昇給は根室では二年半に一回くらいでしたが、原野に赴任した教員なんかは現金のほかにイモを年末の賞与として支給され、それを売って現金にするといったふうで、私もイモを買ってくれと言われたことがあります。

島の人々の親切

私が古釜布に赴任したのは十二月二十日で、これが国後行ききの最終便で、私は古釜布の宿屋で落ち着いたんですが、ゆっくりしようと思っていたところ晩に、三つの部落―オキノコタン、フルカマップ、もう一つはイソヤンベツと三つありまして、その會長さん三人が揃って見えられ、本当にいいないなご挨拶で、ここで長く、どこにも行かずに教鞭をとってほしいと、態度物腰が、かつて私が受けたことがないほどの歓迎で、私としては感激するだけでなく、心に期するものがありました。

少しの不安はありましたし、子どもも五人いましたが、その後あいさつで、いっぺんに親せきのところに来たような気持ちでした。私の行った便が、その冬の最終で島の人たちは、すでに越冬のための食糧など準備を終わっているわけですが、当時、食糧の配

給は十日に一度、十日のうち八日は米、二日はデンプンで、持っていくどころか、十日の間、食べるのがやっとで食糧なんか持っていくどころではありませんでした。それで、これも感激なんです、落ち着いたところ、まず米を二俵持つてきて十分に食べてくれ、無くなったたら、また言ってくれと言われて、日本にこんなところがあるのかと思いました。翌年春三月まで、野菜や魚、米いっさい部落の人たちが私たちの世話をしてくれ、しかもお金も取らず、ほんとにビックリしました。人情も厚い上に、島も豊かだったし、それに島という閉ざされた中で親しさ、というものが重なって暖かい待遇をうけたと思います。

古釜布小学校のこと

学校の施設の面となると、島のことですから、十分でないことはたしかですが、しかし私は島で本当の教育というものを味わったような気がするのです。先生と生徒の精神的つながり、先生の気持ちをもまま子どもに植えつけていくのだという徹底した精神教育が行われていましたし、私もそれをやらなければと思いました。

教師は校長のほか三人いて、校長も教壇に立ちました。生徒は島でいちばん大きく二百三十何人いまして、さきの三つの部落のほか三、四十の戸数のあるチャップナイという部落からも通っていました。ただ一、二年生は分教場をつくって、私も通いました。

三つの部落はくっついていて、真ん中が古釜布で、雪があっても通学には不便はありませんでしたが、温泉の出るセセキには小学校しかなく高等科の生徒は六キロくらいの道を海岸沿いに通いました。当時は寄宿舎はなく、どんな雪が降ろうが吹雪こうが休みというのはなく今の子どもたちは私に言わせると、かゆいところに手が届くようで、遠ければ寄宿舎、吹雪けば休みという具合で、むしろそういう点では昔の教育のよいところではなかったかと思っています。

学芸会のおハナ

小学校は一年と二年、三年と四年、五年、六年の複式で、それに高等科がありました。私は高等科を担任していました。学力は低かったように思いますけれど、引揚げて今おとなになった人たちをみても、島の教育は精神力の教育だと、戦争中でもありましたし、それをよく生かしてくれた。引揚げて来て根室の学校に入って苦労したというけれども、よくついて立派に卒業したということです。

子どもを思う心は昔も今も、島の人たちも変わりはありませんでしたが、今のPTAに相当する保護会というのが前任の花咲港小学校にありましたのが、島には全くなくて、つくろうと島のいろんな人たちに説いて回り、主だった人に集まってもらい名簿をつくって、保護者会をつくろうとしたんですが、なんていうか、

みなさんよそよしいというんでしょうか、いやオレは保護者会なんかダメだとか、会長は校長さんやりなさいと言った具合で、実際には決めたけれども活動もなにもありませんでした。もう一つ保護者会費はどうするのか、ということなんですが、島には冬になると仕事がないし、かと言って娯楽もないので学芸会をやるんですが、そうすると、おハナがあるんです。それを青年たちが紙に書いて張り出します。当時で大体百五、六十円集まるんです。今にすると百万円くらいになるんですが、このお金でまかなうという、今では考えられないことでした。

役員と寄付

学芸会と運動会は、学校の行事であると同時に、部落最大の行事でいちばん楽しみなんです。私が赴任したときの運動会は、学芸会のおハナでやりましたが、当日もう始まるうというのに、役員の人たちが誰も来ないんです。どうしたんだろうと見たら、みんな土堤のところに立っているんで、どうかテントのほうに来てほしいと言っても、遠慮してなかなか来てくれないんです。来てもすぐ出て行ってしまいうんで、どうも部落の人たちとしっくり行っていないんじゃないか、と思ったりしていました。もちろん一般の人たちは賑やかに楽しくやっていました、あとで理由を聞いてみると、寄付をとられない運動会には、役員づらして行けないと、こういうことなんです。

校長の役目

校長というものは別にえらいものではありませんが、しかし島ですから校長、警察官、営林署の担当官、それにお医者さん、こういう人たちは島の指導的な立場になります。

校長は大体、生活のほうの相談役ということで、部落会があっても、面白いことに、校長が席について始まる。在郷軍人会分会で会長を選ぶにしても、みんなで選んだ結果を校長に諮問して校長がよしとなると決定する、というふうでした。

ですから、たとえば、うちのオヤジが、ムスコがーといった問題の相談があつたりしますし、判っても判らなくても、いちおう目安をつけてやらなければなりません。私としては張り合いのある生活でした。

先生の給料

古釜布は泊村の行政区画の中にありましたが、先生たちの給料は古釜布の郵便局に送られてきました。当時、先生の給料には島手当がついていました、五円でした。給料の二十％程度に当たる額で大きなものでした。役場から部落の方に行くのは殆どなく、役場の教育係が学校に来ることも年に一回くらいでした。

私たちのようなものが指導的な立場にあつて、警察官なども職務で相当威張っていましたが、「あそこ」ではああいう形でなけ

兵隊のために野菜づくり

れば治安維持ができない、ということ、ちょうどよく皆さんが安心して生活できたということでなかったかと思います。とくに冬期間はどこにも行けない、誰も来ないということ、警察官は治安維持、営林署のダンナは盗伐などさせないし、そして先生たちはいろんな相談を受けるといったことで、うまくいっていたといえるようです。

豊富な物資

戦争中でも古釜布には小料理店があつて私もビックリしました。そこで歓迎会があつたりしまして当時、戦争の最中で北海道は食糧不足で宴会どころではありませんでしたのに。根室の花咲港にいたときは、代用パンを売るといので並んで買ったんです。ところがここにつくと、校長の歓迎会だったので、それに芸者さんまでいるんです。白粉を塗って、それに酒も豊富ですし、どこからこんなに、いったいどこにあるんだろうかとビックリしました。それから役場から村長さん、助役さんが来るとか、教育関係者が来るとか連絡があつたときには、その関係の部落のところに回状を回して、そして料理屋で歓迎会を開くんです。これは戦争の終わるまで続きました。

日本兵は昭和十九年（一九四四年）のたしか秋ころ歩兵部隊が先に入りました。あちこち転戦してきたようで、学校の横に、先任の校長が部落の人たちに相談して教室三つばかりの青年学校というのを建てたんですが、ここに駐屯していました、五、六十人いました。軍への協力は要請というより進んでやりました。子どもたちは兵隊さんたちの食べる野菜づくりで、勉強は第二、兵隊さんには大いに働いてもらわなければならないと、私も百姓みたいのものでした。

青年学校は軍隊の予備学校みたいなもので、訓練いっぽん槍で、青年学校を卒業して召集を受けたら軍での訓練を受けずに戦地に行くということ、随分訓練をしました。私は青年学校長をかねていましたし、また学校を出したときに短期現役兵で歩兵伍長で帰りましたから指導員でした。島は第一線のようなものですから訓練は苛烈にやりました。生徒は八十人くらいでした。これは部落の青年たちで、このほかに日魯会社がありまして、ここには夏から秋にかけて八十人くらいの若い者が来ますから、一時は百六十人くらいになりました。

日本兵のほうは、私もよくさだかではないのですが、昭和二十年（一九四五年）の春頃に移動を開始しました。どこに行ったかよくわかりません。ただ古釜布には通信隊が残りました。二十人近かったようです。

混乱の終戦日

終戦の日の十五日は、私にとっても忘れられない日で、この日の朝、通信隊から今日は重大な放送があるから一緒に聞こうという連絡があったわけです。行ってみましたら警察と隊長ともう一人兵隊がいて私と四人で放送を聞いたんです。これはビックリしました、ところがよく聞こえないんです。耳をラジオにくっつけて聞くんですが雑音が激しくて、その切れはし切れはしに、戦争は終わったと天皇がおっしゃっていると、私はそのように受けとりました。みなさんも、そう受けとっていたら放送が終わってから戦争は終わりましたね、と言うと、そこにいた人たちは同意したんです。帰ってきて早くみんなに知らせなければいけないと、先生たちもいまして、みんなに戦争は終わりましたよと知らせたんです。先生たちもまた、みんなに知らせたんです。ところが一時か二時ころになって通信隊が私を呼びに来たんです。そして兵隊が私をぐるっと囲みまして、前の方に通信隊の隊長と警察官がいて、もののしいんです。何ですかと聞くと、あなたはとんでもないことを言っている、あなたは戦争は終わったと部落に伝えているが、戦争はこれからますます苛烈になるんだ、国民は苦難に耐えて勝ち抜かなければならないと言っているんで、お前はとんでもないことを言い回っているというんです。そんなバカなことがあるか、と記録があるといって持ち出してきたんですが、それも切れはし切れはしで、苦難だとか耐えなければならな

いとか、そんなことしか書いてないんです。これではダメだ、五時のニュースを聞こうじゃないか、と別れたんです。そのあと、警察官が部落の中をメガホンで戦争はこれからだ、みんな頑張らなければならないと大きな声で回って歩いていました。その晩に部落の人たちが来て警察は何をやっているんだ、晩に聞いたら戦争は終わったというではないか、と言うわけです。

黒板で情報を知らせる

島のことですから終戦といっても情報が他から全く入って来ないんです。ラジオにしても島に何台あったのか知りませんでした。前田さんという方がラジオを持っていました、小さなラジオで、これを毎晩のように行って聞かしてもらって概略のことを学校から黒板を持ち出して、道路に立てて古釜布のみなさんに知らせました。ところが、これも誤解を生みまして、軍でもラジオを聞いていましたから、その字句が違うとか、文句が違うとか色々なことがありました、私としては少しの間でもやったことが良かったのではないかと思っています。

しかし終戦とはいっても、今後どうなるのか、アメリカが入るのかどうなるのか全然わかりませんでした。

整然とソ連兵が上陸

そんな中で九月二日でした。今日から学校が始まるという日の朝六時ころ、部落の人が窓を叩いて沖の方に軍艦のようなものが通っているというので、日本のものかどうか分からないというので、私もまかなって古釜布の浜に出てみました。そのときは、もう一万トン級の船が沖にっていました。私は一万トンもの船は、古釜布の海には入れないものと思っていましたが、堂々と入っているんです。そしてその船から舟艇で、どんどん上陸を始めているんです。初め私は日本兵かと思っていました。それから上陸した兵隊たちが四列に隊を組んで、整然と古釜布の中に進駐してきました。

手紙で対応を求める

終戦になってからも道や上の方から、教育関係はどうしろ、従来どおりにしている、といった指示はなく、ソ連兵の上陸には動揺しましたし、どのように処置したらよいか困りました。ちょうど五日の日でしたか、日本の船が逃げるといふ話を聞きました。しかし、これは他の島のような脱出と違っていて、ソ連軍の真ん中から逃げようなもので、ですから要所要所には大砲まで据えつけていまして、うまく逃げてくれればいいなと思っていました。私は、そこで手紙で軍の状態や部落の状態をつまびらかに書いて、

支庁のほうに送ったものでした。そして我々は、どうしたらよいのかと書きました。そうしたら五日くらいして返事がありました。これは私信のようなもので、今、日本の国の中でもアメリカ軍が進駐するという話は聞いているが、それがはっきり分からない状態であり、島の方の指示も出来ない。だから、そちらの方の判断でもって処置してくれということでした。

世界が青く見えた

上陸用舟艇でオキノコタンというところにソ連兵が上陸したんですけれども、それを見て私はすぐ学校に帰り、学校には青年学校で使う銃や背のうなど兵器がありましたから、それを始末しなければならぬと帰ったわけです。帰って縁の下なんかには、色々始末しているうちに、あちこちに歩哨が立つたんですね。で私が学校から出ようとしたら、玄関にソ連兵の歩哨が立っていました、私が出ていったら向こうもビックリしたんじゃないですか。誰もいないと思っていた学校から出てきたんですから……。そして軽機関銃を私に向けて、大きな声で何を言っているのか分かりませんがワイワイ言っているんです。で私は手をあげたんです。手をあげればいいと思ってあげたんです。ところが手をあげると、ますます銃の引き金を引きそうな様子をみせるんです。それで手をおろしますと、私の背中に銃口をつきつけて連れて行きました。そのとき私は撃たれるんだなと思いました。処罰されるんだなと思

いました。それから大通りに出ましたら将校三人くらいと、兵隊がそれを囲んで銃をあちこちに構えていて、そこに引っぱっていくようなんです。うちの家族たちも私が連れられていくのを窓から見ていまして、私も見たら子どもチラッと見たら、子どもの顔が見えました。だけれども、やられるんだなあと考えました。

色々戦地なんかで生死の境を通ってきた方も多くいられると思いますが、私はあらかじめ、私はここで死ぬんだな、という心境になったとき耳は何も聞こえませんでした。そして色は青色というか空色というか、世界がそういうきれいなものになりました。

そして全く自分の心に不安がなくなりました。そういう覚悟というものができました。そして将校たちのところへ行きましたところ、彼等は私を兵隊と見たんですね。さかんに手真似で帽章や肩を叩いて肩章をよこせというんです。初めは分かりませんでした。が、これは兵隊のことを言っているんだなと分かりました。それで私は先生だということを表わさなければならぬと、字を縦に書いてみせたんです。ところが向こうが何のことか分からないんですね、首をひねったりして考えていました。そのうちにソロバンではどうかと思つて、そうしたら向こうもハハアと分かったように頷いて帰つていいと言いました。

そう言われて、そうですね三百メートルくらいありましたが、それを後ろ向きになって帰るときは、行くときは覚悟していましたが、帰るときに助かったという気持ちと、早く帰らないと後からぶたれたら大変だ、という気持ちが交錯して、あんな恐ろしいことはありませんでした。

給与が六倍に

ソ連が上陸して変つたことといえば、最初のうちは誰も手をつけられませんが、どうなるのか不安でしたが、そのうち学校のほうに通訳が来て、学校をすぐ始めてほしい、始めることで人々は落ちつくんだ、ということがありました。

それで私たちの給与のことを話し合ひまして、私はいくらにしたらよいかと考え、四百八十円と言いました。その当時、実際には私の給与は八十五円くらいでしたけれど、まけると言うかダメだと思うかと、いいと言うんです。それから一般の先生はいくらだというから三百八十円だというと、それもいいと言います。先生たちにそれを言うと、へえ大したいいんだね、ということでした。しかしロシア人たちが働いているのを見ると、大体、普通、工場などで働いているもので、日本円に直すと六百円か七百円くらいのものでした。

そういうことで、結局、学校はもとどおり私たちがやらされました。それに古釜布は兵隊たちが来た中心でしたから、他の学校にも回つて始めるよう伝えてくれといわれ、私が各学校を回りしました。ところが回つてみると、行く道々で荷物をかついで涙のほうへどんどん逃げるのが見えるんです。学校で先生たちにソ連軍は学校を始めくれ給与と食糧は確保すると言っている、と伝えたんですが、お前は何を言っているんだ、部落の人たちは、みんな逃げるんだぞ、そんな捕虜になれ、などと言い回っていると、

お前とんでもないことになるぞと言われました。そう言われればそうだ、と思って学校で日の暮れるまで、ぶらぶらして帰ってき、行ってきたと報告した。そんなこともありました。

上陸した兵隊は三、四百くらいだと思います。およそ大規模だったと思います。

ソ連軍が上陸したあとの民生の安定という面では、その年の秋ころ、日本人を集めて村長さんを決めるんだ、あなたたちの間でいちばん信用のある人を村長さんにするんだ、誰がいいですか、ということになりました。で、古釜布では東峰弥一さんという方が村長さんになりました。しかし、なってみましても、ソ連軍の命令を下達して日本人を使う中間機関でした。

子ども、先生もケンカ

学校を始めたのは九月七日ころでした。夏休みのあとで、家族と一緒に逃げた者もあって、いつ、どこへどのように逃げたのか分かりませんが、始めたときの生徒の数は三分の二くらいのものでした。

教育の内容については、私たちも色々指示があるだろうと思っていたわけですが何もなくて、ただ国語に出ている天皇とか帝国だとか、字句は削除せよ、あとは外国語も英語なんかやってもいいということ、教育に対する干渉は、あまりありませんでした。それから、どういうわけか日本の軍隊とは違いました、向こう

の将校たちはオカミさんを連れて歩くんですね。その年の秋になりましたらソ連学校というものも作らなければなりません、ソ連の将校たちの子どもは三、四十人だったと思います。それに先生が一人ついて、日本学校の一部をソ連学校として、看板も二枚あげて始めました。

ところが、そのころはまだ日本人は世界一だ、という意識がありましたから、負けたとはいえロシア人なんかロスケ、ロスケと下に見ていたところでした。子どもたちも、そういう意気で、なかなかかかなくて、便所なんかでソ連の子どもと日本の子どもと一緒に小便したあとなんか、いろんなことを言って取っ組み合いなんです。上になり下になりして、他の子どもが私を呼びに来る。向こうの子どもは向こうの先生を呼びに行く、ということ、こうなると良い悪いにかかわらず、日本の子どもについては私は絶対いくしなればなりませんから、ソ連の先生もそうで、今度は先生と先生のケンカ、といったようなこともありました。

この状態は翌年の春まで続き、ソ連の方は旅館で別に学校を開きましたから縁がなくなりました。しかし日本学校は、その後、今度は浜の番屋に移され、学校は劇場にかわるということで、日本学校そのものは彼等に見れば一時的な処置だったと思います。

別れたあとの交流というものは特別にありませんでしたが、劇場で映画をみるときは一緒に見なければなりません。子どもに対して向こうは非常に親切で、一週間に一回はソ連の映画でしたが

見せてくれました。教育の面で私たちとソ連人の間で、子どものシツケの問題など色々と話しました。

日本の子どもとソ連の子どもが一緒に遊ぶこともありました、やはり日本人、ソ連人という気持が子どもにもありました。

引揚げは昭和二十三年（一九四八年）の八月、引揚げ命令が出て、ナカノコタンに一カ月くらいいて、樺太經由で函館に着いたのは十月です。



国後島 賑やかな頃の高釜布市街と湾
公益社団法人 千島歯舞諸島居住者連盟
戦前の北方四島写真収録集より



国後島 高釜布市街を望む
公益社団法人 千島歯舞諸島居住者連盟
戦前の北方四島写真収録集より

証言者 箭 浪 光 雄（四十五歳）

齒舞群島（多樂島）元島民 明治町一丁目

馬が背中をなめる

生まれたのは昭和四年（一九二九年）、多樂島のポンカガマイというところです。多樂島に住むようになったのは父の代からで、富山から来ました。聞くところによると運搬船の船頭をやっていた、あるいは漁業の船頭もやっていた、というふうに聞いています。ですから私は生まれてから引揚げまで多樂島に住んでいたわけで、島の様子はよく覚えています。当時は島で越年する人は極めてわずかで、病気や食糧の関係、それに住居そのものも、あばら屋で越年するような状態ではありませんでした。春四月ころ島に渡って漁業を営んで、十一月になって時化が来ないうちに引揚げて根室で冬を越すという生活でした。

それが、島で越年するようになったのは、私の家は昭和十五年（一九四〇年）からでした。それは越年できるような住居になってきたということです。今から比較すると、やはりあばら屋ですが、越年するようになった昭和十五年（一九四〇年）に建てた家はタタミ、建具が入るようになりました。それまではタタミなどはなく、星をおおぎながら風呂に入る、といった状態で、ある夜、風呂で体を洗っていると、自分が洗っていないところがザラザラして、くすぐったいと思ったら、馬が背中をなめていた、そん

なくらいのあばら屋だったものです。

四月から昆布獲り

終戦を迎えたときはフルベツでした。フルベツは島の中心で官公庁もあって、島全体の人口は、引揚げてきてからの調査では百九十四世帯ということで、人口は約千二百人くらいいたということです。フルベツには、このうち四割くらいでしたでしょう、人口そのものも、島の人たちだけでは人手不足で富山や山形のほうから人が入ってきて、中には土地を開拓して定住する人もいて増えていました。

気候そのものは納沙布岬に立つて感じるようなものです。冬の流水は多く、十二月の声を聞かないうちに来て、そうなるとう島は孤立するわけで、越冬するようになってからは、越冬用の物資については、その年の九月のうちに生産を、根室に出て仕込みの親方に精算してもらい、もし赤字であっても、その冬を越すだけの物資は、親方を通じて確保してもらったということです。

私の家ではアブラコ釣り、タラもやりましたが、主に昆布でした。島の昆布漁は早く、四月から十一月までありました。冬は流水がありました「氷連れ」の昆布がシケのたびに、浜が土堤になるくらい昆布が寄ってきたもので、これらの流水を胴長をはいて流水をかきわけて拾いあげるのが主な仕事でした。

当時は今のような機械乾燥室のようなものはなく、また今では

フルベツのじゃ

天候の様子を見ながら漁に出ていたりしますが、私たちは朝の三時になると仕事に出るといった具合で、天候のことを考えないで獲ってくるものですから、腐らせて投げるといいうものも相当ありました。

盛漁期の労働力は、自分が漁に出る男衆は主に富山から、陸まわりといって、昆布干し、タラ干し、タラさき、といった女衆で出来る仕事は、ずいぶん山形から来ていました。私のところにも毎年二人の女衆が来ていました。

島には娯楽施設とか一杯屋というものは勿論なく、日常生活といえぱランプ、水は山のない島でしたが井戸水で不自由はなく、暖房はあばら屋当時は炉ばたの焚き木でしたが、越冬を始めるようになった昭和十五、六年（一九四〇、一九四一年）ころからは薪ストーブを使うようになり、石炭は主に風呂に使いました。

病気の場合は島に医者がいなく大変でしたが、年をとったお婆さんが二人、産婆さんがいまして、この人が当時、まじないのようなことをしていました。これが結構、役に立ったようで、軽い病気、ヤケド、ケガぐらいのものは産婆さんがやってくれて、重くなると舟を仕立てて根室に出るということでした。ただ冬期間となると流水をかきわけて出なければならぬわけで、いま考えると、病気のことを考えるとゾツとします。

フルベツには小学校、郵便局、無線局、警察、それに生産物を扱う水産物検査所がありました。齒舞村役場の出張所はありませんでした。納税とか役場からの連絡は役場から係が来しました。しかし各戸に回るといいうのではなく、誰いうとなく、別にみんな決めてたわけではなく「島の村長さん」といった世話役ができて、連絡の仕事などをやってくれていました。

フルベツの学校を卒業したわけですが、海、氷を利用した遊びの思い出が多く、学力のほうは自慢になりません。子どもの遊びは海に親しんだものでした。

島の開発といっても特別なものの記憶はありませんし、まったく開発されていなかったと思います。道路も、ここが道路というわけではなく、人が通れば道路になって、前浜干場にしても人が始終通るところは、いつの間にか道路のようになって、そこでは昆布を干さない、というようなことでした。草原にしても、人が通れば草が倒れて、そこが道路のようになって、道路だと思って歩いています。

島のよさは人情の厚さ、どこの家で、どんなことがあったのか、みんな耳に入っていましたし、猫の子一匹生まれても知っていましたから、お互い連帯感を持って生活していたということです。

不思議な多楽石

多楽石は島に住んでいた私たちも不思議だと思っていた点があります。というのは、多楽石という地名の場所があったんですが、そこへいくと、どこにでも多楽石があったかというところではなく、小川が二本あって、小川と小川の間が五十メートルくらいのものでしたが多楽石は、そこにだけしかないんです。かといって、そこで自由にとれるというような石ではなく、だから貴重な石ということにもなったのだと思います。ところが昨日行って、全部拾いつくしたと思っても、また行ってみると、どこから出てきたのかあるんです。調査までしたのですが、どこから出てくるのか分からずじまいでした。当時、多楽石を利用する話がありまして、札幌の三越に持っていくと、帯止めや指輪に加工されて貴重がられるというので、一時は夢中になって石を採集に出かけたことはありますが、先にも言ったようにたくさん取れるわけではなく、そういう点でも貴重な石と言われたものです。

盛んなホービキ

動物は家畜の馬、牛、養狐場をやっていた人もいましたが、家畜にいたずらをするとかいうので、島の向いにトド島という小さな岩礁ですが、そこに野放しで飼育していました。植物はガンコウランなど高山性のものが随分ありました。木といえばハマナス

くらいのもので、これは随分ありました。

根室には生産されたものは、殆ど出荷され処理されていましたから、そういう点でも島とのつながりは深かったわけです。根室には何千トン級の昆布の積取船が入っていて、その当時の根室は景気がよかったです。

観光面から島をみると、自然環境の点ではカガマイというところに、根室と同じような弁天島があり、また缶詰工場もあった。当時、相当の女工さんも入っていて、景気よく女工節を歌っていたということもありますし、それに例の多楽石など、結構見るところがあったと思います。

島での娯楽といえば、子どもたちは海で遊んだり、野原では寝ころんでいてもフレップをとって食べれたり、そんな風でよく遊びましたが、大人たちの娯楽は、これは冬期間に限られますが、三月十日の陸軍記念日には、島の青年男女が学校の運動場を借りて、一日中いろんな余興をやるんですが、このときは島中の人が、重箱を背中にしょって楽しんだという思い出があります。運動会は勿論、そういうときは島中の人たちが一人残らず集まり、運動会にしても子どもたちだけの行事ではなく島中の行事で、そういう面でも子どもたちは楽しい思いをしました。

百人一首とか高級な娯楽は、あまりやりませんで、花札なんかは結構やっていました。これは限られていたようですが、島中の人が私はやりませんというものに、ホービキ（宝引き）という縄を引くやつですが、これは一銭賭けたり二銭賭けたり、老若

男女問わずやったように思います。

ワラ人形を仮想敵に

昭和十六年（一九四一年）から始まった戦争で、島でも青年学校が在郷軍人による軍事教練を始めるようになりました。これは男女ともに対象でした。教練は木銃でしたけれど相当きついもので、強制的なものというより、多少体の具合が悪い人でも自ら進んでやらなければならないんだと、決死の覚悟というか、そういう気持ちでこぞって出ていました。

隣組もありました。防空頭巾をかぶって、空襲などのときの訓練を、老若男女を問わず頭巾をかぶり竹槍を持って浜に出て、あるいは敵兵が来たときはこうやるんだと、ワラ人形をつくってこれを仮想敵に見立てた訓練は毎日のように行なわれていました。

日本兵はハッキリ覚えていませんが、昭和十七年（一九四二年）か十八年（一九四三年）ころに來たと思います。大体五十人くらいのものでした。大隊本部が志発にありまして、人数が増えるときも減るときもありました。

多楽島ではフルベツのお寺に宿泊していました。兵隊が來たときは戦争も厳しい状況になってきたときで、島の人たちも、こぞって協力するといった具合で、今考えるとお粗末なタコツボだとか散兵壕だとか、島中の野原が穴だらけになるくらい掘り起こしたものです。

兵隊さんたちの出身地は主に三重県、滋賀県のようにでした。青年学校の青年たちも、冬場になると兵隊さんと一緒に軍事教練をやって、あるときは二日も三日も、お寺に泊まり込みで訓練をしていました。私は軍隊に入った経験はありませんで兵隊さんからのビンタは受けませんでした。が、訓練そのものは兵隊さんと同じでした。

しかし反面、ともに訓練をしたということ、そういう時世を生きているということで親しみは人一倍ありました。

当時はいたて男女関係はきびしく、国民一丸となって戦わなければならぬという時でしたから、若い兵隊さんや島の娘さんとの間のロマンなどは聞かれませんでした。が、今になって当時の思い出を色々聞かされたりしますと、そんなことがあったのかと、結構かくれたところで個人のロマンは芽生えていたようです。

食糧を貯えて覚悟

七月十五日の根室空襲の日は雲一つない天気の日でしたが、はるか根室の方向に三本の白煙があがって、根室が大空襲を受けて殆ど燃え尽きているんだということで、島中の人たちは浮き足だつて、この光景を眺めていました。

敗戦は島に二台か三台、わずかあったラジオで知ったわけです。それにしてもラジオにかじりついて聞いていた人が、集まっている部落の人たちに知らせるといったことで知ったものです。敗け

るなどということは毛頭考えていませんでしたし、根室の空襲をみても戦争が厳しくなってきたことは覚悟して、二カ月や三カ月は保つ食糧などや夜具布団を、防空壕に持ち込んでいたものからです、敗戦は知らされたものの、何とかボケツとした気持でしたような気持でした、

敗戦当時の兵隊さんたちの様子は、よく分かりません。

ソ連兵を出迎えた日本兵

ソ連兵が九月三日に上陸してきたときは、まだ日本の兵隊さんは島にいまして、上陸の様子を私は見ていました。島の岬の方から見馴れない舟が何隻か来たと、島の中心であるフルベツに馬に乗って駆け込んできたわけです。そのときはもう、フルベツの私たちの目にも見えていて、早いスピードの舟でフルベツに上陸を始めました。そのときは日本の守備兵も出迎えていました。私たちはソ連兵かアメリカ兵が来るとは考えていましたが、島にあがってくるとは思っていませんでした。出迎えたというわけではありませんが、おっかなびつくり、前浜に結構集まりました。

ソ連兵が自動小銃を構えて上陸してきたとき、日本兵は別に抵抗もないし、将校たちが何か話をしていました。

女、子どもは日本が敗けたとなったときから、外国の兵隊が島を占拠してきたときは何を置いても隠さなければならぬんだ、占拠されたら男たちは能力がないようにされるとか、女は連れ去ら

れるとかそういう風評があったもので、屋根裏や裏山に隠れてもらったり舟が入ったときは、子どもは隠していました。

歯が抜けるように脱出

私たちの引揚げは比較的早いほうで、その後間もなく、多楽の島にはソ連兵はいなくなつたと聞いています。日本兵がソ連兵に連れられていったのは上陸してから数日後でした。連行していく船が入って、うちの浜を通って連行されていく状況を見ておりました。どこへ行つて、どうなつたのかはサッパリ分かりませんでした。

私たちも不安になって、ソ連兵が上陸してきてからは、一夜あれば隣近所の人がいなくなる。島を脱出していったので、それで私たちも十月二十日に島を脱出してきましたが、その頃はもう島の七割方が脱出していました。

ソ連兵の私たちへの態度は最初のうちは、さほど厳しくありませんでした。というのも、島の私たちの生活は四月から十一月まで、冬の間は根室に引揚げるとのこと、を、さかんに吹き込んでおいたわけです。最後まで残っていた人はいまして強制送還までいたようです。

ソ連兵に見つかる

私たちの引揚げ先は函舞ですが、島に財産も置いてきたので十二月に入ってから、まだ島にいて舟を持っていて、島の人たちのために財産を運搬してくれていた人がいましたので、たまたま函舞から根室に出てきたとき、その舟が明日、島へ行くという話なので便乗させてもらい、ちょうど隣の人もいたので一緒に行きました。島にあがると、その家では食糧も、まだよく持っていて、よく来たと歓迎され、お汁粉などをご馳走になって、こんな様子なら私たちも引揚げない方がよかったのではないかと考えたりして一晩ご厄介になりました。ソ連兵は、まだいましたが、着いた日は見つかりませんでした。ところが舟に手あたり次第、家のものを積んで、それから夜陰にまぎれて脱出しようとして見つかったんです。

十二月ですから朝三時だとまだ暗くて、六時ころ抜け出ようということになって五、六百メートル走ったときでしたか、馬に乗った兵隊だと思うんですが、相当のスピードで島の磯辺に灯りがチラチラしだして、それが五つも六つも十もだんだん増えてくるわけです。そして、すごく早く移動し始めたなと思ったとたんに射撃されたんです。舟が走れば走るほど煙筒から赤い火の粉が出るので、それを目当てに射たれるものですから、幸い当たりはしませんでした。確実に舟の周辺に届くわけです。弾が届かないところまで逃げ切るまでの時間の長かったことは、いま考えても

ゾツとします。

ソ連兵は当時、日本守備兵の九九式銃を自分たちのものにして使っていましたから、あれは四千メートルまで照準がきいたもので、五百メートルくらいのところから射ち出されて、四千メートルを脱出するまでの距離の長さ、時間の長さは身の縮む思いでした。

再び島へ上陸

ところが一月になって、また行っただんです。一月十五日だったと思いますが、とにかく食糧が無くて、住むところは親せきの小屋を借りていましたが、食糧に困って買い出しに行くにしても、お金がありません。働き口を探しに根室に來ましたら、たまたま終戦まで、島に物資の運搬に通っていた大きな船が、明日行く島の人たちと二十五、六人乗っていくことでしたので、私もぜひ乗せていってくれとお願ひし急遽、乗って夜陰にまぎれ行きました。そのときは、もう手当たり次第に船に積み込みましたが、雪の深い日で、私たちの住んでいたところから一里くらい離れたところに船がついたんです。いま考えるとバカなもんだと思うのは、私の住んでいた家まで朝一時ころですか、人が全く通っていない雪の上を、とぼとぼと行ってみて、窓ガラスや戸の壊れているところを、石ころを拾って、板切れを拾って打ち込んで、来年か再来年か、また来れるんでないか、と思って帰ってきたもので

す。

島に残してきた財産といっても誰も、これといったものはありませんが、自分の使っていた土地や家とか、牛や馬、それに舟といったものでした。

命がけの生活

昭和二十年（一九四五年）に引揚げ、翌二十一年（一九四六年）の春から、ずっと島の生活で、漁業をやるか船に乗るしか生きる道がないというので船に乗りました。当時、食糧不足で秋田の船川というところに統制物資ではありましたが、米を運ぶ「米まわし」をやっていました。地元の魚も運びましたが、主に「米まわし」で、たまたま十二月の暮に津軽海峡で三日三晩シケに会い、命からがら函館に入って二日くらい眠りほうけた。ということがありまして、帰ってきたとき親に話をしたんです。そしたら島を追われ、兄や姉が、すでに他界しておったものですから、私が長男のような立場で親としても心配だったのでしょう。私に相談無しに建具関係の、性来の不器用で、そんな仕事に入るなどとは夢にも思っていなかったんですが、親が独断で入るように約束してきてしまったんです。それが今の仕事になったというわけです。

子どもに引き継ぐ

島に生まれ、島に育ち、復帰運動にも色々携わってきていることもあって、島に対する愛着は人一倍のものがあります。

子どもは三人で上は二十歳です。もちろん子どもたちは島のことは知りませんが、島のことは、ときたま話しに出ますし、また運動関係の仕事をしていた、資料を揃えたりしているものですから、そういうものに目を通しながら島の様子などを聞いたり、そのときは復帰運動を絡めながら、島は日本の領土なんだ、しかし、今までの事情で私たちが追われてきたんだ、ということ話をしています。

島の話は、今とは随分かけ離れた素晴らしいところが多いものですから、子どもたちも一回は島に行ってみたいという気持ちがあるようです。

四島の壮青年が結集

昭和四十四年（一九六九年）に多楽島壮青年連絡協議会を設立して会長になりましたが、これは多楽の島ばかりでなく各島の引揚げの人たちの間では、親睦を深めるための会ができていますが、親睦だけでなく、我々としては復帰運動も手がけなければならぬ。それに我々ばかりでなく、島のことを知らない方たちでも、日本の領土だから返してもらわなければならないと、復帰運動に

協力してくれている方が非常に多いわけですから、当時の島のことを知っている者たちが今までのようなことでいいのか、という話し合いがキッカケになり、復帰運動の協力や、また後日のため少しでも役立つよう少しでも運動しなければ、ということが発足したわけです。あくまで復帰運動に協力するというのが目的の団体なわけです。

呼びかけは多くの人たちにしなければならぬと思いますが、まず身近な壮青年を、ということで多楽島出身者に結束してもらい、その結束を皆さんに見てもらって呼びかける、というので発足したものです。年代については年輩の人たちは親睦の会をつくっています、行動、運動のしやすい年齢として五十歳以下としたわけです。それから会を発展的に解消して、昭和四十六年（一九七一年）三月に北方領土居住者壮青年連合会をつくりました。多楽という一つの小さな島の壮青年の集まりでしたが、私たちの要求する島は四つの島ですから、多楽だけの集まりであってはならないということから範囲を広げ、みんなが一堂に会し、後継者たちに運動を引き継がなければならない、結束してやらなければならないと、島ごとに運動していた若い人たちが一緒になったわけです。

守備兵の人たちと再会

話は前に戻りますが、ソ連兵に連れられていった日本の兵隊さ

んたちのことも心配だったんですが、ちょっとしたキッカケで消息を知ることができました。島では守備兵と島の人たちは密接な間にありましたが、私たちは引揚げてからこの方、日々の生活に追われていて、心にかねがねも連絡もせずに過ごしていたところ、子どものころ島で親しんだ守備兵だった人と文通を始めた人が市役所にいました。昭和四十二年（一九六七年）のことで、それがキッカケになっていくわけで、三重県にいる昔の守備兵だった人たちと根室の駅で会ったときは感慨無量のものでした。

それ以来、三重歯舞会という組織を作ってくれて復帰に協力してくれていますし、私たちも向こうへ行ったりして交流を深めています。



多楽島 尋常小学校の校庭

公益社団法人 千島歯舞諸島居住者連盟
戦前の北方四島写真収録集より

証言者 橋本松右衛門（七十三歳）

国後島元島民 大正町三六

ニシンがたくさん

友人がいましたので、大正十三年（一九二四年）五月に単身で内地から島に渡りましたが、初めから定住するつもりではなく、どんな島を見るつもりだったのです。ところが、その年、海にたくさんニシンがいるのに、ほとんど捕っていないので、一回帰って準備をして、その年のうちに渡ってきました。島の回りの多くの資源に魅せられたわけです。

定住するようになったところは国後島泊村の近くのチカップナイという国後島の東前の中央です。チカップナイは六十戸、二百五十人ぐらいの小さな部落でした。泊村は、いくつもの部落で構成されていて、多いところは二百戸ぐらい、小さいところは五、六戸で干場と港で部落がつくられていました。

住民の九十％は漁業で、あとの十％は林業とか鉱業とか色々な仕事についていました。森林資源は豊富で年中、根室に運んでいました。

漁業は春だとタラバやホッキが主で、夏は昆布やホタテ、秋は昆布やホタテ、ホッキ、冬になると自家用の薪とか来年の仕事するとか、休んでいる者は病気の者くらいでした。

生活は一般に稗で米、味噌、醤油は漁業組合ができる昭和十二

年（一九三七年）ころまでは、仕込み制度で根室の親方から送ってもらい生産物は、そこへ届けて生活していました。昭和十二年（一九三七年）後は組合に全出荷ということになりました。

冬の流水は毎年来ましたが、根室からの船は氷の合間をぬってきましたけれど、氷が多くなると一カ月くらい途絶えることがあって一カ月前の新聞しか見られないことが、たまたまありました。チカップナイから四キロぐらいのところが古釜布で、そこには駐在所も学校も医者も全部そういうものがありましたから大した心配することはありませんでした。病気の時は馬で走って行って医者を迎えてきましたが、重い病気の場合は、銘々の漁船か運搬船で来ていれば、それに乗せて根室まで行きました。

南と北に温泉

小学校の子どもたちは、夏の間は全部、古釜布へ通いましたが冬になると、小さい子どもたちだけ分校を開いてもらいました。

上級学校へは大抵、親戚を頼って根室とか函館、札幌へ出していました。

島の道は悪くて、ひところ馬車も使っていたようでしたが、ほとんど馬が交通機関でした。部落と部落との連絡も、その程度で昭和九年（一九三四年）に縦貫道ができましたが、これも馬程度しか歩けませんでした。

島の動物はキツネ、ウサギがたくさんいたし、クマも奥のほう

にいて、たまたま馬がとられ、私は見たことがありませんが、そういう話がよく出ていました。馬は交通機関でもありましたから、どこの家にも一頭や二頭いました。牛はいませんでした。

森林は東前から西前まで大変豊富で、それに畑作しても収穫はありましたが、手っ取り早い漁業の仕事について、野菜などは全部、根室に頼っていました。

私の住んでいたチカップナイは裏の山が近くて高いものですから根室よりは暖かい感じがしました。温泉も北、南とも十キロほどのところの浜に湧いていて温泉宿もありました。

いま思えば国後の島全体が断崖絶壁であったり、ローソク岩とこののがあったり、観光地としても価値のあるところでした。

冬の楽しみといえば、酒の好きな人は酒を飲むとか、演芸会をやるとか、あるいは歌会、カルタをやるとか、そんな楽しみがありました。何か喜びごと、不幸があれば部落をあげて、仲良くやっていました。

若い者の結婚は部落内ということではなく、よそから嫁をとるという、見合いで結婚する場合が多かったようです。

島は日本の領土だ

終戦前の年あたりに、たしか歩兵部隊が、大隊編成だったようなんですけど、一個中隊ぐらいチカップナイに来ていました。それから富山の歩兵部隊が一個中隊くらい民家に泊まって、防空壕

を掘ったりしていました。島民も何かのときは協力していましたが、働ける者も少ないので一部でした。七月十五日の根室空襲の日には根室の方に雲のようなものが、どんどんあがるので変だ変だと言っていたら、夕方になって根室が空襲になって全滅だと聞き、みんなガッカリしていました。いずれアメリカ軍は島の方にも来るものと覚悟していました。

終戦はラジオで知り、勝つと思っていた戦争に負けガッカリしていました。当時としては警察から来たのか道庁のほうから来たのか知りませんが、島は日本の領土だから安心して生業についておれと言われ、私たちも安心して、そのつもりでいたわけです。

時計などを欲しがる

九月二日にチカップナイの前を軍艦が五、六隻通ったので、これは変だ、古釜布に上陸してきたのではないかと思って馬を走らせたところ、上陸用舟艇でソ連兵たちがたくさん銃を持って上陸してきたんです。そうしているうちに私たちの部落に帰る道路は閉鎖されてしまって、うちの方に兵隊が行ったかどうかかわからなかったんですが、夕方になってようやく帰ることが許されて団体になって帰ってきました。部落は大して荒らされませんでした。兵器でもあるかと思つて血まなこになって探したようです。

来たときはアメリカ兵かと思いましたが、言葉を聞いているうちにソ連兵だと分かってきました。日本人のように小さい兵隊が

多く格好の悪い人相の悪い兵隊さんたちが来たのと、みんな家の中に隠れたり、なるべく見られないようにしていました。アメリカ兵のことは聞きませんでした、日本兵はいるか鉄砲はあるか、そういうことは、ずいぶん聞き回っていたようです。

指輪とか時計とか万年筆など珍しいものは欲しがっていました、その割には悪いことはしませんでした。女子供への危害はありませんでした。

引揚げ中にも死亡

昭和二十二年（一九四七年）に引揚げるまで、ソ連兵と仲良くというよりは、私は山の木材の監督をやらせられ、木工場をつくって、材料をソ連に渡していたんです。働かざるは食うべからずで、みんな何らかの仕事させられました。

話は戻りますが、ソ連兵が上陸してきたとき、私たちの部落でも半分以上は脱出しましたし、古釜布の人たちも、私たちのところにはソ連兵がいなかったのです、そこらだいぶ脱出しています。身の回り程度のもは持つて逃げられました。私は部落の指導者でもあるし、いちおう荷物を半分積んだところソ連兵に襲撃されて、荷物半分と体を島に残すことになったわけです。

だんだん後になってから脱出できなくなりました。島に残ってソ連に協力してくれと言われましたが、日本に帰れば、どうにかなるだろうと、昭和二十二年（一九四七年）十一月の強制送還で

帰ってきました。自分の希望で島に残った人は、ほとんどいなかったようです。

日本へは古釜布で乗船、色丹と志発で引揚げ者を乗せ、国後から樺太の真岡に上陸させられました。真岡では十八日間、それから日本の船が迎えに来て十一月二十五日から二十六日に函館に上陸しました。

引揚げ中に死んだ人もいました。学校の中でごろ寝をしていたので、体の悪い人とか子どもがだいたい死んでいたようです。

日本兵は終戦前に色丹に移り、終戦になって古釜布の収容所に連れて来られて三百五十〜六十人いました。それから、その年のうちに樺太かシベリアに連れていかれたようです。



国後島 近布内湾付近で昆布干しの風景

公益社団法人 千島歯舞諸島居住者連盟
戦前の北方四島写真収録集より

証言者 伴 為 信（七十四歳）

国後島元島民 宝林町一丁目

泊村役場などに勤務

私は明治三十三年（一九〇〇年）和田村生まれ、大正四年（一九一五年）に和田村の役場に臨時雇いに。翌年、根室支庁に勤めて昭和十年（一九三五年）まで、それから国後島の泊村勤務に発令されました。島には支庁の出張で数回行なったことがありますので、わりに事情は知っていました。昭和十六年（一九四一年）に助役ということで択捉島の麁取村、一年後に国後島の留夜別村の助役に赴任して、そこで終戦を迎えたというのが戦前の履歴です。当時の役場と今の役場を比較しても大して変わってはいませんが、ただ昔は兵事を扱っていました。連隊区と連絡をとって、二十歳になれば徴兵ということで、役場の仕事の重要な面でした。住民の福祉、サービスも役場の任務でしたが、現実には、住民の方が役場にはお世話になる、という観念があるのか、役場の方が一段上というような感情がありました。

増える人口

終戦当時の留夜別村には国有林九万一千町歩、うっそうとした森林で、そのほか民有地として千二百四十町歩、人口は大きな島

のわりに少なく、総数およそ四千人。これは昭和十六年（一九四一年）ころの人口。昭和十二年（一九三七年）ころは三千人くらいで、四年ほどで千人も増えるという具合に年々増えていました。漁業が九十%を占める主産業で畜産は軍馬がどんどん徴用されていって、当時、国後馬というのは非常によいとされ、気候、飼料の関係で丈夫に育っているというので多く徴用されていました。少しは牛の飼育もありました。

林業も盛んで、昔からの大木があるし、材料も非常にいいというので船材として根室の方に、どんどん移出されていました。鉱業の方は、硫黄山、銅山があったし、開発途上の金山もありました。農業も若干ありました。終戦近くになると自給自立が奨励されていきましたので、おのずと農業が開拓されていきました。

隣の泊村と留夜別村と産業構造は同じでしたが、住民としては泊村の方は根室と十里くらいしか離れていないので、生活の面で泊村の方が便利だったということはありません。

島へ帰るのに一カ月

留夜別にいたころ、根室支庁の会議に村長と二人で船に乗って根室に出たんですが、途中で流水に囲まれて身動きも出来ず、三日も四日も沖合にいて、どうにか花咲に上陸して支庁にたどり着いたことがありました。流水では、そういう目に遭った事は少ないし珍しくありません。

村の財政は昭和十七年（一九四二年）ころ四万八千円くらいでした。役場の職員は六人くらいの小じんまりした家庭的なものでした。

産業の生産高だと水産関係が八十五万円くらい、それに次ぐ畜産が九万円くらい、鉱業が七万円くらい、林産が一万五千円くらい、農産が三万円くらいと記憶しています。今の金額にすると相当なもので、終戦で大きな財産を失ったということです。

役場も軍の出先化

赴任した昭和十八年（一九四三年）、留夜別村にも日本兵がいて戦争たけなわの時で、役場から十里離れた白糠泊というところには大隊本部が置かれていましたし、役場も協力しました。すべて役場に來て用を足すといったことでした。もうそのころになると役場の仕事も戦争への協力が主になり、島も青年や婦人は徴用徴発で自分の仕事をするといった状態ではありませんでした。

町内会なんかも、終戦ころは週に一回の集まりを開いていました。しかし配給のほうは、もう島に順調に送られてこないといった状態で、食糧増産の畑づくりを奨励したり、一家の主人は軍に徴用されていて、非常に混沌としていて非常に弱りました。

鉄類の回収なんかも役場の仕事としてやったり、税金を完納させるのも役場の重要な仕事でしたが、軍に徴用されている主人が軍からもらうものといえ、わずかなもので、税を納めるのに島

の人たちは大変苦勞していました。しかし戦争に勝つためには税を納めなければならぬと誠意をもって完納しようという気持ちになっていくれたことは、今考えても非常にありがたいことだと思っています。

天の助け、笹の実になる

食糧のひっ迫は終戦のころは、いよいよ厳しく、食糧の自給自足については、それぞれ一生懸命にやってみましたが、終戦の年、私たちが見たことも聞いたこともない笹の実が野に山に道の端に、ちようと稲が実って首を下げているように、無尽蔵にできたものでした。これは有難いというので老若男女を問わず、笹の実を食糧にと貯蔵するために一生懸命になりました。

それから山へ行つてモチ草というヨモギの若葉をとってきて乾燥する。それに、これも無尽蔵にあるフキをとってきて乾燥して貯蔵するといったように、食糧の貯蔵には無我夢中でした。

島での野菜は、もともと島の人たちは漁業に専念していましたから、畑などつくるといふようなことはなく、すべて根室から移入していたわけでしたが、しかし土地は非常に肥沃していたものですから、葉っぱ、大根をつくって非常にものすごくよいものが出来ていました。

一日前に終戦を知る

街の八割を焼いた根室の空襲は、根室に近い泊村から根室の黒煙が見えているという電話で連絡があり、大火災を起こしていることを知りました。村長も私も妻子を根室に置いていたので、さっそく電話で連絡してみると、市内のあちらこちらから火災、燃えている最中だということでしたが、それをどうするということもできなかつたわけです。島にも、いずれは空襲が来るのではないかという不安がありました。警察も行政の役場もバケツでの水運び、竹槍訓練をやっていたものです。

終戦前日の八月十四日、大隊長の命令で町会長など公職にあるもの全員が学校に集められて何か話があるということになったとき、玄関から慌ただしく兵隊が入ってきて大隊長に何か耳打ちをしていまして、戦争のことだと思いましたが、大隊長は急用が出来たので、せっかく集まってもらったが流会にするから、と言って立ち去りました。私たちも何だろうと話合っていました。終戦になるという話が聞かれました。終戦の話は十五日の前日に生まれて十五日に、それをはっきり知ったわけです。島民、人心の動揺は大変なもので、役場にどうするか、どうなるのか押しかけてくるわけですが、役場ににしても、どういう方針をだしたらよいのか分からない状態です。もうしばらく様子をみようと思つたのほうに電信を打ちましたが、二日たつても三日たつても返事が来ず、当時としては支庁としても混乱していて、それどころでは

なかつたのかもしれませんが。止むなく道の長官に対して電信を打ったところ、直ちに返答が来て、国後島は日本の領土である。貴職をはじめ住民は最後まで敢闘せよという電信を受け取りました。これを住民に見せて、この通りだから北海道に行っても食糧不足は同じだし、同じ苦しむなら島にいて力を合わせようじゃないかと足をとめていたわけです。住民は十人十色で、自分の船で出て行くもの、役場の指示で残るものと色々でした。それからだいぶ日がたつたころ、住民の七十%は島を出て行きました。

大隊と食糧の交渉

終戦後、食糧が非常に苦しい状態だったので、私と町会連合会長の二人が馬で十何里離れた大隊本部に行つて大隊長に会つて、何とか軍から補給してもらえないかと嘆願しに行きましたところ、大隊長はよろしい、軍と住民が三年間食べるだけの食糧は貯蔵されている。しかし九月初旬になるとソ連軍が上陸することになっている。その場合、物資、人員をソ連軍に報告しなければならぬ。だから、その後であれば住民のための食糧は分配するから安心してくれ。それと兵隊を五、六人、用心棒のように置いてくれと言われ、私たちは喜んで馬を走らせて役場に行ってきたということがありました。

住民のためならOK

ソ連軍が上陸したのは九月二日、古釜布で上陸すると同時に通信線を切断してしまいました。私たちの留夜別は古釜布から二十里ばかり離れていましたが、その日のうちに車でやってきたという連絡が住民から届き、間もなく通訳を連れた幹部の連中が六人ばかり役場にやって来て、庁内外をだまって見回った上、役場に入ってきて金庫の中を開けてみせると書類だけなので、よろしいということでした。それから通訳を通じての話ですが、一体お前たちは、ここでどういう仕事をしているのかとの問いなので、村長は住民の生活に直結している戸籍の事務だとか産業の関係、あるいは牛馬の仕事をしているのだと説明して、このまま仕事を続けてよいかと聞くと、住民のためだから、とにかく仕事をやって下さいという返事でした。その場に警察の部長がいます、帯剣のままでしたけれども、私たち警察も、このまま仕事してよいかと聞くと、これも、あなたたちは住民を保護する立場なのだから結構です、どうか続けて下さい、という言葉を残して立ち去りました。

ところが十分ばかりもすると部落の者が走って来て、ソ連軍が警察の部長に来てくれ、と言っているというので、部長も仕事だろうと部落のほうに下がっていききましたが、いつまでたっても帰って来ない。どうしたのだろうと部落の人に聞いたところ、ソ連兵と一緒に古釜布のほうに行ったということでした。これは、後

で分かったことですが、最終的には古釜布からシベリアの方へ連れて行かれたということでした。

日本兵の武装解除

さきに住民の食糧のことで日本の大隊長にお願いしてきたことを言いましたが、それから数日後、もう一度、大隊本部に行ったわけです。どうなったかという心配でしたが、連合町会長と、また馬で出かけました。すると途中でソ連兵が山の中から馬で出てきて、私たちの馬のクラをはずして、クツワもみな取って、自分たちは裸馬だったので、それにクラやクツワをつけて、話しをしても言葉が通じないし、そのまま立ち去ってしまい、仕方なく徒歩でたどりついたわけです。ところが部屋に入っていくと住民の人たちも涙でしゃべれないような具合でした。話を聞くとソ連兵が大きな船で上陸してきて日本兵を海岸に一列に整列して直ちに武装解除され、ソ連兵が周りを監視、歩哨に立っている。見てごらんさいといわれ、私たちも案内されて状況を目にしたわけですが、まったく涙がなくては見られないという状態でした。

日本兵は約一週間、野営に置かれたあと、一万トン級の船に乗せられて連れ去られました。これも後で分かったことですが、みんなシベリアの方へ連れていかれたということです。

部落ぐるみの脱出計画

古釜布へ立ち去ったソ連兵が三日か四日すると、またどんどんやってくるんです。大隊本部のあった白糠泊に向かっていくわけですが、それからはずれて留夜別に駐屯するソ連兵たちの宿舎を幹旋しなければならなくなって、テンヤワンヤの状態でした。中にはオンボロサンボロの服を着た女の兵隊も混じっていたり、どうもクセが悪くて空き家に入って物を盗んだり、大変な状態で、こんな連中と一緒に住むわけにはいかないし、一体どうしたらよいかと村長と相談したり、また道庁からは島に残れという電報は来ているが、どうしたらよいかと、住民も役場に押しかけてくるし、それで住民の主だった人たちに集まってもらって相談したわけです。

その結果、こんな状態の中に暮らしているわけにはいかない、船もあるんだし根室に出よう、ということになったわけです。すでにソ連兵が駐屯していて勝手に出ることができず、それでは部落民みんなが一度に引揚げられるような大きな密航船を雇って、みんなで逃げよう、このために必要な金は役場からも郵便局からも、漁業会からも集めて、まず、そのために村長は根室に密航してもらったわけです。

村長への怒り

部落のみんなが一度に一緒に脱出できるような船を頼むために村長に根室へ密航船で出てもらったわけですが、ところが根室へ出てみてもビックリしたんでしょう。そんな大きな船をチャーターできるような状態ではなく、根室もさんざん目に合って焼け野原になっているし、船はなんぼ金を出しても、そんな大きな船はあるわけがないといったことで、仕方なく通信連絡の方法もなく、そのままになっていたわけですが、島のほうは待てど暮らせど連絡もなければ密航船もやって来ず、住民みんなキモを焼いておったわけです。これも当時の状況からして何とも致し方なかったわけです。

村長は最後まで島に帰ってこれず、事情は島を引揚げてから知ったわけですが、そのころ事情を知らない住民は、とんでもない村長だと大変でした。

私たち、国後の引揚げ船としては第一回の船で、昭和二十二年（一九四七年）の十月に発って、それから色丹の住民を、志発、水晶、勇留に寄ったり総員二千三百人ばかりでしたか、それで私たちは根室に着けるのだろうかと思っていたら何日たっても着かず。やっと着いたところが樺太の真岡だったわけです。そうなる住民の怒りは大変で、村長のやつが船をチャーターしてくれば、こんな目に合わなくても済んだのに、根室に着いたら、もし根室に着いたら、ひとつ、ぶち殺してやらなければならない、といき

り立っていました。

というのは樺太に着いても樺太から日本にすぐ帰って来れたわけではなく、炭鉱に行く者や山へ木に切りに行く者、樺太に抑留中も労務に服さなければならず、苦労も並大抵ではなかったからです。

体の具合の悪い人、食糧事情が悪いといったことが重なって島を出てから船の中、あるいは樺太に上陸してから、後に死んだ者が二百何人もいました。

ムシロかけた死体の山

私たちの仲間、年寄りの人たちも、栄養失調だと思うんですが、どんどん死んでいきました。私たちの収容所は真岡の高等女学校で、私は二階にいたんですが、二階の窓から下を見ると、私たち同胞の死人の山なんです。二百何人もですから…。それにムシロをかけて毎日十人、二十人くらいずつ翌朝になると、トラックが来てどこかへ持っていくといったことを毎日見てました。

樺太を発ったのは十一月の二十何日かで、函館には十二月に着きました。

ソ連人と同じノルマ

話は前に戻りますが、島を出るまでの二年ほどの間は、民政

を施くようになると役場も出来、銀行、裁判所など日本と同じような官公署が出来上がったわけですが、私たちの仕事は山の木材の伐採、漁業の二つに分かれ、私は前に役場にいたということからか、もう一人の役場にいた者と、それにソ連二人を事務所に入れてノルマを取らされていました。

いちばん泣かされたのは、言葉も文字も分からないのに、これを覚えるのが大変でした。

山のほうの仕事では別の監督がいましたが、海の仕事では着剣したソ連兵が船に乗っていました。日本人が船に乗るのにはパスポートが必要で、ところが漁業の仕事は朝が早く、三時か少なくとも四時前には出るのでソ連兵のいる事務所へパスポートをもらいに行っても、なかなか起きてこない、もらえなければ船に乗るのが遅くなるといったことで大変な目に合いました。

島には一般のソ連人と同じで、同じノルマを達しなければ賃金をもらえないわけです。働かざる者は食うべからずで、体が悪くて休んでいても、働かなければ食糧が当らないぞと引つ張り出されるなど苦勞しました。わずかな賃金ですが、それで食糧を買わなければならず、その食糧といっても、あちらの黒パン、すっぱい味のもので私も初めは口に出来ませんでした。背に腹はかえられず、かじりついているうちに、しまいには好きになってしまいましたけれど…。

それも六カ月ほどして食糧の配給が始まりました。ソ連兵の守備隊が古釜布に駐屯していましたが配給の人員を報告せよという

ので私一人が出かけた途中、ソ連兵につかまえられ、どこへ行く、何しに行くかと問いただされ、言葉も通じないし泣き泣きどうにか古釜布の本部について事情を説明したところ、配給票を持ってこなければダメだと言われ、再び帰って調査。それを持って本部へ行く、という仕事を島を出るまで繰り返していました。

いちばん苦労したのは食糧で周辺の海の豊富な魚も、すべて軍に納めなければならず、私たちの口には勝手に入られない状態でした。



国後島 瀬石硫黄山栈橋の風景

公益社団法人 千島歯舞諸島居住者連盟
戦前の北方四島写真収録集より



国後島 小舟で数珠つなぎで脱出をはかった国後島民

公益社団法人 千島歯舞諸島居住者連盟
戦前の北方四島写真収録集より

証言者 隅田時雄（五十八歳）

齒舞群島（水晶島）元島民 緑町三丁目

納沙布から見える故郷

私の生まれたところは水晶島の「税庫前」で、納沙布岬に立つと、すぐ見えるところで向こうの監視塔が立っているところです。たまに納沙布に行くと、やはり懐かしく今すぐにでも行きたいと思います。

祖父が富山県の出身で私の父と最初、色丹島に行つて、そこから水晶島に行き父がそこで妻帯して私が生まれたというわけです。二十五歳まで島にいましたが、兵隊で終戦をラバウルで迎え、一年後に復員してきたので、終戦当時の島の状況については後で聞く程度です。復員は名古屋に上陸しましたが千島がソ連に占領されていることは釧路まで来て、やっと知ったようなわけです。家族のこと―当時、島には結婚して子ども二人いましたが、全然消息が分かりませんでした。

ホタテが山になる

ひと口に言つて島の良さといえば、樹木はありませんが気候は良いし、川あり野あり、ハマナスなどはいたるところにあつて海には海藻、エビ、ホタテ、カレイのようなものは自由にとつて食

べられる状態でした。当時、そういうものは金にしくなくても島全体は昆布漁で生活していましたから、魚なんか今思うと大したものです。が、当時としてはどうということもありませんでした。

島の人口は、およそ千七百人くらいで、百五十軒くらいだったと思います。大きく分けて部落は税庫前、モシリケシ、アキアジ場の三つでした。冬は雪が多く風も強くて寒いので、家の周りに冬囲いと言つて草で囲いをして、ほんの出入口と窓だけ開けて出入りしていました。

漁業は昆布、ホタテで五月から十一月十五日で全部終わり鮭鱒をしているのは全島で三軒くらいのものでした。冬の間はフノリかきとギンナン草取りですが、春までは眠っているようなものです。

資源の豊かなことは、一度シケがあると、ホタテが昆布といつしよに、浜に山になるといった状態で、それをカマスに入れ、別にお金にするわけではなく、塩ふつて焼いたり、刺身にしたりしたものです。

十一月十五日に仕事が終わつて、これから冬に入るとなると、根室から越年用の食糧、日用品を船で運んできて、それで春までの就航は終わりというわけです。ランプ生活で暖房には石炭も使いましたが、これは学校だとか、お寺だとか大きなところで、家庭では薪ストーブで、それに大半は炉を切つて薪をくべるといったものでした。色丹や国後のように樹木はありませんから薪も根室から運んできました。五月までは準備していて殿様暮らしで、

五月になると、また運んで来る。こういった段取りでした。

冬、病気になった場合、氷の間をぬって根室までやってきました。夏は別に問題はなく、お産も素人でしたが産婆をしてくれる人がいました。

半年遅れの入籍

当時、水晶島は齒舞村の行政区画の中に含まれていましたが役場の出張所というようなものはなく、ただ警察、郵便局はありました。子どもが生まれたとか、税金を納めるといったような時は、齒舞の役場に直接行くか、一カ月に一度くらい回ってくる役場の吏員を待っているといったことで、冬に子どもが生まれたようなときは、すぐ手続きが出来ないものですから私の場合でも、本当は十二月に生まれたのに、翌年の五月に籍に入ったというようなことで、今では珍しいことです。

学校は水晶尋常小学校があり高等科二年まであって、進学は根室に行きました。

島の開発といえば道路くらいで馬が交通機関といえば言えるようなものでしたし、植林するわけでもなく自然のままでした。

戦争の二、三年くらい前ですと昆布の中国との貿易がダメになつてアブラコとかオヒョウとりをしたということは後で聞きましたが、私が働きざかりでいたころは昆布だけで生活していました、この昆布は中国に送っていました。

動物は馬のほかキツネくらいのものでしたが、トドやアザラシについては捕獲することも禁止されていませんでしたから獲りたものは獲りました。皮が今の様に高く売れるわけでもないし、船を巻きおろしする滑りの油をとるくらいのものでした。

植物と言えばフレップくらい、大根や馬鈴薯などの野菜は採れました。

自然そのままが観光価値

島の八割まで根室の親方から仕込みで来るので、齒舞の漁業協同組合はありましたが、そういうことから根室とは切っても切れないつながりがあったわけです。私のところでも父が早くから根室に土地を持って家を建てていたので、冬期間、そのときによって根室で越冬することもありました。今になってみると根室に土地、家を持っていて良かったということになります。

島の観光価値といっても樹木山岳もなく平べったい野原の島ですが、島を歩いても長いもの（蛇）がいたり熊がいたりということもないし、それに沼は三つもあって眺めはいいです。自然そのままが今では貴重な観光価値ということになるでしょう。

お祭りは十日がかり

冬期間のヒマな時期になると碁、将棋はもちろん、私の若いこ

若者たちの『樽入れ』

ろには百人一首が大したはやって、今日は此方の、明日はあちらの部落の青年団が集まる、女子青年団も集まるというようなことで、三つの部落が対抗するということもしました。青年層の方は漁師ながら弁論大会というようなこともやりました。

青年団活動もさかんで、本団が一つ、分団が二つに分かれて何かにつけて対抗意識をかりたてて、お祭りの演芸によらず、そんなことも大いにやりましたし、消防や救難のほうも青年団がやっていました。

神社は三つあって、税庫前は金刀比羅神社、アキアジ場は辨天さん、モシリケシは金刀比羅神社でお祭りともなると十日というものはお祭りにびっちりかかったものですが、三つの神社は皆、日が違っていて他の部落のお祭りとなると行ったり来たりしたものです。

お寺は全島で一つ、門徒さんのもので、これはジャリバというところにありました。

現在、瑠瑠瑠で受け継がれている獅子舞は、もともと富山の、今、瑠瑠瑠におられる中村さんの船頭だと思いますが、この人がうちの爺さんの弟に教えまして、それが師匠ということで、なかなか立派なものでした。現在、瑠瑠瑠にある獅子舞と同じものです。

島の中で結婚式がある、どこそこの娘がどこへ嫁に行くとか、どこの娘を嫁にもらうとかとなると、この話で島は持ち切りで、式の当日ともなると三日ががり四日ばかりでやるわけで、窓のカーテンなんかは全部開け放さなければ窓ガラスが割られてしまう、といったようなことで、部落の人たちが大勢見に行つたものです。それでも島のシキタリ、若い者が『樽入れ』といっても、何里もあるところを、色々趣向をこらしてするんですが、その持ち込んだ樽に、そこそこに焼酎なんか入れてくれないと、翌朝、家の前に磯舟なんか並べて出入りできないようにしてしまうといった面白いことを若い者たちはやりました。

当時、軍国、戦争時代ですから今のような娯楽はなく、若い者が寄れば『番持ち』をすとか、何の宴会でも宴会のあとには力だめしをしたものです。島には食堂といったようなものはありませんでした。

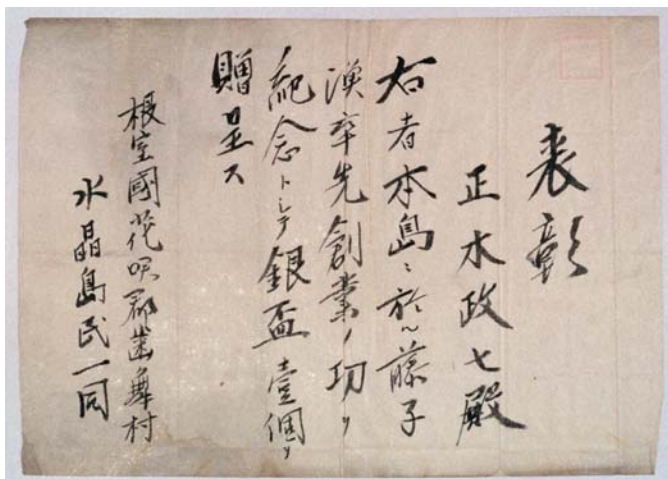
最初の話に戻りますが、兵隊から引揚げて、リュックサックを背負って停車場（根室駅）に着いたら今の本町は丸見えで、緑町あたりには人家は一軒もなく、焼け跡で自分の土地や家のあった場所もよく分からないような状態でした。父親たちはノツカマツプに引揚げて来ていて、それを教えられて歩いていきました。その父も七年前に亡くなりました。

子ども四人のうち長男は島で七歳でしたから、島のことは少し

覚えていようで、船に乗って海に出ても島に行ってみたくて思
うようで、私も勿論、いちばん先に帰ってみたいと思っています。



会旗「水晶島の若手が集い、昭和24年1月に晶友会が発足。
戦争犠牲者の追悼を目的にしていたが、会員の高齢化が進み、
会の維持が困難になったため、平成25年に解散し寄贈に至った。」
(根室市歴史と自然の資料館 蔵)



表彰状「ナマコ漁の創業で功績のあった
正木政七氏に対し、水晶島民が送った表彰状」
(根室市歴史と自然の資料館 蔵)

証言者 藤田邦治（八十三歳）

国後島元島民 西浜町二丁目

馬も川を渡れない

私は秋田県山本郡二ツ井村の生まれで、私の父の兄が明治二年（一八六九年）に国後島に渡ったんですが、その兄が病気になるため父が行って、そのあとに兄が亡くなって、父が島にいるようになりました。私も大正六年（一九一七年）に父に呼ばれてきました。二十一歳のときで、秋田から青森、函館から日本郵便の汽船に乗って、たしか三昼夜だと思えます。根室に着いたのは、それから国後島の乳吞路、留夜別です。

それから父の漁業を手伝いましたが、いちばん大きな水揚げがあったのはサケ、マス、昆布で、それとタラバカニ、海藻ではフノリなどありました。これは大したことありませんでした。

サケマスがのぼる川は、私たちの方には大きいのが三本あって、これは保護河川、時期になると棒を立てても倒れないくらいだった、という話はそのとおりで、馬で川を渡ろうと思っても渡れないんです。馬の腹にサケマスが、ばんばん当たって離れないんです。棒を立てても倒れないという話は少しも誇張ではありませんでした。網なんか引けないくらいでした。

軍馬の市が立つ

私が渡ったところの乳吞路の人口は千五、六百人くらいもいたでしょう。役場、警察、学校、お寺それから商店は二軒ありましたが、それ以外は全部漁業でした。少し畜産を漁業の傍らにしていきましたが、年中放牧で手はかからず畜産というほどのものではなく、牛も私たちのところには、ほとんどいませんでした。ただ終戦後、軍でやった牛を私が拾って乳を搾ったことはありますが、私たちのほうには五、六頭もいたでしょうか。馬は交通機関でもありましたし、全戸が持っていないくて、多いものでは二百頭、三百頭も持っていましたし、私のところなんかでも、七、八十頭いました。当時、厚床に馬の市場があつて、そこから買ってきて、いい馬にして、また競りに出したものです。その後、軍馬を飼うようになってから軍馬の競りを国後でやるようになりました。飼料は牧草というより野草です。

年配の方もスキー

気候は今の根室より良かったと思います。ただ冬は雪が多くて馬で交通できなくなると、テシバというものを履いていましたが、スキーというものが出来てからは、ほとんどスキーで、山へ行くにも皆がスキーでした。年配の人も皆、上手になってスキーを履いていました。

年中の漁業は、まずカニ場で、これは二月で若い者が出て行きます。それから磯の海藻のフノリが二月のうちに第一回の解禁で、これは月二回の干潮のときに採りましたが、これをしているうちに昆布になります。

昆布の業者は、私のところと中村という大きな干場を持っている人がいましたが、間口二十間、奥行二十間、二十五、六間に家と納屋を建てて貸したもので、ほとんど自分の家というものはなく、地主の家で商売をするということでした。

サケマスの切り上げが十一月の末で、冬場は春に備えるのと、一年中の燃料を用意するため、若い娘も山に入りました。部落ごとに戸数や人数が多ければ多いだけ、また商売が大きければ大きいだけ営林署に払下げを申し込むんです。枯れた木や風倒木を安く払下げを受けました。ストーブは二尺の薪が入るような大きさのものでした。

増える定住者

春から漁が始まると人手が足りなくなるので、昆布だと道内や青森、岩手、秋田、タラ部の方は、ほとんど富山でした。今のように職業安定所というものはありませんで、根室に幹旋屋というのがあって、そこに男女の数を申し込むと送ってくれたものです。これらの人も島で働いてみると住みよいので、年々定住する人が増え、私たちのところにも土地を貸してくれという具合でした。

定住すると、お嫁ということになりますが、お目出たいもので男ばかり働きに来るのではなく、陸まわりは女ばかりで、あの女はよく稼ぐから、どうせここにいるなら、お前あれをもらえとか、自分で仲良くなつて一緒にいるから家を貸してくれと言ってくるものもあつたり、そんな具合で親方が親代わりでした。

火防組合で活躍

留夜別の中心、乳呑路の官公庁としては役場、学校、警察、営林署、水産検査所、それに郵便局がありました。三等郵便局でしたが泊との間に電話がついていました。

消防というのはなくて火防組合というのがありました。私は火防組合の二十年間勤続で長官表彰を受けたことがあります。長い間には火事もありまして、一戸に一斗くらい水が入るバケツと長柄のとび口は持たしていました。私が会長で訓練もやりました。

学校は六年生までで、高等科は、ずっと後だったと記憶しています。上級学校は根室へやりました。

駅逓の馬を利用

交通はほとんど馬で、部落ごとに駅逓があつて五頭から六頭くらい馬を持っていて、どこそこへ行くから馬を出してくれというを出してくれて、今で言うハイヤー会社に車を頼むようなも

のでした。それぞれ自分で馬は持っていました。それだとエサなど世話をしなければならないので、まず大抵は駅逓の馬を利用するという具合でした。

根室との行き来は月六回の定期船があつて、いま埋め立てになりましたが、いま道銀（現在は本町壹望館）のある坂の下にハシケのつくところがありました。小蒸気といつて小さい船でしたが、急を要する電報電話は泊より出来ませんでした。電信は海底電線が今もハツタリに跡がありますが、そこから白糠泊まで通つたもので、何も不自由はありませんでした。島の開発と言つても、道路なんかも馬が歩ければ、それでいいんですから、道路を作るということもなく、馬が歩いて道路になつたくらいのもので、あとは干場があつて、人様の中を歩いたものです。

森林、地下資源も豊富ですが、そのほうに手が回らないというより、回らなくても楽でしようがなかったということです。

野生の動物といえば一番恐ろしいのが熊、一番金になるのがテン、それから狐、野兎はたくさんいました。

食べられる野菜といえばフキで五尺の馬に乗つて、それで頭が見えないくらい背丈が高いものでした。

鳥はカラス、トビ、ゴメ、たまに白鳥も見えました。

ガスがかからない西海岸

“仕込み”の中でも大きいのは函館のありました。それ以外

は根室の“仕込み”です。そういう関係で根室とのつながりがありました。それが私たちが組合の役員になつてから、そういう仕込み制度では借金が無くならないのでダメだということになりました。十一月に漁が終わると根室の親方が出てきて米十俵、それ味噌なんぼ、だから借金は幾ら幾らになるぞ、という具合でしたが、島の人たちは、借金のことはどうでもいいんです。はい、ということでは中にはバクチをやつて、すっかり取られてしまう者がいたりしました。

私たちのいた乳呑路は観光価値と言えるようなものではありませんでしたが、留夜別村とすれば陸の沼があつて、西海岸の方は年中ガスがかからないんです。そういう関係で、おそらく白糠泊の方を利用すれば、いい飛行場が出来ると思います。陸軍でも随分と施設していました。冬はダメでも夏だと遊覧船でも出して、私はいつも言うことですが、ソコボイの滝を利用して水力発電することもできるし、まず知床以上のものです。

運動会が一番の行事

島の娯楽といえば野球、テニス。野球では私なんかも選手で有名なピッチャーでした。冬はカルタくらい、あとは女子でもなんか“ほつ引き”をやっていました。

大人は花札で遊びましたし将棋、碁も親方たちが碁会所なんかあつてやつてました。

運動会は島の行事の中でも一番楽しいものでした。小学校の運動会に大人、青年たちが入って来るもので、お祭りは、たんに飲み食いするだけで別に御神輿があるわけではなく飲み食いするだけのことでした。

死に場所は爺々山中腹

戦争が始まると元気のいい若い者は兵隊にとられるし、稼ぎ人はほとんどは軍に持って行かれたので、何の仕事も中途半端で御承知のように国後は建網専門のところでしたので、最後には東海岸では私一人でした。

白糠泊に大隊本部、私のところは中隊、あれはみんな富山兵隊で昭和十六年（一九四一年）か十七年（一九四二年）だったか、よく覚えてはいませんが、兵隊が入って来ると私たちは防空壕掘りの協力でした。兵隊の宿舎に民家を使うようなことはなく、公民館が本部で、それから学校や寺にも一部入ったようでした。

戦争になると、いっとうなるか分からないので、食糧も色々分散して貯蔵をしていましたが、いよいよ戦争の状態が悪くなってきたから、小学生の子どもにまで米を背負わせて爺々山のふもとまで、三年生の子どもには二升、あとは三升、五升という具合に背負わせて森林の中にかくまい、それからまた敵が上陸してきて最後にどうにもならなくなった場合の死に場所として爺々山の中腹と決めるなど、みんな覚悟を決めていました。

根室の空襲の時は大体分かりました。というのは空が、ずうつと煙で曇ったもので、しかし当時は火事だと思っていました。あとで空襲ということを知りましたが、それより先にアメリカの軍艦が来て西海岸のシベトルという軍の船を造っていると艦砲射撃やっただけです。それでここまで来た大変だ、生きた心地はしませんでした。

終戦はラジオで知りましたが、軍の方がある程度知っていたのではないかと思っています。というのは幹部会議だと学校に集められまして、そして陛下の放送を聞いて大隊長以下が、こぶしで涙を拭っていたということで、その時の状況は今でも思い出します。まさかソ連兵が、やってくるとは思っていませんでした。来るとしたらアメリカ兵だとは思っていましたが、まさかソ連兵とは思っていませんでした。ソ連兵がやってきたのは九月二日のことだと記憶しています。

ソ連兵を殺して死ぬ覚悟

びっくりした、というような気持ちとは違い、ちょうどお昼頃でしたか、私が建網をやっていましたら前に船が泊って、旗を見たらソ連の船と分かり、部落には伝令式に逃げて防空壕に隠れると連絡し、それから若者たちにも隠れる、私が合図するまで出てはならないぞ、声を出してはならないぞと言いつつ聞かせて半袖のシャツと猿股ひとつで小さい舟に乗ってソ連兵の船まで行ったんで

す。そのとき私は、私が殺されるようなことがあればソ連兵を必ず二人は殺す、二人殺さなければ損だと、それだけ決心して行きました。

ところが行ってみたら私の予想とは、まるで正反対で金モール付の偉い軍人さんが次々と来て手を差し出すんです。これはこれだと思つて私も握手に応じていましたが、なんだかんだと話しかけてきますもの、さっぱり何を言っているか分からないんです。そのうち陸の方を指さすので、これは陸に上がりたいということだなと思ひ、それでは私の舟に乘れと言ったり、舟が小さいので落ちれば危ない、というような手振りをしたので、それでやっぱり陸に上がりたいのだなと分かったので、ソ連の船から陸に叫んで若い者を呼び寄せ、自分の舟に乘せて陸に上がったんです。

ところが、いっぽう白糠の方からソ連兵が上陸して来ていて、中尉だったという日本人が来てソ連兵を連れてきて、私たちの方のソ連兵と何か話し合つていまして、私たちには分かりませんでした。が、いづれケンカのようにでした。そうしたら、また舟に乘せてソ連兵を船に送り返しました。それがソ連兵のやつてきた一番最初で一時間といふかたとは思ひます。

それから月半ば過ぎだと思ひますが、ソ連兵八人が、私のところから二軒か三軒離れたところにある旅館に宿をとつたんです。そこにしばらくいまして、その間、何百人か兵隊が通つて白糠の方へ行きました。

通訳もいまして、言葉も分からないので手真似、足真似で取

引しまして何の危害も、その時はありませんでした。

船の手配に根室へ

ソ連軍が上陸してから舟で逃げた人もいますし、そのころはまだ便船があつて、それで根室へ行った人も何世帯ありました。それをまた利用して根室の人たちが金儲けに船を出して、米八俵だったか、それに幾らか寄こせば一世帯とか二世帯とか引き受ける、といったようなことで、そうやつて逃げた人もいます。

私は、しかし逃げる気はありませんでした。責任あるし、逃げて逃げられないことはありませんでしたが、村の人たちも私を頼っているんですから逃げるなどということは考えず、また島は北海道の一部ということでしたから、頑張つて商売をやつていました。

そのうちに情勢が変わつてソ連兵が入ってきました。先に常駐するようになった八人の将校の時、新しい日本の村長ができて、その村長と八人の将校との間で交渉や話し合いをしてやつていましたが、兵隊もたくさん来ますし、村人も動揺するので、皆の寄り合いを持つて意見を聞いたんです。皆どうするのか残るのか、北海道の一部だといふ電報も来ているというし、島に残るか、それとも出て行くか、と言つたら行きたいという人、残るといふ人色々でしたが、それでは島を出て行きたいという人のために「お前、船を買つて来い」と言われて、私が根室に出たんです。

家探しをするソ連兵

そのとき、村長と別の船で根室に出て、翌日に根室支庁で一緒になったんです。そうすると支庁長が「お前たちは何事だ、島は北海道の一部だと電報してあるのに、お前たち幹部が村民を投げてるとは何ごとだ」というんです。お叱りも、もつともだと思いました。しかし地元の情勢も支庁長によく話したところ、年寄り子どもを寄せ、引き受けると言ってくれましたが、三日もいて、食うものがないのが分かりました。「とうきび」と「えんばく」と、それから丸い馬が食うようなもののしか配給が無くびっくりしまして、あれでは年寄り子どもが逃げて来ても大変だと思いました。

それでも根室に出てきたいという人のために、油があるので警察署長も来て油の券をもらい、そのときの機帆船組合長に渡し、また島から出て来た山下亮輔さんにも会って、機帆船組合長は山下さんの兄で、とにかく船は何とかして向けるから、お前は島に帰れと山下さんの話もあったので、荷物を取りに行く山下さんの船で島に帰りました。

そのとき私の乗って来た船やなんか四隻、五隻一緒に島へ行っただんですが、上陸してみると、その部落に誰もいないんです。どうしたんだ、と沖で舟に乗っている人に聞くと、ソ連兵が六人来ていて、村を家探しして歩いているので避難して隠れているんだ、だからお前も危ないから早く逃げた方がいいと言われたので

夜道をかけて六里の道を家に帰ったわけです。

着くと馬が走っているので、どうしたと聞くと、ポイントマリで人が死んだ、シケで錨が切れ船が港に叩きあげられて死んだんだということ、私もその船に乗っていたら死んでいたかもしれない。その船はソ連兵から避難するためのもので、また逃げる途中、ソ連兵に捕まった者もいますし、ポイントマリで逃げる途中、若い者が二人殺されています。私の覚えているだけでも、色々無残な死に方をした人は八人います。

同胞から密告される

引揚げまでソ連兵と色々接触がありました。ある人が私の事を義勇隊長だと密告したことがあって、義勇隊は軍隊だとソ連は思っている、義勇隊であれば捕虜だ。捕虜は金を出さなくても使えるんだ。お前は義勇隊長だったろう、兵隊だろうと、随分責められました。ピストル向けられたり銃向けられたりしたことが何回あるか分かりません。だけど人間そうなると思うようになって、またかという気持ちで大したことはありませんでしたが、最後に、どうしてもソ連の法律に従わないなら銃殺すると言うので、そうか、それなら仕方がないから銃殺しろと言ってやりました。死ぬ前に言い残すことはないか、と言うので、「ある、俺の妻子をここに連れてこい」、どうするんだというから殺してしまうんだ、俺が生きていてさえ、その日の生活が困っているんだから、俺が

死んでしまつては可哀そうだから殺してしまふんだ、それからもう一つ、こういう奴も連れて来い、こいつは俺が義勇隊長だとウソを教えた奴だ、そうだろうと言つて、確かにそうだ、と格闘すると、通訳とソ連兵と何か話し合っていました。そして半紙とペンを出してきて、私は兵隊ではありませんと書け、と言うので今さら書くことはない、憤つてテーブル叩いたりなんかしましたが、そのとき、目をいためたのは―。

結局は半紙にそれを書いて、それをソ連兵が認めた恰好になりました。

日本兵に食糧を贈る

ソ連兵には赤い肩章の者と青い肩章の者といて、最初に来たのは赤い肩章の兵隊で、これは普通の兵隊、次に来た青い肩章の兵隊は共産党の直系のものだということでした。ですから「青肩（アオケン）」の方が厳しかったです。

日本兵は、いったん連れて行かれてから再び古釜布に来ました。そして准尉以下から連名で手紙が来ました。再び戻つて来たが食うものに困っているので何とかしてほしい、ということ、それで村長と相談して、今まで頼りにしていた兵隊が、こういう有様だからと、まず塩を私が二十俵か三十俵、魚の干したのだとか、フキの漬けたのだとか、ワラビとか何でもかまわず発動機船いっぱい用意しました。そのときは私も覚悟しました。もしこれが

バレれば殺されるんだと思いましたが、これをやらなければ兵隊を助けるためにはオレ一人の命は何でもないと部落に呼びかけましたところ、浜だから魚は豊富で協力してくれ、白糠の人にも呼びかけました。

日雇いしながら島憶う

そんな中で毎晩のように一人二人と島を抜けて行きました。私の引揚げは最後の船で昭和二十三年（一九四八年）九月二日、国後から樺太の真岡へ、そこで半年くらいしてから函館に着きました。引揚げの時は、あちらこちらから集まつてきて、離島からも来て、だから一万トンの船がびっしりでした。

島に残してきたものといえば干場、家が六、七十戸もありました。

根室へ来てから玉屋旅館にだいぶ、相当世話になりました。漁業をやるうとして申請したりしましたが、漁業法の改正なんかで認められず、昭和二十四年（一九四九年）に羅臼の漁場の船頭として三年ほど雇われました。それから根室で日雇いをしながら暮らしてきましたが、明けても暮れても島の事を考えていますし、あそこは今度、網をこうやって建てたらいいななどと考えたりしています。生まれは秋田ですけど、故郷は国後だと思っています。

超党派で「島を返せ」

大きな子どもたちは島の漁場の事を知っていますし、あのときのおいしい筋子を食いたいなどと言ったりしています。

これからは孫の時代が来ますから、先だっても内地の兄弟たちのところに行ってきた時も島には財産が残っているんだぞと言っていましたし、必ず島は返ってくるのだから、と話してきました。

島の復帰運動は、これからが本番だと思っています。今までの運動で不満だったのは、中央から大臣が来たりしても、北方領土返還ということからずれて、いつの間にか安全操業ということに焦点を合わせるような傾向が強く、今までは我慢してきましたが、これからは超党派で「島を返せ」という運動を進めなければダメだと思います。今までは安全操業で領土返還が二の次になってしまっていた。安全操業でソ連にお願いすることはないと思う。

領土返還が引揚げた者だけでなく、国民全体、それと政党も保守革新も一緒に、足並みを揃えて運動してもらいたいと思います。



国後島 乳呑路湾前から市街中央を眺める（千島丸より）

公益社団法人 千島歯舞諸島居住者連盟
戦前の北方四島写真収録集より

証言者 飯沢 梶雄（五十二歳）

齒舞群島（秋勇留島）元島民 光洋町一丁目

秋勇留島に移る

私は大正九年（一九二〇年）に水晶島で生まれたのですが、もともと昆布をやっていた父が漁船の船長をするようになって、タラやマスをやるということで秋勇留島に昭和十年（一九三五年）から移るようになりました。

秋勇留は戸数の少ない所で十七、八戸くらい、九十人から百人足らずだったと思います。

春はタラ、サケマスをしているのが五、六軒あって、冬はフノリやギンナン、夏は昆布、とくに秋勇留はノリの大変いいところで海藻をとっている人がほとんどでした。ですが秋勇留は港の条件が悪いところで、船が大型化してきたということもあって、漁船漁業をする人は勇留島の方へ移るようになって昭和十五年（一九四〇年）頃には秋勇留で漁船をやっているのは、私のところ一軒だけになりました。

小さな島で生活は非常に楽でしたが、教育は齒舞本村に、お寺や警察は水晶島に、生活物資は勇留島の御世話にならなければならぬといった複雑な状態でした。重い病気になるかなと、そういうことも何回かありまして、みんなで船を仕立てて齒舞本村へ行くんですが、海がシケたりしますと、目の前に見えていまし

ても大変苦労しました。

学校は華岬小学校の特別分教場になっていて生徒は十二、三人、先生は一人で、この学校は勇留島に昭和十年（一九三五年）に新しい学校ができたことから、古い学校をもらって建てたもので、たしか昭和十年（一九三五年）の夏だったと思います。

根室に出るのが楽しみ

根室やほかの島の連絡は、春のうちですと漁船が入って来るので便利でしたが、夏から秋にかけては定期船といっても月に二度、昭和十五年（一九四〇年）以降になると月に一度来るか来ないかでしたので、みんな交替で船を仕立てて連絡していました。

陸上では大抵歩いて、馬は飼育に適していて、つねに百七、八十頭はいました。木のないところで、動物と言ってもネズミもないし、犬が一頭いたくらいでした。

生産物は根室に出していましたが、急病人でもあれば齒舞本村へ行きましたが、春の仕込み、越年の仕込みは全て根室からなので、私たちとしても、そういうことで根室に出るのが楽しみの一つでした。しかし小さな島でしたが、店屋が一軒だけあって日用品なんか大変助かっていました。

冬になると一カ月くらいは流水で連絡できない状態になって、その時は淋しいものでした。

ですが島の前浜の方に大変きれいな岩があったり、勇留側の方

には島があったり、また大きな洞穴があったり、ああいうものは観光価値があると思います。

「いんぴらさんの御利益」

冬の暇な時期になると若い者はカルタなどをする程度で、これといった娯楽はありませんでしたが、それぞれ寄ったりして結構、冬の間も楽しんでいました。

島あげての行事と言えば、十月になると運動会があつて動ける者は全部参加して島ぐるみと言いますか、大変楽しく島の何よりの、今で言えば大きなレクリエーションでした。

お祭りは昭和十二年（一九三七年）に「いんぴらさん」を根室からいただいたて神社を建てたんですが、九月に毎年お祭りをしていましたが、とくに派手なことはしていませんでした。

この神社を建てるについては、それまで遭難が絶えなかったので昭和十二年（一九三七年）に神社を建ててからは引揚げてくるまで事故が全然なくなつて、今でも不思議に思っています。御利益があるというのか、そういうことがありました。

日本兵は昭和二十年（一九四五年）四月まで

戦争が始まるとタラやサケマスをしている人たちの仕事がいやらしくなつて、みんな他の島に移つて、残つたのは沿岸の海藻を

やつている人たちだけになりました。というのは統制経済になつて運搬船の航海も悪くなり、それに港の条件も悪かったので他の島に移つていったわけです。

日本兵は昭和十九年（一九四四年）の秋、一個小隊四、五十名が駐屯していました。宿舎は私のところの番屋や倉庫を徴用され、私は古い方に入つて不自由な思いをしました。当時それが国民の義務だと思っていました。

私たちの島の日本兵は通信隊で、昭和二十年（一九四五年）四月末頃に撤退していきました。

根室の空襲は、十四日の朝七時頃、ビリビリと小さい地震のような響きがあつて、翌日も同じような具合で、ちょうどノリの最盛期で岩にあがつていたところ、日本の飛行機にしては変だな、と思う飛行機が、あれはグラマンの四機編隊が頭の上にやつてきて、そして根室の方を見ると暗い煙が上がつていて、翌日になつて空襲のことが知りました。私たちの島まで空襲は来ないとは思いましたが、上陸してくるのではないかと心配でした。

終戦は朝ラジオを聞いていると十二時に重大な発表があるというので、天皇の放送を聞いた時は呆然としていました。涙を流す人もいました。

九月四日に総引揚げ

八月末頃になると、国後や択捉にソ連軍が上陸してきていると

いう話は聞いていましたが、私たちの秋勇留には日本兵もいないし、ソ連兵が来るとは思っていませんでした。

九月の三日、日本の漁船に乗って島に上がってきました。ソ連兵が十人上がってきて、私に銃を向けて裸になれというんです。体裁も何もあったものではなく、長靴をほろつてみれ、ズボンを逆さまにしてみれと、全く驚かされました。

その日、島の者たちは仕込みもあつて根室へ行ったり島には青年の男子は三人くらいしかいませんで、女子どもは大きな洞窟に入れておきました。

上陸した十人は二班に分かれて私の家になんか赤い旗を揚げましたが、言葉が通じない。足真似、手真似でしたが、日本兵やアメリカ兵はいないか、というようなことだったと思います。

それから一時間くらいして上陸用舟艇で十人くらい上がってきましたが、狭い島なものですから、一時間くらいして今度は、お前が本船まで運べといわれて私が二十人ほど伝馬船で運びました。根室に行った者たちは翌日の四日に帰ってきましたが、ソ連兵は物を盗るし、婦女子に悪さをするから、こんなところにいるは大変だということで、部落の人たち皆が、何でもいいから今晚中に引揚げようというので、その日のうちに齒舞の方に全員が逃げました。

しかしソ連兵から受けた感じでは、凶暴な様子もなかったもので、この分では何もないなと思っていましたし、根室へ行つてから様子を見て帰れるかもしれないと思っていました。漁の道具なんか

全部残してきましたし、冬になって秋勇留にはソ連兵が上陸していないという話を聞きましたので馬もいくらか運べないかと思ってきました。おかげでソ連兵に見つかるといふことはありませんでした。

根室に來たものの焼け野原で入るところもなく、とにかく船に寝泊りしていました。幸い入るところは見つかりましたが、働くにしても漁業しかないので苦勞して資材を集め、とくに油には苦勞しました。当時のことを思うと、よくここまで頑張ったものだと思います。



勇留島 金刀比羅神社祭

公益社団法人 千島齒舞諸島居住者連盟
戦前の北方四島写真収録集より

元紗那村長 元根室町助役

畑 二郎氏の終戦前後の記録より

昭和八年（一九三三年）十月から二年間、択捉島紗那村の村長だった畑三郎さん（一八九七年—一九九五年）が保管していた戦前の写真二五〇枚などの資料が、孫にあたる斉藤好恵さん（札幌市在住）から令和七年（二〇二五年）九月、根室市に寄贈されました。

終戦前後は、根室町助役として安藤石典根室町長の女房役として活躍、根室空襲の被災対応や北方領土返還要求運動の先頭に立っていた方でもあり、貴重な証言を掲載した新聞記事や手記のほか、残されていた写真の一部を紹介します。

GHQ陳情の最

初に元紗那村長が
参画していたので



紗那村役場前 前列右から3人目が畑村長



紗那村役場内での会議
左から3人目が畑村長



紗那村の市街地の遠望
択捉島の中心だった
(絵葉書用に撮影された写真)

紗那湾及び漁場を望む
(絵葉書用に撮影された写真)



紗那神社と古砲
(絵葉書用に撮影された写真)

有萌湾捕鯨場の遠望
(絵葉書用に撮影された写真)



昭和二十年十二月一日

北海道附屬島嶼復歸懇請陳情書

北海道附屬島嶼復歸懇請委員會

昭和二十年十二月一日（一千九百四十五年十二月一日）

日本國北海道根室郡根室町長 安藤石典

マツカサ―元帥閣下

閣下に對し余は、現在ソ聯の占領に係るゴヨマイ諸島並に南千島諸島の實情に付陳情することをお心より光榮に存します

一 現在ソ聯軍の占領して居りますゴヨマイ諸島は北海道根室の一部にありまして對鍾村の區域であり千島諸島の内色丹、國後、擇捉の三島は日本の封建時代より日本國土でありまして住民は父子相傳へて三代乃至五代位も相續して居り千八百七十三年（明治七年）日本がソ聯と千島樺太交換條約を締結の際擇捉海峽以北の諸島を我領有となし樺太をソ聯の領有に歸せしめたるを以て舊來の擇捉、國後を南千島と稱し新に交換し

たる得撫島よりオンネコタン島迄を中千島と稱し幌延島、アライト島、占守島を北千島と稱するに至りました

而して現在南千島の二に加へられて居ります色丹島はゴヨマイ諸島でありましたが千島、樺太交換條約の際被交換島嶼に居住して居りました土民は國籍選擇の自由の原則に従ひ日本國民たることを希望したる爲め凡そ二十戸を色丹島に移住せしめました其の爲め色丹島は根室國の一部たるゴヨマイ諸島でありますのを千八百七十三年（明治七年）以後殊更南千島に付け加へ現在に及んで居ります

二 一九九一年ソ聯軍は南千島及ゴヨマイ諸島に對し武力占領を行ひました而して住民の住宅搜索を行ひ金品を掠奪され又銃殺された者等もありますので不安に驅られ小舟艇にて根室町に逃避するものが増出し現在非常な數に上り別表の通りであります
エトロフ島は根室町と距離遠く小舟艇にては航海不能の爲め逃避し得ず消息全く不明であります余等はエトロフ島民の安否を非常に氣遣つて居ります

三 吾が根室港は南千島及ゴヨマイ諸島を水産園内として水産業の中心地であります從て産業、經濟、人情、風俗全く同一であります親子の關係にあります

而して其の距離に致しましても別圖の如く極めて近距離にして地理的にも歴史的にも北海道に附屬する小諸島であります

四 然るにソ聯は以上の小諸島に對し保障占領にあらずして軍事占領を爲し住民の自由を拘束して根室港との往來交通を禁止し剩へ掠奪暴行の舉に出て住民の不安極度に達しエトロフ島の如きは全然消息不明の現狀であります

以上の小諸島は北海道でありますから速かに米軍の保障占領下に置かれ住民の不安焦燥を除去し賜はんことを切に個願して敢ます次第であります

五 南千島及びゴヨマイ諸島はカニ、鮭等の生産多く戦争前は之等に依り罐詰を製造し盛に貴國に輸出して居りました日本がボツタム宣言を忠實に履行する上からも以上の諸島を米軍の保障占領下に置かれ余等をして安んじて是等の生産に就かしめ賜はんこと

を重ねて嘆願する次第であります

以上概要を申し上げ閣下の御明鑑に懇へ一日も早く米軍の保障占領下に置かれんことを偏に個願する次第であります

閣下の御健康と貴軍の御安泰を御祈り致します

齒舞村ゴヨマイ諸島戸数人口調

昭和二十年十一月二十八日調

區別	終戦前の戸数・人口	終戦後の戸数・人口
志多	三〇〇	一、七六八
多	一八四	一、一八一
水島	一三八	八八四
男留	六四	四五九
秋男	一四	八〇
計男	七〇〇	四、三七二
計		二〇七
		一、一九六

千島諸島戸数人口調

區別	終戦前の戸数・人口	終戦後の戸数・人口
(國後)泊	八七九	四、八四八
(國後)留夜別	五一五	二、六三三
色丹	一八七	八二〇
(國後)紗那	三三八	九三〇
		二二六
		九二二

備考

一 終戦後戸数、人口の減激したるはソ聯軍占領し畏怯して根室地方に逃避したる爲なり

二 エトロフ島は根室と遠距離の爲逃避し得ざるものなり

(留夜)計	(留夜)取	(留夜)計	(留夜)取
四九六	二、一八一	四九二	二、一七七
一〇九	三〇六	一〇九	三〇六
一、四二四	一、七三二	一、八二二	八、三四二

ソ聯軍に銃撃を受け死亡したるもの

國後島泊村字ウエンナイ

前 泊村長 澤田喜一郎 五十七年

ソ聯兵が掠奪に侵入したるを以て之を阻止せんとし銃撃され死亡

昭和二十年十月初旬

色丹島ケツキヨ洞沖

漁業 兒玉文吉 三十七年

全 岩崎義雄 四十一年

色丹島に居住し居りしかソ聯軍の占領に畏怯して根室に逃避し來りたるも家財道具なき爲め小舟艇にて之を取寄せに行きたる處ソ聯兵に發見せられ銃撃を受け死亡す

昭和二十年十一月十九日

北方領土引揚者

現役者等の証言集



角 鹿 泰 司（八十八歳）
齒舞群島勇留島元島民
根室市岬町

私の父（金太郎）が遺した記述によると、昭和二十年（一九四五年）九月三日午前十時ころ、勇留島の砂浜方面の最西端より空砲を放ちながら、三十から四十名のソ連軍の部隊が上陸。海岸の南北に散開しながら島民の抵抗がないのを認め、そのまま東の日本陸軍の小隊が駐屯している小池浜の兵舎を包囲した。ソ連の部隊は、日本兵全員を兵舎に監禁し、その夜は民家に入らず、野営した。いっぽう、夕刻には小池浜沖合より別のソ連軍隊が上陸用舟艇で到着、監禁した日本兵全員と軍用物資と食糧品の全てを没収して積載し、何処かに連れ去りました。

十月下旬頃、志発島西泊にソ連守備隊本部が設けられ、三〇四日置きに勇留島に監視に来て、各民家を詳細に搜索し、特に婦女子を何処かに連れ去るのではないかと戦々恐々たるものでした。

「昭和二十一年（一九四六年）二月に入り、志発島の蟹工場の徴用により、勇留島民十六名が出役を命ぜられ、幸一（終戦となり昭和二十年（一九四五年）十一月二十三日、鹿児島県から復員して帰郷したばかりの長女キヨの婿）も、その一員となった。さらに四月には、また十四名が追加されて出役し、合計三十名が勇

留島から徴用工としてソ連の業務に課せられることに。情勢が益々悪化するので島に踏み止まる事、不可能となるを以って志発島へ出発した三十名の勤労隊を見捨て、四月十八日、夜半より部落決議の結果、小型発動機で真夜中に根室への引揚げ脱出を図った。全く夢想せざりし事態となり、返す返すも残念で堪えられない。三十年余拮据、勉勵の結晶たる沢山の財産を残す敗戦国民の姿、涙無くして語られない、残念無念である」と記されてあります。

私の島での古い記憶は、三歳〜四歳頃、家の板張りの居間にある薪ストーブの回りを三輪車に乗り、グルグル回って遊んでいた事です。

四季を通じた生活では、春の流水が動き出す頃、竿一本持って流水に乗りました。「ドックの崎」の絶壁にカモメの巣があり、父に連れられ、この卵を取りに登る。とても美味しくニワトリの卵より少し大きいのですが、登るには大変危険な場所で、初め父が登りロープを降ろして貰い体にくくりつけ引き上げて貰いました。

夏は、相撲、渚で泳ぎ（船の板子でバタ足）。砂地を歩くと足の裏に小カレイやツブなど踏むことができます。秋は、トンボ採り。野いちご、コケノミ、ヤチフレップ（谷地坊主）、ハマナスを採りました。高さ二十メートルの山を駆け上る競争、天気の良い日には上原子さんの浜にある砂山から尻滑り（ケツ滑り）というのもありました。冬は、金乃比羅神社の裏山でスキー。雪合戦、

カルタ（大人は「百人一首」）です。時々大人に混じり百人一首するときもありました。

学校の一、二年生の同級生は、女性四人 男性五人の計九人でした。島を脱出したのが三年生の時で、学校で勉強したのは二年間だけでしたが、徒競走などは一番早く、飛んだり跳ねたり鬼ごっこ等は得意な方でした。腕白小僧の一言、そして自慢じゃないですが一年生に入学した時、自分の名前を書けなかったのです。

先生に国語の本を読まされた時、字が分からなくて読むことが出来ません。モジモジしていると先生は休みの時間に、グラウンドに建っている「奉安殿」の処へ行って「敬礼」をして、頭が良くなる様にお願ひして来なさいと言われました。

小学校の運動会や学芸会、お盆お祭りは島民がこぞって参加、盛大な催し物でした。島では冬期間、海が流水に閉ざされ閉鎖される事から、この行事が一番大事な催しでした。島の人達は何か事が有ると皆が集まって来ます。だから情報は常に共有して居たと思います。そして定期的に会を開き話し合う「常会」がありました。

昭和二十年（一九四五年）七月十四、十五日のこと、根室町がアメリカの空襲を受け、爆弾投下の音が地響きと共に聞こえてました。初めは何の音か分からなかったのですが、しばらく続いていて、後から父に聞いて納得しました。しばらく経ってから、アメリカのグラマン艦載機が勇留島にも二機飛来して来ました。私と直ぐの姉は、日本の飛行機だと思い手を振りました。飛行機が

飛んでるのを見るのも初めてだったのです。だが、そのうちにダダダ、ダダダと機銃掃射が始まりました。後で父から聞いて解ったことが、隣の志発島の「日ロ缶詰工場」の女工さんや職工さん達が「たらば蟹」の刺し網の重りに使う（ナツ石）を拾いに勇留島の私の家の近くの浜に来ており、彼ら十数人に発砲した音だったのです。この時、数名の方が殺傷されたと聞きました。

私と直ぐの姉は、素早く父の誘導で家族全員が防空壕へ逃げ、布団をかぶり姉たちと暗闇の中で震えていました。しかし母は神棚に向かい正座して手を合わせてお祈りをして居たと聞きました。この日の夕方（南西の方向）根室方面の空が真っ赤に焼けて見えました。父は（根室が焼けている）とつぶやいた事を覚えています。

昭和二十年（一九四五年）九月三日午前八時頃、勇留島に駐留していた守備隊の上野軍曹が来て、父に「今日、ソ連軍が武装解除に勇留島に上陸する、ソ連兵が来ても逆らってはならない」と言い残して、島の南方ウタノボリ方面（砂浜）、根室に一番近い処へ向かったとのこと。午前十時頃、その砂浜の南西端、根室寄り沖合から上陸を開始したのです。

ソ連兵三、四名が一組なり、海岸南北に散開し、一軒一軒民家をシラミつぶしに搜索しました。私の家にも昼すぎに三人のソ連兵が来て土足で家上がり、私と妹に小銃を向けた。両親は驚き、「とっさに危ない」と感じたようです。この以前、昨日から父は、薄々ソ連軍が上陸、占領する事を知らされていたようで、姉たち

四人を、ドックの崎の洞穴に食料を持たせて隠しました。婦女子がソ連兵に「性的暴行」イタズラされたり、何処かへ連れ去るのではないかとの噂があったため、戦々恐々たる事だったと父が後で語っていました。

昼過ぎ、ソ連兵の応対には父が立ち会い、私はそれを見ていましたが、誰か隠れて居ないか、全ての戸、戸棚、押し入れ、二階など銃の筒で突いていました。父の時計や万年筆が持つて行かれましたが、兄の大事にしていたカメラと、その道具一式（高価な物）を屋根裏の奥に隠していたので、無事免れたとの事でした。

島を離れた当時、私は八歳、小学三年生になったばかりで、あまり良く覚えていないのですが、父が島を脱出したのは四月二十日の午後九時頃、齒舞の多田さん、西野さんの二隻のチャーター船で二、三トンの動力船だったように聞いています。これに乗船したのが父と長女（キヨ）、四女（富子）の三名でした。

翌二十一日の朝八時三十分、根室の弥生町船入瀬に入港。一方、その二日前の四月十八日には、同じ島民であった鈴木初太郎氏の満州丸五〇六トンに私と母、五女（幸子）、六女（成子）の四名便乗させていただき、翌朝、根室別の船入瀬（現根室漁業協同組合事務所下）に着岸し、後で来た父たちと合流しました。

母の姉を頼って弥生町の福田宅の倉庫の二階を借り、住居となりましたが、七名が住むには、余りにも狭くて、ごろ寝も不自由な状態で、毎日、憂鬱な日が続いた。でも楽しい我が家でした。

後で聞いた話ですが、島を脱出せずにソ連軍に連行され、国後

島から樺太廻りで二、三年も強制労働させられ、体を悪くして帰られた方、あるいは脱出して来てから、もう一度財産を運びに島に渡り、ソ連軍に銃撃されて亡くなられた方、徴用を命ぜられ、そのまま帰らず行方不明や亡くなられた方々、このような方達から比較すれば、まだまだ私たちは幸せというほかありません。

生活するためには、働かなければなりません。しかし根室の中心街も焼け野原、根室町民の方々も戦災に遭われ、大変な混乱状態の中、姉達も働くところが無く、ようやく一時的に汐見方面の昆布加工場に十五歳と十三歳の姉が工員として働いたと聞いています。

そんな中、同年六月に北斗町三丁目の中古家を預金の解約と借金でようやく買い付け引越します。七月より家族全員で海苔採取に従事、落石や友知沖の小島、齒舞、瑛瑤瑠、根室別の岩場でワラジを履いて寒さに堪えながら働いたといえます。秋には海苔の乾燥に使うすだれを編むため、糸魚沢方面に葦刈に通い、十一月末頃から現在の明治公園あたりに一家総出で冬の分の蓄えとして薪取りに出かけました。昭和二十一年（一九四六年）の年を辛うじて越すことができたとのこと。我が家の生活のかなめである針路が定まらず、毎日が不安でした。

私は引揚当時は三年生で花咲小学校に転入、根室空襲により花咲小学校が焼け落ち、北斗小学校で午前と午後に分けて授業を受けたのです。四年生からは北斗町に移転したため北斗小学校の児童となりました。

父は、このままの生活をしていたら家族全員が餓死する考えたのか、昭和二十三年（一九四八年）の春から東梅（旧和田村）の伊香金次郎氏に相談し、東梅営農開拓期成会の計画に参加するかどうか考えていたところ、同年十月に温根沼に大群のイワシが入り、父が共同で仕立てた引き網で大漁をしたそうですが、この頃、営農開拓入植許可となったため、柳田地区に営農割当を受け、小屋を立てる補助を受けて建設しました。父と本島幸一の二戸分で、徴用の捕らわれの身だった本島幸一は同年十二月に函館に上陸し引揚げてきました。

昭和二十四年（一九四九年）、かねて建設中であった東梅柳田地区の開拓期成会の建物、その他も出来上がり、五月二十六日にマル通のトラックを雇い、二家族一同引越しました。

依然として狭い建物でしたが、本島、角鹿が別々となりました。勿論、電気も電話もなく、交通の便も大変悪く、不便極まりないところではありましたが、一家団欒の生活となりました。毎日が開拓の一字であり、来る日も来る日も木の伐採と根っ子の掘り起こし、そして焼却、真夏の焼却は暑さと疲労で大変な思いであった事を、私は小学六年生で夏休み期間中、手伝いをしたことを鮮明に覚えています。なにせ畑を作らなければ野菜が出来ず、牧草が無ければ牛を飼うこともできず、木を切って炭鉱丸太（六尺、九尺）を切り、燃料となる木を切、これらを生活資金としました。

一方、風連湖や春国岱沖で刺網にカレイ、マス、小魚を採り、アサリ、ホッキ採り、秋には秋鮭、冬はコマイ等々、ジャガイモ

とカボチャ、魚が我家の主食であった。少しずつではありましたが、生活にリズムが出て来たように思われました。

その後、入植から十一年の歳月が過ぎた。一戸分五町歩で牛を飼い、乳料で生計を立てること到底無理な話で、次第に漁業に力を入れるようになって行いました。だが生活は依然として可もなく不可もなく、働けど働けど我が暮らし楽にならず。そんな折り、昭和三十五年（一九六〇年）五月、母が死亡しました。この間、姉達もそれぞれ嫁ぎ、父と私と妹の三人となる。逆に本島家は家族が増えて来たため、昭和二十一年（一九四六年）の引揚から今日まで私たちを一人前になるまで育ててくれた姉夫婦に、父と相談し全てを譲り、根室の街に出て働くことを決意し、昭和三十六年（一九六一年）より会社員として再出発する事となったのでした。

今年は、四島を追われて八十年が経過しました。

未だに、その成果は一步たりとも前進の兆しさえ見えていないことは、非常に残念でなりません。

思い起こせば、昭和二十年（一九四五年）九月のソ連軍侵略から二十三年（一九四八年）にかけて四島の島民たちは、各自に故郷を脱出、居残った者も最終的には、強制送還でウラジオストックや、樺太真岡から函館港に上陸、根室に帰還した人も多かったです。また戦後間もない昭和二十年（一九四五年）十二月一日、当時の安藤石典根室町長の元、連合軍最高司令官マッカーサー元帥に、北方領土はアメリカが「一時預かり留め置き」そして返還

を陳情し、その翌年「北海道附属島嶼復帰懇請委員会」が設立され、安藤町長が自ら会長となり、これが返還要求運動の始まりと聞いております。勇留島の島民の方達も昭和二十七年（一九五二年）九月「勇留島和合会」を設立、各地域所属島民の会と歩調を合わせ領土返還要求運動を展開してきました。

私の父、金太郎もその一員で、当時の島民達は七、八から十年経つうちに、島に戻るだろうと話し合っていたと言います。

だが、その思いも虚しく昭和五十一年（一九七六年）一月、八十二歳で他界しました。

島に渡って苦勞の連続三十有余年、事業資金もゼロから始まり借金をして漁業のための漁船や漁網道具、馬や馬車、主屋や工場、敷地等々、資産も徐々に増え、借金も次第に減少し、家族も増えて、さて、ここからだと思っていた矢先にソ連軍の侵攻、想像するの有余ある。嘸かし残念無念だったろうと推測します。

その後、私は父の後を継いで島民の会に入会以来、今年で五十年目となります。私が携わってからも、日本政府はロシアとの返還交渉を幾度となく行なってきましたが、平和条約締結交渉を始めとして全てが決裂、ロシアの意のまま唯、辛うじて四島訪問事業 ①昭和三十九年（一九六四年）北方墓参、②平成四年（一九九二年）ビザなし交流、③平成十一年（一九九九年）自由訪問が、ロシア警備隊の監視の中で行われて来ましたが、我々にとっては心癒される事業であり、また先立たれた島民頭首に、今に至るまで領土の奪還、返還が成されていないことを報告、私共の力不足

の不甲斐なさに、お詫びをする機会でもありました。

そんな中、令和二年（二〇二〇年）のコロナ禍に始まり、ロシアのウクライナ侵攻に、北大西洋条約機構（NATO）・欧州連合（EU）・欧米諸国（ヨーロッパ）等による、侵攻を仕掛けたロシアに対する経済制裁に我が日本も加わったことから、ロシアのラブロフ外相は日ロ間に領土問題は存在しないと発言したり、ロシア法務省も「北方領土復帰期成同盟」と「千島歯舞諸島居住者連盟」を「望ましくない団体」に指定、ロシア国内での活動が、事実上禁止される事態となり、島に上陸することも叶わず、止むを得ず北方領土問題対策協会や北海道のお力を借り、辛うじてチャーター船「えとびりか号」で洋上慰霊を行ない現在に至っています。

何もかもが閉ざされ、脱出時一七、二九〇人余の元島民も現在は四、九〇〇人余りとなり、その平均年齢も八十九歳という焦りと虚しさが募るばかりです。

この現状から六年間も故郷の墓参が出来ないことは、元島民にとっては、余りにも時間が無さ過ぎる、領土返還は叶わずとも、せめて故郷の土を踏ませる「墓参」だけでも叶えてあげたい、このことが真の偽らざる願いです。

現在、この「返還運動啓発活動」も元島民から後継者に引継ぎが、なされて行く転換期に差し掛かったことは、重要なタイミングでもあります。

この厳しい状況を乗り越え、北方領土返還運動と啓発活動を、

これまで以上に強化する必要を強く感じております。

根室市をはじめとする「北隣協」（北方領土隣接地域振興対策根室管内市町連絡協議会）の一市四町にとっても重大なことであることは間違いありません。

これからの時代を担う後継者と若い世代の三世四世の方々には、独自の発想や工夫を活かし、困難に直面した際には、先人たちの歩みに立ち返り、その経過を参考にして、効率的に返還要求運動と啓発活動を進めていくことが求められると考えます。

更に今までも大変ご協力をいただいておりますが、日本国民全ての人々、全国四十七都道府県民会議・全国労働組合連合会・全国青年会議所等の方々や、内閣府や外務省、地域行政に携わる方の繊細な知識やノウハウ、テクニクの指導とアドバイスを限りなく受け、正に官民一体となって全力で取り組む決意を新たに致しております。

終わりに、この領土問題は今後、色々な課題や変化が起こりうると考えられますが、皆さんの英知と果敢な運動を強化し、決して臆することなく活動を展開することが日本政府に力を与える唯一の方法と考えます

私たちは決して諦めません。



勇留島 小池浜の全景

公益社団法人 千島齒舞諸島居住者連盟
戦前の北方四島写真収録集より



水口 清一（八十三歳）

齒舞群島志発島元島民
根室市落石西

私は齒舞群島の志発島で生まれ、終戦の時は三歳でした。志発島の戸籍では、トツカリ番外地となっています。家族は、両親と年子の弟、祖父母に親父の弟とで七人で暮らしていました。島のことや引き揚げてくる時の様子は親父や、お袋から聞いていましたので、自分もそうだったなあと、うつすら記憶があるくらいです。

島は、木が一本も無い所で海から風が吹きさらしになり、冬は流水が島の周りを埋め尽くすので、冬の間は相当厳しかったという話でした。

家業は昆布業を主体としていましたが、春先は昆布が獲れないので、親父は春の海明けに三角水域でカニやタラの刺し網の船に乗っていたようです。流水にはさまれて脱出するのが大変だったという話しも聞いています。私たちが住んでいた志発島の東前地区で、ほとんどの世帯が昆布業をしていました。西前地区には缶詰工場があったみたいです。

八月十五日の終戦の時、親父は戦争に行っていて今の韓国で終戦を迎えたそうです。穴の開いた船を応急処置して、戦友と共に

九州の小倉に上陸し、そこで解役されました。親父は島がソ連軍に占領されていることが判らず、富山に十日くらい滞在してから、汽車で根室に着きましたが、そこで初めて志発島が占領されていることを聞いたというのです。当時は、まだ根室と島との間は、何とか行き来が出来きていたので、知り合いの船に乗せてもらい、家族の待つ志発島に戻ってきました。

お袋から聞いた話では、最初に志発島に上陸したソ連兵は各家々を回り、私達の家にも土足で上がりこんで来て、腰巻を奪われ、ソ連の国旗代わりに使われて恐ろしかったと話していました。祖母は北方四島から引き揚げてきた人達と、ずっと交流をしていました。私は「婆ちゃん子」で育ちましたが、祖母からは余り島の話聞いた事はありませんでした。

ソ連軍の監視も厳しくなり、九月中旬、私達家族も島を脱出し、根室へ向う事になりました。脱出当日の夕方、昆布倉庫の中に筵を被って隠れ、暗くなるのを待っていたそうです。倉庫には、親父の弟が採った昆布が沢山入っていたと聞いています。

暗くなりソ連兵に見つからないように親父が所有している昆布船で脱出したそうです。親父の話だと、私の背中に金刀比羅さんの御札をくり付け、私を船底に入れたそうです。私は、幼いながらも記憶に残っているのは、その時に鉄砲の弾が飛んで来るのを見た記憶が鮮やかに残っています。

一回目の脱出は失敗して捕まり、次の日、家族全員が脱出に成功して根室に着いたそうです。志発島の島民は自力で脱出した人

が多かったと聞いています。根室では親戚の世話になりましたが、落石地区の知り合いを頼り、そこに住むようになったのです。裸一貫からの出直しです。親父ともども苦労しました。

北方領土の返還運動は、親父が一生懸命やっていたましたが、体調を崩してから私が引き継ぎました。親父は平成十年（一九九八年）に亡くなりました。

私は自由訪問に二回参加し、志発島へ行ってきました。初めて行った時、先輩たちから自分の家のあった所を教えてもらいました。そこへ足を踏み入れたとき涙が込み上げてきて、誰もいない所で泣きました。

島は一刻も早く帰って来てほしいです。この年齢になって思うことは、日本の国がロシアに対する返還要求運動に、もっと予算をつぎ込んで真剣に取り組んで欲しいということです。国は、もっともつと責任をもって運動を進めて欲しい。地元の北海道や根室市などと一緒になって、若い人達とともに盛り上がっていく運動であって欲しいです。



志発島 相泊郵便局の建物

公益社団法人 千島齒舞諸島居住者連盟
戦前の北方四島写真収録集より



河田 弘登志（九十一歳）
齒舞群島多楽島元島民
根室市宝林町

私は齒舞群島が多楽島で生まれ、終戦時は小学五年生でした。納沙布岬から約四十五キロ離れている島は、夏にかけガス（濃霧）がかかり、根室と変わらないような気候でした。冬になると齒舞群島全域が流水に覆われ、五月頃まで浮かんでいることもありました。

多楽島は、面積が約十二平方キロですので主な交通手段は徒歩で、自転車が数台あった程度です。仕事では馬車を使っていました。

春になると雲雀が上空でさえずり、降りて来たところには卵を産んでいる巣がいくつもありました。夏の暑い日には海水浴もしました。また、小舟を漕いでカレイを銚で突いて獲ったり、潮が引いている時は家からザルを持ち出して北海シマエビをすくったり、カニも網で獲ったりしていました。それを家に持って帰っても喜ばれません。島では珍しいものではないからです。冬は、雪が積もればスキーで滑ったり、春になれば流水に乗って遊んだりしていました。

学校は家から歩いて三十分ほどの場所にありました。学校の裏口から出ると、お寺（真宗大谷派多楽説教所）でした。フルベツ墓地も隣接し、戦死された東狐さんの大きなお墓が目印でした。そのお墓は、今でも残っていると思います。

海岸線を歩いて学校に通っていたので、吹雪の日の登下校は大変でした。親は送迎しなかったもので、子供たちだけの登下校は、上級生が先頭と後方でロープの端を持ち、下級生は、そのロープを握って真ん中を歩きました。

戦時中でしたから、午前中は授業で、午後からは教練の時間が多かったです。教練は軍隊形式の訓練で、二列から四列に並ぶ動作を繰り返したりしたことを覚えています。防空壕を作ったり、タコつばを掘ったりもしていました。人が入るくらいの縦穴を掘るのですが、馬が落ちて死ぬこともありました。

男性は二十歳になると軍隊に招集されるので、それまでは高等科卒業生から二十歳くらいまでは青年団を組織していました。私の父は青年団を指導していたようです。三月になると青年団が慰安会を行ないます。島を四つの地区に分け、競って出し物を披露します。私の地区は二部といっており、第四部までありました。

会場は学校の教室を二つ通し、舞台や幕など全部にわたって手づくりのものでした。当日は朝から夕方まで行なうので、島民は弁当持参で楽しみました。また、学校の運動会や学芸会、村祭りも島民が総出で参加する行事なので大変盛況でした。冬の夜、青年団は学生にソロバンの練習をしたり、人前で話す練習をしてい

ました。青年団の集まりには、私もよく連れて行ってもらいました。当番制で青年団員の家を会場にしていたので、当番の家では、お菓子などを用意していたので、それを目当てに来る子供もいました。

島の産業は漁業で、ほとんどが昆布業をしていました。多楽島だけでなく齒舞群島は昆布業が主だったと思います。生産した昆布は根室に運んで、そこから中国、上海へ輸出していたようです。南京虫の予防になるから昆布を敷いていた言う話も聞きました。

また、昆布からヨード（ヨードチンキ）も生産していました。昆布を焼いて灰汁にして釜で煮詰めて作って出荷していました。私の家でも作っていました。ヨードの他に火薬の原料となるカリも生産していました。太平洋戦争が激しくなってから、カリ増産になり、子供たちも雑昆布などを拾って手伝いました。島では昆布の他に、タラやアブラコ（アイナメ）という魚やタラバ蟹も獲れました。タラバ蟹の缶詰工場も操業していましたが、戦争が始まってからは止めたようです。

私の家も漁業を営んでいました。昆布業が主でしたが、アブラコを釣って根室の市場に運んでいました。釣りの餌は、私が網を刺して採ったホッケなどを使っていました。島の大半は五月から十月末まで寝る間も惜しんで働いていました。小学生も四・五年生になると、昆布を干したり、根っこ切りなど一人前に出来る仕事がありましたから、学校が終わると走って帰って手伝いました。

昭和二十年（一九四五年）、終戦時の島の様子は良く覚えてい

ます。その前の年、弟が根室の病院に入院していて、母と小さい弟や妹も根室にいました。七月の根室空襲の時は母たちは病院から避難したらしいのです。祖父と父が、母と弟たちを探しに行くと言って印鑑と貯金通帳を私の腰に縛り付けて行きました。祖父と父が帰って来るまでの間は、私と入学前の妹の二人で留守番をしていました。根室では三番川に舟をつけ、父は歩いて根室に向いました。運よく母たちは見つかり、漁期の最盛期だったので祖父と父は、母たちを連れて島に戻ってきました。留守番は一日か二日ほどでした。

八月十五日、船を出し昆布漁をして帰ってきた父が陸廻りの人たちから終戦の話しを聞いたみたいです。私も陸廻りをしながら遊んでいましたが、父を見ると砂浜に座り込んでいました。

多楽島にソ連兵が侵攻したのが九月四日と思います。その日、祖父と父が仕事に行こうとしている矢先にソ連軍が入ってきました。「まさか、ソ連軍が来るとは思わなかった」と、まわりの大人たちが話しているのを耳にしました。ソ連兵は、家の前を通って行きました。私は家の窓から見ていました。しばらくすると、ソ連兵が私の家に土足で上がりこんできました。家は新築して、まだ一週間くらいだったこともあり、驚くと同時に大変ショックを受けました。ソ連兵は銃を構えて「アメリカ兵はいないか」「日本の軍隊をかくまったりしていないか」「武器は持っていないか」ということを言っているみたいです。それを確認すると、今度は時計とか貴金属、それにバリカンや酒などを欲しがりました。

た。若い女性は何をされるかわからないので、髪を切り男装して隠されました。その後、ソ連兵は祖父が緬で作った酒を飲みに時々、家に来ていました。

九月になり沖に出てイカ釣り漁をしていたら、銃で威嚇されたりしたそうです。また、国後島では殺された人もいたと聞き、多楽島でも銃殺寸前までいった人もいると聞きました。島にいた日本の軍隊はシベリアに強制送還されたようで、島には三十歳以上の男性しかいませんでした。本土（根室）との無線も切られ、日本の情報は入ってきませんでした。

漁にも出られないし、銃を持ったソ連の兵隊がいるので島を脱出する島民が少しずつ増えました。脱出時は夜間で風や潮の流れを見て、荷物は最小限で風呂敷包み一つで出ていました。通常なら最短、約五時間くらいで根室に着きますが、見張られているため太平洋を大回りして通常の二倍から三倍の時間がかかり、途中で遭難した人もいたと聞きました。

当時、島に住んでいた人の大半が根室に脱出しましたが、父親たちは島に残り、私と弟は学校に通わせるため親戚とともに別海の走古丹に向いました。冬になる前です。

その際、ソ連兵が私と弟のために二人掛けの机を二つ渡してくれました。一つは学校に持ち込み、もう一つは家で弟と使いました。番屋を家代わりしていました。

島に残っていた人たちは、昭和二十二年（一九四七年）、二十三年（一九四八年）に強制送還され、いったん志免島に収容され

ました。十月に入り貨物船が志免島に来ました。島民は荷物同然の扱いをでクレーンに吊り下げられ船底に詰め込まれました。

「根室に行けるから少しの辛抱」と思っていたそうですが、着く気配がありません。船はトイレが少ないので大変苦勞し、体調を崩して船内で亡くなった人もいたようです。何日か経って着いたのが樺太の真岡でした。そこに収容されたのですが、そこでも何人も人が亡くなりました。函館に送還されるまで二、三カ月かかったと聞いています。

最後まで島に残っていた父たちは、送還後、私たちのいる走古丹に到着しました。音信不通で生死も分からなく再会を果たすまでに、二年三カ月かかったのです。父親たちは着の身、着のまという状況でした。

私は、その後、漁船員をやったり、トラックの運転手を経て昭和三十三年（一九五八年）に市役所に就職しました。在職中も退職後も、ずっと北方領土の返還要求運動に携わってきました。

自由訪問の時、多楽島に渡り、自分の家のあるところを訪ねました。ところが浸食によって家のあった場所は海の底、家の裏の馬を放牧した所までもなかったのです。

戦後八十年、すべてのことが未だ解決していません。時代が変わって、考え方が多少変わって来ると思うのですが、もともと戦争で勝った領土ではない北方四島は、一刻も早く返還してもらいたいです。



工藤 繁 志（八十六歳）
齒舞群島多樂島元島民
根室市瑤瑤

私は齒舞群島の多樂島に七歳までいました。昭和二十年（一九四五年）の十月末、動力船をチャーターし持ち船の無動力船に生活に必要なものだけ積んで根室町に脱出してきました。

多樂島には、根室の親方の仕込み制度により、今から百二十年ほど前に青森から移り住んできました。土地と資材を提供してもらって昆布漁をおこない、製品を渡す。生活物資も用意してもらい、そうしながら自営の漁業へと移行していくのです。

私は八人家族で、昆布漁の外に畜産も手掛け、馬が二十八頭ほどいました。馬は交通手段であり、昆布の運搬にも欠かせなかったのです。青森から親戚五人来て、仕事を手伝ってもらっていました。

島での記憶は、冬に流水に乗って遊んだり、魚とり、海に入っ

て泳ぐなどの思い出があります。乗馬もやりました。
島の行事は運動会、学芸会、お祭り、青年団の演芸会などです。楽しい思い出ばかりです。島での生活が一番良かった。苦労はなかったです。

終戦後の九月五日、浜に黒い物体がのし上がってきました。ソ連軍の上陸用舟艇です。工藤家にはアザラシやトドを撃つ鉄砲が二丁あったので、父親は見つかったら大変と慌て隠しました。ソ連兵五、六人が家に入ってきて来て二十分ほどいました。兵士たちは自動小銃を持っていて、「頭を上げるな」と親たちに言われるがまま、じつと下を向いていました。その後、兵士たちは大きな集落に向かって去りました。家族は生きた心地がしなかったです。

ソ連兵は学校を宿舎に毎日、家の方に見回りに来ていました。私はお菓子をももらったりしたことがあり、余り恐ろしい感じはしませんでした。大人の人たちは怖かったと思います。そのうち私に仕事を与えられ、家に梯子をかけて高い所に上がり、ソ連兵が来たら教えろというのです。見張り役です。親戚に若い女性の方がおり、押し入れや物置に隠れました。

結局、ソ連兵から暴力も、いたずらされることはありませんでした。

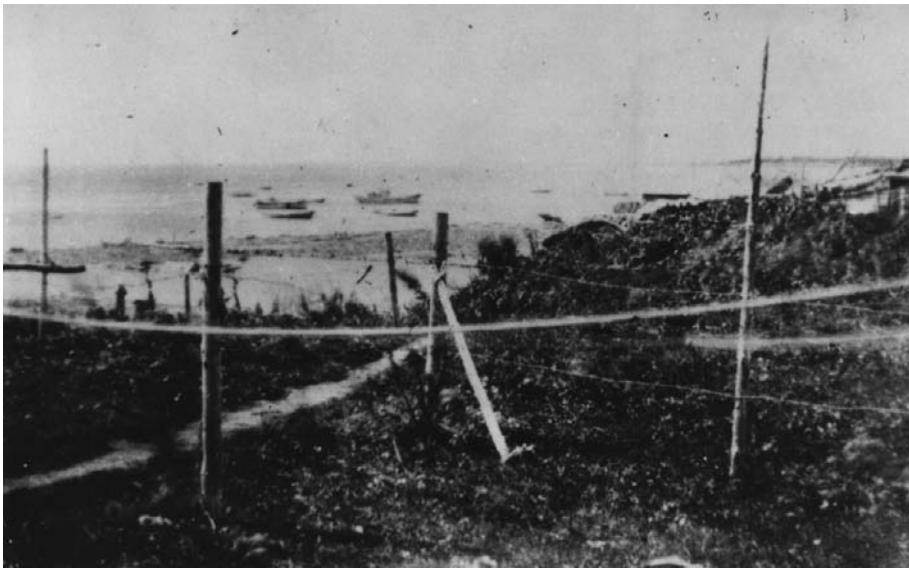
島を脱出するときも、すぐに戻って来れるからと思い、簡単な荷物をまとめただけでした。馬も置いてきましたが、途中、ソ連兵に気づかれないように馬の足跡をレーキで消したりしました。荷物を運んできた馬が暴れ、船の錨に腹を引っかけてしまい内臓が飛び出て死に絶えたのが、記憶に強く残っています。可哀そうでした。

いざ、自宅を出るとき、窓の外に馬の顔が並んでいました。馬たちは最後の別れと分かっていたのかもしれない。

朝の八時か九時ころ、今の根室組合の下に船をつけ、本土に上陸したものの、根室空襲により町は何も無い。入る予定だった小学校は焼けて無かったのです。二年ほど根室町内で過ごした後、瑛瑤瑠に落ち着き、再び昆布漁で生活してきました。

島が間近に見えるところに住んでいたので毎日、未だ帰って来ない島を見ながら、今日も帰って来なかったが、明日こそ帰ってきて欲しいと願いつつ、長い年月が過ぎ去りました。

戦後八十年、今はロシアとの関係は非常に厳しく、全く先が見通せない状況です。このような状況が何年も続くようであれば、多くの方々に北方領土の事が忘れられるのではと心配です。北方領土は私たちの大切な領土です。北海道や根室の地域の問題ではなく国の問題として多くの皆さんに考えて欲しいと思います。絶対にあきらめないで声を上げ続けることが大事です。時代がいかに変わることがあっても、ロシアが隣の国ということに変わらなと思いますので、一日も早く隣の国同士が仲良く楽しく暮らせるような時代になるよう願っています。



多楽島 古別の高台からカンバライソ望む

公益社団法人 千島齒舞諸島居住者連盟
戦前の北方四島写真収録集より



新 浜 一 郎（九十九歳）
色丹島元島民
根室市駒場町

私は大正十五年（一九二六年）生まれで、小学校五年生まで色丹島の小学校に通っていました。住んでいたところは色丹島字キリトウシという所で太平洋側の南西の方角です。キリトウシには学校が無かったので約十五キロ離れていたノトロ地区の小学校に通学していました。知り合いの家に下宿させてもらっての通学でした。小学五年生の時にキリトウシにも分教場が出来たので、家から通うようになりました。

キリトウシの戸数は十二、十三戸で分教場が出来た時点では生徒は十二人で、百人ほど住んでいたと思います。小学校六年生の初めに、根室の花咲小学校に転校し、高等科の一年までいましたが、島とのレベルが違い過ぎて、最初は授業についていけなかったです。祖母が富山県に住んでいた時には、富山県に行き、祖母のところから高等科の学校に通いました。

家族は、祖父母、両親、兄弟が五人で私は長男です。現在、生きてるのは私だけです。家業は主にタラ釣りなどをしていました。終戦まではタラを開いて干したあと、梱包して根室へ出荷し

ていました。盛漁期には富山方面から出稼ぎの人たちが来て、島では大規模な経営をしていたようです。他では、海藻採りを主とする家が多かったようです。海藻は昆布、千島海苔、銀杏草、ふ海苔などが採れました。色丹島で動力船を使っている家は、何軒も無かったと思います。

色丹島の気候は良かったですね。野菜はほとんどが自給自足でした。根室で買うものは米や生活用品くらいでした。子供の頃の遊びは鬼ごっこや、かくれんぼ、夏は海で泳ぎ、冬は山でスキーをして遊んでいました。役場や病院は斜古丹というところにあつて、キリトウシからは約三十キロ離れていたと思います。山道ですから、村から村の間は馬で行き来していました。しかし、冬の雪が多い時は馬が使えないため、急病人が出ると助からないこともありました。

学校を卒業した時、太平洋戦争が始まっていました。それで名古屋の軍事工場へ強制的に就職させられ、終戦になるまで働いていました。終戦後は根室へ帰って来たのですが、根室空襲で焼け野原になっていて、親戚が何処にいるのか分からない状況でした。それで島に帰ろうと思ったのですが、もう島に行く船が無いと聞き、私は、いったん札幌に行き就職をしました。しかし島の状況や家族の様子が心配で、根室の役場に何度か問い合わせをしてみたところ、家族がまだ色丹島にいるということが分かりました。

昭和二十年（一九四五年）十一月二十日、根室に戻り、夜に色丹島へ行く船があると聞き、その船に乗せてもらって島に向かい

家族との再会を果たしました。

終戦当時、島には日本軍の暁部隊がいて、キリトウシにも十人ほどの日本兵がいたようですが、いつの間にか、いなくなつたようです。日本軍の兵舎はソ連の警備隊が使っていましたが、日本軍が駐屯していた時、備蓄していた米が大量に残っていたようです。その米を、こっそり運びに行く船があるという情報を耳にしました。その船の情報を聞き、私も船に乗せてもらい米を運びに行きました。行く場所がキリトウシの湾でしたが、当時まだ暁部隊の兵舎があつて、そこにはソ連の警備隊がいました。米を運びに行くのは湾の奥の方です。帰りの際に湾の先端で降ろしてもらい、ソ連警備隊が監視している場所は分かっていましたから、ずうっと山を迂回して裏山を廻り家に帰つて来ました。

家に戻ってから、しばらくの間は隠れていましたが、そのうちソ連兵に見つかり斜古丹の捕鯨会社の方に行つて働いていました。日本兵が残っていた米や衣服などがあつたので、終戦後も島では、わりと裕福な暮らしが出来ました。日本へ引き揚げるまでの二年間は日本の情報が全然わからないので、ただ漠然と暮らしていたような気がします。

昭和二十二年（一九四七年）十月頃、家族全員で引揚げてきました。が、はつきりとした記憶は無いです。樺太の真岡に着いてから約五十日間そこにいました。食糧がないので大変な生活でした。そのあと函館に送還されたのですが、帰り引揚げ船のなかで、体調を崩した一番下の妹が亡くなりました。四歳でした。それから

親戚を頼つて根室に帰つて来ました。根室では鉄工場で働き、昭和四十九年（一九七四年）に独立しました。

ビザなしが始まってからは色丹島に三回行きました。自分の住んでいた場所には一回だけ行く事が出来ましたが、風景は、あの頃と変わっていませんでした。懐かしかったです。当然、もう何も残ってはいませんでした。自分の住んでいた家の場所だけは地形を見て分かりましたが、砂浜が浸食され、家のあつたところは海になっていました。

長い年月を感じたものです。

（新浜一郎氏は令和七年十一月五日永眠されました。）



色丹島 キリトウシの漁港景観
（昭和15年6月15日）

公益社団法人 千島齒舞諸島居住者連盟
戦前の北方四島写真収録集より



得能

色丹島元島民

根室市光洋町

宏（九十一歳）

私の住んでいた色丹島の斜古丹村は、国後島の爺爺岳と向かい合うような位置にあります。気候は根室と変わりなく、冬は流水が島周辺を埋めて斜古丹湾にも入って来て湾内が一面真っ白な流水地帯となります。湾内は遠浅になっていて、夏になると、よく海岸で遊びました。海の中を歩くとカレイや小魚が足に触れて来るので、その感触を楽しんでいました。馬も放牧していたので、男の子たちは裸馬に乗って遊んでいました。山に行くフレップや山ブドウにコクワなどが沢山あるので、採って食べていました。家の手伝いは、ランプの火屋（ほや）を磨くのが日課でした。子供は手が小さいので、火屋の中に手を入れて内側に付着している煤を取るのですが、火屋を割らないように磨くのは子供には結構きつい作業でした。

私の家は、漁業と水産加工をしていました。他に馬を十頭くらい飼っていて、鞍を付けて運搬に使っており、冬は馬糞を引かせていました。

色丹島は沿岸漁業と沖合漁業が二分していました。沿岸漁業は

海苔や昆布漁が主で、沖合漁業は鰯とフジコやオヒョウなど、約十トンの動力船で漁をしていました。また、水系で東洋一と呼ばれる捕鯨場もあり、沿岸捕鯨で年間二百頭くらい鯨を獲っていたと聞いていました。操業は春から秋までですが、その間、捕鯨場で働く人や肉を買い付ける人たちが、本州方面からも大勢、島に来ていました。そのためか、小さな村にビリヤード場があり、割烹料理も四軒ありました。

十月になると、海が荒れて漁が出来なくなります。それで九月頃だったと記憶しているのですが、感謝祭を兼ねて色丹神社で秋祭りを行ないます。島の行事の中で一番大きくて、それが大変楽しみでした。

終戦時、私は小学五年生で、それまで色丹島から出たことがありませんでした。八月十五日の昼頃、「国から話がある」という伝達が各家を回っていました。私は母親と一緒に三キロ先の役場まで歩いて行きました。すると、役場には大勢の人が集まっていました。そしてラジオから放送が流れて来るのを皆で聴いていましたが、雑音が入って、よく聞き取れませんでした。後で聞いたら日本が戦争に負けたという事でした。当時、島には日本の軍人が約三千人いたと聞いています。その他にも島の各部落に特別警備隊という組織が、私の父親は警備隊長をやっていました。終戦になり武装解除で隊員や父親は、それぞれの家に戻っていました。終戦当時、「アメリカ軍が必ずやって来るぞ」と言う話を聞いていましたが、何事も起こらず平穏な日々が続きました。

九月一日の朝七時半頃、私は弟と一緒に学校に向かっていると、斜古丹湾に黒い船が二隻入って来ました。アメリカの船だと思っていたら、船の煙突にソ連の旗が描いてあったので急いで学校に行きました。生徒は四十人くらいで、校長先生と女性の代用教員がいました。校長先生から「ソ連兵が学校にも来ます。皆さんは動揺しないで先生の言うことを聞いてください」と言われました。教室で算数の授業をしている時でした。突然、拳銃を持った背が高く国防色のマントを着たソ連の軍人と、六、七人の兵隊が銃を持って土足のまま教室に入ってきました。普段は怖いもの無しの男子生徒も、この時ばかりは殺されると思い、狂信で皆ソ連兵と目を合わせないようにしていました。ソ連兵は何かを話しているのですが、私たちは言葉が全然分かりません。先生はソ連兵と身振り手振りで、やり取りしていました。どうやら勉強を続けてよいという事で、ソ連兵のいる中で授業を再開しました。算数の足し算で回答者に当てられた生徒が黒板に答えを書いたのですが、その答えを間違えてしまいました。するとソ連兵が黒板に行き、間違えた答えを直しました。先生も、どうしたらよいのか困惑をしていたようですが、それまでの恐怖感と緊張感は少し薄れました。私は、日本もソ連も足し算は一緒なのだと、その時思いました。ソ連兵が教室から出て行った後、学校の窓からスキー場の方を見たら、沢山の機関銃が並んでいるのが見えました。外や学校付近には、大勢のソ連兵がいましたから集団下校となり、ソ連兵と目を合わせないように下を向きながら歩きましたが、距離的に

一番離れている私と弟が最後となり不安でいっぱいでした。

斜古丹湾は、ソ連の船がいて監視が厳しかったのですが、島の反対側の太平洋側は、それほど厳しくなかったもので、自分の持ち船で根室に逃げた人が後を絶ちませんでした。私の兄と姉も監視の目をくぐり祖父の船で村を脱出して太平洋側に行き、そこから知り合いの船に乗せてもらい根室に逃げたのですが、無事かどうか確認する術はありませんでした。また、一度脱出して荷物を取るために島に戻り、根室に行く途中でソ連兵に銃撃され死んだ人が二人いると聞きました。家の中を物色し、酒や時計、万年筆など気に入った物があれば持って行かれました。島の人たちが一番心配したのが、若い女性がソ連の兵隊に乱暴されないかということです。男の格好をさせて、押し入れや防空壕の奥に身を隠していました。

私の父は、特別警備隊長をやっていたことを密告され、ソ連兵に連行されました。父は、それっきり行方知らずとなり、多分シベリアに送還されたのだらうと思っていました。が、国後島に連行され、同じような立場の人たちと一緒に樺太に連行された後で聞きました。ソ連分が島に侵攻した時、日本兵は山中に隠れていましたが、九月九日に穴澗に集められ、その夜のうちにシベリアに強制送還されました。

島に残された人たちは、いつかアメリカ軍が助けてもらえると思っていました。が、ソ連軍の監視は徐々に厳しくなり、自由の無い日々を耐えて暮らしていました。

島の気候は根室と、ほぼ同じで米以外は自給自足で各家庭では食べる分の野菜は栽培していましたが、監視の強化と共に魚を獲ることも野菜を栽培することも出来なくなりました。しかし、多量の米を山中に備蓄していた日本軍の隊長がシベリアに送還される前に、島民に米を配ってくれたため、米には不自由しませんでした。一方、米を食べないソ連兵は道路のぬかるみの補修に米を撒いていました。

しばらくして、ソ連兵の家族や民間人も島に来ました。私たちの住んでいた家も占拠され、島民は倉庫や馬小屋に入って生活する羽目になりました。ソ連の子供もいたので、学校も占拠しようとしていたようですが、校長先生と女の先生が強く抵抗したため学校は無事でした。その後、ソ連の学校も出来たので私たちは学校に通うことができました。しかし集会や、それに準じた事は禁止され、卒業式や入学式は出来ませんでした。

終戦当時、徴兵で島にいなかった人、ソ連軍が島に侵攻してから自力で島から脱出した人、強制送還された人など様々でしたが、手に技術を持った人は、もう一年残されてソ連人の手伝いをさせられていたそうです。

私の祖父は昭和二十一年（一九四六年）七月十一日、七十七歳の時に色丹島で他界しました。他に兄弟二人と姉の子供一人が島で眠っています。昭和二十二年（一九四七年）十月、強制送還で私と母親、一番上の姉と姉の子ども一人、弟と妹がソ連の貨物船に乗せられました。私は驚いたことがありました。それは、乗

船前似なくなつた子供がいたのですが、まるで生きているかのように背負つて送還の船に乗り込んだのです。船の中では誰も死んでいるとは言いませんでした。死んでいることが分かったら子供は海に捨てられてしまいますから。船は国後島や択捉島を廻り、各島民も乗船してきました。私たちは、このまま根室に行くものと思つていましたが、国後水道を通り樺太に向つていたのです。樺太の真岡沖に着いた時は、すごい悪天候で四〇五日は沖に停泊していました。

真岡に上陸すると、高台にある収容所に。そこは元々は小学校で、その上に女学校があつて、そこも収容所になっていました。眼下に鉄道が見え、初めて汽車というものを見ました。収容所では、若い人達は伐採などの強制労働をやらされ、その労働者の中に父親がいることが偶然に分かつたのです。色丹島で連行されてから、やっと消息が分かつたのです。初めて汽車に乗つて会いに行きました。

収容所の食事は、島から持ってきた米を自炊して食べていましたが、一週間くらいで無くなりました。配給されるのは黒パンと二〇三日おきにスープが出ましたが、やがてパンも食べられなくなり、パンの代わりに樺太の塩ニシンを箱で置いて行くのです。しかし塩がきつく、しょっぱ過ぎて普通では、とても食べられませんが、食べるしかありませんでした。どうしても食べることが出来ず、栄養失調で亡くなる人もいました。友達から聞いた話だと、亡くなった人を小屋のようなところに重ねるように置いてあつて、

いつの間にか無くなっていた聞きました。真岡は夜になると寒さが厳しく、暖をとるためトイレの間仕切り板を剥がして燃やしてしまいました。トイレの囲いが無くなったため、女性たちは昼間我慢して、暗くなってから用を足していたようです。

日本から真岡に迎える船が来ていましたが、なかなか順番が回ってきませんでした。後になって知ったのですが、小学校の収容所から女学校の収容所に移らないと順番が回って来ないという事が分かりました。

十二月頃だったと思います。やっと船に乗ることが出来ました。函館の桟橋に着いた時、姉が背負っていた二歳の子供が死んでいました。たぶん栄養失調だったと思いますが、背負っていた姉もいつ死んだのか分からなかったようです。私たちが日本に帰って来て約一年半後に父親も日本に帰ってきました。私たちは、直ぐに島に帰れると思い根室に住みましたが、現実とは全く違うものになりました。

島の語り部として、東京在住のアメリカの青年に体験談を語ったあと、しばらくして色丹島の映画製作の話が出てきました。感銘を受けた青年が映画関係者に伝え、日本音楽事業者協会の創立五十周年の社会貢献事業としてアニメ映画になることが決まったのです。平成二十六年（二〇一四年）に公開された「ジョバンニの島」です。私の体験談が八割、話のつながりとして二割が創作されましたが、北方領土返還要求運動に人生を注いできた先輩方の気持ちもこもった内容です。啓発活動にもつながり非常に嬉しか

ったです。

樺太での汽車の体験が宮沢賢治の「銀河鉄道の夜」の世界と重ねられ、「ジョバンニの島」が作られたのだと思います。実写とは違うアニメならではの描写力は、すごいと感じていまして、だからこそ多くの方々の心に残るのでしょう。

新型コロナウイルスの流行以降、すでに六年もの長い期間、島を訪れる機会を失いました。洋上慰霊は、やむを得ないですが、一歩でも島に近づけるのは有難いです。本当は島に行きたいです。自分の年齢を考えると、余計に実感します。最後に一回は行きたいです。



色丹島 斜古丹湾と集落全景

公益社団法人 千島歯舞諸島居住者連盟
戦前の北方四島写真収録集より



木 根

繁（八十八歳）

色丹島元島民

根室市千島町

色丹島は豊かな自然の中で、漁業で賑わう島でした。私の家の色丹島での仕事は、根室に本拠を置き、五月から十一月までの間、色丹島又古丹において、本家（長兄）の経営するタラ釣り漁等に、次兄家族、私の父（三男）と母が共に従事していました。従業員も五十人ほどいました。「開きタラ」の加工、頭や骨で魚粕を製造し肝臓からは魚油を搾油しており、時期によって、オヒョウなども獲れたし、海苔漁なども盛んでした。本家の木根漁業の最盛期でした。

又古丹は入り江から三百五十メートルほど奥まった湾で、私達を含め湾の周囲に四軒ほどが番屋を持ち、同じような態勢で漁業を営んでいました。

昭和二十年（一九四五年）、私は九歳の時に色丹島の又古丹へ渡りました。小学三年生だったと思います。いとこ（父親の兄の娘）も同じ学年で、いっしょに又古丹に来ました。体が大きくなったので島の学校に通えるだろうとの親の判断で転校したのです。隣の斜古丹にある小学校までは家から四キロくらいあって、朝六時半には家を出発していました。最初、坂道を上がったあとと比較

的平坦な山道が続く通学は大変でしたが、みんな仲が良くて楽しい学校生活でした。

夏は浜で泳いで遊んだり、「花咲がに」を獲るため桟橋からカゴを仕掛けてたり、木の棒に長い釘を付けて鮭突きなんかもしました。

学校の裏には芋などの畑があり、校長先生の奥さんが獲れた芋を茹でてくれて、皆で食べたこともありました。色丹島では様々な野菜が収穫できていましたから自給自足で豊かな食生活が出来ていたのです。

馬もたくさん飼われていました。先輩と一緒に一本のロープで簡単なクツワを作って馬を捕まえて乗って遊びました。

昭和二十年（一九四五年）七月、根室は空襲を受け大変なことになっていると聞いていました。しかし島は平和で私は、あまり戦争を実感していませんでした。

終戦後の九月、ソ連兵が島に侵攻して来て、学校にもソ連兵が五人ほど土足で入って来たときは、とても怖かったです。私たちは教室にいましたが、先生から「おとなしくしていなさい」と言われ、じっとしていました。ソ連兵の脅かしはなかったです。

当時の学校は、教室が二つあり、一年生から四年生までの教室と、職員室と一緒に並んだ五年と六年の教室に分かれていました。学年ごとに一列に並んで勉強していました。私の学年は他の学年と比べて多く十人ほどいました。

木根漁業はソ連の侵攻後、直ちに従業員を根室に返しました。

所有していた三艘の船のうち二艘で返したと聞いています。

毎年十一月には根室へ帰る生活でしたが、ソ連に占領されて家族は帰れなくなり、島で冬を越すことになりました。実はソ連の司令部に通って、島の案内を手伝っていた父親の話では、「ソ連兵は間違って色丹に来た」という話を聞いていたことから、慌てて逃げる必要はなく、空襲で被災した根室にいるよりは、島にいた方が生活できるとの判断だったとのこと。この判断で強制送還まで色丹島にいる事になったのです。

冬の外出時はカンジカスキーを履いていました。スキーは父親が日本兵のスキーを調達し、子供用に切って調整したのを使っていました。

占領されてから学校は休校し、私は学校に行かず家の手伝いをしていました。あとで、学校は再開されていたと聞きました。

昭和二十二年（一九四七年）九月、強制送還が始まりました。持っていた荷物は制限されていて、小さなリュック一つを背負い、大型貨物船に「モッコ」で吊り上げられ、どこへ行くかも分からない状況で船に乗せられました。十日ほど続いた船上生活は狭く、汚く、海も荒れ、苦難の航海で、船は各島を回り、樺太の真岡へ連れて行かれました。

真岡では元日本の学校の収容所に入れられ、食事は少量のパン、塩ニシンとスープだけ。トイレも無くて不衛生でした。粗末な食事に加え寒さなどで、幼児や、お年寄りなど亡くなる方が続出していました。

日本からの迎えの船の高倉山丸に乗れたのは十一月のことでした。父と母と十歳の私の三人での引揚げでした。二日後に着いた函館では消毒のため、全身にDDTという薬剤をかけられました。函館には長兄が迎えに来ており、一緒に根室に帰って来ました。幸いにも根室の家は、空襲で焼けずに残っておりました。その小さなボロ屋に親戚と二世帯が入り、根室における生活がスタートしました。色丹島に財産を置いたまま、まさしくゼロからのスタートでした。私も学校に行けなかった分を、がむしやらに取り戻そうと必死に勉強し、漁業で生計を立てるようになりました。多くの方々に助けられました。

ビザなし交流で色丹島の地を踏んだ時は、感動し心が震えました。又古丹には何も残っていませんでした。ソ連が侵攻しなければ、木根漁業は、ますます島で発展していたと思います。戦争がなかったら、と悔みます。



色丹島 又古丹湾底部（昭和15年6月7日）

公益社団法人 千島歯舞諸島居住者連盟
戦前の北方四島写真収録集より



矢 萩 ト ク（八十七歳）
国後島元島民
根室市宝町

国後島では古釜布に住み、家業は漁業でしたが、父は戦地に行っていたので母が水産工場で働く傍ら、海藻類を採って生活をしていました。兄妹は兄一人と弟一人、姉二人と妹二人と私の七人で、兄と弟と妹の三人が病のため島で亡くなっており、古釜布墓地に埋葬されています。

終戦時、私は六歳で小学校一年生でした。父が家に帰って来たのは、昭和二十年（一九四五年）の師走だったと記憶しています。古釜布の夏は暖かく、近所の友達と海で魚を獲ったり、泳いだりしていました。男の子は相撲、女の子は縄跳びや、お手玉などで遊んでいました。

家では野菜も作っていました。秋にジャガイモを収穫しますが、花が裂いた後を「芋の子」って呼んでいました。裏山に行つて山ブドウやグスベリなどを採ったりしていました。フレップもおいしかったです。冬は雪が多かったと記憶しています。家の前でスキーを滑ったり、近くに「砂山」って呼んでいた砂丘がありました。道路側は草の生えた山になっていて、反対側が砂丘で海まで続いていました。その砂山が上がってスキーやソリ滑りをして遊

びました。数年前に自由訪問で、その場所に行つてみたら、子供の頃に遊んでいた砂山が寝食されて跡形も無くなっていました。

兵隊から帰ってきてからの父は、時々そりを引いて薪を採りに行きました。その時は私と弟も一緒に付いて行き、帰りは採って来た薪の上に二人とも乗ったりして楽しんでいました。古釜布から十キロほど離れたところに瀬石という温泉があって、近所の人たちに馬車で連れて行ってもらいました。波打ち際の砂浜を走り、日帰りで温泉に入つて来ました。硫黄の温泉は今でもあると思います。

私は市街地から少し離れた所に住んでいました。私が浜で遊んでいると、根室の方で凄い煙が見えていたので家に帰り祖母に話をしたら、それが根室空襲だったのです。その時、母は防空壕を掘りに行ったので、家にいたのは祖母と弟と私の三人でした。祖母は、空襲が島にも来ると思ったのか、皆で一升瓶に水を詰めて三人で山に逃げた記憶があります。

終戦になって、ソ連軍が島に来るという情報が入っていたのだと思います。家の戸や窓などを目張りして、母が「何かあったら皆で死のう」と縄を用意していました。ソ連軍が島に上陸し、銃を持ち鉄兜を被ったソ連兵が三人ほど土足で私の家にも入って来ました。その時の事は鮮明に覚えています。ソ連兵が何かをくれる素振りで私に差し出したのですが、祖母に「毒が入っているかもしれないから絶対にもらっちゃダメ」と言われました。

学校も占拠され、民間の家を借り複式で勉強をしていました。

庭のある大きな家でした。仕切りで二つの教室がつくられ、三年生の時は四年生と一緒に勉強しました。代用先生のいところから習いました。教科書も無く、先生が使うチョークも無いので、レンガのかけらのようなもので字を書いていましたし、私たちのノートも紙の米袋を裂いて使っていました。学校の行事は運動会も学芸会も遠足もありませんでした。

私の周りにはロシア人がおらず、ロシア人の子どもと遊んだ記憶ありません。ただ、泥棒に入られたことはありました。

戦後、島で妹が二人生まれましたが、昭和二十三年（一九四八年）二月に五歳だった妹が肺炎のため亡くなりました。その年の八月末に強制送還で国後島から樺太の真岡に上陸しました。最初の二泊はテントも何も無い野宿でしたが、幸い雨も降らなくて寒いという感じはしませんでした。その後、樺太の女学校跡の収容所に入って炊き出しを受けましたが、終戦後に国後島で生まれた三歳の妹テルが栄養失調で間もなく亡くなりました。北方四島からの強制送還では、樺太で一時抑留中に体調を崩したり、栄養失調で亡くなった人が随分いたようです。樺太には長くないなかったと思いますが、函館にいつ頃来たのかは記憶にありません。根室に来たのは親戚もいましたし、島に近いからだと思っています。

北斗小学校は最初、一学年下がつて三年生から通い始めました。次の年、年齢に合わせて五年生に編入されたので北斗小学校では四年生を経験していません。五年生の時、高学年のソロバン大会で一位を取ったことがありました。一クラス五十人が七クラスあ

った時です。島から引き揚げてきた子が、五年生と六年生の頂点ですから嬉しかったです。島での勉強の成果だったと思います。

引揚げた後、船に乗っていた父は昭和二十五年（一九五〇年）に四十一歳で突然亡くなりました。船の機関部で亡くなったのです。心臓病でないかと言われていましたが、死因ははっきりしません。それからの母は私たちを育てるのに大変だったと思います。缶詰工場で働き、私も学校を出て、すぐ就職しました。

平成十四年（二〇〇二年）に北海道の事業で樺太墓参の募集がありました。三歳で亡くなった妹の慰霊のために参加申し込みをしようと思いましたが、それは樺太に住んでいた人の墓参事業で、強制送還で一時的に樺太に送られた人たちでは申込書に記入する欄が無く諦めました。しかし、一旦は諦めました。平成二十二年（二〇一〇年）八月に樺太行きのツアーに個人的に参加しました。出発前に妹のお墓がどこにあるのかを調べるため、外務省、北海道庁、根室支庁、根室市役所など関係すると思われる各機関の方にお聞きしましたが、全然分かりませんでした。

当時、強制送還で亡くなった人は、どこかに埋められたようだということが、樺太で死亡した日本人の「鎮魂碑」があるから、そこで手を合わせてきたらという話でした。樺太では、山の上の女学校跡だと思われる場所に行きました。その高台からは港が見下ろせ、私たちを乗せた船が着いたのは、この辺だったのだろうなあと感慨深く思い起こしていました。日本の建造物らしきものを探してみましたが、私の見た限りではありませんでした。通訳

の人が付いてくれたのですが、若い人でしたから昔のことを聞いても分からなかったですね。

故郷の国後島に、墓参で一回、自由訪問で一回行きました。古釜布には、娘と一緒にきましたが、「ここがお母ちゃんの生まれた島で、この辺に家があったのだよ」という事しか話せませんでした。川が小さくなっていて、海には廃船が沢山あって私が遊んだ頃の海のようにありませんでした。そして、古釜布の海岸からも石を拾ってきました。それを母の骨箱に入れて、後は兄弟で分け合って今でも島の思い出として大切に持っています。もう一回、島に行つて裸足で歩きたいです。





古 林 貞 夫（八十七歳）
国後島元島民
根室市東梅

私は昭和十三年（一九三八年）十月に北海道国後郡泊村字瀬石で生まれました。

生まれ育った瀬石は古釜布より十キロほど南西にあり、自然に恵まれた良い所でした。山には温泉があり、海岸沿いには各所でお湯が湧き出ており、湯槽のために、その湯を利用しておりました。また浜の一部には水蒸気が吹き出ていて、その蒸気を利用して物をふかして食べたりしておりました。

国後島には戦前七、三六四人、一、四二〇世帯の人々が住んでおりましたが、瀬石には五十九世帯が暮らしておりました。島の住民の七割近い人は漁業に関係する仕事に従事しておりました。

私の家も自営漁業で生計を立てていました。昆布、ほっき貝、汐虫（肥料用）を採捕し、漁業会を通じて仕込み問屋に販売しておりました。

仕込み問屋の商店は食料品から日用品まで用意してくれたようです。

冬期間は漁が出来ないので、裏山から焚き木を手機で家まで運び、一年中使用する薪を用意したり春漁の準備など作業が仕事で

した。

瀬石には特別な娯楽施設はありませんでした。年に何回かの活写真（映画）や旅芸人（浪曲や講談）で、冬期間には青年団の演芸会が催されておりました。また隣同士、持ち回りで宝引きなどをして楽しんで過ごしました。

今までの島の暮らしも昭和二十年（一九四五年）の終戦後、何日かした九月二日、ソ連軍の艦船が前浜沖に停泊、ボートで数人のソ連兵が上陸してきました。ちょうど家の前浜に祖父と私がおりました。祖父はソ連兵が上陸してくると白い手ぬぐいを振っていたのを今でも覚えています。ソ連兵は家に向かい、中に入ると家宅搜索を始めました。家族は居間の一カ所に寄り添って見守っていました。搜索を終えるとソ連兵は出て行きましたが、後日に聞いた話では日本兵をかくまっていなかったか、各家々を搜索していたそうです。貴金属や時計を持って行かれた家もあったようです。数日後に古釜布方面より駐留する部隊が炊飯用設備のある車両や駐留に必要な物資を積んだ荷馬車が何台か到着し、瀬石で駐留の準備を始めました。

終戦時の私の家族は祖々母、祖父、祖母、父、母、弟、そして私の七人家族でした。占領下の生活は食事も満足に食べられないような生活でした。祖父は軍隊の食堂の手伝い、父は労役でソ連軍の木工場（野天）で働き、監視下で漁撈の仕事にも従事しておりました。

食料は配給制で玄米や雑穀類、調味料、その他、家族数に合わ

せて各家庭に配られたようでした。

私のところは祖父が食堂の手伝いに行っていたので黒パンや煮豆、ジャガイモを油で炒めたものなどをもって食べていたので大変助かっていたようです。

占領下にあっても学校には通っていました。自然とロシア語の単語を覚えたり、ソ連の兵隊さんから甘いものをもらったこともありました。ソ連の兵隊さんは子どもには親切にしてくれました。子どもの頃の私には極端な生活の変化は覚えておりません。

昭和二十二年（一九四七年）七月から強制引揚げが始まりました。私たちは十一月上旬の第三回目の引き揚げで各集落の住民は古釜布で急造された丸太小屋に集められ、引揚げ船を待ちました。棧橋から順次、小型船のハシケに乗り、沖の貨物船に着くと大きなモッコに手荷物を積み、その上に人を乗せてウインチで吊り上げられて貨物船の船倉に降ろされました。

船倉には何百人もの人がおり、身動きできないような状態でした。各島に寄り島民を乗船させて樺太の真岡に着いて下船してから、引揚げ者の収容所まで歩いて行かなければならず、父親は祖母を背負い手には荷物を持ち、母は弟を昭和二十二年（一九四七年）の二月に生まれた弟を私が背負い、祖父母は多少の荷物を背負って収容所までの坂道を歩いて向かいました。坂道は雨の降った後なのか凍った土が溶けた後なのか、どんな状態でも足を滑らせながら歩いて収容所に着いたのを今でも記憶に残っています。私が背負った弟も元気でありまして、その時のことを話したこと

がありました。あの時は重たかったなあ。

収容所での生活は筆舌にして表わせない様な有様でした。わずかな荷物に寄りかかって眠り、ほとんどが身動きできない人でいっぱいでした。食事は収容所の女性の方々が班に分かれて順次、仕度していたようでした。食事は、お粥ともスープともつかないような食物に黒パンなどでした。病弱な人や子どもとか栄養不足のために亡くなった人も多くいたと聞いております。

収容所の便所は屋つぶちにあり、深い穴に居たが渡してあるだけで排泄の度に恐ろしい思いをしました。落ちて亡くなった人もいたと聞いております。そんな苦しい生活をしながら日本からの迎えの船を待っていました。

記憶にはありませんが順次迎えの日本の貨物船に乗船できました。千歳丸、十一月十八日乗船、二十日に函館港に着いたのとこのことです。

船に乗り船室に案内されて電灯の明るさに歓喜の声を上げていた人々。今まで収容所の生活に耐えてきた思いと、日本に帰れるとの思いの顔でした。一カ月以上も着のみのままの大多数の人でした。船内の明るい電灯の下で肌着を脱ぎシラミを取って潰し始めました。潰すとブチュと音が出て今でも覚えています。

下船前に船内で頭から足先までDDTで消毒されて真っ白になった記憶が残っています。

函館の収容所から各自それぞれの行く先に出発したわけですが、私たちの家族は祖母の妹さんが住んでいました十勝清水町に汽車

で向かいました。駅には祖母の妹さんの前田家の方々が迎えに来ており、ねぎらいの言葉をかけてくれたことを覚えております。

前田家の二階を借りて住むことになりました。父は仕事を世話してもらい臨時職として働いておりました。翌年の三月頃に芦別に住んでいる親戚の大高さんの世話で芦別の炭鉱で働くことになり家族で転居し、大高さんの住んでいる長屋の二階と隣り合わせの部屋を借りて住むことになり、父は炭鉱夫として働き、私も芦別の小学校に通うようになりました。本来なら四年ですが、長い間、学校に行ってなかったので三年生に編入させられて勉強をしました。友達もできて、野球とか川に魚釣りや水泳をしたり楽しい日々を過ごしました。

昭和二十五年（一九五〇年）、瀬石と一緒に住んでいた親戚や知人の勧めがあり、国後島に近い根室で漁業をと思い、父も決心して根室に再度移転をしました。

ちょうど、その頃に風連湖漁業開発の名称で国が槍ヶ岳地区に二十戸の家を建て北方領土や樺太の引揚者を対象に入植が進められていた。私たちも入植として入り、漁業で生計を立てました。当時の槍ヶ岳は陸の孤島と言われるくらい不便な処でした。一番近い厚床まで陸路二十キロ以上もあり、物資のほとんどは漁船で運ばれてきていました。採った海産物は通称、仲買船が来て買い取り、根室港に陸揚げされて売られていました。小魚や貝などの干しものを作り販売もしました。

冬期間は氷下待網で、コマイやチカその他の雑魚を採捕し、自

分たちに与えられた原野を開墾してジャガイモや野菜を作って収穫して自給自足の生活でした。電気のないランプの生活で、ランプのボヤみがき自分の仕事でした。学校も厚床小学校の分校として倉庫を改修した校舎で学びました。

しかしながら槍ヶ岳の生活は不便でした。昭和二十九年（一九五四年）、現在地の東梅に移住、ホッキ貝、アサリ貝やサケマス、カレイの刺し網漁業、氷下待網などの漁業を経営して現在に至っております。

若いころは仕事に追われて返還要求運動には積極的に参加できませんでした。

昭和三十九年（一九六四年）北方墓参、平成四年（一九九二年）ビザなし渡航、平成十一年（一九九九年）自由訪問が、それぞれできるようになりました。私の住んでいた瀬石も何回かありました。仕事の関係で、なかなか島を訪問することができませんでした。平成二十四年（二〇一二年）七月に念願であった瀬石の墓参ができました。六十二年ぶりに船上から見た我が故郷の山並みを見た時、自然と涙が出ました。古釜布港沖に錨泊し翌日、ハシケで上陸しロシア側の車に分乗して墓標のある白鳥の立に行き墓標の周辺の草を刈り墓前に祭壇を設置して花や供物を供えてお参りしました。その後、古釜布、近布内の墓参もして終わりました。その後は平成二十六年（二〇一四年）九月と平成二十九年（二〇一七年）五月の自由訪問、同年八月一日には色丹島自由訪問の時に特例で瀬石墓地の墓参が実現し五名で参加しました。

令和元年（二〇一九年）の空路墓参では、泊墓地、古釜布の友好の家に一泊して戻ってきました。令和二年（二〇二〇年）と令和三年（二〇二一年）は新型コロナウイルスの流行により四島訪問は中止になり、令和四年（二〇二二年）、今年こそは再開されると期待しましたが、二月にロシアとウクライナの戦争が始まり、日本とロシアの関係が悪化して四島訪問は中断され、現在に至っており、残念です。せめて墓参だけでもとの思いで日々過ごしております。

生まれ育った故郷を追われ、帰りたくても帰れない。元島民の思いを胸に北方四島は我が国の固有の領土であることを正しく理解して二世、三世、四世の若い人達が北方領土返還要求運動の世論を全国民に、また世界の国の人々に理解してもらおうような返還運動を推進して行く事を期待しております。



国後島 古釜布 瀬石海岸
公益社団法人 千島歯舞諸島居住者連盟
戦前の北方四島写真収録集より



国後島 古釜布瀬石部落周辺
公益社団法人 千島歯舞諸島居住者連盟
戦前の北方四島写真収録集より



鈴木 咲子（八十七歳）
択捉島薬取村元島民
根室市昭和町

【母の暮ら】

私は、択捉島の北東部にある薬取村の薬取で、八人兄妹の末っ子として生まれました。

両親は私が二歳の時に相次いで他界したため、父の親友の養女となり、そこでは一人っ子として育ちました。家族は祖父母と両親の五人、祖父は徳島県の出身で故郷を離れ北海道に渡り、縁あって薬取で漁業をするようになりました。岩手県出身の祖母二人は、産婆さんで村の人を取り上げました。

父は村生まれで、郵便局に勤めていて集配には動物の力を借ります。

父の愛馬の名は「ホシ」、眉間に白い模様があります。父はホシに乗って山を幾つも越え、熊に注意しながら三十キロ先のボロスに集配していました。

家の玄関の間口が広く、馬小屋と間違えてホシが家に入ることもありました。

飼犬の名は「モク」。雪が降ると父はスキーを履き、腰にひもをくりつけモクに引かせ配送に行きます。冬は吹雪で一週間、

帰れないことがあります。父が出かけると母は無事に帰宅するまで食事の時に陰膳を据えていました。

秋になると家の前の薬取川いっぱいにサケが遡上し、はじく水しぶきは湯気に見えます。子供たちは自作の釣り針「てんてん」で鮭を引っかけると、モクが真似て次々とくわえ岸に置いた鮭を数えると十九本もありました。

村の主産業である漁業は、漁獲高が当時の道内一二六村中十番以内に入ることもありました。カラフトマスが大漁の時などは漁師の親方が北海道の長者番付に載ることもあり、村民の税金を代わりに納めてくれることもありました。

五月になり流水が沖に出ると、函館から来た一番船の汽笛が聞こえます。

大人も子供も浜に集まり村に來た久しぶりのお客さんに喜び船を出迎えます。

春は山菜が芽吹きアイヌネギ、ヨメナ、ヨモギ、ツキ、コゴミなど、フキは大人の背丈くらいありました。

六月は、桜が咲き始め千メートル超えの山々に咲く高山植物や野花が一斉に咲き始め水芭蕉、アツモリソウ、エゾカンゾウ、センダイハギ、アヤメ、かわら撫子が咲き乱れ、村は見渡す限り花畑が広がり赤、青、黄色、白、紫・・・色とりどりの大地を織りなした楽園に変わります。

村にある砂丘の幅は三百メートル、長さは一キロもあり、びっしりとハマナスの群生が生息しています。馬に乗った大人が隠れ

るほど高さがあり、ピンク色の大きい花が開くと、村は華やかな甘いバラの香りに包まれます。

村のシンボル「トツカリモイ」の沢を下ると、ヤマベが潜み、その先の小さな入り江では、エイが産卵するために集まっています。

七月十五日は金刀比羅神社の夏祭り、のぼりと灯籠が村の道端に並びます。

祭りの山車が出て、子供たちは樽神輿を担ぎ、大人は着物を着ておしゃれをして、神社に出かけます。オーダーメイドの服を村の人に作って頂いたり、三越百貨店の通信販売を利用し、服や反物、草履、靴などを買っていました。

八月の暑い日は薬取川で泳ぎました。脱いだ服を頭に括り付け、平泳ぎをして川幅七十メートルを幼児も高学年と一緒に泳ぎ渡ります。

村の気候は道東と変わらず、根室で採れる野菜は村でも栽培できました。

イチゴも作り、桜の花が終われば小さなサクランボが実り、子供たちは木に登り食べます。木や草の実、十種類位の総称をフレップといい、好きなだけ摘み取り、おやつ代わりに食べるのは子供たちにとってこの上ない楽しみでした。

「食べられる白い土でゆでるトマ(エゾエンゴサクの根)」のおやつは祖母が作ってくれて、美味しく栗の様な不思議な味として覚えていきます。

夏の日没は午後九時頃、男の子たちは親の目を盗んで外で遊んでいました。

小学生五、六人が、カモメの卵を取りに行くために、勝手に小舟を借り大黒島へ行き三百個くらい卵を収穫し山分けをして砂浜に隠します。

海が荒れた次の日は、浜に水晶や磁鉄鉱が上がり、囲炉裏の灰を整えて拾ってきた石を飾って見せ合ったり、砂を掘ると日本刀や寛永通宝を見つけた人もいました。砂鉄もあり、家から持って行った磁石でくっつけて遊びました。

漁が終ると漁師さん達は、気の合った仲間と夕食後に集まり話をしていて、一人の漁師さんがセーターや靴下を編んでいた姿が印象的でした。流水が来ると、海は一面厚い氷の世界に変わります。函館からの定期便が不通になるため、米や味噌、根菜類、食料や雑貨など、はしごで降りるムロで保存していました。

年の暮れは、公会堂の前や自宅前で青年団が餅をついてくれます。お正月が終わると本土から取り寄せた衣装を身にまとった青年団の男性達が歌舞伎を演じます。演目は「義経千本桜」や「曽我兄弟」で、笛と太鼓で幕が開くと十人の女性たちが強いバチ引きで奏でる三味線の迫力ある音が舞台を華やかに盛り上げます。

冬は風の強い日が多く、雪は風で飛ばされ吹き溜まりになり、戸を開けられず、窓から外に出たこともありました。

ある年、村の病院に赴任してきた医者がスキーを持ってきました。スキーはとても高価なので、船大工がそれを見本に何十本も

作り、村中で流行り何年間もスキー大会が開催されました。

薬取川が凍ると竹スケートをして、氷に穴をあけて魚釣りもしました。川の氷を切り出して、おがくずをまぶし造船室のムロに保存をして熱を出した人の氷枕に使いました。足りなくなるとカミイ岳の麓は夏でも凍っているのです、切り出し保存していました。山に入る時は、熊に注意します。村のほとんどの家庭には鉄砲がありました。

村では入植が明治時代からいる方は鉄砲の許可が簡単に取れ、どの家にも鉄砲があり、山に出かける時は必ず持っていき身を守りました。

【子供の頃の思い出】

家の中での遊びは、近所のお姉さん達から教わりながら「布（きれ）ぼっちゃん」という人形遊びをしていました。小学一年生になると、針を持ち自分で縫物をしていました。

お寺では三月の団子まき、朝早く婦人会の人が集まり綺麗な色で、花、魚、鳥などの形をした団子を作り、お堂でまくと子供たちが争って拾い集めます。

五月の花まつり、お寺の天井には涅槃図がありました。お盆は重箱を持ってお墓へ行き、先祖を偲び家族で食事をします。

終戦当時、薬取小学校の全校児童は三十六、三十七人で一年生は八人でした。天皇皇后両陛下のご真影(写真)を収めている「奉安殿」に一礼をしてから学校に入ります。

運動会や学芸会は地域を上げての行事、子供が居なくても村中の人はよそ行きの服を着て、女性は日傘を差しグラウンドに集まります。

運動会の徒競走、ピストルの音で一斉にスタートを切る中、一人の男の子だけ足が遅くて進みません。見るに耐えかねた私の母は、下駄を脱ぎ捨て、足袋裸足で「がんばれー」と叫びながら、着物姿でグラウンドに飛び出しました。それを見ていた校長先生の奥さんも後に続き、気が付けばおばさん二人だけが走り回る姿に観客は大爆笑、しばらくグラウンドは笑い声に包まれました。

村には仙台鮎川捕鯨場があり、学校の課外授業は、まっこう鯨の解体作業を見学しました。一年間に五十頭獲れると五十頭祭と言うお祭りがあり、子供たちにお菓子を振舞ってくれました。朝、母に言われ前浜に行き、ウニ、わかめ、フノリを取って来て朝ごはんに食べます。カニは茹でる手間がかかるので持って帰ると怒られました。鮭、タラが豊富に捕れて、良質な千島ノリも作り神戸に送っていました。モヨロ鉱山では硫黄と金を採掘し、ラッキベツの滝は直接海に落ちる、落差一四一メートルは日本一の滝、村人の自慢です。

美しく雄大な大自然と共に、島民は心豊かに暮らしていました。

【ソ連軍の侵攻】

村人の生活が一変したのは、昭和二十年（一九四五年）八月二十八日、三年八カ月続いた戦争が終わり安堵した頃、ソ連軍が突

然拏捉島留別村に侵攻してきたのです。そのころ、通信網は途絶えていたのに噂が流れます。

「若い女性は連れ去られる」女性は髪を短く切り、顔には墨を塗って男装をしました。他の村からお嫁に来た人に連絡が入ります。「あなたのお兄さんがソ連兵に撃たれて亡くなった」と伝えられ、村の人たちはまだ見ぬロシア人への恐怖がいつそう強くなりました。

薬取村にソ連軍が馬に乗ってやって来たのは九月二十日過ぎです。「今日は子供たちを外に出さないこと」と回覧板が回りました。

静けさの中、私と祖母は部屋の中で、近づいて来る蹄の音に集中します。「ばばちゃん、おつかないね」祖母は答える様に私の手を握ります。馬が家の前を通り過ぎると静かに息を吐きました。が、力を入れていた私の体は暫く強張っていました。村に来たソ連兵は十人くらい、その中に女性が一人いました。「村人を不安にさせないよう配慮し女性を連れて来たのだろう」と大人たちは話していました。村役場に入ってきたのは、ソ連兵の将校三人と占守島で働いていた日本人が通訳です。ソ連兵は一枚の紙を手渡し、そこには進駐七箇条と書いてあります。ロシア人と日本人が平和に暮らすための約束が書かれています。ソ連兵は読み上げ、その日は紗那村に帰っていきしました。再びソ連軍が村に来たのは十月の中頃、雪がちらついていました。

ソ連兵たちの略奪行為が始まります。家に突然に入ってきた兵

士は土足で家の中を歩き回り、勝手にタンスやふすま、抽斗を乱暴に開け物色しては散らかす、母の指輪や懐中時計、万年筆などを見つけては盗んでいく、手には黒く光る銃を持ち野蛮な行為に、傍で見ていた七歳の私は、恐怖から体の震えが止まりませんでした。その後、村長が強く訴えたことで略奪行為はなくなりました。

【占領された薬取村】

ソ連軍が進駐して、日本人は強制労働を命じられました。年寄り、病人、子供、乳幼児のいる母親以外の十三歳以上が働き、父や他の日本人は漁船に乗って魚を捕り、水揚げした魚の処理などを、朝早くから夜遅くまでさせられます。

ロシア人は時間が来ると作業を辞めますが、日本人は勤勉なので終わるまで働きます。ロシア人は魚や塩蔵処理を日本人から教わり、大陸に送っていました。

徐々に民間人のロシア人が増え、村の様子は外国そのものでした。

そして、日本人の家に、ロシア人家族が住み付き、一緒に暮らす日々が始まりました。

ロシア語を覚え、多少記憶しております。ルーブルで買い物をしていたので一から十までの数字は今も言えます。日本人が使用していた「商店」をロシア人が居ぬきで使い「マガジン」に名を変えます。

ロシア人は食堂でパンを焼く窯が無いといって、村の火葬場の

炉を壊し、レンガでパンを焼く窯造ってしまいました。

日本人の怒りは大変なものでしたが、郵便局も閉鎖され本土からの郵便物も物資の流通は止まり、備蓄していた米も次第になくなります。その窯で焼いたパンを日本人も食べなければ生きて行けない状況でした。

火葬場が無くなり村の人が亡くなった時の火葬は、野焼きになり父はお酒を飲み気持ちを紛らわせて作業することがとても辛そうでした。

ソ連兵が村に来てから日本人の働き手は全て強制労働をしていたので、忙しさと疲れから、気力がなくなり家庭菜園も出来ず、運動会や学芸会も開催することが出来ませんでした。一年生になったら参加することを私はとても楽しみにしていたのです。

学校は、ロシアの生徒用に体育館を仕切って教室にしていました。グラウンドは一つしかないので一緒に遊びましたが、日本人とロシア人の男の子達は毎日何度も取っ組み合いのケンカをしていました。オルガンまでロシア人に奪われましたが、音楽の時間は日本人の先生のギターに合わせて歌いました。地理や歴史、道徳は禁止され、許された音楽でも「海」の唱歌の中で「行つてみたいな、よその国」この歌詞の部分は侵略を意味するので塗りつぶすように命令されました。父親が家の外に作ったブランコに乗っているとロシア人の子が乗りに来て仲良くなり一緒に遊ぶこともありました。

学校に行く前にマガジンでパンを買うのが私の役目でした。一

番前に並んでいた時、人の気配がせず徐に振り返ると、大人のロシア人達が後ろにずらつと並んでいて驚きました。日本人の子供が一人で並んでいても邪険にせず一人前に扱ってくれたことにニヤリとして、私はパンを持つて家に帰りました。

子供心に思ったのは、偉いソ連兵は白パン、労働者は黒パンを食べているのは、どうしてなのかと思いました。

昭和二十二年（一九四七年）、村の半分が強制退去になった空き家は元・郵便局長の家、ロシアのレストランになりました。私は一人行き、安いメニューを探すと砂糖があります。本土から物資が途絶えた日本人にとって貴重な食材です。小皿に入った薄い茶色のつぶつぶの砂糖を、添えられた可愛いスプーンで口に運ぶと、優しい甘さが広がり、久しぶりに食べた嬉しさで笑顔になりました。

村長が退去した後、荒川亀次郎さんが村のリーダーになりました。日本の慣わしでお彼岸の中日は仕事を休みにしたところ、ソ連軍の上層部の耳に入り、何度も紗那で裁判にかけられ「日本人を扇動した罪」に問われ一般人なのにシベリアに送られました。数年後、北海道に戻って来ましたが重い病気になって入院し、治療の甲斐なく亡くなりました。

【強制送還そして引揚げ】

昭和二十三年（一九四八年）十月、薬取村にいた日本人は全て強制送還の船に乗りました。急な命令に大人達が家の中を走り回

り荷物をまとめます。飼猫の「ミケ」が香箱座りをして眼だけを動かし見えています。村に置いていくミケに祖母は「この干した魚は全部お前のものだから食べて長生きしろよ」私はその光景を今でも忘れることが出来ません。自分たちの食べる物と、これからもっと寒くなるので衣類を多く持ちます。銃を突き付けられ引揚船に乗り、辺りを見渡す父や村の人たちは「この船はアメリカ製だ」と話している声が聞こえましたが、十歳の私にはその言葉の意味が分かりませんでした。

父たちが少しだけ取って置いたお米を、船の中で炊いてくれました。数カ月ぶりの真っ白いご飯、嬉しくて口に放り込むと衝撃が走ります。船は水が貴重なので、お米を海水で研ぎ、水で炊いたのですが、強い塩気が残って頑張っても飲み込めず、悔しくて悲しくて私は人知れず涙をボロボロこぼしました。

船は進み島内の紗那や内保、他の島に寄り樺太の真岡に着きました。

収容所には四島以外からも日本人が収容されていたので人で溢れていました。

暖房も無い極寒の地、寒くて身体の震えが止まりません。食事は黒パン、練の塩漬けは火を通さずに食べてお腹を壊します。野菜や果物は食べた記憶はありません。風邪が悪化し、栄養失調になる人も多く、お年寄りや幼い子たちが次々と亡くなり、今もサハリンの地で寂しく眠っています。

収容所の地獄のような約一カ月間の生活は、長く感じましたが

三カ月位居た人の話を聞き、私は短かった方だと知りました。書類や写真を本土に持ち込むのは禁止なので、ソ連兵の検査があります。

薬取村の岩田村長は村から持ってきた骨箱を大切に抱いていました。実は骨箱の中には、薬取村の戸籍簿の原本を忍ばせてありました。見つければ没収され捕まります。村長は素知らぬ顔で検査場を通り抜け、無事骨箱を函館に持つてくことが出来ました。村芝居の歌舞伎で千両役者だった村長が、村のために命をかけた最後の芝居を演じてくれたと、今でも語り草になっています。

樺太の真岡から函館に引揚げたあと、父は夕張の郵便局に勤めました。

産みの親が亡くなった後、実の兄は十七歳の若さで一家の大黒柱となりマクヨマイの漁場を仕切り六人の兄弟を育てました。

二十歳の時に赤紙が届き戦地に行きましたが、その後の消息が分かりません。戦地に行った人の安否を知らせる「たずね人」と言うラジオに毎日耳を傾けます。私が中学に入るころ、終戦を目前に中国の地でソ連軍の襲撃に合い、六人の兄弟を残したまま、兄は二十三歳の若さで生涯を閉じたことを知りました。

夕張に住んで二年ほど経った頃、父が「島が返ってきたら、直ぐ戻れるよう島に近い所に住む」と言い出し無理やり根室管内に転勤させてもらいました。それは島にいた時、ロシア人が「サハリンやロシア本土より島の給料も年金も高い、三年経ったら大陸に戻る」と聞いた事が父の頭から離れなかったのです。ところが

帰っても、又違う人が来る、そして島に永住している人もいます。島で生まれ育った父は、いつか返れると希望を抱いたまま亡くなりました。

昭和三十九年（一九六四年）から北方墓参が始まりましたが、なぜか択捉島だけありません。平成二年（一九九〇年）択捉島の墓参の許可が出ました。

「やっとこの日が来た」と島民たちは意気込んで村に行くも、日本人の建物は全て破壊され、学校の門と奉安殿の基礎だけが残され、実の父母のお墓は無くなり、写真撮影も禁止、墓石が転がっていた草わらで慰霊祭をしました。

平成二十三年（二〇一一年）娘と初めて薬取村に行きました。村にはロシアの漁師が数名いるだけで、村は崩壊し人はいませんでした。私は住んでいた家の前に立ち「ただいま」と小さな声で呟き、娘に鶏小屋と畑があった場所を教えました。私が元気なうちに一緒に村に来ることが出来て本当に良かったと安堵しました。現在、ビザなしが中止になり、落ち込んでいる私を励まそうと、娘は薬取村絵地図を描き、私を含め元島民の方から聞いた話を書き込みました。

択捉島薬取村カモイワツカ岬には、ロシア人が村に来るまで記念碑が建てられていました。ロシアの北方地域での行動が活発になったことに不安を覚えた江戸幕府が、国内外に「日本の領土」を示すため、寛政十二年（一八〇〇年）「大日本恵登呂府」の標柱を建てました。この様子は歌舞伎の演目にもなり、錦絵に描か

れるほど、北方の島の領有権を確保するための重要な出来事でした。その後、木の標柱が痛み「大日本アトイヤ」標柱を建てましたが、明治八年（一八七五年）に函館に持ち帰り（函館で現在も展示されています）、再び昭和五年（一九三〇年）、北海道庁の依頼があり父を含めた村の公務員総出で運び岬に花崗岩の記念碑を建て、出張で村に来た方々を案内しました。北方四島は日本の島です。今、生きている私たちが、世の中の人たちにきちんと伝えていく義務があります。あの島々を開拓した先人たちを敬い、記憶を正確に伝えることが私たちの使命です。



択捉島 高台より薬取川を望む

公益社団法人 千島歯舞諸島居住者連盟
戦前の北方四島写真収録集より



絵に込められた想い 古参の方々の故郷を描く旅

札幌島薬取村二世

札幌市ピアノ講師

山下孝子

安政四年（一八五七年）に描かれた絵に心を寄せた時から、私の創作活動の扉が開きました。その絵は、母である鈴木咲子が見せてくれた白黒の仙台藩絵師が描いた薬取村鳥瞰図で、今は無き薬取村の様子がありました。

数年後、インターネットでカラーの薬取村鳥瞰図を見た時、母のために戦前の村を自分の手で描きたいという気持ちが抑えられなくなりました。

【薬取村の記憶を辿る】

村の地図、中田直次さんの写真、仙台藩の絵師の視点を使い、苦手の絵に挑みました。ペン字を習い、ピアノ教室の指導の合間を縫い、八ヵ月間、下絵や家屋、動物の練習を重ね薬取村鳥瞰図がやっとの思いで、完成しました。

村に住んでいた母、山本忠平さん、松沢啓子さん、渡邊ミネさん、安田愛子さん、奥泉一子さん、岩田宏一さん、荒川勝一さん、村にゆかりある駒井惇助さんから聞いた話を添え絵地図が出来ました。

【四島への広がり 記憶の絵地図】

納沙布岬にある北方館を訪れた際、当時の館長、岩山幸三さんに案内され見た吉田初三郎氏の四島鳥瞰図に心打たれ、新たな絵を描く決意を固めました。

国後島は大塚小彌太さん、信田昌子さん、吉田和衛さん。色丹島は中田勇さん、得能宏さん。択捉島は母と山本忠平さん、小貫久三さん、佐々木正子さん、ご自宅や、洋上慰霊でお話を聞き取り四島の絵地図を描きました。

夫は四島に関わる歴史的な地や吉田氏の鳥瞰図、浮世絵（絵地図に描くため）を展示してある所を調べ、府中や小田原、下田、三崎港、箱根、小樽、墨田区、上野、神田神保町の地図屋、吉田氏のアトリエがあった八戸市の種差海岸まで連れて行ってくれました。

北海道根室振興局の方々に無理を言って吉田氏の鳥瞰図を見る時を作って頂き、今年頼まれた絵を描くモチベーションを保つことが出来ました。

知り合った後継者の方々と親交し、図書館に行きルーツも調べました。

村にあった捕鯨会社を探し当時の様子を教えて頂き、江戸幕府から重要な地として、大切に守られて来た「薬取村カモイワツカ岬」に某大学探検部が二十年前に行った本を読み、その方を探し出し、交流を重ね送ってくださった岬のカラー写真の迫力と、祖父が立った景色に涙がこぼれます。

皆さんの記憶を詰め込んだ四島絵地図は、未来に伝える財産となっています。

【鳥瞰図を描いて】

終戦後、島民達は理不尽な運命に翻弄されました。

日本人が追われた村から人々は消え去り、静けさに包まれた地は無情に流れる時間の中で少しずつ大地に還りつつあります。

大好きな祖父母や母が生活していた痕跡を知る術は少なく、悲しみの中に埋もれた村の存在は、人々の記憶から消えてしまうのは淋しいです。

私は「記憶」「記録」「伝承」のために工夫してパターンを変え、毎年絵地図を描いています。

【私も母と親子二代で択捉島を伝える語り部になり】

平成二年（一九九〇年）、母は初めての択捉島墓参に行き、以来三十六年間、語り部を続けてきました。

その姿はまさに『生きてきた証を確かめる様に、魂を込めた言葉を紡ぐ仕事』そのものでした。母の絶え間ない努力と根気心に心を動かされ、共に伝えていきたいと強く思うようになりました。足元にも及びませんが、母に近い講話を心がけ、日々勉強を積み、択捉島と薬取村の絵地図を講話資料にして、ホームページを利用し、講話した内容を繰り返し読んで頂けるように工夫しました。次のステップは母と相談し「村を形に残す」その準備を今、始めております。



択捉島 薬取 青年会（義経千本桜）
公益社団法人 千島歯舞諸島居住者連盟
戦前の北方四島写真収録集より

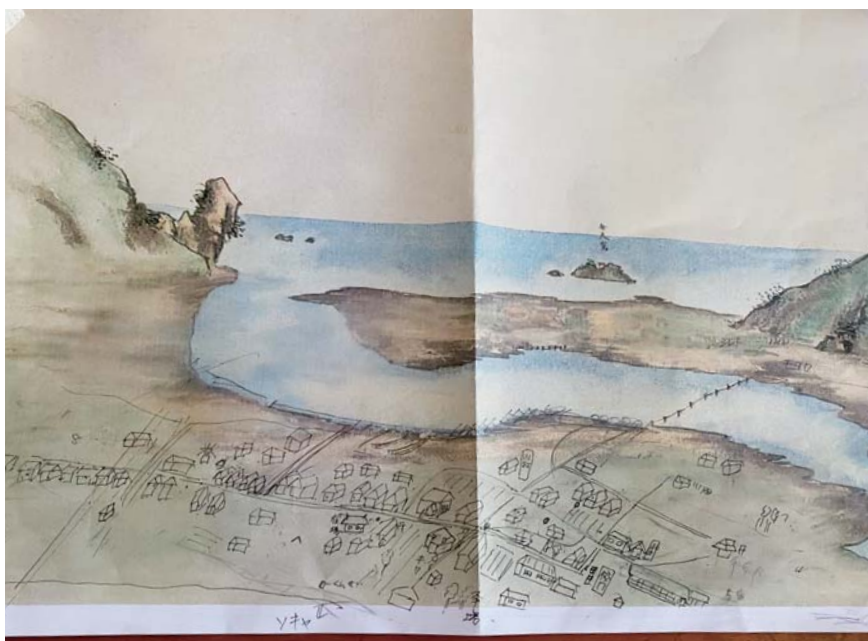


択捉島 薬取村 鯨の解体
公益社団法人 千島歯舞諸島居住者連盟
戦前の北方四島写真収録集より

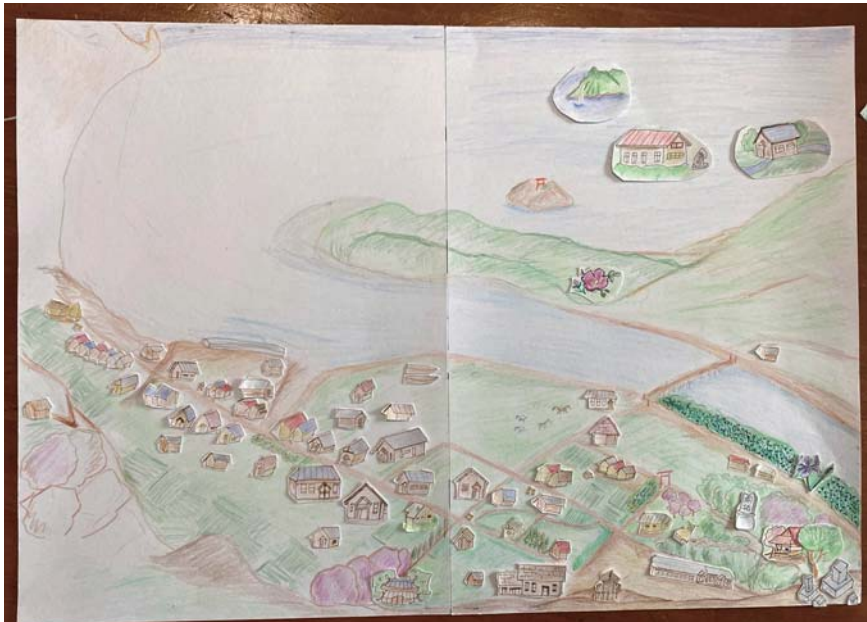
絵地図の作成過程



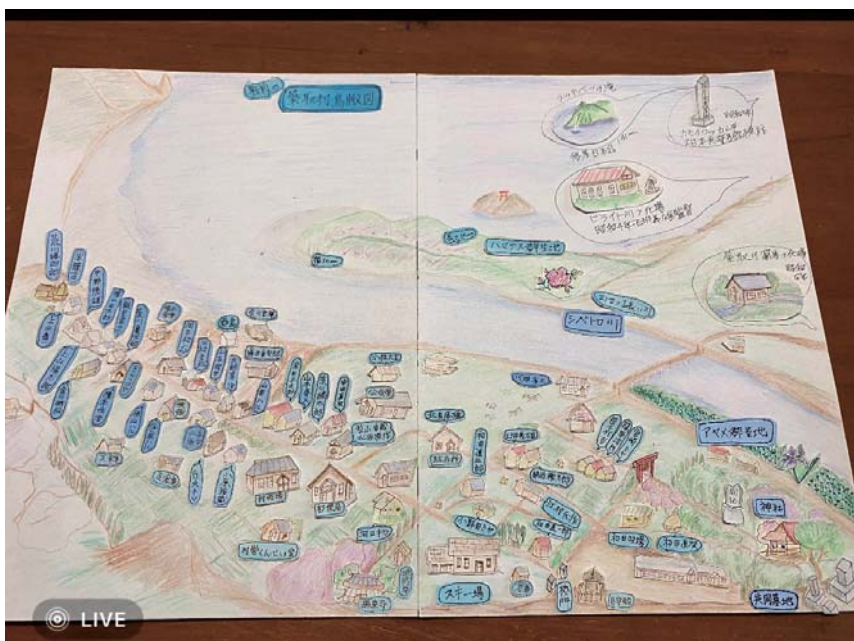
薬取村に住んでいた方々が作った住居地図等を参考に絵地図を作ります



初めに仙台藩の絵師が描いた絵の上に重ねて薬取村の街並みを描こうとしました



絵を描いたことが無い私は、まず家を描く練習をしました。家の形を知るためにドライブして古い家を、たくさんスケッチして、ひたすら練習です。

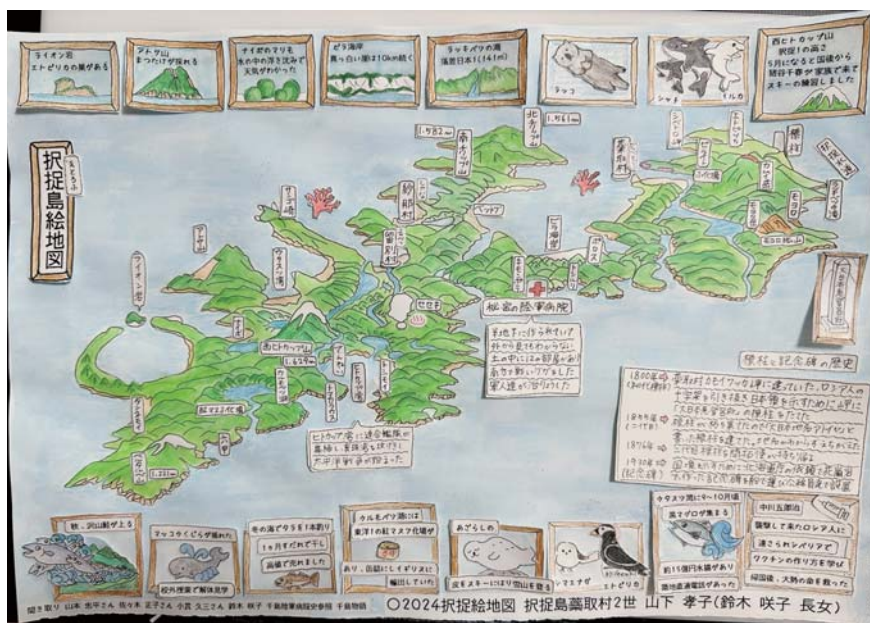


絵を切り取り、村の配置、それに合わせて名前を付けていきます。



紙のサイズも分からず、A2 に書きコンビニでコピー出来ないことを知り、
また書き直しました。村の行事も入れる準備、配置を決めます。



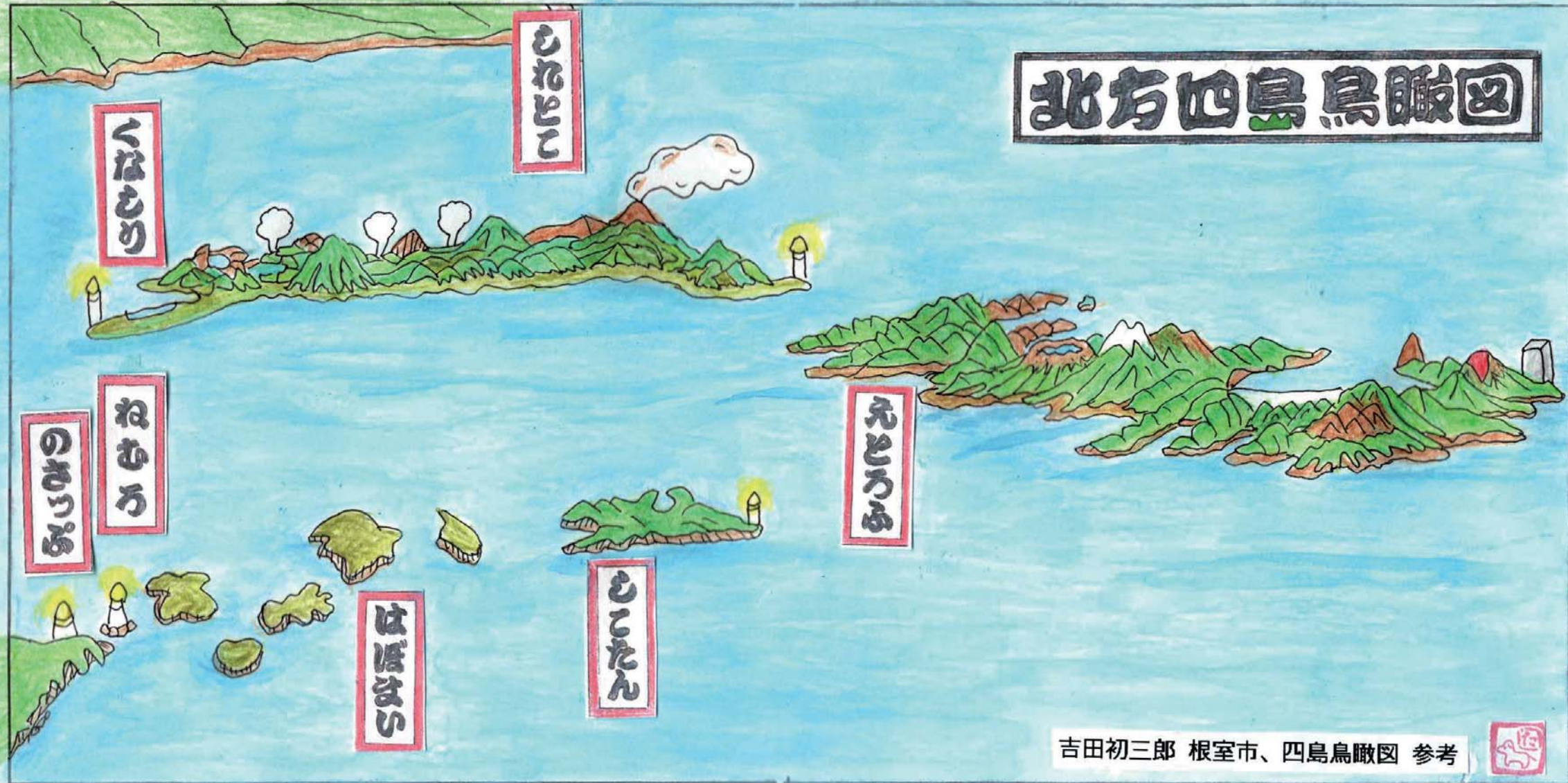


択捉島の絵地図は吉田初三郎さんの鳥瞰図を回してみました。
元島民の方々から話を聞き取り息子にも動物の絵を手伝ってもらいました。



歯舞群島・色丹島鳥瞰図の各島の細かい地名を入れる前の図です。

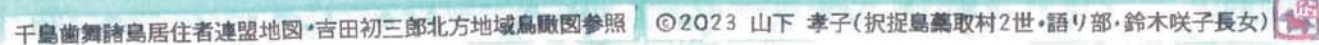
北方四島鳥瞰図



吉田初三郎 根室市、四島鳥瞰図 参考



Bird's Eye View OF HABOMAI-SHIKOTAN





カタオカソウ



カタオカ草は千島列島固有種。自生地の南限が色丹。明治時代採集薬取に5日間滞在した片岡待従に命名された。

四島では、色丹と捉えられない色丹松。松のぼっくりが色づくバカラ様。グイ松とも言う。

色丹タンポポ

シコタンソウ

シコタンハコベ

シコタンシャジン

シコタンハコベ

植物学の博士宮部さんは色丹で発見した新種の草木に島の名をつけました。

四島では、色丹と捉えられない色丹松。松のぼっくりが色づくバカラ様。グイ松とも言う。



この実は言う

マタコタン山はウルク草が2kmも続く大群落。



ゴゼンチバナ

清楚な姿の暗殺者



ムシトリスミレ



ネムロコウボネ



キンボウケイ



色丹島瞰図

Shikotan 人口1,038人



©2023 Shikotan Etizu-Takako Yamashita 捉捉島薬取2世

千島色丹島植物小誌 根室千島案内 われらの北方領土参照



シロツクサ

エソニワトコ

ベニバナジャコウ

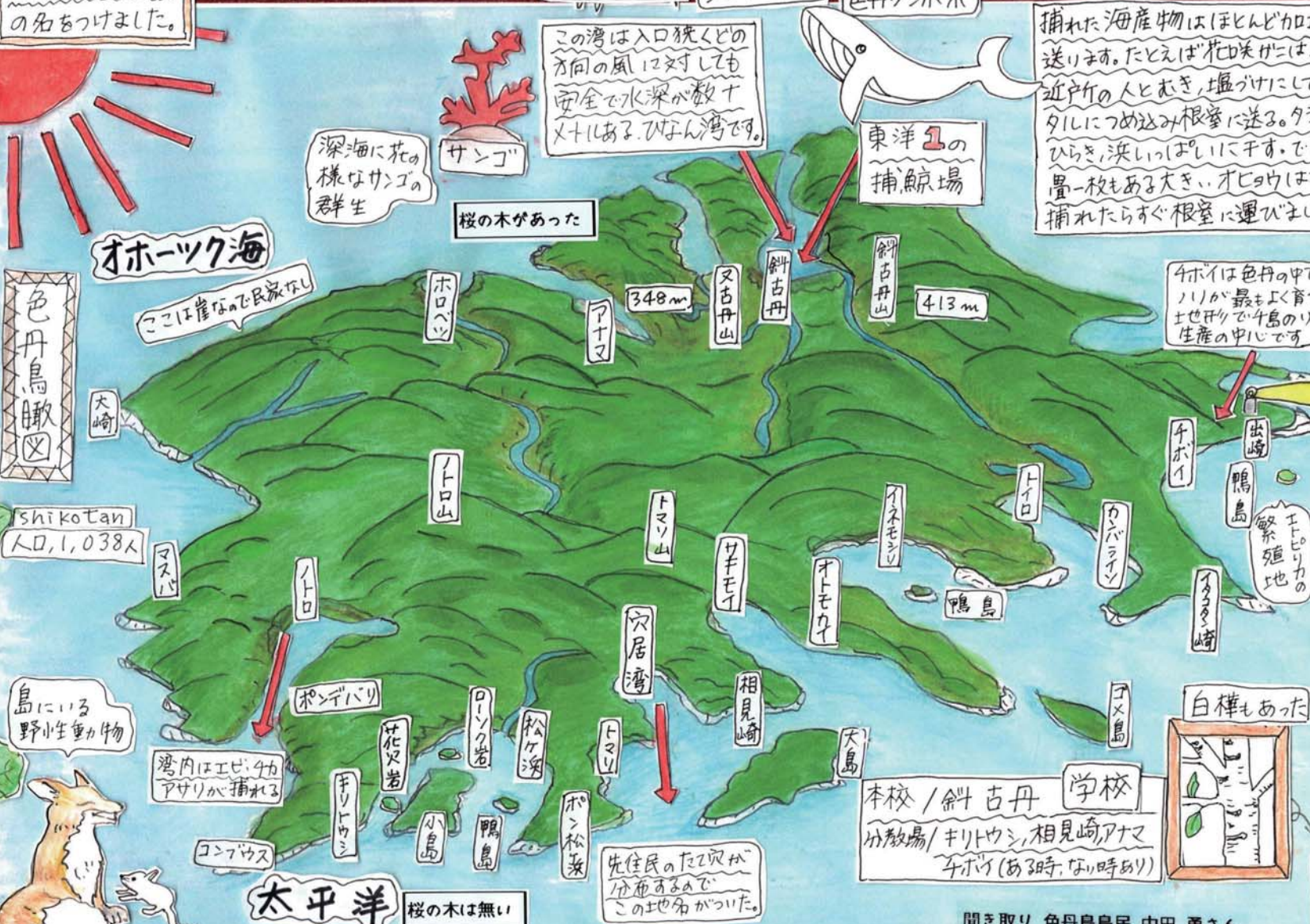
チンクレマ

アカツクサ

ハマナス

キンロウバイ

カシマイケイ



オホーツク海

桜の木があった

深海に花の様なサンゴの群生

サンゴ

この湾は入口狭くどの方向の風に対しても安全で水深が数十メートルある、びなん湾です。

東洋1の捕鯨場

捕れた海産物はほとんど加工して送ります。たとえば花の葉は、身を近戸の人とむき、塩づけにしてからタレにつめ込み根室に送る。タラもひらき、洗っておいしいにすす。でも、置一枚もある大きなオビウは、捕れたらすぐ根室に運びました。

4ボイは色丹の中で、ハリが最もよく育つ。土壌で4島の生産の中心です。

西前(オホーツク海側) 斜古丹は「東洋1」と言われた捕鯨基地がありました。魚の解体は40分程。肉は缶詰や塩蔵にし、脂は石けん、飼料、燃料と捨てるどころがありません。

東前(太平洋側) 「千島のり」の魚繁期は、鱧を子供達にも持たせのりを採る。千のりの大きさは「畳1枚」ほど。大人は一日60枚分を採ります。6~7月には「赤のり」8月末までは「普通のり」岩場での作業は、おぼろで「わらじ」をはきます。のりコンブで十分生活できた。

島の20%は森林、残りは馬600頭の馬を放していました。主産業は「千島のり」「コンブ」主な水産物は「タラ」「サケ」「マス」「カニ」「オタテ」「フジコ」「オビウ」「アブラコ」「魚卵」野菜は葉もの、大根、人参、ごぼう、いも

聞き取り 色丹島島民 中田 勇さん

先住民のたて取が分布する、この土地がいつた。

本校/斜古丹 学校
分校/キリウシ、相見崎、アナム
4ボイ(ある時、ない時あり)



白馬もあった

桜の木は無い

湾内はエビ、カアサリが捕れる

島にいる野生動物

アナム

348m

又古丹山

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

斜古丹

<

カニ缶詰工場は泊から古釜布にかけて10軒ほどありました。商品価値のないカニに苦勞する漁師さんを見て、当時の根室支庁長が缶詰にする事を提案。でも身を缶に入ると変色します。これを解決したのが硫酸紙。変色防止のために使用し、日本の缶詰を担うまでになった。

根室市の清隆寺の名物「クシマザクラ」は明治2年、根室の大工さんによって国後から持ち帰り（当時は「クナシリザクラ」とよばれた）桜を自宅の庭に植えて毎年見事な花を咲かせました。両手で持てた桜は30年たつと、馬車で運べない程、大きく成長し清隆寺に寄贈しました。その名を「クシマザクラ」に替え、各地に広がる。京都伊佐野園にも桜をわけ、桜園で育成しました。清隆寺の桜の樹齢150年。

泊村の事業家・大塚さんは、樺太遠くで湖で海苔を見つけた。その海苔を水産講習所（現・東京水産大学）の伊谷さんが試行錯誤し、良質な寒天が出来ることがわかりました。昭和11年、国後泊湾にも、その海苔があることがわかり、100隻の小船が引網で採り、ウエングイの溪で干し、長野県に出荷していました。海苔の名は、活用法を見つけた伊谷さんの名が付き「伊谷草」と言います。この場所は戦前、北海シマエビが沢山捕れ、帆掛け船で漁をしていました。

落款印 山下元氣 薬取3世



人口 7,364人
馬 2,800頭

四島の中で「ヘビ」が
いるのは国後だけ

漁の場所は
夏行って寒い

三本の瀬戸がある難所

国後水道

樺太の缶詰工場
では、生缶、フレック缶も
作っていました

大塚缶詰工場
カニ缶

藤井缶詰工場
ホッキ

作万別加隈工場
カニ・ナマコ

- 吉田缶詰工場
ホッキ・ナマコ
- 和泉古釜布缶詰工場
カニ・ホッキ
- 渡辺缶詰工場
ホッキ・ナマコ・カニ
- 加隈古釜布缶詰工場
カニ
- 磯永缶詰工場
カニ

羅臼山の
3米で
硫黄がとれた

生産量が多いのは、海藻類でその大半が
コンブと言われています。その他、カニ・ホタテ
北海シマエビ、ホッキ、ナマコ、伊谷草、マクロ
マス、サケの定置網、タラシ縄漁をしていた。

戦前、海底通信
ケーブルは根室→
国後を経由して捉
鯨耳までつながり
通信連絡手段として
重要な役割を果たした。

25才の時、スキーを始めた猪谷六合権さんは、
昭和5年、夫人と国後コタンに來ました。
自分で家を建て、温泉をひき、スキー作業場を作る
スキー登山用具は何度も新築特許を取っ
ている。息子は千島の春に生まれたが、名前を
「千春」のちに日本人初の冬季オリンピック
メダリストとなる。

太平洋

国後は数多くの温泉があり、人々の生活に
欠かせない物でした。その中で「コタン」は
「国後の桃源郷」と言われ、気候も良く、野菜、
くだものが豊富にとれた村として有名。
小学校、宿舎、馬場、旅館などに湯を引
入っていた。キズや病気が治ったという話も！

大谷地のアカエゾ公は
益さしい価値が広く世に
知られ、道内本州の業者が
毎年数多く買付けに來た。
埼玉大宮盆栽町で千島松
はとても人気がありました。

山腹から湧き出る湯元が温泉道
作り、あちこちにお湯をひいていた
余熱が地中に伝わり、大きなス
ズド、カボチャ、サツマイモ、ト
モロコシなど、越冬用として大根、人参、長ねぎ
おイモなどが作られていました。

上から見ると、沼の水が
ま、黄色。周囲には木が
ない。沼の底から液体状
の「硫黄」をバケツで採
る。液体硫黄があるのは
アメリカとポントウだけ。

歯舞、色丹、国後、択捉各島要図参考※海峡と水道には本質的な相違はない

択捉島四季絵地図

曾我兄弟



お正月が終わると村の青年団が公会堂で歌舞伎を演じます
女性たちが笛、太鼓、三味線を演奏すると、幕が開き歌舞伎の演目「曾我兄弟」「義経千本桜」が始まります(しべとろ村)

2月8km山の中に入り
イタヤ楓に傷をつけ
樹液を取り飲む



樹液

ピン

メイプルシロップ

尾びれではじく水は
湯下のように見える
くらい、沢山の鮭が
川を埋めつくす



川いっぱいになるさけ

オホーツク海

北ちりっふ
南ちりっふ



こんぶを巻いて
漂うらつこ

しべとろ村

捕鯨場

サンゴ取れた

国境を示す記念碑

ウルップ島

えとろふ水道

モヨロ岳

氷

もよう

モヨロ鉱山

硫黄と金が採れた

しべとろ川

島の中で一番長い川
(27.6km)

6月桜がさく

太平洋側に
桜はない
(しべとろ村)

8月さくらんぼがなり
こども達が夢中で食べる

オゼンチバナ

イワツツジ

えぞえんごさく

花の根は白い土を溶か
したお湯で茹でると
ほくほくで美味しい
白い土も食べられる

あやめ

えぞかんぞう

せんだいばぎ

はまなす

かわらなでしこ

みずばしょう

群生する花

太平洋

授業で解体見学

水深350mの
うたすつ湾に集まる

厳しい冬のたら漁

お正月は手作り

暮れのもちつき

寒い冬、船から
さお1本で釣る

□取りやかまぼこは
木型に入れて作る
色は昆布、食紅、実
でつける



賀正

かまぼこ

□取り

笛詰にして
イギリスに輸出

オス

紅ますふか場

えとびりか

定期船が来る

5月、流水が去ると

雪山でスキー

あとさ

うたすつ湾

あざらしの毛皮

スキーの裏に
張り雪山登る

スノーボード

しやな村

るべつ村

温泉

捕鯨場

背丈が110cmの
小さい木

タカネナカマド

ハスカップ

はまなすの実

実はすごくあま〜い

フレップや実はあやつ

村祭り7月16日(しべとろ村)

たろみこし

どしりり

びう海岸

暑い日は海水浴

捕鯨場

あき

あき

北ちりっふ

南ちりっふ

太平洋

標柱・捉提2本目

ロシア人がカモイワッカ山に建てた十字架も近藤重蔵が抜き「大日本東洋日報」と書いた木製の標柱を建てた。(寛政12年(1800年))
その様子を市川左田次が取調役で「山間目黒新富士」(1893年)を撮りつけた
60年余経ち痛んだ標柱を山台落の土で抜き「大日本地名アトイ」書き建てた

捉提島簡易案内図

- ①カモイワッカ山
- ②シベトロ川
- ③モヨロ山
- ④トシリヤ島のり・神戸に販路
- ⑤ラッキベツの滝
- ⑥シナ村
お役所の出た
機関が古い
島の中心的存在
- ⑦ルベツ村
終戦後
昭20年8月28日
ロシア人が上陸し
四島を占領した
- ⑧ウタスツ
北限のマクワは
対馬海流にのり
9~10月に回遊
一度に225kgの
捕れた。1,000tの
冷蔵船が常時
23隻停泊。青森
築地へ。築地
直通で売れた
- ⑨アトサ山
(1208m)
木太山
- ⑩ナイボ
北限のマリモ
- ⑪タンネモイ
捉提標柱1相
寛政10年(1788)
電話通信海底
ケーブルは相違
国道→タタ
シベトロまで
- ⑫ウルモバツ
東洋1の
紅マス養殖
で生かす
作り。4月
へ輸出

捉提の面積(3.168km²)日本で1番大きい島
人口(3,608人)オホーツクと太平洋2つの海がある
山(94座)ふじ場(9)馬場(12)学校(10)
役場(3)郵便局(9)温泉(2)電灯が点く(昭23)



アトイとは見晴らしの良い場所を言います
(北海道・国後にもあり)地名の免強不足で
その様に書いた為、明治9年(1876年)
千島巡察に来た湯地・時任らが抜き
五箇に持ち帰る(北洋資料館に展示)
昭和5年(1930年)国境を示すため道庁の
依頼で花崗岩で作った記念碑を村の
公務員達が船で運び設置した。
ロシア人が侵攻し碑は倒されて海中へ
記念碑の字は木村謙次

片岡待従(明24)
天皇の命で千島探検
村で越冬、5月過ぎに
国民が千島に間に合っ
てきかけに上る

魚占川捕鯨(昭3~19)
宮城県牡鹿郡鮎川村の
会社。村で10m以上のマッコ
ウジを捕り、船体その様子を
複製。一環として見学

築取村



5月、雷どけが始まると、ミズバショウが咲く
山菜が芽吹き、6月千島桜、タンポポ、サクラ草
エゾウツギ、ササユリ、ユリ、アヤメ、野ギクが咲く
モウセンゴケ、ワロナデシコは海岸を彩る。
ハマナスの花は村中をバラの香りで包みこむ。
沢山のフクロクサシイ草、おやつ(ツリコケモ、
モモイ、オコ、クマタゴ、ゴゼンタナボタ、クサベリ
高嶺ナカサ、イヌフクロギ、ヘリナ、クロミ
ウグイスカサなど)村の山に高山植物がある
山間部はトモミ、エゾマツ、カンバ、ハナ
イタヤカシ、カシラ、ユウリザクラ、
ナカサデ、ササユリ、8月に紅葉が始まる



(c)2022 Takako Yamashita All Rights Reserved

北前船のゆりかげ 塩蔵
開港した。工業公行門は
鮭を保存する塩蔵を
開発し、島の漁師に教え
ました。お模範塩蔵を使っ
てにのり足りが、マッコウ

①橋本きんづき 店
(中華まんや・おせき)
②山本商店(雑貨屋)
市市村屋(旅館)
回廊店(山本春)
キラク(米や店)
星屋(旅館)

宿泊馬の 馬てい
集い過ぎ、牛馬運送、
手紙の預りの便をはか
るため明治19開始
・モヨロ・オホーツク
・トシリヤ(昭12)・石今

明治25
根室市の開法寺住職
の協賛により、村の有志
川畑、島田、駒村の
賛助で開法寺の末寺に
立てた(明治36)

大正天皇の 奉安殿
ご即位
言ひ事業として新築
中には昭和天皇の
写真が飾られ、一帯に
お習わし、戦後廃止

明治25お寺で寺子屋
明治29公立尋常小学校
明治30新校舎
昭和16国民小学校
(昭和19生徒数48人)
昭和20ロシア人が侵攻
校舎を半分にして使う

イワナ シベトロ川の生き物
アマノイ
ウグイス
トンボ
アヤメ
オホーツク
シベトロ川、長さ27.6m
捉提No.1の長さ

大黒島
男子小学生は
舟に乗り一日300
のカモメの卵をとりつけた
郵便局長・山本藤吉
宅に飼っていた1匹
国産の平伝(冬)
ロシア人が来て
殺されました
明治43
7月15日
お祭り
川畑・島田



VOL. 4

駆てい
 母の家で
 飼っていた
 と多は「ほ」

牛乳
飲んでいた



母の家11
名は「もく」

ほとんどの
家で飼っていた

わなを
かけて
もる

たべる
そして
えりま
に、

漁師さんは漁が
ない冬、炉端を囲み
おしゃべりしながら
 編み物した

[illegible]

北方領土問題関係主要年表

一六三五	寛永12	松前藩・蝦夷島を探検、国後、択捉や北方の島々の地図ができる
一六四四	正保元	幕命により松前藩が自藩領地図を幕府に献上、その中に納沙布岬と知床岬との間に三十九の島々が描かれている
一七〇〇	元禄13	松前藩幕命により千島・樺太を含む蝦夷全図と郷帳をつくる
一七一1	正徳元	ロシア人、千島列島の最北端占守島と幌筵島を襲撃する
一七一五	正徳5	松前藩主が幕府に提出の上申書の中で「北海道本島・千島・カムチャッカ・樺太は松前藩領で自分が統治している」と報告
一七六六	明和3	ロシア人、イワン・チョールヌイ南千島調査、択捉島に初めて渡来する
一七七八	安永7	得撫島のロシア人、イワン・オチエレデン革船で根室ノツカマップに来航、交易を求め断られる、翌年も来航
一七八六	天明6	最上徳内、択捉・得撫島を探検
一七八九	寛政元	アイヌの人達の蜂起（寛政蝦夷の蜂起）があり和人七十一名殺害、松前藩は厚岸・国後の首長らの協力でこれをしずめ、首謀者三十七名を処刑
一七九二	寛政4	アダム・ラクスマン、エカテリーナⅡ世の命により根室に来航し通商を求む
一七九八	寛政10	近藤重蔵・択捉に渡り「大日本恵登呂府」の標柱を建てる
一七九九	寛政11	幕府、東蝦夷を直営・駆通を設け守備兵を置く

一八〇一	亨和元	幕府、得撫島に「天長地久大日本属島」の標柱を建て、ロシア人に退去を命じ択捉島に守備兵を置く
一八〇七	文化4	幕府、西蝦夷地（樺太）を直轄地とする
一八一一	文化8	国後島に來たロシア艦（ディアナ号）艦長ゴローニンを捕らえ松前に拘禁する
一八一二	文化9	高田屋嘉兵衛、国後島海上でロシア艦に捕らえられる
一八一三	文化10	ゴローニン・高田屋嘉兵衛交換釈放
一八一四	文化11	若年寄植村正長から下知状が出され日露の国境を、択捉以南とシムシリ以北とし、その間を緩衝地帯とする
一八二一	文政4	アレクサンドルⅠ世の勅命により、ウルップ島以北は露米会社の独占経営地域と指定する
一八五三	嘉永6	ロシア使節プチャーチン長崎に來航し長崎奉行に国書を提出。樺太と千島の国境を定めたいと幕府に申し入れ
一八五五	安政元	日魯通好条約（下田条約）締結、択捉・ウルップ島間を日露の国境と画定、樺太はこれまでのとおり境界を設けないこととする
一八七五	明治8	樺太・千島交換条約成立、クリル諸島が日本領となる
一九〇五	明治38	日露講和条約（ポーツマス条約）調印・北緯五十度以南の南樺太、日本領となる
一九二五	大正14	日ソ基本条約調印（日露講和条約が完全に効力を存続することを約す）
一九四一	昭和16	日ソ中立条約調印
一九四五	昭和20	8・8 ソ連、対日参戦

一九四六	昭和21	8・14 日本ポツダム宣言受諾 8・15 第二次世界大戦終戦（日本敗戦） 8・18 占守島にソ連軍武力侵入、次いで日本軍の武装を解除しながら南下 8・28～9・5 ソ連軍、歯舞群島・色丹島・国後島・択捉島を軍事占領。一部の居住者根室等へ脱出 9・2 日本ミズーリ号上にて連合国への降伏文書に調印、太平洋戦争終わる 9・19 ソ連、明二十日よりクリル諸島と南樺太の領土宣言 11・1 択捉島、国後島、色丹島、歯舞諸島のソ連不法占領に対し、米軍の占領下において治安回復を図る目的で北海道附属島嶼復帰懇請委員会（仮称）結成の動きが根室町に起こる 12・1 根室町長故安藤石典、北方領土を米軍の保障占領下に置いてほしいと連合国軍事司令官マッカーサ元帥に陳情す（陳情第一号） 2・20 ソ連、樺太南部・千島列島・国後島・択捉島・色丹島・歯舞群島をソ連邦憲法及びロシア共和国憲法通用地域とし土地、所在資源など国有化、自国領に編入を宣言 4・30 第三哨丸、多楽島沖合でソ連軍に拿捕される（昭和二十一年六月十五日帰還）。以後、日を追って多発 7・3 北海道附属島嶼復帰懇請委員会設立（会長：安藤石典根室町長） 8・6 北海道附属島嶼復帰懇請委員会、連合国総司令部マッカーサ元帥に対し、北方領土の日本復帰とソ連軍による拿捕事件の不当占領解除等について陳情 8・12 北方領土復帰懇請のため地元代表五名が上京。外務省、終戦連絡中央事務局、連合軍総司令部などを訪問、陳情【陳情団員＝根室漁業会長・川端元治、歯舞漁業専務理事・田村大造、引揚避難者・小泉秀吉・加藤豊次郎】 1・15 北海道附属島嶼復帰懇請委員会、再び連合国総司令部マッカーサ元帥に対し、「国後地方ウブラウレニヤ法令」布告の新事態と、ソ連軍による拿捕事件の不当及びソ連軍の占領解除を行い、アメリカ軍の占領下に保護を受けたいと陳情 7・11 樺太經由による千島地区最初の引揚者三十八名、白龍丸で函館入港（出典 北海道発行「北方地域総合実態調査書 終戦史 下」）、千島歯舞居住者連盟発行の「元島民が語るわれらの北方四島 ソ連占領編」には国後島留別村三一人と記述） 7・22 北海道議会、「歯舞群島、色丹島及び択捉島並びに国後島の日本領土復帰に関する請願」を決議、マッカーサ元帥に懇請
一九四七	昭和22	

一九四八	昭和23	8・10 北海道附属島嶼復帰懇請根室国民大会開催、決議文をマッカーサー元帥に送付（会場：本町桜橋広場）。住民大会としては最初
一九四九	昭和24	9・15 北海道附属島嶼復帰懇請委員会、北方領土復帰につきマッカーサー元帥に陳情 7・23 千島からの引揚最終便が函館に入港、千島歯舞諸島居住者連盟発行の「元島民が語るわれらの北方四島 ソ連占領編」には幌筈島二十七人と記述） 11・17 北海道附属島嶼復帰懇請委員会の主催により「根室千島国民大会」を開催。 12・10 北海道附属島嶼復帰懇請委員会、根室地方住民及び中央関係機関に文章で千島、歯舞群島復帰懇請運動の経過報告
一九五〇	昭和25	1・20 北海道附属島嶼復帰懇請委員会、「北海道附属島嶼である南千島及び歯舞群島の返還懇請趣意書」「千島列島概況」を発刊 11・7 千島及び歯舞群島復帰懇請同盟結成（事務局：札幌市北海道自治会館内）。北海道内の有志が関係諸団体に呼びかけ「申合団体」として発足。以後、北方領土返還運動の中心団体となり機会あるごとに中央関係機関に対し懇請
一九五一	昭和26	12・12 千島及び歯舞群島復帰懇請同盟が千島及び歯舞群島復帰懇請道民大会を札幌市で開催 12・25 千島及び歯舞群島復帰懇請同盟、PRのためのバッチ、パンフレット作製、全国へ配付 3・20 千島及び歯舞群島復帰懇請同盟と根室町主催の千島及び歯舞群島返還懇請道東地区根室大会を開催 7・23 千島及び歯舞群島復帰懇請同盟が陳情団を編成、北方領土復帰について中央陳情懇請 9・8 サンフランシスコ平和条約を調印、ソ連は調印せず。日本は千島列島の権利、権原請求権を放棄。吉田全権は会議の席上、千島、南樺太は侵略によって取得したものでないこと。歯舞群島、色丹島が北海道の一部であること及び国後島、択捉島が日本古来の領土である事実につき参加国の注意を喚起、南樺太、千島列島に対する領土権を放棄。ソ連邦は北方領土をソ連邦に割譲する規定がないことを理由に調印せず。同日、日米安全保障条約調印
一九五二	昭和27	10・9 全国都道府県議会議長会で「千島列島ならびに歯舞諸島及び色丹島占領解除の懇請」を決議 11・5 全国水産大会「千島歯舞諸島返還懇情」を決議 11・25 全国町村議会議長会で「千島、歯舞諸島の返還」を決議

一九五三	昭和28	7・19 千島及び歯舞群島返還懇請国民大会、東京日比谷公会堂で開催（懇請同盟、北海道議会議長主催） 8・ 根室地方平和推進経済復興同盟、根室町の有力者により結成、北方領土返還までの暫定的な措置として国後島、択捉島、色丹島、歯舞群島の接岸操業を主張
一九五四	昭和29	5・10 道東地方に大暴風雨、出漁中のサケマス漁船三十八隻遭難、犠牲者三百二十三人、再起中の元島民にも深刻な影響 6・ 根室地方平和推進経済復興同盟の富樫会長、ストックホルム平和集会に出席、歯舞群島への接岸操業をソ連側に提案 10・ 川端北海道水産会長の提案により大日本水産会内に北洋漁業対策委員会設置、安全操業問題につき具体案の検討に入る
一九五五	昭和30	2・ 色丹島帰住対策協議会設立（会長小泉秀吉） 3・7 日ソ・日中国交回復促進根室地方住民大会を根室町で開催。 5・10 千島列島居住者連盟設立 9・2 南千島返還懇情同盟設立（会長内野輝雄） 9・11 千島歯舞諸島居住者連盟発足 9・21 フルシチョフ・ソ連共産党第一書記訪ソ国会議員団と会見し、歯舞、色丹島を一定の条件のもとに返す旨言明
一九五六	昭和31	5・27 日ソ国交回復促進根室地方住民大会開催（一応歯舞諸島・色丹島の返還を条件として、速やかに日ソ国交回復の交渉を進め根室地方住民の生命線である千島及び歯舞諸島付近海域での安全操業の確立を地域住民の総意として決議、政府に訴える） 10・19 鳩山首相訪ソ、日ソ共同宣言調印 第九項に、「日ソ平和条約締結後に歯舞群島、色丹島を返す」と明記
一九五七	昭和32	2・1 日ソ平和条約締結近海漁業協定締結促進根室地方漁民大会、開催 5・23 米国務省、昭和二十九年十一月七日の米機撃墜事件に関する対ソ抗議覚書で歯舞、色丹、南千島は日本領であると声明。「サンフランシスコ条約、ヤルタ協定等における千島列島には四島は含まれないし、また含むようにも意図されなかった」と言明

一九五八	昭和33	3・12 根室市議会「北方領土返還及び安全操業実現」を決議 7・7 日ソ平和条約締結促進根室地方近海漁業協定締結促進期成会設立 7・23 千島齒舞諸島居住者連盟内閣総理大臣認可の社団法人となる 12・10 日ソ友好親善を深める目的で日ソ協会根室支部設立（事務局根室市役所内、当初会員七十名、四年後に三三〇名に達する）
一九五九	昭和34	3・20 南方同胞援護会、法の一部が改正され、附則において、北方地域に関しても援護を行うこととなる 10・ 大日本水産会、引揚者及び捕漁業者に対する国の補償を要求 10・2 根室市関係分の内政補償のうち行政補償額算出、北海道水産会経由で政府に要求
一九六〇	昭和35	6・29 ソ連政府、日米新安保条約の批准を非難、日ソ両国関係の発展への道を開くためには同条約を破棄することが必要と声明 10・1 昭和三十三年七月一日設立の「日ソ平和条約締結根室地方近海漁業協定締結促進期成会」を「北方領土対策協議会」に改組
一九六一	昭和36	8・16 ミコヤン副首相、池田首相にフルシチョフ・ソ連首相の親書を手交、この中で日米安保体制を非難 8・26 池田首相、フルシチョフ親書に返書・北方領土返還が日ソ平和条約への道であると主張 9・29 フルシチョフ・ソ連首相、池田首相に返書、この中で北方領土問題はすでに解決済みであると声明 10・30 北方地域旧漁業権者等に対する特別措置に関する法律成立。政府、北方地域元居住者等の援護措置として国債十億円を北方協会に交付 11・15 池田首相、フルシチョフ・ソ連首相に返書、日ソ間の領土問題は未解決である、日本はヤルタ協定に拘束されぬ国後、択捉両島については日本はなんらの権利をも放棄しないと反論 12・13 米・日ソ間の北方領土問題について、日本の立場は正当であると声明 12・15 元島民の生活安定をはかる目的で北方協会設立、政府から十億円の融資
一九六二	昭和37	5・7 大日本水産会高崎会長、貝殻島周辺コンブ漁の安全操業につきソ連邦フルシチョフ首相、イシコフ漁業相に申し入れ 10・31 第二貝殻島建設状況視察のため町村金五北海道知事、来根。齒舞漁港で第二貝殻島建設コンブ礁の投入状況を視察

一九六三	昭和38	1・14 日ソ協会根室支部「北方墓参実現署名運動」始める 3・28 千島及び歯舞群島返還懇請同盟、北方領土復帰期成同盟と改称（昭和四十年四月二十八日外務大臣認可の社団法人となる） 6・10 モスクワで待望の貝殻島周辺コンブ漁の民間協定締結
一九六四	昭和39	9・8 北方墓参実現（九月十一日までの四日間、水晶島と色丹島の四墓地）以後継続して実施される 11・14 千島会館落成
一九六五	昭和40	2・1 佐藤首相、コスイギン・ソ連首相に対し北方領土問題の解決、国後・択捉島両島への墓参実現など要請した返書送る 4・1 横田根室市長、北方領土問題、安全操業問題の解決を市政の最重点事項として市の機構を改革、企画課内に領土対策係を新設 4・27 日ソ協会分裂、根室支部は脱退、新たに根室地方独自の日ソ友好団体として「根室日ソ友好親善協会」発足 8・1 北方領土返還運動月間実施（八月中）、以降毎年八月実施 12・10 北方資料館落成
一九六六	昭和41	2・3 北海道各地で北方領土返還百万人署名運動はじまる（千島連盟主体） 2・22 初の北方領土資料展、札幌市で開く（二月二十七日まで）以後全国各地で開催される 7・5 第十四回道東婦人大会で「北方領土返還、安全操業実現」を決議 8・5 根室市、根室日ソ友好親善協会、色丹島に居住するソ連官憲に野菜、果物を贈呈 8・22 北海道青年団体協議会、第十七回全道青年大会で「北方領土返還ならびに安全操業促進」を決議 8・25 北方領土日本返還促進決議を全国の都道府県、市町村議会へ呼びかける（根室市） 10・5 日本青年団体協議会、北方領土対策特別委員会を設置し北方領土を視察
一九六七	昭和42	2・21 「沖縄問題等に関する特別委員会」衆・参両院に設置される 7・22 三木外相、コスイギン首相会議で、「日ソ平和条約問題で、中間的なものをつくってみてはどうか」とコスイギン首相提案 8・29 参議院沖縄問題等に関する特別委員会一行、北方領土問題視察のため来根

9・6 衆議院沖縄問題等に関する特別委員会一行、北方領土問題視察のため来根
 11・1～10 北方領土早期返還促進キャラバン隊、道内四十七市町村に派遣（隊員二十名、車八台）以後継続実施される

1・16～2・1 バイコフ・ソ連副首相来日、十七日佐藤首相と会談「北方領土について双方で受諾可能な解決策を見いだしたい」との佐藤首相の申し入れに対し、領土問題にふれず。また、十九日三木外相と会談、北方領土問題に関する早期解決を強調した三木外相に対し、「戦時中及び戦後の一連の国際的諸条約によつてすでに領土問題は解決済みと考えている」と主張

3・8 北方領土問題青年会議発足する

3・18 衆議院沖縄及び北方領土問題に関する特別委員会設置

3・31 参議院沖縄及び北方領土問題に関する特別委員会を設置、北海道議会、北方領土対策特別委員会設置

4・3 北海道労働総同盟主催による北方領土問題調査団一行来根する

4・15 北方領土返還全道学生実行委員会結成される

5・13 北海道議会北方領土対策特別委員会一行来根する

5・27 ノサップ岬に北方領土返還PRガイドを置く（根室市）

6・5 全国漁婦連大会北方領土返還を決議

6・14 北海道開発庁長官北方領土現地視察のため来根する

9・20 北方領土問題対策促進北海道協議会発足する

9・26 衆議院、沖縄及び北方領土問題に関する特別委員会一行来根する

11・1 千島会館増築落成（延面積八三四・八七㎡）

11・5 閣議決定による北方問題各省連絡会議設置

12・10 北方地域元居住者に関する調査実施（北方協会）

2・6 厚岸水産高校が文部大臣へ「教科書に北方領土を明記するよう手紙をだした」

2・7 北方領土返還運動渡島支庁地域推進委員会発足、十四支庁につきつぎ設置

2・8 多楽島引揚者により「多楽島壮青年連絡協議会」が設立される

2・10 北方領土引揚者により「専用漁業権補償獲得推進委員会」が設立される

3・5 色丹島・国後島への転籍届を元島民が根室市役所に願ひ出た

- 3・14 北方領土問題各省連絡会議で国土地理院の地図に択捉島以南を入れる方針決定
- 3・18 特殊法人「北方領土問題対策協会」設置法案を閣議決定
- 4・7 北教組、新年度の運動方針として北方領土問題を授業に取り入れることを定期年次大会に提案
- 5・7 参議院沖縄北方問題特別委員会に根室市長参考人として出席、北方問題陳述
- 5・22 「北方領土問題対策協会法」公布（法律第三十四号）
- 8・5 北方領土復帰期成同盟など全国の協力団体とともに北方領土視察及びキャラバン実施
- 8・30 総理府、四十五年度予算要求にあたり沖縄・北方対策庁新設を発表
- 9・11 北方領土対策協議会を改組、「北方海域安全操業推進対策協議会」とする（安全操業実現と内政措置の実現を主たる事業とする）
- 10・1 待望の「北方領土問題対策協会」設立される（初代会長鈴木九平）
- 10・2～17 北方領土返還促進キャラバン隊本州各地（一都十二県十二市）へ派遣する（本州派遣は初回）
- 2・13 北方領土問題をテーマに「道東六市長提携会議」開催、政府に陳情する
- 4・10 北方領土返還を米国務省、国連等に訴えるため、北方領土復帰期成同盟会長松本俊一氏、道領対本部長松崎了介氏ら民間使節団一行四名渡米
- 5・1 沖縄・北方対策庁発足（北方課設置される）
- 5・7 衆議院「沖縄及び北方領土問題等に関する特別委員会（池田清志委員長）」は根室市長など北方問題関係者の出席を求め（参考人四名から）意見を聴取する
- 8・9 全日本労働総同盟より寄贈の北方領土返還の悲願を託した「希望の灯」完成（市役所前）
- 8・9～10 全国労働総同盟による北方領土返還要求同盟全国集会、根室市内及びノサップ岬で行われる
- 8・14 根室市、北方領土返還運動推進の一環としてPR冊子「日本の領土、北方領土」、元島民の体験を収録した「北方領土終戦前後の記録」を発刊
- 10・21 国連総会で佐藤首相は北方領土問題について「できるだけ早い機会に日ソ間で最終的解決を図り日ソ平和条約を締結したい」と演説した
- 11・4～18 北海道主催による「北方領土返還促進キャラバン隊」本州及び九州各地（一府・十二県・十五市）へ派遣する。以後継続実施される
- 11・14～16 「北方領土展」福岡市にて開催（以後全国各地で開催される）

一九七一	昭和46	1・1 第一回北方領土返還促進根室青年総決起大会（根室市内二十四団体）ノサップ岬において開催する 3・20 北方領土居住者壮青年連合会設立（構成員は全員引揚者） 8・11～21 地元豆記者（沖縄豆記者と合流）一行中央へ派遣、総理大臣、外務大臣、文部大臣、総務長官、国鉄総裁などと懇談する 9・25 「北方領土返還運動根室地域推進委員会」を解散、新たに「北方領土復帰期成同盟根室地方支部」を設置する（支部長根室市長横田俊夫）
一九七二	昭和47	1・7 訪米中の佐藤首相、近く訪ソするニクソン米大統領に対し、北方領土問題解決を依頼する 1・21 中国周恩来首相三訪中団（社会党議員、総評、中立労連）に対し日本国民の北方領土返還要求を強く支持することを表明する 2・11 第一回北方領土返還促進のつどい東京において開催する 2・20 待望の「望郷の家」竣工 4・1 北方領土復帰期成同盟根室地方支部の事務所開設（北方資料館内） 4・16 「望郷の家」開館（中央関係者を招き開館式及び落成式を行う） 5・15 「沖縄」日本復帰実現。沖縄の返還に伴い政府部内機構として、北方問題を担当してきた、沖縄・北方対策庁が、沖縄開発庁になり新たに北方対策本部が設置された 10・21～24 大平外相訪ソ、第一回日ソ平和条約締結交渉
一九七三	昭和48	10・7～10 田中首相訪ソ三日間にわたる日ソ首脳会談を終え十日夜日ソ共同声明が発表された 11・12 日ソ共同声明に対処する北方海域安全操業推進対策協議会を根室市役所大会議室で開く
一九七四	昭和49	8・12 北対協主催の北方少年交流会が東京で開催され根室管内の少年八名が総理大臣、総理府総務長官、外務大臣、文部大臣に北方領土の現況を訴える（以後継続実施されている） 9・29 横田根室市長の辞任により前助役寺嶋伊弉雄氏が北方領土返還運動の促進を主要公約に新市長として誕生 12・7～9 第一回ソビエト友好展を根室市公民館で開催
一九七五	昭和50	1・15～17 宮沢外相訪ソ。日ソ平和条約交渉、「日ソ共同声明」を発表 2・13 プレジネフ書記長、三木首相あて親書で「日ソ善隣協力条約」締結を提案、三木首相拒否

一九七六	昭和51	10・9 北方四島周辺で逮捕・抑留された漁船に対する「特別給付金」が閣議決定で補正予算案に計上 1・24 「北方領土問題」に関する懇談会」初会合。参加五十四団体 7・8 根室市北方領土返還要求推進協議会設立総会（会長箭浪光雄） 9・11 宮沢喜一外務大臣が北方領土を視察（外務大臣として初） 12・10 ソ連邦沿岸二百カイリ漁業専管水域実施を宣言
一九七七	昭和52	4・15 日ソ漁業交渉に伴う中央陳情団上京。漁業権益の絶対確保及び二百カイリ水域問題と領土問題との関連を要望 5・2 北洋漁業危機突破住民総決起大会を根室市で開催 6・1～2 全国都道府県北方領土主管課長会議開催（根室市）
一九七八	昭和53	8・19 納沙布岬の「望郷の岬公園」命名式。稲村左近四郎総理府総務長官出席 10・24 アメリカジャーナリスト協会一行、来根。北方領土視察
一九七九	昭和54	6・17 島民のつどい開催 9・26 色丹島にソ連地上軍が配置されているとの報道に寺嶋市長、萬屋市議会議長名で大平総理大臣、園田外務大臣らにソ連軍の撤退を求める要請文を打電
一九八〇	昭和55	7・25 北方館竣工 8・1 北方館オープン
一九八一	昭和56	2・7 初の北方領土の日 6・3 自民、新自、社民連は「北方領土三島を根室管内一市四町へ編入する地方自治法の特例法案」を国会に提出。ソ連国営タス通信は「不法な領土要求をめぐる反ソ・ヒステリーをおおるバカげた法案」と強く非難 6・5 「北方三島編入法案」継続審議に決定 8・20 自治省は「全国市町村要覧」五十六年版に北方三島（択捉、国後、色丹）の六村の名称と面積を一般市町村とは別扱いで記載することを決める

一九八二	昭和57	8・20 北方領土問題等の解決の促進のための特別措置に関する法律成立 8・22 国際親善ノサップ岬健康マラソン大会開催（北方同盟、北海道、根室市ほか主催）（以後継続実施される）
一九八三	昭和58	2・7 「北方領土の日」根室管内少年弁論大会開催、根室市以後継続実施される 2・7 「北方領土の日」昭和五十八年北方領土返還要求全国大会開催、東京（以後継続実施される）
一九八四	昭和59	8・5 北方領土返還要求根室市民大会開催（ときわ台公園） 10・25 第一回北方領土学習研究大会を別海町野付小学校で開催（以後継続実施される）
一九八五	昭和60	7・27～28 北方領土返還祈願望郷サイクリング実施（羅臼ノサップ間） 10・8 都道府県民会議代表者会議開催、北方領土視察
一九八六	昭和61	1・15 シュワルナゼ外相、ソ連外相として十年ぶりに来日。八年ぶりの第六回日ソ外相定期協議で、領土問題を含む平和条約交渉をうたった共同声明を発表 8・21～24 北方地域墓参実施・十一年ぶり九回目（色丹島・水晶島）
一九八九	平成元	北海道新聞社（四月）、朝日新聞社（九月）ソ連のビザを取り国後島などを取材 9・19 北方領土に日本人がソ連の出入国手続きに従って入ることのないよう求めた国民への要請を閣議了解 9・19～20 ソ連は、日本政府の北方領土入り自粛呼びかけに「日本がソ連領に自ら立入禁止区域を作るのは奇妙なことである」と非難し、北方領土に近接する海域に危険水域を設定し射撃訓練実施を計画 10・26 「第一回北方領土フォーラム」開催（以後継続実施している）
一九九〇	平成2	3・26～28 北方領土、四島の開発プラン（全国の小中学生から絵画三十二点 作文二三〇点 計二六二点応募）特選者北方領土視察に招待

一九九二	平成3	6・4 大矢快治根室市長、「ロシア連邦共和国訪問北海道代表团」の一員として訪ソ 12・1 千島会館、新築落成 4・16～19 ゴルバチョフ大統領、ソ連最高首脳として史上初めて来日、日ソ首脳会談に臨む、十八日「日ソ共同声明」を发表 8・17 サハリン州の小中学生及び引率者（計六十七人）花咲港に入港（四島在住者も含まれる） 10・14 モスクワでの中山・パンキン外相会談でビザなし渡航合意
一九九二	平成4	4・1 根室市役所に国際交流課新設 4・22～27 ロシア側ビザなし渡航第一陣花咲港に入港（四島在住ロシア人十九名、客船マリナー・ツペターエワ号） 5・11～17 日本側ビザなし渡航実施（国後・色丹・択捉島、元島民、返還運動関係者等、四十五名、客船コーラル・ホワイト号） 8・19 北方領土問題教育指導者研修会（第一回）開催（以後継続実施される）
一九九三	平成5	2・7 北方領土の日啓発無線交信事業開催 10・11 エリツイン大統領が新生ロシア首脳として初めて日本を公式に訪問 10・12 「東京宣言」、「経済宣言」に日ロ首脳が調印。北方領土問題については交渉対象として四島の名前が明記された 10・29 北方領土内の土地の登記変更について釧路法務局根室支局が元島民の申請を却下、これに対して元島民は審査請求を申し立てた
一九九四	平成6	1・26～27 北千島・セベロクリリスク市の代表団来根、根室市との姉妹都市提携に調印 3・8 歯舞群島・水晶島で国境警備隊の兵士二名が自動小銃を乱射、六名が死亡、七名が負傷 9・24 第一回青少年洋上学習会開催（北方領土居住者壮青年連合会主催 五十七名参加） 10・4 根室東方沖でマグニチュード八・一の地震が発生、釧路、根室地方はもとより北方四島も甚大なる被害を受ける。（北海道東方沖地震） 10・6 北方領土返還要求運動連絡協議会（北連協）が北海道東方沖地震で被災した北方四島在住ロシア人を救済するため「北方領土島民救済委員会」を設置

一九九五	平成7	10・15～17 政府、北海道、民間団体による北方領土への人道支援訪問団が根室港を出港（第一次人道支援「国後・色丹島」客船コールホワイト号） 3・10 ロシア国境警備隊による密漁取り締まり作戦「群来九十五」が始まる 3・13 北方領土周辺ロシア主張領海での操業問題を話し合う第一回政府間交渉がモスクワのロシア外務省で開催 4・4 国後の水産加工場建設に韓国企業が参加することが明らかに、外務省は韓国・ロシアに計画中止を要請 5月～10月 北方四島交流訪問事業（八回実施・三七一名訪問） ※平成七年度より国会議員が訪問団顧問として参加（各回二名ずつ） 9・10 北方四島物故者追悼五十年祭開催（根室市総合文化会館 千島連盟根室支部主催） 10・5 平成六年十月の北海道東方沖地震による人道援助の一環として色丹島に建設中の仮設診療所が完成 10・27 ドイツのプラント企業が国後島の水産加工場建設工事を落札した問題で、ドイツ政府が「民間企画に北方領土への進出を断念させることはできない」と外務省に意向表明していたことが明らかに
一九九六	平成8	3・25 根室市が元島民の手記による北方領土五十年史「四島を追われて」を発刊 6・21 「北方地域旧漁業者等に対する特別措置に関する法律の一部を改正する法律案」が通常国会で可決され、これにより元島民と旧漁業権者に限られていた北対協資金の融資資格が、一定の要件を満たして生前継承の手続きをとることによって、子供や孫にも適用されるようになる（十月一日施行） 8・20 日本の人道支援の一環として色丹島アナマ建設中の小学校が完成 11・15 プリマコフ・ロシア外相が日ロ外相定期協議の席上、北方領土の共同開発案を公式に提案、また、ビザなし交流の拡充、日本漁船の安全操業を目指す「操業枠組み交渉」の促進について両国で合意がみられる
一九九七	平成9	3・6 エリツィン・ロシア大統領が年次教書を発表し、北方領土の日ロ共同開発を含むあらゆる面で日本との協力を進める用意があることを表明 3・25 歯舞群島・水晶島にある所有地の登記内容変更を法務局に却下された根室市の元島民・舩潟喜一郎が却下取り消しを求めた「北方領土登記変更訴訟（舩潟訴訟）」の判決で、釧路地裁は「北方領土内の土地は登記の対象であり、登記官が現地調査できなくても権利変動の登記を受け付けることができる」として、法務局側に却下取消しを命じる（法務局側はこの判決を不服として四月七日に札幌高裁に控訴。平成十一・一・二十六 最高裁判決「原処分妥当」）

- 3・ 根室市と(特) 北方領土問題対策協会が北海道附属島嶼復帰懇請委員会の資料をまとめた「択捉・国後・色丹・歯舞群島返還運動史 四島を返せ」を発刊
- 4・24 ロシア政府が日本政府に対し、「在沖縄米軍実弾砲撃訓練の矢臼別演習場への移転が決定した場合、北方領土駐留ロシア軍の撤退を一時的に停止せざるを得ない」と通告
- 6・7 サハリン州の標準時間が一時間繰り下がり、ハバロフスク地方などと同じ時間帯となる(今後日本とサハリン州の時差は夏二時間、冬一時間となる)
- 7・26 第一回北方領土問題青少年現地研修・交流会開催(北方領土問題対策協会主催)
- 9・5 根室・サハリン国際文化シンポジウム開催、ロシア側から樺太旧日露国境標識の贈呈を受ける
- 9・30 丹波実外務省審議官が第六回ビザなし訪問団に同行、外務省高官の北方領土訪問は初めて
- 11・1～2 ロシアのクラスノヤルスクで日ロ非公式首脳会談が行われ、「一九九三年の東京宣言に基づき、二〇〇〇年までに平和条約を締結するよう全力を尽す」ことで合意
- 11・13 日ロ定期外相会談で、小渕・プリマコフ両外相が日ロ平和条約締結に向け両外相を加えた交渉グループをあらたに設置することで合意
- 12・15 北方四島人道支援の一環として建造中の自航式はしけ「希望丸」(八〇トン)が完成(引渡式は二月二日)
- 1・22 平成九年十一月クラスノヤルスク合意を受けた初の日ロ外務次官級協議がモスクワで開催、両国外相を委員長とする「平和条約締結問題日ロ合同委員会」を設置することで合意、また、ロシア側は北方四島の共同経済活動を提案
- 2・7 北方領土問題対策協会(北対協)及び根室市、北方領土啓発ホームページを開設
- 4・1 根室市、機構改革で北方領土対策室を新設
- 4・17 政府、北方領土へのビザなし渡航者を制限していた一九九一年十月の閣議了解を変更し、従来の渡航対象者に加え「学術・文化・社会等各分野の専門家」も対象とすることを決定
- 4・18～19 静岡県・川奈で日ロ非公式首脳会談開催。日ロ平和条約について「東京宣言に基づき、北方四島の帰属問題の解決を内容とし、二十一世紀に向けての日ロ友好協力の原則を盛り込んだものとなるべき」との考えで一致
- 6・23 政府人道支援による国後島・古釜布栈橋改修の目録贈呈のため、鈴木北海道開発庁長官が現職閣僚として国後・択捉島を訪問
- 7・27 「北方領土登記訴訟」の原告の舩潟喜一郎氏が四月に死去したことに伴い、原告弁護団が長男の訴訟継承を札幌高裁に申し立てる

一九九九	平成11	5・26 藤原弘根室市長「ビザなし交流訪問団団長」としてビザなし交流に初参加 9・11 九十八年の日ロ首脳会談で合意された、北方四島への元島民、家族による初の「北方領土自由訪問」第一陣が志発島へ出発 10・24 国後島・古釜布に緊急避難所兼宿泊施設「日本人とロシア人の友好の家」が完成。現地で完成式典が行われる
二〇〇〇	平成12	2・7 「道立北方四島交流センター」がオープン 8・24 羽田民主党幹事長がビザなし交流に参加（首相経験者として初めて） 9・3 プーチン・ロシア大統領が来日。日ロ首脳会談が開かれる。領土問題解決による日ロ平和条約の締結について交渉継続とした共同声明を発表 9・14 続訓弘総務庁長官がビザなし交流に参加する 10・1 「北方四島返還要求国民集会 in NEMURO」が納沙布岬の望郷の岬公園で行われる
二〇〇一	平成13	3・25 ロシアのイルクーツクで日ロ首脳会談が行われ「五十六年の日ソ共同宣言が平和条約交渉の出発点を設定した基本的な法的文書であることを確認し、その上で、九十三年の東京宣言に基づき四島の帰属の問題を解決することにより平和条約を締結すべきことを再確認し、あり得べき最も早い時点で平和条約締結へ向けた前進の具体的な方向性を決定する」ことで一致した 4・7 森喜朗首相北方領土を空陸から視察（首相として二人目の視察） 8・1 尾身幸次沖縄及び北方対策担当大臣が北方領土を視察
二〇〇二	平成14	5・25 尾身幸次沖縄及び北方対策担当大臣がビザなし交流（国後島）に参加 8・18 第二十一回ノサップ岬マラソン大会が初の陸連公認大会として開催 8・23 川口順子外務大臣が北方領土を視察

二〇〇三	平成15	12・26 細田博之沖縄及び北方対策担当大臣が北方領土を視察 1・10 モスクワで日ロ首脳会談が行われ、小泉首相とプーチン大統領の間で両国関係をあらゆる分野にわたって発展させていく上での共通の指針を示す「日露行動計画」について合意 8・23 高橋はるみ北海道知事が北方領土を視察 9・3 北方四島人道支援事業により初めて市立根室病院が択捉島患者二名を受け入れる 11・22 千島連盟根室管内青年部連絡協議会が設立される 12・15 茂木敏充沖縄及び北方対策担当大臣が北方領土を視察
二〇〇四	平成16	2・24 「舛渇訴訟」の上告を最高裁が棄却。「北方領土は登記の対象にならない」として舛渇側の敗訴が確定。ロシア支配下にある北方領土に日本の行政権が及ぶかどうかについては判断せず 9・2 小泉純一郎首相北方領土を洋上から視察（首相として三人目の視察） 9・23 民間団体としては初めて連合が主体のビザなし訪問が行われる 11・7 小池百合子沖縄及び北方対策担当大臣が北方領土を空陸から視察 11・14～15 ラヴロフ外相は、ロシアのテレビ番組においてロシアはソ連の継承国であり、ソ連の義務の中には一九五六年日ソ共同宣言が存在すると表明。プーチン大統領は翌日の閣議でラヴロフ外相の発言を支持する
二〇〇五	平成17	5・22 七条明内閣府副大臣が北方領土を視察 5・30 高橋はるみ北海道知事がビザなし交流に参加（国後島、択捉島を訪問する） 7・7 小池百合子沖縄及び北方対策担当大臣がビザなし交流に参加（国後島、択捉島を訪問する） 11・21 プーチンロシア大統領が来日。日ロ首脳会談が開かれたが、北方領土問題の具体的進展はなく共同声明作成も見送られた 12・2 根室市内の関係十七団体による「北方領土返還要求運動再構築懇談会」が開催される
二〇〇六	平成18	2・22 北方領土隣接地域振興対策根室管内市・町連絡協議会（北隣協）として「再構築提言書」をとりまとめる 3・6～7 国、道、及び関係団体へ再構築要望 8・16 北方領土歯舞群島の貝殻島付近で、根室湾中部漁業協同組合所属のかにかご漁船「第三十一吉進丸」が、ロシア国境警備隊により銃撃・逮捕され、乗組員四名のうち一名が死亡 8・30 銃撃・逮捕事件で拘束されている船長及び甲板員二名のうち、甲板員二名が無事解放され帰還する

二〇〇七	平成19	9・29 藤原根室市長の辞任により、前助役長谷川俊輔氏が北方領土問題解決の促進を主要公約に新市長として誕生 10・3 銃撃・逮捕事件で拘束されていた船長が、賠償金の支払いと船を没収されるロシア側の判決を受け解放、無事帰還する 10・12 北方四島住民支援事業の新規事業として、四島交流にて来訪する四島住民（七十五名）に対し、市立根室病院で健康診断を実施 12・16 高市早苗沖縄及び北方対策担当大臣が北方領土を視察 2・6 東京都新宿において「中央アピール行動」として、初めての街頭行進が実施される 9・5 岸田文雄沖縄及び北方対策担当大臣が北方領土を視察 10・12 緊急人道支援として、国後島より重度の火傷患者（二歳）を市立根室病院が受け入れる 11・5 中川義雄内閣府副大臣が北方領土を視察
二〇〇八	平成20	4・26 福田康夫首相が訪ロ。日ロ首脳会談が開かれ、高次元の関係を確認する 5・7 ロシア新大統領にメドヴェージェフ氏就任 プーチン氏を首相に指名 6・27 北方四島のロシア人医師（ビザなし交流専門家枠での医療研修）を根室市が受け入れる 7・7 北海道洞爺湖においてサミットが開催。翌日、日ロ首脳会談が行われ、領土交渉を前進させることで一致した 8・18 林幹雄沖縄及び北方対策担当大臣が北方領土を視察 11・22 佐藤勉沖縄及び北方対策担当大臣が北方領土を視察
二〇〇九	平成21	2・18 麻生太郎首相がサハリンを訪問。メドヴェージェフ大統領との日ロ首脳会談で「新たな独創的で型にはまらないアプローチ」の下で作業を行うことで一致 5・12 プーチン首相が来日。麻生太郎首相との会談で、これまでの日ロ間の合意に基づき「双方が受け入れ可能な方策を模索する作業を加速する」ことが確認された 7・3 参議院本会議で北特法の改正案が全会一致で可決成立。「北方領土が我が国固有の領土」であることが明記される 7・9 イタリヤで開かれたラクイラG8サミットに際し行われた鳩山由紀夫首相とメドヴェージェフ大統領による日ロ首脳会談で「北方領土問題で解決策を見出すよう作業の加速・強化させることや首脳レベルでも話し合うこと」で一致

- 8・20 中曽根弘文外務大臣が北方領土を視察
- 10・17 前原誠司沖縄及び北方対策担当大臣が北方領土を視察
- 11・15 シンガポールで行われたAPECでの鳩山由紀夫首相とメドヴェージェフ大統領との日ロ首脳会談で「首脳間で緊密に協議を行っていくこと、また、両外務大臣間でできるだけ早期に協議させていくこと」で一致

3・7 岡田克也外務大臣が北方領土を視察

6・27 カナダでの菅直人首相とメドヴェージェフ大統領との日ロ首脳会談で「首脳レベルをはじめ、高いレベルでのコンタクトを通じ、前進を図っていく必要がある」との認識で一致

10・4 馬淵澄夫沖縄及び北方対策担当大臣が北方領土を視察

11・1 メドヴェージェフ大統領がロシア（旧ソ連を含む）の国家元首として初めて北方領土の国後島を訪問

メドヴェージェフ大統領の国後島訪問に対し強く抗議するため、納沙布岬で「北方領土返還原点の声緊急集会」を実施

11・7 末松義規内閣府副大臣が北方領土を視察

11・13 横浜で行われたAPECでの菅直人首相とメドヴェージェフ大統領との日ロ首脳会談で「領土問題の解決を含め、あらゆる分野での関係を強化すること」で一致。また、菅首相から、大統領が国後島訪問したことに対し、抗議した

12・4 前原誠司外務大臣が北方領土を視察

2・19～20 枝野幸男沖縄及び北方対策担当大臣が北方領土を視察

5・27 フランスで開かれたドーヴィルG8サミットに際し、菅直人首相とメドヴェージェフ大統領による日ロ首脳会談で静かな環境の下で領土問題についての協議を継続していくことで一致

8・3 長谷川俊輔根室市長が衆議院沖縄及び北方問題に関する特別委員会で参考人として意見陳述を行う

10・13 石田勝之内閣府副大臣が北方領土を視察

11・3 川端達夫沖縄及び北方対策担当大臣が北方領土を視察

11・13 ホノルルで行われたAPECでの野田佳彦首相とメドヴェージェフ大統領との日ロ首脳会談で領土問題解決の必要性を再確認し、お互いに相手を尊敬しつつ議論を続けていくことで一致

- 1・14 玄葉光一郎外務大臣が北方領土を視察
- 4・20 平成二十四年度から北方四島交流事業に使用される新船舶「えとぴりか」が、根室港で初めてお披露目される

5・7 ロシア新大統領にプーチン前首相が四年ぶりに就任。メドヴェージェフ前大統領を首相に任命
 6・18 メキシコで行われたG20ロスカボス・サミットの会場で、野田首相とプーチン大統領による日露首脳会談が行われ、領土問題に関する交渉を再活性化することで一致
 7・3 ロシアのメドヴェージェフ首相が、大統領在任中の二〇一〇年十一月に続いて二度目となる国後島を訪問
 8・3～6 高橋はるみ北海道知事が色丹島を訪問する
 9・8 APEC首脳会議に出席するために訪ロ中の野田佳彦首相とプーチン大統領による日露首脳会談が行われ、静かな環境の下で領土問題の議論を続けていくことで一致
 11・4 樽床伸二沖縄及び北方対策担当大臣が北方領土を視察
 12・1 東京都中央区銀座において実施された七回目の「中央アピール行動」に、高橋はるみ北海道知事が初参加
 12・28 安倍晋三首相とプーチン大統領による日露首脳電話会談において、北方領土問題の解決を目指して、平和条約締結の作業を活性化することで一致

1・16 山本一太沖縄及び北方対策担当大臣が北方領土を視察
 4・29 モスクワで日露首脳会談が行われ、安倍首相とプーチン大統領との間で「平和条約締結に向けた交渉を加速させる」ことで一致
 6・17 ロックアーンで行われたG8首脳会合に際し、安倍首相とプーチン大統領による日露首脳会談で、「先般の合意に基づき、双方受入可能な解決策を見出すべく、次官級協議を進める」ことで一致
 8・19 モスクワにおいて杉山外務審議官とモルグロフ外務次官の日ロ次官級協議実施
 9・5 サンクトペテルブルクで行われたG20首脳会合に際し、安倍首相とプーチン大統領による日露首脳会談で「次官旧協議を今後も進め、友好的で、静かで、落ち着いた雰囲気での協議を進展させる」ことを確認
 9・19～23 山本一太沖縄及び北方対策担当大臣がビザなし交流に参加（国後島、択捉島を訪問する）
 10・7 バリで行われたAPEC首脳会議に際し、安倍首相とプーチン大統領による日露首脳会談で十一月に日本で開催する「2+2」協議について確認
 11・2 東京において初めてとなる日露外務・防衛閣僚会議（2+2）が開催され、日露間の安全保障防衛分野での協力等について協議

11・9 後藤田内閣府副大臣が北方領土視察
 12・4 長谷川俊輔根室市長が衆議院沖縄及び北方領土問題に関する特別委員会では参考人として意見陳述を行う

2・8 ソチオリンピックにあわせて安倍総理が訪露、日露首脳会談が行われる

3・17 ウクライナ東部のクリミア自治共和国でロシア編入の是非について国民投票を実施、結果は96%以上の住民が賛成

3・21 ロシア上院がクリミア自治共和国のロシア編入を決定。日本を含むG7がこれを承認せず、経済的制裁を決定

7・17 ウクライナ上空でマレーシア航空が撃墜され二九八人死亡。欧米諸国及び日本はロシア側の対応に非があるとして追加経済制裁を決定

10・17 ASEM首脳会談（イタリア・ミラノ）にて安倍首相とプーチン大統領による日露首脳会談が行われる

10・18 山口俊一北方対策担当大臣が北方領土視察

11・9 APEC首脳会談（中国・北京）にて、安倍首相とプーチン大統領による日露首脳会談が行われ、平成二十五年四月の共同宣言に基づいた交渉を継続することを確認

9・28 ニューヨークで行われた国連総会に際し、安倍首相とプーチン大統領による日露首脳会談で領土問題について双方に受入可能な解決策を作成するための交渉の前進を図ることを確認

11・13 島尻安伊子北方対策担当大臣が北方領土を視察

11・15 トルコ・アンタルヤで行われたG20首脳会合に際し、安倍首相とプーチン大統領による日露首脳会談で引き続き首脳レベルでの対話を続けていくことを確認

2・15 日露外務省ハイレベル協議にて、今後適切な時期に安倍首相の訪露やプーチン大統領の訪日を実現するための準備の一環として、幅広く議論を行った

4・10 島尻安伊子北方対策担当大臣が北方領土現地視察

4・15 総理の非公式訪露に向けて具体的な日程も含め、様々な調整と準備を精力的に進めていくことで一致

5・6 安倍首相のロシア・ソチ非公式訪問の日露首脳会談が行われ、領土問題については、これまでの交渉の停滞を打破し、突破口を開くため、今までの発想にとらわれない「新しいアプローチ」で交渉を精力的に進めていくことを確認するとともに、六月中に平和条約交渉を東京で実施することによって一致

9・2 第二回東方経済フォーラムの際の日露首脳会談にて、十一月に開催されるペルーAPECにおいて日露首脳会談を行うことで一致。また、プーチン大統領の訪日で一致し、十二月十五日に山口県長門市で首脳会談を行うことで合意

- 9・17 鶴保庸介北方対策担当大臣が北方領土現地視察
- 11・15 貿易経済に関する日露政府間委員会第十二回会合にて、日露双方は、大統領訪日時に成果を得るべく、八項目の協力プランの具体化を含む、経済分野での成果の調整を加速することで一致
- 11・19 ペルーAPECの日露首脳会談にて、プーチン大統領から、安倍首相が提案した「八項目の協力プラン」は日露関係を前進させる上でも良いものであるとして、その具体化に言及
- 12・2 岸田文雄外務大臣の訪露の際、プーチン大統領から、双方が関心を持つあらゆる問題での協議、「八項目の協力プラン」を含む日本との幅広い分野での協力への意欲が示される
- 12・15 プーチン大統領が訪日し、日露首脳会談が山口県長門市及び東京都にて行われ、平和条約問題を解決する両首脳自身の真摯な決意を表明し、四島において共同経済活動を行うための特別な制度に関する協議の開始に合意
- 2・17 G20外相会合の際の日露外相会談にて、平和条約問題を解決するとの両首脳の真摯な決意が表明されたことを受け、外相間でも緊密に話し合い、四島における共同経済活動と元島民の四島への往来について、協議の進展を図っていくことで一致
- 3・20 ラヴロフ外相との日露外相会談において、日ロ共同経済活動の、今後、優先して作業するプロジェクトの絞り込みや必要となる法的基盤の検討も含めて、議論を深めていくこと、また、元島民の墓参について、出入域地点の複数化に向けて調整し、航空機による四島への訪問の可能性について実務的な検討を進めることを確認
- 4・27 モスクワにて、安倍首相とプーチン大統領との首脳会談が開催され、二〇一六年に首脳間の合意事項の具体的な進展として、「航空機を利用した元島民による特別墓参の実施」、「共同経済活動に関する四島への官民現地調査団の派遣」、「二〇一七年八月末の歯舞群島への墓参の際に追加的な出入域ポイントを設置」の三点で一致
- 5・31 長谷川総理大臣補佐官を団長に、全国の関係者で構成された、北方四島における共同経済活動に関する官民調査団が、サハリン州を訪問し、意見交換を実施
- 6・18 日ロ首脳会談で合意した「航空機を利用した北方墓参」において、「国後島」及び「択捉島」を訪問予定だったが、濃霧のため中止となった
- 7・7 G20出席の際に行われた日露首脳会談において、官民調査団による現地調査が極めて有意義であり、今後の検討の加速に繋がることを確認した。また、六月に中止となった航空機を利用した特別墓参について、九月の適切な時期に実現すべきことで一致
- 9・7 東方経済フォーラムにおいて行われた日露首脳会談で、両首脳は、北方四島における共同経済活動に関し、早期に取り組むプロジェクトとして①海産物の共同増養殖プロジェクト②温室野菜栽培プロジェクト③島の特性に応じたツアーの開発④風力発電の導入⑤ごみの減容対策の五件の候補を特定するとともに、双方の立場を害さない法的枠組みを検討し、実施可能なものから行っていくことで一致

- 10・26 九月に行われた首脳会談において合意した「五件のプロジェクト」を中心とする官民現地調査団を長谷川総理大臣補佐官（団長）をはじめ、全国の関係者六十六名で構成し、択捉島・国後島・色丹島で実施
- 11・10 APEC首脳会議にて安倍首相とプーチン大統領の二十回目となる日露首脳会談が行われた。両首脳は、北方四島における共同経済活動について双方の法的立場を害さない形で、来春に向けてプロジェクトを具体化するための検討を加速させ、内容及び人の移動に関する作業部会を開催し、次官級協議を翌年早々に開催することで一致
- 12・18 モスクワにおいて、北方四島における共同経済活動に関し、「プロジェクトの内容に関する局長級作業部会」の主体会合を実施し、来春に向けてプロジェクト候補の具体化を進めるべく、引き続き精力的に取り組む

3・24 福井県北方対策担当大臣が北方領土現地視察（当時）

5・26 日露首脳会談（モスクワ）安倍総理・プーチン大統領）四島での共同経済活動の早期実現に向けた作業を加速化するとともに、航空機による特別墓参の実施について一致

7・18 北方領土問題等の解決促進のための特別措置に関する法律（北特法）、北方地域旧漁業権者等に対する特別措置に関する法律（旧漁業権者法）の改正案が可決（平成三十一年四月施行）

9・10 日露首脳会談（ウラジオストク）安倍総理・プーチン大統領）北方四島における共同経済活動について、五件のプロジェクト候補の実施に向けた「ロードマップ」を承認した。また、プロジェクトの円滑な実施に資する人の移動の枠組みについても、早期の合意に向けて更なる作業を指示することで一致した

10・2 北方四島の共同経済活動に関する官民現地調査団の派遣（十月二日～五日）

10・17 宮腰光寛北方対策担当大臣が北方領土現地視察

11・4 日露首脳会談（シンガポール）安倍総理・プーチン大統領）一九五六年宣言を基礎として平和条約交渉を加速させることでプーチン大統領と合意。また、十二月上旬のブエノスアイレスG20の際に首脳会談を実施し、年明

けに安倍総理が訪露することで一致

12・1 日露首脳会談（ブエノスアイレス）安倍総理・プーチン大統領）先のシンガポールでの合意を踏まえ、日露双方は交渉責任者と交渉担当者を定め、更に交渉を加速させることを確認

1・22 モスクワにおいて、二十五回目となる日露首脳会談が行われ、一月十四日に第一回目の交渉を行った両外相の報告を聞き、シンガポールでの合意を踏まえた具体的な交渉が開始され、率直かつ真剣な議論が行われたことを歓迎。北方四島における共同経済活動の早期実現のために共同作業を着実かつ迅速に進展させるよう、事務方に指示すること一致

5・10 モスクワで通算十回目となる日露外相会談が行われ、四島における共同経済活動について、五月二十日に法的側面に関する課長級作業部会を、五月二十一日に人の移動に関する局長級作業部会をそれぞれ開催することで一致し、また、これらの作業部会において、プロジェクトの早期実施に向け、双方が柔軟性を発揮して建設的に作業するよう事務方に指示を出すことで一致

5・31 東京で行われた通算十一回目となる日露外相会談が行われ、四島における共同経済活動について、六月十一日にプロジェクトの内容に関する局長級作業部会を開催することで一致し、この作業部会を含め、六月の日露首脳会談を念頭に、引き続き双方の立場を害さない形でプロジェクトの実施に向けて、双方が柔軟性を発揮して建設的に作業を進めていくことを確認

9・5 ウラジオストクで行われた東方経済フォーラムの際、二十七回目となる日露首脳会談が行われ、両首脳は、平和条約締結問題について、未来志向で作業することを再確認するとともに、交渉責任者である両外相に対し、双方が受け入れられる解決策を見つけるための共同作業を進めていくよう改めて指示

10・2 衛藤晟一沖縄及び北方対策担当大臣が納沙布岬から北方領土を視察

12・19 茂木外務大臣訪露の際、モスクワで行われた日露外相会談で、両外相は基本的な立場の違いを埋めていく方途について、お互いが知恵を出しながら突っ込んだやりとりを行い、四島における共同経済活動について、本年実施したパイロット・プロジェクトの結果を踏まえつつ、明年の本格事業化に向け、包括的局長級作業部会を明年一月に開催することと一致

2・15 ドイツのミュンヘンで行われた安全保障会議で、日露外相会談実施。茂木外相からラヴロフ外相に対し、昨年末の外相会談を踏まえ、平和条約締結問題の交渉を前進させる方策をより具体的に伝達。今回の議論を踏まえ、速やかに次官級協議を開催することで合意。また、ラヴロフ外相の早期訪日を招待

5・7 新型コロナウイルスの世界的な感染拡大の影響で安倍総理大臣のモスクワ訪問が中止となり、電話首脳会談を実施。両首脳は、平和条約交渉、北方四島における共同経済活動、四島交流等事業、地域交流年等の日口間の協議や協力についてしっかりと進めていく事で一致

8・31 電話首脳会談で、プーチン大統領は、建設的に対話を重ねてきたこれまでの協力で感謝する旨述べ、日露関係の発展等の安倍総理の偉大な貢献を高く評価。また、両首脳は、二人の間の合意も踏まえて平和条約交渉継続を確認

9・27 河野太郎沖縄及び北方対策担当大臣が納沙布岬から北方領土を視察

9・29 菅首相とプーチン大統領の間で初めての電話首脳会談実施。菅総理は、平和条約締結問題を含め、日露関係全体を発展させること、北方領土問題に終止符を打つべく、プーチン大統領と共にしっかりと取り組んでいく旨を言明。両首脳は、平和条約締結問題を含む対話の継続、幅広い分野で日ロ関係全体を発展させることで一致

10・16 日露外相電話会談を実施。先の日ロ首脳電話会談を踏まえ、平和条約締結交渉、航空機墓参を含む四島交流等事業、安全保障等様々な分野での日ロ間の協議や協力について外相間で議論を重ねていく事で一致

7・17 北方四島との新たな地域間交流や自由往来・自由交易、さらには北方四島に関連する歴史的文化遺産の保存・継承・活用に向けた対応策の検討について、専門的見地から調査・研究を行い、課題解決に向けた対応策を検討するため、「北方領土対策に関する専門家会議」を設立

10・7 岸田首相とプーチン大統領の間で初めての電話首脳会談を実施。両首脳は二〇一八年のシンガポールでの合意を含め、これまでの両国間の諸合意を踏まえて、しっかりと平和条約締結交渉に取り組んで行くことを確認。

10・14 「根室国後間海底電信線陸揚施設」が国の登録有形文化財に登録

10・17 二年連続で北方四島交流等事業が中止となったことに伴い、千島歯舞諸島居住者連盟根室支部は納沙布岬で「北方領土物故者慰霊祭」を開催

10・18 西銘恒三郎沖縄及び北方対策担当大臣が納沙布岬から北方領土を視察

2・24 プーチン大統領が「ウクライナ東部で特別軍事作戦を行う」ことを表明し、ロシア軍がウクライナに上陸を開始、その後、ウクライナ全土に拡大

3・7 ロシア政府は、ウクライナ侵攻を巡る対露制裁への措置として、日本や英国、欧州連合など四十八ヶ国と地域を「非有効的な国や地域」に指定

3・22 ロシア外務省が、日本の対ロ制裁の対抗措置として「平和条約交渉」の中断、及び「ビザなし交流・自由訪問の停止」、「四島における共同経済活動に関する協議からの離脱」を表明

4・26 令和四年度北方四島交流等事業（北方四島交流・北方墓参・自由訪問・北方墓参）について、現下のロシアによるウクライナ侵攻を踏まえ、日本政府及び実施団体は心ならずとも事業の実施を当面見送ることとした

7・23～8・10 北海道・公益社団法人千島歯舞諸島居住者連盟による「洋上慰霊」が実施される

9・5 北方四島交流事業と自由訪問についての合意効力停止に関するロシア政府令を発表する

9・28 岡田直樹沖縄及び北方対策担当大臣が納沙布岬から北方領土を視察

12・1 新型コロナウイルス感染症の影響により中止となっていた中央アピール行動「アピール行進」が三年ぶりに実施される

3・31 「北方領土対策に関する専門家会議（陸揚庫の保存と活用を考える分科会）」より、根室国後間海底電信線陸揚施設を「覆い屋」による保存を推奨する報告書を根室市へ提出

8・28～9・30 北海道・公益社団法人千島歯舞諸島居住者連盟・独立行政法人北方領土問題対策協会による「洋上慰霊」が実施される

10・10～13 根室市主催としては、昭和四十四年以来、五十四年ぶりとなる「北方領土返還要求キャラバン隊」を実施し、東京都・愛知県・滋賀県へ派遣

10・12 自見はなこ沖縄及び北方対策担当大臣が納沙布岬から北方領土を視察

8・20～9・21 北海道・公益社団法人千島歯舞諸島居住者連盟・独立行政法人北方領土問題対策協会による「洋上慰霊」が実施される

10・7～10 前年に続き、根室市主催による「北方領土返還要求キャラバン隊」を実施し、宮崎県・鹿児島県へ派遣

10・14 伊東良孝沖縄及び北方対策担当大臣が納沙布岬から北方領土を視察

6・13 石垣雅敏根室市長が衆議院沖縄及び北方問題に関する特別委員会として意見陳述を行う。

7・20～8・21 北海道・公益社団法人千島歯舞諸島居住者連盟・独立行政法人北方領土問題対策協会による「洋上慰霊」が実施される。

8・1～24 戦後八十年の節目に、歯舞群島元島民三世である山田淳子氏の写真展「島々の記憶」を市役所にて開催

8・22～24 公益社団法人千島歯舞諸島居住者連盟による「戦後八十年 北方領土フォーラム」が市内で開催される

10・24 戦後八十年啓発事業として、千島歯舞諸島居住者連盟根室支部後継者「かけはしの会」と根室市の共催による森崎博之&河野真也トークショーと舞台「PARAMUSHIR」DVD上映会を市内で開催

11・5～8 前年に続き、根室市主催による「北方領土返還要求キャラバン隊」を実施し、石川県・富山県・黒部市へ派遣

11・8 黄川田仁志沖縄及び北方対策担当大臣が納沙布岬から北方領土を視察

編集後記

私の手元にある終戦前後の記録第二集は当時の編集者だった白崎大氏から一九九九年にいただいたものでした。すでに古書店で購入していた第一集と合わせて二冊揃えることができたのです。それから二十六年後、まさか自分が復刊を引き継ぐとは、運命的なものを感じます。

今回の編集にあたって、誤字脱字を修正し、読みやすくするために原文の意を損なわない範囲で句読点や漢字化を加えました。また個人の氏名や情報、現在においては伏せた方がよい表記、差別を助長するとされる禁句用語も多々ありますが、終戦前後の真実を伝える資料性を考慮して、あえて当時そのままの表現を残しております。またレイアウトの過程で、余白の出来た部分には、原本にはない写真や資料も掲載しましたので、歴代担当職員の継承によって完成した記録集となっています。（福田記）

戦後80年北方領土問題啓発資料
北方領土 終戦前後の記録集

令和8年1月31日 発行

編 集 根室市北方領土・国際交流部北方領土対策課
協 力 公益社団法人 千島歯舞諸島居住者連盟

発 行 根 室 市
〒087-8711
北海道根室市常盤町2丁目27番地
TEL 0153-23-6111 FAX 0153-24-8692

印 刷 根室印刷株式会社
〒087-0051
北海道根室市緑町3丁目1番地
TEL 0153-24-2191 FAX 0153-24-2448

